

あめとかぜと

かぜとかめと

岩佐寿一編・著

広島県戦前
大望運動の手記

あめとかぜと出版委員会発行

あめとかぜと

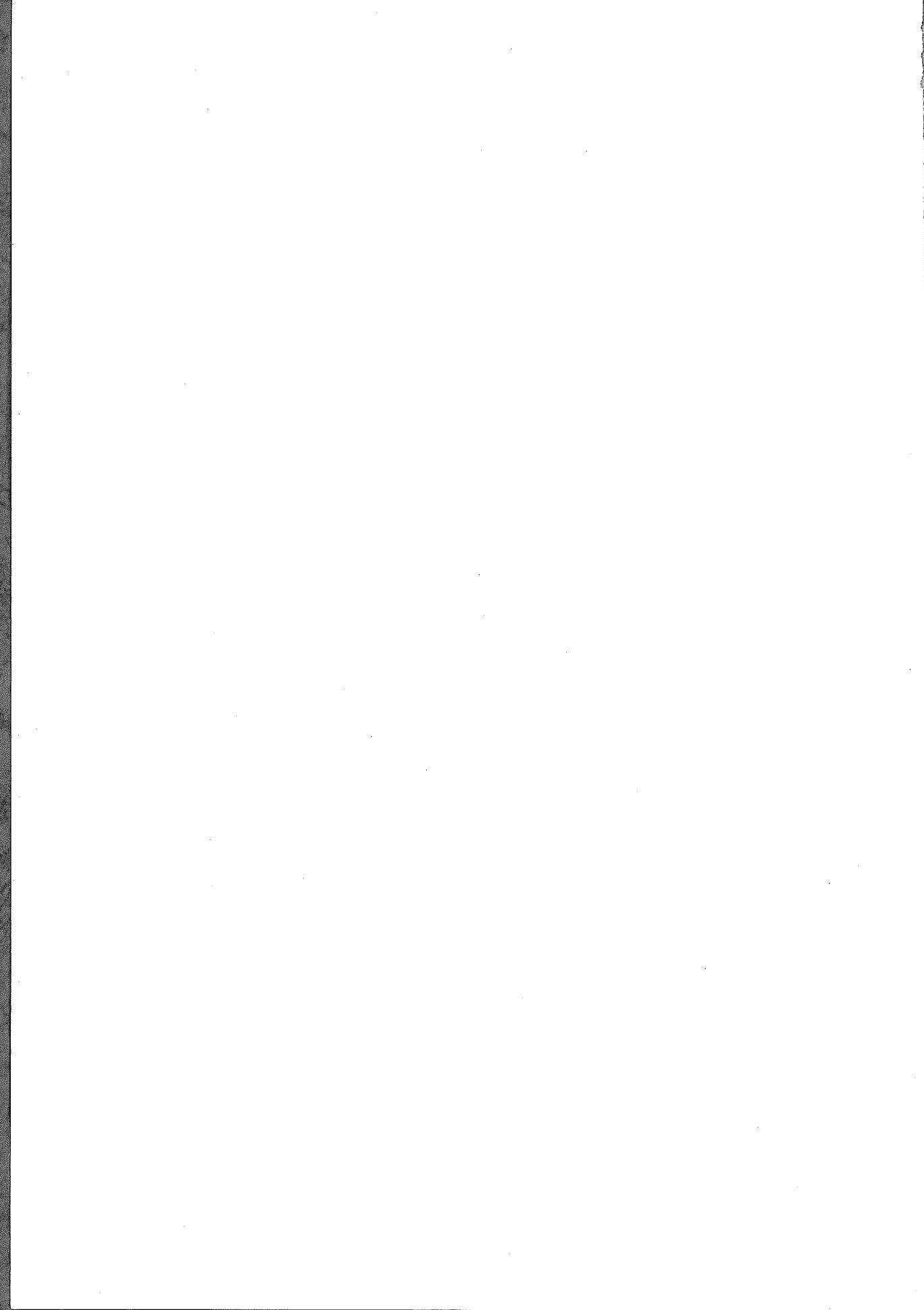
あめとかぜと

岩佐寿一編・著

広島県戦前
大望運動の手記

あめとかぜと出版委員会発行

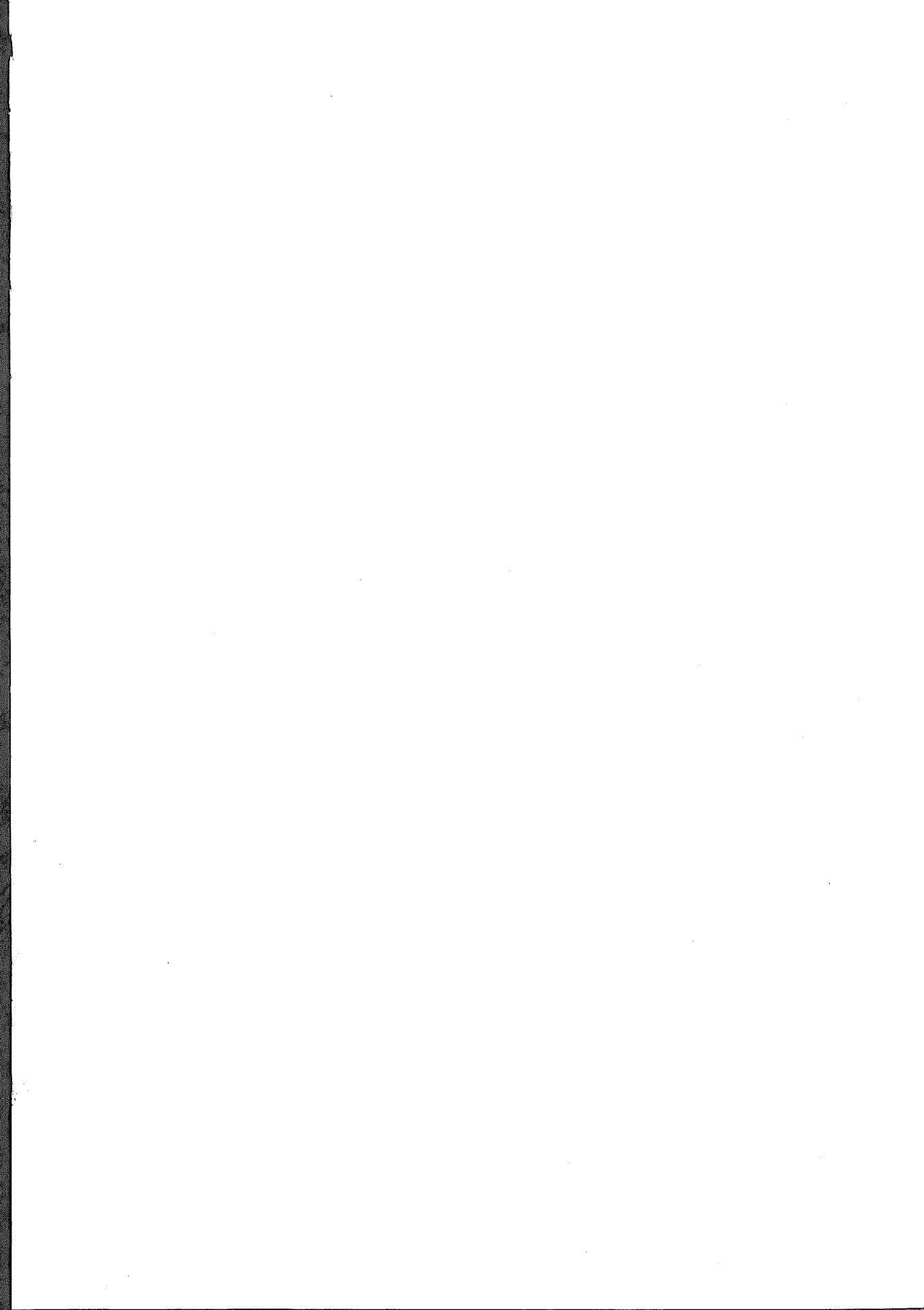








運動解放無名戰士第一回合杞者 一九六三年五月一日



中國新聞

號外

廣島で驚くべき

大規模な赤化運動

治安維持法違反事件

けふ準備終結決定

[上野]

設置された
全効廣島支部

各記念日全期

勇毅なカンベニア



各種支部

宣傳七つなうで
革命思想注入人

資本主義制度を攻撃し
労働者の不満激發

無產者解放へ

日本共産党は、廣島で大規模な赤化運動を開始する。

この運動は、主に治安維持法違反事件の準備終結によって実現された。

この運動は、主に以下のような要素で構成される。

1. 設置された全効廣島支部

2. 各記念日全期

3. 勇毅なカンベニア

4. 組織された各種支部

5. 宣傳七つなうで革命思想注入人

6. 資本主義制度を攻撃し労働者の不満激發

7. 無產者解放へ



夏の夜の大惨劇
國をつくらべ一聲

星上
廣島で爆弾の魔

敵機による爆撃

火災による死傷者

火災による死傷者

火災による死傷者

火災による死傷者

あめとかぜと 田 次

『あめとかぜと』 もくじ

はじめ——戦前の広島県左翼運動について

一、昭和七年、3・5事件、10・30事件まで

31

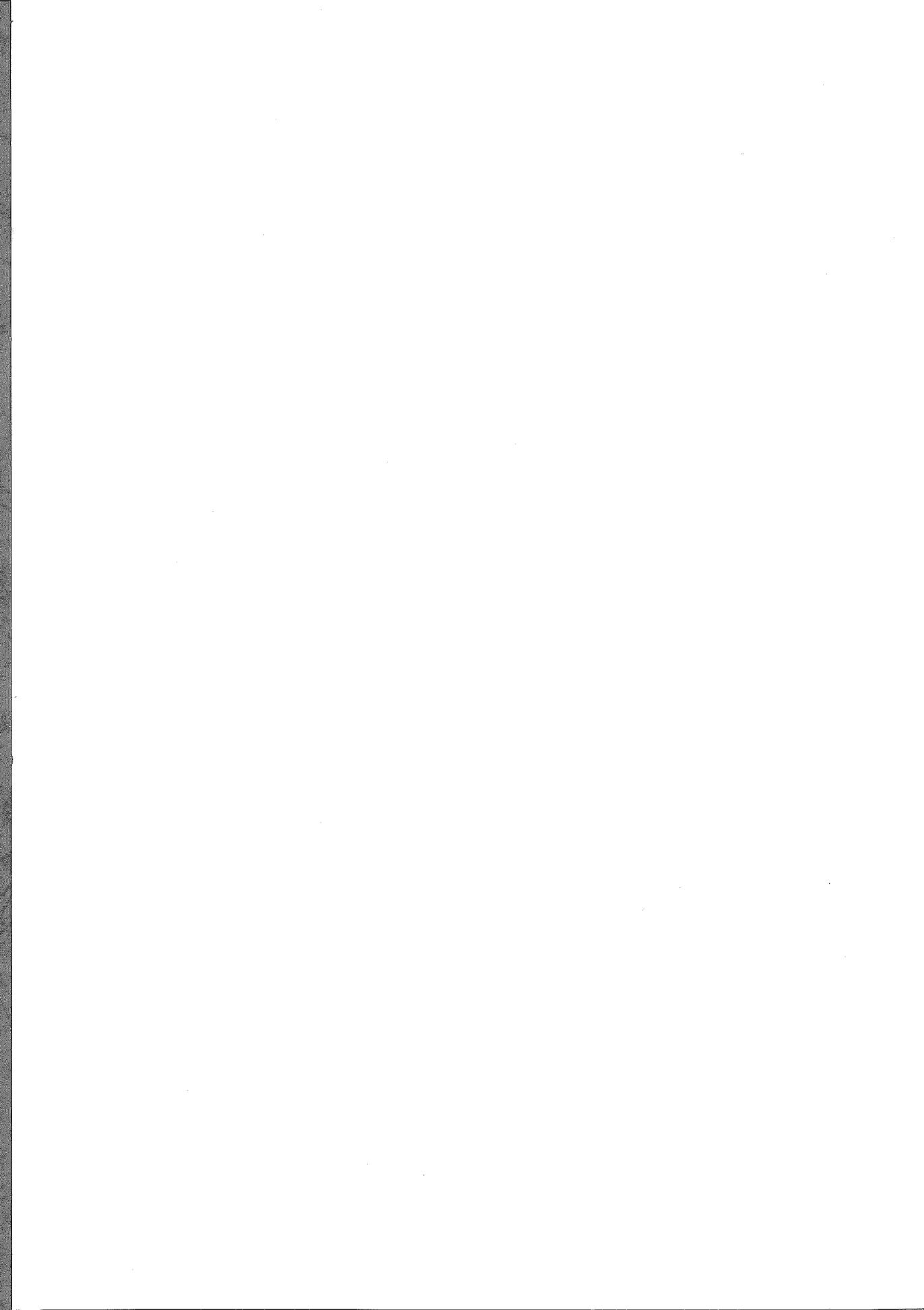
労農党の思い出	渡辺 信樹	33
左翼労働組合のじぶん	畠 常次郎	37
悔いなき革命運動への献身	古末 憲一	39
手記 その一	寺尾 一幹	44
手記 その二	寺尾 一幹	51
広島高等学校のじぶん	寺尾 一幹	58
広島電鉄ストライキのじぶん	井上 栄	62
組合からモップル（赤色救援会）へ	仁井田教一	63
想い出	清水 政男	65
県の本屋のじぶん	田中 豊	72
『陰るクレーン』のじぶん	重田 安一	74
『聳ゆるマスト』の人々	平原 基松	83
県海軍の思い出	稻垣 宏	86
県海軍病院のじぶん	小倉 正弘	90
回想録	野田 清一	95
福山地区の人々	樋口 利夫	102
尾道地区の人々	迫川 敏一	104
安田貿易のじぶん	利夫	106
尾道郵便局のじぶん		

11、昭和八年から昭和一五年まで

救援会のおもいで	岡本菊次郎	113
10・30事件後の再建運動	小寺 英雄	116
手記	中村 定男	136
4・26事件と新協劇団後援会事件	井上 栄	152
堀哲二の思い出——ロハツ書房のいじり	大藤 軍一	155
癩口内に生きて	数本タキエ	159
同志のおもいで	岩佐 寿一	180

111、昭和の新聞記事・資料・年表

索引	207
241	

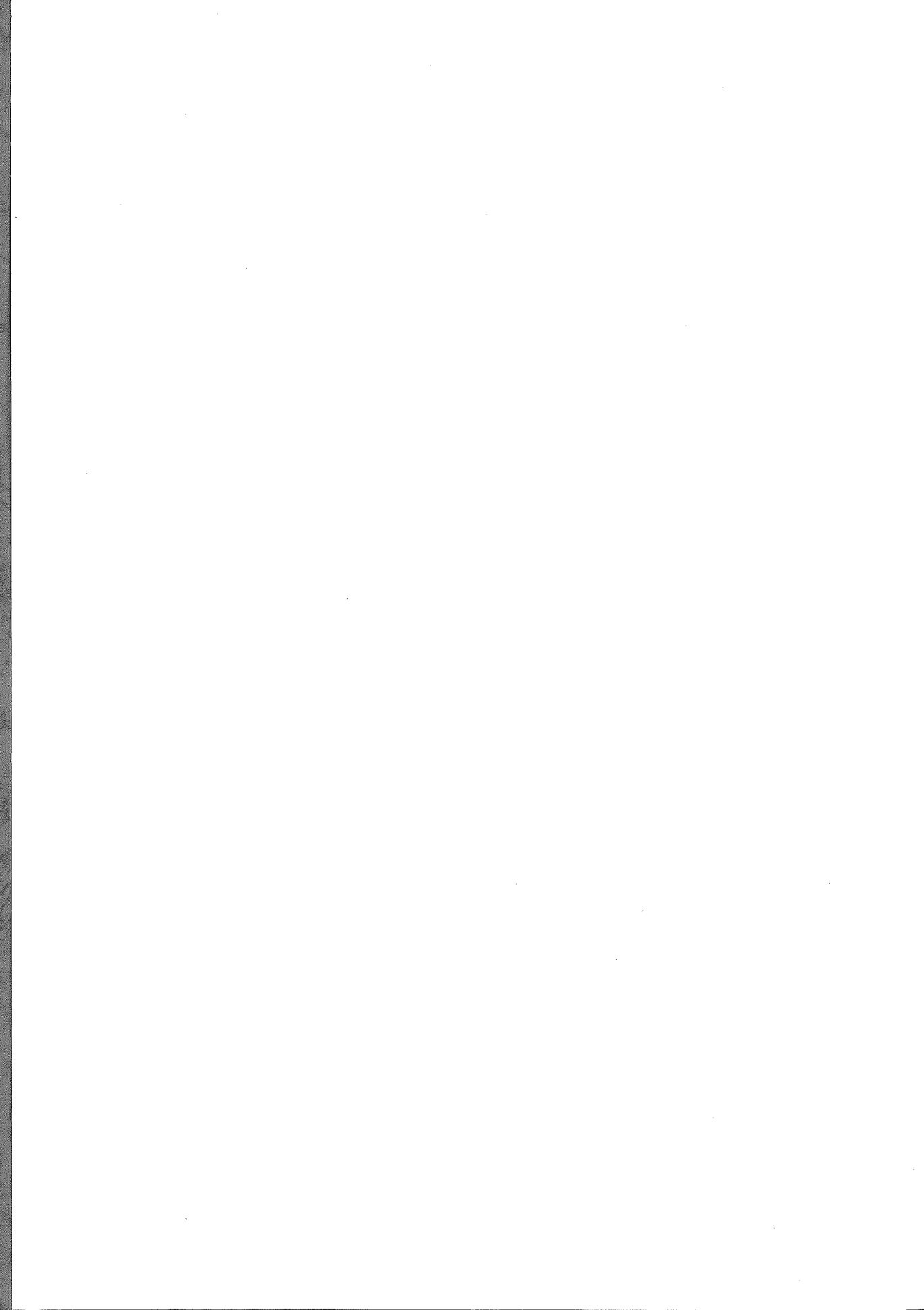


は

じ

め

に



はじめに

戦前の広島県左翼運動について

一九七〇年からあつめてきた戦前の同志たちの手記や書きがきを一冊にまとめるにあたって、それらの人々の活動の時期、そのつながりをとりまとめてかいておくこととします。ここにあつめたのは広島、呉で活動した人のものがほとんどですが、一九八一年になつて尾道地区の人々、年がかけて福山市の野田清一氏の手記など、広島県東部についてのものが寄せられました。

手記や書き書きは

(一) 10・30事件(1933年)まで

(二) そのあととの再建運動、そのほかとふたつの時期にわけました。

その両方にまたがっている人のものは、おもな活動の時期にいました。

戦後にも活動をつづけている人には、敗戦のあとしばらくのことしかたつてもらいました。

それから、つきのものを参考にしました。引用させてもらったものには〔注〕、〔参考〕とかいておきました。

○呉日日新聞とじこみ(呉市立図書館蔵)

○中國新聞マイクロフィルム(同上)

○『大呉市民史』弘中柳三氏著

——以上は手記のあとに「新聞資料」として

○『五人の水兵の判決書』原弁会シリーズ

○『サンデー毎日』昭和四九年四月二一日号の記事「反戦一路の四七年」

○『広高五〇年史』——学生運動の項

○『日本反戦詩集』太平出版社

○『昭和史発掘』松本清張氏著

○『社会主義運動 半世紀』山辺健太郎氏著

○『広島県労働運動史』広島県労働組合会議編

○『新聞集成広島女性史』広島女性史研究会編

○『風に耐えた歳月』板野勝次氏著
○『炎の記録』解放運動 兵庫県旧友会編
○『瀬戸内に生きて』数本タキエさん著
などです。

一九二八年(昭和3年)三月十五日、いわゆる3・15事件の全国一斉検挙のときは、労農党広島支部の活動家もほとんどのこれらつかまつたが、共産党に関係ある文書などなどにもでないので、まもなく釈放されました。

つづいてその年の四月一〇日、労農党、日本労働組合評議会、無産青年同盟の三团体に解散命令

が出ました。

左翼への弾圧のあと、日本政府は四月一九日に中国侵略の第二次山東出兵、五月八日に第三次山東出兵（いわゆる済南事件）をおこないました。

広島高等師範の中国人留学生が「済南事件出兵絶対反対」のビラを校内にまくからと旧労農党広島支部に応援をもとめできました。

これは別に旧労農党広島支部の活動家は「濟南事件出兵反対」のビラを広島市本通りにまきました。広島市の宇品港は中国大陸に軍隊をつみだす港でした。船をまつあいだ兵士たちは、市内の旅館や民家にとまっていた。日本でのさいごの夜をすごす兵士が本通りを市民にまじって歩いていました。

このため旧労農党の活動家は一斉検挙をうけました。活版屋のおやじもひっぱられて「だれがビラを刷ってくれとたのみにきたか」と検挙されたものをならばせて「首実見」させられたといいます。

この年、八月、日本反戦同盟（のちに反帝同盟）が結成されたのですが、その広島支部ができたかどうかわかつていません。

解散命令をうけた旧労農党活動家は、なげなしの金をかきあつめて、早川義則氏を党再建大会に広島代表としておりだした。この年一二月のことです。しかしこの、労働者農民党結成大会は三日目に結社禁止の命令をうけました。

広島市の労働組合は、評議会系の「広島一般労働組合」も解散して、八月に合法的な「広島合同労働組合」が結成されましたが、左翼の活動家はこの組合内の「革命的反対派」として働いたわけ

です。

中央では一九二八年（昭和3年）四月一〇日の評議会解散のあと、一二月には日本労働組合全国協議会が結成され、政府の解散命令にはしたがわず、非合法の労働組合としてスタートしました。

広島では左翼労働組合を結成するため、努力がつづけられたが、あくる年、一九二九年（昭和4年）七月、畠島三一氏末元玄聰氏らが治安維持法違反で検挙されて、つぶされました。検挙の理由は「三滝山で不穏な会議をひらいた」などのあいまいなものです、これが共産党の目的遂行のためにする行為とされたわけです。畠常次郎氏のみ検挙をのがれ「地下にもぐり」ました。

呉市のうごきは、つぎのとおりです。

吳工廠製図工、片山峰登氏が一九二四年（大正13年）工廠を退職して上京、一九二五年（大正14年）東京無産青年同盟委員長、一九二七年（昭和2年）労働組合評議会書記となり、三・一五事件で共産青年同盟中央委員として検挙されて八年の刑をうけています。

しかし片山峰登氏と吳工廠労働者とのあいだにどんな連絡があつたかをしめす資料はありません。

呉市についての新聞記事をあつめた『大呉市民史』によると、工廠労働者の検挙にはつきのようなものがあります。

○昭和四年、工廠では左傾職工として、狭間、

佐光、清水の三名を解雇した。狭間の解雇理由は、昭和三年春、大山郁夫が呉にきたとき

〔労農党呉支部発会式〕カフエーブラジルで

歓迎会をひらいたが、その席で狭間が「不都

合な言をはいた」というものである。

○佐光の解雇理由は「狭間の解雇は不当な理由による解雇だ。工廠当局を糾弾するべきだ」と、工廠の「労働組合」である、海工会の委員会で発言したからであるという。

○昭和四年の末には、工廠労働者数名が憲兵隊に検挙された。真鍋喜一、中田春雄、平原一雄、田中正雄、山口薰の諸氏。これは真鍋喜一が中心となって、警固屋町にアジトをつくり、労働者一〇余名が読書会をよそおい、東京の同志とレンラクをとつていた。

○昭和五年五月、某事件関係の工廠労働者（24）など八名を喚問。そのうち一名は音戸町で発行している文芸雑誌『一路』の発行者。第二、第三と検挙つづき、工廠労働者一〇余名。

これらをみると「東京のある組織」と工廠労働者との連絡があつたということになります。『無産者新聞』の記者が呉にきていたとの記事もあります。

これとは別に、昭和四年三月、工廠労働者に「3・15一周年と山宣虐殺に対してもストとデモでたたかえ」というビラがまかれました。吉浦分工場では、ひるやすみに労働者にこのビラをくばつたものがあつて「共産党のビラだ」と大さわぎになつた。このビラ事件でつかまつたのが中村定男氏（当時一八歳）でした。その思い出によれば

「昭和三年、3・15事件の検挙で東京外語の学生山道長君が退学処分になり、呉にかえつてきた。その山道君のところに、片岡義夫、池田八束、それに中村などがあつまつていた。弟の山道繁君（のちに活動家になつたが）はまだ中

学生だった。研究会とか読書会とかいうはつきりした組織はつくれないから（検挙されるおそれがあるので）、ときどき集まって、はなしあうということにした。そのうち池田八束君が山道君の紹介で上京したが、中村のところにいろんな文書をおくってきた。そのひとつが『3・15一周年……』のピラだつた

ということです。

中村定男氏は工廠正門のあたりでピラをまき、吉浦分工場のほうは補習学校のクラスメートに、食堂か便所においてくれ、とたのんだ。その同級生が昼休みに、そのピラをくばつてまわった。たちまちつかまつて「中村にたのまれた」と白状したわけです。

呉海軍の水兵のうごきは次のようです。大正のおわり、昭和のはじめごろ、海軍病院の看護兵のあいだで左翼文学などを読んでいるグループがあつたと、そのころ海軍領院第七病棟長だった稻垣宏、元一等看護兵曹が語っています。

稻垣兵曹が裁判をうけた「五人の水兵の判決書」によれば

「被告宏は大正十五年ごろ、海軍三等看護兵山本俊次とつきあうようになり、左翼思想をもつ山本の影響をうけて、ひろく左翼文書を読みあさるようになつた」とあります。

大正十五年には、木村莊重氏も海軍にはいったが、左翼的なことをかいた日記を上官にみられて進級停止となり、「在役七年におよぶも一等兵のままであった」と『大呉市民史』にあります。

海軍病院に看護婦として入ったのが、木村莊重氏の妹、右田美子さんです。彼女をどうして木村

水兵と稻垣兵曹が知りあいになつたとあります。関西地方および中国地方から、海軍にはいってくる人々のなかには、すでに社会運動の経験があるものもあつた。また、労働をとうして階級意識をもつているものもあつたわけです。下宿あてに『戦旗』などをおくつてもらう人もあつたという（西川兵曹）。

一九三一年（昭和6年）、稻垣看護兵曹は、海軍の徴募兵の検査の助手として岡山県に出張中に、おくられてきた左翼文書を上官にみられて、呉海軍病院第七病棟長の職を免ぜられ海兵団におかれ、半年のあいだ、取り調べをうけました。宮内謙吉看護兵曹もおなじく海兵団で、取り調べをうけました。これとはべつに、一九三一年（昭和6年）八月に、海軍内に社会科学研究会をつくつていたとして、つきの人々が検挙されました。

阪口喜一郎兵曹、西川照三兵曹、平原甚松水兵、山口水兵、若林水兵。

このうち、阪口兵曹は、呉海軍軍法会議の留置場に、ほかのものは呉海軍刑務所にいれられて、法務官のとりしらべをうけました。（平原甚松手記、ただしその社会科学研究会の具体的な活動について質問したが同氏の返事はなかつた）

「そのころの左派の同志として畠氏があげているのは

五条俊夫、松本京一（鷹匠町の建具職）、村上四郎（印刷工）、田谷春夫（同）、仁井田教一（大工）、花野岩男の諸氏。（また広島紡績のストライキのなかから花野ふじえさん（岩男氏の姉）が成長したと、かいています。

なお、広島電鉄ストの起訴者のなかに、松本京一氏の名があり、合同運輸のストでは村上四郎氏が四ヶ月の刑になつていています。

全協、広島地方協議会の結成

の組織が総同盟系をしのぐほどの勢いだつたので、そのあとをうけた全協は、なかば公然とうござつてゐます。

しかし広島地方ではまだ労働組合の力は弱く、評議会系の「広島一般労働組合」が解散になつたことは、合法的な「広島合同労働組合」にかわりました。

労農党が解散になって、幹部の大部分が労農大衆党、全国大衆党のほうにゆき、一九二九年七月には、左派の活動家の玖島三一氏などが治安維持法で検挙され、左翼労働組合の結成はおくれました。

畠常次郎氏のおもいでによれば

「そのころの広島地方も経済恐慌がひどくなつてゆき、ストライキが多くなつていて。広島合同紡績のスト、合同運輸のスト、段原町の渡辺製糸工場の閉鎖反対のスト、広島電鉄のストなどを、広島合同労組そして革命的反対派が指導にあたつた」とあります。

そのころの左派の同志として畠氏があげているのは

五条俊夫、松本京一（鷹匠町の建具職）、村上四郎（印刷工）、田谷春夫（同）、仁井田教一（大工）、花野岩男の諸氏。（また広島紡績のストライキのなかから花野ふじえさん（岩男氏の姉）が成長したと、かいています。

なお、広島電鉄ストの起訴者のなかに、松本京一氏の名があり、合同運輸のストでは村上四郎氏が四ヶ月の刑になつていています。

全協、広島地方協議会がつくられた経過は、『中國新聞』（昭和7年9月7日記事）に載つています

が、これは検事局や警察の発表のうつしだるうとおもいます。これについて、畠常次郎氏から一九八〇年（昭55）一月に手紙がよせられています。それによると――

一九三〇年（昭5）一〇月ごろ、広島郵便局員、市川忍氏と畠常次郎氏が会合して、全協広島地方協議会の準備会をつくったのが、はじめだとあります。

そのまえの年、玖島三一氏たちが検挙されたのち、検挙をのがれた畠氏にも警察の追及がきびしく、おもてだつてうごけないので、五条俊夫氏が全協・広島地協の準備会事務局にはいった。

一九三一年（昭6）一月二六日市川忍氏が上京して、全協本部に広島地方協議会をつくることの承認をうけました。

その年三月九日、広島地方協議会が成立したわけです。

各産業別支部の結成のみちすじについては『中國新聞』記事に、ややくわしく載っていますが、これも当局側の資料であつて、これに関係した同志の手記は、いまだにありません。

のちに結成される共産党広島地方委員会の組織ともつながりがあるので、各産業別支部の名をあげておきます。

○全協通信・広島支部——広島郵便局分会。一

九三〇年（昭和5年）一〇月市川忍が支部責任者となり、太藤軍一が分会責任者となつて、局員三名加入して分会結成。

○全協・交通運輸・広島支部——国鉄分会。支

部責任者、松本武司。新原博ほか四名で分会結成。

○全協・出版・広島支部——市川活版所分会。
支部責任者、吉田義雄。村上四郎ほか五名で分会結成。

○全協・木材・広島支部——津崎製材所分会。
支部責任者、山本正一。下川浦右エ門ほか七名で分会結成。

○全協・織維・広島支部——東洋紡績分会。
支部責任者、小笠原豊。児玉幸夫ほか五名で分会結成。

○全協・食料・広島支部——専売局分会。
支部責任者、村上文一。上野良子ほか九名で分会結成。

このほか、松本徹は日本製鋼所広島工場を、寺尾一幹は帝國人絹広島工場を、五条俊夫は広島電鉄、広島バスを目標として分会結成に努力。

なお『中國新聞』の記事にはつぎのように書いています。

「一九三一年（昭和6年）三月なかごろ、市川忍は同志畠常次郎より日本共産青年同盟の綱領、政策などをのせた同盟の中央機関紙『レーニン青年』創刊号同二号の配布をうけて閲読し、ついで小笠原豊にわたした」

このころ畠常次郎氏は、共産青年同盟のオルグとしてはたらいていたわけです。

○全協通信・広島支部——広島郵便局分会。一

九三〇年（昭和5年）一〇月市川忍が支部責任者となり、太藤軍一が分会責任者となつて、局員三名加入して分会結成。

○全協・交通運輸・広島支部——国鉄分会。支

部責任者、松本武司。新原博ほか四名で分会結成。

応大学生原民喜氏（のちに原爆小説「夏の花」の作者）とが会合。原氏は赤色救援会本部から、オルグとして広島市にかえってきたもので、胡川清氏に赤色救援会広島地区委員会の結成をすすめた。

胡川清氏はこれをひきうけて、広島高等学校の生徒新田養三、佐々木益三の両氏に協力をもとめました。救援会のアジトは市内段原町、高村亮次氏の家です。高村氏は、胡川清氏の妹と結婚した人で、富國徵兵保險の社員です。すでにそのまえからシンパとして活動、畠常次郎氏などとレンラクがありました。

一九三一年（昭和6年）一月なかごろ原民喜氏のなかちで、胡川清氏は救援会本部とレンラクして広島地区委員会をつくることの承認をうけました。そのうち広島合同労組の仁井田教一氏もこの救援会のしごとにくわわりました。また広島高等学校的社会科学研究会も学外の活動としてこの赤色救援会広島地区委の組織にくわわることになりました。

このとし三月、全協・広島地方協議会が結成されたので、これとレンラクをとり、また『戦旗』広島支局（責任者伊藤正朔氏）ともレンラクをつて、共同戦線をはりました。

赤色救援会広島地区委は、「救援ニュース」、「建国反対」のビラ、「広島電鉄ギセイ者救援」のビラなどをだしたが、福山地区的沼隈郡柳津町の山根清氏（神戸高商中退）へもおくつています。山根氏は福山地区で救援会及び全協のオルグとして活動しました。

三

広島電鉄のストライキ

全協・広島地協や赤色救援会広島地区区委が結成されたあいだ、一九三〇年（昭和5年）年末に広島電鉄のストライキがおこりました。

広島電鉄は「広島瓦斯電軌株式会社」というなまえです。ガス会社が電車をはしらせてているわけです。新聞記事などには、この電鉄のストライキのことを「瓦電争議」とかいています。

その新聞記事によると「昭和五年一二月二六日広島電鉄従業員よりなる広島交通労働組合は、賃銀値上げ、待遇改善など二一ヵ条の要求をだしたが、会社側の回答に誠意がみられないとして一二月二九日初発電車からストライキにはいった」とあります。

そのとき二〇歳で、入社一年めだった井上栄氏によれば

「千田町に電鉄従業員の寮があつて、そこを争議団の本部にしていた。一二月三〇日その寮の中庭で従業員がワッショ、ワッショとデモをはじめた。そのデモの列が中庭から、そとの道路におしだそうとすると、まちうけいた警官隊にぶつかった。こちらも元気のいい若者ばかりだったから、警官がむかつてくるのに、黙つてはいない。そこ

でなくなりあいになつた。警察はさつそく、暴行罪、公務執行妨害罪として総検束をはじめた。寮にいたものはひっぱられ、とうとうストライキはつぶ

されてしまった。しかし、どう考がえて、ワナにはめられたようなきがある。寮の中庭でデモをしているとき、なぜ、そこに警官隊がまちぶせていたのか。」ということです。

寮の争議団本部にいあわせたもの一七〇名が検束されました。べつのところにアジトをかまえていた争議指導部や、応援の合同労組の左派のグループなど、ことごとく12月30日に検挙。

その夜は徹夜で取り調べをつづけ、31日には、おもなものの59名を検事局におくつた。そしてその夜には、ほとんどのものを刑務所の未決拘置所におくりこみました。罪名は「脅迫、放火予備、公務執行妨害」ですが、「執行前の強制処分」という名目で刑務所にとじこめてしまつたわけです。

なんともあざやかなことです。さすがの新聞もあきれ「争議団は警察のトリックにまんまとのせられた」とかいています。広島電鉄は正月二日には、いつもの半分の電車で運転をはじめて「乗客は不便をかんせぬほどになつた」とあります。

井上栄氏によれば、起訴されたもののうち電鉄の従業員は、中山武夫氏、杉野幹男氏、縫部啓蔵氏の3人で、あとは応援の合同労組などの人たちだということです。このなかには、松本京一氏（のちに共産党呉地区の書記）黄五姓氏（のちに木材土建オルグ）の名もみえます。

呉工廠解雇反対闘争

一九三一年（昭和6年）のはじめから、呉工廠

の首切問題が大きくなつてきました。新聞記事にも、市民大会をひらくとか、全市民の署名をあつめて海軍省に嘆願書をだすとか、陳情委員が大挙して上京するとかのうごきがみられます。工廠の「労働組合」である海工会からも陳情委員が上京したが、かえつてきた委員の報告会では「東京見物にいったのか」というヤジがとんで、大荒れになりました。「海工会の幹部から首切られる」という、うわさがとんだと新聞に載っています。

はじめての新聞発表では、呉工廠三、七三五人、広工廠ほか七〇〇人（『呉日日新聞』昭和6年1月21日夕刊）とあります。

そののちの発表では、呉工廠四、一〇〇人広工廠一九五人となつています。（同4月7日記事）呉工廠内各職場の解雇人員（4月8日発表）

21日夕刊

水雷部	四七九人
電気部	二三八人
造船部	六四二人
造機部	五四六人
製鋼部	六三九人
潜水艦	二〇人
砲熐実験部	一一人
魚雷実験部	二人
電気実験部	二人
会計部	二二三人
職工教習所	二人
医務部	一人
合計	三、七二三人

四月八日、解雇するものを内示する日は、正午まで工廠内は通行禁止となり、労働者は全部午前中に工廠からおいだしてしまったというきびしさでした。この日は広島市からも特高や憲兵が呉に動員されました。

首切反対のビラも六回にわたって、警戒の網をたくみにくぐつてまかれました。広島市からも同志たちが呉市にのりこんでいます。

『大呉市民史』によれば

三月三〇日、吉浦砲熿実験部へ ビラまき

四月一日、工廠第一門めがね橋付近

四月八日、首切発表の日、全市に数百枚

というぐあいです。

このうち吉浦分工場にまかれたビラは、外部のものがはいりこめないところにまいてあった。また工廠第一門めがね橋ちかくのものは六〇歳の日雇労働者が、だれかにたのまれてまいたというだけで、犯人はわからなかつた。

四月三〇日、ビラまきの現行犯として呉市曙町、町田三郎（仮名）がつかまつた。その自白で

呉市本通り三丁目 末田良一（25）

同 中通り六丁目 吉川肇（22）

（いづれも仮名）がうかびあがつた。末田良一は逃走中『大呉市民史』とあります。

このうち末田良一は吉末憲一氏（東大生）谷井政一は鞍谷良行氏（早大生）吉川肇は田中豊氏（中通りの本屋）のこととおもわれます。

田中豊氏の、このときの思い出とおもわれるるはなしには

「同志たちは、いくつかのグループにわかつて

ビラはりにいつた。わたしはビラをはりおわつて、かえつてきて、本屋の店先で、なにくわぬかおでたつていると、むこうの交番に人だかりがしていふ。のぞいてみると、別グループのビラはりにいつた同志がつかまつている。

わたしはすぐに自転車で古末君のアジトに走つた。このアジトは私だけしか、知らないことにしあつた。同志たちがつかまつたときの用心であつた。同志たちがつかまつたときの用心であつた。古末君から大阪の診療所あての紹介状をもらつて、わたしは、店にも家にもよらず、そのまま大阪にとんだ。しかし大阪の特高につかまつて、呉の警察につれもどされた。古末のアジトをいえとせめられたが、古末君がアジトをはなれるまでガンバつていて、もうよからうと白状した。特高はとんていつたが、だれもいないと、おこつてかえつてきた」ということです。

この事件で「赤い本屋」といつて新聞にデカデカと田中豊氏のことがかきたてられました。のちに水兵の阪口喜一郎氏がこの本屋にレンラクをとりにきました。

また吉末憲一氏は、はじめ大阪の全協組織と連絡をとつて、工廠の首切反対闘争をはじめたが、広島地方に全協組織がつくられるにともなつて、市川忍氏などと連絡をとりました。呉工廠の川窪鉄之助氏もこのルートで広島の全協・金属労組に加入しました。

四月三〇日の検挙をのがれた。吉末憲一氏は、べつの家にかわり、ビラの印刷は、ちかくの空家でやつていた。片岡義夫氏（呉地区の共青同盟キヤップ）とふたりで、ガリ版すりをやつているところへ私服の特高がひとりでやつてきました。「やつつ

けてしまおう」と、古末、片岡のふたりでかまえると、その特高は逃げていつた。古末氏は海へ、片岡氏は山へ、わかれわかれにげて広島市にむかいました。

古末氏が、広島市の全協の同志のアジトにゆくと、ちょうど広島市の「5・4事件」一斉検挙のあつたあとで、アジトはだれもいなかつた。特高が網をはつていなかつたので、うまくのがれました。古末氏は、べつのところで「5・4事件」の一斉検挙をのがれた畠常次郎氏、寺尾一幹氏と連絡をとることができました。

やがてこの三人で共産党広島地方委員会準備会をつくることになります。

「5・4事件」

一九三一年（昭和6年）五月四日から、全協広島地方協議会にたいして、「一斉検挙がおこなわれました。

五月四日夜、台屋町の全協アジトをおそつた警官隊や消防団のはでな「大捕物」が『中国新聞』にのりましたが、くわしいことは、当局の「新聞記事さしとめ」のために、一九四二年（昭和7年）九月七日の予審終結までふせられていました。九月七日、八日づけ『中国新聞』にのつたものは、もちろん当局側の発表です。

五月四日の広島市の全協組織の一斉検挙のいとぐちは、四月一六日の『戦旗』広島支局の検挙です。特高はかねてめをつけていた、広島放送局員

伊藤正朔そのほかを検挙した結果、『戦旗』広島支

局責任者は伊藤正朔、『第二無産者新聞』、『無産青年』の広島地方責任者は岨常次郎、赤色救援会の

広島地区責任者は、胡川清であることがわかつた。また全協の組織も、事務局長は市川忍、事務局員は岨、五条、小笠原であることもわかつた。しかし、どこにいるかまだわからなかつた。

五月四日特高は専売局女工、上野良子さんをとらえ、いつたん釈放して、岡野巡查部長、黒山巡查ほか数人があとをつけた。そして台屋町の空家にあつまつてあるもの数人を検挙しました。

この事件で起訴されたものは、市川忍、五条俊夫、胡川清の三氏でした。

一九三二年（昭和7年）十一月二十五日この事件の公判がおこなわれましたが、市川忍氏は、公判にはいるまえに被告人の会議をひらくことを要求してゆずらず、ついに裁判長から退廷を命じられました。そして傍聴も禁止となり傍聴人も公判廷からおしだされました。弁護人から「裁判長忌避」を申し立てたが、しりぞけられ、被告なし傍聴なしの裁判となつたと新聞記事にあります。十二月五日、市川忍四年、五条俊夫三年の刑がいいわたされると市川、五条は「弾圧下の欠席裁判反対。日本共産党万才」をさけんで退廷したとあります。

四

日本共産党 広島地方委員会の結成

「5・4事件」のあと、再建運動がつづけられ

ました。

岨常次郎氏は、たび重なる検挙をたくみにのがれて活動していました。

「一九三一年（昭和6年）三月共産青年同盟本部と連絡がつき、六月に共産党中央から連絡があつて上京した。七月に広島市で、岨、古末、寺尾の三人で党広島地方委員会準備会をつくりた。八月、党中國地方委員会、広島地方委員会を結成した」

と岨氏はかたっています。（1983年10月）

なお、となりの岡山県では一九二八年（昭和3年）、「3・15事件」直前に、党岡山地方委員会が結成されています。板野勝次氏の「嵐に耐えた歳月」によれば、委員長は、広島合同労働組合から來た倉本虎一氏。労働組合評議会、中国地方評議会結成のため広島からきた倉本虎一、達一兄弟は争議の応援などで岡山県の同志たちとともに活動していました。そして党の岡山地方委員会の結成となつたのです。

倉本兄弟は、一九二二年（大正11）七月広島市河原町の理髪店吉川長太郎氏、広島出身の東大生米村正一氏らの『共産党宣言』などの学習活動に参加しています。（広島県労働組合会議編『広島県労働運動史』）

しかし、うちつづく弾圧で、岡山地方委員会もつぶされました。中国地方委員会は、一九三一年にはまだ結成されていません。

「中國地方に党組織を確立する展望をもつておりました」と、故吉末憲一氏は書いています。

広島地方委員会は、「5・4事件」まえからの全協組織のメンバーのうち、検挙をのがれたもの、

不起訴で出てきたものなどを、党に組織してゆきました。しかし、そのことをくわしく書いた同志の手記はありません。『中國新聞』（1933年5月23日付・10月5日付）の「3・5事件」発表記

事一当局の発表によるほかはありません。職場の組織をみると、広島電鉄は一九三〇年のくれた八月、党中國地方委員会、広島地方委員会を結成した

と藤軍一氏（通信書記補）が不起訴ででてくると太田史郎氏（電信集配手）らと全協組織の再建と党細胞をつくることにつとめました。一九三一年（昭7）三月五日および一〇・三〇の一斉検挙で、郵便局関係でとらえられたものは、このほかに、堀江明治氏、橋本俊三氏、竹谷時良氏の名があがっています。

日本製鋼所・広島工場はかねてから目標工場としていたが、一九三一年（昭和6年）八月、全協金属労働組合の分会が、野中富雄氏、井上満氏、安田裕俊氏によつてつくられ、ついで11月いづれも党にはいました。

印刷工では共産青年同盟の組織がのびてゆきました。新聞によれば、石川市松氏（共青市川印刷所細胞キヤップ）、丸川昇一氏（共青中國新聞細胞キヤップ）、元安勝氏（同細胞員）などの名があります。

村上四郎氏は、広島合同運送争議・広島電鉄争議の応援の際も、活版工として検挙者の中に名があります。そのうち全協出版労働組合広島支部責任者として、はたらきました。

共青同盟はこのほかに、帝國人絹岩國工場（責任者花野岩男氏）高等師範学校（責任者井ノ口俊夫氏、細胞員簾仁傑氏）などにも組織がつくられました。

花野フジエさんは広島紡績のストライキに参加したのち、福山市の福島紡績に入るべく友達とともに行きました。これは福山労働組合から「福島紡績に入つて組織してほしい」とたのまれたからであります。しかし入社のための面接で、友達のほうは入れたが、フジエさんは採用にならなかつた。「あんまりシッカリしすぎている」という理由だつたそうです。そのご彼女は、広島市からきた岡田茂美氏とともに福山地区の全協組織をつくるために、はたらきました。岡田氏が病にたおれてからは、花野フジエさんが責任者として、広島市の古末憲一氏などと連絡をとっていました。

花野・岡田そのほかの人のことについては当時福山労働組合の常任だつた、野田清一氏の追憶の記が、よせられています。

広島専売局では「5・4事件」で、上野よし子さんが検挙されたあと、天津せいさんなどが、残つていきました。韓利權氏がオルグにあたりました。全協の組織としては、一般使用人組合、官庁分会キヤップとして、島本隆司氏、同教員分会として、村上金彦氏、同金融分会は、清水次郎氏の名があげられています。

国鉄の組織は門司鉄道局管内に広島県、山口県がはいつているので、広島車掌区の同志が山口県の大島駅へかわつたり、三田尻から呉線の吉浦駅にきていた同志もありました。一九三三年（昭和7年）三月には、国鉄の松本武司氏が広島県警に

検挙されたが、七月二十四日には山口県警が防府市で国鉄オルグ岩村大次氏を検挙し、そのあと広島車掌区、吉浦駅、山口県の三田尻駅、大島駅などの同志を山口県警で検挙しています。

これらの組織づくりは、スケジュール表のようになります。しかし入社のための面接で、友達にきちんととすすめられたわけではなく、特高の弾圧をくぐつて「ジグザグのみち」をとうりながらすすめられました。

広島市での活動があぶなくなつた畠常次郎氏は広島市での共青同盟のじごとを吉岡道人氏にゆずり、呉地区にうつりました。特高はなおも手をゆるめず、呉市の畠氏のアジトをおそつたが、ひと足はやく彼は上京していくのがれました。畠氏のあとは、これも広島市での活動があぶなくなつた寺尾一幹氏が、ひきつぎました。また広島電鉄のストライキのとき検挙され、ついで三滝山ピクニック事件で検挙された松本京一氏も呉地区に来て活動しました。

反戦ビラ

「このとし九月一八日（1931年・昭和6年）満州事件勃発。反戦運動を勇敢におこなう」と「大呉市民史」には、そのころの共産党広島地方委員会のことをのせてています。

広島市では、宇品港にむかう兵士の列に反戦ビラをまいたと思い出を語る人もいます。騎馬巡査におつかれられたが、みんなにげて、つかまらなかつたという。

『大呉市民史』には広島市の反戦ビラについてつぎのようにのせてあります。（同書P.252）

九月二二日、広島専売局に全協反戦同盟の名で「シナ」出兵に反対のアジビラ十数枚を撒布。東署、憲兵隊で犯人捜査中、二三日早朝、呉線海田市駅において、呉工廠通勤列車到着の際、同様ビラを配布したものあり、当局狼狽。

一〇月、広島市の招魂祭をあてこみ、全協系の活動、日にめざましく、また各中等学校に「満州」出兵絶対反対などのアジビラを撒布または交付。

一一〇月二四日未明、眼鏡橋付近および広工廠前から先小倉方面の電柱に、反帝連盟呉地方委員会の名で、満州出兵反対、帝國主義戦争反対、その他社会民主主義、大衆党を攻撃し、國賊の文字を連ねた九種類のビラを貼るものあり、呉署は全協系殘党の仕業とみて捜査。（翌年二月に続く）

つづいて同書三五七頁に呉市内にまかれた反戦ビラについて、つぎのようになります。（昭和7年の項）

(一) 紀元節（2月11日）の前夜、呉阿賀町、延崎方面の電柱、掲示板に半紙大新聞紙に朱と黒で「日支開戦」云々のアジビラをはりつけたものあり。広署捜査。

(二) 全協系の不穏ビラが二月九日未明にも数十枚市内に撒布され、呉特高厳重捜査。
(三) 二月二七日午前八時ごろ市内一帯に激越な文句をならべた反戦ビラを撒布したものあり、呉署

はこれも全協系のしわざとみる。

四 三月一日夕、広村電車交叉点付近で、残業の従業員の帰宅時間をねらつて不穏ビラをまくものあり。

(五) 三月一四日、吳駅前、職業紹介所付近に不穏ビラをまくものあり。

(六) 三月一六日、同様ビラを配布。

広島市では三月四日、古末憲一氏が捕えられました。そしてあくる日、三月五日広島市で左翼活動家の一斉検挙がはじまりました。「3・5事件」といわれるものです。

呉市では、やがておそづてくる弾圧をまえに同志たちは必死で反戦ビラをまいていたわけです。

一九三一年（昭和6年）はじめの海軍工廠労働者の解雇に反対するたたかいのなかで、全協組織と工廠労働者との連絡がついたのですが、くわしい記録はありません。

『中國新聞』によれば、「呉工廠製図工、川達鉄之助は、昭和六年四月の大整理に刺激されて、同年八月全協、金属労働組合、広島支部に加入、工廠分会を各職場ごとの班別に組織し……昭和六年九月に入党、重田安一らと工廠細胞を組織」とあります。

重田安一氏のおもいでではつきのようです。

「はじめ呉市中通りの田中書店の田中氏から、

畠常次郎氏を紹介された。そののち畠氏から寺尾一幹氏を紹介され、「これからは寺尾氏とレンラクをとつてくれ」ということだつた。……寺尾氏と工廠にビラまきにいつたことがある。工廠の堀のところまでいって『ここからさきは、きみがかつてをしつているからたのむよ』と寺尾氏がいでので、私はビラのたばを堀のうえにのせ、堀をのりこえ、工廠のなかにはいつて、ビラをまいたことがある。製鋼砲熒部といつてあるが、製鋼工場と砲熒工場とは別の工場だ。私は砲熒工場の旋盤工だつた。そとからは蒲田政雄氏がオルグとしてはたらきかけてくれた。

工廠内ではまず製図工にその影響がひろがつたようです。検挙者のなかに、「魚雷部製図工」「魚雷実験部製図工」「造船部製図工」など八名がいます。

呉地区、オルグの寺尾一幹氏が、党細胞の機関紙——いわゆる工場新聞をだすことをすすめました。(そのころ労働組合—全協の分会が機関紙をだすときは、全協の分会の名をいれてだすことになつていた。党細胞がだすときは、工場新聞といつてゐた。)

重田安一氏のおもいでによれば

「職場のなかで、『こんど新聞をだそとおもうんじやが、なんかいくくんかいの、不平不満、そのほかなんでもえ』といつて投書をあつめた。わたしは、海工会の役員選挙に一三〇票くらい得票があつたほどで、顔がひろかつた。おやじも工廠ではたらいて役づきだつた。もつとも呉工廠の大整理で首になつたが。『聴るクレーン』のガリ版の原紙をきつたのは、林寿恵子さんだらう。

外交官（領事）の娘で、寺尾氏が手が足りないのをよびよせたときいっている」とのことです。

『聴るマスト』

呉海軍のことについては、そのころの水兵そのほかの人たちから、かなり手記や手紙がよせられています。

一九三一年（昭和6年）八月海軍内で、社会学研究会をつくつていてたとして海軍をおいだされた阪口喜一郎兵曹、西川兵曹、平原水兵、山口水兵、若林水兵が中心となつて、水兵対策委員会がつくられたと平原甚松氏は、かいています。まだ水兵たちと党広島地方委員会や呉地区委員会とはレンラクがなかつたという。

阪口元兵曹は、「赤い本屋」の田中豊氏に、党へのレンラクをたのみにいつた。しかし田中氏からみれば、おいそれとひきうけるわけにゆかなかつた。

田中氏のはなしによれば、「じぶんは、いわばおよがされていた。本屋の前の家の二階、表の間に特高が、見張りをおいていた。党関係のものが本屋にやつてこないかと張り込みをしていたわけだ。そこへやつてきた阪口喜一郎氏は、大きなからだの男で、もののいいかたもぶつきらぼうだつた。党へのレンラクをとつてくれ、など、いつて、オルグをつりだしにかかつているのではないかとおもつた」といつてています。

阪口氏は、なんども田中書店にきた。あるとき

は、おくさんの野村梅子さんもきたということです。田中氏は考えたすえ、寺尾一幹氏に相談した。「とにかく、あつてみよう」と寺尾氏がいうので、ある喫茶店で阪口氏に会わせて、田中氏はおもてで見張りの役をしたという。

あとで寺尾氏が「彼は大丈夫だ」というので、そののちは寺尾・阪口が直接レンラクをとることにしたそうです。

地区オルグの寺尾氏は、海軍細胞にも機関紙をだすことをすすめました。題名は海軍のなままで『聳ゆるマスト』ときめたという。

この『聳ゆるマスト』をだれが編集印刷したかということで、問題があります。

平原甚松氏は、一九六九年（昭和四四年）一〇月「じぶんがガリ版をきつた」と手紙をよこしました。

寺尾一幹氏は、一九七〇年（昭和四五五年）四月、「聳ゆるマスト」は『聰るクレーン』とともに、じぶんがそれぞれの組織に機関紙発行を提案し、原稿は各自にかいてもらい、じぶんが取捨選択して発行した。林寿恵子がガリ版をきつた」とかいできました。

平原氏は、一九七〇年（昭和四五五年）三月一五日の広島市での無名戦士の碑の合祀祭のときの談話、一九七一年（昭和四六年）六月二七日づけの手紙などで、『聳ゆるマスト』はじぶんが発行したといっています。

これらはそのつど、プリントして関係者におくり、さらに他の同志の手記とともに一冊にした『あめとかせと』のなかにも、それらをいれて、同志たちに送りました。

一九八二年（昭和五七年）の年末、寺尾氏の手記がとどきました。その筆者が上京して聞き書きをとり、さらに寺尾氏から手記がよせられました。それによれば、寺尾氏が呉で活動していたころ、京都時代の同志林寿恵子さん（同志社女専三人組のひとりで、三人とも家をでて名古屋でバスの車掌をしていた）を呉によりよせ、彼女が呉地区的ガリ版刷りのビラ・ニュースなどを全部きつた。呉港中学の自治学生会のニュース『学生仲間』や呉工廠の『聰るクレーン』なども彼女が原紙をきつた。きれいな字だったといっています。当時工廠の労働者だった重田安一氏も、『聰るクレーン』はきれいな字だった。林さんがかいたものだ。寺尾君が京都からよせたもので、領事の娘だとか聞いていますといっています。平原甚松氏はこれらのことを知っていないようです。こうした準備があるから、寺尾氏は工廠労働者や海軍の同志に党の細胞機関紙の発行を提案したのだと思います。

平原氏のいうようだと、なぜ『聳ゆるマスト』だけ、しかも党細胞機関紙を、党地区オルグの寺尾氏が、あまりよく知っていない平原氏に編集印刷をまかせたかという疑いがおきます。平原氏はガリ版にはシロウトであり、また今日つくつてあしたくばるというものでもない。オルグのほうで印刷して十分まにあうものです。月一回発行にしたと寺尾氏はいう。

平原氏は「上部からの干渉介入は受けなかつた。どこでどんなにして発行しているか、地区オルグといえども知つていなかつた」とかけています。印刷は、シンパの留守宅（下宿の部屋）などをあ

ちこちかりて、やつたといつていますが、これもおかしい。ガリ版のヤスリ、ローラー、原紙、インクをのばす板、原稿などをもつて、あちこち歩いたり、シンパの留守宅（下宿の一間）にあがりこんで、ガリガリいわせて原紙をきるなど、疑われるもとです。音のせぬよう原紙がきれたらプロ級です。

『聳ゆるマスト』はザラ半紙二つ折り、二段ぐみ、四頁だで旬刊発行。一頁は時事問題について社説的なもの、二頁は基礎理論的なもの、三頁は下士官兵の待遇などに関するもの、四頁上段は軍港のトピック的なもの、下段は必読書の紹介と編集後記的なもの」とも平原氏はかいています。

B4版のザラ半紙二つ折りの各頁に、それだけの内容を原紙でかきこむのは、よほど上手な人でもむつかしいでしょう。しかも一〇日ごとにださねばならないのです。

寺尾氏は「そんな、手のこんだものではなかつた。B4のザラ紙のうらおもてに刷つたものだ」といつています。

『聳ゆるマスト』が四号まで、いつたんとまったくのは、私が検挙されたからだ。平原君がひとりで発行していたのであれば、つづけて五号、六号がでているはずだ」と寺尾氏はいつています。昭和七年五月一〇日寺尾氏は逮捕され、五月三〇日呉署から脱走、呉市に非常線がはられて、道をあるいていた平原君が逮捕されたとあります（『大呉市民史』）。

平原甚松氏はすでになく、『聳ゆるマスト』の現物もみることはできません。

〔注〕その一・「昭和八年一二月二七日、平原甚松に対する判決文」というのをみると日時と事実関係にまちがいがあります。

(1) 昭和七年四月 阪口喜一郎によばれて郷里豊田郡中野村から呉にて、党中國地方オルグ三好惣次、吳地区オルグ寺尾一幹に紹介された。

(2) 三好惣次を責任者として寺尾、阪口とともに水兵対策委員会をしばし開いた。(5月20日頃まで)

(3) この協議にもとづいて『聳ゆるマスト』第一号から第三号、特集号第一号各數十部を(平原が) 謄写作成して、寺尾・阪口・木村莊重を介して海兵にくばつた。

張っています。

判決

本籍 広島県豊田郡中野村三百五十一番屋敷
住居 不定

無職 平原 甚松

明治三十九年十月二十二日生

右の者に対する治安維持法違反被告事件に付当裁判所は検事吉岡幸三閔与審理を遂く判決すること左の如し

主文

被告人を懲役三年六月に処す

未決拘留日数中百二十日を右本刑に算入す

理由

この判決文だと、昭七年四月中旬から会議をひらいて『聳ゆるマスト』発行を協議してから、つくったことになります。四月から五月一〇日に寺尾氏が逮捕されるまでの短い期間に四号までの『聳ゆるマスト』発行はできないでしょう。寺尾氏・平原氏とも「昭和七年二月に『聳ゆるマスト』は発行されている、三好惣次氏は四月中旬に呉地区にきたので関係ない」といつています。また「みんなが一室にあつまつて会議をひらいたことはない。街頭連絡だった」とかいています。

判決文といつても、警察、檢事局、予審で調書がつくられ(時にはデツチあげられ)、関係者の供述などにも、まちがつたものがあるから、うのみにはできません。

なお三好惣次氏の談話や手紙には、はじめは『聳ゆるマスト』の発行されたことは、昭和七年八月に東京で逮捕されてのち予審判事から聞かされたといっていました。のちに、関係があるという主

被告人は本籍地の高等小学校卒業後家業たる海運業に数年間従事し大正十五年六月一日志願兵として呉海兵団に入団し艦上勤務を経て呉海兵団勤務と為り海軍一等水兵に進みたるものにして其間プロレタリア文学に親しみ左翼文献を繙き思想左傾し共産主義を信奉するに至り昭和四年四月横須賀海軍法会議に於て昭和六年八月呉海軍法会議に於て孰れも左翼運動を為したる廉に依り取調を受け同年十月十日左傾思想抱持の故を以て海軍志願兵令第十八条に依り現役免除予備役に編入せられ退団したるものなるところ日本共産党(略称党)が國際共産党の日本支部にして革命的手段に依り我国家存立の大本たる立憲君主制を撤廃し私有財産制度を否認し無產階級独裁を経て共産主義社会の実現を目的とする秘密結社なること及赤旗か党の機關紙にして其政策綱領を大衆に宣伝煽動する秘密出版物なることを知り乍ら党を支援し其拡大強化を図ることを目的として

第一、昭和七年四月肩書本籍地に帰住中

吳市發信發信者不明の電報を受取り直ちに呉市に到り坂口喜一郎方を訊ねた結果當時同市に

於て党中國地方オルグ三好惣次、同呉地区オルグ寺尾一幹指導の下に呉海軍海兵方面に対し党の拡大強化の目的を以て活動し居たる右坂口の発電なることを知り同人の依頼に応じ共に呉海軍方面に党活動を為すことを承諾し其呉市内に於て右坂口より前記三好、寺尾を紹介せられ右三好より党に加入方の勧誘を受け即時承諾して入党し三好を責任者として寺尾、坂口と共に呉地区水兵対策委員会を構成し呉海軍海兵を目標として共産主義の宣伝、同志の獲得に努め同年五月二十日頃の間屢々呉市内に於て右水兵対策委員会を開催し活動方針、同委員会機関紙の発行等に付協議に参加し該協議に基き海兵の不平不満を激化せしめて革命意識を昂揚せしむべき趣旨の記事を掲載せる機関紙『聳ゆるマスト』第一号乃至第二号特輯号第一号を各數十部謄写作成し之を右寺尾、坂口又は當時呉海兵団在団中なりし木村莊重等を介して呉海軍海兵の間に頒布閲讀せしめ

尚其頃呉市内に於て二回に亘り前記三好惣次より冒頭記載の趣旨の記載ある赤旗二、三部宛を受取り其都度當時呉海兵団在中の山下達吉及同人を通じ前記木村莊重に各一部配布閲讀せしめ第一、昭和七年五月下旬右犯行の嫌疑に依り検挙せられたる右犯行を極力否認して同年七月上旬釈放せられ本籍地に帰郷し居たるところ同年八月上旬頃党員木村莊重の來訪を受け同人の勧誘に依り再び左翼運動を為さんことを誓ひ次て木村よりの通信に接し同年十月上旬広島市に來り木村より党中國地方オルグ錦織彦七、同滝川恵吉を紹介せられ右三名と協議の上「天皇制を倒せ、帝国主義戦争を内乱へ、労働者農民兵士のソヴェート政府の樹立、米と土地と自由の人権革命万歳」其他海兵の不平不満に對する具体的な要求事項より成る党軍事部海軍班のスローソー

ガン草案を決定し

第三、其際（昭和七年十月上旬）党中央部より被

告人に上京を命する指令の伝達方を依頼せられ

居りたる前記木村より上京の上前記坂口喜一郎

と連絡すべき旨を告げられるや即時東京市に

到り当時既に同地に上りて党活動を為し居たる

右党员坂口喜一郎を訪ね同人に右スローガン草

案決定の事実を告げ同人の紹介に依り同市銀座

某レストランに於て党軍事部長谷川茂氏と会

見したる上同年一〇月下旬坂口の指令に依り横

須賀市に潜入し同市に於て右坂口の紹介に依り

党员小倉キクエ、同日黒電次郎等と連絡し坂口

主宰の下に右目黒等と協力して横須賀海兵团海

軍病院、集会所、軍艦等を目標として党組織結

成の為の活動に従事し

以て日本共産党に加入し且同党的目的遂行の為に

する行為を為したものなり

以上の事実は
一、被告人に対する予審第二回訊問調書中同人の陳述として自分は判示冒頭記載の如き経歷を有し判示の如き動機より共産主義を信奉するに至りたる旨及自分が判示第一乃至第二の犯行を為す際は日本共産党か判示の如き使

命を有する秘密結社にして赤旗か判示の如き使

命を有する秘密出版社なることは之を知悉し

居りたる旨の記載

二、被告人に対する予審第三回訊問調書中同人の供述として被告人か三好惣次の勧誘に依り日本共産党に加入したる点を除き判示第一乃至第三と同旨並に自分は結局日本共産党の拡大強化を図り党をして其目的を遂行せしむる為活動したるものにて即ち現在の天皇制に依る資本主義国家を倒し、プロレタリア独裁国家と為し更に進んで共産主義社会を実現するこ

とが目的なりし旨の記載

八、判示に照応する

三、被告人に対する予審第一回訊問調書中同人の供述として自分は昭和七年四月二十日過ぎ

吳市内に於て党中央地方オルグ三好惣次の勧

誘を受けて入党したる旨の記載

四、坂口喜一郎に対する治安維持法違反被告事

件に於ける証人三好惣次の予審訊問調書謄本

中同人の供述として自分は昭和七年四月頃吳

市内街頭に於て寺尾より被告人を紹介せられ

同人に對して吳海軍方面の活動を依頼し其承諾を得且自分か党中央部より中国地方オルグと

して派遣せられ居るものなることを告げ尚同

月中吳市二河公園又は山の手方面にて入党方

を勧誘し同人は即時承諾して党员と為りたる旨の記載

五、滝川恵吉に対する治安維持法違反被告事件

に於ける証人錦織彦七の予審訊問調書謄本中

同人の供述として被告人か入党し居ることは

自分が昭和七年九月二十九日東京より廣島に

行く際丹後吉郎兵衛より聞き広島にて木村莊

重よりも聞きたる故三好惣次か入党せしめた

るものと思ふ三好は党中央地方オルグとして

丹後か被告人の入党せるなどを知れるものと

思ふ旨の記載

六、坂口喜一郎に対する治安維持法違反被告事

件に於ける証人寺尾一幹の予審訊問調書謄本

中同人の供述として判示第一の事実中被告人か三好惣次より赤旗を受取り之を山下達吉、

木村莊重に交付閲読せしめたる点を除き其余の判示に照應する記載

七、木村莊重に対する治安維持法違反被告事件に於ける同被告人の第三回予審訊問調書謄本

中同人の供述として判示第二の事実及判示第

三の被告人か党中央部よりの指令に依り坂口喜一郎に向ふ上京したる点に照應する記載

(イ) 「聳ゆるマスト」第一号乃至第三号特輯号

第一号（木村莊重に対する治安維持法違反被告事件の証拠物中証第七号証第二十五号）

(ロ) 日本共産党軍事部海軍班スローガン草案（滝川恵吉に対する治安維持法違反被告事件の証拠物中証第六十二号）の存在

を総合して之を認定す

法律に照すに被告人の判示所為中國体を変革することを目的とする結社に加入し且其目的遂行の為に

する行為を為したる点は治安維持法第一項第一項後段に私有財産制度を否認することを目的とする

結社に加入し且其目的遂行の為にする行為を為したる点は同条第二項に各該當し以上は一個の行

為にして二個の罪名に触るるを以て刑法第五十四

条第一項前段第十条に依り重き前者の刑に從ひ所

定刑中懲役刑を選択し其刑期範囲内に於て被告人を懲役參年六月に処し刑法第一十一条に従ひ未決拘留日數中百式拾日を右本刑に算入すべきものとす

す
仍て主文の如く判決す
昭和八年十二月二十七日
広島地方裁判所刑事部

裁判長判事 福田 豊市印
判事 辻富 太郎印
判事 近藤 完爾印

(注) その二 広島地方と党中央との関係は、つぎのよう

(一) 昭和六年七月、広島市から姐常次郎氏が党中央と連絡がついて上京、広島地方委員会結成の承認をうける。姐、古末、寺尾の三人で広島地方委員会を結成。古末氏が広島地区、姐氏が吳地区の責任者に。姐氏が上京して、寺尾氏が吳地区的責任者になる。

(二) 広島地方と中央との連絡がしばらく切れていので、党中央では、三好惣次氏を中國地方オル

グとして出す。(昭和七年三月)三月五日より広島

ら山陰線をまわつて上京しました。

市を中心に一斉検挙がはじまつていて、ようやく四月に吳地区責任者、寺尾一幹氏と連絡がつく。
(三) 昭和七年五月十日、寺尾一幹氏が検挙され、五月三十日吳署から脱走、上京して、藻谷小一郎氏(京大時代の同志で当時中央で活動)と連絡がつく。

四 昭和七年八月、三好氏は連絡のため上京して検挙される。

上京しています。木村荘重氏によつて『一聴記』第五号がだされることになります。

佐藤静枝さんは、小倉水兵がゆくと、カウンターのかけで文書をわたしてくれたという。「彼女は小

滝川恵吉氏を中國地方オルグとして出す。錦織氏は岡山県と吳海軍関係を主に担当、滝川氏は主に広島地区を担当。

(六) 昭和七年十月三十日、熱海温泉の党会議の一斉検挙で、錦織氏が検挙される。広島地区にいた、滝川恵吉氏以下木村莊重氏及び海軍関係も検挙される。(10・30事件)

昭和七年三月五日、広島市を中心にはじまつた
一斉検挙は、四月から呉市での一斉検挙となりま
した。

市に家をかりアジトとしました。広島市のカフエーリラスの女給、佐藤静枝さんが、呉市のカフエーモ天楼の女給となつてゆき、木村氏と水兵の間のレンラクをとることになりました。

のちに呉の水兵の一斉検挙をのせた新聞には、「広島市のカフエーリラスの左傾女給純子にアジトられて」と、佐藤静枝さんのことのかいています。

大切な文書をうけわたしているといふ氣持せ
もあつたのでしよう。

五月十日 特高刑事が、ポストに手紙をいれようとしている男が寺尾一幹氏にいてると逮捕したとあります。(『大吳市民史』) 寺尾氏によれば、「留置場のブタ箱は検挙された同志でいっぱいだったので、私は二階広間の隣の小部屋に入れられ

た。ある日、部屋の出入口のカギがかけてないの
でそこから逃げた」とのことです。(寺尾手記)〔参
照〕「五月三〇日未明、午前二時ごろ、寺尾は手錠
のまま脱走」(『大吳市民史』)。寺尾氏は広島市に
逃げて、広島高校の某教授のちかくの空家にかく

〔注〕「純子は、順子が正しいです。この頃、広島の花野から私に『順子』という名で手紙がきた。」と福山の野田清一氏から手紙がきました。野田氏の手記に花野フジエさんのこととはくわしく書かれています。)

〔聳ゆるマスト〕第五号は、つきのようにして
つくられました。吳の水兵からの原稿は、木村氏
がうけとつて広島市にもつてかえり、古田稔氏が
自分の家で原紙をきる。その原紙は、黒崎保氏に
わたされ、彼が自分の家で「聳ゆるマスト」に刷
りました。古田稔氏は広島一中から早大に進み、
学生運動で退学処分になつて、広島市にかえつて
いました。黒崎保氏は「3・5事件」で検挙され
た、共青同盟広島地区責任者、吉岡道人氏の弟で
す。

寺尾氏脱走のあと、吳市では非常線がはられ、道路を走るいた平原甚松氏がつかまりました。しかし警察は、ただ注意人物だからつかまえました。たというだけですぐに釈放しました。阪口喜一郎氏も水兵関係のしごとを木村莊重氏にひきついで

フェーへかようのは苦しかったとのことです。もつとも小倉正弘水兵は、海軍へ志願せよという父親に「月五円づ送つてくれるなら志願する」と交換条件をだして、父親も約束どおり五円づつ毎月おくっていたという。小倉水兵は、下宿をふたつ借りていた。そのひとつの中宿に左翼文書をか

はじめに—戦前の広島県左翼運動について

服制帽をつごうしてくれ、それをつけて芸備線か
れました。そして同教授が、広島文理科大学の制

カフエー摩天楼へは、小倉正弘水兵が時々いってきました。月十五円の一等水兵の給料では、カ

〔注〕「純子は、順子が正しいです。この頃、広島の花野から私に『順子』という名で手紙がきた。」と福山の野田清一氏から手紙がきました。野田氏の手記に花野フジエさんのこととはくわしく書かれています。)

『聳ゆるマスト』第六号がガリ版で刷られ、早
にもちこまれたところで「10・30事件」の一斉検

た、共青同盟広島地区責任者、吉岡道人氏の弟です。
【聳ゆるマスト】は呉にもちこまれて、小倉水兵にわたされ、彼から軍艦の同志にくばられました。

拳があつて、呉海軍の水兵やオルグの木村莊重氏、ガリ版に協力した古田稔氏なども逮捕されまし
た。

その裁判に提出された証拠書類のなかに、『聳ゆるマスト』第五号一五部（証拠第20号）、同第六号四五部（証拠第21号、証拠第38号）とかかれてい
ます。

〔注〕第六号は「カ所でみつかつたとおもわれま
す【五人の水兵の判決書】原弁会シリーズ」

第六号の記事について、判決理由書には、要旨
次のような記述があります。
軍艦「白鷹」で夜中に士官どもが酒をのんで
さわぐので、ある水兵が静かにしてくれといっ
たところ、あべこべに士官どもから「注意」を
うけた。このことを「聳ゆるマスト」第六号で
とりあげて水兵にたいする不当な圧迫だと抗議
した。士官どもの与えた「注意」とは勿論暴力です。
党オルグ錦織彦氏、木村莊重氏、水兵小倉正弘氏
が協議して、士官に不当な取扱があつたときは、
水兵は団結してあたれど、アジることをきめてい
ます。

「現役満期 強制延期 反対」の記事ものせた
ようです。このことについて、小倉正弘氏は、お
もいでを、かたっています。

「だれも兵隊で一生めしをくうつもりはない。
海軍へ志願してはいつたのは、どうせはたちにな
つたら兵隊にとられるから、はやくいって、
はやく出たほうが社会にて仕事にはやくつけ

るとおもつたからだ。「満洲事変」がはじまるとい
しつこく再役せよといつてくるよになつた。
ほとんど強制的だ。いつまでも海軍にいたら、
社会にてから仕事をさがしてうろうろせねば
ならん。はいつたときはなしがちがうとみん
なブウブウいった」。

五

〔3・5事件〕

呉地区のそのほかの組織

全協は、金属労働組合支部（責任者 川達鉄之
助）、出版労働組合支部（浦田政雄）、一般使用人
組合支部（茂渡義人）。これらの組織で呉地区協議
会を結成したとあります。

共産青年同盟—自治学生会の組織は、呉市の中

学校にもつくられていたようです。そのころ朝鮮
から日本の高等学校や専門学校にはいるには、ま
ず日本の中学校を卒業せねばならなかつた。県立
の中学校にはいれてくれない。呉市では、私立の
呉港中学校や、興文中学校にも朝鮮からの生徒が
多かつたわけです。呉地区オルグの寺尾氏と呉港

中学のグループとの連絡がついて、彼らが「ニュー
ス」をだすというので、寺尾氏がガリ版刷りをひ
きうけて『学生仲間』をだしたということです。

興文中学校のグループと共に同盟呉地区責任者
蒲田政雄氏との連絡があつたことは「3・5事件」
呉地区的新聞発表や『大呉市民史』の記事にみら
れます。つぎの(5)の「3・5事件」一（呉署で検
挙）をみてください。

外五名

（広島市東署に検挙）
一、五日よあけ大谷光雄方を家宅捜査。

一九三二年「昭和七年三月五日から広島市を中
心に、党、共青同盟、全協、救援会、文化団体な
どに一斉検挙がおこなわれたのを「3・5事件」
といつています。

この一斉検挙のきっかけとなつたのは、三月四
日の古末憲一氏の逮捕です。広島高等師範学校の
生徒課から警察に、にせの高師生がいること、そ
の下宿は千田町の家だとしらせがあつた。鷹野橋
派出所の巡査がしらべにゆくと抵抗して逃げよう
とするので、とりおさえ、そのへやを調べると、
共産党関係の文書がでたのでおどろいて、西署の
特高係に報告しました。その夜の取り調べで、党
広島地区責任者古末憲一氏であることがわかつた
とのことです。広島県特高課では、すでに左翼分
子の一斉検挙のではづをととのえていたが、検挙
の日をはやめて、三月五日夜明け、広島市内の一
斉検挙にのりだしたものでした。特高は、かなりく
わしく同志たちの、いるところをつかんでいて、
ほとんどその日のうちにとらえています。

そのときの新聞記事をたどつてみると、検挙さ
れたもの広島地区一二三名、呉地区五四名、松永
地区五名、福山地区一二名、府中地区一〇名、県

ク

書籍商

ク

小学校訓導

全協一般使用人組合

西川 稔

上田 西川

成美

野原 一雄

田中 一雄

豊

城戸 茜

薰

茂渡 義人

佐々木修三

重義

山根 政高

山崎 政高

林 寿恵子

藤原 鷹則

池本米雄

(仮名)

金圭順

(大4年生)

季熙尹

(大5年生)

康東揖

(大3年生)

白 康

(大4年生)

畠中地区書記

興文中学校生徒

ク

鈴木常次郎

ク

寺尾 一幹

ク

三好 惣次

ク

岩村 大次

〔10・30事件〕

まえにのべたように「3・5事件」のあと、滝川恵吉氏、錦織彦七氏が広島県にはいって再建にあたりました。起訴猶予でできた同志たちも再

建にとりくみ、広高生、吉田司氏も「5・4事件」で停学処分になっていたが、処分がとけて学校にもどると自治学生会、共産青年同盟の再建にとりくみました。

『赤旗』は、一〇〇部づつ吉田司氏のところにトランクにつめて、おくつてきたと彼はかたっています。

「10・30事件」といわれるものは、一九三一年（昭和7年）一〇月三〇日熱海温泉で党中央委員

に地方オルグもくわえた会議がひらかれるこをかぎつけた特高警察が一斉検挙した事件と、それにつづく全国一斉の検挙です。

熱海温泉会議のとき、中国地方オルグ錦織彦七氏、吳から横須賀へオルグにいった平原甚松氏もつかまつたが、錦織氏のもつていたメモに滝川恵吉氏の住所が書いてあたことから一月三日、滝川恵吉氏が検挙されたと新聞の発表にあります。しかしそんなカンタンなものではないと思いまます。特高警察は全国的に党組織の状態をつかんでいたとおもう。スパイ松村そのほかから情報をとっていました。熱海会議に出席しなかつた党中央部のものを、ほとんど同時に鎌倉や銀座でとらえています。軍事部責任者長谷川茂氏もつかまっている。水兵の組織もかなりわかっていたようです。もちろん新聞には発表していません。

「3・5事件」につづいて、広島県でも一斉検挙がはじまりました。

広島郵便局では、3・5事件のとき起訴猶予でた堀江明治氏や、局内にのこつていた橋本俊三氏、竹谷時良氏が検挙されました。

日本製鋼広島工場も「3・5事件」の時はのがれましたが、このとき、野中富雄、井上満、安田祐俊の三氏が検挙されました。

新興教育同盟は一九三〇年（昭和5年）八月つくられ、機関誌「新興教育」をだしていました。日本教育労働者組合が、合法的な宣伝活動のためつくつたものです。この組合は全協に加盟して、その教育労働部となっていました。〔新日本新書「日本歴史」下〕 師範学校、高等師範学校の生徒のあいだにも「新興教育」という機関誌の読者の組織が全国にひろがっていました。

長野県では全協一般使用人組合、教育対策部、長野支部および新興教育同盟準備会、長野支部をつくり、組織は、教員二〇八人、関係学校六六校におよびました。一九三二年（昭和7年）三月から一回も全県的な会合をひらいています。また師範学校の新卒業生の歓迎会とか短期現役兵（師範学校卒業生のみがいる）の除隊の歓迎会をひらいて、組織拡大をはかつていていたという。一九三三年（昭和8年）二月一斉検挙をうけましたが、ある小学校ではケイサツから先生をつれもどそくと、泣いて決議した生徒が学校をでようとするところを、学校側におしとめられたという。（『呉日

日新聞』昭和8年9月16日記事）

残念ながら、広島県ではそこまで組織がひろがりませんでした。

新興教育同盟は、プロレタリア文化連盟（コツブ）に加盟していましたが、広島県ではほかの文化運動のほうがすすんでいました。

「3・5事件」で検挙された、島本隆司の記事（『呉日日新聞』昭和8年8月29日記事）によれば、すでに一九三一年（昭和6年）にはプロレタリア映画同盟広島支部や美術家同盟、演劇同盟各広島支部ができていたようです。そのとし八月ごろには、島本隆司氏が中心となつてプロレタリア作家同盟広島支部をつくり、ついで一二月にはこれら各団体によるプロレタリア文化連盟、広島地方協議会をつくったとあります。

「10・30事件」では、石川茂一氏、伊藤正朔氏

が文化運動の関係で起訴されました。

伊川正朔氏は『戦旗』広島支局責任者として「5・4事件」のとき検挙されて起訴猶予。3・

5事件で検挙されてまた起訴猶予。「10・30事件」で、こんどは起訴となりました。

石川茂一氏は三高在学中に運動にはいり、退学処分になつて広島市にかえつてきました。

岡本菊次郎氏のおもいでによれば

「西原初二君の自由堂書店の二階で、プロレタリア科学の読書会がひらかれていて、それにいつた。チユーターは石川茂一君だった。それが私の運動にはいるきっかけになった」とのことです。

広島郵便局の小川正一氏も、石川茂一氏としきあうようになつて運動にちかづき、「10・30事件」で広島郵便局の同志の検挙のあと、再建にとりくみました。

福山地区では山根清氏が検挙されました。一九三一年（昭和6年）一月赤色救援会広島地区委員会の結成のころから、胡川清氏とレンラクをとつて、福山、松永などで救援会、全協、文化運動などの活動をしていました。

福山地区で全協の組織活動をしていた花野ふじえさんは、そのご広島市にかえつて活動していましたが、10・30事件で検挙されました。作家同盟の関係で、三次、十日市のサークルおよび竹原地区のサークルも、このとき検挙されました。

木村莊重氏も滝川恵吉氏の検挙につづいて検挙されました。

『聳ゆるマスト』5号、6号の原紙をきつた古田稔氏は、広島の歩兵11連隊にはいる直前に検挙されました。彼は一年の刑をおわってでると朝鮮竜山79連隊にとばされたとのことです。

坂口喜一郎氏も東京で検挙され、吳憲兵隊に留置されたことが新聞記事にみられます。

なお坂口の妻、野村梅子さんは吳署に検挙されたが、坂口氏が口をひらくまでいつさい口をわらはず、がんばりどうした。起訴猶予になつたが、もともと養母の反対をおしきつて結婚したので、養母のもとへかえらず、自活の道をもとめて上京したとあります。

このとし、一九三二年（昭和7年）八月には横須賀軍港でも水兵が検挙されました。

八月三〇日軍艦「山城」で盗難事件があつて、水兵の所持品検査をしたところ、河田水兵のとこ

ろから『日本共産党二七年テーゼ』が出てきまし

た。そこで各軍艦で全兵員に上甲板集合が命令され、艦内の大搜査がはじめられました。

こうして軍艦「長門」から吉原水兵、軍艦「榛

名」から西氏水兵が検挙されました。(『サンデー毎日』昭和49年4月21日号)

かねてから横須賀軍港で、集会所や軍艦の「幸便箱」に党的ビラがいれられるので、めをつけられていたとおもわれます。これら各氏はいづれも、海軍に入るまえに左翼運動の経験があります。前記『サンデー毎日』によれば、

吉原氏は「太陽のない街」の出身者、河田氏は『第二無産者新聞』を配布していたという。

西氏恒次郎氏は少年のころから、新人会の学生のレポーターとしてとびまわり、その後船員になつて、各國の港につくたびにそこの共産党事務所をおとづれていたといふ

とあります。

西氏恒次郎氏については『日本社会運動人名辞典』につきのようになります。

「西氏恒次郎」一九一・三・八(明治44年)

東京市駒込区本郷元町に生れる。尋常小学校卒業。

一九二五年一月結成の日本無産青年同盟に加盟、翌年一月におきた共同印刷ストライキに参加。のち評議会本部、海員組合刷新会で勤らき。

一九二九年共産党入党

一九三二年横須賀海兵团入団、五月戦艦「榛名」に配属され、共産党軍事部と連絡。七月軍艦細胞を結成したが、八月発覚し、軍法会議で懲役三年六ヶ月に処せられる

一九三七年船員となりニューヨークに渡り、ア

メリカ共産党民族課日本人部と連絡

一九四一年七月検挙されるまで、レポーターとして共産党主義文献の国内への持込み、連絡に従事

横須賀の海軍軍法会議は、一九三三年(昭和8年)四月ひらかれ、西氏水兵、河田水兵(六年六ヵ月)吉原水兵、三年の懲役となりました。西氏水兵は昭和九年に満期退団ですが、刑務所にいるあいだは兵役期間とはされず、一九三七年(昭和12年)に退団、すぐに船員となつて日本をはなりました。

横須賀の海軍軍法会議は、伊五七号駆逐艦

松本保二等機関兵、堀弥之助一等機関兵、防備隊松本辰治一等機関兵、那智宮永重登二等機関兵曹

小林義雄一等機関兵曹、伊55号駆逐艦

上記小倉正弘氏、稻垣宏氏ら五人の水兵の判決書は、吳の原田香留雄弁護士によつて発見され、原弁会シリーズのパンフレットとしてだされました。

宮内謙吉三等看護兵曹は、獄中で病氣となつて、出獄後死亡。

一九三七年(昭和12年)の末、木村荘重氏は四年の刑をおえて出獄、島根県鹿足郡木部村の実家にかえりましたが、宮内氏の生家は近いのでたずねてみたといふ。しかし、その村ではだれもおしゃれくれなかつたといふことです。共産党事件に關係した者は「村八分」になつてゐたのでしよう。木村氏の村でもそうだつたといふ。

なお、木村荘重氏は郷里で農業をやつていて、昭和二二年三月七日、日本共産党員として島根県鹿足郡木部村長に就任しました。

する。

木村荘重氏は、すでに民間人となつてゐるから別の公判になつています。

『広島県労働運動史』(広島県労働組合会議編)によれば、「官憲側でしらべた呉の関連水兵、「但し起訴せざるもの」として、つきの氏名があげられています。

『広島県労働運動史』(広島県労働組合会議編)によれば、「官憲側でしらべた呉の関連水兵、「但し起訴せざるもの」として、つきの氏名があげられています。

できたが、その第一号であった。

それから朝鮮戦争がおきて、米軍の掠奪や虐殺が赤旗などでも報道され、戦争反対が叫ばれる様になった。そんな時、私の村の細胞新聞でもこの朝鮮侵略反対が記事になって村内に配付された。

昭和二五年一〇月三日、私は村長としてこの様な反占領政策的な印刷物を配付した村民の長としての責任を問われて逮捕され、占領軍の軍事裁判にかけられたのであった。

昭和二五年一二月二十四日重労働七年罰金一、五〇〇ドルの判決、控訴して二六年五月二日重労働四年と確定、山口刑務所に移管され、昭和二七年四月二九日講和条約発効で釈放……(木村氏からの手紙)

なお、吳軍法会議以外の「10・30事件」関係者は、つきのとおりです。

「10・30事件」起訴者

(『呉日日新聞』昭和8年10月5日記事)

昨年(昭和7年)12月下旬より本年七月にかけて、広島地方裁判所で起訴、予審にかけられてい

たが、同検挙により起訴されたもの二一名。おくれて起訴された阪口喜一郎、岡本菊次郎、坂本四郎の三名をのぞいて、つきの一八名は予審終結。いずれも治安維持法違反として、広島地方裁判所の公判に付せられることとなつた。

静岡県志太郡島田町 党中國地方オルグ

島根県鹿足郡木部村 予備役海軍一等機関兵

木村 莢重 (27)

滝川 恵吉 (31)

(注)『日本社会運動人名辞典』より
錦織彦七 一九〇六年四月一五日~一九四一年九月九日(明治19年~昭和16年)
島根県簸川郡大津村(現出雲市)に生る。松江高校をへて東京帝大文学部中退、在学中新人会に属す。

一九二七年ころから労農党東京城北支部に属し

はじめに一戦前の広島県左翼運動について

石川茂一(24)

同上 画工 伊藤正朔(27)

古田 稔(25)

韓 利權(24)

橋本俊三(21)

伊藤正朔(27)

岡山を中心て中國地方委員会の再建を準備し、吳海軍艦船内細胞を再建、「聳ゆるマスト」の發行を繼續。

一九三二年十月三〇日中國地方代表として熱海

会議に出席して検挙され、治安維持法違反で懲役6年の刑。出獄して結婚後1年6ヶ月で一九四一年九月九日岐阜県可児郡中村で死去。

堀江明治(25)

竹谷時良(24)

野中富雄(25)

廣島市南竹屋町 元広島郵便局集配手

堀江明治(25)

竹谷時良(24)

廣島市段原町 同右 井上 満(24)

廣島市鍛冶屋町 同右 安田祐俊(25)

神戸市湊西区鹿屋町 予備役海軍二等主計兵

山下達吉(25)

廣島県豊田郡中野村 予備役海軍一等水兵

平原甚松(28)

廣島県山県郡吉坂村 元広島高等学校生徒

吉田 司(23)

廣島県沼隈郡柳沢村 山根 清(25)

廣島市三篠町 元宇品陸軍運輸部従業員

寺本強司(26)

〔10・30〕事件のあと、犠牲者とその家族の救援活動にとりくんだ岡本菊次郎氏のおもいでによれば

〔3・5事件〕で検挙されて、起訴猶予ででてきから、商売をしながら広島から西にむかい小倉までいったところで、10・30事件のことときいて広島にひきかえした。検挙された同志へのさしつれなど、まだやられていなかつた。宮島からてきた坂本四郎君、専賣局にいた天津せい君と救援活動をやることにした。じぶんの家にいたら、いつやられるかしれないでの、観音町のある家の二階に間借りをした。そこに坂本君や天津君も住んでいたし、三戸信人君もやつてきた。」というふうに語られる。ひとつところにわかいものが四人、女もまじえてすんでいるのはめにつきやすいが、かねがないからしかたがない。

三戸信人君は10・30事件に共青同盟関係で検挙されたが、起訴猶予。その後共青同盟の再建になりました。

吉本康二氏たちもレンラクがとれた。また広島郵便局の小川正一氏が、消費組合の迫樹盛登氏に党へのレンラクをつけたといつてきましたので、それともレンラクがついた。広島の吉田司氏たちによつて、広島市内の中学校——師範学校、広陵中学、山陽中学、広島県女などに共青同盟の組織がつくられていたが、これらともレンラクをとつて『鯉城の健児』を発行したわけです。

一九三三年（昭和8年）四月五日党本部より、関谷源一氏が広島市にはいりました。これは、三戸信人氏が共青同盟のルートから党本部にレンラクして、広島地方にオルグをおくることをもとめたものです。

四月一〇日広島郵便局の小川正一氏と三戸信人氏、関谷源一氏の三人で、党広島県再建委員会、準備会をつくつたとあります。のち党中央の意見にしたがつて、党広島県オルグ会議としました。

関谷氏のアジトとしては、消費組合の理事長をしていた新田菊馬氏の家のはなれをあてるにしました。新田氏は洋服屋さんです。そのころ消費組合の常任だつた迫樹盛登氏のかたるところによれば

「あのころ、三戸信人君がよく消費組合の店にきていた。その三戸君のたみで、関谷君のアジトをつくることをひきうけた。新田君の家のはなれというのは、よこの小路から出入りすることがりくんでいました。10・30事件で吉田氏がつかまつたあと、吉本康二氏たちもレンラクがとれた。また広島郵便局の小川正一氏が、消費組合の迫樹盛登氏に党へのレンラクをつけたといつてきましたので、それともレンラクがついた。広島の吉田司氏たちによつて、広島市内の中学校——師範学校、広陵中学、山陽中学、広島県女などに共青同盟の組織がつくられていたが、これらともレンラクをとつて『鯉城の健児』を発行したわけです。

「あのころは、ひとつところにながくいることはなく、アジトはつぎつぎとかえてゆきました。消費組合は、皆実町から舟入町にかわつていましたが、「合法的に」看板をかけていられるところでした。したがつて、いろんな人がやつてきました。

大工の達木幸太氏、洋服屋の新田菊馬氏、蒔絵の仕事をしている中沢晴海氏（『はだしのゲン』の中沢啓一氏の父）、画家の丸木位里氏（まだ絵のうれない苦闘時代）、朝鮮青年会の金弼東氏、周丁龍氏、三年の刊をおわつて出てきたばかりの玖島三氏なども組合員でした。

一九三三年（昭和8年）六月、岡本菊次郎氏、坂本四郎氏が検挙されました。公判対策会議を犠牲者の家族とともに開いていたところを特高の一隊がふみこんで、そこにいるもののことごとくつかまえました。岡本菊次郎氏、坂本四郎氏をはじめ、消費組合の迫樹盛登氏や犠牲者の家族の人たちも留置場にいれられました。迫樹盛登氏のおもいでによれば

「特高は、岡本菊次郎君が責任者だということをしつついたようだ。岡本君のすわっているザブトンをめくつて、文書をかくしていなかしらべていた」ということです。

七月には、天津せいさんも家族のところをまわつていて特高につかりました。

小寺英雄氏が宮島から救援会のしごとをひきつぐためにでてきたのは、天津せいさんの検挙といちがいでした。消費組合をたずねていった小寺英雄氏は、常任の迫樹氏は、獄中の同志たちからきたハガキのたばをわたしました。それらは「消費組合きつけ」としてあて名は岡本氏のペンネームが書いてありました。岡本菊次郎氏が検挙されるまえに、獄中の同志たちにだした手紙は、じぶんの本名や住所をかくわけにゆかないから消費組合（気付け）でだしたわけです。

吉末憲一氏の返事は、ハガキにちいさな字できちんといつぱいにかいてありました。滝川恵吉氏のは、広島県の地理とか歴史の本がよみたいとありました。韓利權氏は「もらったハガキを、いちにち五目ならべでもみるようにながめています」とかいていました。かれには家族がいないので、本のさしいれをするものもなかつたのです。こんな人にこそ、さしいれをするべきだが、岡本氏や坂本氏や天津せいさんがうつかり刑務所にゆけば、つかまるおそれがあつたのです。

小寺英雄氏は、ガリ版で『救援ニュース』をつくりてこれらの獄中からの同志の手紙をのせました。また古くからの活動家——吉川長太郎氏や舛井盛之氏、消費組合の人たち、起訴猶予ででた人などからもカンパをつのりました。プロレタリア文化連盟のサークルの人や朝鮮青年会の人たちからも、カンパがよせられました。

『救援ニュース』にはカンパ報告をのせたのですが、そのなかに、「○×××」とかいたのがありました。特高は起訴猶予ででている丸川昇一氏をとらえて「これはおまえだろう」とその『救援ニュース』をつきつけました。このために丸川氏は、起訴猶予をとりけされて、実刑をくいました。

広島郵便局の小川正一氏は局内の加藤精一氏、大村猛夫氏、岸本春登氏とともに機関紙『おいらのたより』をだしました。この機関紙は、職場のなかまの脱衣箱にいれたり、それぞれの家に郵便でおくつたりしました。

広島電鉄の組織には、郵便局集配手の小川正一氏が手をつけました。そのころ電鉄ではたらいていた井上栄氏のおもいでによれば、「郵便局の小川正一君が、いつもおなじ停留所にたつていて、私の電車にのりこんできた。客室のほうにせなをむけて、車掌台にたつて、私といろいろはなしをするのだ。電鉄のストライキのはなしなどもしたのだろう。なぜ小川君がわたしにめをつけたのかわからない。そのうちある晩、白島で関谷源一君をつれてきて、私にひきあわせた。そのあとは小川君とはあわなくなつて、関谷君とだけあうようになった」ということです。

昭和八年六月には、電鉄内に宍戸年春氏、高橋涉氏の同志ができて、三人で機関紙『スパーク』をただしました。井上栄氏によれば、横川線の電車にとびのつて、この機関紙をまき、とびおりてにげるということもあつた、いちどは特高の長谷部と山中が電車にのつていて、おつかれられたこともあります。

この六月には呉地区へオルグとして三戸信人氏がゆき、茂渡義人氏、山崎政高氏（いづれも3・5事件で起訴猶予）とともに、全協・呉地区オルグ会議をつくったとあります。（『大呉市民史』P.525）

呉地区についてはべつにかくことにします。広島地区の全協組織について、なおたどつてゆ

きますと、このとし九月には昭和ゴムの争議がおこり、黄五姓氏、田原勝次氏が応援にいっていましました。田原氏は社会大衆党系の合同労働組合にいましたが、党オルグの岡谷源一氏とレンラクをとつて、合同労組内で革命的反対派の活動をしていました。黄五姓氏は、さきに広島電鉄のストライキで検挙されましたが、このころ木材、土建の労働者のあいだで活動していました。

竹地定夫氏は、このころ広島市にかえつてきました。生れは広島県比婆郡山内村ですが、山口県宇都市で旋盤工としてはたらくうちに運動にちかづき、その後福岡県で検挙されました。起訴猶予になつて広島にかえつてきましたとあります。

一九三三年（昭和8年）一〇月、全協・広島地区協議会準備会がつくられました。黄五姓氏と竹地定夫氏は、それぞれ土建・木材オルグ、および金属オルグとしてはたらきました。

しかし広島郵便局、広島電鉄のほかは、10・30事件でつぶされた組織はたてなおしが、すすまなかつた。

山口県岩国市の帝國人絹岩國工場に、いくらか手がかりができたので、三戸信人氏が岩國にいつて、組織をつくることになりました。

一九三三年（昭和8年）八月には、コップ（プロレタリア文化連盟）広島地方協議会再建委員会がつくれました。作家同盟は、國本金夫氏（ペンネーム 堀哲二）が賀茂郡からでてきました。

プロレタリア科学同盟は、数本英次郎氏が再建にあたりました。このころ、新興教育同盟はプロレタリア科学同盟に合同することになつて、川尻小学校の先生で10・30事件で検挙され、起訴猶予に

なつていた山本タキエさんも広島市にて科学同盟、作家同盟の活動にはいりました。竹原地区の文学サークル、三次十日市のサークルも再建されました。これらのこととは、数本タキエ（山本タキエ）さんの『瀬戸内に生きて』にくわしくかかれています。

呉地区では、一九三三年（昭和8年）六月に坂田進氏、中村定男氏、木原吉人氏、小田正人氏、風早謙氏および、つたもとスミ子さんが検挙されました。

ました。

これはこのとし一月に、守田道輔氏を山口県の特高課が呉市で検挙してかえつた事件に関係のあるものです。守田氏は山口県の農民運動のくわけ。一九三二年（昭和7年）二月の山口県の一斉検挙をのがれて東京へでたが、三月に広島市へはいつて、10・30事件のあとに再建をもくろんだものです。中村定男氏の手記によれば、正式に共産党中央からおくりだされたオルグかどうかはわからないとのことです。守田氏は社会大衆党のルートをたどつて呉地区にはいり、大衆党呉支部かんけいの活動家と街頭細胞委員会をつくりました。守田氏は、失業救済事業の日雇労働者となり、守田氏とともに広島市から呉市にきた、つたもとスミ子さんは市内バスの車掌になつていました。

一月に守田氏が検挙されてから、この委員会は解散のようになつていたが、呉署でもこのメンバーはつきりとつかんでおらず、六月になつてはじめてこれらの人々を検挙したものです。このうち、つたものスミ子さんは広島女専卒。

一九三一年（昭和6年）二月、および六月、一九三三年（昭和7年）三月と広島市で検挙されて起

訴猶予になつていきました。

また社会大衆党系の人たちは労働組合運動、呉工廠首切反対闘争と活動するうちに、「満州事変」からの戦争反対闘争の波のなかで社会大衆党幹部のやりかたにあきたらなくなり、しだいに左翼運動にちかづいていったものです。しかし、一九三三年（昭和8年）四月広島市にはいつた党オルグ閻谷源一氏、六月呉市にきた三戸信人氏とは、まだ直接にレンラクはなかったわけです。

中村定男氏の手記によれば「この事件で三五日ばかりむされたあと、不起訴でてきて家にいるとき、山道繁君がきて、『竹地定夫さんがあいたいといっている』とレンラクしてくれた。竹地君とはまことにやくかしりあいだつたので、心よくあうことになりました。竹地君とレンラクがつてしばらくしたころ、全協の再建の会議を、たしか灰が峰のふもとの方の山の中でもつた。メンバーは竹地、山道、岡田（西条町の石屋）中村の四人であったとおもう。竹地君とは定期的に連絡をとつていたが、かれは呉にきてすぐ、町工場に旋盤工としてはいつてました」とあります。

このなかの山道繁氏は、山道襄氏の弟です。³ 15事件で、兄の襄氏が退学処分になつて呉にかえついたころ、中村定男氏、片岡義夫氏、池田八束氏などがその家にあつまっていたころは、山道繁氏はまだ中学生だったことです。かれはその後、広島師範二部中途退学。製紙工場職工。新興教育同盟、赤色救援会、反帝同盟関係。一九三五年（昭和10年）四月二日、大阪で検挙。六月二七日起訴（教育運動史関係資料）とあります。こ

のころは、呉で活動していました。

竹地定夫氏はまもなく、呉をはなれて広島市にかえりました。それは、竹地氏と中村氏がレンラクしているとき、私服の特高につかまって、交番

につれこまれて身体検査をされたが、竹地氏は交番の仮眠室のガラス戸のあいだに文書をかくして、身体検査にはなにもみつけられないのでのがれました。かれはすぐに、広島市へにげたわけです。

中村定男氏は、そのあと山崎政高氏、山道繁氏など、呉工廠労働者にはたらきかけました。【第二吟るクレーン】がだされたのもこのころです。

小寺英雄氏の手記によれば、「ハンマー突撃隊」は山道繁氏を中心にして、呉工廠を目標につくられたとあります。

『大呉市民史』（P.45）にはこのときのことをつぎのようにのせてあります。

（昭和8年）八月八、九日にわたり、工廠第一、第三門で「全協呉地区オルグ」の名をもつて、「労働強化反対」「四時間残業廃止、従業員大会をひらこう」のアジビラを撒布。呉署、呉憲兵分隊犯人厳探中。

八月一六日出勤中の工員に、「残業四時間制に賃銀増額」「海工会の主張する結核組合は、当然国家が全額負担すべきものだ。ダラ幹をたたきだせ」などのビラ。

（一〇月六、七日海連（海工会連合会）中央委員会、八日から広公会堂で同大会がひらかれるのをまえに、当局の警戒をくぐつて、七日早朝比較的てうすとみられる場末々々に「第一の『吟るクレーン』」は3・5事件で崩壊したが、陣営をあらたに……」「全従業員はダラ幹の大会を監視せよ」など五項目のビラを配布。前二回のビラと酷似して

おり、同一犯人とみる。一〇月八日も引続いて。とあります。こえて昭和九年一月二一日『呉日日新聞』の記事には

【呉にアジビラ 全協系の暗躍】

（一月）二〇日午前六時ごろ呉市和庄通清水通りにわたって、おりから出勤時の工廠従業員を

目標に不穏ビラ一〇枚を撒布した怪漢があり、該ビラには「呉工廠内第二吟るクレーン社」とあ

り、最近中央を追われて職夫募集にまぎれ呉市に潜入した全協系の分子の活動とにらんだ呉署特高係では直ちに犯人捜査の警戒網を全市にはつた。

とあります

七

【差別裁判 紛争闘争】

一九三三年（昭和8年）八月二八日、大阪で全

國水平社主催の全國部落代表者会議がひらかれ、高松地方裁判所でおこなわれた「差別裁判」の取消しをもとめて、全國的な闘争をおこすことを決定しました。

「被告が、じぶんの部落民たる身分をかくして、女をつれだして同棲したのは、結婚誘拐罪にあたる」と高松地方裁判所で判決したことに対しても、全国水平社がたちあがつたのです。「八月二八日」という日は、明治四年のこの日、時の政府が「部落民の称を廃して、一般平民と同様にそろうこと」という布告をだした日です。しかし身分差別はかえつてひどくなり、納稅・兵役の義務を

おわされただけです。「人間より上の者（天皇）がいるから、人間より下のものができるのだ」と全國水平社はいっていました。明治維新というものには、まさにそういうものだったわけです。

天皇の裁判所は、「差別裁判を取消せ」という人民の要求をいれるわけはありません。

「差別裁判を取消さねば、部落民の納税・兵役の義務を免除せよ」というスローガンをかかげて、全國の部落から代表を出して東京へむけて行進することを、全國部落代表者会議は決定しました。

「不当なる差別裁判の取消を求める非常上告を大審院におこなえ」という請願を、國会にするという「請願行進」のかたちをとつたわけです。

差別裁判糾弾闘争は、部落ごとに部落闘争委員会をおり、代表者を出して九州から東京まで國会への請願行進をおこなうこととしました。当時の商業新聞はその記事に「差別裁判」という文字さえひかえて「差別待遇撤廃」としかかけなかつた。當局からは、徒步行進は禁止する、在郷軍人が軍帽軍服をつけて参加してはならない、代表者は一県二名以内とせよ、途中の県で二日以上宿泊してはならないなどと禁止してきました。

【中國新聞】昭和八年一〇月五日づけには「10・

30事件」の発表記事の下に小さく、「差別待遇撤廃」の請願隊が、一〇月四日口襄駅についたという記事があります。九州を出発した代表団が、途中山口県の代表を加えてこの日広島県に入ったものです。同日夜は福島町で演説会をひらき、玖島三一氏、白砂健氏が広島県代表として加わり一〇月五日出発しました。玖島三一氏は、一九二七年七月三滝山事件で検挙されたが、転向せずにがんば

はじめに一戦前の広島県左翼運動について

りどうして、一九三三年（昭和8年）七月にでたばかりです。いつしょに検挙されたものははやく釈放されて、転向どころか共産党に反対する「解党派」にはいっていました。

玖島三一氏は、でてくるとまもなく、この差別裁判糾弾闘争にとりくみました。がり版すりそのほかのしごことは、全協にはいっている岩佐のところにもちこんできました。広島市福島町では玖島氏を中心に、青年たちが部落闘争委員会をつくりました。玖島氏が、請願隊に代表ででゆくと、全協の岩佐がこの闘争委員会の書記としてはいました。山木茂氏著『広島県社会運動史』には、全協員玖島が、全協員岩佐を闘争委員会の書記にいたとありますが、玖島氏は全協にはいっています。

玖島三一氏は、水平社青年同盟から無産青年同盟へ、そして労働農民党および労働組合評議会へ、労農党と評議会の解散のあとその再建運動中に検挙されたものです。

青年会のおもな活動家は、金弼東、周丁龍、金明文などの人たちです。青年会は、夜の小学校をつくっていました。子供たちに、よみかきはもちろんのこと、祖国朝鮮のことばや歴史もおしえました。朝鮮人にたいする差別があるし、家が貧しいので、昼間の小学校にゆかない子が多くつた。義務教育という法律はあつたが、朝鮮人の子に教育をうけさせることに、県も市もあまり熱心でなかつたといえます。

金明文氏がこの学校の先生でした。かれの経歴については新聞記事によれば、「昭和五年九月内地にきたる。新聞郵達をしながら、私立松本中学校を卒業。昭和七年五月ごろから反帝同盟広島地区の組織で活動」とあります。（【中國新聞】昭和9年8月20日記事）

反帝同盟というのは、「帝国主義戦争に反対し、植民地民族の独立を支持する同盟」の略語で、日本にもその支部がありました。

金明文氏はその後、昭和八年（1933年）七月共青同盟にはいり、在広朝鮮人青年会に参加し

つまるようになりました。

青年会としては、これらの労働者を全協の産業別の労働組合に組織するために、座談会や研究会を開きました。

金属オルグの竹地定夫氏や、土建木材オルグの黄五姓氏などが、このためにはたらいていました。

そのころは、朝鮮人労働者のいる鉄物工場など工場主あいての交渉がありました。竹地氏やときには党的オルグの閔谷氏までが、その交渉にかおをだしていました。

青年会のおもな活動家は、金弼東、周丁龍、金明文などの人たちです。

青年会は、夜の小学校をつくっていました。子供たちに、よみかきはもちろんのこと、祖国朝鮮のことばや歴史もおしえました。朝鮮人にたいする差別があるし、家が貧しいので、昼間の小学校にゆかない子が多くつた。義務教育という法律はあつたが、朝鮮人の子に教育をうけさせることに、県も市もあまり熱心でなかつたといえます。

金明文氏がこの学校の先生でした。かれの経歴については新聞記事によれば、「昭和五年九月内地にきたる。新聞郵達をしながら、私立松本中学校を卒業。昭和七年五月ごろから反帝同盟広島地区の組織で活動」とあります。（【中國新聞】昭和9年8月20日記事）

反帝同盟というのは、「帝国主義戦争に反対し、植民地民族の独立を支持する同盟」の略語で、日本にもその支部がありました。

金明文氏はその後、昭和八年（1933年）七月共青同盟にはいり、在広朝鮮人青年会に参加し

て少年団の組織をすすめていたとあります。

〔広高自治学生会〕

広島高等学校では10・30事件で停学処分をうけたいた生徒が、一九三三年（昭和8年）五月、停学処分をとられて学校にかえり、同志をあつめて自治学生会をたてなされました。

この年六月には、三戸信人氏とレンラクをとつていたが、三戸氏が呉地区にいったので、共青同盟員茂渡義人氏がかわってレンラクをとりました。七月一八日、茂渡義人氏が検挙されたので九月からは党オルグの関谷源一氏がレンラクをとりました。このころから、自治学生会の運動はにわかにいきおいをましたとあります。

『広高50年史』の学生運動のところには、九月をもつて広高自治学生会が確立したとあります。ここにみられる同志の名は、吉本康二氏、永島孝雄氏、岡本重康氏、永井健造氏、正田誠一氏などです。

一〇月には「アルジョア教育の欺瞞性と反動的役割をバクロし、広汎なる学生大衆を左翼化するために」、校友会の文科、理科の理事および各クラスの代議員の選挙には、自治学生会のメンバーを当選させた。また、寄宿寮の総務の選挙にも自治学生会のメンバーを当選させた。一一月には「広内共産党資金網」を確立したとあります。

一九三三年（昭和8年）一月、党オルグ関谷源一氏は上京、10・30事件後の再建のうごきにつ

いて報告しましたが、党本部広島地方対策会議の批判はきびしいものでした。「戦争反対のたたかいが、まつたくやられていない」というものです。

「転向は多くの青年の心をむしばんだ」とかい

八

〔転向〕ということ

一九三三年（昭和8年）六月には、佐野、鍋山たちの転向声明書がはでに新聞をかざりました。未決にいる同志たちにも、その転向声明書が印刷されてまわされました。

「共同被告につぐるの書」などとかいてあるよ

うに、獄中の同志たちの転向をさそうためにかいしたものでしよう。

しかし、たったこのあいだまで「帝国主義戦争絶対反対」「天皇制打倒」といつていたこれらのが、そろそろ「いま、おこなわれている戦争は、アジア民族を解放する進歩的戦争である」「天皇は國民尊崇の中心である」とかいています。こんなことは、政府の役人でもかきます。

「日本共産党は、尖鋭に崩壊するであろう」とかいているのが「共産党の指導者らしい」文章といふことになります。

玖島三一氏は、出獄まぎわにこの転向声明書をわたされたといいます。かれは「ハナもひつかけない」という態度でした。

しかし、広島地方の3・5事件、10・30事件で未決にある人たちも、この声明書をきっかけとして、転向上申書をかくものが多くでした。その

上申書は、プリントされて未決の同志たちにまわされました。どういうルートでそこにでたのか、それらの転向文書をみたことがあります。

「転向は多くの青年の心をむしばんだ」とかい

ている本もあります。

転向ということは、ここでは「心境の問題」ではなく、裁判所とのとりひきです。だしてくれるかどうかの「カケ」です。じぶんの心をいつわつて、転向の手記をかいてだしても、実刑をくえべかいた手記は、プリントされてほかの同志にまわされる。ほかのものの転向をさそう道具につかわれ、じぶんの転向は「のつびきならない」ものになる。

天皇制の裁判所は、治安維持法にかけられた人が公判廷で堂々と胸をはつて戦争反対をとなえ、戦争の張本人、天皇制の打倒をのべるのはこまるわけです。たとえ傍聴人をしめだした公判でも、非転向で法廷にたつ、そのことが大衆に大きな影響をあたえます。だからこそ「釈放するかもしれない」といつて転向をすすめるわけです。

一九三三年（昭和8年）一一月には党広島県オルグ会議は、解党派——大橋積、末元玄聰一派の排撃を決議し、ビラをだして組織内のスパイ、挑発を防ぐことにつとめたと、新聞記事にあります。

（中國新聞 昭和9年8月21日記事）

解党派というのは、佐野、鍋山らのまえに検挙され転向した連中が、共産党反対の立場でうございたものです。

党広島県オルグ会議のだしたビラによれば「かれらのいうところは、共産党中央部はスパイだ

らけだ、うつかりレンラクをとつたら検挙されるぞとか、党のオルグはハウスキーパーをだいてねることしか考えていない、革命のことなどあたまにない、などとデマをとばしている」とありますた。

かれらは、広島でダラ幹の組合でない、合法的な左翼の労働組合をつくろうということも、となっていました。ダラ幹の組合とは社会大衆党系の合同労働組合のことです。また広島消費組合は、社会大衆系の購買組合と合同すべきだと、消費組合の役員や組合員についてまわっていました。

山木茂氏の『広島県社会運動史』には、まちがつた記述があります。これによると、

「広島消費組合と全協とは、二重組織になつていた。合法的な左翼労働組合をつくるかどうかで全協内で意見がわかれ、これがひいて消費組合内のゴタゴタになつた」とあります。

広島消費組合の役員で、全協の組合員や役員になつていたものはありません。全協の役員やオルグで消費組合の役員になつていったものもありません。全協の会議で「合法的な左翼労働組合」などという、あやしげなものを持つるはなしをだしたものもありません。

筆者が、全協広島地協の再建のときから関係していますし、会合がたいてい筆者のいるところでひらかされました。消費組合の会合にもよく組合員として、出席していました。

いわゆる広島消費組合のゴタゴタというのは、そんなことではありません。

「解党派」といわれる連中が、消費組合の常任をひきずりおろそくとしたこと、組合と左翼運動

との関係を、たちきることにねらいがあったのです。そのために彼等は、消費組合の役員などのあいだをコソコソとまわって「このままでは、消費組合は弾圧されてつぶれる。社会党系の購買組合と合同して、もっと幅広い消費組合運動をするべきだ」といつていました。

「ダラ幹の組合でない左翼の労働組合をつくるう」というものと、「社会党の購買組合と合同しよう」というものが、おなじ「解党派」なのです。かれらは、社会大衆党の事務所によくあつまつていました。

山木茂氏の『広島県社会運動史』より)

九

「4・26事件」

特高警察の追及も、一九三三年（昭和8年）の
おわりごろからきびしくなりました。

『中國新聞』昭和九年八月二〇日付（一斉検挙
発表時の記事）によれば

「郵便局集配手小川正一の行動につき、昨年末
ごろから西署特高係員は尾行をつづけ探索して
いたが、翌年（昭和9年）二月ごろのある夜、同
西部の某橋下に身をかくして小川を監視中、同
所につないである河舟の船頭さんがあやしみ泥
棒、泥棒と連呼した」

とあります。

おなじく小川正一氏を尾行して観音町の空家に
かくれて監視中の特高刑事が、泥棒とみられて交
番につき出されたとその新聞は書いています。

高橋マツ子さんは昭和八年秋にオルグの指示で、広高グループの応援をえて専売局の組織づくりにかかりていましたが、昭和九年はじめオルグの関谷氏から「検挙が近いから地下にもぐつてくれ」といわれました。広高生吉本康二氏から、京都の大学生（広高の自治学生会メンバー）の家を教えられました。彼女はいっただん呉にゆき、森島守人氏の家に身をよせて近くの職場でアイロンがけの仕事をしていました。広島で一斉検挙がはじまり、山道繁氏が呉にのがれてきたので、いつしょに京都に行き、京大生の家で吉本康二氏ともおちあいました。（高橋マツ子さん手記、『新聞集成廣島女性史』より）

この二月、「帝國主義戦争絶対反対」の共産党広島県オルグ会議の赤ずりのビラが、広島市内にいたるところの電柱にはりだされました。

呉工廠へのビラまきもつづけておこなわれました。ビラのガリ版すりは、たいてい広島市のアジトで小寺英雄氏がやって、呉におくつたものです。ときには関谷源一氏が呉にもつていて、まいたものがあります。工廠の出勤どきの人ごみにまぎれてまくのですが、封筒にいれてわたすと、たいでいポケットにいれて工廠にはります。脱衣箱のところであけてみるだろうというねらいです。また工廠の従業員の多い住宅地で、一軒一軒戸のすきまへビラをいれてまわったこともあります。呉でビラをまいてから広島市にかかるものは、山のなかにはいって、夜なかかあがたに、あるいはかえりました。呉線の列車にのるのはあぶなかつたのです。列車には移動警察の刑事がのつていて

ました。

一九三四年（昭和9年）三月、作家同盟広島支部の國本金夫氏と山本タキエさんが、憲兵隊に逮捕されました。これは県警の特高課とは関係なく、憲兵隊だけのみこみでやつたものです。戦争反対のビラがはられたため、たまたま憲兵隊が「不審なもの」をつかまえたわけです。しかしまもなく釈放になりました。

広島から上京した三戸信人氏、加藤郁子さんも警視庁に逮捕されたことを、東京の同志から知せてきました。

『中國新聞』（昭和9年8月20日）広島県からの手配により、本年一月加藤郁子を、四月一〇日三戸信人をそれぞれ逮捕、両名の身柄をひきとつて取調べの結果、一斉検挙の確信を当局に抱かしめた。党オルグの関谷源一氏も、あとを小寺英雄氏にたのんで、広島をはなれるしたくをしていました。また、広高自治学生会も、中心になる活動家はおもてにたたず、検挙をさけるようにしました。吉本康二氏は、広高生の検挙のときはうまくのがれて、その後の再建運動にとりくみました。

一九三四年（昭和9年）四月二六日からはじめた、4・26事件の検挙は、新聞によれば西署が四月二六日、関谷源一氏のアジトをおそつたが、もぬけのからだつた。しかし非常線をはつて己斐駅ちかくで逮捕。このほか、西署で逮捕したものは救援会の小寺英雄氏、大塚猛夫氏。全水の玖島三一氏、神崎宇一氏。消費組合の達木幸太氏。朝鮮青年会の周丁童氏、金明文氏、鄭禹甲

氏、李敬道氏、羅振玉氏。そのほか、加藤精一氏、三宅末一氏などの名があります。

「その再建運動」

宇品署は、千田町のアジトでプロレタリア文化連盟（コップ）の数本英次郎氏を逮捕。北櫻町のアジトで、共青同盟員李桂堂氏ほか数名を逮捕。五月一七日、賀茂郡東高屋村で國本金夫氏、山本タキエさんを逮捕しました。プロレタリア文化連

盟関係は二〇名逮捕されました。広島高等学校の検挙については、四月二六日、広島高校生李重春氏ほか数名が検挙されました。が、六月三日、正田誠一氏を逮捕、六月二十四日、自治学生会指導員一名逮捕され、広高の教授の中から自治学生会の機関紙『広高戦士』がみつかりました。これまで、特高が知らなかつたものだという。六月二十五日、広島市内に住むものだけをえらび、岡本重康氏ほか三名を逮捕。六月二六日、寄宿生のみ四名を学校の第一时限に、教室から拘引。その後一九名（うち卒業生五名）を引致。教授数名も東署によばれて、とりしらべをうけたとあります。

呉市の検挙については『大呉市民史』に、「四月二九日午前五時を期して署員総動員。それぞれ、ねこみをおそって、川原石町、中村定男ほか二〇余名を一斉に検挙」とあります。

中村定男氏によれば、山崎政高氏もこのとき検挙されて警察の留置場であつたが、彼から広島の合同労働組合の田原勝一氏も検挙されたことをきかされたそうです。

中村定男氏は、四月二九日の呉地区の一斉検挙では三〇日ほど呉署におかれあと、釈放されました。そこへ山道繁氏が「広島高校生の吉本康二君があいたいといつている」とレンラクしてきました。

吉本、山道、高橋マツ子の三人は、「4・26事件」の一斉検挙をのがれて京都にゆき、のち大阪につつっていました。

山道氏、高橋マツ子さんは、大阪で活動するところになり、広島県の再建のために、吉本康二氏が、かえることとなりました。まず山道氏が呉にかかり、遊廓入口にあつた、餅屋の森島守人氏のところに、吉本氏の下宿をたのみました。森島守人氏のところには、高橋マツ子さんも広島からでて、一時身をよせていてそれから京都へいったのです。

吉本氏は呉にくると、のこつている同志たちに連絡をとつて再建をはかりました。小寺英雄氏（4・26事件で検挙）の弟、渡辺信樹氏とは、宮島へいつて直接連絡しました。広島市へは中村定男氏がかわつてゆきました。広高生との連絡もあつたが、松本徹とも二回ほど連絡しました。はじめてあう男だったが、中村氏は徹のそぶりに疑いをもちました。かえつてから吉本氏に「徹には気をつけたほうがよい」といつたが、人のよい吉本氏は松本徹を疑わなかった。大阪へも彼は徹をつ

れてゆきました。

広島県へ、関西地方委員会からオルグをおくるほしいと、吉本氏はたのみにいたわけです。しかし、関西地方委員会にはオルグをおくる力はなく、吉本氏はむなしくかえつてゆきました。松本徹は、ひと晩山道繁氏と高橋マツ子さんのいるところではなしていったが、マツ子さんは徹の態度に疑いをもつたという。コミュニストらしいまじめなところはなく、関谷源一氏のことをわるくいつたり、エロ話をしたりしたという。「徹はあやしい」とマツ子さんは山道氏にいったそうです。

吉本康二氏は、「多数派」の線で広島県の組織を再建しようとしたものでした。
山辺健太郎氏の『社会主義運動半世紀』によれば、昭和九年の春、全農内党グループの宮内勇氏や、消費組合内の党グループの山本秋氏らが、当時の共産党中央委員袴田里見に反対して（もつとも袴田も今のようにくさってはいなかつたが）、「多数派分派」をつくり、関西地方委員会の人々もこれを支持したとあります。当然、吉本氏もこの線で動いたわけです。

もつとも、あくる年7月のコミニンチルンの批判で、「多数派」は解散。しかし、それに先だって、

たつたひとりのこつていた共産党中央委員袴田里見が三月に逮捕されました。その後、中央再建委員会準備会がつくられ、その大阪のメンバーに広島の山本正一氏や平原甚松氏が連絡をとることになります。

一九三四年（昭和9年）九月、呉地区を中心に一斉検挙がおこなわれました。しかしこれにさきだつて、高田郡吉田町付近の南小一氏を中心とし

た「渡政突撃隊」のグループや、佐伯郡廿日市付近の桧垣義郎氏（変電所技師）を中心とした、宮島麥電所員、農村青年よりなる党支持のグループ

を八月、九月にわたつて検挙しています。（『広島県労働運動史』広島県労会議編P407、「思想月報」第11号）

呉地区的検挙については、『大呉市民史』につきのようになっています。

「……つづいて県特高課千葉警部来呉に呉署色めき、翌朝五時を期して呉署総動員。川原石町中村定男ほか20余名の男女を一齊検挙、呉署の武道場に留置。このなかには某中学生、美容師（22）、芸南バス車掌（19）もあり、呉を中心と再組織をすすめていたもの」とあります。

中村定男氏によれば

山崎政高君とは4・26事件でもいっしょだったが、こんども武道場でかおをあわせた。また、吉本康一君がしばらく間借りをして、森島守人氏の妹のバス車掌さんも、留置場のほうにいるのを見た。これは相当広い範囲で検挙しているなどおもつた。吉本康一君が無事であることをいのつたが……のちに特高の取調べのとき、かおをあわせた。

といつています。
つづいて『大呉市民史』には

呉市塩屋町 ラス張り工 中村定男 同菊池町

大工見習 山崎政高の公判を昭和一〇年五月六日。とともに求刑二年。転向をみとめて、判決同

非転向のため判決同の実刑。八月三〇日控訴審も同。

とあります。吉本康一氏は腸結核となり、執行停止で出獄、まもなく死亡しました。なお、「4・26事件」でききに検挙された、郵便局員小川正一氏は、昭和九年七月獄中で自殺したとあります。（『中国新聞』昭和9年8月20日づけ、「4・

26事件」の発表記事）

『労働雑誌』読書会事件

中村定男氏は、執行猶予ででてくると、まもなく広島市の社会大衆党系の一般労働組合の常任となりました。組合事務所に、田原勝治氏や風早謙氏がねとまりしていたので、そこにころがりこんだわけです。

この組合事務所に、よくかおをだしていた山本正一氏が、大阪でだしている『労働雑誌』をもつてきて、この読書会をやろうといいました。山本正一氏は製材工で、広島で昭和六年全協の組織をつくるとき、津崎木材などの木材のオルグとしてはたらいていました。その後、大阪地方の木材工場にいたらしく『大阪木材ニュース』というのをくれたり、大阪のことをよくはなしていたという。

中村定男氏も『労働雑誌』は、大阪の川上貫一氏のだしている合法的なものだから、これならよからうと、読書会をつくることに賛成した。そこで山本正一、中村定男、および広島市から呉工廠にかよっている製材工とその弟の四人ではじめた

ということです。

一九三五年（昭和10年）一二月、一般労働組合事務所にとまつて田原勝治、風見謙、中村定男ほかの四～五人が逮捕されました。山本正一氏は、ほかのところで逮捕されました。

中村定男氏が県警の留置場にはいつてみると、元水兵の平原甚松氏がはいっていた。「なんでやられたか、わからん」と平原氏はいったそうです。平原甚松氏は、大衆党の細田伊太郎氏の市会議員選挙の応援にきていたので、中村氏はかおをしていたわけです。

これは、山本正一氏、中村定男氏とはべつに、平原甚松氏が、大阪とレンラクをつけて、呉の田中豊氏、関口春夫氏などとグループをつくつていたものです。平原氏が社会大衆党の細田氏を応援したのは、大阪で人民戦線方式で社会大衆党の選挙候補者を左翼の組合も応援して当選させたのにならつたものでしよう。

この事件で、中村定男氏はまえの判決、「二年の懲役、四年間の執行猶予」の執行猶予をとりけれど、あらたに二年の刑をくわえ、合計四年の実刑となりました。

山本正一氏と平原甚松氏のうごきについて、「思想月報」（1937年11月第41号）につぎのように、のっています。（広島県労働會議編『広島県労働運動史』別章、戦前における県下の共産主義運動）

広島県下においては昨年十二月五日、山本正一を中心とする旧全國労働組合同盟系の広島労働組合関係者と、平原甚松を中心とする街頭分子一味、合計一一名を検挙し、そのうち五名はまもなく警

察の手により釈放したり。右広島労働組合の中心分子、山本正一にありては、かつて全協活動により起訴猶予処分をうけたことのあるものなるが、当時は非法戦術に不満をよそおうて待機しておりたるおりから、昭和十年十一月ごろにいたりてコミニテルン七回大会の決議の影響により、我国内の運動戦術が自己の所信をうらがきするにいたるを知るや、この新方針に準拠しふたび党活動にいらんことを決意し、まず広島労働組合を中心として各種労働争議の指導ならびに在広無産団体共同闘争の協議等、無産戦線の統一運動に活動し、

なお、昭和十一年十月上阪して、党中央再建準備委員会分子たる大阪木材労働組合常任書記長壁民之助、労働雑誌関西支局常任書記岩間光男、大衆政治経済関西支局責任者清水巳之助らと連絡し、同人らの指導をうけて帰広後、刑執行猶予中の同志 中村定男と協力して『労働雑誌』等の合法雑誌による啓蒙活動ならびに反戦運動等の活動をなしありたること判明したるにより、山本正一は本年五月二日、中村定男は同月七日いづれも広島地方裁判所に起訴、予審に廻付したり。（もつとも山本正一はその六月一八日病死したるにより同人にたいしては同月三〇日公訴棄却の予審決定ありたり）

一方街頭分子平原甚松にありては、昭和十一年二月十一日懲役三年六月の前刑を仮釈放されて一時郷里にかえり静養中、同年六月二六日仮釈放期間の満了するや、ただちに就職口依頼の名目をかけた上阪し、森本亮一、長壁民之助、仲瀬美雄等の党中央再建準備委員会分子としきりに從来会合したるうえ帰郷し、そのご各種の労働争議の援助指導、あるいは社会大衆党候補者の選挙運動応援あるいは水平社支部組織の結成等のため日夜奔走し、かつ片岡義夫、田中豊、山崎政高らの旧

とあります。

『労働雑誌』

一九三五年（昭和10年）四月、加藤勘十氏らによつて創刊。加藤氏はアメリカに渡り、ひそかに加藤野坂会談をおこない、日本における人民戦線結成について協議。一九三六年（昭和11年）一月、『労働雑誌』関西支所が、川上貫一氏によってつくられる。一九三六年（昭和11年）一二月『労働雑誌』に弾圧。共産党中央再建準備委員会のメンバー検挙。

「新協劇団後援会事件」

広島県における最後の一斉検挙は、一九四〇年（昭和15年）八月一九日の大藤軍一氏を中心とした新協劇団後援会広島支部の一斉検挙です。みんな宇品署で正月をむかえたというから、ながくお

同志としばしば会合して、なんらか策動しあるうたがいありたるにより、この一味をも検挙したものなるが、取調べの結果、平原甚松の行動については党支持の証左をうるにいたらざりしため、五月七日広島地方検事局において不起訴処分に付し、

ただ片岡、田中、山崎の三名については、平原とは別個に「建設会」なる文化団体の結成準備または『労働雑誌』による啓蒙運動等、軽微なる事実をみとめたるにすぎざりしをもつて、これら三名は他の事情をも考慮のうえ五月七日広島地方検事局において起訴猶予処分に付したり。

かれたわけです。

大藤軍一氏のみ起訴されて、三年の刑をうけて
一九四四年（昭和19年）九月まで獄中にいました。

新協劇団後援会広島支部ができたいきさつは、
つぎのとおりです。

一九三四年（昭和9年）の四月二六日事件で広
島消費組合の常任、迫舛盛登氏が検挙され、消費
組合本部から津田和治氏がきましたが、同氏は広
島に新協劇団後援会の組織をつくる考えをもって
いました。そのころ田中町にロンド書房をやって
いた、大藤軍一氏としりあい、津田氏が広島市を
ひきあげるとき、新協劇団後援会広島支部をつく
ることを大藤氏に頼んでゆきました。

島崎藤村の「夜明け前」の脚本朗読会を医師会館
でひらきましたが、そのキャストはつぎの人々で
す。

青山半蔵——嶋常次郎（3・5事件）

妻　お民——大前三枝（中國新聞社勤務）

寿平次——村上四郎（3・5事件、印刷工）

牛方　——井上　栄（4・26事件）

宮沢寛斎——中沢晴海（元広島消費組合理事）

おふき——山口とし子（広島女専卒教員）

金兵衛——才野力三（青年）

ナレーター——田谷春夫（3・5事件印刷工）

〔注〕中沢晴海氏はプロレタリア美術運動で丸木

位里氏らと活動、のちに消費組合活動、原爆死。

山口とし子さん（故）は戦後、大教組婦人部長。

岡本（福本）菊次郎氏夫人

一九三六年（昭和11年）五月、広島地方にも思
想犯保護観察所がおかれて、治安維持法関係者は「保
護觀察」をうけることになりました。あくる年七月
には中国との全面戦争となりました。「北支」の

占領地へ、思想犯保護観察所の斡旋で「宣撫官」
としてでてゆく者もありました。この年の暮から、
あくる年、一九三八年（昭和13年）はじめにかけ
て、非転向のため刑期満了までおかれた連中が、
でてきました。「夜明け前」の朗読会がひらかれた
のはこんな時期でした。

大藤軍一氏はそのまえから、映画サークル活動
などで若い人たちに影響をひろげてゆきました。
そのころ文化運動はことごとくつぶされていま
した。もちろん労働組合などは、かげもかたちもあ
りません。

広島のようならくに仕事のないところで「保護
觀察」されているより、東京にてて工場にはいつ
たほうがよいと、みがるなものは、広島をはなれ
ました。

一九四〇年（昭和15年）八月、新協劇団、新築
地劇團に解散命令がだされ、広島の新協劇団後援
会のメンバーのおもな人々が検挙されました。嶋、
村上の両氏は、仕事で中国へいっていたので検挙
をまぬがれました。責任者大藤軍一、井上栄、中
沢晴海、田谷春夫の各氏、青年では才野力三氏、
女では大前三枝さんです。お盆すぎの一九日に宇
品署に留置され、年末に家族の中沢氏は釈放
され、あとは留置場で正月をむかえたという。

「3・5事件」で三年の刑をおえて出た大藤軍一
氏は、この事件でふたたび三年の刑をうけ、敗戦

直前までおかれました。山口とし子さんなど、広
島市にかえつてみると、党のビラは一枚もはつて
ありませんでした。

戦前の同志たちの手記をあつめて、残しておこ
うとおもったのは、一九六九年ごろからです。戦
後、同志たちは各地でアメリカ占領軍のもとでの
レッドパーティや反戦運動、広島でひらかれる原水

島女専グループで先生をしている人々は、転任手
続きをとつて広島をはなれました。

一九四一年（昭和16年）四月八日、「広島グル
ープ」という大そうな名をつけて警視庁特高課は、
広島から東京にてている者を検挙して、都内の各
警察署に入れました。しかしながらでてこないの
で、一ヶ月くらいで釈放しました。治安維持法と
いうものは、だれを何日間ひっぱろうがさしつか
えなかつたのです。「ショーコ」というものは、ひ
っぱつてからこしらえればよかつた。

寺尾一幹氏は「広島グループ」とは別に、研究
会をやつていたということで、仲間たちとともに
検挙され、敗戦直まで刑務所にいれられていま
した。

戦前の広島県における左翼運動について、その
あらましをかきました。

広島市は一九四五八年六日の原子爆弾で、砂
漠となりました。すでに広島市をでて、ほかにす
んでいる同志たちは、敗戦とともにいちはやく活
動をはじめていましたが、一九四五年一二月に広
島市にかえつてみると、党のビラは一枚もはつて
ありませんでした。

爆禁止世界大会へのとりくみ、そのほか、いろいろの生きかたをしてきました。しかし、もういちど「原点」にかえって若い日の広島での左翼運動について、語つてもらいたかったのです。戦前の左翼運動について、語ることは、われわれのつとめであります。

はじめに「同志のおもいで」(岩佐)をガリ版刷

りにして、同志たちにおくりました。また、「日本反戦詩集」という本のなかに、「聳えるマスト」という詩があるのでかきぬいて、呉の水兵だった人たちに問い合わせました。それらの人から多くの手紙がよせられました。きびしかった海軍でのことが忘れないでしょ、「胸せまる思いです」

とかいってきた人もあります。

一九七一年一月一日、旧労農党書記渡辺信樹氏、

一月二日旧海軍工廠旋盤工重田安一氏をたずねて、聞き書きをとりました。

これらは、そのたびごとにガリ版に刷つてみんなにくばり、あとで一冊にとじるため、一〇〇枚くらいづつのこしておきました。

一九七三年三月、小寺英雄氏から「10・30事件後の再建活動」という手記をわたされたので、これをガリ版刷りとして、これまでのものといつしょに一冊にとじることにしました。これも、同志たちにおくりました。

なお、残る同志の手記を待つあいだに、呉市立図書館に土、日曜の連休を利用して神戸からかよつて戦前の新聞とじこみから左翼運動の記事をかきぬいてゆきました。『呉日日新聞』はそのままとじてありましたが、『中國新聞』は、広島の本社にも残つていないので、呉図書館のものをひきあ

げてゆき、そのかわりにマイクロフィルムがおいてありました。

「3・5事件」の記事のマイクロフィルムを映してゆくうちに、同志たちの顔写真がうかびあがりました。これはコピーがとれます。「10・30事件」発表記事のマイクロフィルムからは、花野フジエさんの顔が浮かんできました。それらのコピーをみんなにみせてあるきました。「みんな若かつたんだなあ」といった同志もありました。「前岡さんの顔ですね」と、なつかしそうな声をだした女の同志もありました。

つぎに呉にいったとき、「4・26事件」のマイクロフィルムを映つしてゆくと、同志たちの顔写真

がなんんでいるなかに、私の顔がありました。「こういうところにおつたんか」といいたいような気持でした。

このころ、中村定男氏も手記にとりこんでいました。「老眼鏡をふたつかけて書いている」と、呉の同志がいつていました。

新聞記事の書き抜きと、中村定男氏の手記とはガリ版刷りとして、一冊にまとめました。「一九七六年六月二七日 プリント」とかいてあります。

一九七九年(昭和54年)九月数本タキエさんの手記『瀬戸内に生きて』が出版されました。原稿の段階で、運動に関係あるところは、こちらにいれさせてもらうことになりました。

業員組合時代の野村秀雄のことなどいろいろと書き書きをとることができました。

一九八一年の暮れから一九八二年二月にかけて、福山市の野田清一氏の手記が、数回にわたつて送られてきました。広島市から福山地区に全協の組織をつくるためにいった、花野(前岡)フジエさん、岡田茂美氏のこと、福山労働組合のことなどが語られています。

一九八二年一月には、寺尾一幹氏から呉市での活動についての手記が送られてきました。

一九八三年一月には、上京して寺尾一幹氏から、広島高校時代の活動について聞きとりをしました。

一〇年以上にわたったこのしことも、これでひとまず終わることとします。

その運動にはいるとき、多くの同志は一〇代のはじめ、なかには一〇代のものもいました。検挙された水兵は二〇歳のものがあります。

おわりに、若い同志たちの健闘をいのります。いつの日か、その半生をふりかえって、豊かな手記が書かれることをねがっています。

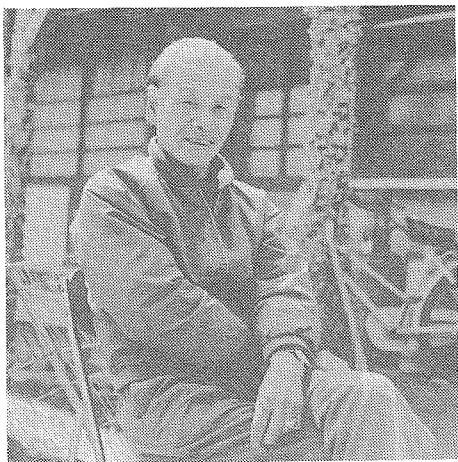
一九八四年五月 神戸にて

岩佐 寿一

一、昭和七年、3・5事件、
10・30事件まで



昭和 7 年 3 月 5 日 「3.5 事件」 を報道する



労農党の思い出

渡辺信樹談

私は明治四〇年（1907年）八月三〇日宮島

でうまれた。

兄の小寺英雄は東京にでていて関東大震災にあ
い、大正十二年（1923年）宮島にかえつてき
たが、私はそれといれちがいに東京にて築地の
自動車学校にはいり、昭和二年（1927年）徴
兵検査のため帰つて、広島市の南竹屋町、シンド
オートバイの工場ではたらいた。

そのころのオートバイは単気筒の大きなシリコン

ダで、今からみればおそまつなものだ。ガタガ
タと震動も大きく、エンジンの廻転もおそかつた。
シンドでは、外國のトライアンフをそつくりまね
たようなものをつくっていた。クラッチは、円板

に小さな穴をたくさんあけて、その穴にコルクを
つめてあるのだが、そのコルクをシンドにおさめ
ているのが、東洋コルクという工場。そこのおや

じが、のちの東洋工業の社長だ。

そのおやじが私に、しきりとオートバイのこと
について聞く。私はコルクのことについて質問し
たものだ。いまから思えば、彼はそのころから
オート三輪の製作にのりだすねらいがあつたのだ
ろう。その後、東洋コルクからシンドの方に、
いっしょにやろうという話をもちこんできたが、
シンドの方でことわつたということだ。

そのころはオートバイとしては、トライアンフ
のほかにインディアンとかハーレイ・ビットソンな
どがあった。秋の「招魂祭」のオートバイレース
で活躍したものだ。

シンドの工場のちかくに労農党（労農党広島支

部のこと、以下おなじ）の事務所があつた。労農
党の演説会もよく開かれていた。そんなことから
私も労農党にちかづいてゆくようになつた。

こんなこともあつた。労農党のビルに、佐竹新
市の住所が書いてあつたので、たずねていった。

たしか丹那（タンナ）だつたとおもう。しかし、
さがしてもわからない。それから、早川義則の家
をたずねていつた。ところがあくる日ゆくと、ど
うも話がおかしい。きのうイエスといったのに、
きょうはノウというようなぐあいだ。こいつは二
重人格じやなかろうかとおもつた。義則と義彦と
いう、双子の兄弟とは知らなかつた。

つきあつてみると、性格はまるでちがつていた。
義則の方は、演説もうまいし、はでにうごくが、
義彦の方はめだたないがまじめで信頼のおける人
間だつた。

玖島三一君は私が労農党にちかづいたころまで
に活動していたが、かれは自分の職場があるから、
いつも労農党支部の事務所にきているわけではな

かつた。

寺尾一幹君は広島高等学校の生徒で、ときどき事務所にきていた。広島高等工業の生徒で、よく事務所にくるものがあった。おかあさんは産婆さんだといつてていた。

労農党の事務所は、あちらこちらよくかわった。警察の高等係——まだ特高係はなかつた——が家主に圧力をかけるから、ひとつところにながくいられない。ときには私の下宿している部屋においてることもある。佐竹が平塚町の土手に家をかりてそこを事務所にして、そこにはながくいた。昭和三年の一月か二月ごろ、私は労農党広島支部の書記になつたとおもう。

そのままの年、昭和二年全国水平社の第六回大會が、広島市の寿座でひらかれた。私は入口で、労農党のビラを無産者新聞をやつてくる代議員にくばつた。大会がはじまる二階にあがつて、傍聴席でみていた。

「労農党の旗のもとに」という一代議員の発言で、アナ系とボル系にわかれてもうまつたことはおぼえている。それが、大会の一日目だったかたか、二日めだったか、おもいだせない。

〔注〕昭和八年玖島三一氏が、その当時のことを語つたところでは、岐阜県の代議員が「労農党の旗のもとに」といつたために、アナ系の代議員が「ちがう」「ちがう」とさけび、まんなかの通路をはさんで、アナ系とボル系にさつとわかれ、にらみあつた。みごとにふたつにわかれただといふことだ。

私も中島正一は、労農党広島支部の書記として働いていたが、そのほかに、中本円一が半書記というかたちではたらき、大杉という活動家もいた。党員は、もちろん党費を出すことになつていていた。

党員証に、党費を払つた月は印紙をはつた。印紙にはキュー・ピーかなにかの絵が書いてあつた。しかし、あまり党費を払つたものはなかつた。だから、みんな食うや食わざだつた。

おもな收入は、演説会の入場料だつた。お寺や新天地の小さな芝居小屋などをかりて、演説会をひらくとすわりきれないほどはいつた。いまから考へると、金を払つてまで、どうしてあんなに演説会にはいったのか、ふしきな気がする。いまごろは演説会にどうして人をあつめようかと苦労するが。

労農党の事務所に出入しているものは多かつたが、そのなかに、どうもスパイではないかと思われる奴がいた。Kという名にしておく。そこでKをためしてみると、片岡重介がこういうことはうまかつた。比治山で集会をひらくという、ウソの計画をKにきかせることにした。

Kがやつてくるのが見えたので、ウソの会議をはじめた。「比治山にあつまつて……」「おまえはあれをやれ、おまえはなにを持つて……」と、Kにきこえるようにした。Kはきいていたが、何くわぬ顔ででていつた。

あとで比治山をのぞいてみると、高等係の私服がうろついている。「やっぱり奴があやしい」ということになつた。(これは一月一一日反建國祭のことだ)

労農党は、合法政党とはいっても、警察の取り締まりはきびしかつた。濟南事件反対のビラをまいても、活動家がねこそぎひっぱられた。

私たちは、そのころ共産党は広島のどこかにあらだらうと、漠然とかんがえていた。しかし、だれがその党員であるかも知らなかつた。佐竹新市などは、合法政党一本槍でゆくというものであり、または表面合法的な労農党のカンパンをかけて、うらで非法活動をしようというものもあつた。

片岡重介はその中間といふところであつた。大山郁夫が呉にきて(労農党呉支部発会式)演説したが、共産党と労農党のちがいについて、「共産党は労働者の政党であるが、労農党は労働者と農民の政党である」といつたが、それ以上の説明はしなかつた。

〔一九七一年一月一日と一月一七日、聞き書きをなお、ひきつづいてつきのよき書きをとりました〕

ある日、東京からきたといふ人と高津正道と私と三人で、あるきながら話したことがある。あくる日だつたか、末元義彦が私に「きみを、共産党員にスイセンしておいたよ」といつた。世間ばなしのようないいかだつたし、私もそつかと返事をしただけで、べつにあらたまつた感想といふのはなかつた。しかし、この入党のことは、それきりでたちぎえになつてしまつた。

末元義彦というのには、末元玄聰の兄で、同志社大学にいるころ社会科学研究会にはいつていたと

いう。3・15事件で退学処分になり、広島にかえついたのだと思う。労農党事務所で研究会といふか読書会というか—その会で「共産主義のA B C」などを、テキストにして教えてくれたことがある。

3・15事件のおもいでは、つぎのようなものだ。

朝はやく労農党支部の事務所の戸をたたくものがある。二階の窓をあけてみると小路の中までボリ公がいっぱいいる。これじやあ逃げられないと戸を開けた。

そのときは、東署にいれられたが、なにもないからあくる日、かえってきた。

東署には、上岡利夫や筒井のまつちゃん（松三郎）もきていた。早川は家からつかまってきた。佐竹は家でやられたか、事務所でやられたか思いだせない。片岡重介は三條か長束に家があつたが、東署にきていたから事務所にとまっていたのかかもしれない。

その3・15事件のあと、労農党の吳支部発会式があつたとおもう。四月になつてからでは花見などで、人のあつまりもわるかるうと、三月の末にしたのだとおもう。

一九二八年（昭和3年）四月一〇日、労農党など三団体に解散命令がでた。

その日があくる日の夜、新聞記者が談話をとりにきた。私がとりついで早川に知らせた。早川は「なんだ解散命令をうけても、あくまで、たたかう」というような勇ましいことをいつたが、記者は帰つていったと思うと、すぐひつ返してきた。「どうも、ぶさいくな記者として」といつつ、

今はなされた人はどういう名前の人でしようかときいた。そんなことをおぼえている。

5月のメーデーのとき、私と池松とが検束された。津崎製材所の争議に負け、みんなバラバラになつていたので、レンラクにいついて検束されたのだ。

濟南事件のおこつたとき（1928年5月8日）

日）、廣島高等師範の中国人留学生がレンラクにきて、「廣島高師の学生が、濟南事件反対のビラを校内にまくから応援にきてくれ」といった。私たちはすぐ高師にいつて、ボリ公がこないようにピケをはつた。

私たちも、廣島本通りで濟南事件反対のビラをまいた。そのころ、宇品の港から戦地におくられる兵士は、船を待つあいだ廣島市内の旅館や、民家にとまる。夜は本通りを歩いているものが多い。それらもねらって、本通りでビラをまいた。このため事務所にいた常任書記たちは、西署に総検束された。労農党は、解散命令をうけたが、党再建のために事務所にがんばつていたわけだ。

ビラを印刷した袋町の活版屋のおやじもひっぱられた。「だれが印刷してくれとたのみにきたか。言え」というわけだ。ほんとは私がたのみにいつたのだが、みんなをズラりとならばせて「首実見」の結果、活版屋のおやじが、あの人だとさしたのは、井上豊だつた。首実見なんていいかけんなものだ。井上豊は、おかげで責任者として起訴され、あとでこぼしていた。

労農党の再建までは長くかかつた。その年の二月、なげなしの金をかきあつめて、早川義則を

そこにうろついていてひっぱられた。「宮島の管弦祭がおわるまで、おかれるかもしけん」といつていた。かれらスリにとつて、かせぎどきなのだ。
またこんなこともあつた。警察のブタ箱のめしは、おかげはつけものだけだが、なすびのつけもののあくがまわつて茶色になつたのがいれてあつた。

「こんなものがくえるかい」と、あそび人がどなつた。「くえにや、くいんさん」と弁当屋のおばさんがいつたので、さわぎになつた。ハンストになり、巡査がきておばさんをしかりつけて、晩のめしはいくらかましなおかずがついた。

そのころは、なんぞというとつかまつた。その秋のことだ。別府がらの帰りの船が宇品につくと、警察がはりこんでいるとわかつた。私は茶色の中折れ帽子をぬぎ、赤いフロシキを黒いフロシキととりかえた。むこうは、たいていそうした持ち物で見当をつけて、つかまえるのだ。人相まではつきり知つているわけではない。

船がサンバシにつくと、すぐにとびあがつてそこでた。刑事たちは船室にとびこんでいた。それちがいだつた。こうしてうまくのがれたが、あくる日だつたかにつかまつた。

労農党の再建までは長くかかつた。その年の二月、なげなしの金をかきあつめて、早川義則を労働者農民党の結成大会におくつたが、大会中に結社禁止の命令がでた。

私は胸をわるくして宮島に帰つたので、玖島などが検挙されたときは広島にいなかつた。
佐野、鍋山などの転向声明がでたころのこと、た球場で全国中等学校野球大会の予選があつて、ある日検事局からよびだしがあつていつたことが

ある。そのとき、佐野、鍋山たちの転向声明の印刷物をわたされて、それをかえつてから兄の小寺英雄に渡したことがある。

なんのために検事局によびだされたのかおぼえていない。あるいは坂本四郎さんがモップ活動のために宮島から広島にでてゆき検挙されたので、その関係でよびだされたのではないかとおもつている。

兄はこのあと宮島からでていってモップルの再建にしたがつたわけだ。

松本徹がうらぎつたということは、獄中の兄からの連絡で知つた。さしいれの本の三一五^二に、しるしなどをつけて連絡することは、まえもつてきめてあつた。その本はいまでもあるとおもう。

「S字形の鉄はわるいから、とりかえたほうがよい」という、兄からの手紙の文句でも松本徹のことをさとつた。

その松本徹と天津せいがつれだつて宮島の私ところにきたことがある。それまではあつたことはない。兄は昭和八年の夏には広島にでている。天津せいは昭和九年の三月に執行猶予ででている。だから三月からのことだろう。兄たちが一斉検挙をうけたのは昭和九年の四月二六日だ。松本徹がなぜ、私の家を知つてたずねてきたかわからない。

天津せいとはそのとき、はじめてあつた。そのまえモップルで天津のさしいれのこともあり、天津の姉さんの家というのをたずねていったことがある。二階から三味線の音がきこえてくるような家だった。

吉本康二君もたずねてきた。4・26事件のあと

だつたとおもう。

私が工夫した「かくしインキ」の方法を、かれに教えたことがある。タンニンで字を書く（ペンで書くとあとがつくから、マッチの棒にタンニンの液をつけて書く）。あとで、酸化第二鉄の溶液をぬると文字がうかびあがるのだ。吉本君はこれを中央との通信につかうといつていて。

それから吉本君が呉にいるとき彼にあいにいつたことがある。（了）

〔一九七三年一一月一八日および一九七四年一一月二日　ききがき〕

〔参考〕　兄の小寺英雄氏がつぎのようなエピソードをかたっています。

「広島市の住吉橋の西詰めの茶店のようなどころで、労農党再建のはなし安いがあるといふので、弟の信樹といつたことがある。広島の連中がどんな考えをもつているのか気にかかることがあつた（合法的な運動一本ヤリでゆこうという主張のもつた）。茶店には、だれもきておらず、ただ若い男がひとりいた。姐ですと名のつた。だれもこないので流れたということで、私たちは帰ることにした。『いまの男は、ソワという名前ぢやつたのう』と弟にきいた思い出がある。」

東京の畠常次郎氏にたしかめてみると、そんなことがあつた、といつていきました。あのときは、とうとう誰もこなかつたとの事でした。（以上）

左翼労働組合のこと

岨 常次郎

前略 その後お変わりはありませんか。この正月

にお逢いしたときには余りゆっくりと話をする時
間もなく失礼しました。

「5・4事件まえの広島の組織とその闘争」資料の出版の件、順調に進捗していますか。

実はその資料について学兄がはりきつて出版の件を話しておられたので余り水をさすのもどうかと思つてさし控えましたが、私の感想を率直に申し上げると広島の左翼労働組合の歴史が突然、昭和五、六年ころに全協・労働組合協議会運動として発足したようにとられて、かえつて誤解を生みかねないではないかと案じられます。

玖島（三一）と私が中心になり再建が企図されましたが、玖島の検挙などで、そして一方では佐竹新市などの労農党関係者の政治活動からの脱落、労農大衆的な方向への転身、そして広島一般労働組合にかかる広島合同労働組合の結成という

あの記録は警察側記録として、結局広島の左翼

労働組合運動の歴史の流れが正確に知られないままに終ったことを物語つているように思います。

というのは、広島市を中心とした左翼労働組合運動の歴史は、昭和二年にできた「全国労働組合評議会」系の広島一般労働組合がつくられたことに始まります。問題はこの労働組合の伝統が昭和三、四年から昭和六年に至る左翼運動、労農党関係の政治活動への弾圧の諸情勢のなかで、どのように守られ再建が企図されていたかということです。

方向に展開していました。
そこで私たちは、昭和五年から六年にかけての広島における経済恐慌の深刻化とストライキの多発条件の成熟の諸情勢のなかで、左翼運動の昂揚と発展を考え、とりあえず広島合同労働組合のかでの「革命的反対派グループ」として活動することとし、広島合同紡績（舟入町）のストライキ、合同運輸のスト、段原町の渡辺製糸工場閉鎖反対のスト、ついで広島電鉄会社のストの指導に従事したわけです。

五条俊夫君や松本京一君、村上四郎君や田谷春夫君、仁井田教一君、花野岩男君などはそのころの広島合同労組時代の同志であつたわけです。そして広島紡績のストライキのなかから花野ふじえ君も成長してきたわけです。
このような広島を中心とした地域においても、

〔参考〕あとにある「当時の新聞記事と資料」—「中国新聞」一九三二年昭和七年九月七日記事の「広島最初の全協組織」「広島最初のモップル」をみてください。

かつてないストライキの波の昂揚、経済恐慌による生活の不安と動搖が急速に強化し、それまでの広島市の小市民的牧歌性を、ほりくずはじめました。

そしてこれが、昭和五年以降の広島市を中心とした広汎な政治的経済的文化的な左翼運動の高揚を醸成していくわけです。

市川（忍）君と私はこのような情勢のなかでお互いに仕事を分担し、全協組織の指導を市川君にそして、私と市川君のレンラクは五条君を全協事務局に入れることで、強く結ばれたわけです。昭和六年に入ると私もしだいに青年同盟、党活動の側面の仕事が増えてきたわけです。しかし、いずれにしても以上のようなわけで広島の当時の労働運動の全体像と、経済恐慌を土台とした市民生活の動搖のなかで、左翼労働組合運動の展開を評価していくことが必要なよう思います。

なお、先日来訪されたとき見せた「宮本百合子全集」（第四巻）には“一九三三年の春”として私の昭和七年の四月から五月にかけて本郷駒込署の留置場での状況が、同じように検挙されていた宮本百合子によって書かれているわけで、その全集の月報に私の一文が載つておりますが、まだコピーする機会がなく、そのままになっています。そのうち参考に送ります。いざれまた日を改めてかきます。

〔一九八〇年　来信〕
　　畠　嶋

悔いなき革命運動への献身

古末憲一



わたしは一九〇七年（明治40年）に軍港吳市の商人の家に生まれた。少年時代は海軍士官にあこがれ、中学を出たら海軍兵学校にはいるつもりだつたが、一人息子であるという理由で説得され、

海軍はあきらめ、大学へ進むことになった。関東大震災の翌々年の一九二五（大正14年）年、一八歳の時に一高入学のため上京した。田舎の中学から天下の一高に入学できた自信に満ちて、将来の「出世」の夢を抱きながら学生生活にはいったが、東京の現実はわたしの夢をむざんに打ち砕いた。

第一次世界大戦後の深刻な経済恐慌と関東大震災の打撃、数十万人の失業者と労働争議。とくに大学卒業生の半数以上が就職できないという現実は、学生層を不安に陥れ、マルクス・レーニン主義への関心が急速に高まっていた。わたしは一高の寮にはいって間もなく、すすめられて社会思想

研究会に入会した。これが、その後わたしが一生を革命運動に獻げるようになった最初のきっかけであつた。

しかし天皇制政府の弾圧の下で、一高の研究会も半ば非公然の状態で、夜うすぐらい柔道場の片隅でこっそりとひらかれていた。『空想から科学へ』『マニフェスト（共産党宣言）』『レー寧の戦闘的唯物論』などがテキストとして使われ、チューター（講師）は大学生の先輩砂間一良同志などであつた。

その頃とくにわたしに影響を与えた事件は、京都大学の治安維持法違反一号として弾圧された石田英一郎らが一高の大教室で真相発表会をひらいたことである。こうした演説をはじめてきいたわたしはひどく感動し、その後マルクス・レーニン主義の研究にも身をいれ、各所の演説会にも積極

的に参加するようになつた。三年生になるとわたしは一高の社研グループの責任者となり、数名の仲間と、本郷に家を借りて合宿をはじめ、学外運動にも参加するようになつた。

わたしは一高から東京帝大の文学部美術史科に入学した。美術史科をえらんだのは試験が一番らくだつたからである。

わたしは東大新人会にはいるとすぐ学連（F.S.）のオルグとして明大、中央大、上智大などの指導に派遣された。3・15、4・16とつづく不当な弾圧に心から憤りを感じていたわたしは、自ら志願して労働運動に飛び込む決心をし、一九二九年の三月から『無産青年新聞』の組織部員として働くことになった。

ただ一つわたしの心の奥底にいつも気になることがあった。それは郷里の吳でわたしの卒業にす

べての希望をかけ、老軀にむちうちながら、学資を送りつづけてくれている両親のことであった。

わたしは夏休みなどに帰省して、両親の信頼しきつた顔を見るのがらく、口実をもうけては、なるべく帰らないようにした。親の希望通り大学を卒業して就職するのが親孝行か、革命によつて親と子が本当に幸福にくらせる世の中をはやくつくるのが眞の親孝行か、この二つの思想がたえずわたしの頭のなかで格闘した。そうした時、いつもわたしをはげまし、革命の方向に導いてくれたのは『レーニン伝』やシャバボロフの『革命への道』、ゴーリキーの『母』などであつた。

労働者のなかで活動できる喜び

『無産青年新聞』組織部のオルグとしてわたしは京浜地区を担当することになった。川崎、横浜などの大工場の労働者のなかにはいつて活動できる喜びで胸をはずませながら仕事をはじめた。わたしはまず川崎の富士紡（2000人）を重点経営として社宅工作にとりかかった。そこには沖縄出身の労働者がたくさんおり、もつとも熱心であった。『無産青年』の読者が少しづつできはじめてきた。

しかし、こうしたやりがいのある活動をはじめてわずか四ヵ月にしかならないその年の七月、わたしは東京市内の秘密連絡所で捕えられてしまつた。日本橋の久松署に送られ、ここでわたしは、警視庁の拷問をたっぷり味わわされた。何回も氣

を失いかけながらわたしは歯を食いしばつて黙秘でがんばり通した。かれらもわたしの強情に手を焼き、ついにあきらめてわたしをブタ箱に放り込んで帰つてしまつた。体中がはれ上つて身動きもできず、一週間は、同房の者の肩にかつがれて便所に行つた。この拷問の苦痛と敵にたいする腹の底からの憎しみは一生忘れることができず、わたしのたたかいのエネルギー源となつた。

六〇日間のたらい回しの後、不起訴処分で釈放され、郷里へ帰つた。その時の両親の落胆ぶりはどうてい言いあらわすことはできない。わたしは留置場生活で重い心臓脚気につかり、一時重態におちいった。心臓が弱つて苦しくなつた時、わたしは「このまま死ぬのは何としても残念だ。もう一度元気になり共産党にはいり、思いきり活動してから死にたい」、こう真剣に考えた。両親の行き届いた看病とわたし自身も療養につとめた結果、六ヵ月目によつやく全快した。

療養生活の間にわたしは、市内の友田書店の店員田中と懇意になつた。その店にはマルクス主義の書物が若干あつたので、それがきっかけで話し合うようになり、かれの紹介で海軍工廠の労働者川窪らとも知り合つた。健康を回復するとわたしは姉をたよつて大阪に出て、小さな石炭業界の新聞で働くことになつた。

呉海軍工廠の首切り反対のたたかい

わたしはここで一〇ヵ月余り働いていたが、余

りにひどい待遇にがまんできなくなり、同僚といつしょにやめてしまつた。ちょうどその頃、呉から一通の手紙が届いた。友田書店の田中からで、それにはつぎのようなことが書いてあつた。

「いま海軍工廠の労働者の間に非常な動搖が起きている。ロンドン軍縮会議の結果、呉、横須賀、佐世保などの海軍工廠労働者の一割が整理されることになり、呉でも三千人を整理すると当局が発表した。そのため職場では不安で仕事も手につかない有様である。……ついてはぜひ呉に帰つて首切反対のたたかいを指導してもらえないか」。わたしはこの重要な役目を喜んで引き受けることにした。

一九三一年三月のある日の夕方、わたしはひそかに呉にはいった。出迎えの同志の案内で用意してあつたアジトにはいつたが、田中、亀田、片岡など数名の同志が待ちかまえていた。みんな二〇歳前後の青年ばかりで、わたしが最年長の二三歳であった。わたしは海軍工廠内や地域の情勢などをくわしく聞き、首切反対をどのようにして組織するかを相談した。工廠内の積極分子を糾合して全協日本金属労組支部準備会を組織すること、準備会の名で不当な首切りに反対するビラを職場に入れるなどとをきめ、ビラの原稿は私が書いた。約一千枚のビラを数名の同志が朝工廠に出勤する労働者にいっしょに歩きながら手渡した。首切りの不当をバクロし、その撤回を要求したビラは職場のなかで大きな反響をよび、首切りにおびえている労働者たちを勇気づけた。二回目のビラは職場の同志たちの弁当箱に入れてもち込み、食堂、便所、更衣室などにおいた。職場の動搖はますま

す大きくなり、あちこちの職場でサボ状態がおこりはじめた。積極分子の糾合も川窪らを中心にして第に進んだ。あわてた海軍当局は憲兵隊や警察を総動員してわたしたちのア吉トを探しはじめた。ア吉トを他に移すとともに、男だけでは危険なので一高の合宿時代に炊事係をしてくれた牧野ひさ同志にハウスキー・バーの役目をひき受けでもらつた。

広島の全協組織とも連絡がつき、責任者の市川忍君と打ち合わせをした。(かれは広島郵便局出身のすぐれた活動家であつたが、間もなく検挙され五年の獄中生活の間に廃人のようなになつて出所後病死した)。

広島との連絡は山を越えていくのが一番安全であつた。呉軍港の背後にそびえる灰ヶ峰をこえて広島まで行くには、片道六里(24キロ)はあるが、この道を何回となく往復した。峠から見下すと、海軍工廠の大煙突が幾本も黒煙を吐き、三万トン級の軍艦を収容できる大ドックや大クレーンがならんでいた。軍艦が停泊しているのもよく見えた。港の向こうには江田島がかすんで見え、絵のように美しい景色であった。「あの工廠のなかにも、軍艦のなかにも必ず共産党の細胞をつくつてみせるぞ」、わたしはこう心のなかで叫びながら峠をこえた。

ある日わたしは片岡と二人で、海岸に近い山の中腹の一軒の空家で印刷にとりかかつっていた。近くに人家のあまりないこの空家を仮の印刷所に使つていた。わたしが原紙を切つていて、突然玄関にはいつてきた者がいる。見ると洋服をきた男で一目で、私服警官であることがわかつた。「しま

つた」と覚悟をきめたわたしは、片岡と一緒に表へ出た。見るとそこにはたつた一人しかいないではないか。「なんだ、一人じゃないか、やつつけよう」わたしは片岡にいった。その瞬間、その男は顔色をかえ、さつと身をひるがえすと坂道をころげるようにして逃げていった。その格好のおかしかつたこと、今でもはつきり思い出すことができるのである。

わたしたちは二手に分かれ、片岡は山へ、わたしは海岸へ出た。わたしは貸しボートを借りて駆逐艦や巡洋艦がたくさん停泊している間をぬつて、ゆうゆうと沖へ漕いで行つた。海岸が遠くかすむところまできた。もう大丈夫だ。わたしはたまらなく愉快になった。五月の太陽がきらきらと海面に輝き、瀬戸内海の島々が新緑にもえ美しかつた。わたしはボートを江田島の岸につけて上陸し、広島行きのポンポン蒸気船にのりかえて宇品港に渡つた。

わたしは全協の市川のア吉トをたずねた。ところがいつもの階段をあがつて二階の部屋をのぞくと誰もいないうえにようすが変だ。わたしはいそいでそこを出て他の家をたずねた。あとでわかつたが、その日早朝、このア吉トは敵におそれ、市川は逮捕され、家宅捜査をされたばかりであった。実に危いところであった。わたしたちが海岸通りから逃げたあと、呉市内は全市に非常警戒線がはられ、蟻のはい出るすきもないほどの大さわぎであつたが、山に逃げた片岡は無事であることわかつた。

日本共産党に入党

わたしは廣島にとどまつて、破壊された廣島の全協組織を再建することになつた。郵便局、国鉄、帝國人絹、日本製鋼、中国新聞社、福屋百貨店など重要経営の連絡は回復し、再び活発となつてきただ。しかしこれらの大衆運動を指導するためには、共産党の指導がどうしても必要であることが痛感されってきた。わたしは検挙を免かれた畠常次郎と消費組合運動をしていた寺尾一幹の二同志と相談し、党中央と連絡をつけ指導を受けるため畠を東京に派遣することにした。かれは全協の線を通じて党中央と連絡ができるまもなく帰ってきた。かれは東京で日本共産党入党し、廣島地方に党を建設する任務を与えられていた。

わたしと寺尾はさつそく入党の手続きをした。「共産党員として活動してから死にたい」というわたしの念願はついにかなえられ、わたしは光榮ある日本共産党員となることができた。一九三一年(昭和6年)七月であった。

三人はさつそく中国地方委員会準備会をつくり、党建設の仕事にとりかかつた。中国地方委員会と呼んだのは、廣島だけでなく、山口、島根、鳥取など中国地方全域に党を組織しようという意氣込みからであつた。党中央の方針にしたがい、重要経営の活動家を大胆に党に入れ、そこに経営細胞を建設した。共産青年同盟の組織にもとりかかつた。そして九月には中国地方委員会の結成を

ひらくまでに進んだ。

九月一八日、日本帝国主義は「満州」にたいする侵略戦争を開始した。広島市はこの侵略戦争の前進基地となり、全国から戦線に送られる兵士がぞくぞく到着した。旅館はいっぽいになり、民家にまで分宿した。

資本家・地主のための帝国主義侵略戦争に反対しようという党中央のよびかけに応じて、中国地方委員会もただちに戦争反対のたたかいを開始した。ビラ、リーフレット、伝單（ポスター）などをつぎつぎにつくり、党、共青の青年行動隊が出征兵士の宿舎や、陸軍の兵舎のなかなどにもち込んだ。まさに命がけの活動であったが、みんな勇敢に行動した。この時の行動隊長は現在国民救援会広島県本部会長の前田文二（旧姓村上）同志である。

やがて呉海軍の水兵の学習グループとも連絡がついた。地方委員会はこれを重視し、海軍内に積極的に党を建設するために呉地区に寺尾を派遣し、その指導にあたらせることにした。その結果、わが国で最初の軍艦細胞が組織され、細胞新聞『聳ゆるマスト』が発行された。また、広島の連隊内には共産青年同盟の班が組織された。

大学、高校の学生や中学生の間にも党の影響は拡大し、党の活動資金の大部分は学生のカンパによって賄われた。文化運動の方面にも党の指導がのび、文化連盟支部も結成され、その年の暮れには連盟の主催で「無産者の夕」が劇場「寿座」でひらかれた、千名の人たちが参加した。

一九三二年二月、わたしは党中央との連絡のため上京した。その時会った中央の同志は紺野与次

郎現中央幹部会委員である。紺野同志はまだ二二、三歳位に思われた。中央では呉、広島での軍隊内の活動を重視し、特別に軍事委員会をつくって指導にあたることになったということであった。わたしは今後の活動上の重要な指示をうけて帰つた。さつくその方針を具体化する準備を進めている時、三月五日の朝ついに宿舎で逮捕されたのである。（注 古末氏の逮捕は三月四日）わたしの検挙をきっかけに、敵は、党、共青、全協、農民組織、文化連盟など一斉に検挙をはじめ、二カ月余りの間に、三〇四名にのぼる活動家や支持者を検挙し、そのうち二七名を治安維持法違反で起訴した。しかし海軍関係は完全に守ることができた。寺尾はいつたん捕えられたがうまく脱走し、畠は検挙を免かれ、共に東京で活動をつけた。わたしは警察の留置場でたえず脱走の機会をねらっていた。広島市から汽車で約三時間の三原町警察署に一週間たらしにされ、再び広島へ護送される途中、わたしは列車から飛び降りて逃走しようとした。夜行列車で二人の刑事が両側に坐っていたが、便所には一人しかついてこなかつた。わたしは刑事がちょっとわき見をして瞬間、便所の扉のカギを内側からかけ、窓をあけて飛び降りようとした。あわてて刑事は乗降口の外からまわって、わたしの足をつかんでわたしが飛ぶならないつしょに飛ぶと必死に叫んだので、わたしは飛び降りるのを断念した。もしあの時飛び降りていたら、おそらく命はなかつたかもしれない。

予審判事の取り調べがつづいたある時、わたしは再び逃走を企てた。昼休みで判事も書記もいなかつた。護衛の看守がわたしの背後で大いびきを

かいて眠つていた。わたしは右の拳を固めてかれの鼻柱をつよく打つた。あて身をくわしたつもりだつたが見事失敗し、看守は大声でわめきながらわたしを麻縄で後手にしばり上げた。わたしはすぐ刑務所に送りかえされたが、体にまきつけられた麻縄がくい込んで眠ることもできない。わたしは看守長に縄を解くよう要求し、ついに解かせた。しかしその代り革手錠を後手にはめられた。これもはずせと要求し、三日三晩ハンストをやつた。そして前手錠にさせることに成功した。

わたしが検挙されてから一年余りの後、生ける屍のようになった父はついに病死した。この知らせは大きなショックであったが、しかし他の同志たちも同じ苦しみを味わつてゐることを考えれば、この悲しみに打ちかたねばならなかつた。わたしたちの検挙後、外部では岡本、小寺などを中心に大規模な救援運動が組織され、書籍、衣類の差し入れ、家族の相談など実に行き届いた世話役活動がおこなわれた。わたしの部屋には差し入れの書籍がいつも十冊以上もあり、経済、歴史、自然科学などずい分勉強できた。こうした外部からの救援活動は獄中のわたしたちにこの上ないほげましになつた。統一公判と裁判の公開を要求して二年近く、公判闘争をたたかい、二審の公判はわたしだけであつたがついに公開をかちとつた。わたしは5年の懲役刑をいい渡され服役した。

獄中の健康を守るたたかい

服役してから自分の健康を守るためにには、敵と

の毎日のたたかいが必要であった。一日三〇分以内の屋外運動は受刑者にとっては何よりの楽しみであり、健康を守るうえで絶対に必要な日課であったが、監獄法に三〇分以内とあるのをたてに短縮されることがあった。わたしは一分間短くとも譲らず看守長に抗議した。室内ではラジオ体操をやり、寝る前に腹式呼吸をした。便泌を防ぐため、毎晩コップ一杯の塩水をのんだ。こうして一日も休むことなく健康を守るたたかいをつづけた結果、風邪ひき以外は病気をせず、六年半の刑務所生活を終え、一九三八年六月、非転向で満期出所することができた。

ふりかえると一九歳で学生運動に参加してから検挙される二四歳までの五年間、あの凶暴な天皇制の弾圧のなかでよくやつたものだ。まさに青春のエネルギーを十分に發揮したように思う。つく刑務所での六年半は灰色の青春であったが、これまた戦後の党大躍進の準備期として意義のある生活であったように思う。

しかし、呉や広島で共にたたかった若い同志たちで、敵に捕えられて殺された海軍水兵の坂口喜一郎、宮内謙吉をはじめ病死した同志、原爆で殺された同志を合わせると四二名にのぼっている。（これらの諸同志は、広島市平和大通りの解放運動無名戦士の碑に合祀されている）。

今日数十万の強大な党として、民主連合政府樹立に向かつて前進している日本共産党のいしづえは、これらの多くの若い戦士たちの犠牲によつてきずかれたことを忘れるることはできない。

ふるすえ・けんいち 一九〇七年広島県呉市に生まれる。三〇年東大文学部中退。『無產青年新聞』オルグとして活動中検挙。三一年吳海軍工廠労働者の首切り反対闘争を組織。

同年日本共産入党。党中央委員会の創立に参加。三二年三月検挙。四四年埼玉県加須市に疎開。四五五年党埼玉県委員会の創立に参加。五三年より五五年まで国民救援会中央本部事務局長。四九年より六七年までの間、衆院選埼玉県第四区に五回、参院選地方区に二回立候補。六七年、七一年加須市議に当選、現在に至る。

（前衛 一九七一年一〇月号より転載）

手記 その一

寺尾 一幹



一九三一年広島地方にはじめて共産党が根をお

ろしたが、当初は古末、寺尾、嶋の三名だけだった。そして古末、寺尾は広島市におり、嶋は呉市にいた。嶋は広島市に生まれ育ち、年は若かつた

が、古くからそこで活動してきた同志であつた。そんなわけで広島市では特高の追及もきびしかつたため、古末のいなくなつた呉市を舞台に活動していった。しかし嶋は間もなく上京して、東京で活動することになつていて、そのあとは寺尾がついでやることになつた。

寺尾が実際に家を出たのは一九三一年九月ごろであった。ゆきさきはいわなかつたが、家族にもわかれをつげた。入党してからの約二ヶ月間、寺尾は広島市ではこれまでどうり消費組合の結成や、学生との接触で日をすごし、二回ぐらいは呉市で嶋にあり、状況をきいたり、呉市のなかまた

ちの紹介をうけたりしていた。

当時、嶋は広島から服部を同道しており、服部は共産青年同盟に加入しており、嶋の協力者だつた。服部久男はもと広島師範の学生だつたが、学校から追放され崇徳中学に転校したりしていたが、その後活動に深く身を投じたよい若者だつた。嶋が上京して呉にいなくなると同時に、服部も呉をはなれて四国地方にわたり、そこで活動することになつたと、嶋からきかされた。どのような事情で四国にわたつたのか、その後の連絡もなかつたので寺尾にはわからなかつた。

嶋から紹介をうけた同志たちは、川窪鉄之助、重田安一（以上海軍工廠一員）、蒲田政雄、片岡義夫、亀田勢（以上街頭分子一共産青年同盟員）、田中豊（書店店員）などであつた。これらの諸同志の大部分は、古末が勢力土台をつくり、嶋が党

員・同盟員に加入させたものとおもわれる。

当時の広島地方の共産党は、中央との連絡もほとんど断たれっぱなしで、入党申込み書のようなものもなく、全部口頭で処理されていた。そのつど中央に報告して承認をえることも不可能だつた。また党費も徴収していなかつた。もつとも任意ながら、かなりの額のカンパをだしてもらつていた。

当時の呉は、人口十数万で広島よりひとまわりも小さい都市であつた。海岸に沿う平地は広大な敷地をもつた海軍工廠、そして海軍鎮守府が占拠しており、背後にそびえている灰が峰の山裾に、商店街や人家が所せましとおしあつているような都市であつた。

寺尾の活動対象は、当然のことながら海軍工廠の労働者と水兵であつた。

海軍工廠は、従業員が何万もいる大工場で、艦船の建造、修理をやつていた。一般にはこのようない大工場をとりまして、多数の下請け工場があるものだが、このような下請けは全然なかつた。機密を保持する必要からか、全部を一括して工廠内部で完成していた。

鎮守府のほうは、横須賀、舞鶴、佐世保などならんで海軍四拠点のひとつで、常時2万の水兵がいた。沖合・沿岸に大小さまざまの艦船がうかんでおり、これらの艦船は演習、戦争などのため、時としてでりしていた。

海軍工廠のほうは、まだ端初的とはいきものの、川窪、重田らを通じてつよいキズナでむすばれていたが、他方、水兵のほうは全然手掛かりもつかめず何かはじめたものかと、思案するしかなかつた。

しかし、まもなく、そのチャンスが到来した。それは当時すでに退役していたが、坂口喜一郎、坂口をへて平原甚松と接触できたことである。

田中豊は、吳の目抜き通りにある、友田書店の店員をしていた。のちにはこの書店をゆずりうけ、田中書店という書店の経営者になった。姐からのひきつきでは、田中は常時店にいなければならず、あるていど特高からもにらまれている、また商人肌で軽はずみのところもあるので、党員・共産青年同盟員への加入はさしひかえているとのことだつた。しかし田中は、寺尾との関係では重要な役割をはたしてくれた。

阪口を見出だし、寺尾に紹介したのもこの田中であった。阪口は書店によつて田中にあい、左翼的組織との連絡がつかないかどうか、それとなく

さぐりをいれてきたことである。当時、阪口はよく着物のうえに「重まわし」を羽織つて、往来していた。おまけに口ヒゲなどもたてており、一見してうさんくさいとおもつたのも無理はない。だが、満更でもないと判断して、寺尾に紹介してきたのだった。

さらにつづいて、はじめての現役、木村莊重（水兵）、稻垣宏（兵曹）、そして佐々木万寿司（海軍工廠）、城戸薰（広村小学校教員）を寺尾に紹介してきたのも田中だった。田中は書店の店員をしており、左翼出版物をさがしたり、買ってゆく人に目をそそぎ、積極的にはなしかけたりしてくれていた。

また田中は、お互同志の連絡が何かの事情でされた場合、その連絡復活もしてくれた。寺尾はイモヅ式の検挙を防止するという観点から、すべての連絡は街頭でおこなつていた。どこかの部屋のなかで話しあつたりしたことは、一度もなかつた。これはどうしても、個人的指導というマイナスがあるが、やむをえなかつた。ただ、城戸のところへは二、三度訪ねたことがある。城戸の学校は、まだ農村地帯ともいえる郊外にあつた。たまたま訪ねたときが、この村の祭礼にぶつかり、大変ごちそうになつたことをおぼえている。生徒の父兄の家からもつてきてくれた料理だといつていよいのだろうとおもわれた。

さて田中を通じての連絡復活だが、一方の側が工廠労働者を対象とした『聴るクレーン』、水兵を対象とした『聴ゆるマスト』が発行されたが、その発行の意図、そしてどのようにして作成されたかは、つぎのとおりであつた。生者、死者をふくめて、寺尾はもつとも深く関与しており、経緯をよく知つてゐる。ただし、『聴ゆるマスト』は六

るようになつてからは、その資金のなかから、毎月かなりのカンパをよせてくれていた。

憲兵適齢期がきて検査合格し、入隊してくる陸軍どちがい、水兵はまだ少年期ともいえる一七、八歳で志願して入団していた。志願兵だけでは人員がたりない場合に、憲兵検査合格者をまわして補充していた。自ら志望して入団するくらいだから「御國のためにつくす」という心情も、はじめのころはつよくもつていたにちがいない。しかし水兵生活を通じて、社会的な、また軍隊内部の矛盾を感じ、当初の志願のなかにもふくまれているとおもわれる、人生に対し積極的にたちむかうという心がまえから智識欲もあり思想的な転換もおこるのではないかとおもわれる。そして軍艦にのれば生活は閉鎖的になり、喧嘩もあるうが、お互いの親睦感もわいてくるのではないかとおもう。また階級により、日数の差はあるが、外泊しており、気のあつたもの同志で町中に部屋を借り、そこへ私物の本などをおいて、一応憲兵や上官の監視の目からのがれてすごすことができた。当時、寺尾は水兵の特殊な性格環境などについて、その他にもいろいろ、例えば機関兵の労働的な面など、思いめぐらしていた。

以上、私見だが、いまもそのようにおもつてゐる。

田中のところへ、日時場所を指定したレボをおいておけば、他方がそれをうけて復活するのだった。田中はそのほか、最初は自分の給料から、自営す

号まで発行されたといわれるが、寺尾が作成したのは一號一四號までで、五號一六號については、検挙されたあとなのでどのようにして誰が主として関与したかは知らない。

大体両者とも創刊は同時頃で、月二回刊にした

ので、およそ四号ぐらいまで発行されたはすで、寺尾検挙後はそのままになつたとおもわれる。

中央との連絡は、呉をふくめ広島地方全体は長い間絶えていた。中央の頻繁な弾圧でとぎれ、また遠くはなれているため頻繁な往来もできないので、回復は容易ではなかつた。出版物荷物のうけわたし、アドレスを交換しても、郵便小包を中途で気づかれ当局にあけられ、アドレスが敵に知られ弾圧のキツカケにもなつた。

そんなわけで、『赤旗』はもちろんのこと、その他の宣伝物は長い間みることができなかつた。かつては店頭に見かけられた雑誌類も、発行一即時発売禁止で、全く姿を消していた。

いまや端的とはいうものの、核ともみるべき組織を工廠労働者、水兵のあいだに組織することができた。各自は自分の周囲に働きかけて革命的左翼的な影響力を、ひろげてもらうことにしていたが、これも漸次のびていった。しかし個人的に親しいとか、共鳴しているというだけではどうも組織としてよわく、どこからどこまでがわれわれの仲間か、それを固めることを寺尾はかんがえた。そのために、ニュースを発行し、その内容は工場・水兵の中にある矛盾、要求、不満などを、投書としてまとめその他の記事では、すでにはじまつている、中国侵略の本質をあきらかにするなどを考えた。この投書以外の原稿は、寺尾がかいた。B

4判一枚、うらおもてのものだが、三分の一ぐら
いは寺尾がかいたものであつた。

寺尾は、このニュース発行計画は、水兵対象のものは阪口に、工廠労働者対象のものは川窪、重田らに提案して賛成を得た。ニュースの題名はそれそれに考えてもらことについたが、阪口からは、若干のもののうち『聳ゆるマスト』にしたい、工廠関係のものは、川窪から『唸るクレーン』がよからうということになり、そのような題名にした。

『聳ゆるマスト』も『唸るクレーン』も二月中旬頃、すでに題名もきまつたので、ほとんど同時に、創刊号を発行した。月二回ていどの発行が適当とおもわれたので、五月上旬寺尾が逮捕されるまで、それぞれ四号まで発行している。

どちらも創刊号よりも二号、三号と、刷部数もふやしていく。当初は三〇部くらいだったが、だんだん増して五〇部以上刷るようになった。ニュースを通じて影響力をつよめ、組織をひろげるという寺尾の所期の目的は、一応成功したといえる。

しかし、もしこのニュースが、一部でも敵につかまれたら、弾圧のきつかけになりはしないかとの懸念もあつた。すべて信頼できる相手だけに、手渡しで配付することにして、広範囲にまきちらすようなことはしなかつた。また配付の系統も、『聳ゆるマスト』をたとえ仲間であつても工廠労働者や街頭の人たちにも手渡すようなことはしなかつた。『唸るクレーン』も同様であった。刷り部数がすくないのもそのためであつた。また発行者の署名も、本当は党の出版だったが全然記入しなかつた。

原稿や編集については、まことにものべたが、印刷は寺尾が京都時代から知りあつていた林寿恵子がよびよせていたので、ガリキリは彼女にやつてもらつた。彼女は上手な字をかくので、キレイな印刷物ができた。ただし、寺尾がガリキリをしたものも少しあつた。寺尾は字が下手なので、出のわるいものは寺尾がやつたものである。その他に編集印刷をやつてもらつたことは全然ない。

林寿恵子は、同志社女專を卒業し、私が知りあつたときは京都の日仏学院に勤務していた。同級生三人がいて仲良く、いずれも革命運動に厚い関心をもつていた。当時寺尾は大学の社会科学研究会で活動していたが、同時に学連の活動にもしたがつており、同志社大学や龍谷大学の社会科学研究会の指導も担当していた。だがさらに別に、大阪に拠点を移していた共産党（田中清玄指導）とも結びつき、ビラまきの行動隊を編成しておくりこんだり、カンパ資金の調達もやっていた。

林ら三人からは、この資金をもらつていた。その後三人とも家を出て名古屋にゆき、そこでバス車掌をしていたが、そのとき寺尾が呉で活動することになったので、よびよせた。呉では寺尾と同居し、ガリ切りのほか、寺尾はあまり外出しないことにしていたので、連絡や用足しなどをしてくれていた。また、寺尾の母、弟妹のいる広島の家にも立ち寄らせた。母に、寺尾の健在を知らせることと、金をもらいに寄らせた。寺尾は母に、この人と結婚しますので諒承してもらいたいと手紙をことづけたこともある。母はよろこんで承知してくれたが、その後、林が起訴猶予で釈放される

と、寺尾の家で家族の一員として温かく迎えられ過した。寺尾としては、一刻もはやく東京へよびよせたいと思つたが、何しろ警察脱走で当局から厳しく追及されているので、うまく連絡もとれなかつた。ただ彼女の兄が藤沢に住んでいて、寺尾はその兄に連絡のとれる方法もつげておいた。兄は反対の態度も示さなかつたので、うまくやつてくれるここと思つていた。ところが、この兄から寺尾の指定連絡場所に手紙がきて、スパイが家のまわりをウロチョロしてて危険だから藤沢へくるな、とのことであつた。アトになつてわかつたのだが、スパイではなく、そのとき林は兄をたよつて上京していた。私とあうことを妨害したのだつた。林はまた広島へかえつていつた。

ほどなく寺尾は東京で逮捕された。まだ留置場にいるときだが、上京してきた広島の予審判事の取調べをうけ、その判事から彼女について、不審な話を耳にした。夢想だにしていなかつたことでありうべからざることとおもつた。その後寺尾は起訴され、未決拘留の身となつたため、広島の母と彼女あてに手紙をだした。母からは、大変孝養をつくしてくれていて、寺尾の怒りは無用だとう返事がき、彼女からは、寺尾の詰問は何のことだかわからぬといふ返事がきた。

彼女は、ひと足さきに上京して活動していた、寺尾の妹をたよつて上京、豊多摩刑務所未決拘留中の寺尾に面会にきた。今後、差し入れなど何なりと世話をしたいとのことだつた。寺尾は、まずとんだ誤解をしてすまなかつたと詫びた。

それから10日ぐらいもすぎたであろうか。妹が面会にきた。林は、かつて寺尾が大変お世話にも

なつた、安田徳太郎博士の診察をうけ、百方手をつくしたが、急性肺炎で死亡したことであつた。

妹は獄中の寺尾の仮出獄にも奔走してくれたが、裁判所の許可はおりる筈もなかつた。一九三四年一〇月で、獄窓から見あげる櫛の大樹が黄ばみ、落葉がはじまつていた。

呉における印刷作業の実状についてのべる。当時呉には活用した謄写版は一台しかなかつた。『聳ゆるマスト』、『唸るクレーン』、それから寺尾が原稿をかい、三~四種類のパンフレット、街中に貼つた伝單(ポスター)、ビラは、すべてこの一台の謄写版で作成した。

謄写版印刷も至極簡単なやりかただつた。簡便といつても鉄筆、ヤスリ、ゴムローラーはどうしてもいる。原紙やインクも勿論必要だつた。しかし、インクをのべる板、原紙をはりつける枠、そして一般には、これら諸器具を収納するかさばつた箱がついているのが「一式」ということになる。しかし寺尾は枠やインクのベ板はつかわなかつた。まず枠だが、これは厚手のボール紙の、中を四角にくりぬいて、原紙をとりつけ、焼け火箸を周囲にあてると簡単に付着する。ボール紙があたりのときは、ローソクをたらした。この原紙のうえをローラーでころがすと、スクリーンなしで二〇〇回以上は原紙ももち、立派に刷りあがる。またインクのベ板は、窓ガラスをつかい、この上にインクをたらしてローラーでのばした。ボール紙をつかうのは寺尾の独創ではない。忘れてしまつたが、誰かからこのヒントを耳にしていた。大抵は黒をつかつたが、伝单などは赤をつかつたり、

二色ずりしたこともある。ローラーも、のべ板もひとつしかなかつたので、切りかえのとき、ローラーのべ板を多少インクおとしをやつても、とりきれず、色のまざつた茶色の印刷物もまじつた。『唸るクレーン』は川窪にわたして、配布してもらつた。伝單類やビラなどは、水兵をのぞいて他の諸同志の力を借りて街頭貼りをした。寺尾自身もこれをやつた。

呉で寺尾と協力することになつた松本京一についてのべる。

彼は古くから広島市で活動していた同志で、岨常次郎などとも近くしていた。寺尾も広島であったこともあるが、その経緯などはおもいだせない。彼は、広島での活動が警察にも目立つので、呉市に派遣されてきた。寺尾が逮捕される一ヶ月くらい前であつた。

寺尾は彼を阪口や川窪らに紹介し、これからというところで、呉市の大検挙がはじまつた。彼は小柄なやさ男で、静かな人物だつた。寺尾は別段の説明もできないが、大言壯語する男よりも松本のような男の方が本物という気がつよい。松本は、本物の共産党員だつた。

当時の呉では生活費をふくめて、活動費はどのようにして捻出していたか。

当時の米の価格は一升一〇錢余であつたとおもう。部屋代もはらつて月一〇円というところが最も低だつた。

財政は三本の柱に依拠していた。ひとつは呉の同志たちからのカンパであつた。といつても、水兵からはたのみもしなかつたし、もらわなかつた。

工廠の労働者、田中書店の田中などであつた。月により、額は不定だったが、安い月給のなかからで大変だったにちがいない。他は寺尾の高等学校時代、一緒に社会科学研究会で活動し、京都帝大にいた学友たちであった。彼らは大学へゆくようになってから一歩後退した。大学の社会科学研究会に入会し、活動をつづけたのは寺尾ひとりだつた。しかし彼らもその後方に負い目を感じ、苦しんでいた。守屋恒美が中心になつて、親もとからおくれられた学資をさいて何人かから集金し、呉の寺尾にくつてくれた。その後、各自それぞれの人生コースをたどつてきたが、充分な感謝の言葉もつたえていない。安田徳太郎博士、日高教授、学友など、皆それでお世話になりっぱなしで、心のこりになつてゐる。そして寺尾の母からも、時々金をもらつていて。

五月上旬逮捕されてから、脱走するまで約一〇日間、寺尾は一見すきもないほど厳重に警護されていた。その間、呉署の特高主任、県の特高などがきて、紙片をひろげ、取調べを開始しようとした。寺尾は、自分からは何もしゃべらないから、ほかの方法で調らべたらよいだろうといつて抵抗した。実際何もしやべらなかつた。特高はこの抵抗をもてあまし氣味だつたが、別段拷問を加えることもなく、また怒声をたてるようなこともなかつた。むしろ警察流ながら、丁寧な言葉をつかう特高係や巡査などもいた。そのうちおもむろに調べあげようともつていていたのだろうか。

備 考

一

はじめであつた。五月一〇日に寺尾は逮捕されたので、その間はきわめて短日時であつた。
三好は、三月に広島市で大検挙があり、その直後に、東京から入広したといつて。寺尾は、自分がやつてきた呉市での活動、海軍工廠や水兵のことなどを報告した。この海軍、水兵のことは特にくわしく報告した。三好はこの寺尾の報告を、逐一メモしているようであつた。後まもなく中央の△赤旗△に、呉の水兵の活動記事がのつたが、三好からの報告によるものだろうとおもう。

寺尾と三好との接觸期間は、前にもいつたが、大変短かかつた。そのうえ、三好は広島へ帰つていたこともあり、正味の期間はもつと短かかつた。工廠や海軍の諸同志、さらに松本京一を三好に紹介したかどうか、またそこまで進めたかなど、寺尾にはハッキリした記憶がない。

なお、書きおとしたが、騰写版の諸器具は広島の大きな文具店から、林をつかいにして買つてこさせたものである。

寺尾が逮捕された状況などは、稿をあらためて書きしるすることにする。

これにたいして私は、自伝などは絶対に書かないと拒否していました。私なりの理由があつたわけです。

第一は、私のおかしいいろいろな誤りです。仲間たち、さらに党全体も誤りを冒しています。たとえば、私自身、東京の獄中で同志たちへの不信感におそれ、革命運動に絶望して苦悶し、一度転向しました。転向にたちいたつた心境なども、別にまとめてみますが、理由の如何にかかわらず最大の誤りでした。

第二は、私の革命運動にたいするそこばくの貢献、これを語ることは、自分の手柄話をしているのは、四月中旬頃であつた。中央からきたオルグということで、例の書店の田中を通じて寺尾は

戦前からの古い共産主義者は、誰しも万丈の波乱のなかを生きてきたと思います。とりわけ私は、海軍水兵の組織建設、警察署からの脱走、のち東京、西神田署で完全黙否闘争をやり、△大形宗太郎△の名前をつけられ、何ヵ月も頑張ったこと(当時ブル新聞にも麗々しく報道され、仲間の話題にもなつた)、すこしさかのばれば学生時代、獄中で結核にやられ、瀕死にちかい状態で仮出獄した等々、自分ながらも波瀾の多い過去をもつてゐると思います。大ザッパながら、全体をよく知つてゐるのは私の弟妹です。これら弟妹は私に△自伝△をかけてとつねづねいつていました。また私の子供らや、近しい諸同志もそんなことをいつていました。

ようで気になります。

誤りをありのままにのべるのも、心情的に氣おかがし、手柄話にうけとられるのも心苦しく感じました。

第三に、長い党の歴史を正確な記録として残しておることは、大切なことだと承知しています。

しかし私ひとりの活動でもなかつたので、誰か他の同志によつて明らかにされるだらうというわけです。

いづれにしても口は閉ざしがちになり、ペンも重いということになります。

ところが、最近山岸一章氏の『聳ゆるマスト』が発行されました。また三好惣次君は、一年前の『広島民報』新年号むきに、やはり『聳ゆるマスト』のことについて自署の手記をよせていました。どちらも私は一読しましたが、いろいろまちがつており、部分的には全くのつくり話すらあります。

一読して、これでは私として沈黙しているわけにゆかないと痛感しました。そして、この報告をまとめました。古い昔のことと、私の記憶がうすぐれたところもあります。しかし、この私の報告は真実を語つたものです。

二

まず、山岸氏の『聳ゆるマスト』ですが、これ

は平原甚松君からの聞きとりを基にしたもののようにです。平原君の意識的な作り話が主な原因です

が、筆者としてはその嘘を見ぬくだけの科学的な眼力をもつていてもらえたらと思うこと切です。

たとえば、P72「阪口が、全体の責任者となり、平原が編集・印刷の実務を担当し……」

P73「聳ゆるマスト」の編集方針は……次のよう決められました。

一、

二、

三、

四、

五、

P73「尾行のつく吳市内で、印刷材料を買うと危険なので、平原甚松はポンポン蒸氣の連絡船にのつて一日がかりで広島市へ買いにゆきました……謄写印刷で経験のある他の援助を得ることができます」

P87「編集担当者平原甚松の記憶による」

P113「同じ頃、三好惣次は吳市内のある水兵の下宿で、党員地区責任者の寺尾一幹、吳海軍出身の阪口喜一郎、平原甚松の四人で『聳ゆるマスト』を中心とした反戦活動の現状を検討したり、今後の方針を決める重要な会議をひらいています」

P115「印刷は、軍艦にのりくみなどで留守の水兵の下宿を転々と借りて、自分の下宿には証拠物を一切のこさない細心さで……」

以上は、山岸氏の『聳ゆるマスト』を一読して

気づいた、作りなしの若干部分です。その他にもいろいろあります。何が真実か、私（寺尾）の手記と対比してみてください。

阪口喜一郎の獄死問題です。これには、自殺説と虐殺説どがあり、山岸氏は自殺説を紹介しながらも、虐殺説をとっています。

らも、虐殺説をとっています。

私は以前、古末憲一君から彼は独房内で離婚問題で煩悶し、縊死したと聞かされており、自殺したものと思っています。

山岸氏の「虐殺説」は推理を重ねたといえそうで、阪口の自殺説にはいろいろな根拠があります。

山岸氏は、当局がその妻、野村梅子との仲をさうとしたことに憤激したとはいっています。

未決になると、一般には外部からの面会や手紙など、制限はあるものの許されています。阪口は接見禁止、通信停止などの処分をうけていたのでしょうか。野村梅子との意志疎通も、野村が離婚を考えていなければ、できた筈です。阪口の苦悶も私としては理解できます。独房で大声を出したり、扉をたたいたりしていきたとのことで、正常な心理状況ではなく、錯乱状態になり自殺につながったものと思います。

阪口自殺については、その他にも若干の根拠があります。だが、ここでは右の一事だけにとどめます。

三

次は、三好惣次君の手記原稿です。

この原稿は、一年前の『広島民報』に掲載されたものになります。何が真実か、私（寺尾）の手記になつておらず、民報から兵庫に住んでいた岩佐寿一君のところへ、まずおくれたものです。岩佐君は、広島、呉の共産主義運動の資料をあつめたり、研究もしている人物です。

民報からなぜ岩佐君のところへおくつてきたのか
わかりませんが、資料のひとつぐらいに考えたか
と思われます。

岩佐君は、三好署名のこの原稿をみて、内容に
疑問を感じたので、コピーしてさらに私のところ
におくり、私の意見をもとめてきたものです。

余り長文のものではありませんが、その内容も
知らない人はだましても、私や岩佐君の目をごま
かすことはできません。次のような個所もありま
した。

「最初の委員会は、水兵が休息に使用していた。
アパートの一室でひらき、出席者は私（三好）、寺
尾同志で、水兵の阪口喜一郎、平原甚松、両同志
でした。そこでは阪口同志が責任者になつて、軍
艦細胞の機関紙を発行することをきめました。

この後細胞会議で、機関紙発行について討議し
……いろいろな案がでましたが、平原君提案の『聳
ゆるマスト』にきまりました。

創刊号は、平原君が原稿あつめからガリ切り、
印刷、配付まで中心になつてやり……」

以上のように、全くデータラメのものでした。第一

一『聳ゆるマスト』の創刊号は、二月です。三好
君は四月の中旬頃、はじめて吳にきており、『聳ゆ
るマスト』はすでに四号まで発行されていました。

創刊号発行を討議するなどはありません。

また、阪口君の獄死については
「広島刑務所で彼は、看守のひどい拷問をうけ
ましたが、組織を守つてたたかい、ついに殺され
ました」と書いていました。

事件の取調べは、まず警察がやり、そのさいは
半殺しの拷問も加え、徹底的に調べあげます。起

訴されて刑務所に移されてからは、予審判事の取
調べがあり、予審判事、書記、被告、三人の間で
おこなわれ、予審判事など暴力的な拷問はやりま
せん。刑務所の看守が被告の活動内容を聞きだす
ようなこと、そのため拷問を加えるようなこと
は絶対にありません。刑務所は、身柄を預かって
いるだけです。ただ受刑者、被告人などが刑務所
の規則に違反した時などは、「閉禁」などの懲罰を
加え、あればまわつたりすれば暴力を加えます。

看守から拷問をうけ、組織を守るというような事
情はありません。

寺尾はこれらの点を指摘し、三好君に早速返事を
くれるよう手紙をかきました。三好君からは返
事がきて、『聳ゆるマスト』の創刊は、寺尾指摘の
とおりで、『広島民報』の三好原稿は、民報記者が
勝手にかいたものであること、また阪口の虐殺の
こと、看守の拷問にもかかわらず、組織を守つた
云々は、山岸氏の文章から借りたものだという言
いのがれのものでした。

- 以上のとおりとなるかと思います。今のところ、
印刷することなど考えていません。この項目のな
かで党中央の方で、党史資料として要望されるも
のがあれば、まとまり次第提出します。
私は嘘は書きません。
- 以上
一九八二年一月一四日 寺尾一幹
- 3、病氣静養時期（執行停止処分をうけ、入院・
自宅療養期、その間の活動）
4、吳市での活動（今回まとめた手記）
5、吳警察からの脱走顛末、上京
6、東京での活動（東京で逮捕されて出獄する
まで）
7、暗黒反動時代（この時代の生活、活動、戦
時中の三度目の獄中生活）
8、戦後の活動（敗戦から現在まで）
9、付 家庭

私は△自伝△など書かないつもりでいました。

しかし今回吳での活動を文書でまとめたことか
ら、ペンをとつてみようかの気になりました。大
体の構想は

1、生いたち（中学卒業まで）

2、目ざめ（高等学校、大学時代、その活動と
獄中生活まで）

手記 その二

寺尾 一幹

一、呉の街頭で逮捕される

一九三三年五月一〇日の昼すぎ、私の隠れ家から程遠くない街頭で、いきなり一人の特高がおそいかつてきて私は逮捕された。もつとも、この日が一〇日であったかどうか、いまは記憶にない。警察の記録がそのようになつているとのことである。

私はがんじがらめに縛りあげられて、あまり遠くもない呉警察まで引きたてられていったのだが、逮捕のきっかけになつた疑問もわかつた。警察では交替で入れかわり立ちかわりで私を監視していたが、普段着の着物と下駄ばかりという姿だった。何か一寸した用足しだったようだ。相手の特高もひとりだったので、振りきつて逃

げようとして格闘となつた。しかしそのうち多勢の人だからでき、特高は小柄ながら腕力も強く、つかまつてしまつた。

私にとつての呉は全く馴染みのないところである。反対に呉市民のなかで私が寺尾であることを知つてゐる者はない筈と思っていた。特高とても簡単にはこの私を確認しないだろうと思つていた。しかしその特高がいきなり私に飛びかかつてきたので疑問に思つた。

私はがんじがらめに縛りあげられて、あまり遠くもない呉警察まで引きたてられていつたのだ

が、逮捕のきっかけになつた疑問もわかつた。警察では交替で入れかわり立ちかわりで私を監視してはいたが、その警官のひとりが、私が一四歳の少年期、約一年間塾で勉強していた頃、一年上の上級生だったとのことである。逮捕される約一週間

前、やはり一寸した用向きで外出し、三米幅ぐらいの小川の縁を上流に向つて歩いていた時、反対側の道を背広姿の男と警官が連れだつて下つてくるのに出会つた。そのとき彼らはジロジロと私の方を見て通りすぎたのだが、何だかうす気味悪かった。警官はこの上級生で、背広は特高刑事であった。私を逮捕したのはこの刑事であつた。それでもこの警官は数年後の私をよく覚えていたものである。但し、この三月の広島市の大検挙から、私が呉に潜入して活動していることを特高はつかんでおり、私を狙つていたにちがいない。

格闘中、私はとりまきの群衆にむけて何度も泥棒ではない、共産主義者だと大声で叫んだ。特高を手助けするような者はひとりもいなかつたが、私を助けだそうとする者もいなかつた。當時としては当りまえのことであつたろう。

私が大声で叫んだのはこの騒ぎが大きくなつて、あまり遠くない私の隠れ家の者が気づき、その時いた林と三好が逸早く逃げてくれるかとも思つた。

こうした逮捕されたが、無念千万の思いであつた。

二、嚴重な特別監禁

警察では留置場（所謂ブタ箱）に収容されるのが普通である。ところが呉警察では私は特別待遇の身になつた。しかしこれは私を特に優遇したわけではない。

呉でも既に大がかりな検挙が始まつており、留置場は仲間たちで超満員となつていた。留置場だけでは足りないので、道場のなかなどにまで収容されていた。呉では私が中心人物の大物というわけでも、留置場にいれるに連絡をとりあつたりするかと懸念したようだつた。私を特に隔離するところがネライであつたようだ。

警察の本館一階は粗末な机や椅子が並べられた広間にになつていた。この広間では警官たちを集めて署長の訓示などをすることに使用されていた。そしてこの広間の隅の方に小さな部屋がふたつほど区切られており、そのひとつは特高室になつてゐた。他のひとつは部屋はガランとして何もなかつた。何かに使用されていたのを片づけた風にもみえた。

この部屋の一側面はガラス窓になつていて、それを収容するために釘づけにされて、開閉できないようにされており、また外が見えないようカーテンが張られていた。他の側面にはドアがついており、このドアを通じて広間に出入りすることになつていて。このドアは通常は閉められており、鍵はかけられていなかつた。

この部屋で私は両手に手錠をはめられており、食事の時だけははずしてくれたが、夜はそのまま（手錠をかけたままで）眠る始末であった。

また私は監視するために四人の警官が当たられた。但しこれには二人づつ組んで交替することになつていて、室内に長机と椅子五脚が持ちこまれておらず、当番の二人は勿論この椅子に腰かけていなければならなかつたが、非番の二人も大抵はこの部屋にいた。余つたひとつの椅子は私用のものであつた。私を監視する以外には仕事もないで私を交えて雑談することが多かつた。

夜は二人の警官は目を覚まして椅子に坐つてゐるのだが、非番の二人は私の寝床を狭んで両脇に自分たちの布団を敷き眠つた。当番・非番は大体夜昼とも三時間ぐらいで交替していった。私の起床も就寝も特に時間の指定はなく、朝適当なときに起き、夜は「ソロソロ寝るか」ということで、これも適当なときに寝床に入つた。

私がこの部屋から外出るのは洗面で階下に降りるので、便所へ行くときこれもやはり階下に降りるときだけで、勿論警官つき添いであつた。私の取調べというつもりか、県の特高主任や、特高の部屋は10坪近くもあつたが室内はガランとして何もなかつた。何かに使用されていたのを片づけしかし私は「自分からは何もしやべらないので他

の方法で調べてくれ」と言つた。まだ小手調べ程度のことでは、それ以上食いさがつてくるようなことはなかつた。特高も私にたいし怒号するとか、まして拷問を加えるようなことは全くなく、一応私にたいしては紳士的（？）対応であつた。

監視の警官たちも私にたいしては姿勢が低く、自分たちの退屈しきもあって、共産主義とはどんな思想か、何故共産主義者になったのか等、割合眞面目な姿勢で聞いてくることもあつた。私はただものだといって、卵を一〇コばかり栄養を摂取しておらず、当番の二人は勿論この椅子に腰かけていなければならなかつたが、非番の二人も大抵はこの部屋にいた。余つたひとつの椅子は私用のものであつた。私を監視する以外には仕事もないで私を交えて雑談することが多かつた。

真面目な態度で対応した。共産党の活動に逢着したことのない小都市の田舎出の警官ということだったかもと思う。ある警官は自分のうちの鶏が産んだものだといって、卵を一〇コばかり栄養を摂取しておらず、当番の二人は勿論この椅子に腰かけていなければならなかつたが、非番の二人も大抵はこの部屋にいた。余つたひとつの椅子は私用のものであつた。私を監視する以外には仕事もないで私を交えて雑談することが多かつた。

三、脱走一計画を練る

逮捕のドサクサも終り、警察に落ちつくとともに脱走のことを考えはじめた。京都の刑務所生活で重い結核にやられ、執行停止を食つていたこともあつて、この事件では相当長い刑務所生活を覚悟していたが、結核の再発が懸念され、はたして生きて出られるだろうかとも思つた。何とかして脱走してやろうと思つた。

夜・昼ともに手錠をはめられており、四人の警官に監視されている。警戒は厳重で脱走の余地は全くないようにも思われた。警察側でも安心していにちがいない。しかしそのような環境のなかで、私は脱走の計画を練りはじめた。

夜、私の両側で眠っている警官はともかく眠つていようが、目を覚まして私を監視している警官が時として睡魔と疲れで椅子に座つたまま目を瞑つていることがあった。試しに私が咳ばらいなどをすると、すぐ目を開けるので、眠りこんでいるわけでもなかつた。しかしこのようなとき、耳は聞こえるにしても目は全く利いていないことになる。もし私が物音ひとつ立てるにこの部屋から出ることができれば第一の最大関門を突破したことになる。この成否にまず運を賭けた。

部屋の床は板敷きになつていて、ところどころその上に乗れば軋む音を立てるところがあつた。昼間、運動のためといつて室内を歩きまわり、このような場所をチェックした。しかし続いての難問はドアを開けて室外に出るときであつた。鍵はかかっていないかつたが、ハンドルに手をかけると錠のなかのスプリングか何かが跳ねて、カチッという音がした。便所へ降りるときなど、私がサキに立つていろいろ工夫してやつてみたが、この音はどうにも仕方がなかつた。このようにしてチャンスもめめず一日一日が過ぎていつた。

そこで私は一計をたてた。そのとき私は成算があるが、この部屋の床は板敷きになつていて、ところどころその上に乗れば軋む音を立てるところがあつた。昼間、運動のためといつて室内を歩きまわり、この音はどのようにして

私は監視の警官との雑談のなかで結核の話をしでやつた。それには私はわざと咳をしたり痰を出したりして体の調子が悪く結核が再発したらしくと告げ、結核の伝染性、特に患者の傍にいると菌の活力も強く濃厚伝染といって、悪質の患者になるなどと話してやつた。まだ結核が怖れられていました頃のことであるし、田舎の警官たちにはシ

ヨックをあたえたようであつた。

警察側からは私にたいし何とも言つてはいないが、私の結核話は早速に効きめが現れることになつた。私の部屋からは机、椅子などがとり去られ、これらはドアの外に置かれた。ドアは夜昼とも開け放しで、警官はこの新しい位置から私を監視することになった。また夜、私の両側に寝ていた非番の警官も布団を外の広間に敷いて寝ることになった。

第一関門をうまく突破しても続いてその他の難関があつた。階段を降りたところのコンクリート廊下の側に小さな別室があり、深夜でも二人の警官がいて電話の交換業務をしていた。また本館の玄関口に向つては、やはり何人かの警官が寝ず番勤務についていた。だが彼らは皆、私の脱走路の廊下にたいしては背を向けて坐つていて、そして最後的に外に出るために構内から町中に消えてゆかねばならなかつた。警察はコンクリートの高い壁で囲われていた。これは裏の方に自動車の出入りも可能な通用門があるのだが、頑丈な観音開きの扉がついていた。これにはカンヌキがあつたので、これに足をかけて飛び越そうと思つた。電話交換室の状況や裏門のことなど、便所に降りた時に充分に偵察しておいた。

しかし万々一、警察からうまく脱走できても当然警察は大騒ぎになり非常警戒を張つて追跡してくれるだろう。私はまず呉市の裏に聳えたつている灰が峰のなかに滑りこむこと、この山の中から毎日人目につかないよう何日もかけて目的地に辿りつこうと計画していた。目的地は一応広島と忠海を考えた。私ひとり隔離されていたので、呉の仲

間のうち誰と誰がやられているか見当もつかなかつたが、留置場そして道場にまでも検挙者を収容していたところをみると、相当の者がつかまつているものと思われた。広村小学校の先生、城戸薫の家が最も適当だとも思つたが、あるいは検挙されているかとの不安もあつたので、ともかく一刻も早く呉から離れようと思つた。

広島を自差すにしても、忠海を自差すとしても、それぞれ一長一短があつた。

忠海は呉から近い。私が長い間生活していたところで町なかの地理にも明るく、山伝いに潜入すれば、町に入つてからは人目もあるが割合に容易にたどりつけると思つた。そしてまた、飛びこんでゆけば助けてもらえるかと思われる、しかも警察が夢想だにしないような有力な人を知つてゐた。しかし私の顔はよく警察方面にも知られており、当然非常警戒も敷いているだろうとの不安もあつた。

忠海には私はまだ一度も行つたことはない。この町には当時京都帝大生で検挙、釈放されて自宅謹慎中の山中という者がいた。家は忠海で下駄屋商売を手広くやつていると聞いていた。この山中の家までたどりつくことも考えた。呉から忠海までは大体海岸沿いに行くことになる。私が忠海に潜入することは警察によつては予想外とも思われたが、途中が長く、多勢の人目に触れる心配があつた。また今でも山中が自宅に謹慎中かどうかとの不安もあつた。

私はほぼ広島行を決めていた。

前にも述べたが私は食事の時以外、一日中手錠をはめられていた。鍵がなければこの手錠は容易

にはそれるものではない。何かで手首のところを

隠すにしても途中で人に気づかれると大変なこと

になる。しかしこれには一定の仕掛けをして、簡単にはずれるようにしていた。

懐中には一銭の金もなく、全くの無一文だった。

四、脱走——成功、広島へ

時刻は深夜の頃であった。下の方から大声で男のわめき声が聞えてきた。仲間の誰かが拷問にさらされているかと思つたが、酔っぱらいが暴れていたのだろう。それからは深い眠りには入れずウツラウツラしていた。

熟睡もしないままに布団のなかにもぐりこんでいたが、コツコツと階段を歩く靴音が聞えてきた。夜中でも上役が巡回してきて、監視状況をみながら机のうえの用紙に判子を捺して帰るので、それかと思つた。しかし目を開けて肩越しに監視の警官の席をみたら、ひとつの椅子はカラになつており、もうひとりの警官は目を瞑つて座つていた。

咄嗟に私はチャンスと思った。落ちつけと自分に言いきかせながら素早く布団をふくらませ、中に潜つているように見せかけて、草履を突っかけ物音ひとつ立てないよう、踏む床板も注意しながら動きはじめた。広間の音の軋む床板まではキヤツチしていなかつたので、これは釘の打つてある場所を踏むことにした。階段を下りはじめたが、監視官には全く気づかれなかつた。階段下の電話交換室の警官も背を向けていて、すぐ傍の廊下を

通る私に気づかなかつた。

私はかねての計画どおり便所近くの裏口通用門まできた。さてカンヌキに足をかけて越えようとして、よくみたら、どうもこの觀音開きの頑丈な鎌前がついていたが、全然噛みあつていなかつた。手をかけて引くと音もなく開くのだった。

大通りに出たので私は早足で歩きはじめた。そして最初の曲り角を折れ、尻からげして灰が峯を目がけて一目散に走つた。手鎌は即刻にはずし袂のなかにいれた。

朝未明の四時頃であった。各家々はまだ戸を閉めていた。少し白らんできた町中を、朝の早い新聞配達や牛乳配達が二、三走つていた。よく夜明け前の闇は暗いというが、その時刻は薄明で人気のない深夜、まして昼間などと較べて最適の時刻であつたようと思われる。

当時の吳は人口十数万の小さな都会で、灰が峯の麓から海にかけての狭い地域の人家が密集していた。警察を出てから、ものの二〇分ばかり突つ走るともう人家も跡絶えた山裾に入る。ここまで来て私は歩を緩め、しかしひたすらに頂上を目差して昇りつづけた。

人家が絶えて樹林に入る中間地帯は幾段にも重なつた段々畑になつていて、目的地に着くまでは夜中に少しずつ移動することを考えていたのだが、その間の空腹を凌がねばならないという問題があつた。私は最後の段々畑で丁度この時期に熟

しかけていた麦の穂を摘み、袂一杯にふくらませて食料に当ることにした。

山に入つてから私はひとりの男とすれちがつ

た。四〇歳がらみの男で何か山仕事でもしていたようだ。別段私は注目してみると

な様子でもなかつたが、一寸気にかかつた。

山のなかはジャングル化してはおらず、径が通じていた。履いていた草履は町なかで使わねばならないと思つて、脱いで懐にいれ、跣であつたが足裏を痛めるようなこともなかつた。

この日は朝からよく晴れていたのだが、俄に雲がかかるてきて、霧雨が降つてきた。高い山のなかでは、下からみると雲がかかつた景観となることもある。降りつづく雨ではなく、いつ時ものらしく思えた。その通りだつた。

私は警察を出ではじめて腰をおろし、ひと休みした。この場所からは遙か遠くだが彼方に広島の町も眺められた。そして行き先は広島に決めたが、サテこれから強行作戦で一気に広島に入つてゆくか、それとも何日もかけて夜少しづつ広島に近づくかを検討した。時刻は午後三時頃であつたかと思う。そして私は強行作戦を選んで山をおりはじめた。山の麓の状況も勿論できるだけ詳しく偵察した。このあたりは矢野町、坂村だらうと思つた。住民はいずれも半農・半漁で暮しをたてているところだが、人家の疎らな道を辿れば、あまり人目に触れない海岸ばたに出られ、遠浅の波打ち際に沿つて広島潜入ができると判断した。これが強行作戦を選んだ理由だつた。陽はまだ高かつたが、広島の目的地へ着くまではまだ数時間はかかるだろうと思つた。

無事成功するためには、しかし私にとつてはひとつ気がかりなことがあつた。それは私の風体であつた。私は生来の髭づらで、約一〇日間も伸び

放題のままで人目につけば、それだけでも異様ではあった。また服装は着物の着ながしで擦りきれた草履をつづかけていた。警察の手配がどの程度まわっているかわからなかつたが、とにかく人目は避けねばならなかつた。だがやはり人目に触れないというわけにはゆかなかつた。ある農家らしい家の前を通りいたら、ひとりの主婦が表に出てきたが、私の方をジロジロ見るのだつた。変な男がということがその顔の表情にもうかがえた。私はなるべく目をあわせないようにして平静を装つて過ぎ去つた。

警察を出てから薄明、呉の町で新聞配達などを離れたところからみた以外、広島の目的地に到着するまで間近に人に会つたのは、この主婦と、広島に入つて鉄道線路を歩いていた時ふたりの鉄道員らしい男に見咎められただけであつた。よく道も選んだのだが、好運にも助けられたかと思う。都會のなかも通りぬけたのだが、まさに無人地帯を行くということか。

広島の町は太田川という川の三角洲のうえに拡がつており、こちらからの最初の川は猿猴川と呼んでいた。目的地に到達するには、どうしてもこの川だけは渡らねばならなかつた。下流からの最初の橋は猿猴橋といつて、しかもその橋の袂には交番があることを私はよく知つていた。この橋を避けて更に川上の橋を渡ると、賑やかな町を通るので危険もあつた。しかしとにかく私がこの川岸に着いた時は日は既に暮れていた。七時であつたろうか。

広島に着いた。

太田川の一分流とはいふものの、このあたりの

川幅は相当なものだつた。一〇〇米近くもあつただろうか。水かさも相当なもので、とても歩いて渡れるような状況ではなかつた。この場に臨んではいたしかたがないので、私は川に沿つて上流に向かって歩きはじめた。

ところが意外のことには打ちあたつた。猿猴橋に到るまでの最下流に、もうひとつ鉄橋がかかっているのを発見した。ここに鉄橋があることは知らなかつた。広島駅から宇品へ向けて軍需品などを運搬するために架設されたものらしく、貨車だけが通過するものようだつた。橋の上には枕木だけが並べられており、下には流れが渦を巻いていた。

何はどうあれ私は橋を渡つた。付近には余り人家もなかつたが、それからは線路づたいに目的地に向つた。大体の見当だが、この線路を歩くと目的地へ殆んど直線的に行きつける最短距離だと判断した。

だが途中先方から懐中電灯をピカつかせながらふたりの男がやってきた。警官らしい服装をしていたのでギクリとした。しかしこの時刻、この場所にまで警察が網を張つているのも、どうかと思つたので、私は逃げだすよなこともせず、平然としていた。しかしこの男たちは黙つて通りすぎるのでなく、私を呼び咎めた。ここは人の通るところではないので、道路を歩けというのだつた。私は神妙にどうもすみませんといつて、また線路を歩きつづけた。

私は玄関で簡単に今朝、呉警察から脱走したこと、こんなことは先生に頼むべからざることを充分承知しているのだが、何とか助けてもらいたいと卒直に話した。

先生はしばらく私を見ながら無言だつた。そして、よろしい引きうけたといつてくれ、またしばらく無言になつた。窮屈が懐にとびこんだとでも思つたのだろうか。

先生はその間、更にどのように私を匿い、安全なところに送りだすかなどと思いつめぐらしていたようだ。そして具体的な方策をたててくれた。

自分の家には室内や子供もいるので匿うわけにゆかない。この近所に一軒の空家があるので、そ

五、恩師に匿われる

私の脱走行のこれまでの経過は大体において警察でたてた計画どおりに事が運んだ。

夜の九時頃であつたろう。私は自當ての恩師の家に辿りつき玄関をくぐつた。これも私がたてた計画の逃走先だつた。しかし先生が引きうけてくれるかどうか、事が事なので何ともいえなかつた。もし先生のところが駄目だつたら、やはりこの近くに住んでいる従弟の家にとびこむ第二の予備地も考えていた。

呉で私が逮捕されたことは既に先生は知つていた。然し私が警察から脱走してきたことは、何しろその朝のことなので知る由もなかつた。先生はピックリした様子だつた。

私は玄関で簡単に今朝、呉警察から脱走したこと、こんなことは先生に頼むべからざることを充分承知しているのだが、何とか助けてもらいたいと卒直に話した。

先生はしばらく私を見ながら無言だつた。そして、よろしい引きうけたといつてくれ、またしばらく無言になつた。窮屈が懐にとびこんだとでも思つたのだろうか。

先生はその間、更にどのように私を匿い、安全なところに送りだすかなどと思いつめぐらしていたようだ。そして具体的な方策をたててくれた。

自分の家には室内や子供もいるので匿うわけに

の床の下に隠れておれ、できるだけ急いでいろいろな準備をしてやろう、といつてくれた。

今朝から何ひとつ食べていなかつたが、全く空腹を感じなかつた。

少し距離をおいて私は先生のアトについて空家までいった。この空家の縁の下から潜りこみ、更にその奥の床下にいることにした。ここなら外からは全然見えない。

私はこの床下に三泊ぐらい過したと思う。先生は早朝または夜分に毎日一、二回訪ねてきて食パン、牛乳その他若干の日用品などを置いてくれた。先生がきたことは咳ばらいでわかるようにしていつたが、品物は縁の下に置いてくれていたので顔をあわすようなこともなかつた。

この潜伏場所は絶好ともいえるが、困ったことには夜、昼とも蚊の襲来をうけ、よく眠れなかつた。大分疲れていた。

最後の晩であつた。この時はオイオイと先生が呼ぶので私は床下から這い出した。先生は準備ができたといって、いろいろな品物を取り揃えてきてくれた。

大学の学生服、学生帽、シャツ等々、安全カミソリ、革靴、そして金二〇円、その他饅頭一本、便箋、鉛筆、古新聞紙、一米平方大の風呂敷等々。学生服などは中古品で、どこからかで調達してくれたものだろう。饅頭はこれ一本あれば今後いろいろ困難もあるうと思うが、それだけで一週間ぐらいは命がつなげる。古新聞は保温力があるので、寒いときに上衣の下にさしこめば野宿もできると言つた。

これまで私は先生に会つても小声で話すか、む

しろ無言で、自然と双方とも目でものを言うことになつてた。

しかしこの最後の日、私は床下から出て先生に礼を述べ、別れをおしんだ。もし天候が晴れなら明早朝、ここから出発することを告げた。

私は涙がでて、しようがなかつた。先生の目も光つていた。

先生に助けられた経緯は私はこれまで誰にも明かさなかつた。命をかけて黙つていようと思つた。戦前は要職にあつた先生の身に大変なことが起ることだつた。戦後は民主主義と変つたのだが、それでもますます要職にあつた先生に迷惑が及ぶことも懸念されたので秘していた。

その後私は東京で検挙され、呉からわざわざ特高が出来ってきて私を取り調べ、当然私の脱走の状況なども聴いてきた。相手は私の説明に納得したかどうかは別としてだが、私は先生のことは一言もしゃべらなかつた。

私はその後自由の身になつて、ひそかに数回、先生に会つた。この先生も四、五年前に亡くなられた。

私がから言つてもどうかと思うが、逃亡を助けてもらったことは先生の高貴な精神の発露であり、その一生を飾る出来事と思っている。遺族にも話して諒解されれば、秘すこともやめたいと思つてゐる。しかし奥さんも既に亡くなられ、子供さんだけなのだが、先生は家族の中でも余り話していないかつたかも知れない。

六、広島から脱出、東京へ

幸に天気もよいようだったので、私は身づくろいし学生になりすまして未明の時をとらえ床下から脱出した。深夜は不審訊問にかかる虞れもあるが、朝未明はまだ家々は戸を開き、人通りもほとんどないので一番好都合であった。

東京へは広島駅から山陽線に乗り、東海道線で上つてゆくのが普通だが、広島駅の張りこみも予想されたので、裏道の日本海を伝つて上京することにした。これには中國地方を横断するローカル線の芸備線があつた。しかしこれも始発駅は危険だと思ったので、この線に沿つて歩き、約二時間ぐらい歩いて田舎の小駅から汽車に乗つた。呉や広島から離れるにつれて安心感が加わつた。

途中で一度乗りかえをしたかと思うが、私の汽車は島取に着いた。この汽車はここが終点だつた。私は駅から出て、ここへんでどこかの宿屋へ泊ることにした。駅からかなり離れた宿屋を見つけた。長い間風呂にもはいつておらず、広島では蚊の襲撃もうけ寢不足だったので、少しノンビリしようという気もあつた。夕食もすませ入浴をして早々と寝床にはいつて眠つてた。

ところがここでも、これは一大事という事件に見舞われた。

夜中の頃、襖の外から、「モシモシ、広島のお友だちが訪ねてみました」という女中の声で目を覚まされた。そして女中が襖を開けると、その後

に四〇歳がらみの太った男が控えており、私の側までやつてきた。宿帖には私の知っていた実在の町居住、そしてその名前は変名を名乗り、広島の文理大学生ということになっていた。それにしても広島の友だちが私を訪ねてくるわけがない。一瞬に私はやられるかと思った。この男は案の定、刑事だった。

この機に及んで万事休で心臓の鼓動が停ったのかのショックだった。しかし私は顔色ひとつも変えずで落ちついて宿帖に書いたとおりの住所、姓名を名のり、広島文理大地歴科の学生でこの地帯の砂丘の研究に旅行していると言つてやつた。刑事は私の顔をジロジロ観ていたが、間もなくそうですかと言つて引きあげていつた。

サテこの事件はどんな意味を含んでいるのだろうかと思ひめぐらしてみた。刑事は一応帰つていつたが、私を確認したので間もなく警官を動員してこの宿屋を取りまくようになるかとも思つた。私は早速また学生服に着かえまたここから逃げだすことを考へてみた。しかし刑事の言うとおり単純な家出人の不審かとも思つたので、そのまま眠ることもなく夜の明けるのをイライラしながら待つた。そして早朝夜が明けるやいなやこの宿を去つた。女中がわざわざ道路にまで出て私を見送つてくれたが、商売柄のサービス以上のものだつたろう。

思うに私が風呂へ入つていた時に女中が私の持ちもののなかを見て、饅頭などがあつたので不審がつたのでは、ないだろうか。

昨夜の刑事がまた鳥取の駅に張つていて、万一見咎められてはという懸念もあつたので、私はま

た鉄道線路沿いの道路を歩きはじめた。余談めくがそのとき後になり先になりでふたり組の男がやはり歩いていた。いずれも四〇歳がらみで作業服を着ており、荷物らしいものは何ひとつ持つていなかつた。別段警戒を要するような男ともみえなかつたので、退屈まぎれにどちらからともなく雑談を交しながらしばらく同行した。彼らは下関を

発つて歩きづけ、これから東京まで歩いてゆくのだと言つていた。彼らは道すじで役所、学校、寺院さらに民家などに立ち寄り、金銭や食事などを貰つて國中を放浪しており、東京へ着いたら今度は青森まで往復するといつていて。当時（1932年頃）は世界的大恐慌の挙句で國中に失業者が溢れていて、自分たちのような男が多勢いるといつていて。

三、四時間も私は彼らと一緒に歩いたが、彼らは一寸奔走してくるといつて道を外れ、私と別れた。奔走するとはどこかえ立ち寄つて金をねだるとか、腹ごしらえすることだと話していた。

大分長く歩きづけたため、若干蒸し暑いとはいいうものの晴れ渡つた好天氣たつたが、靴が足に合わず豆をつくつてしまつた。また東京を目指して小さな駅から汽車に乗つた。

この汽車は舞鶴まで来て、そこがまた終着だつた。駅の待合室で過すのは危険なので外に出た。宿屋は鳥取で懲りているので泊るわけにはゆかなかつた。少し歩いて郊外に出て、田圃に積んであつた藁のなかにもぐつて夜を明かした。

翌朝また汽車に乗り、途中乗りかえもあつたが車中に一泊、中央線で早朝立川などを経て東京に着いた。

東京へは私は一度もきたことがなく不案内で、ましてや党は非法活動で地下深く潜つていた。どうして連絡をつけるかという問題があつた。これには一計をたてていた。学生時代、結核で京都で安田徳太郎博士に大変お世話をなつたが、このたびは神田方面には三省堂や岩波書店があるかと思つた。神田方面には三省堂や岩波書店があることを知つていて、神田駅に降りたちそつたので、どこかの出版社を訪ねねれば教えてくれることを知つていて、神田駅に降りたちは神田の鈴蘭通りにさしかかったところ、先方から学生時代に共に活動していた藻谷小一郎とバッタリ会つた。全くの偶然、奇遇であった。藻谷も當時党の活動をしていましたので、極めて簡単に私は連絡をつけることができた。

警察を脱走してからまだ何日も経つていいないが私はまた党の懷に受けとめられた。

以上

広島高等学校のころ

寺尾一幹

広島高校にはいったのは、一九二四年になりま
すか、はじめてというわけではないが、まあ普通の
学生として入った。中学生時代に、あとで運動に
はいるような必然的なものがあつたのですが。

高校一年生のとき早川義則の選挙ポスターをみ
て、その選挙事務所へいってピラくぱりや、ポス
ターはりを手伝つた。もちろん学生すがたではな
かつたですが。

ある日、選挙の演説会があつて私もはやくから
いつて会場準備をやつた。

その演説会に、広高の学生がひとりきていた。

それが守屋恒美君で、おなじ学校だから顔は知つ
ていたが、ものをいつたことはなかつた。その彼
がはなしかけてきた。彼のおやじさんは、呉工廠
の労働者だということだった。

それから広高で社会科学研究会をやろうという

ことになつた。私と、守屋君と、李永植君と三人
だつた。「空想から科学へ」などの研究会をやつた
り、組織の拡大をねらつていた。高校の下級生に
もはいるものがいて、多少組織がひろがりました。

ほかの学校のことをかんがえて、高等師範学校
にめをつけさせていたが、歴史学部の広沢君というの
がみつかつた。広島高校の、私とおなじクラスに
木下君というのがいて、それと知りあいの人物で
した。木下君は、こつちにはこなかつたが。

守屋恒美君が、高師にいる田坂君というのを知

つていて、これもこつちに入った。これが広島の
学生組織のおこりです。率からいえば、広島高校
の方が多くこれが中心でした。

高師のなかに臨時教員養成所というのがあつ
て、その学生と広高生とが私の家の近くに下宿
していましたが、その広高生と私が知りあいだっ

たので、彼を通じて臨教の学生がこつちに入つて
きました。

中学校のほうは、姐常次郎君の知りあいに、広
陵中学の吉岡道人君、師範学校に村上金彦君、服
部久雄君がいて、これらもこつちに入りました。

広高のおわりごろになつて、朝鮮で大きな事件
があつて、多くの中学生が追放されて広島や呉の
中学に入つた。広島の広陵中学や山陽中学にはい
つていたそれらのものを組織しました。広島の中
学生の組織ははやい方ではないかとも思います。

あとからきいたことですが、私たちの前に、上
級生がやはり社会科学研究会を組織していたとい
うことでした。それはまだ系統だつたものを勉強
していたわけではなかつたということです。

あるとき、広高内で弁論大会があつて、私も一
席弁じたが、古い連中がそれを聞いていて、あの

男はみどころがある。こつちの組織へ勧誘しようじやないかといつて、いたそうだが、その研究会は解散してしまったので、そのことはありませんでした。

我々がうごいていても、古い連中は知らん顔をしていました。

どこの校友会も運動部を中心で、文化的なもののは、弁論部かサークルのようなものしかありませんでした。我々は、校友会費をもつと文化的なことにつかえといったものです。

われわれの研究会は、そのうち資本論をやろうということになりました。あのとおりむつかしい本だが、別段、先生格のものがいるわけではないが、守屋君、李君、私それに高師の廣沢君くらいだつた。

あるとき、学校へゆくとあまり出席していなかつた。そのうち大勢、おくれてどやどやとやつてきた。バスがストをやつてるので、おくれたという。

それで、われわれ三人で相談して、ストの応援をしようということになりました。

当時、玖島三一君たちもつかまつていて火のき

えたような状態でした。守屋君が争議団へいって、協力させてほしいといいました。むこうもよろこんで、たのむということになりました。争議の指導といつたつて、我々に経験があるわけではないし、争議団を元気づけるていどのことしかできません。

争議のほうは、要求事項はわすれたが、大部分とおり、まあまあの解決でした。

それがすんでから、バスに乗ると、ある運転手

が争議団の活動分子だったのを、守屋君や私のかおをおぼえていて、車掌さんに「この人は料金をもらわんでもええから」といった。それから運転手や車掌にそのことがひろがって、我々は料金をはらはないで乗っていました。会社からいえば無賃乗車ということになりますが。

玖島君や街頭の連中といつしょになつて、ビラ生になつてから、ある教授が「きみらはどこの大学へゆくのか」ときいたが、きみらというぐらいだから、グループでうごいていることも知つていたようです。

ビラまきで多少かぎつけられて、高校への手がのびそくなつたこともあります、どうにか広島高校を卒業しました。

いちばんハデに活動したのが李永植君で、高校を卒業して京大にすすむとき、無試験のはずなのに李君だけは入学許可がおりなかつた。私や守屋君は京大に入りました。広島高校卒業まぎわに、下級生の増原君や河野君にてがかりができました。私が卒業してから花田君、吉田君などがあとをひきついでやりました。

私は京大で検挙されて、未決にいるとき体をわるくして、執行停止でて広島にかえりました。

そのとき、増原君や河野君が広高三年生でいて接觸がありました。

ある夏、能美島で家を一軒かりて、三、四人で合宿して、水泳をしたり勉強したりしました。増

原君のおやじさんが、息子たちは能美島へいつているといつたらしい。一週間くらいいたら、おまわりがきていろいろ聞いてきた。べつにそのときはひつぱつてゆくというのではなかつたが。

〔注〕 姉氏談「三日間ぐらいだった。峰一夫君がくる筈だが、こなかつた。玖島君もこなかつたので私は高校生と四人ぐらいた」

だいたいそれくらいが学生時代のことです。

臨時教員養成所は、府中中学出身の者がいました。府中中学から一人は広高にはいり、一人は臨教にはいりました。広高にはいつたのは妹尾大陸という男でした。妹尾君の下宿に私が本などを預けていたので、その臨教の男とも知りあいになりました。妹尾君は、こつちにはいらなかつたが、臨教の男は積極的にこつちにはいりました。戦後、こつちの運動をやつていたということですが、名前はおもいだせない。おなじ府中だから、山代さんが知つていることでしよう。

増原君は熱血漢で、一生運動をつづけるとおもつて期待していましたが。このまえ彼が上京して姐君をたずね、私のところへもきましたが、こちらの方にはいつているかどうかは聞きませんでした。

このまえ『広高五〇年史』を出したが、そのなかに学生運動の項があつて、私にも書くように吉田司君から手紙がきました。吉田君のころのことは彼がかくとして、その前のことを探にかいてく

れのことでした。そのとき吉田君の手紙に、副題として「つわものどもが夢のあと」と、つけようともうといつてきました。とんでもない。そ

んな茶化したような題ならわしはかん。今になつてみれば夢どころではなかつた。書いたものは、一字一句そのままのせてくれ。編集のほうで都合がわるいとおもつたら、没にしてもかまわないと、釘をさしておきました。できてきたのをみると、全部そつくりのつていました。あれに広高社研のことを書いておきました。

私は、京大にいつてから、まるまる一年もおらんうちに検挙されました、広高時代仲のわるかつた運動部の連中が「赤色スポーツ団」というのをつくつたので、おやおやということでした。守屋君が社交的で、いろいろの者とつきあいがあるのに、かれからそんなはなしをききました。彼等にしてみれば、正式な選手になるには力量が不足しているでしょう。当時たいていの学生が左翼化しているので、そんなものをつくつたのでしょうか。もつとも、連中は社研には入つてきました。

守屋君も京大にいつてからは社研にはいつてこなくなりました。

私が、吳にいつてからの活動費は三本立てで、ひとつは工廠の者や、本屋の田中君など吳の連中からのカンパ。そのころ月に六〇円くらいの給料から毎月ではないが、五円くらいづつカンパしてくれた。ふたつは京大の守屋君が、広高出身の大生数名からあつめてくれた。それと広島の家についてせびつたものとだ。そのころ月に一〇円あ

まりで生活できた。

私など、終始一貫しているようですが、人間といふものはよわい面、憶病な面がありますからな。

（以上、東京、神田神保町、れいめいビルにて。
なお、広高生について 寺尾氏より つきの手紙
が おくられました。）

私も憶病な面もあります。やらねばならんとおもうから、運動からはなれずやれたんじゃないとかとも、戦後もやつています。

京大にも社研には二〇〇名くらいいたのに、みんなはなれゆきました。ずっとやつているのは私くらいのものでしよう。反共になつたものも多くあります。

東京に京大同窓会の「白川会」というのがあって、あるときその会員の宇都宮徳馬が、単独でキユーバにいつたが、その報告を白川会でやつた。司会者が紹介で「宇都宮先生が……」というのがアタマにきました。おなじ同窓会員で、日の当るところだけ「差別待遇」してやがると思つてね。それきり白川会にゆきません。「宇都宮先生」が中國へゆかれるので、その送別会と帰られた際の歓迎会をします、などという手紙が白川会からきたので、「私も来月あたり中国へゆくかもしれんが、送別会、歓迎会を白川会でやつてくれるか」とねじこんでやつた。まるで会の運営がでたらめじやないかといつてやりました。なあに、私が中国へゆくはなしなどなかつたのですが。

そのくせ、河上博士の追悼会をやるから出席しろなどといつてきます。なんで奴等が、そんなことをするのか。やっぱり、ひかれるものがあるのかな。

花田起志夫のこと

彼は、増原・河野両君らと同学年。しかし、私たちが卒業したあとだつたが、決意を固めて活動してくれた唯一の同志であった。同君は卒業後、京都帝大経済学部に入学。当時、私は結核のため、刑の執行停止処分を食つて、大学病院で静養中だったが、私の制帽を彼にやつた。後上京して、党中央の軍事部で活動、検挙され、松沢病院で死去したと聞いている。その詳細を知りたいと思つているが、気になりながらも私は放任している。

李永植君 広島西警察から脱走の顛末

李永植君は、私の広島高等學校の同級生（但しクラスは別）でした。高校を卒業して守屋君、李永植君、私は京都帝大経済学部へ入学することになりました。その年は、経済学部は無試験入学だったので、一同揃つて入学できるものと思つていましたが、李君だけは入学許可がおりませんでした。当時も高校からの内申書のようなものがあつたと想像されます。

それでも李君は、私たちと一緒に京都にやつて

きて、学生街に下宿していました。学生でないの
で京大の社会科学研究会には顔を出せませんでし
たが、ある程度は左翼学生とも交際をもち、詳し
いことは知りませんが、なにやかやと活動してい
たようです。その後、彼はまた広島に舞いもどり、
活動していました。

一九三〇年か三一年頃のことです。彼は広島で
検挙され、西警察に留置されました。その頃私は
京都で検挙されて、未決に収容されていたので、
そんなことがあつたとは知る由もありませんでした。
しかし後日、私が彼と会つたときその脱走の
顛末を話してくれました。同君は今も横浜に生存
しています。活動に派生したひとつエピソード
として記します。

一九三〇年か三一年頃、彼は広島で検挙され、
西警察署に留置されていました。彼は、留置場の
なかではとにかく食事がお粗末なので、栄養物を
食わせろという要求をし、天丼やカツ丼などをと
らせることもしました。また留置しつばなしで健
康によくないので運動をさせるとも要求し、毎日
短時間構内の広場に出させ運動もさせてくれるよ
うになりました。

こうして運動にてたある日、彼はいつものよう
に、広場のなかを歩いたり走ったりをはじめまし
た。そして、ここぞと思う一瞬をとらえ、彼は通
用門をくぐり、街に駆けだしました。監視のおま
わりもいることで、一大事とばかり何人も追跡し
てきました。先頭にはオートバイや自転車もあり、
その差は詰められるばかりでしたが、署の近くの
国泰寺まできて、彼は咄嗟にその塀を飛び越し寺

院内に逃げこみました。オートバイも自転車もそ
のままで塀を越し、寺院内に入りこめないので
マゴマゴしたでしょう。李君もこれからどうする
かでマゴついたわけですが、目の前に小さな物置
風の建物があり、その出入口には一応鍵前がつい
ていたそうです。彼はこの建物のボロけた一枚の
ハメ板をはずし、中にもぐりこみました。必死に
走ったので、彼は呼吸もつまり、ハアハアという
息が離れたところからでも聞える程だったとのこ
とです。彼は手ぬぐいで口を覆い、地べたに口を
着けて呼吸することにして、音を消したのこと
でした。程なくおまわりたちも小屋の側まできて
ガヤガヤしており、この中は大丈夫かななどと言
う声もしました。彼は、はずしたハメ板はもとのと
おりにしており、鍵前もそのままだつたので、や
がておまわりもたち去りました。

よく見ればこの物置は、寺院の漬物小屋で、彼
は沢庵などをとりだし、かじつたりして日の暮れ
のを待つたそうです。夕刻、彼はシャツとサル
マタだけの出でたちになつて小屋を這いだし、寺
院の正面にまわり、参拝客を装い掌を合せ、それ
から手ぬぐいで鉢巻をしたうえであたかもマラソン
の練習をしているかのように、ワッショイ、ワ
ッショイと言いながら街を駆けぬけたとのこと
でした。

それからどこに逃げこんだかは聞いていません
が、私の家に秘かにきて、母から20円の金を貰つ
て更に遠くへ逃げてゆきました。(以上)

一九八三年一二月一日 記

広島電鉄ストライキのころ

井上 栄談

ストライキがあつたとき、一九三〇年（昭和5年）一一月二九日—三〇日、私は広島電鉄にはいつて一年ぐらいの時で、上の指導部のことや全協のことなどよくわからなかつた。二〇歳のころでガムシヤラにやつたようなものだ。

このストライキで検挙、起訴されたもののうち電鉄の従業員は中山武夫、杉野幹夫、縫部啓蔵の三人くらいで、あとは応援にきていた人が、検挙起訴された。

このうち中山武夫という人は仕事のうえでも優れた人で、いづれ電鉄の幹部になる人だとみんなからも思われていた。その人がまつさきに賃金ねあげの鬭争にうごきだしたので、みんな中山氏のまわりにあつまつて、たたかうようになったのだと思ふ。縫部、杉野という人はまだ若く、むこ

ういきも強いので、デモと警官隊がぶつかった時も相当たたかつたので、暴力行為の罪名で起訴されたのだろう。

しかし、なぜ労働者のデモと警官隊がぶつかるようになむけたのかということで私は争議団の指導部のやりかたにうたがいをもつてゐる。

私たち若いものは別動隊で、鷹野橋のちかくの別の寮に待機していた。争議団本部のものが検束されたときいて千田町の寮にかけつけたが総検束が終わつたあとだつた。

争議団の本部は千田町の従業員の寮だつた。こは池があつて、建物は池をとりまいてコの字形になつてゐた。はじめはその池のまわりをワッショ、ワッショとデモをしてゐた。そのうちデモが外におしだしたが、そこで警官隊とぶつかつた。そして総検束となつた。どう考へても、うまく

できすぎていると思う。

わたしは五条俊夫氏も知らなかつたし、全協の線がどこまでのがべているかも知らなかつた。広電のストライキでは村井一夫氏が指導部ではいちばん勇敢だつたと思う。佐竹新市氏は消極的だつたようにおもう。（了）

〔一九八〇年一月五日書きがき。井上栄氏のはな
しば4・26事件の項につづきます。〕



組合からモップル（赤色救援会）へ

仁井田 教一 談

私は「社大党」系の合同労働組合ではたらいで

いた。むかしは社会党ではなく社会大衆党といつたし、そのまえは中国無産党という地方政党だった。合同労働組合というのはいろんな仕事の労働者があつまっていた。そのころは、労働組合にはいっているというだけで工場をクビになるという時代だ。クビになつた者の解雇手当をとつたりするためにはしがかつた。

木材工場のストがあつたり、染物工場の争議があつたりした。

染物工場の争議では工場主との交渉がラチがあかず、とうとう労働者たちが「仕事をしているのはオレたちだ。オレたちで工場をつくろう」ということで、福島町のしもての土手に家をかりて工場をつくつた。しかし、労働者だけで仕事はできても、注文をとつたり資金ぐりなどできるもので

はない。とうとうつぶれてしまつた。

河原町の山陽紡績（広島紡績）の争議のとき、工場側が門をしめて従業員をそとに出さず、ぐずぐずしているとストライキにはいるチャンスを逃がすということになるので、私は工場のうらの赤レンガの、カンゴクのような壇をのりこえてなかにはいった。女工さんたちを集め、みんなの「团结の力」で工場のそとにおしだした。国泰寺のちかくの家に争議団体本部をつくつてストに入つた。

この紡績会社はこのストで、左前になり、とうとうつぶれることになつた。

そんなことをしているころ畠君が「全協にはいつもモップルの仕事をやらねばならなかつた。
〔註〕 胡川清 赤色救援会広島地方委を結成し、
一九三一年五月四日——5・4事件で検挙。

男でのう。ぼつぼつ、こだしにしか左翼のはなしをせん。彼は逃げるのは要領がえゝ。私などあとに残つてがんばつていて、いつもつかまるのはワシだ。

全協にはいれといつても、私は合法の労働組合にいるのだから、全協に入るのは、すこしまずい。それより救援活動をやらねばならん。同志たちがつぎつぎとつかまつている。その差入れもほつとけん。私は大工だから工場につとめる者より時間の都合がつけやすい。刑務所の面会、さしいれもできる。そんなことで救援会のしごとをすることになつた。胡川清君が検挙されてから私はひとりでモップルの仕事をやらねばならなかつた。

仁井田教一。一九三二年三月五日——3・5事件
に救援会責任者として検挙。

という考え方を大衆にあたえようとしたものだ。

〔一九七一年三月一七日 聞き書き〕



3・5事件で私が検挙されたとき、私の部屋の本やポスターがちばばつてある写真が新聞にでたが、母親がちゃんとその新聞を切りぬいてとつておいてくれた。新聞の記事では私が特高の刑事をなぐりつけたというように書いてあるが、あれはデマ記事だ。アカという連中はおそろしい奴等だ

〔参考〕

〔一九七一年三月一七日 聞き書き〕

一九一四年
八月 五月 広島労働組合（吉川長太郎 吉

四月二一日 本隆二）

九月 八日 広島労働組合（総同盟へ加盟）

一九二五年
五月二四日 評議会へ加盟
六月 一日 広島鉄工組合 早川ら

一九二六年
一月二十五日 広島一般労働組合（広島合同
広島鉄工合同）

一九二七年
二月一八日 労農党広島支部結成（広島一般
労組と日農県連が中心）

一九二八年
三月一〇日 3・15事件

四月一〇日 労農党評議会・無産青年同盟解
散命令

八月二二日 広島合同労働組合結成（佐竹、
吉本、畠）

二月二十五日 広島一般労組解散

新労農党準備会解散命令

政治的自由獲得労農同盟結成

広島県下の旧労農系

政農同盟広島支部（末元、玖島、
片岡、早川、畠、晒谷）

合法左派中国無産党（高津、高
橋、佐竹、吉本、上岡）

一九二九年
四月一六日 4・16事件

一九三〇年
五月二一日 広島自由労働者組合 佐竹ら

六月 一日 全労（全国労働組合同盟）結成

六月二九日 全労中国連合会（広島合同・広
島自由・福山労働）

一二月二九日 広島電鉄スト

三〇日 一二二名総検束

一九三一年
五月 四日 5・4事件

〔数本英次郎氏より〕

想い出

清水 政男

明治三六年広島尾長町片河うまれで僕も今年六
六になつた。

〔この手記は一九六九年〕

若い時代、革新的な考え方をつちかつていた関係
で、また現在も赤旗をよんでもいるおかげで大学の
問題、安保、日本の将来、はたまた人生の幸福に
ついて年輩者と意見をたたかわすことのできるの
は左翼運動に身を投じて非合法の実践の活動を経
て、獄中の貴重な体験等、現在の若い労働者の経
験していないことを体験したことがそうさせてい
るのだとおもう。

さて私は長いおもいでを書くまえに、幼い頃か
らの思い出をつづつてみよう。

父は私のものごころついた頃は自然と視力がお
とろえはじめていた。何時の頃か父は按摩を業と
して生計を立てていた。苦しい家計の連続は幼い

私の心に少しでも収入を増すよう家計を助けよう
との考えを抱かしめるようになつていて。

小学五年生になったころ、午後五時ごろから当
時胡町にあつた広島毎日新聞社に行つて夕刊五枚
を三銭で買い、一枚一銭で売つて、ひとばんに二
銭もうける夕刊売りをはじめた。残つた一枚か二
枚を広島駅にいつて、電車の終点から駅までゆく
人々に売るのに一二時頃までかかつた。当時一杯
のうどんが二銭だったが、うどんもたべずラムネ
の一本ものまず、二銭をもうけててくてく尾長の
片河のわが家までかえつていた。

夕刊を売つてためたお金が、つもりつもつて一
〇円になつた。母は古道具屋で一〇円の佛壇をか
つた。「正男やあんたが毎日毎日夕刊を売つてため
たお金でこの佛壇をかったのだよ」とよく母は私
にいいきかせてくれたものだ。

大きくなつても泳ぐこともできず遊ぶこともし
らぬ、まり投げひとつよいし子供になつてい
た。ただたんに、つれの遊ぶのをみている子供に
すぎなかつた。

六年を卒業するとき優等だった。受験準備の組

に入つて四則の応用問題を習つたが中学には受験しなかつた。それは余り家が貧しくて親に負担をかけるのが、つらかつたから……。

当時父の仕事の関係上竹屋町に移りすんでいた。一五歳だった。就職第一番目は広島郵便局の給仕だった。日給一二銭で生活は未だに楽でなかつたので京橋町へ朝3時頃起きての新聞の配達をはじめた。

一年後郵便局の通信生養成所に入つたが、二次試験の技術試験におちて郵便局を去つた。(1911年、大正8年)

その頃本家の従兄が鉄道の機関庫に入つていたので、これに入りたいと思って機関庫に行つてみたところ視力が悪かつたので不採用になつた。やむなく広島電鉄に車掌として入社試験をうけた。運よく合格したので以後半年ぐらいい電車の車掌となつた。当時御幸橋河畔で電鉄の納涼会場が出来たのを今もうつすらとおぼえている。

この秋頃だつたと思う。国鉄の列車給仕の採用試験があるとのことを聞いて、直ちに受験した。合格したので下関にいったが即日帰広するように申され、家にかえつたが生れて始めて汽車の旅をしたので、つかれたのか三日ばかり床についてしまつた。駅からよびだしがあつて行つたところ列車に乗務して車内を掃除する役を命ぜられた。

翌日から旅客列車にのつて車内を掃除する役を務める。だんだん馴れてくると、自分は駅夫待遇であること、その上級は雇員といつてラシャ服をきて金ボタンとなり、帽子も駅夫の銀色の動輪の帽章が、金の小さい動輪を木の葉みたいなも

ので囲つた帽章に変つて、小荷物掛、貨物掛、出札掛、車掌等、皆雇員の資格をもつてゐるもので、昇給もあるし若い鉄道マンにとつて、あこがれのまことであることがわかつた。それには雇員採用試験に合格せねばならんことも判つて猛勉強がはじまつた。一年たつてこの試験に受験し合格した時ほどうれしく思ったことはなかつた。小倉服からラシャ服、鍋の帽子からピンとはつた帽子、一人前の責任ある仕事をさせてもらうことなど、すべてが新しく希望にあふれた満足感にひたつてこおどりしたことも事実だらうと今は思われる。

雇員となつて車掌を希望した。紅顔の、少年が朝夕の旅客列車にのり長いプラットホームに立つて、白い手袋をはめ片腕を水平にあげて、ピリピリッと笛を吹いての発車合図、列車が動きだして、さつととびのつて又片腕を出して前後の車掌の安全確認合図、列車が駅長の前を通過する時の別れの合図——など年老いた現在でも当時を思ひうかべて、すぎと青春の思い出に胸のたかなるのをおぼえるのである。

高等小学校卒業後すぐに、東京神田駿河台の正則中学講義録をとつて独学していた自分は、何とか物足らなく感じ、いつの頃か中学教科書によつて勉強していた。鉄道省中央教習所に入学できれば任官も早いし試験も中学卒業程度とのことで、これだこれだと最終目標を掲げて、ふんどしをしめなおした。やがていくつの年だつたか門司に第一次の試験をうけにいったがダメだつた。

私が二五の時父は死んだ。父の四九日もこぬうちに、たよりにしていた弟が死んだ。弟は親戚の時計屋につとめていて店主の信頼をえており、私は

にも世間のいろいろの問題についてよく話しあつて相談相手であつた。

「もう東京へ行つて勉強するのはよしてくれ。あとに残つた弟や妹の面倒をみてくれ。あんただけしかたよるものはおらん」と母は哀願した。私も覺悟して「今後試験勉強はよそう」と堅く決意した。(1928年、昭和3年)

私の向学心はその後もやむべくもなく、早稲田の文学講義録を求めた。

(円本) 日本文庫全集 世界文学全集を求めていた。

駅前の本屋、駅の売店、プラットホームで立売する新聞雑誌の中にも戦旗、プロレタリア短歌、詩集がめだつてふえてきた。

〔注〕一九三〇年の頃広島県山口県は一括して門司鉄道局管内。
一九三一年(昭和6年)全協広島地協結成の頃
国鉄の組織は松本武司が新原博ほか四名と、全
協・日本交通運輸広島支部・国鉄分会結成(中国
新聞5・4事件発表記事)とあります。

左翼運動に入る

そのころ広島駐在車掌詰所へ列車掃除夫としてはいつて来た岩村大次君と顔をあわすようになつた。岩村大次君は私といつしょに乗務したときなど直ぐ車掌室にやつてきていろんな話をしてくれ

た。

「それでも長いものにはまれるということがあるではないか」と反論すると

「いんにやあ そうぢやあない」と私をときふ

せるように話しつづけた。

我々車掌詰所は広島駅階上にあって、車掌監督のもとに車掌として貨物列車乗務車掌、旅客列車乗務車掌、荷扱専門車掌それに貨物列車乗務の貨物荷扱手（ハッピをきて停車駅で貨物のつみおろしを指示するもの）、制動手（広島糸崎間の匂配線に貨物列車の制動をする人）、旅客列車乗務の掃除夫など二〇〇名ばかりいた。

これらの部下に業務上の注意の伝達機関として時折り乗務員会を車掌監督の指示のもとにひらいていた。

そのころ合理化とかいつて配置転換の風説がつたわっていた。誰がどこに転勤になるのだろうか、転勤になる対象人物は？ よく欠勤するもの、成績不良のもの、よく列車乗務にのりおくれるもの——どうか等々、種々憶測され、ことに貨物荷扱手など戦々競々だった。われ乗務員は駅勤務にくらべて乗務旅費（約20日）というものが支給されていたから駅勤務に転出されることは、それだけ収入減になる。まして貨物荷扱手など相当の年輩者で家庭持ちは多かつたから尚更であった。

その時期に乗務員会がひらかれた。みんなのはかたゞをのんで車掌監督以下助役並びに内勤諸氏の方に一齊に視線をむけていた。誰か何かを発言するかと見守っていた。会場は重い空氣にみたされた感じだった。

私がたつて、「今、広島車掌監督室の定員は何人

ですか」と問うた。みなは思いもせぬ者がだしうけに急所をついた質問をしはじめたので異様の感にうたれた。定員は一般には知られず所謂高等政策の極秘になつているものだつたにちがいない。その定員を公表することによって、現在人員からひけば増減はおのずと判明するし、まして配置転換、過剰人員の何名かはわかるからだ。

助役は突然の質問に当惑らしく、監督に近寄って、何かこそと返事をすべきか、せざるべきか協議しているらしく、監督は「この事は協議して答えるかどうかきめます」と答えた。

結果は清水というものがあるいみでクローズアップされたのみで、みなにとつての心配のたねは解消されなかつた。

乗務員会の外、弁論部というものがあつた。出演弁士は殆んど業務改善についての発言が多かつた。私は「生活をみつめて」と題して特異の演説をした。内容は貨物列車に乗務中、食事をするとき、お茶、水の一滴も口にすることができず、のどにつまらせてつばで御飯をのみくださなければならぬこともある。また冬に貨物列車に乗務したときなど、タダンひとつ暖では足をあたためることはむづかしく、トンネルにはいつたとき、ドアをあけて機関車がはきだす煤煙で顔を暖めている状態であること、などをはなした。数学を教えてくれていた藤井助役が「幹部にきらわれることはいわんほうがええ」とたしなめてくれたことがあつた。

新谷繁松君については当時アナキストとして、あまり相手にしなかつたようと思う。だが『無新』地の広場で石炭箱の上にのつて、なにかアジ演説をしていたのを見たことがあり、その後地検の人が人力車でのりこんできて、家宅捜査をしたとはなしをきいたことがある。こんなわけで今は年も三〇歳前後だったので、彼は大先輩のつもりで

国鉄の同志たち

車掌所の同志として今は故人となつた新谷繁松、五日市の山本質、徳山の長沼富美雄、スポーツマンの山県貞一、新谷七蔵、小倉某、杉山國雄、伊川明、今はなき広島操車場車号掛松本武司などがいた。

松本武司君の連絡で旧一中のグラウンド付近で他の組織の同志たちとあい『無産者新聞』を手に入れ、前記の同志諸君の胸乱の中に入れていた。また全協のビラも手に入れていた。

いつだつたか、岩村大次君と山県貞一君が東京の国会議事堂でビラをまいたとかで、二人とも鉄道を首になつた。山県君のお母さんが當時ぐちをこぼしておられたのを、うつすらおぼえている。岩村君は広島にかえつて我々を指導していた。オルグとしてだろう。読書会をひらいたり職場の不公平不満、要求を記した機関紙を二度か三度発行したようにおぼえている。

新谷繁松君については当時アナキストとして、あまり相手にしなかつたようと思う。だが『無新』地の広場で石炭箱の上にのつて、なにかアジ演説をしていたのを見たことがあり、その後地検の人が人力車でのりこんてきて、家宅捜査をしたとはなしをきいたことがある。こんなわけで今は年も三〇歳前後だったので、彼は大先輩のつもりで

我々に接していた。

広島駅うらの客車を洗滌するあたりで、山本質、杉山、長沼、清水ほかだれだつたか、腕をくみあつてたところを写真にとつたことがある。この写真をだれかがもつていて、パクられたとき、うごかぬ証拠を当局にぎられたことがあつた。

松本武司君が当時国鉄関係以外との連絡を主としていたらしく高天が原へも一、二度つれだつていつたことがある。連絡のきれたときなど、つきの連絡を指示してくれていた。松本武司君がわが

家を訪れ、うどんを一杯たべにいつたとき、彼は当時流行していた「酒は涙かためいきか 心のうさの すてどころ」の歌を小さい声で口ずさみながら自分にいいきかせるように歌つた。いちど松本は比治山に私をさそつて、党員にスイセンするといつた。そのとき「肉親の情をたちきることが一番むつかしいのぢやあ」と党員となる条件のきびしさを縷々説明した。

そのころ日本紙にガリ版すりの美しい字の『赤旗』を手にしたことがある。

玖島二一君の国会か県会に立候補している（獄中立候補）のを知り、彼に投票したこともある。

やがて伊川明君は大畠駅の貨物掛に、新谷繁松君は神代信号所の助役に栄転した。

いつの頃からか「3・15 うらみの日」の歌や「鬼怪者 去らば 去れ」の歌など「ずさむようになつてた。静岡の高等学校の学生が拷問にたえきれず、警察の窓からとびおりて死んだとかきいて「同志は倒れぬ」の歌を思い出した。

話は前後するが、山県貞市君が在職中だつたと思うが、ふたりして何のビラだつたか忘れたが、

駅から大須賀の鉄道購買部、寮へかけてビラを貼つた。山県君は鉄道の者に見られてはいかんと思つてか「おい清水もうやめよう」、「いや、まだまだ」と度胸がすわってきて、目につきやすい場所を求めて貼つていった。山県君はいつのまにかにげてしまつた。翌日昨晚貼つたと思うところを、それとなく歩いてみるとけいにはがしてあつた。特高がはがしたのだろう。

おもいだす人々

松本武司君と牛田にいつたことがある。立派な家だつた。その家の父は町内会長をしているとかいつた。その子息が、市川忍君という通信関係の同志だつた。よく筋道のとおつた話をしてくれた。

事件後同志たちとともに応島保護観察所で市川君にあつたとき、むかしの理路整然とした話ではなくくすこし変だなあと思った。きけば岡山の方の刑務所にいたとか。まこと変になるのはむりもない。刑務所は人間を馬鹿にする所だからなあと思つた。

いつの年か、はやく暮れかかる秋の夕暮、ちかよらなければそれとわからぬ時刻、ひとりの同志がおとずれ「おい、この手錠をはずしてくれ」と耳もとでささやいた。みれば両手にガツチリと手錠がはまつているではないか。どきつとした。

「大畠駅の伊川明を知つてゐるか。なにかももらつたか。なにかわたしたか」だつた。はあはあ一特高だなあと直感した。

質問はこれきりだつた。「まあ、あんたのところに行こう」

前の食堂でカレーをくわせて私の家に直行した。私のうしろに二人ついて家にはいつた。二人は本箱の中をいちいち探してた。特高は「きがえをひとつ」と要求して、母はおろおろしながら、

つかまらんように、はずしてくれる同志のもとまで無事にたどりつくまで……彼のすがたが、今までなくなるまでのりつづけた。

私も二八になり、そのくれ妻をめとつた。いつも枕もとに『第二無新』をおいてみていた。女房はいちべつしたか知らんが、みようとはしなかつた。だが身辺はいつもきれいにしていた。

三〇のとき、長女が生まれた。渡辺政之輔の妻、丹野セツ氏にあやかりたいと「セツ子」と命名したが、おいしいことに原爆でなくなつた。今生きておれば三七になつてゐるはずだ。（この手記は一九六九年六月九日記）

検 拧

手拭、石鹼などフロシキにつつんで私にわたした。すぐ帰るからのうと、ひとこといつて、またしていた自動車にのつて二時間ばかりして柳井へいった。

警察

日暮前だつた。どこだらう。ひとけのないガランとした室がいくつもある建物であつた。あとでわかつたことだが、柳井の廓の性病治療所であつた。翌日から特高二人に私服一人の三人で、竹刀をもつておそいかつた。尻をなぐる。股をこづきたく。最初のものだつたら、ほんとうにいっどんにどぎもをぬかれる。ひと晩のうちに、股などはれあがつて紫色にかわつてしまつた。

軍隊では、ビンタなどはられて古参上等兵などから無理難題をいわれ、ずいぶんいじめられて今でもその野郎をみたら半殺しにしてやりたいともつていると、糸崎の合宿所でよく貨物荷扱手の一年先輩の人があなしていたのをおぼえている。

「この特高野郎いまに見ておれ。おれの天下になつたら、いの一番にかたきをとつてやる」とおもつた。くる日も、くる日も残虐な仕打ちはつづいた。

しかし多勢に無勢、時の権力に抗しきれず白状した。他の同志に對してすまないとおもいながら……。今この文をかきながら涙は頬をつたつて、とめどもなく原稿の上にながれおちる。

何日かたつて柳井警察署に連行された。署内に

はいると、杉山國雄君のギヨロッとした眼が私をみかえた。はつとした。杉山がきている——なら、山本質君も長沼富美雄君もよばれたのだろう。根こそぎやられたなア——と思つた。

丁度そのとき岩村大次君が、うしろ鉢巻をして歯をくいしばつて眼で合図しつつ階段をおりてくるのに出会つた。無言の再会だ。はアーよく頑張つてゐるなあ……と。

柳井署の階上には署長がかしの木剣をもつてま

ちかまえ、他の野郎が竹刀をもつての訊問だ。

『赤旗』のガリ版をみただろうと、おそいかかつた。このガリ版を手にすること自体が党員たるの証拠である。また治安維持法にふれることになり、起訴するに充分な資料となるものであつたらしい。

かしの木剣は針をさすようにいたかつた。所からわず木剣でつき、死の一歩前までくるしめる。また新しい紫色から黒色に皮膚はかわつていつた。歩くのに苦しい幾日かがつづいた。

何日かたつて私ひとり平生の警察署にたらいまわしだ。いなかの署だけあつて留置場がすくなかつた。ある日特高の野郎がきて床の上に雨下駄を逆において、その上に正座させて訊問をはじめた。

そのときの苦しさは、その下駄を特高の顔をめがけてなげてやりたい気持ちだつた。

二、三年まえか、山口県委員長になつてゐるとか。あのおとなしい、どちらかといえば、無口のように思つていた若い二〇歳前後のことしか知らぬ自分にとっては、奇異に感じた。ご健在でご奮闘をいのつてやまない。

いつの日だつたか拷問のつづいた警察から別れ

の日がきた。私服につきそわれて署をでた。久しぶりにみる柳井駅前の広場、いつもとかわらぬ広場だがみている自分にとつては今とらわれの身、空は晴れていても何だか暗い感じのまぶしい広場にみえた。駅では誰にも会いたくない気持ちだったが、幸い顔みしりの誰にも会わなかつた。

大畠駅停車中でも、みなれた風景だつたが、感じるのはちがつていた。岩国刑務所は横山拘置所だつた。

独房は奥行き九尺ぐらいだろうか。入口五尺だろ。畳が一枚。窓の下のすみにかめ——壺が一個、ふたがしてある。あけてみたら便器らしい。水がめ一個、茶碗、はし、丼、ふとんなどがある。独房だ。そこから山の中腹だろう木立のみどりが眼に入る。拷問からのがれて一寸安堵の思いだ。あぐらをかいて坐る。そなえつけのしようもない本に目をとうす。時には入浴するのが唯一の楽しみになつていて。浴場から帰るとき吉浦の駅手だつた山田喜一君に偶然あつた。山田君は私が呉線に乗務していたときに、よくしつついた。どうして左翼運動をしていたか今どうしても思いだせない。全然知らぬ。

そのご、ふたたび顔をあわすことはなかつた。きけば執行猶予にならずカマつたということである。

二、三年まえか、山口県委員長になつてゐるとか。あのおとなしい、どちらかといえば、無口のように思つていた若い二〇歳前後のことしか知らぬ自分にとっては、奇異に感じた。ご健在でご奮闘をいのつてやまない。

それにも長く拘留だ。更新の判決を幾度か

獄中

69

もらつた。共産党事件は長くなるものと覚悟はしていたが、なんと長いことか。無為にすごす日が幾十日とつづいた。声帯もかれてきた。言葉を発する機会もなくなると自然声帯もかれてくることがわかつた。

一度母と、子供をおぶつた妻が面会にきた。

私はあみ笠をかぶり手綱をはめられたまま看守につきそわれて面会室にはいった。私の姿身なりをみて、母も妻も泣きふした。

その後のあらまし

(一) 秧放後、あくる年(1934年昭9年)妻が死んだ。

(二) 裁判所の廷丁を一年ほどやつた。

親類に看板屋をやっているものがあり、そこに見習にゆき半年ほどして自分でやることにした。はじめはへたで白島町の金魚屋の看板がフナだか金魚だかわからぬものになり、あべこべに金魚屋からなぐさめられた。

年あけて上村進氏、布施辰治氏ら自由法曹団名入りの弁護する旨の書類をうけとつて我々の公判に弁護してくれるものと知った。だが公判廷には出席しなかつた。

公判廷で検事は懲役二年を求刑した。判決懲役二年、四年間の執行猶予であった。

秧放は伊川君といつしょだった。外はよい天気だ。まぶしいばかりの太陽がさんさんと照る日だつた。伊川君はよく肥えて口ひげのが、すこしが青白くみえた。私もそうだつたろう。

お互に元氣でやろう。ご無事での……と西東に別れた。それきりあわんが、元氣かしらん。由宇で八百屋をしているとかきいたが。

そのころ若い同志たちによつて、私の家を広島生活擁護同盟の本拠として発足した。

近くの商店をあつめて税金攻勢に対抗して組織し、学習会をひらき、元の兵器廠との税務署にデモをかけた。無茶な家財の差し押さえには即刻出むいて税務署員に談判し分割払いによる納入で保証人となり、自動車につみこんでしまつた家財をとりかえなどしたものだ。

いまは強力な民主商工会となつてゐる。

(六) 昭和三〇年(一九五五年)田中町自治会ができて会計庶務部長などやり「子供の幸福を守る会」の運動をしている。

秧 放

一九六九年六月九日記

山田喜一氏より

四月一〇日付の御手紙拝見していました。何分にも選挙のさなかで返事がかけませんでした。

先ず質問からお答えいたします。吉浦駅にいたのは天野健一君です。天野君は山口県防府市出身で吉浦駅に勤めていました。現在防府市に在住し、戦後私と一緒に労働組合運動、党活動をやり、一九四九年八月通をレッドページになり、その後中小企業を転々としながら今も党籍をもつています。

私は最初から国鉄三田尻駅で出札をやっていました。

(三) 芦溝橋事件、日支事変、太平洋戦争と戦局が拡大してくるころ、特高が足しげくやつてくるようになつた。

戦局が終末をつげる——空襲がはげしく、灯火管制が毎夜のようにつづくころ二女は疫病で死んだ。

(四) 長女も、家屋とりこわしのあと瓦はこびに学童、学級先生とともに働いているとき、原爆の一閃で国泰寺あたりでなくなつた。

(五) 戦後の横暴な徴税にはなやんだ。一萬円があくる年は二〇万円もふつかれられたものだ。

岩村大次君と連絡がつき、文化運動から全協国鉄分会、党にはいり（1932年3月頃）その年八月に岩村、清水、伊川、山本君らと共に検挙投獄、岩國少年刑務所拘置場に伊川、天野、清水同志と共に一年三ヶ月ばかりいました。岩村君は本場拘置場に分離されていました。私と岩村君が被告で、伊川、天野、清水三君が一グループでした。公判は相前後しておこなわれ、一審判決は岩村六年、私が二年。天野君は二年半で一審「服罪」しています。伊川、清水君は執行猶予になつたようです。私と岩村君は控訴で、広島控訴院では一審通りの判決で共に「服罪」しました。

伊川君は御承知の通り由宇町で荒物屋をやり現在由宇町議ですが党籍はありません。

岩村君とは今でもつきあっていますが、清水君には会つていません。当時広島キコの山本君という人がいました。この人の消息がよく判りません。清水君のガリ版刷りの「想い出」なつかしく拝見しました。御連絡の節はよろしくお伝え下さい。

いつせい地方選舉、共産党の躍進で留さんも大喜びでしょう。山口県もお陰様で県議一人の再選を辛うじて確保し、市議では八市一八人の全員当選をかちとりました。

これを機会に御覗懇にお願いします。

お互に、またたく間に年をとりました。しかし新しい民主主義革命の達成の日まで寧日ないのがお互様です。

御自愛の上、御健闘の程お祈りします。

一九七一年四月三〇日

呉の本屋のころ

田中 豊談

わたしは呉の川原石でそだつた。中村定男君とは鉄道線路をはさんで、あっちとこっちに家があった。私は明治四二一年うまれだから中村君より、ひとつ年上だ。母親どうしが友だちなのだが、子供のわれわれは、鉄道線路ではなれているから、あそびなかまのグループはちがつていた。

家はまだ左前になつていなかつたから、上の学校にもゆこうとおもえは、ゆけたのだが、私は商売のほうがよいとおもつて、友田書店の小僧になつた。のちに私が運動に足をつっこんで、検挙されたりするものだから、父親は店の一軒でも持つたら、すこしば責任をかんじて、おこないもあらたまるだろうと、友田書店の主人に相談して、支店を買いとつて田中書店にしてくれた。

呉工廠の首切反対闘争のときから、古末憲一氏

といつしょに運動するようになつて、いろいろとおしえられた。「けつして力以上に無理をしてはいけない」という人生訓といったものは、そのちも守つて商売にも生かしてきた。

首切反対のピラを、われわれはいくつかのグループにわがれて、はつてまわつた。ある日、わたしはピラはりをおわつて、何くわぬかおで店にいると、むこうの交番に人だかりがしている。のぞいてみると、ピラはりにいつた別のグループの一同志がつかまつていた。

私はすぐに自転車にのつて、古末氏のアジトにいった。このアジトは私だけしか、知らないことにしていた。つかまつたときの用心だ。

古末氏は大阪の西成の診療所へ紹介状をかけてくれた。私は家へも店へもよらず、そのまま大阪へとんだ。しかし大阪ですぐつかまつてしまつた。

ある日外出してかえつた私は診療所の玄関さきで、特高刑事とぶつつかつた。

私のにげるあとから、特高が「どろぼうだ」とおつかけってきた。私は「どろぼうじやない。共産党だ」とどなりながら走つた。しかし、踏切りのところで、電車がとおつて通行止めになつてゐるのでつかまつてしまつた。

警察ではさんざんなぐられた。しかし、呉から手配があつたから、つかまえたものの、大阪の方では何を調らべるのかわかつていなかつた。ただなぐるだけだ。

そのうち呉署の特高が、やつてきた。特高の取り調べでは、かたほうの奴がさんざんなぐつて、かたほうの奴がやさしく「おためごかしに」、はやく白状したほうがよいじやないかというのだ。呉署からきた奴がそのやわらかいほうの役だ。

「おまえ、このままだと、ころされるぞ。呉署につれてかえってやるから、いいかげんに白状して調書をつくつてしまえ」といった。

大阪から刑事につれられて汽車にのつたが、刑事は「古末のアジトはどこだ」ときいてきた。

「古末？ 古末というのは知らんが」と私がいうと、いまままでいそのよかつた刑事がすこしむくれたような顔をした。

広島駅で呉線にのりかえ呉駅につくころにはくらくなつた。呉駅のてまえの川原石の私の家の、かどぐちは「田中氏」の提灯がだしてあるのがみえた。呉駅には両親がまつていた。しかしその足で、わが家にかえれるわけではない。

呉署での調らべでは、第一に古末氏のアジトをいえというのだ。テロ係の奴が、すごいんで、やわらかい役の奴が「大阪であれくらい、やられたのに、うたわなんだから、ここでなんぼたたいてもいうわけはない」といつて「はやく白状して、でたほうが、ええとおもうがの」などといふ。おどしたり、すかしたりというところだ。

そんなに何日もがんばりとうせるものではない。もう古末氏のアジトをかわつたとおもうころ「白状」した。特高はすぐとんでいつたが「もぬけのからだ」とかえつてきた。「おまえ、もうにげたと思つたから白状したんだろう」とおこつた。

それからも何度も特高につかまつた。父親の死んだ時も特高につかまつていた。留置場から刑事につれられて家にかえつた。父親の顔には白い布がかけてあつた。

家から出て留置場にもどるとき、刑事が、「どうだ、おもしらしつたか」といつた。「おもしらしつたよ」

と私は刑事にいつてやつた。わするものかとおもつた。

釈放されて家にかえると、親類の連中があつまつていた。親類代表という老人が「田中家の一族には、國をひっくりかえすというような、おおそれた人間がでたことはない。また、ひっくりかえせるものでもない。それに、おまえは本家の長男ではないか。弟や妹やそのほかのものの、めんどうをみなれりやならんのだぞ」というようなお説教だ。

私は家をとびだして「職業革命家」というものになつてやる——くらいの氣でいた。

「わしを廃嫡ということにしてくれ。弟に家をつがすか、妹に養子をとつたらええ」といつたら、としよりがおこりだして、

「家をでるんなら、このわしをころしてからにせえ」と、仏壇においてある白ざやの短刀をぬいて、畳のうえにつきさすというさわぎになつた。これじや、家をでるわけにもゆかなかつた。

私の田中書店（中通りにあつた）にも特高が、見張りをつけるようになつた。むかいの家の、二階のおもての間に、特高がはりこみをしていた。

だれか同志が本屋に連絡でもとりにこないかとアミをはつっていた。私が店からでかけるとついてくるのだ。

店は雑誌など、たくさんつみあげて、客の出入りは多かつた。

水兵だつた阪口喜一郎君は客のようなかつこうで、ぶらりとはいつてきて、店の雑誌など立ちよみしてから、私にはなしがけてきた。私は阪口君を知らない。店ではなにもはなせないから、しめた。

しあわせてそとであつた。党へ連絡をつけてくれ、というのだ。

阪口君はからだの大きい男で、もののいいかたも、ぶつきらぼうだ。私は「刑事ではないか」ともおもつた。「党へレンラクをとつてくれ」などといつて、オルグをつりだしにかかっているのではないか？ 私がまよつてるので、阪口君は何度もきた。妻君の野村梅子さんもきた。

私はオルグの寺尾一幹君に相談してみた。「とにかく、いちどあつてみよう」と寺尾君がいうので、ある喫茶店で、私がおもてにピケにたつて、阪口君をオルグの寺尾君にあわせた。

あとで寺尾君が「かれは大丈夫だ」というので、そのあの連絡はかれらにまかせた。

工廠の川窪鉄之助君や、重田安一君も、古末君や岬常次郎君に、レンラクをつけた。

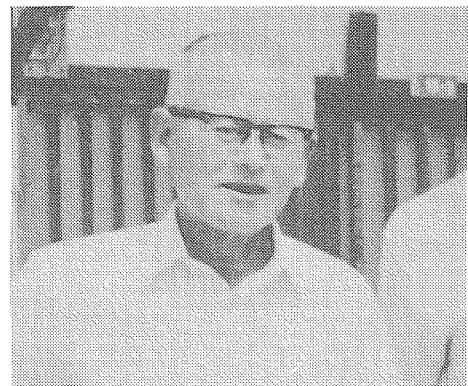
川窪君はエリートというような人だつた。重田君のおとうさんも工廠の役付き職工だつたが、工廠をやめてからは孫をつれて漫画の本などかいにきたものだ。

「満州事変」がすすんでくると、本屋の商売もだんだん左前になつてきました。10・30事件のあと再建のためにきた党のオルグ関谷源一君には、カンパといつてもろくにできないようになつてゐた。特高の圧力もきびしい。紙の統制や本の販売統制もきつくなつてきた。とうとう本屋をやめることにした。

中村定男君のおかあさんに弁当をつくつてもらつて、中村君とふたりで土方仕事にいつたりした。それからつてをもとめて、中國にわたることになつた。(了)

『唸るクレーン』のこと

重田安一談



戦後まもなく広島市の三菱造船の造機部にはいり、土肥浅市君などとおなじ職場ではたらいていた。土肥君はもうなくなっているがこの副組合長をしていた。村上経行君、土肥君と私の三人で「細胞」をつくり、それから党員もふえていった。野村秀雄氏も演説にきてくれた。党員が百名くらいになつたころ、レッドページでみんなやられた。そのページ反対闘争以来まだこうして社宅にいすわっている。家賃は一五円だ。会社はうけとらないから、供託している。

「火焰ピンをつくっているだろう」というので、私と恵子は検挙され、家宅捜査で『球根栽培法』などを押収された。

私はすぐ出てきたが、むすこは釈放されず、私はむすこの差し入れや公判闘争のしごとにおわれたものだ。

戦前のことだが、広島消費組合のものと、消費組合をやめていた豊田茂とのあいだでハカリを借したとか、まだもどさんとかいつてゴタゴタがあり、消費組合事務所にあつまつていた私たちは全部検束された。神崎宇市君だけうまく逃げて、私の家にとびこんだ。そのとき、東京の消費組合からきた津田和治君と私だけ、ナワをかけてしばられた。それをみていたむすこが「おとうちゃんが、しばられたあ」とワアワアなきだした。そのむすこが、さつきいつたむすこだ。

革命前のロシアだつたか、親、子、孫三代の活動家というのがいたというが、なかなかそこまでゆかないものだ。

『唸るクレーン』の投書を職場からあつめるには、私は「顔がきいている」からあつめやすかつた。海工会の役員に一二七票で当選していたのだ。おやじも工廠の役付きだつたが、例の工廠の大量解雇のときに首になつた。

「こんど新聞をだそうと思うんじやが、なんかかいとくれんかいの。職場の不平不満なんか、そのはかなんでもええ」と投書をあつめてまわつた。

呉工廠細胞機関紙『唸るクレーン』は、私が工廠の砲撃部に旋盤工ではたらいていたころ出たものだ。寺尾一幹君のほうでつくつて、こっちにま

田中書店の田中豊さんが畠常次郎君をつれてきた。そのとき、畠君が青年同盟にはいつてくれといつて、私は「はいります」とこたえ、畠君が「ありがとうございます」といったのをおぼえている。

あるとき畠君が寺尾一幹君をつれてきて、「こんどから、この人が呉のほうをやることになったから」とひきあわせた。それからは寺尾君と連絡をとるようになった。

寺尾君と工廠へビラまきにいったことがある。寺尾君は工廠の壙のところで「ここからさきは君がはいって、ビラをまいてくれ」というので、私はビラのたばを壙の上におき、壙をのりこえて中にはいり、工場のなかへビラをまいた。

私の職場は砲熒部。そこで砲身を旋盤で削っていた。もうひとり同志がいたが名前はおもいだせない。(了)

(一九八〇年一月六日の聞き書き)

『聳ゆるマスト』の人々

稻垣甚松
宏

ともかく、それはつぎの詩である。

軍艦の細胞だ
日本ではじめてだ
そしてこのガリ版は
カンバスの枠で

このぼくが作ったんだ」と

〔「ぼくらの年代」から〕
菅原克己

(大平出版社発行 『日本反戦詩集』
より)

マストについては、よくおぼえて
いないが、昭和七年八月ごろ、平原
君が広島から上京し、党命で横須賀
のオルグにおくりだされていたので
彼の手で一・二号くらいは『聳ゆる
マスト』の横須賀版がだされている
はずです。三号位でているかもしれません。
君がみたのはそのうちのもの
でしきょう。詩の作者その他につい
ては心当たりはありません。

平原君ならおもいだすかもしれません。

そこで、平原甚松君に「そびえる
マスト」という詩の要点をかいて、
問い合わせてみた。私はまだその大

私は木村莊重氏にといあわせてみ
た。

た。

私は木村莊重氏にといあわせてみ
た。

た。

私は木村莊重氏にといあわせてみ
た。

平出版社発行の本をかつていなかつた。

三、平原甚松氏からの手紙

冠省

一〇月一八日づけのお手紙拝誦いたしました。お名前はうけたまわったことがあります、どおも思い出せません。失礼ですがおゆるしください。

さて、おたずねの名称は『聳ゆるマスト』です。「そびえるマスト」ではない。現在の当用漢字にはないが、漢字で「聳ゆる」です。題字の下の絵のカットは戦艦のやぐらマスト（檣マスト）のシルエットで、そのため、「マスト」の三字は黒地に白ぬきの篆朝体ゴジックでした。「聳ゆる」の字は天空にあたる部分に位置した。

この名称（平原案）は軍艦細胞の編集会議に提案し採択されたもので、その他にも「潜望鏡」（阪口案）「水兵」「戰艦」など、いろいろ提案されたが、吳海軍工廠の全協機関紙（注、工廠党細胞発行の工場新聞）『聳るクレーン』とのこともあり結

局『聳ゆるマスト』に決定されたわけでした。

軍事部オルグであり、水兵出身で事情にあかるいため私が中心になつて編集会議 原稿あつめ、印刷、配布などやりました。印刷はシンバの

留守宅など転々いたし、けつしてアジトではしないことにしていました。旬刊でした。編集会議のこと以外は、地区オルグといえども知つておらず、どこでどんなことをして発行しているか、私以外のだれも知つておりません。党軍事部は特殊活動であつたため、厳格にこれを守つておりました。

菅原という人の詩が眞実を表現しているかどうか、明確に断じかねま

すが、水兵としての私の体験と知識から、当時呉軍港以外のところで『聳ゆるマスト』が発行された事実はない信じています。

横須賀軍港へオルグとして私が派

遣され、まもなく軍細胞は結成しましたが、細胞機関紙は発行するまでにいたつていづのまま、熱海事件で

私が検挙されました。検挙された後、私の補佐役をしていた高橋という同志（検挙をまぬがれたが、約一年頃後検挙された模様）がいて、私のあとをついで組織づくりをした様子

で、この同志が発行したのかもしれ

ません。しかしこの人は社会運動のキヤリアがあつたので、機関紙の理論をしつている筈なので、呉軍細胞機関紙と同一名称のものを横須賀軍

細胞に採用することは常識的に考えられません。

戦艦「山城」（横須賀籍）の乗組員

が東京の高円寺の下宿先で娘に手製の謄写機を自慢しながら、細胞機関紙を刷つたという詩は、現実の事柄をふまえて書いたものではないと思

います。

詩は詩であり史実ではないので、あまり気にしないほうが賢明でしょうが、御疑問がおありのようですね

で、私なりの見解をのべておきましょう。

（一）この詩の作者菅原という人は海軍の状況を知つておらない人だとおもいます。

（二）艦艇からの上陸者は普通夕食後上陸、外泊し、翌朝食までにはかならず帰艦しなければなりません。戦艦「山城」は横須賀所属で

あるので、これらの乗組員は当然

党中央委の担当者が史実調査をやればいいのですが、仲々手を出さないですね。のろい話です。

草々。

一〇月二二日

平原 甚松

〔注・一〕 水兵は、陸軍の兵士とちがつて、演習後の上陸日にはかな

り時間のゆとりがあつたようです。あとにある稻垣元兵曹、小倉元水兵の聞き書きをみてください。

〔注・二〕 「下宿さきの娘」と平原氏はうけとつてあるようだが、この女の人は党関係のプリントをやつていた人です。このことは、菅原克

以上要点をつかんでお答えをしておきましょう。これ以外に世に知られていないこともあります。語れば現存する人が迷惑することもあり、検察当局とのこと也有つて、胸をひらいて語る時期でもないので、それはそれでまた語る日が来るでしょう。その時また。

私は、本年五月末役場を退職いたしました。現在のんびりやっています。では粗文をもって御返事まであります。

てあったので、下宿先の娘に手製の謄写機を自慢するなどの無防備な党員はいないはずです。

己氏の別の詩からもうかがえます。
いつだつたか『赤旗』に彼女の手記
か談話と写真がでていました。

四、前田文二氏の手紙

一月一六日づけの広島民報に、

原田弁護士事務所から、五人の水兵
の判決文を中心として

『呉軍港における太平洋戦争前の
海軍工廠の労働者と 水兵の革命
運動』

のパンフレットを作つて一一月一二

日の総評弁護団第一三回全国総会の
参加者、呉市民をはじめ広範な人々
に読んでもらおうと三、〇〇〇部作
成しているとある。三四年かかっ
て、まとめたと記事にはあるが、今
までさっぱりうわさはきなかつた
ので一寸おどろいた。一部一〇〇円
くらいで発布するらしいので二〇部
申しこんでおいた。

申しこんでおいた。
送つてきたらお送りします。

一九六九・一一・一七

前田文二

閻兵 同四年 北田健一。特務艦朝日海軍二等機
官内謙吉。呉海兵團海軍三等看護
兵曹

佐藤 疊。呉海兵團海軍一等水兵
稻垣 宏。呉海兵團海軍一等看護
兵曹

同四年 小倉正弘。予備役海軍二等機関兵
同四年 稲垣 宏。呉海兵團海軍一等看護
兵曹

○水兵たちの経験

一九一二年（明治45年）二月二
四日生。高小卒業後、名古屋
中央電話局技手見習となる

一九二七年（昭和2年）六月、
志願兵として呉海兵團に入

淡水工業学校を中途退学

一九三〇年（昭和5年）一月、
呉海兵團に入る。その後軍艦

「那珂」「白鷹」にのる
「那珂」「白鷹」にのる

木村莊重などと連絡をとつて

活動。

○押収された文書

『聳ゆるマスト』第5号（15部）

『赤旗』 第6号（45部）

第93号付録（2部）

第95号（45部）

第96号付録（2部）

第97号（1部）

稻垣宏 呉海兵團海軍一等看護兵

第98号（2部）

稻垣宏 呉海兵團海軍一等看護兵

第99号（1部）

稻垣宏 呉海兵團海軍一等看護兵

第100号（10部）

稻垣宏 呉海兵團海軍一等看護兵

る。普通科電信技術、練習生の課程をおさめ、駆逐艦磯波の課程を終り、翌年（昭和6年）よりプロレタリア文学をよむ。海軍二等主計兵山下達吉をして、共産主義を信じるようになる。

（注）山下達吉、神戸三菱造船職学校鑄造科生徒より志願兵として海兵團にはいる。

田建一 特務艦朝日海軍一等機関兵

一九三〇年（明治45年）四月二九日機械工北田伊和二の二男としてうまれる。神戸三菱造船職工学校を卒業し神戸三菱造船所内燃機科職工となる。一九三〇年（昭和5年）六月、志願兵として吳海兵團にはいる。軍艦「矢矧」海兵團にて特務艦「朝日」のりくみとなる。

一九三一年（昭和7年）一月、さる、阪口喜一郎（予備役海軍二等機関兵曹）としりあい共産主義に共鳴するようになる。

〔注〕　ここで軍法会議の裁判官は北田機関兵について注目すべきこととをかいている。「北田は早くから労働運動を体験し、現資本主義にあきたらず、その欠陥は資本家の横暴なる搾取によるとして左翼思想をいただいていた。」

二年一昭和七年六月下旬)。オルグ
林は「坂口君はいまひとりで海軍
方面の活動をしてるので、いつた
しょに活動してほしい」といつた。
木村は広島にすんで活動すること
になり、七月上旬入党した。

七年九月一八日(ごろ)
木村莊重からの文書はカフェー
の女給をしていた佐藤静江を通じ
てうけとつていた。
そのころ軍艦「白鷹」で士官ど
もが夜中に酒をのんでさわぐの
で、ある水兵が「しづかにしてく
れ」といったところ、あべこべに
「注意をうけた」。

〔注〕 山下達吉、神戸三菱造船職工学校铸造科生徒より志願兵として吳海兵团にはいる。

一九三〇年（明治45年）四月二
九日機械工北田伊和二の二男
としてうまれる。神戸三菱造船
船職工学校を卒業し神戸三菱
造船所内燃機科職工となる

志願兵として吳海兵团にはいる。軍艦「矢矧」海兵团をへて特務艦「朝日」のりくみと

○水兵たちのうごき（判決書にかかるもの）
んでいた。そののち木村莊吉としりあい専ら共産主義の文
献をあつめてよんでいた
一九三二年（昭和6年）六月末
検察官の取り調べをうける。
る。

(二) 山下達吉海軍二等主計兵は共産主義思想をいだいているというので、兵役を免除されて予備役になつてゐたが、下宿さきがわからぬので木村莊重やオルグはしきりに彼のゆくえを探した。

(三) 小倉正弘は軍艦白鷹のりくみのころ木村莊重から『銷夏快適の

小倉正弘はこのことを「士官の兵員にたいする压迫だ」という原稿にして木村莊重にわたし、これを『聳ゆるマスト』六号にのせた。た。

一九三二年（昭和7年）1月、
る、阪口喜一郎（予備役海軍
二等機関兵曹）としりあい共
産主義に共鳴するようになる

(一) 予備役になつたばかりの一等機
関兵木村莊は、すでに前から予
備役になつてゐる二等機関兵曹の
阪口喜一郎から、共産黨中國地方
オルグの林を紹介された。(一九三

ユーモア全集』という左翼文書をうけとつたが、そののちも『聳ゆるマスト』『文学新聞』などを木村北田機関兵に、軍艦「白鷹」で轟詰義國一等水兵にわたした。(昭和

ちかくおこなわれる海軍小演習中に上官に不当な処置があつたときは、これをとらえて抗議運動をおこすこと。

現役満期を強制的に延長させようとするに反対の気勢をアジ

ること。

(五) そのころ兵役満期になると水

兵たちはひごろのうらみをはらす

ために隊をくんと上官に暴行し

た。これを「バレ」といった。こ

のさい「満期者に職を与えるよ」「満

期強制延期反対」のスローガンの

もとに統制をとつて鬭争すること

を小倉、木村、錦織は協議した。

(六) 一月三日木村莊重、小倉正弘

などが会合して、おりから入港中

の艦隊の乗組員に同志の獲得につ

とめることを協議した。

また、ちかく小倉機関兵は満期

になるので佐藤水兵が文書の配布

の一部をうけもつことになった。

同日木村莊重のすすめで小倉正

弘は入党。

〔注〕 以上が判決書にかいてある

小倉機関兵の行動である。この文章

でみても人間として当然の行動だが

小倉機関兵は六年の刑をうけた。

(七) 木村莊重は日本の農村青年の海

軍に志願兵として入る数の増減と

景気の変動とを比較して統計をつ

くることを考え、「海軍志願兵の入

隊前の職業別、学歴別調査」をな

るべく広範囲にわたって行うこと

を、宮内謙吉三等看護兵曹を通じ

て、稻垣宏一等看護兵曹にたのんだ。

稻垣兵曹は海軍部内の左翼思想をもつてゐるものを見つけて木村

莊重に知らせることを約束した。

(八) 宮内謙吉兵曹は広島市の木村莊

重の家にいつたとき原稿用紙に小

説をかきうつすことをたのまれ

た。これはオルグ林が党中央への

報告に暗号として使うためのもの

であるが、その小説の文字に印を

つけて暗号とするもので宮内はこ

れをかきうつして渡した。

以上、判決文のおもなものをか

きぬいてみた。

六、『聳えるマスト』の詩の

作者からの手紙

以上が判決書にかいてある

小倉機関兵の行動である。この文章

でみても人間として当然の行動だが

小倉機関兵は六年の刑をうけた。

〔注〕 『聳えるマスト』の詩がのつてい

る『日本反戦詩集』の出版社にこの

詩のことについて問い合わせていた

ところ、年をこして一九七〇年のは

じめ、詩の作者から手紙がきた。そ

れはおもいがけないような——しか

しながら期待していたような手紙だ

った。

今日出版社の人からお手紙をお借

りして拝読いたしました。あの詩は

「ぼくらの年代から」という九つの

連詩の中の第三番目にあたるもので

す。当時、ぼくは『兵士の友』とい

う共産党軍事部の新聞のプリンター

をしておりました。あれはたぶん昭

和八年の九月ごろだったとおもいま

す。『兵士の友』のカリ版をきりなが

ら、軍艦『山城』の細胞新聞『聳え

るマスト』のことをしり、たいへん

感動した。そのことを書いた詩です。

よくじらんになれば、おわかりにな

ると思いますが、

軍艦『山城』の乗組員が

艦内細胞をつくる

その機関紙は『聳えるマスト』

というが導入部の説明で、二字さ

げにして、次の二連目がぼくのこと

になるのですが、

ぼくはその記事を切った

場所は高円寺。

つまり『聳えるマスト』をつくつ

たのではなく、その記事(『聳えるマ

スト』がでたという記事)を『兵士

の友』のプリントであるぼくが切

つたということです。しかし『兵士

の友』のことなどどこにも書いてい

ないので、『不審をもたれるのはも

つともな事で恐縮しています。

ぼくはその後、いわゆる「共産党

スパイ事件」なるものにぶつ

かり、そのあとから『赤旗』のプリ

ンターになり『赤旗』終刊号まで運

命をともにするのですが、かつての

軍事部長であつた小畠達夫という男

がスパイで、その男が査問委員会で

変死したという事件はぼくの「青春

をゆるがすような大きな出来事でした。それが「ぼくらの年代から」と

いう連詩の主題になつたわけです。

この三番目の「そびえるマスト」が

反戦詩集にくみいれられることは知

らなかつたのですが、おそらく岡本

潤さんが推薦なさつたのだろうと思

われます。この詩集はぼくの第一詩

集『日の底』に入れてあります。こ

の詩は戦後回想の形式でかいたもの

ですから『敗戦の部』に入ったので

しよう。

呉の原田さんが出されたという

『水兵たちの軍法会議の判決記録』

は手に入らないものでしようか。ぜ

ひ読みたいものと思つています。そ

れから遠い昔のこととで記録ちがいか

も知れませんが、その水兵さんの一

人は河田という人ではないでしょ

うか。もしその人がしたら、その人の

兄さんは昭和九年ごろ東京の消費

組合運動でりあつていたものです

から、なつかしい気がするのです。

ボウバクたる年月をこえて、いま

い時代のことが思いだされたりません。

昭和四五年一月二〇日菅原 克巳

〔注〕 「河田水兵」は横須賀軍港で戦艦「山城」の中で逮捕された。戦艦「長門」で吉原水兵、戦艦「榛名」で西氏水兵も同時に逮捕された。機関紙はだしていない。

詩集「日の底」より

菅原克巳氏の『聳えるマスト』がのつていて『日の底』は一九五八年の発行なので、あるかどうか、といあわせたら、すぐおくつてくれた。その詩集をみると――

「ぼくらの年代から」というところに、九つの詩がある。

第一の詩。党へもぐりこんでいたスパイが死んでいるという新聞記事。「そいつの部下がぼくだつた……」摘発されたスパイが死んでいた／いまここで／ぼくが待っている男」第三の詩。「聳えるマスト」

まだガリ版づくりをした娘のことは「練馬南一丁目——戦前の赤旗を見て」という詩にでている。

終刊号までの
「赤旗」がある

これは僕と、ちい公と呼ぶ娘がプリントしたものだ。練馬南一丁目のわが家そして、いつさいの僕の、光の、存在理由はここにあるのだ。

——おう

庭のプラタナス、ポプラ
棕梠の木、八重桜よ
夏の燃えたつ空
古びたオルガンよ

そこで

昼、僕らは鉄筆の音をたて
笑つたり、怒つたりして。
(いまも よみがえる インクの
匂い)

機織りにも似た手製の騰写機の音)

この男がスパイ小畠達夫だろう。
「あから顔で小ぶりの手が小さく白い男。東北なまりがある」と別の詩にかいてある。

思議だつた……

この男がスパイ小畠達夫だろう。
「あから顔で小ぶりの手が小さく白い男。東北なまりがある」と別の詩にかいてある。

七、平原甚松氏の手紙

この娘のおもかげをつたえる詩がおわりの『日の底』にある。「散文詩」というのだろう。

それは古い機織りのような音だつた。おれと、一人の娘が贋写版で新聞を刷っていた。娘は色が黒く、眼と眼の間がはなれていて、一寸

小狸のようなユーモラスな顔をしていました。おれたちは刷りながら、いろいろなことを話した。娘は遠い南の島の生まれだといった。バナとかパパイヤの話。夜空にあがる爆竹の音。……と、そこへ突然あの男があらわれた。あから顔の、ひげそりあとの濃い男。なぜ彼が来たのか、わからなかつたし、どうして仕事場を知っているのか不思議だつた……

阪口喜一郎君は獄死し家族も不明で資料がすくないため粗漏にあつかわれがちですが、大切な役割を果した同志ですから、まことに済まないが心しておいて下さい。

（マスト）に関する資料に失礼ながら筆を入れておきましたが加筆の通り修正してほしいです。

阪口喜一郎君は獄死し家族も不明で資料がすくないため粗漏にあつかわれがちですが、大切な役割を果した同志ですから、まことに済まないが心しておいて下さい。

明で資料がすくないため粗漏にあつかわれがちですが、大切な役割を果した同志ですから、まことに済まないが心しておいて下さい。

お願い申します。

一九七〇年一月三〇日 平原甚松

松本清張『昭和史発掘』に、10・30事件のときの党の軍事部長は長谷川茂、組織部長は紺野与次郎である。同書によれば平原氏たちが検挙されたのは熱海温泉の伊藤別荘でひらかれた全国代表者会議。スパイMの連絡ですでに特高が一〇月二十六日ごろから隣の旅館にはりこんでいた。党中央では、あぶないとおもい会議の中止をきめたが、それを知らずにきた十人の代表者が、一〇月三十日の夜明けに警官隊にふみこまれて逮捕されたとある。党中央部のもの

年一〇月三〇日事件（熱海事件）以後のことでしょうか。私達が坐した、いわゆる熱海事件もスペイが喰いこんでいたため比較的重要。ボストにいた連中がつかまり、党が全般的な打撃を受けたわけでした。

逢った党軍事部長は長谷川茂（捕えられ、あとで本名はわかつた）でした。スパイ小畠達夫はこのあとの軍事部長でしょうか。即ち七

見給え
ここに

一七三号から

もこの日東京、鎌倉でつかまつた。SPAINからすべてつつねに警視庁特高課にしらされていた。

八、平原甚松氏のはなし

一九七〇年三月一五日広島市の「解放運動無名衛士の碑」のまえで、平原甚松氏、小倉正弘氏（現石飛）にあつた。一九三八年にあつたきりだから、三二年ぶりである。

ついこのあいだ町役場を退職したという平原氏は色も白く髪もふさふさしている。土建屋をやっている小倉氏は日にやけて、まっくるだ。

無名戦士の合祀祭のあと近くの広島屋にあつたが、自動車を運転してきた小倉氏はまもなく光へ車でかえつていった。小倉氏とはまた会うこととして、平原氏から、あのころのことをきく。沢山の人があつまっていたので、ききもらしもあるとおもう。

『聳ゆるマスト』について

呉工廠の工場新聞（党細胞発行）

の『聳ゆるクレーン』は一九三一年（昭和六年）ごろから出ていたとおもう。

われわれ水兵の新聞も、あの『聳ゆるクレーン』にまけないような、「詩的な」なまえにしようと『聳ゆるマスト』にきまつたものだ。

『聳ゆるマスト』のガリ版はだれがきつたものか、わからない。寺尾一幹君はガリをきれいな筈だし、それに呉地区全体を指導しなければならないから、いそがしい。

『聳ゆるマスト』は第一号から私がガリを切つた。つかまってから特高が「へたくそな、ガリ版じやのう」といつたほど、私の字は、まずかつた。木村君のたのみで古田君が原稿をきつたというのは、五号から六号のことではないかとおもう。

阪口喜一郎君のこと

彼はひどく用心ぶかい男で、なるべくおもてにてて活動するようなことはひかえていた。本来なら彼は私より先輩なのだから、自分がさきにたつて動くのだが私をひっぱりだして先頭にたてて動かすようにした。

阪口君と私は、ほとんどおなじころ上京したが、そのとき彼は木村莊重君にあとをひきついだものだ。

私が広島の拘置所にはいつたとき、むかいの房にカスリの着物をきた古末君がおり、また近くの房に阪

口君がいた。阪口君は房のとびらをガシガシたたいてあはれていた。私などでも、やかましいと思つたくらいだ。

そんなことから拘置所の看守ともの暴行をうけて、ついに殺されたものと思う。

大井という看守長がいて、学校出だというがなまいきな奴で、ほかの同志もこの大井に暴行をうけたものが多いが、私の房にもきて「おまえも阪口のよう殺してしまつてもいいのだぞ」と、おどし文句をいつたことがある。

阪口君は家族もないらしいが、下宿さきの娘と結婚したいと思うが、どうだらうかと私に相談したことがある。私は、運動にプラスになると思ふなら結婚したらよいし、プラスにならないなら結婚しないがよからうとこたえたことがある。

呉の町に田中という本屋がありて、それが組織に連絡をつけてくれる場所になつていた。

私が上京して党の軍事部長の長谷川茂にあつてみると呉の組織状況もじつによく知つていた。陸軍の航空隊に組織があることも話してくれた。呉の様子はオルグから中央に報告がいつていたのだろうと思う。

私は熱海事件で検挙されたとき

は、たいして調べられなかつたが、そのあと呉の特高の調べになり、口をわらないものだから、ひどくやられた。いまでも傷あとがのこつている。

昔のおもいでをかけと、せめられるが年をとると涙もろくなつてね、むかしのことがかきにくく。自慢ばかりのようになるしね。それから入獄中は、救援会の天津せい君や岡本菊次郎君などの人たちに、ほんとに世話になつたなあ。

呉海軍の思い出

平 原 甚 松

昭和四六年（一九七一年）六月
七日

から八月中旬に呉海軍刑務所に收監され、法務官の本格的な取調べをうけることになった。これが呉海軍社会科学研究会事件で、この社研グループが母体となつてのちに呉海軍水兵対策委員会が生れ、党に連絡をつけ組織化され、対策委は発展的に解消し、呉地区軍事部がうぶごえをあげ、ユニークな党活動を本格的に展開したのである。

二、軍事部が生まれるまで

昭和四六年（一九七一年）六月
七日

から八月中旬に呉海軍刑務所に收監され、法務官の本格的な取調べをうけることになった。これが呉海軍社会科学研究会事件で、この社研グループが母体となつてのちに呉海軍水兵対策委員会が生れ、党に連絡をつけ組織化され、対策委は発展的に解消し、呉地区軍事部がうぶごえをあげ、ユニークな党活動を本格的に展開したのである。

(一) 党外組織であること。
(二) 細胞結成までの暫定性
であること。

(三) 各艦艇、陸上部隊内
織をつくること。

四 艦隊、予備、陸上別
結成すること。

の戦争論現状に対し智恵の大要つぎに組織を的な組織に外郭組事件後のことであり困難ではあつたが軍隊内の主要メンバーとは連絡がとれ、海員組合刷新会出身で組織づくりに経験のあつた山口君等優秀な者七、八人で、地味に着々と建直しをはじめ、影響下をせんじ拡げていつた。強い権力の圧制下における

一九三一年（昭和6年）八月上旬、
阪口、西川両兵曹、平原、山口、若
林、各水兵らが治安維持法違反被疑
事件で検挙され、阪口兵曹のみが呉
軍法会議の留置場に残されたまま、
その他の者はみな憲兵隊や軍法会議

この海軍社研事件で阪口、西川、平原の三人はこの年一〇年下旬ごろ相前後して赤化思想奉信者（海軍では当時こんなにいっていた）というレッテルをはりつけられ、兵役の免除をうけ社会にほおりだされた。その直後この三人で呉海軍水兵対策委員会が結成され呉軍港内の海兵の結

一、このあらまし

一九三一年（昭和6年）八月上旬、阪口、西川両兵曹、平原、山口、若林、各水兵らが治安維持法違反被疑事件で検挙され、阪口兵曹のみが呉軍法会議の留置場に残されたまま、その他の者はみな憲兵隊や軍法会議

この海軍社研事件で阪口、西川、平原の三人はこの年一〇年下旬ごろ相前後して赤化思想奉信者（海軍では当時こんなにいっていた）というレッテルをはりつけられ、兵役の免除をうけ社会にほおりだされた。その直後この三人で呉海軍水兵対策委員会が結成され呉軍港内の海兵の結

この外に組織の防衛を早急に建直しを図ること、小児病的な行動を行わないこと、などの申しあわせのあつたことを記憶している。

向として人間関係の線をたどって、組織化を手工業的に行つてゐるのが通則である。労働組合も、一般的な同好会すらない軍隊内では、この対策委のぐるりのメンバーも、同年兵、下級兵、下士官などの人間関係の日常生活の線をたぐつて種々の手法で影響下を次第に拡げ、組織化を図つていった。

集再建を図る一方、他方では自主的に党との結びつきを求めて阪口を中心的に積極的にうごきはじめた。

曹で、組織にとって期待のもてる人であつたが、刑務所の独房の苦しかった生活が心身にこたえたか、出獄

後は万事がひっこみ思案になり全く
覇氣を失っていた。このことがその後軍事部より党活動を要請してもこれに応えず、ドロップアップしてしまい、郷里の山中で一炭焼き人としておわらせる結果となつた。実においことをした同志に落伍されたことはを共にした同志に落伍されることはないことをした同志に落伍されることはない戦列にとどまつてゐる者にとつて実際に淋しいものである。

して、党との結びつきの案件が残つていて阪口君と平原は鳩首相談しつた。

七月上旬（平原が社研事件でつかまつた直前）夏休暇を利用して大阪市港区の全協フラノヨノに連絡を取る。

キヤップが結びつきえたのである。両者の度々にわたる打ち合わせにより、話は急速に具体化し、組織はすすめられ、呉地区委員会の一翼に重事部が構成され、初代の責任者に阪口昌がつて、ぞから阪口書一郎

憲兵や特高の目が光りだし、活動にも制約をうけるようになつたと感じた。とつた彼は、そのころ生活費のくもんに郷里に帰つていた平原を電報でよびよせ、「尾丁がつづくよら」から舌刀をと

なのに、よく来てくれた」と大変喜んでくれた。こんなに同志よりもさきにも、これがはじめてであつた。

君は党軍事部の産みの親であり創設に大きな役割を果した者の一人である。

海軍を追放されると早速、呉市内の山手に家を借りて、阪口君は生命保険の外交員、妻君は日の丸デパー

トの売子で生計のめどをたてたが、阪口君はひとすじに党活動に専念し、外交員の収入もほとんどなく、

生活は随分苦しくて妻君は職も外れてもなく生活費の算段にはしりまつた。この妻君は野村梅子さんといい、彼女は毎晩おこづかに通う妻君

彼が海軍時代にいた下宿先の養女で、母の反対をおしきつて恋愛結婚した文学少女で、阪口君をよく扶け

苦悶を禁じたが、のちに未済因として最も腐心する予審中の彼に離婚をせまり、苦悶の追い打ちをかけた。

三、「聳ゆるマスト」の創刊 前後

前後

注意を払いながら再三に亘つて連絡をとり続けた。

軍事部専属の活動家としてはたら
きだした阪口君の身辺にもようやく

やれるところまで、やってのける
気がまえで平原は、やる気十分。ま
ず吳署ちかくの自転車店の二階に下
宿している山下達吉^{タカギ}二等主計兵をそ
つと訪ずると、彼は目をまるくし
ておどろき「ボリ公かたの横で危険

やれるところまで、やってのける
気がまえで平原は、やる気十分。ま
ず畠畠らかくの自云商店の二階にて

もつだまのすわつた水兵さんで、『從ゆるマスト』の拡大に、たいへん力をそそぎ、しかも編集に対する意旨も積極的におこない、みずからもペルンをとつて寄稿し、行動力のある同志だった。そのほかの同志にも順次連絡をつけて、顔なじみの連中のなかには、社研事件の見舞をいつてくれるものすらあつて、心はむすばね固まつていつた。

の吉原君である。そこで平原は早速
阪口君に連絡をとつて、このことに
ついて合議をはかつた。山下君、山
口君にもそれぞれ個別に相談した。
みな双手をあげて賛成。(ここまでは
たやすくはこべたが、サアこれから
が大変だつた。印刷機がない。ロー
ラーもない。印刷インキも紙もない
肝心の配布網もできていらない。これ
らの諸材料を市内で購入すればアシ

がつく危険性が充分ある。そこでポンポン船にのって、一日がかりで市外へ買入れにでた。その材料でコツコツ音のせぬようボール紙で手製の贋写機を造り具体的に活動をおしすすめることは、実にたのしいものである。印刷の準備は万事OK。

『聳ゆるマスト』の編集方針はあらましつぎのとおりであった。

いという。やむなく、その代役を阪口君にたのむと「オルグがそんな無責任なことでは駄目じやないか」としぶい顔で早速原稿をくれたのは有難かつたが、その原稿の内容が、マルクスだ、レーニンだと、その引用文が多く術学的でそれに朱筆をいれるのにほねをおつたのを今でもおぼえている。

たものは三〇部余りであつたろう。
そのご、この水兵さんたちの、うは
が案外によくて配布網のメンバーか
ら増刷の申し入れなどがあり、第三
号ごろからであつたろう漸次部数を
まして七〇部一八〇部くらいにふ
え、平原がとらえられたころには一
〇〇部ちかくにのびていつた。
号をかさねて三月をむかえたある

○日寺尾脱走)
この脱走のあおりをくらつて平原は〇月の上旬、市内の街頭でついに呂逮捕されるにいたつた。ただちに呂署特高の部屋に引きずりこまれ、木刀、竹刀、皮スリッパなどを持ち、四、五人の私服がおそいかかり、なぐる、けるのかぎりをつくされ、私はこのテロでぶつたおれてのびてし

三、三頁は下士官、兵の待遇など
に関するもの

四、四頁上段は軍港のトピック的なもの。下段は必読書の紹介と
編集後記的なもの

五、其他文章を平易に、記事は具

には貧弱な印刷物ではあつたが、な
かみは反戦問題を中心多彩な記事
がのり、啓蒙書として水兵達に人気
があつた。特筆すべきことはこの機
関紙が海軍部内の下士官、兵からの
執筆寄稿を中心編集されていたこと
である。このことは党のあゆみに
とつて決定的に重要なことである。

れ、地区委員会もカラッポにちかかたが、ただ軍事部のみは例外的に健在で、『聳ゆるマスト』を通じ傘下はしだいにふえつつあつた。

取調べがすすむにつれて『簞ゆるマスト』がオルグ寺尾君のアジトから押収されていること、関係被検査者はオルグ寺尾君のみであること、軍事部の組織については知つておらないこと、平原が左翼運動に関係はあるだろうと推測はしているが、目

はじめてで調子がでないか、たのんでまわった原稿がしめきりまでにしてこない。かけずりまわるが海上からの上陸兵には階級に応じて、それぞれ制限があつて、上陸日まで待つよりほかはない。

原稿依頼、原稿あつめ、もちまわり編集会議、校正、ガリ切り、プリント、配布、反響調査など、ずいぶん手工業的な労働と時間をかけ、発行まえはテンテコまいであつた。

『聳ゆるマスト』の創刊号は一九三二年(昭和七年)一月に発刊され、

この検挙をまぬがれた同志たちは組織のたてなおしに危険をおかし、心血をそぎ、もとめられて平原も個有の軍事部以外の任務にかけずりまわっていた。そんなてんやわんやのおり突然オルグの寺尾君が留置場から脱走したと、同志から情報がも

創刊号の巻頭をかざる「発刊の言葉」をオルグの寺尾君にすでに依頼してあつたので、街頭連絡でこのことをいつたが、彼はまだ書いていな

約四〇部くらい配布していた。もつとも、そのうち五部はオルグ寺尾君に上部機関への報告用として手渡していたから実際に軍隊内部に配布し

たらされた。ボリ公の非常警戒がまだつかまつていなことが、確認されてその無事をいのつた。(五月三

り込みがついている。あきらかに泳
がせて いるのだ。特高は陰陰で、沖
断させておいて、平原が活動をはじ
めるその現場をとりおさえ、再検査

にもつてゆこうとするもくろみのようであった。すきをぬつて軍事部のあるメンバーに連絡をつけ、平原の現況を報告し、外部の状況をききとり再会を約しころおきなく呉を去つていった。

平原が検挙されたのちは平原にとつてかわり阪口がふたたび軍事部の責任者となつた。この六月の下旬島根県の木村莊重君をよびよせ彼を軍事部のあとがまにすえ、阪口君はほどなく呉から出奔した。

バトンをうけついだ木村君が責任者となつてからつづいて『聳ゆるマスト』は再刊されはじめた。

のち組織の要請で平原は上京して中央の軍事部長、長谷川茂君らと画策し横須賀軍港へ軍事部の組織のためオルグとして派遣された。

非合法時代のことであつて自己以外の人々の活動については判然としないことが極めて多く——ですからこの『聳ゆるマスト』に関する記述は平原が関与し、観た『聳ゆるマスト』のあゆみであつて、再刊以後のことについても大体のことを知ら

四、若干の補足

ぬでもないが、正確性を欠く危険性があるので、あえてさしむかえておいた。したがつてこれは『聳ゆるマスト』のあゆみのひとこまにすぎません。この観点にたつてお読みいただければ大体ご理解ねがえるのではなかつた。この『聳ゆるマスト』はいろいろといたづらされ、さわがれてしまつたが、正当な評価をいただくために若干の補足をつけ加えておきます。

(一) この機関紙は特定の指導者によつて俗にいうところの「させたり、やらされたり、まるのみ」したことは一度もない。また原稿も地図地方のオルグから寄稿されたことは一度もなかつたし、編集についてもオルグの取捨はうけなかつた。

軍隊という特殊なところでの活動であつた関係から一堂に会した編集会議は殆んど不可能にちかかつたから、持ちまわり決裁で合議編集が行われ、いわば集団編集であった。ここにユニークさがあり民主制が成りたつており刮目すべきよさがあり、水兵にひろく支持された所以である。

(二) 『兵士の友』は党中央委員会軍事部の機關紙であり『聳ゆるマスト』は覚興地区委員会軍事部の機

(三) 阪口君や私が軍事部で活動していた当時の、同志やシンパ、進歩的な方々で多く検挙をまぬがれたりお答えしておく。

関紙であつてその役割は異なつた。これら機關紙の創刊は『笠ゆるマスト』が『兵士の友』より先行していた。一部の人々の疑問にお答えしておく。

人々がおられる。それは単にのがれただのではなく願いは反戦の旗をおしそすめていただくためだったのです。阪口君などは死をもつて守りぬいております。どうぞここにおまいをいたして下さい。

以上

呉海軍病院のこと

稻
垣

卷六

りあい関係はありません。公判廷で
お目にかかつただけ。北田君も同様。
宮内は私の後輩でよく語りました
が、ニヒリストで彼がマルキストと
の裁きをうけたのは、いまもってナ
ンセンスと断言します。佐藤君は私
が呉病棟長当時、入院患者で文学愛
好者でした。彼とは恋愛のライバル
でもありました。

こうした五人が同じ法の裁きをう
けたことに、まつたくもって、おか
しさを感じます」

できていました。片西正夫、山本俊次、それから柴田嘉章、松原兼正などでした。」

稻垣氏は古いアルバムをだしてきました。とじひもが切れていって、水兵たちの写真も色がかわっている。山本俊次という名は『五人の水兵の判決書』の稻垣兵曹の項にも出ている。それによれば、稻垣氏が看護兵曹のころ、三等看護兵として入ってきた山本俊次と「交遊するに及び、左翼思想を抱持し居たる同人の影響をうけて、ひろく左翼文献を涉獵し……」となっている。

水兵たちは、海軍にはいるまえ、社会生活で左翼思想をしり、なかには実際行動に、はいっていたものもあつた。

「昭和七年だつたか、海軍徵募兵の身体検査の助手として岡山に出張したが、そのとき私あてに送つてきた本が左翼文書であることがわかり、呉病の病棟長をクビになつて、海兵団入りとなり、半年の間取り調べを受けました。外出も禁止でした。もつていた本は——自分の郷里の家にもあったのですが——みんな親類のところに送つたので押収されないですみました。戦災にもあつたが、当時の本は今でももっています。アルバムもそのうちのものだろ

「それはキトウ書店です。鬼頭とかきます」と例のアルバムにはつた一枚の写真を示した。アルバムは黒い台紙で白い字で説明が書いてあるが、おしいことに字がかすれて消えかかっているのでよめない。写真には書店の主人と奥さんと年頃の娘さんがうつっている。

「鬼塚というようによめますが」ときくと、

「いやキトウが正しいです」と稻垣さんはいった。左翼の本をそろえている小さな古本屋でよくそこへ本を買いにいったという。

それにしても、あのころの写真が残っているのはおどろきであった。『この本屋の横に、木造三階だてのアパートみたいなものがありました。木村君と右田美子さんが、この三階にすんでいました。木村君は運動のことで走りまわっていたから、美子さんが生活をささえていたのでしょう』。

「宮内という人はニヒリストだったとお手紙にあります」

ときくと、

男で、せんたくいうものを、ほんどうしない。上着下着いづれも三枚ずつ支給されているのだが、服装検査になるとそのよごれたもののうちいくらかマシなものをよりだして着てである。うらのほうがきれいなら、うらがえしに着てであるという始末でした

「ずばらな仲間を思いだして、稻垣さんの顔に笑いがうかぶ。

「宮内という人は萩中学を卒業して、士官学校や兵学校をうけたが合格せず、海軍にはいったのですが

と私がきくと、

「まあ彼が試験に合格したとしても、士官になつてから、あまり出世しそうなタイプではなかつたですな。思想的に、まつたくのニヒリストで、かえつて裁判にかけられて、すこしはピリッとしたかもしません。しかしもう死んでしまいました。私は予審中は吳海軍刑務所にいましだが、そのち広島刑務所にしばらぐのあいだうつされ、それから三重刑務所にかわつたわけです。広島刑務所では、麻縄をなう仕事でしたが、うまくできなかつた。独房の扉には『厳正』という字がかけてありました。『態度厳正なり』『思想厳正なり』とかなんとかほめているのかと思つ

たらそうではなかつた。それから興

の警察にいるとき、となりの艦房に

佐藤しづえさんがいたのを、おぼえています。背の高い、しつかりした

人でした。そのご、どうされたか知りません」

以下雑談で、そのころの海軍のことなどをきく。

○水兵の給料。「一等兵で一五円だつた。それからだんだんあがつてゆく。私は四五円だつた。船にのれば別に航海手当がつく。」

〔参考までにそのころの賃銀をあげれば、失業救済事業—当時の失対事業一日給一円二〇銭—一円三〇銭。工場雜役七〇銭—一円。米一升三三銭くらい。「土方米三升」ということばがあつた。〕

た。宮内があんなにズボラでも、ビンタをとられなかつた。私など髪をのばしていた。船にのつているころ当番官が私に「副長がよんでいるぞ」といった。実はこの士官、副長から、私に「髪をみじかくしろ」といわせたかったのだ。私が副長のところにゆくと、副長は「よんだおぼえはないぞ」といった。かえつきて、その士官にそのことをいうと、あてがはずれたという顔で、それきりになつた。

○バレについて。「病院の看護兵ではなかつた。しかし水兵や機関兵は訓練演習でひどくしごかれるから、上官に対するしかえしはどこでもあつたとおもう。」

○さかい川。「ちいさなドブ川だつた。そこに、のみ屋、あいまい屋などがならんでいた。まあ、水兵たちが待ち伏せするには、もつてこいの所でしよう。」

○下宿。「士官なら水交社、下士官、兵なら下士官集会所を利用できるが、たいてい畠の上で、のんびりしたいから民家の部屋をかりた。平の水兵などは三円か四円の間代の部屋を、二〜三人でかりて、交代で帰つてきて、ねるものもあつた。

○長髪。「まだ戦争にならないときで、海軍もすこしは、ゆとりがあつ

た。宮内があんなにズボラでも、ビ

ンタをとられなかつた。私など髪をのばしていた。船にのつているころ

のぼりと語り合う時を持ちたいと当番官が私に「副長がよんでいるぞ」といった。実はこの士官、副長から、私に「髪をみじかくしろ」といわせたかったのだ。私が副長のところにゆくと、副長は「よんだおぼえはないぞ」といった。かえつきて、その士官にそのことをいうと、あてがはずれたという顔で、それきりになつた。

○バレについて。「病院の看護兵ではなかつた。しかし水兵や機関兵は訓練演習でひどくしごかれるから、上官に対するしかえしはどこでもあつたとおもう。」

○さかい川。「ちいさなドブ川だつた。そこに、のみ屋、あいまい屋などがならんでいた。まあ、水兵たちが待ち伏せするには、もつてこいの所でしよう。」

○下宿。「士官なら水交社、下士官、兵なら下士官集会所を利用できるが、たいてい畠の上で、のんびりしたいから民家の部屋をかりた。平の水兵などは三円か四円の間代の部屋を、二〜三人でかりて、交代で帰つてきて、ねるものもあつた。

○長髪。「まだ戦争にならないときで、海軍もすこしは、ゆとりがあつ

た。実はある日一泊してもらつて、

ゆつくりと語り合う時を持ちたいと存じていたのですが、私が組の仕事

から帰つたら、あなたは既に出発された後で遺憾に思いました。

扱てプリントありがとうございます

（手記未完のまま 稲垣宏氏（池村氏）は急逝されました。）

失礼

池村

一九七一年七月二六日

平原さんの手記を読んで、私があなたに申しあげたことに誤りがあることを確認しました。

（一）木村君との知り合いの時期

（昭和5年頃）

（二）私の思想検挙の期日（昭和7年3月）

（三）宮内、木村、右田、私、それ

からプリントに表われていません

がオルグ錦織彦七氏との関連（昭和7年10月）

（四）私個人として朝日新聞記者

（姓名失念）との関係

（五）私が左翼思想について検察官

の取調べをうけたいときさつ（第二

次、昭和7年3月）

（六）私の検挙のてんまつ（第二次、昭和7年11月）

（七）検挙とその後の検察官との諸関係（昭和8年5月）

（八）刑務所生活

それらのことについて一応まとめて綴つてお送りします。

七月二四日付御書簡並びにプリント拝見しました。筆無精のためいつも失礼しています。一一日御来駕の節は生憎組の仕事があつて、あなた

の文章その他もありましたが若干正確を欠く点もあり、事実は次のように次第です。当時、私は顔が知られた広島での活動が難しくなり活動の舞台を吳に移し潜りました。当時呉君が吳で活動していたのですがバトンを私にわたして上京しました。

呉では海軍工廠や水兵の間に党組織もでき、われわれの根を拓げることができました。これだけの組織を築きあげたので、私はそれとの組織の機関紙を発行する考えをもち、まず工廠では『聳ゆるマスト』つづいて海軍では『唸るクレーン』を発行しました。題名はそれぞれの組織内で決めさせました。大体月二回ぐらいの発行だったようにおもいます。原稿は各自に書いてもらい、私が取捨して編集しました。私が書いた原稿もあります。

戦後、わが党の歴史に触れた正式な党史ではないが出ています。例えば『日本共産党の四五年』『近代日本人のあゆみ』（新日本新書）野坂さんの論文（数年前 前衛に連載）などで、当時の軍隊内の反戦活動として『兵士の友』『高いマスト』が発行されたと述べられています。『兵士の友』は活版で新聞紙大のものでした。『高いマスト』というものは発行されておらず、明らかに呉の『聳ゆるマスト』のことです。その後私は党の方に話し、訂正することになりました。再版された『日本共産党の四五年』では訂正されています。何故このようなまちがいが起きたのか解りません。

当時呉でも広島でも、中央との連

絡が切れており、中央の機関紙なども手に入りませんでした。しかし、たまたま中央から三好君がオルグとして派遣されきました。三好君は

最初、広島にきたのだが広島の組織が弾圧をくついて連絡ができず、呉にきて私と連絡できたわけです。

私は呉での闘争について詳細に報告しました。これは三好君の手でまとめられ中央に報告され、第二無産者新聞（『赤旗』）に大きく何段ぬきかの記事となりました。海軍工廠や海軍の中での活動『唸るクレーン』『聳ゆるマスト』がはじめて全国的に紹介されました。特に天皇制帝国主義の牙城である呉海軍の中で、このような闘争がおこなわれていたことは全國的に一つのセンセーションを起こし、激励したことと思います。

『聳ゆるマスト』は呉以外では発行されておらず、あの詩も第二無産者新聞をみて書かれたものでしょ

木村莊重氏の手紙

しました。』

ではないかと思って、あまり深追いしてたずねはしなかつた。そのままです。（後略）

稻垣君に会いに行かれたそうです

ね。呉の本屋については一寸調べてみました。これは三好君の手でまとめられ中央に報告され、第二無産者新聞（『赤旗』）に大きく何段ぬきかの記事となりました。海軍工廠や海軍の中での活動『唸るクレーン』『聳ゆるマスト』がはじめて全国的に紹介されました。特に天皇制帝国主義の牙城である呉海軍の中で、このようないい闘争がおこなわれていたことは全國的に一つのセンセーションを起こし、激励したことと思います。

『聳ゆるマスト』は呉以外では発行されておらず、あの詩も第二無産者新聞をみて書かれたものでしょ

う。

一九七〇年四月一五日
寺尾一幹

（一九七一年六月一九日再プリント。
『聳ゆるマスト』関係のものは一九六年から同志の手紙がくればそのたびごとにプリントして関係者におくりました。ここにあらためてプリント

宮内については、獄死しているのでも、警察でも一から十までいいもので、警察でも一から十まで平気で話してしまい、かくせる事まで言つてしまつて三年半もやられたのです。

僕の家の近くなので、二一三回、出獄後訪ねてみたが、遺族の者とは会えなかつたし、本人も居ない事なので帰つた。それでも近所で、墓所などきいて、墓へでも参つて行こうとしたが、あまりくわしくとたずねてみたが、教えてくれず、知らぬ様な話なのだけたが、正式な葬式などしてないの

回 想 錄

小倉 正弘

〔一九八一年一月六日、山口県光市に小倉氏をたずねて、まえから書きかけているという同氏の手記をみせてもらいました。一九七一年に聞き書きをとつたので、それらをいつしょにのせることにします。〕

略歴

一九一二年一月一五日 台湾台北州台北市日新街にて、小倉正の五男として生れる。
本籍地 岡山県吉田郡富村字富西谷二五一九の二番地
一九一八年（大正7年）四月七日、台湾台北州大邱園尋常高等小学校尋常科一年として入学

一九一九年（大正8年）四月、同州大溪郡大溪尋常高等小学校第二学年に転入学

同年九月 台北市城西小学校に転入学

一九二〇年九月 台北州淡水郡淡水尋常高等小学校に転入学

一九二四年（大正14年）四月、台北州立台北工業学校電気科第一学年に入学

一九二九年（昭和4年）三月、電気科講師ボイコット事件並に喫煙事件にて中途退学

一九三〇年（昭和5年）一月一〇日、吳海兵團へ徵募志願兵として入団。軍艦那珂の乗組となる

同年一〇月一五日胸膜炎にて呉海軍病院に入院経て、第八分隊（機関科補充分隊）に編入

一九三一年（昭和6年）二月退院し、保健班を

同年一〇月満期のため海兵团に帰団

社

一九三二年（昭和7年）一一月四日 「10・30事件」にて検挙され、海軍衛戍監獄に被告人として拘置される

一九三三年（昭和8年）四月二九日 治安維持法違反にて懲役六年で下獄

一九三六年（昭和11年）一二月二五日 （服役中皇太子の出生により、刑の四分の一、即ち一年半減刑、仮出獄約一〇カ月）仮出獄し、愛媛県宇和島市丸の内の長兄小倉一正宅に寄寓し、明治生命宇宙和島営業所にて外務員として勤務

一九三七年（昭和12年）八月 香川県高松市野田農器具製作所に入社

一九三七年（昭和12年）一〇月 広島市段原大畠町一〇四 前田文二氏の鉄工業前田組に入社

一九三八年（昭和13年）二月 徳山清水組に入

一九四〇年（昭和15年）五月 朝鮮鉄道平壌操作場鉄骨建築工事（錢高組）の下請として工事に従事

一九四四年（昭和19年）一一月 帰国

一九四五年（昭和20年）六月 徳山にて戦災にあう。八月、終戦直前再び戦災にあう。

一九四五五年（昭和20年）一一月 徳山防長陸運に入社。労組結成後解雇

一九四六年（昭和21年）日本共産党周陽地区委員会を結成（原田長司氏と共に）、自宅に党事務所をおく。居住細胞責任者として運動

一九四七年（昭和22年）離党

一九四八年（昭和23年）一一月、光市に転居、山子として三年半、林業に従事

一九五一年（昭和27年）四月、光市失対事業に就労、労組結成、執行委員及副委員長として活動

一九六三年（昭和38年）二月、大阪市吉永水道工事に入社、八月に退職し、その後日雇鉄工として各事業場にて工事に従事

一九七〇年（昭和45年）三月より、土木建築請負業を営み、現在光市内にて工事に従事

も、約二時間休みなし、毎週土曜日の大掃除には兵舎の床を三〇分くらい、休みなしで腰をのばせずはいまわらせられ、全く人間扱いではなかつた。約四ヵ月の海兵团生活から（四等兵から）——四等兵は「カラス」といつていた。その理由は、黒の制服に腕章がなく、真黒な服装をしていたからなので——新三等兵になつて、軍艦那珂（第一艦隊所属の第一水雷戦隊の旗艦）に配乗して電気部に入る。艦長は当時大佐で南雲忠一（のち第二次世界大戦のサイパン島玉碎の司令官）、第一司令長官は山本権兵衛大将だつた。また水雷戦隊司令官は末次信正少将（当時の水雷戦術の世界的権威者）覆面殺人者）であつた。

当時、艦隊は米國を仮想敵國として常に太平洋で一ヵ月から二ヵ月の間、演習をしながら日本を一周していた。

〔注〕 「8・8艦隊」。戦艦八隻、巡洋艦八隻の編成。その他軽巡洋艦や駆逐艦で編成された水雷戦隊。水雷戦隊は、旗艦、軽巡洋艦一、駆逐艦六（八隻編成）。潜水戦隊は、駆逐艦一、潜水艦六（八隻編成）。

昭和五年一一月の神戸沖特別観艦式の準備中、水泳と作業の重労働で胸膜炎で倒れました。一月呉海軍病院に入院、翌年二月中旬退院。呉海兵团の保健班に入り、のち機関科の補充分隊である第八分隊に配属されました。

〔以上、手記は未完。以下一九八一年一月六日、およびそのまえの一九七一年四月一八日の聞き書きをのせることにします。〕

軍備拡張時代で、志願兵のほかに徴募兵もたくさんはいつてきた。そのなかには、海をみたことのないものもいた。またテキパキ仕事がやれないもの、学科のできないものもあつた。

新三等兵はよく二等兵や一等兵になぐられた。私は仕事が機関科なので、鹿の角の柄のナイフをもつていて。電線をつないだりするのに必要なのだ。「なぐるならなぐつてみろ」と、ナイフで古年のものは二等兵になつたのに、三等兵のままでいた。私のつきに入ってきた新三等兵をなぐらうとする二等兵や一等兵には極力抵抗してやつた。

古兵は「なぐらねばわからん」という。私は「よくいつてきかせればわかるじゃないか」と、「新三等兵をあつめ、自腹をきつて一袋五錢の菓子をいくつか買ってきて座談会をやつた。私も三等兵だが、古いから新三等兵よりも上である。

私は当時、運動選手をしていた。陸上競技とかバレーボールの対抗試合には、よく上陸して出場した。こんなときは休暇がとれるので、時間のゆとりがあつた。入賞して、メダルもたくさんもら

水兵のころ

海兵团時代は「8・8艦隊」ができるというので、訓練はきびしく、我々機関科でも「十能操法」（石炭をボイラに投入する方法）を一時間四五分休みなく、二月の極寒にもかかわらず汗が十能の先に点々とおちる有様、またボート操法の時間

私は海兵团時代から水泳が割合上手だつたので、「那珂」に乗艦してからは、水泳部員となり入港の折は毎日水泳の練習を（海にて）していました。また演習中は、太平洋の真中で魚型水雷を発射して、それを回収するのに水泳部員が浮いている魚雷にバンドを掛ける作業をしていました。金華山沖等では本当に黒潮という真黒な海の中で、三〇分もその作業をした事があります。

つたが、治安維持法で検挙されたときみんな没収された。そして一等兵になっていたのに、二等兵に降等された。稻垣兵曹は、勳章をもつてゐるから検挙されたときも降等処分にならず、一等兵曹のままであつた。

私は、兵隊で出世しようとか、はやく進級しようとおもつていないので、気が楽だつた。ほかの者は点呼とか訓練とかいうと目の色をかえてとびだしてゆくが、私は掃除当番などみなひきうけてやつた。しかし私はまったく手のつけられぬあはれ者だつたわけではない。従兵にして、かわいがつてくれた士官もいる。

海軍に志願したのは、おやじが「兄が三人もいるのにだれも兵隊にいっていない。おまえ海軍に志願しろ」としつこいくつた。私は「毎月五円づつおくつてくれるなら、海軍に志願する。それでなければ満洲へいって馬賊になつてやる」「五円づつおくつてやるから志願しろ」というようなことで、海軍にはいった。おやじは約束どおり五円づつおくつてくれた。

それで、下宿をふたつかることができたのだ。

ひとつは玉突き屋の二階、もひとつは西田のおばさんのところ。

上陸したときは、近所の子供たちとあそんで人氣があつた。検挙されたとき、近所から三〇人ほど減刑嘆願の署名がきた。

「おまえなかなか人氣があるな」と憲兵にいわれた。

【再役強制反対】

バレというのはばらすということからきたのかかもしれない。

部下をしごく下士官をやつつけるときは、こつちの仲間は肩のところに目印の布をぬいつけておく。同志うちをやらないためだ。そして笛をふくとあつまるようにしておく。その下士官のかおを知つているものが、あいつだとほかのものに合図する。彼がまつさきにその下士官をなぐると、あとでカタキをとられるから、合図するだけにする。

ピーポ、ピーポと笛になると、みんなドットとあつまつて、その下士官を堺川にぼうりこんだ。「巡ら」などがきて、あぶないおもうと見張り役がピーポ、ピーポと笛をふく。それでみんなちりぢりになつてすぐたをけした。

集団行動というのは、水兵がよくやつたものだ。ある女郎屋のとりあつかいがわるいといふので、水兵があつまつて家のロープをひつかけてヨイシヨ、ヨイショとひきたおしたことがある。あんまりよい例ではないが。

佐藤静枝さんは、カフエー摩天樓の女給をしていた。そこへ私もレンラクにいった。水兵としてはカフェーにゆくのは金の点で苦しい。銚子一本とつきだしをとつて、チップを一〇銭か二〇銭おいても一円くらいかかる。静枝さんが、うけもちのテーブルならたすかる。そうでないときにはあとでよんでもらつた。静枝さんは「ちょっとこっちへきて」といつて、ものかげによんてエプロンの下から文書をだしてわたしてくれた。ほんとに信頼し尊敬する同志という気がした。

そのころ私は二〇歳、静枝さんは二三歳だつたというが、二四歳くらいにみえた。小さい時から

もともと、兵隊でいつまでもめしをくうつもり

「バレ」について

はない。海軍に志願したのは、どうせ二十歳になつたら兵隊にとられる、はやく兵隊にいつてはやくでて、社会のしごとにいたほうがよいとおもうからだ。

ところが「満州事変」がはじまつたら、強制的に「再役を志願するものは申し出でよ」としつこいつてくる。

いつまでも兵隊でおつて、マゴマゴしていたら、社会にてから、仕事をさがしてうろうろしなければならん。兵隊の古手なんぞ社会ではつかいものにならん。志願して入つたときとははなしがちがう。皆ぶうぶういつていた。

「現役満期 強制延期反対」のスローガンは、こんな空気のなかで出されたものだ。

同志の」と

苦労したというからふけてみえたのだろう。あの

ころ断髪にした女は呉にはほかにいなかった。

「軍艦の招待日」という催しがあった。一般の人を軍艦にきてもらつて、艦内を見学してもらうのだ。水兵が接待係兼案内係だ。私は、セーラー服の女学生の仮装をして案内係をした。そこへ静枝さんがきた。私は艦内を案内しながら、小声で「木村荘重君への報告」を彼女につたえた。なんにも知らない水兵たちは「小倉にあんな彼女がいるとはしらなかつた」と、ひやかしていた。

〔注〕『大興市民史』P.278ページ、昭和七年の頃。

カフエー摩天楼の女給よしえこと佐藤静枝(22)生前両親が離婚。祖母の私生子として届けられた。

八歳のとき女中奉公の実母に引き取られたが、一歳で母がつれ子して山県郡八重町に嫁し、一四歳広島市左官町の料理屋に単独で奉公。一八歳同市、カフエーリラスの女給となり、ここに左傾女給、純子の影響をうけ、昭和七年八月共産党の指令をうけて来呉。

(検挙後)まもなく釈放。やはり同店につとめた。ちょっととした美人。客へのサービスもよいほう。静枝は軍艦に小倉をおとすれ、「赤旗」をわたらしたり、下宿も再訪ねていたという。

第二号だったか第四号だったかおぼえていない。

内容についてはおぼえてないが、「水兵諸君の投書をつくる」とあって、私が投書したのが第六号の三ページめにのつたのをおぼえている。投書には「軍艦白鷹内 蔣弘」と書いてだした。水兵たちとの連絡や文書のうけわたしは「幸便箱」を利用した。各艦内の水兵あてには、表に紙をはつて何々艦、何々水兵殿とかいて「幸便箱」にいれると、それをランチで各艦にくばる。途中で調べられないことはない。

オルグとして呉にきた綿織彦七氏とあつたのは、木村荘重君からの連絡だった。「呉駅前で、君は西から東へ、むこうは東から西へあるいて、であうようにしてくれ。むこうは、手に赤い本をもつて胸のポケットに白いハンカチをのぞかせていいから」というようなことだつた。彼は、ちらりと木村君にいた背の高いやさ型の男だつた。

「帝国軍人」ということばは、にがてなのだ。
海軍の刑務所というところは、一般の刑務所よりもきびしい。一日中正座していなければならない。一週間に水浴二回、温浴一回ということになつてゐる。水浴はつめたい水プロだ。温浴というのがこまる。ひえきつたからだで、わきすぎているフロにはいらねばならぬ。まごまごしているとうしろからロープをたばねた奴でひっぱたかれる。
海軍刑務署から広島刑務所へうつされてのち、雑役の「独歩」になつた。「独歩」というのは看守のつきそいなしで、あるきまわつて、仕事ができるのだ。

第一独居といふところに思想犯がいられられた。
非転向のものは、第五舎にはいつていた。

二舎の二房には村山藤四郎君、二舎の九房には谷健二君がいた。谷君は長身で、大阪の港湾で活動していた人、六年の刑だつた。

ハンストをしたのは椎野悦郎君、岩村大次君だつた。椎野君が、さいごまでハンストをつけ、鼻から食物をつぎこまれたが、それをはきだして抵抗した。

それから心にのこつてゐるのは、関谷源一君だ。未決の独房にいる彼とはなしたことがある。「自分は治安維持法のほかにも事件があるから生きてでもらえそうもない。君は元気でやつてほしい」といつていた。

戦後、関谷君が下関の全日自労にいることは知つていた。私も光市で自労の運動をやつていたからだ。彼は役員などにはけつしてならず、戦前の

木村荘重君とは海兵团でいつしょだつた。彼は思想がわるいというので、船にはのせられず、海兵团におかれていだ。そこで私と相棒でロープをほぐしてモップをつくる仕事をやりながら、話をしたものだ。

その木村君から『聳ゆるマスト』をみせられた。

北田健二君は、私より一年下だがおなじ機関兵で仕事の相棒だつた。

木村荘重君とは海兵团でいつしょだつた。彼は思想がわるいというので、船にはのせられず、海兵团におかれていだ。そこで私と相棒でロープをほぐしてモップをつくる仕事をやりながら、話をしたものだ。

その木村君から『聳ゆるマスト』をみせられた。

私は憲兵隊に検挙されたのち、呉署にあづけられた。その留置場で佐藤静枝さんや稻垣兵曹ともいつしょになつた。

木村荘重君はうしろ手にしばられ、さかさづりにされて竹刀でなぐられていた。わざとわれわれにみえるように、扉を開けていた。

私も特高の奴が「チヨッカイ」をだしかけたので、「きさまらに、帝国軍人をなぐる権利があるのか」とどなつたら、手をひつこめた。奴等には

93

第2独居

北

1 舎

5 舎

東

2 舎

3 舎

4 舎

た。「ずいぶん口がかたいなあ」と、みんないつて
いたそうだ。(了)

福山地区の人々

野田清一

一、花野フジエ

昭和五七年一月二三日記

争議でくびきりになつた花野と山本ヤエを、福島紡績福山工場にもぐらせて組織の拡大をはかりたいため、福紡の女工募集係の萩原という人を通じて、入社のはたらきかけをした。萩原さんは、労働組合の陰の協力者だったのです。

花野フジエは、広島市の山陽紡績の検査工だつたそうです。当時（昭和6年頃）彼女には南米に移住している相手がきまつていて、早々に彼氏のもとに嫁入りして渡航する予定だったのです。『聳ゆるマスト』（山岸一章著）一八七ページにでてい

る前岡フジエは、彼氏の姓をなのつていたので、彼女は花野とはいわないで、前岡と自分からいつておりました。

来福した事情については、福労の幹部の久下本有（タモツ）が山陽紡績争議応援に広島にゆき、

警察の特高は三井理一と藤井巡査の二名でした。
のち警部補を主任として増員した。）

そのとき彼女は、田舎から家出して職をさがしているようにいいのがれしたので、うつくしい娘がかわいそうだとおもつたか、特高は福山の旅館にすみこみでつとめるせわをしました。後日、三井特高が旅館をたずねてみると、職をせわした彼女は旅館から逃走して所在不明となつていた。特高はそれ以来彼女をさがしておりました。日がたつてからある夜街頭で、にげだした彼女をつけた三井特高は彼女のあとをつけていった。一方それに気付いた彼女は突然、みちばたの他人のみならぬ家の裏戸からにげこんで、家人に「今自分が胸がくるしくなつたから、しばらくここでやすませてほしい」とたのみ、ついで水がほしいといいました。こうして時間をかせいだ。

福山城公園は、山陽線福山駅すぐ北に位置して、公園にのぼつて福山市街地を一望に見おろすことができます。ある日、花野は城公園から市街地をながめておつたところへ、福山警察署の特高主任の三井理一巡査部長がきあわせた。そのころ福山

彼女をみうしなつた特高は、そのあたりをしきりにさがしてもみつかりません。そのころは、冬のさむいときで、今の洋服のことなり、きもののに羽織を着用していたので花野は機転をきかせて、自分のきている羽織をうらがえして着用してうら地をだし、コシをかがめて、杖をついた老女のすがたで危機を脱しました。

そのころ、広島から派遣された全協オルグ岡田茂美とともに福山市霞町の餅屋の二階をかりてアジトとしておりました。病弱な岡田が食事がほしいとのぞんでも、金はなくあたえるなにものもないこまつた生活をしておりました。

紡績の寄宿舎生活をしておる山本ヤエの紹介で、福紡の工員とは公園や街頭で連絡をとりながら、組織拡大につとめておりました。

佐藤茂は福山本町の印刷屋で、画の上手な人だった。生粹の福山ッ子だったが、文化関係の方から全協の人々と協力しながら、左翼組織があたつていて『文学新聞』や『働く婦人』等が、福山にまわされておりました。

昭和七年の春、検挙されて岡田、花野が福山署の留置場から広島にまわされるとき、彼等が使用していた鍋や釜などの炊事道具は福山署の特高から知らせをうけて、品物を私があづかりました。（花野たちが私を指定した）

彼女たちが、後日福山にきて活動する日にそなえて、吾家に保存しておりましたが、昭和二〇年八月八日よるの福山空襲のさい一つものこさず焼失しました。

花野の女給名、純子ではなくて順子が正しいのです。私は姫路から順子あてに連絡をとりました。

今年から一〇年ぐらいまえ、岡田茂美を東京・青山の無名戦士の墓に合祀を推薦したころ、豊田郡本郷町の岡田の生家に実妹、八重子さんを訪ね、墓参りしたとき、八重子さんの話によれば、

昭和七年、広島から糸放された岡田は一時帰郷していましたが、また広島に向いていった。しばらくして広島から「岡田が危篤だからすぐむかえにきてくれ」と連絡があったので、当時生存していた実父が、広島の店に急行すると、店の二階で兄がたおれていた。

そのそばに女の人がついていたと。岡田は貧しい父が広島から本郷までハイヤーをかりきりで帰郷してそのまま死んだと。

岡田の最後に付添ってくれた女は花野フジエではないかとおもいます。

彼女は山陽紡績の争議で階級的にめざめた。そこ（昭和5年ごろ）として、婦人運動家の少ないときに、ほかより目立った活発な行動のできる人だつたので、全労系の組合関係では広島、福山ともに、彼女を知る人はみんな彼女に好意をもち、将来を期待するようでした。

『広島女性史』の本に、守田スミエさん、小寺マツ子さんが彼女、花野に関して話されているとおり、彼女は闘争訓練不足の上に、婦人労働者出身なるが故に運動の面で重要視された点と、当時広島左翼運動の組織が弱小体だつただけに、組織拡大に気持ちが急ぎ、おちついて運動にとりくむことができなかつた。また一方では彼女の実弟の花野岩男の検挙があり、彼女の親から「フジエの影響で弟をカンゴクに入れた」といわれ、彼女にはかなり動搖があつたのではないかと推察できます。

私は、いまになりおもいますが、花野フジエは彼女の古戦場の福山に、かなり愛着がありはしなかつたか？ 事件後福山に彼女をむかえてやればよかつたともおもいますが、戦時下で思想取締りアカヌケした現代的な、彼女のからだと力づよ

はきびしく、私も非転向者なる故に保護観察所の稲田正夫觀察官からはニラまれ、時あらば「予防拘禁」おくりしようと私を福山警察署によびだし、特高主任（このころ主任は警部補）は強気のことばをなげかけてきました。そのようなときに、花野と連絡をとることも困難だった。ついに彼女に救援の手をさしのべることができず、売女の口入を業とするものの妻とならせ、その後原爆死した全協活動家花野フジエが可愛想におもえます。

花野フジエは、山陽紡績在職以来、山本ヤエ（1

912年生?）を妹のようにかわいがつていたし、山本は近親者がすくないこともあり、花野をあつく信頼していた。花野はとらわれの身となり、山本ヤエを指導することができなくなつたので、私が福山署の留置場にはいったとき、担当巡回の目をぬすんで、山本の指導を私にたのみました。私がブタ箱をでてから、福紡の女工さんをレポにつかって山本ヤエと連絡をつけ、兵庫県におくりだしましたが、その件についても予想外の問題がおきました。（後日くわしく）。

花野フジエの記録は、このくらいにしてつぎは岡田茂美、山本ヤエの件にいたします。

三、戦前、福山地方で全協の活動をした 故岡田茂美のおもいで

やつと簡単な、はしりがきのような手記をかきおえてお送りすることができました。半世紀前、組織のそとにいた私が自分の記憶をたどりかいたもので、各所にあやまりがあるかもしません。

福山の左翼運動の先輩の方々のあゆまれた道が、私の手記の一部分でも資料として参考になり、記録として後世にのこすことができうれば、「俺をバリゲートにして革命戦をたたかってくれ」といのこして、二〇歳のわかさでこの世を去った岡田茂美や、戦争に絶対反対をさけびながら戦争の最大のギセイとなり、原爆死したなつかしいフジエさんに申証がたつ気持ちがいたします。

どうか私の手記を手直ししてよりよいものにしてください。
(昭和五七年二月五日夜)

「兄は共産党でした。兄が共産党の運動して、そのために検挙され、私達一家はどんなにくるしんだか。野田さんおわかりでしょうか。何もなかつたことにしてください。知らなかつことにして、たよりはおこさないでください。私たちのいまのしあわせな生活はこわしたくない。いまの自分が玉となつてくださいんよりか、瓦となつてながらえんことをぞみます。」

こんな意味のかかれた八重子さんからの手紙をうけとつた。封筒の表上部には、切手がさかさまにはつてあつた。

私は八重子さんからの手紙をよんで、なんともいいようのない無氣力な、くらいくらいきもちになつた。この手紙をうけとつたのは、昭和三五年の春ですから、その日から二二年が経過します。私は岡田家の皆々様の安否をきずかいながら、今までなにもしてあげられなかつたことを残念におもつています。

さる昭和三五年三月一八日の東京青山の「解放運動無名戦士の墓」に、全協オルグ故岡田茂美の合祀推薦の手続をすませてのち、私がひとり山陽線本郷駅に下車して、不案内な元北方村を訪ねたのは昭和三五年一月四日だつたと思います。

村の入口に位置している木下飲食店にたちより、北方村上谷の岡田家をたしかめてから、たずね、たずねて岡田茂美の生家にいつた。その日は正月やすみで、在宅中の八重子さんや、学校の先生の御主人におあいすることができた。

あのとき、私の突然の訪問を八重子さんは、死んだ茂美兄さんが帰つてくれたようだといつて、どんなにかよろこんでくれたことか。私も時間のたつのもわすれて茂美君のおもいでをかたり、今日の遺族訪問がどんなに意義あることかとうれしかつた。

福山にかえつてから、日本共産党広島東部地区委員会の木村昭六君に、豊田郡本郷町の岡田茂美の生家を訪問した由をつたえ、且つ彼岡田が、戦前の福山における左翼運動の第一番の開拓者であり、弾圧のためにいかにくるしい闘いをして若い生命を失つたかをくわしく報告しました。

地区委員会では報告をきき、協議の結果地区委員会として、東部地区委員長名で八重子さんあてに手紙で、福山の先輩として活動された感謝とともに解放運動犠牲者家族の苦難の道だったでしょうが、我々の先輩の過去を今まで知らなかつた、野田さんにきいてこのたび知つて誠に申証ない、どうか元気で頑張つて下さい、というはげましの言葉で手紙が郵送された。

ところが私の予測しないことがおこつた。私が

本郷町岡田家訪問のとき、木下店で話した「共産党関係のこと」と、東部地区委員会から郵送された封筒の裏書きに、日本共産党の署名があつたことで、こんど岡田の家に共産党のものがたたずねて来たり、手紙連絡があつたりした、とのうわさがひろまつた。

この年はわが国の安保反対の大闘争がまきおこつた。茂美兄の生存中とおなじように、岡田家は

くるしい立場にたたされたのである。

訪問した日、八重子さんから長ゴム靴をかりて足にはき小高い裏山に案内してもらつた。そこが岡田家の墓地であった。小石がおかれで、その下に岡田が埋葬してあつた。

私は三〇年間わされることのできなかつた同志岡田の墓にしづかに頭をさげて礼拝した。解放運動の犠牲者がこんな淋しい場所に安置されて今までだれひとり仲間がたずねてこないことは、岡田よ淋しいだろうよ。感きわまって涙にくれた。

後日『アカハタ』(赤旗)投書欄に私は、昔の全協活動家の岡田茂美の墓まいりの報告をかき、かたがた岡田の生前の活動について知つていられる方々は、岡田の生前のよりくわしい活動状態を知らしてほしいということといつしょに、犠牲者岡田の墓を建立することに協力してくださいとうつたえました。しかし私の投書にこたえてくれる人はひとりもなかつた。

私は岡田茂美とおなじ年のうまれです。中国の昔の人人が「七十古来稀なり」と申されているそうです。古稀の私、余生いくらありましようか。岡田のお父さん、実弟雅之君、それから幼かつた八重子さんたちを思えばどんなにか胸がいたみま

す。

我々の先輩、岡田茂美の生前の活動の報告をいまこそ私がしなければだれがするだろう。年が経るにつれてわからない部分が多くなる。八重子さんの苦しい心の中はよくわかる。どうか許して下さい。私は拙い筆で過去の記憶をたどりながら書く。

岡田との出会い

さる昭和六年の暮にちかいある晩だつた。私がす番していた、福山桜町全国労働組合合同盟、福山労働組合事務所を、顔に血の氣のないひとりの青年が訪ねてきて、組合の申込書をだした。この青年は要領えないことを話してしばらくしてかえつた。そのころこの家の階下は、久下本有さんの住居になつていて、二階が全部組合事務所として使用されていた。

あとでわかつたことだが、この青年が岡田茂美であつた。私が彼にあつた最初である。彼は組合の様子を調らべにきたのだつた。

つぎに私が彼、岡田茂美にあつたのは、福山警察署の留置場の、おなじ監房にいれられた昭和七年の春だつた。

昭和七年、瀬戸内海にうかんでいる木之江島の石粉工場に争議が勃発した。木之江の石粉工場は福山労働組合が指導的立場にあつて、福山支部として活動していた。

この工場には、半島出身者もいて戦闘的組合だ

つた。社長が明石市にすんでいて、島内の工場だけでは争議解決のみこみがないので、明石の社長のところまで福山からあるいてゆくことにきました。いわゆる餓死行進を決行した。広島から応援にかけつけた村井一夫、福山の久下本有(ほかに)何人かの者が行進にくわわつて出発した。

占部要次、三谷文太郎それに私たちは福山残留組になつた。

そのるす番中に、福山市天神町のパーム工場(タワシ、ホーキ製造)で、要求書提出から争議にいる事件になつた。

それよりか少し前、同年四月一六日(4・16記念日)、福山労働組合の事務所は、前から家主に家のかけわたしをいわれ、裁判であらそつていたが敗訴したため、入口はがつしりした大きな木をうちつけて閉鎖され、なかの荷物はそとになげだされた。退去命令である。この桜町の事務所の家主は野島石炭店で、福山ゴムの工場主の所有だつた。野島は、山口県宇部の桜山炭坑を経営していたのである。

久下本は福山ゴムの労働者で、社長所有の貸家をかりていたのだが、昭和五年の広島の電車の争議に応援にいて、広島の村井、吉本、福山の藤原孝憲、岡田嘉市、山口五郎、大阪の大西らとともに投獄され、そのため福山ゴムを首切りとなり、家のかけわたしをせまられていたのである。そのような事情で、木之江やパーム工場の争議の発生したときには、組合事務所は福山市東堀端町(現城見町)の佐藤完一経営の餅屋の貸家をかりて、そこに移転していた。

あのころは、福山、広島と争議がつづいておこ

り、福山も広島も活動家はお互に応援しあい、

そのために入獄する活動家が多かつた。

こうした多発する福山の争議のなかで、私は福山警察署に検挙されたのである。

福山のブタ箱で岡田茂美といつしょだつたし、そのとき彼がかたつたこと、いま私が記憶していることをつぎにかいてみる。

全協組織の関係については、なにひとつからなかつたし、私のほうからもきかなかつた。しかしながら岡田や花野が福山にきて、組織活動をすることについて、彼等のうしろにいる指導的立場の人が林となる人だということはうすうす私は當時知つていた。

岡田には足のわるい父がいて、自分でつくつた木の義足を足につけて不自由ながらではたらき、弟雅之（マサユキ）は尾道の青果市場にすみ店員としてはたらき（年齢18歳くらい）、北方村の生家には、幼い妹八重子が父といつしょにすんでいる、ということだった。実母のことについてはなにもはなしにでなかつた。

妹は岡田にとつては可愛いいらしく、獄舎でつねに心にかけている様子だった。たまたま山本ヤエが、妹とおなじ名前だったので、どちらにも特別のしたしみをもち、彼は口にしていた。

豊田郡北方村上谷（現本郷町）が生家とおしえてくれたが、あれから三〇年たつて、私がその生家をたずねるまで私はその住所を記憶していた。

彼等（岡田、花野）は検挙をうけてブタ箱にはいつから、だれも知り人はなく、自分らの組織関係の者はやられていることだし、ブタ箱の彼等に救援物資はなにひとつはいっていなかつたとお

もわれる。

その年の八月中旬に、彼は郷里で死去するぐら

いだからそのころはかなり体がよわつていて、ほとんど横になっていた。そんな状態にもかかわらず釈放されなかつた。彼は死を覚悟していたとおもえるし、彼の精神力はなかなか旺盛だつた。

岡田、花野の立派な獄中態度に感動して、私は合法活動から地下活動にすすむ決意をしたようにおもいます。

私は福山警察署を釈放されてから、尾ノ道の青果市場に岡田雅之君をたずねた。そうして、こんなことをはなしたとおもいます。

「君の兄さんは福山警察署にいるけれど、彼はプロレタリアの解放のためにたたかってつかまつたのであって、なにもわるいことをしてつかまつたのではないし、立派な行為をしたのであるが、金持ちやその手先の警察など取りしまる方がわるいのだ。心配しないで元気をだしてはたらいてくれ」と。

幼い店員の雅之君は、淋しそうに私の話をきいていた。これが彼にあつた最初であり、また最後だった。それから三〇年ちかい年月がたつて、私は本郷町を訪ねたとき、弟雅之君にあうことができるとおもい、村をたずねたのであるが、村の入口の木下店できいたはなしでは、雅之君は一時、自動車（トラック）にのつてはたらいていたのであつたが、いつの日か死去したと。再会をよろこぶつもりで訪ねたが、墓前での再会となつた。

岡田茂美は昭和七年八月、二〇歳の若さで世を去つた。

福山警察署で最初に左翼の動きに気づいたのは、昭和七年初頭の3レディーの記念日に半紙判の用紙に赤の筆書きで、左翼のスローガンをならべて「×月×日福山の八幡さんに集合してデモに参加せよ」こんなアジビラが電柱にはりつけてあつたとか。私は本物をみていないのでそのビラの内容はくわしくはしらない。

あのころ彼等は、福山に謄写板をもちこんでいるから、六月のはじめのようにおもいます。

北方村から岡田茂美が私あてに近況報告のしらせをよこした。

「自分は先日、広島から釈放になり、郷里にかえり兵隊検査をうけ、検査場で検査官にしかられた。ひさしぶりに郷里にかえると、野も山も緑で空気はすみ平和な里にたつて気持ちがよい。しかしそこの反面、貧しい農村があり、村人は當々としてはたらいている。」

妹八重子さんの話によれば、「兄はそのとき（昭和7年）帰郷して、しばらくして再び広島にでていったが、八月広島から『茂美危篤』のしらせをうけ、足のわるい父がいそぎ広島にとび、店の二階にねていた兄を当時としては異例の貸切自動車にのせてかえつたので、近所の人達はハイヤーを利用したことにおどろいていた」と。

彼、岡田は広島で釈放され、保養することもせず、党再建のため広島にとび、ついに花野フジエがはたらく店の二階にたおれていたのではないかとおもう。「二階では若い女の人がつきそつていてくれた」とのこと。

岡田茂美は昭和七年八月、二〇歳の若さで世を

いった。私が福山をたつてしまふのように記憶しているから、六月のはじめのようにおもいます。

私は昭和七年六月中旬、福山をでて兵庫県にはいった。私が福山をたつてしまふのように記憶

なかつたのか、岡田たちが検挙されたあと、彼ら

の所有物を警察からあずかったときは炊事道具だけだった。

四、山本ヤエ

——兵庫県へ潜入に関して——

木ノ江、森川石粉工場争議団は昭和七年五月下旬、久下本有、村井一夫等と共に福山を出発し、途中岡山県の農民組合、姫路の播州化学労働組合等、各友誼団体の応援をうけながら明石市の石粉工場の本社に到着したのである。その中の播州化学に山崎という常任（京都出身）がいて、久下本との間に話ができる。福山の労働者を姫路に派遣してくれたことだつた。

福山は城下町であり、福島紡績が主要産業であった。一方姫路市には福島紡績、日本毛織、竜田紡績、日の出紡績などの紡績産業が主要産業になり、城下町であることと共に、福山と姫路が同一条件を備えている。織維産業中心地は一般に低賃金である。姫路には紡績工場内に活動家はないので、組織が進まない。だいたいこんな話だつたと記憶している。

私は福山署のバタ箱で、花野フジエから「山本

ヤエが福島紡績をクビになつているから、彼女のことをよろしくたのむ」という依頼をうけて釈放されて出た。

山本ヤエは、久下本さきに広島の山陽紡争議に応援にゆき、顔を知つてゐる人達からはヤエちゃんの愛称でよばれているけれども、私は山本ヤエを知らない。その頃、山本ヤエは福紡の女工寄

宿舎に住んでいた。私が直接面会にゆくことはまずないので、福紡女工の藤井アヤ子をつかいにして、寄宿舎にいつてもらつた。ところが敵の網がはつてあつた。その中に入つたようになり、藤井はついに福紡をクビになつた。

山本ヤエとの連絡は、私が独断でやつたことで、貴重な組合の工場内メンバーを浮き上らせ、その上クビにならせたことには私に大きな責任がある。しかしこの時、組合執行部から何一つ言われなかつた。この事件も私の苦しい出来事の一つだつた。

山本ヤエと連絡がつき、彼女は姫路の播州化学の山崎をたずねて姫路にゆき、紡績工場にはいるために福山を出発する決心をした。

一方ほか二名の婦人が姫路にゆくことにした。一人は藤井アヤ子、もう一人は松岡政子。松岡は去る昭和三年の福島紡績福山工場の大争議の犠牲者（被解雇者）のうちの婦人闘士だつた。（注）、藤井アヤ子はのちに昭和九年春、私が岡山刑務所に服役中に私の妹になりすまして私の面会に来てくれて、外部の状況を報告してくれた。服役中は近親者以外は絶対に面会は許されなかつた。このことがバレたら、私が治安維持法で服役中のことだから、大変なことになるのだつた。

〔注〕 松岡政子。（争議報告演説会で）「カゴの鳥より、カンゴクよりも寄宿すまいはなおつらい」とやつて、臨席の警官から「注意、検束」をくつたとき、一六歳だつたといふ。いま老いて福山に健在という。（広島県労働組合会議編『広島県労働運動史』P.741）

山本ヤエの福山脱出は、スパイの目が光つてるので、充分注意し、福山駅から一つ東の、岡山県境の山陽線大門駅まで歩いてゆきそこから乗車することにした。福山の他の同志には誰にもこのことは話さず、私と山本と二人で決行した。

私は地理に不案内の山本を大門駅まで送つた。山本について、藤井、松岡が姫路入りすることが出来た。山本は竜田紡績、藤井、松岡は日の出紡績に入社して、各寄宿舎に入ることになった。

私が姫路にゆき活動するようになつて知つたのであるが、その後松井喜代治の奥さんが福島紡績に、白井憲一の関係の婦人が日本毛織に入つていた。

松井喜代治は元岸和田の紡績の方で合法活動していた。姫路に来てから、飾磨にアジトを設け、奥さんは工場の寄宿舎で生活していく時々奥さんの方からアジトを訪ねていた。松井との連絡は小林春馬が当つていた。（松井が本名か変名かわからぬし、その後松井の行動は誰からも聞いていない。）

私は昭和七年六月中旬、福山を発つて姫路入りした。私の従兄弟が姫路市外手柄村に住んでいるので、そこに身をよせた。ずいぶん迷惑をかけ申訳なく思つてゐる。

工場にもぐることが出来ないで、変名で「大八」という食堂、姫路駅前の神戸ゆき神姫電車駅の横、鉄道・電車・自動車の労働者相手の食堂）で月給五円で働くことになつた。住込みでは会議も何も持つことが出来ないので、アジトがほしいと思っていた。その頃運動の方は播化の山崎と連絡をとつていた。ある日、私の居所をどうして知つた

のか、広島の村井一夫が大八食堂を訪ねて來た。

彼は大阪へ組合の大会か何かで行くところで、途中下車して私に会いに来てくれた。

私に左翼に走らぬように自重して運動してくれといつた。私の将来を心配してわざわざ訪ねてくれたと思ひ感謝している。

ある日山本ヤエと街頭で連絡をとったことがあ

るが、アジトが必要な話がでたとき、山本は自分の着物地でフトンを作るからとのことであつた。

彼女は文学少女的なところがあり、未知の姫路に

来て淋しさを感じていた。私が何かの話のついでに、彼女に向つて冗談に、子供をつくればよいといつたら、彼女は私は心臓が弱いからだめよといつた。

空氣の悪い紡績工場内で働くので、内臓が悪かったのかと思う、この頃広島の花野から私に、順子という名で手紙が来た。私に来るぐらいだから、花野フジエと山本ヤエの間に連絡があり、山本には広島の花野の居所はわかつていたと思う。

山本は一度私に満州の伯父の所に行きたいといつたこともある。

私はアジトを持つことが出来ず「大八食堂」から姫路の女郎屋「音羽」の主人が経営する野里の養鶏場に転職した。そこで私が所持していたコップ関係の本を、養鶏場の同輩にみつかり警察に密告されて検挙された。その頃は駅の近くに警察があつたのだが、私がブタ箱に入っている時、国道二号線筋、総社の近くに新しい警察が新築されて、新監の方に護送されていった。

取り調べは県本部の影山警部補が当つたが暫くして釈放された。検挙されてから山本ヤエとの連

絡はきれた。私は他のことは何もシャベらなかつたので、検挙が彼女に及ぶことはないと思う。今もなお彼女、山本ヤエの生死が気になつてゐる。

彼女は山本キシエと従姉妹の名を使用していた。

五、小林正一について

福山のブタ箱生活のとき、小林正一が松永警察からまわされて福山にきていた。私は一度、小林に房外であつたのであるが、担当巡査の目がひかつていて言葉をかわすことができなかつた。

無名戦士祀者名簿によれば、昭和六年頃松永町（現福山市）柳津町の進歩的な青年とともに、日本赤色救援会松永地区委員会を再建、その責任者となり、昭和七年三月五日に一斉検挙せられ、その後も松永地区で昭和八年三月一八日、一斉検挙せられた。

昭和二七年五月一八日、松永駅東方一八〇〇メートルにて鉄道自殺。享年四四。遺族は妻春巳。

六、昭和七年ごろの全協活動家 (福山地区)

佐藤茂 福山市吉津町。一九〇九年（明治42年）生、昭和一九年一月二〇日死去。享年三五歳。

印刷工。

福山市洋画グループ「プラルタルゴニアン」に属す。全協オルグ岡田茂美、花野フジエに協

力する。広島からオルグ派遣について、事前に佐藤と広島の指導部との間に協議があつたと思える。

影響下には、私が知つてゐる人では

牧本哲夫（元教師） 福山市西神島町
福山党幹部 中島博氏の夫人の実父。

安原（旧姓） 福山市東深津町
東部地区委員長 小林宏氏の実母

南部ヤエ子（故人、元教師） 深安郡神辺町道の上

藤原孝憲（故人） 福山市
戦後、福山市職員組合初代執行委員長

中山一郎 福山工業試験場
佐藤茂の友人で画の関係の人と思える。

山本ヤエ、花野フジエを通じて、福紡の工員。

三成五郎（現、藤井五郎）
小寺吾一（三成の友人）

昭和七年三月五日の検挙でだれがヤラレたか全部は知りません。（おわり）

〔注〕 兵庫民報社『炎の記録』野田氏手記。

〔昭和七年二月三〇日夜神戸市新開地相生座うらで検挙（共産党関西地方委発行のピラ『64議会の23億円の軍事予算反対』を配布中）。兵庫署留置場に昭和七年暮から八年九月下旬までいた。昭和一〇年岡山刑務所を出獄。その後福山労組の活動に参加。〕

尾道地区の人々

樋口利夫談



赤旗まつり大泉緑地
一九八五年五月五日

一九八一年一〇月三日、新大阪駅に尾道市向東

町の樋口利夫氏の上京途中をむかえて、駅構内の

喫茶店で戦前の尾道地区における左翼運動家のこ

とについてきいた。樋口氏は戦後、三原三菱車両の労組委員長だった。

樋口氏から、尾道地区的安田貞務氏、迫川敬一氏、熊谷良一氏および瀬戸内港漁業組合で野村秀雄氏とともに活動した小林太郎氏の名をきかされた。安田氏、野村氏は今はいないが、そのほかの人たちには手紙で問い合わせた。

一一月一四日、一五日、一六日の三日間、尾道市と沿岸郡常石町千年（チトセ）に、それらの人たちをたずねた。

市と沿岸郡常石町千年（チトセ）に、それらの人たちをたずねた。

樋口利夫氏に聞く

一〇月三日 新大阪駅にて

(一) 尾道出身の安田定（さだむ）という人が尾道にかえってきて、私たちに左翼運動のことをおしゃってくれた。熊谷良一、迫川敬一、私などがよく安田氏のところへいったものだ。

私は大正一〇年尾道郵便局にはいり、そのころ集配係をしていた。おなじ局にいた熊谷良一君からさそわれてたびたび会合にいった。

迫川敬一君は現在、左官をやっているが、左官の組合長で全建労に所属している。熊谷君は戦後レッドページで郵便局をやめた。

安田氏は現場の労働者に検挙がおよばないよう

に用心していた。彼は家族といっしょに住まないで、自分ひとり、山手にある本家のほうの家にすんでいて、そこにみんなをあつめていた。家族のものにはあわせないことにしていた。「3・5事

件」で、安田氏が検挙されたので、いざれ我々のところにも警察から手がまわると覚悟していたが、安田氏はがんばって我々のことを白状しなかつたのでこちらに検挙はよばなかつた。

安田氏は釈放されてから、我々との接触はさけていた。彼は満州へわたつたきり、ひきあげてこない。

(二) 私たちは郵便局で五〇人くらいの「互助会」をつくっていたが、「通友同志会」（因ノ島、土生の郵便局にできていた総同盟系）とは連絡がつかなかつただけで、郵友同志会からのはたらきかけをけとばしたわけではない。

そのころ浜口内閣の緊縮政策がはじまつて、郵便局にも人員整理と減俸がおこなわれた。(1929年—昭和4年—秋 浜口内閣の官吏減俸案発表)。一〇〇円の給料のものは九四円になつた。また尾道郵便局の配達区域は、これまで一〇区にかけていたのを九区にされて、人員整理と労働強化になつた。

「通送」といって、鉄道の駅とのあいだの郵便物のうけわたしも人が一名へらされた。

(三) 配達のことでおもいだすのは、尾道にそのころ住んでいた野村秀雄のことだ。郵便局長が「野村あての郵便物はとりのけておいてこつちへもつてこい」と命令した。私はそれにかまわずほかの手紙につつこんで、そのまま配達していった。

「野村あての手紙はこないじやないか」と、局长がよくきいた。警察とくんで野村氏あてのものを検閲していたのだろう。そのころから野村秀雄氏のことは知っていた。彼は尾道を中心に、瀬戸内海の船員の組織をすすめていたようだ。その時の船員で、小林太郎という人がいまも元氣でいる。

(四) 私は昭和一五年に尾道郵便局をやめて、三菱にはいった。神戸の三菱造船の和田岬の寮にいた。それから一七年に三原の工場にかわつた。

戦後になって、組合をつくるときはまず野村秀雄氏に相談した。

野村氏は、アメリカ占領軍の共産党にたいする弾圧はかならずやつてくる、だから党員も一〇人に一人はおもてにださないでしづめておく必要があるといつていた。

安田貞務のこと

迫川 敬一 談

た尾道における他の仲間等、今から思えば、よく知らぬで通したものと思っています。

また検挙されたのは別のグループで、野村秀雄

氏、栗根恒夫氏、土屋某氏がいましたが、それま

で面識もなく、警察の方でも無関係と考えていた

ようです。

安田はこのグループを、社会民主主義者だから危険だと言っていました。考えればそれほど当時は相手を警戒して、接近しなければならなかつたのでしよう。しかし野村氏も、栗根氏も事実は同じ方向にむかった者同志であったことは戦後社会主義政黨の合法化によって公然たる活動が行われた中で判つたことでした。

『赤旗』やその他の非合法出版物が、どういう経路を通じて入手なされていたかは、安田氏のみが知つていて私は判らず、特高でいくら責められたありませんでした。留置された日数は四九日間、取調べで、特高の目的は當時ひそかに読んでいた『赤旗』の入手経路及びその他の出版物、ま

れても言いようがないのが幸いでした。また我々の仲間であつた樋口氏や熊谷氏は郵便局員であつたし、この一人は絶対に守らねばと強い決意で通しました。

安田氏はそのご再び上京して、暫く消息を絶ちましたが、後年大阪にいた私を頼つてきて、左官職人であった私と共に働いたりしていました。手に職もなく、またつねに特高につけられていた彼は、不遇な暮しをしながら、でも信念は固く私は判りませんでしたが何かやつているようでした。金に困つては私によく無心を言い、一〇円、二〇円とひそかに都合してやつたものです。

彼が何故、何の目的で満洲に行つたのか知りませんが昭和一二年頃だったと思います。私も尾道から大阪、北海道、また尾道と職人修業もあつて、転々としたものですが、尾道にいた頃、牡丹江か

迫川敬一氏の手紙

一九八一年一〇月二二日

思いもかけぬ御手紙でした。記憶にあることを次に書きます。「安田定」ではなく「安田貞務」です。私より二つ年上ですので、今生きていれば七〇歳のはずです。

検挙されたのは昭和七年の二月だったと思います。寒い夜、安田と私は同時刻に別々にとらえられ、尾道警察署のブタ箱へ別々に投げこまれました。箱は三つあって、その両端なので話しあうことはありませんでした。留置された日数は四九日間、取調べで、特高の目的は當時ひそかに読んでいた『赤旗』の入手経路及びその他の出版物、ま

ら便りが来たことがありました。戦争激化に伴い、音信はとだえて消息も知らぬまま終戦を迎えるまつた。

戦後引揚者の妹タキヨ君達から、彼が既に故人となつていたことを知りました。

思えば私は家も近所であり、幼な友達として育ち、のち彼の教えをうけ、社会主義の方向をいつの間にか歩みはじめていた私でした。彼が晩年に動搖していたかどうか知る由もありませんが、彼のためそう思いたくない私の気持ちです。満州において両親を失った彼の一人息子、進君が今東京にいるそうですが会つたこともないし、それ以上は知りません。

安田貞務。歳月の流れに移り変る社会情勢の、目の前にある現実。ややもすれば忘れがちなこの人のこと。おかげで今彼の面影を思い浮べ淋しくも又懐しく昔をしのんでおります。

つい長々と書きました。御希望にそえたでしょうか。

では又。

迫川 敬一

一九八一年一月一四日

尾道市の喫茶店で

迫川 敬一 氏にきく

栗根氏、土屋氏などは別の文化サークルをつくっていたが、安田氏は「かれらは社会民主主義者だ」といっていた。このサークルとどんな関係からか、野村秀雄氏とレンラクがあつたらしい。

そのころ尾道港に入った船の船員のストライキがあつて、尾道の人たちはかれらは社会主義者だというような目で船員たちをみていたものだ。(尾道市の喫茶店で)

はみんな便利のよい下の方にすんでいた。彼ひとり上の方の家にすんでいてそこにみんなあつまつた。

熊谷良一氏は安田氏より小学校が一年上で、私は安田氏より二年下だったが、小さいときから三人でよくあそんでいた。このほかに二、三人あつまつて、プロレタリア文学の読書サークルのようなものをやつた。安田氏がプロレタリア小説の朗讀をして、みんなで感想をのべたり、はなしあたりした。

プロ文学の本などは本屋でうつているから、あまり用心しないでもよいが、非合法の出版物は用心しなければならない。だれでもあつめるわけにゆかないでの、郵便局の樋口利夫氏をいれて、安田、迫川、熊谷と四人でサークルをつくった。

安田貞務は尾道で高等小学校を卒業してから東京へでた。なんでも小石川へんの本屋に奉公した。そこで勉強したらしい。かぞえど二〇歳で尾道にかえってきて家の農業をつだつていた。家族は旧家で、借家もたくさんもつていた。家族

尾道郵便局のこと

熊谷 良一
樋口 利夫

尾道郵便局のこと

—熊谷良一氏に聞く—

一九八一年一月一五日
尾道市新浜 熊谷氏宅にて

そのころ尾道郵便局には活動的な人々がいた。
私はいわゆる文学青年というほどだが、樋口利夫
氏などは活動家タイプだった。「互助会」を組織し
ていた。

因島、上生、両郵便局には総同盟系の「通友同
志会」ができていたが、そこからビラなどの出版
物もおくつてきた。しかしそのころの総同盟のや
りかたを見て、通友同志会とレンラクをとるのは
あぶないと思った。こちらの局のだれとだれが活

動家か、だれだれが中心分子かなど、みんな知ら
れてしまう。

今日の「統一戦線」というような考え方からみ
れば「セクト的」だといわれようが、そのころの
特高は、職場の活動家をみればすぐにひっぱる。
そんなわけで通友同志会とは連絡をとらなかつた
わけだ。

尾道局の「遞送員減員」(一〇名を九名にへらす)
の反対闘争で、三島坂次郎君が解雇されたのは、
H君が職制につげぐちをしたためだとおもう。故
人をわるくいってはいけないが。

三島君は思想的にはつきり左翼というほどでは
ないが、正義感のつよい男だから先頭にたつてや
つたので首になつたといえる。

私は明治四一年うまれで大正九年高小を卒業し
て、大正一〇年尾道郵便局にはいり昭和一六年八
月にやめて神戸の三菱造船にはいった。そのち
三原の三菱車両にかわった。

尾道局には現業員—電報、郵便、保険などの親
睦会として「愛親会」というのがあった。これに
は郵便局からも金ができるし、えらい人も顔をだす。
これとは別に、配達員だけで「互助会」をつくつ

尾道郵便局と三原車両のこと

—樋口利夫氏に聞く—

一九八一年一月一五日
尾道市向東町樋口利夫宅にて

戦前のこと

私は明治四一年うまれで大正九年高小を卒業し
て、大正一〇年尾道郵便局にはいり昭和一六年八
月にやめて神戸の三菱造船にはいった。そのち
三原の三菱車両にかわった。

尾道局には現業員—電報、郵便、保険などの親
睦会として「愛親会」というのがあった。これに
は郵便局からも金ができるし、えらい人も顔をだす。
これとは別に、配達員だけで「互助会」をつくつ

た。五〇人くらいのメンバーで自主的に運営して、役員も投票にした。

「愛親クラブ」という野球チームもあって、私が監督兼キャプテンだった。

野球秀雄氏をはじめてみたのは、丸一汽船のストのときだった。この丸一汽船は尾道郵便局から四国松山ゆきの郵便物をつむので、船員とは顔なじみだった。尾道郵便局からもストライキの応援にいった。

野村秀雄氏が船員たちに演説していた。彼は立派な口ヒゲをはやって「海員組合からもメッセージがきた」などといつてはいたが、まったく人をひきつけるものがあった。(この演説のあと彼は検束された。)

「瀬戸内港湾従業員組合」の尾道支部の主事が野村氏で、常任として活動していたのが、いま常石にいる小林太郎さんだ。

尾道乗合バスのスト、山根ゴムのストなども野村氏が指導していた。バスのストライキは車掌さんたちが争議団本部にたてこもつて、たたかつた。山根ゴムもはげしいストライキだった。

戦後の組合結成

三原の三菱車両従業員組合は、一九四五年(昭和20年)一月十五日結成された。野村秀雄氏を相談役にした。会社の隠退蔵物資をあばきだし、組合管理のもとに配給した。これで労働者の、組合にたいする信頼がたかまつた。

委員長は「いっぺん伊勢本にやらせてみよう」ということで彼にすることになつたが、闘争がす

すむつれて半年もしないうちに「もうやつてゆけん。たすけてくれ」と私に言うので、委員長を交代した。彼は本社に交渉にいつてもすぐに妥協しつまうのだ。

秘書ということで、重家豊君をえらんだ。彼は三原で看板屋をしていたが、車両の鋳物工場にはいたのだ。有能な人で、父親は呉工廠の役付きだつたそうだ。安芸津に家があるとの事だ。今吳で入院している。

あくる年、昭和二年三月十五日をきして闘争にはいることになった。その闘争にはいるまえ、青年行動隊をつれていて本社の野口常務をつれてかえり、団体交渉をおこなつた。このとき青年行動隊のうち七人が入党した。これが三車党細胞のはじまりだった。のちに三車(三原三菱車両)で党员四〇〇人から六〇〇人になった。

野村秀雄氏はまことにいつたように、アメリカ占領軍の弾圧はかなづくるから、党员一〇人に一人はしづめておけといつていた。野村氏はこうしきつたというのだ。

職員のほうで、社会党にはいつていた赤松氏や平野氏が共産党にはいった。平野氏は三車の職員組合の初代書記長だ。彼は首切りになつたとき、不当な首切りだと労働委員会に提訴して勝ち、首切りを撤回させた。彼はのちに、石田という総務部長ととりひきして「会社に忠誠をつくすから」というようなことで、職員のレッドページをゼロにしてしまつた。

昭和二年三月十五日の闘争で、従業員組合はクローズドショップを要求した。野村氏は、クロー

ズドショップというものは「両刃の剣だ」といつていた。それはいつたん組合がひっくりかえって、反共になると、左翼分子は工場からおいでされたことになるというのだ。

この闘争で、工場内に組合事務所をおくことをみとめさせまた月給制を実施させることとなつた。

所長は「月給制にしたら能率がおちたではこまる」と心配して、組合に協力をもとめた。われわれは「自主的にやる」といつて生産復興闘争をくんで、月産、エヤブレーク二〇〇〇個、機関車修理八両を目標にした。

全国車両産業労働組合の結成をよびかけて、三原車両で結成大会をひらいた。若松日立、下松日立、川崎車両、汽車会社、近畿車両、帝國車両、日本車両ナガヤ、汽車会社東京、日本輸送機(山崎)など計一万八〇〇〇人。産別会議に加入した。

労働組合にたいする攻撃は、つきのようにはじまつた。

まず、GHO労働部が「共産党の労働組合支配の実体」という、図解のようなものを発表した。

これで動搖したものがあつた。

昭和二三年四月天皇を三車にむかえ、これで(?)をつぶす計画を会社がたてた。組合の委員会で、社会党側から天皇の三車参觀を歓迎するために、午後から工場を臨時休業にするという案が出された。これを投票で採択することになつたが、左翼はこれにまけた。

暴力團が「三車爾正会」というものをつくつて、チヨツカイをだしてきた。

それでもうまくゆかないでの、会社は第二組合

をつくることをもくろんだ。

また企業整備ということを口実に、第一次から

第三次まで、活動家をねらいうちに首切ってきた。

このとき「川上事件」といって、ボイラー場占拠事件がおこった。

第二段として臨時工四、〇〇〇人のうち二、〇〇〇人の首切りを発表した。この首切反対闘争で、活動家が工作部長をとじこめて交渉した結果「首切はしない」という誓約書をかかせた。会社側は、多数の脅迫によってかかされた誓約書は無効だとして、この闘争に参加したもの全員を解雇した。

この闘争をはじめるとき、組合に知らせるやめろというきまつていて、組合に無断でやつたわけだ。

第三段として、企業整備に名をかりて一七〇名首切り。これで第一組合の勢力の大半がきられたわけだ。このころ工場の中はサボタージュ状態で、生産はほとんどとまつてしまつた。

そのとき「二〇〇万円事件」がおこつた。工場委員会で、闘争費用としてつみたてられている二〇万円を利用する件が提案された。このかねで食用油を一括購入して、組合員に配給するというものだ。これは工場委員会で可決された。会計から二〇万円もつてきた。もういちど工場委員会をひらいて確認をとつたほうがよいという意見もでたが、手続きはすんだのだからと、そのまま油屋にわたした。これは失敗だった。結局油屋から油をもつてこないということになつた。

昭和二四年のメーデーは分裂メーデーになつた。三車の第二組合は、青い旗をつくつて反共主義のデモをやつた。のちには統一ということを名

目にして第三組合もできた。

第四段の攻撃が、レッドページだ。

河野栄氏のもつてている写真は、第一組合解散大

会のときのものだ。

【参考】 河野栄氏手記（要旨）

ある日かえつてみると内容証明の封書が会社からきていた。開封せず組合長の手で一括会社に返上した。しかし工場内の空気は一変し、反共幹部は肩いからせて

「赤旗はもう我々には必要はなくなつた。諸君、もつてかえつて女房の腰巻きにでもしたまえ。女房がよろこぶぞ」

という始末だつた。

慶應大学出身の幹部が法対部長となり、裁判にうつたえ毎週私達は尾道地裁にでかけました。また一方では犠牲者の幹部が法対部長となり、裁判に集団でおしかけました。なかなかどうして、元氣な若者たちが幹部のあとからおしかけて、半数は所長室へ、半数は廊下でさわぎ、職員は事務がそれもありさまざまでした。なにしろ、首切りは不當だからみとめないと裁判にうつたえながら、一方では失業保険金を支払えという交渉です。矛盾した話ですが、何回かおしかけて交渉するうち、とうとうみとめてくれました。

つづいて組合がアメを一括購入して、各人の居住地で、宣伝をかねて闘争資金づくりをしました。こんなこともあります。本通りのある店のオヤジさんがおしえてくれました。——アンタは講釈ばかりいって、手がうごかない。行商とは必要なことを簡潔に手早くはなしながら、ふろしきをひ

ろげて品物をあいてに早くみせるようにしなれば——といわれて、なるほどとひとつ勉強になりました。それからは半分同情をよせてかつてもらいました。

三菱の闘争も昭和二五年六月一日解決し、一一名が復職、他は闘争期間中の賃銀をもらつて「解雇」でした。

当時の記念写真をひきだしてみると、鉛筆で一九四九年三月から一月一七日まで、四回にわたりて解雇されたとあります。

その間会社側のきりくずしもあって、生活がぐるしくなると、会社のいうことを聞くものがでるのでしょうか。写真のうらには、

「一二〇名中落伍者である。完全拒否者五五名」と記しております。私はもちろん五五名にはいつています。

一年五カ月かかりました。写真や金をもらつて、ばらばらに散つてゆきました。

このころ経営細胞には便箋にかけて正式に離党届をだしました。居住細胞には一年あまりたつて、口頭で申し出たはずです。人情的にいいづらかつたのです。

その間ほんとうに苦しい生活がつづきました。左官のてつだい、大工のまねごと、フスマのはりかえ、自転車の修理などなんでもしました。家では女房はカマスを織り、四～五時間ぐらいしかねなかつたようにおもいます。（後略）

〔河野氏は鹿児島出身。戦後竹原市に居住。三原三菱車両に通勤。三車細胞及び竹原細胞に所属。手記は最近竹原市の数本氏によせられました。現在大阪府在住。〕

野村秀雄のこと

小林 太郎 談

小林太郎氏にきく

—瀬戸内港湾従組と野村秀雄氏のこと

一月二六日 沼隈郡常石町千年 小林太郎氏宅にて樋口利夫氏
とともに

の桟橋をおさえて柴田をよせつけないようにしてやつた。私はからだはちいさいがケンカばかりしていた。「ケンカ太郎」などといわれていた。

そのうち野村秀雄がやつてくるようになつた。野村はどこでもおかまいなしにはいつてくる。向島ドックなどにも、守衛に「よう」などといつて

どんどん工場のなかにはいつてゆく。私が船を桟橋につけると、さっそく野村が機関室の上からのぞきこんで声をかけてくる。まい日でうるさい。

「機関長、きのうケンカしたのう」ある日また

野村がきていた。どこかできいてきたのだ。
「ケンカしようがどうしようがワシのかつてだ」といつてやつた。きのう、さかり場でゴロとケンカして、八つ折り（草履）で相手の鼻柱をなぐりつけて船にもどつてフトンをかぶつてねていたの

な。七つ八つの子供とケンカするんでも、本気でやらんといのちを失うぞ。一対一のケンカなんかするな。沢山の人ためのケンカならせい。佐倉

宗吾郎を知つとるか」ときた。

「佐倉宗吾郎ぐらい知つとるわい」

「沢山の百姓のためにたたかって、ハリツケになつた。神さんにまつられ、芝居にもなつとする。芝居のまえの日には雨がふるというじゃないか」なるほどとおもつた。そんなことから野村のところにゆくようになった。かれは尾道の池田商事のとなりの、写真館のおやじやむすこまで「まるめこんで」、「その二階にすんでいた。野村は立派な口ヒゲをはやし、洋服をきてスマートなかつこうをしていた。柔道やカラテもやつているので暴力

がけておそれない。かれは海員組合刷新会の野村とこのあいは、つぎのようなことだつた。私は尾道で小型船の機関長をしていた。そこえ瀬戸内港湾従業員組合の常任の柴田世界というのが、桟橋についた船によくオルグにきた。組合費の五〇銭をおさめてくれる組合員をたくさんつくらんと、かれもめしがくえないわけだ。

わたしは柴田とは気があわんというか虫がすかんというのか、「毛唐かぶれの社会主義なんかよせつけるな」と、わたしはいじがわるいから、三つだ。

109

ほうで左翼だ。右派の海員組合のほうは野村の活動をおさえようとしていた。

私も野村のあとをついてあるくようになった。尾道丸の機関長をやめて、常任をやることになった。西京町に洋服屋をひらいて女房がミシンをふんだ。生活はらくではなかった。なにしろ、野村までやしなわねばならない。五〇銭の組合費をあつめてもくえるだけにはならない。

野村にたいする援助は、そののちずつとづけた。そのうち彼は愛子さんと結婚した。たいへんな美人だがそのお母さんがまた「化けもの」かとももうほど若くきれいに見える人だった。愛子さんは、巡回がサーベルをガチャガチャいわせてやつてくると玄関にすわって手をついてにらみつけていた。

そのころ、あちこちの争議の応援にいった。円石正一も野村の支持者で尾道の運動の草分けといわれていた。円石は尾三タクシー（尾道・三原タクシー）の助手をしていたが、野村がタクシーの争議を彼にやらせた。そのほか尾道乗合自動車のストライキ、山根ゴムの争議も円石が指導した。尼崎汽船のストでは何日か船をとめた。丸一汽船のストでは尾道郵便局からも応援にいった。野村はこのとき演説のあとで検束された。

丸一汽船の経営者は、岩崎栄蔵という男だが、のちには彼も野村のところにくるようになつた。糸崎の沖仲仕の争議の応援にも彼が野村についていた。

昭和八年私は西京町の店をしめてチトセにかえ

つた。脱落したものとみられたかもしだれないが、くえないからしかたがない。

海岸にいつてみると、子供のころカキをとつていてくつたときの岩のくぼみがそのままのこつている。故郷はちつともかわっていない。ほかの港は、一航海してはいるたびに様子がかわっているのに、ここはちつとも発展しない。この村のものがなんとか生活できるようにしなければならんとおもつた。

野村が私に、神戸の川崎造船にはいつて組織をつくれといった。しかしさはいつてみたが勝手がちがう。私は小型船の機関しかさわったことがない。川崎では大型船ばかりだ。大ハンマーをふるつて鉛をカシめる仕事もやつたことがない。イモノのハツリ仕事では、片手ハンマーで手をたたいてばかりいた。とうとう川崎造船をやめてしまった。

それからまた姫路の家島のストの応援にゆけと野村にいわれた。石船のストライキだ。高等学校にいつて三木孫三郎と、神戸の某もいっしょにいった。私はこのときははじめて演説をやつた。

金光さんからヤシロをもつてきて「こけらおとし」がある。人があつまるから、そこで演説をやれと野村にいわれた。前の晩に原稿をかいて一生懸命暗記した。さてその日演説したが、途中でわすれてしまつた。そこで宿に原稿をとりにかえつてまた演説をやつた。

さてチトセにかえつてきてから、村長と相談して、ここは港と港との中継地にあたるから船の油をうることにした。かねは親類にだしてもらつた。この村の者も私の油をかうように親類がほねおつてくれた。

そのころ野村は神戸の垂水にすんでいたが、私は毎月油のうりあげから金をもつていつてやつた。これは何年もつづけた。戦争がはげしくなつて野村一家も私のところに疎開してきた。娘のチイ坊も私のところで育つた。

因島のドックにならつて、ここにもドックをつくりうと村長に相談した。村長は平田の土地の権利をやろうといった。

野村は県北の木材をここに港からだすようにしたら、この土地も発展するといつた。それには道路をつくらねばならん。道路づくりは、私が町長のときにやつた。

それからチトセ村が野村に土地の権利をあたえて、ここにシキナ造船（木造船）のかたちだけはつくつた。これはあとで則岡静彦がのつとつ形成になった。この部落のものに「よそものにうまいことさせた」とうらまれた。

野村秀雄の墓は向島にある。野村家の墓といふ碑が野村を知る人たちのカンパでたてられた。愛子さんもそこに眠っている。娘のチイ坊も、そこに入れてほしいといつている。

二、昭和八年から昭和一五年まで



共産党は、昭和3年3.15、昭和4年の4.16の大弾圧を受けたあともくり返し弾圧された。昭和8年には、組織を壊滅させるため広範なシンパにまで弾圧の手がのびた。

—当時大検挙を報ずる中国新聞。

救援会のおもいで

岡本菊次郎 談
（福本）



運動にはいるようになつたのは、つぎのような

ことからだ。広島でプロレタリア科学主催の講演会があつて、そのあと西原初二君の自由堂書店の二階で、読書会がひらかれているのに参加した。

石川茂一君がこの読書会の中心だつた。

そののち、全協の活動にはいつたが、わたしはじめ巢守鑑札工場ではたらいていたので、全協金属労組に、のちに宇品の陸軍運輸部の臨時雇の労働者になって、全協運輸労組に加入了。全協のオルグというのは滝本君だ。じぶんでは広島高等学校の生徒だといつてはいたが、どうみても高校生とはおもえなかつた。

はじめて検挙されたのは、三月五日の一斉検挙のあと、四月になつてからだ。新川場町の洋服店の二階、滝本君の下宿しているところへあがるうとしたところを、はりこんでいた特高におさえら

れた。

滝本君のいるへやのてすりに、タオルがかけてあつたら、「るす」または「あぶない」という合図ときめてあつた。タオルがかけてないから、滝本君がいるものとおもつてあがりかけたらやられたわけだ。わたしを井ノ口君だとおもつてているらしく、「井ノ口か」「井ノ口だろう」となんどもきいた。西署につれてゆかれてからも、まだ「井ノ口だろう」といつていた。西署には堀江明治君など

がつかまつっていた。

そのときは、起訴猶予で、でてきた。田谷春夫君が全協の再建運動をやつていたので、それに参加した。しばらくして、石川茂一君、中川秋一君ができて、全協の再建運動はかれらにまかせた。

それから清水次郎君の弟とカンパン屋をやつて、山陽道を西にくだつていつた。

カンパン屋というのは、道案内の地図のカンバンをかいて、広告料をもらつた商店の名前をかきこんで、これをまちかどにうちつけるというしきとだ。これはけつこう商売になつた。

しかし要塞地帯とか、軍事工場のある土地は、そんな地図をかくことは禁止されていたので、そんなところは商売にならなかつた。たとえば宇部とか徳山とかだ。こんなことをしながら小倉まできた。小倉でも地図をかくことは、とめられていた。

そのころ、10・30事件のニュースを聞いた。商売もゆきづまつたので、広島にかえることにした。広島市にかえつて、検挙された同志の救援のことが、気にかかつた。しかしまだ、だれも差入れをやつていない。これはほつておけない。中川秋

一君のところに救援カンパがすこしあつまつていったので、それをひきついだ。専売局にいた天津せい君、宮島からでてきた坂本四郎君とともに、モップル活動にとりくんだ。

観音町のある家の二階をかりて、坂本、天津、

私とそれから三戸信人君の四人がすんだ。三戸は、10・30事件で検挙され、起訴猶予ででてきたのだが、まだ年が若い。一日中家のなかでぐずぐずしていることが多く、あまり動きまわる人間ではなかつた。宮島からでてきた坂本君は、まじめすぎる男だから、三戸君のルーズなところをひどくいやがつていた。

わたしは、そのころガリ版の原紙を書くのに、すこしやると眼がかすんだ。しばらくやすんで、またやるという、ぐあいだつた。なれないからだとおもつていた。じぶんが遠視だということに、きがつかなかつたのだ。その後、昭和一四年東京にて、古末君のいた本庄製作所にはいつて事務の仕事をするようになつてからまた眼がいたむようになつた。眼医者でみてもらつて、はじめ遠視だとわかつた。めがねをかけてから、よくなつた。

いよいよ、喰う物がなくなると、わたしは、じぶんの家にうらぐちから入つて、米ビツからしづつ米をとつてきた。すこしづつだからわかるまいとももつていたら、おふくろは、ちゃんと知つていた。ある日しのびこんだら、米ビツのうえにフロシキ包みがのせてあつて、なかにかねとにぎりめしがはいつとるじやないか。あのときはまつたな。

ふたたび私が検挙されたのは、伊藤正朔君の家

で同志の家族をあつめて、3・5事件の公判対策会議をひらいていたときだ。特高のやつがどつとふみこんできて、そこにいたものはみんなつかまつた。このとき坂本四郎君と私が起訴されて、実刑をくつた。

特高はすでにオルグの人相まで知つてているようだつた。わたしはまだ関谷君とあつてないのに、オルグの顔はこれこれだらうと、わたしにきいたのだ。

まえに起訴猶予になつているから、こんどは三年の実刑をいいわたされた。

刑がきまつて、おりた工場ははたおり工場だつた。坂本四郎君とはいつしょに検挙されたが、未決のあいだはひきはなされ、公判廷でも分離裁判だからあうことはできなかつた。工場におりてからあうことができた。

この工場でのしごとは、くつ下のさきのかがり

だ。板の間にならんですわつてしごとをするわけだが、ここでいっしょになつた同志は、大藤軍一君、韓利權君、水兵の佐藤彌君、岡部隆司君、坂本四郎君だつた。同志たちだけがならんですわつていたわけではなく、あいだにほかの受刑者もすなつた。

いよいよ、喰う物がなくなると、わたしは、じ

ぶんの家にうらぐちから入つて、米ビツからしづつ米をとつてきた。すこしづつだからわかるまいとももつていたら、おふくろは、ちゃんと知つていた。ある日しのびこんだら、米ビツのうえにフロシキ包みがのせてあつて、なかにかねとにぎりめしがはいつとるじやないか。あのときはまつたな。

所にいた。(そこでは、産業労働時報やインタナショナルをだしていた。ソ連からかえってきたものが、日本の党とレンラクする窓口にもなつていて)だから、かれも一九二七年チーゼを暗誦するくらいよんでいたのだとおもう。しかし、そんなに大物というようにはみえなかつた。のちに昭和四一年ごろ、われわれは東京の蒲田にすんでいたが、岡部君も蒲田にいたのだ。みちでゆきあえればわかつただろうが、あつたことはない。

坂本四郎君はまじめな男だが、しごとの手がおそく、いつもこつちからできあがりをまわしてやつて、ノルマをこえるように応援したものだつた。

(一定のしごとの量をこなせば、週に一回、ぼたもちをくれることになつていて)

研究会のことは本はないし、ノートやエンピツがあるわけではないから、それきりになつてしまつた。

そのほかに、同志たちでやつたことといえは「もつとよい本をよませてくれ」という要求をだしたことくらいのものだ。刑務所でよませる本は、宗教の本か精神修養の本くらいしかなかつた。

戦後のことになるが、原爆あとの広島市にいつてみたが、党的ビラが一枚もはつてなかつた。はつてあつたのは戦災者同盟のビラで、責任者として仁井田教一君の名があつた。「さすがにいきようだ。やつとるな」とおもつた。そのほかの同志はみんな死んでしまつたのじやないかとおもつみんなで討論しようというのだ。岡部隆司君はおくれて工場にはいつてきたが、「出獄してからすぐやくにたつよう、一九二七年チーゼを勉強したほうがよい」といった。岡部君は、産業労働調査

で、いなかからやつてきた玖島三一君にあつたわけだ。そして、総選挙に共産党の候補者としてされるようには、彼にすすめた。玖島君は、わしらがさしだした赤旗再刊第一号を熱心によみながら、「すこし考えさせてくれ」といった。

庄田忠二君の聞き書きをみると、このときすでに岡田春夫君、庄田忠二君、玖島三一君の三人で、党の広島地方委員会準備会をつくることをきめ、一二月に東京でひらかれる党大会に、代表二名をだすこと、総選挙に岡田、小見山を候補者とすることをきめていたわけだ。(このときの総選挙の投票方式は、三名連記)

玖島君はそのことをひとこともいわなかつた。神崎宇市君にも、いっていい。戦前の非合法組織じやあるまいし。

(一九八〇年一月二七日 聞き書き)



昭和八年五月、広島地方の共産党強打を報ずる中国新聞

10・30事件後の再建運動

小寺英雄談



非合法生活

君の兄の康さんが「四郎はやられたらしい」と連絡をつけてきた。これでまた宮島と広島との連絡はぶつりと切れてしまった。だが、これまでに四郎君から広島の状勢を、ほぼきいていたので広島がどんなになっているかは大体見当はついていた。やはり私が出てゆかねばならないとおもつた。

私は、広島市の組織はほとんど壊滅していたらしい。
10・30事件の記事解禁で、新聞発表のあつたときは、広島市の組織はほとんど壊滅していたらしい。

私たち、なんとかしてそれらの残党と連絡をつけねばとおもつていて、坂本四郎君のほうに連絡がついてきた。まもなく四郎君はモップル（救援会）再建のために広島市にもぐつた。だがその寿命はたった三ヶ月であった。はかない寿命だった。

このときともにやられたのが、岡本菊次郎君（現姓福本）天津せい君たちであった。あるとき四郎

君の兄の康さんが「四郎はやられたらしい」と連絡をつけてきた。これでまた宮島と広島との連絡はぶつりと切れてしまった。だが、これまでに四郎君から広島の状勢を、ほぼきいていたので広島がどんなになっているかは大体見当はついていた。やはり私が出てゆかねばならないとおもつた。私は家をすることは、家族にとつてたいして、さしさわりはなかつた。弟が一人もいるし、上の弟、信樹は広島で過激な活動をしていて結核にかかり、当時病後の静養中ではあったが、ほとんど回復にちかかつた。だからまだはげしい職場にはいることはむりなので、就職もできないでいた。だけど家業（トウフ製造とシデヒモ製造）につくことはもつとも適したことであつた。また私がでていっても、10・30事件で起訴留保中なので、合法性はないのだから、就職などということはでき

ない。また、そんなことでは仕事にならない。だから非合法活動にはいるのだが、わたしの生活はどうするか。これは全然目算はなかつた。まあなんとなるだろうというところであつた。私は最低生活になれていた。いわば訓練すみであつた。ではどんな訓練かというと、私は一〇年も前からどのような生活にもたえられるようながらだをつらねばならないとおもい、冬の最中でも夜具はセンベイ布団一枚きりで、こたつなしでねていた。ときには生いもをかじつたり、きわめてそまつなものをたべたり、これはまた貧乏でやむなくたべたのだが、なんでもたべる訓練をした。これをみて母はよくいっていた。「英雄は監獄へゆくつもりで、その訓練をしよるんじやのう」。まったくそういうであつた。

ただ最低限度の住居費さえつくれば、あとはそ

う金はかかるないから、やれないことはないとおもつた。だが実際にはそのごの闘争生活は予想以上にきついものであった。それはもしかしたら過去において、そのような無理や栄養不良の生活をしたことによって、私の身体の成長がさまたげられ、いよいよ本番というところで耐久力がなくなつたのかかもしれない。

一九三三年七月のある日、弟にもつげずに家を出る決心をした。そのほうが弟の立場がよいとおもつたからだ。その日は朝早くから商用で呉市へゆき、帰途サンプルを入れたカバンとかんたんな手紙を巣島番船にたくしておくりかえした。

坂本四郎君からかねてきていたとおり、広島消費組合をおとすれて迫樹君にあい、組織のだれかに連絡をとつてくれるようになんだ。迫樹君はじめはうさんくさそうな顔をしていたが、その後わかつたのだろう、ひきうけてくれた。またこの当時坂本四郎君の弟の弥彦君がこの常任といつてよいか、小僧がわりをしていたので、私があやしいものでないことはすぐにわかつた。それからその夜にねるところも、おりからそこにきていた岩佐君にたのんでくれた。岩佐君はすぐに承諾してくれた。彼は当時住井さんという後家さんの家の二階（観音町）をかりていた。私はそこに同居することにした。岩佐君は広島の旧制高校を中途退学、天満町の缶詰工場で工員としてはたらいていた。彼はエリート意識などなく、労働者のなかにとびこんでゆき、みずから完全な労働者になりたいという気持ちでいたらしい。恋愛ということもテンテンであった。彼がもといたふじ屋という食料品店の、当時広島女学院の専門部にい

た娘からよく手紙がきていた。その手紙をいちど私もよんだことがあるが、小林多喜二のことについてなにかいてあって、しきりに彼の指導をもとめているような様子であった。彼はあまり相手にせず、「ブチブルの娘はしようがない」という調子であった。彼は全く純粋なそして階級意識に徹底しようとした男であった。彼はそのように努力していたのだろう。

かれのガンバリ屋についてはこんなこともおもいだされる。これはずつとのちのことだが、わたしが出獄して一年あまり身体の調子がわるく毎日微熱がつづいた。県病院の内科では異常はないといふのだが、体温計ではかれは七度一一分の微熱がでているのだ。そのためには就職もできず

にいた。そのころ岩佐君にだした手紙に私のうちひしがれた絶望的な気持をかいたものと思う。彼のその返事にこんなことが書いてあつた。彼が獄中の独房である日虫をつかまえて糸でつないでおいたところ、虫はひと晩じゅう糸をひっぱつて歩こうとがんばつていた。君もそのようにがんばつてくれというのだ。この虫は岩佐君だとおもつてもいい。彼はそのような男だった。

ふたりの生活は彼も私もおなじようにさばき屋なので、なにもかもさばきちらかして、へやは足のふみいればもないほどだった。これはふたりの共通の欠点だった。炊事は炊事場がないので、窓からまちへ七輪やなべをならべて木炭でたくのだが、火をおこすのに新聞紙をもやしてうちわでバタバタあおぐので、灰かぐらがたつやら、火の粉がちるやら全くメチャメチャであった。よくもそ

この小母さんはだまつていたと今ごになつて思

うことである。

丁度そのころは暑いさかりだし、あたりはドブ溝があるので蚊が多い。蚊取線香などという高価なものは買えないでの、オガクズに油をしました。ような蚊取粉をかって、それを一晩中くべるので、人間がまいりそうであつた。岩佐君は闘争生活がおもになるので、工場はとかく欠勤がちで、そうでなくとも安い給料が、いつそう収入がなかつたので、万事がこんなことであった。

九月にはいると、神崎宇市君のせわで、福島町へ移転することになった。神崎君は極東オリンピックで有名な砲丸なげの高田選手の異母弟なのだが、高田選手のようにガッチャリしてはいなくてやせた男であった。

移転といつても何もあるわけではない。ただ、からだだけ移転すればよかつたので簡単であった。よこれた布団は、たまつた部屋代のかわりにおいていった。移転さきは神崎君の家の近所で二間ぎりの独立した小さい家で、炊事場もなければ便所もないという家であった。したがつて家賃もものすごく安かつたが、いまおぼえていない。そこはもと肩屋がすんでいたとかで、きたないことはなはだしい。たたみときたらじとじとして、とてもこのままでは住めたものではないので、神崎君の家のあまつた畳をかりてきて、しきかえてやつと家らしくなつておちついた。

わたしたちはこの夜から、ふとんなしで畳のうえにごろりと横になつてねることになつた。九月もだんだん深まつて秋らしくなると、それでは寒くて足がしびれてやれなかつた。なんとかせねばならんとおもつてゐるとき、党オルグの関谷源一

君がふとんをもつてひっこしてきただので助かつた。三人は、ひとつふとんにはいつてねることになつた。

この家は福島町の南通りのうらのとてもややこしい迷路の中につてて神崎君がいつたように、パイ（パイ）特高刑事のことを当時はこのようについていた）におわれても、このへんを二～三回キリキリまわつてにげたら、にげられるというところであつた。またこのあたりは特高などはいつもこなかつた。近所というのはなにをしているかよくわからなかつたが、となりは朝屋台車をひいてでてゆき、夜かえつてきていた。だいたいみんなこんなところであつたとおもう。そのおつさんは人のよさそうなおつさんだが、ある日わたしに「いつか写真をうつしてくれ」といった。わたしを写真屋だとおもっているのだ。多分ガリ版の原紙をきつてているのを見て、写真の修正をしているのだとおもつたのだろう。そのような調子で近所には私たちを何者かとうたがうようなものはないし、パイをするようなものもいなかつた。まつたくここは安全地帯であつた。わたしたちは、ここを根拠地にして毎日でていった。

小さい家に男が三人すんでいるということだけでも不自然で組織の防衛上正しいことではない。だからこれではいけないと思っているところへ、さらに女がひとり加わつた。岩国地方の一斉検挙でにげてきた連中のひとりで、上川あやめという婦人闘士である。眼鏡をかけた美人であつた。だからいつそうよくめだつた。となりのおつさんはわたしのなにかとおもつたらしく、わたしをひかしていた。彼女はまもなくでていつた。その後、

関谷君のはなしでは彼女たちは突然職場から（天満町の缶詰工場）。このとき竹地定夫君の妻ミツ子さんも、ともに働いていて連行逮捕されたそ

うである。警察で上川君がいちばんよくがんばつたそうである。警察でいいかげんテロられて、うごけなくなつていてるのに、不起訴でてくると、むかえにきた兄貴にまたまたたかれたり、けられたりさんざんめにあわされたそうである。

このような検挙事件があればもといたところはバレるのだが、私たちはこのときはすでにそれぞれ、みなでていつていた。

そのほか、あちこちから知つてゐる同志をかたづばしからたずねて生活費をかせいだ。だが、これもありよいものではない。なんとなく卑屈になる。達木君の家の二階にはこれも消費組合員といふひとりの若い男がいた。かれは職業はなんだか知らないが、終日ぜんそくか気管支炎かで、せきこんでいた。治癒しそうにもない病氣にとりつかれて、医者にもかかれず、いつまでこうしているのかわからない状態で、全く可哀想であつたがどうすることもできなかつた。かねはどれだけもつていたかしらないが、長期持久戦で、ちびりちびり自炊生活をしていた。かれは毎日のように、飯のおかずには湯をわかして、とろろ昆布をいれ

生活はどうやら保証されていたが、わたしはまだひとりあるきできない状態であつた。福島町では岩佐君にたかり、関谷君がくればかれにたかり、命をつないでいたのだが、そういう状態のままで福島町の家をでたのだ。さて、でていつても家はない。また消費組合へいつた。迫樹君の世話を達木幸太君の二階においてもらうことになった。達木君は高田郡の出身で、南小一君をしつており職業は大工さんで、おくさんと誕生すぎのかわいい男の子強ちゃんと三人ぐらしであつた。その当時消費組合員であつたが、のちに全協にはいつたものとおもう。私はここでひとりで生活をはじめたのだが、それこそほんとに金にこまつた。このころ消費組合の理事であつた新田菊馬君のところへもたびたび乞食にいったり、とめてもらつたりした。この他の他人のわたしを面倒みてくれるのはやはりえもつていなかつた。わたしのもつてていたものは、しちりんと、なべとはしだけであつた。これだけ買うのでも、やつとのことであつた。達木君にい

えば多少なんとかしてくれるだろうが、間代はただし、ふともかしてくれているし、あれこれ世話になるのに、それ以上かれに負担をかけるわけにはいかなかった。かれの生活も、みたところ、けつしてらくではなかつたからだ。こうやつているうちに、風邪のためか微熱もでた。だがわたしは病気はあまりきにしなかつた。病気なんか精神力でふつとばせんだとおもつていた。そしてまた事実精神力でふつとばしていた。わたしの脚気は、日とともにかるくなつた。微熱もかなりながくつづいたが、これもいつとはなしに、なくなつたようだ。達木君の家には二週間くらいいただろうか。そのうち広瀬町の土手下に恰好な家をみつけた。それは偶然そこをあるいていて、表の間で下駄をつくつて中年の小父さんを見て「これらに貰間はないでしようか」とたずねたところ、「私の家の二階でよかつたらかします」ということで、かることにしたのだ。ここも低収入らしく非常に低い生活をしていた。後日わたしが捕つたとき、警察はここへもなにかをききだしにいったのだそうだ。だが、いつくれなかつたと紺谷という警部補はいつていた。そしてわたしに「あの家は君となにか関係があるんかいの」といっていた。このような貧乏な庶民階級の人達は、警察に庇護されているわけではなく、なんら恩恵にあづかってもいない。だから警察におもねつて手先になつたり、いらぬことをペラペラしゃべるなどといつたことはしない。なるべく、かわりあいにならないようにしている。これは彼等の庶民的な保身術である。また私自身も家主に迷惑をかけたり、嫌われるようなことはしなかつた。だから彼

は警察よりも私の味方であつた。この下駄職人の河辺賢一さんの家はそのような調子だから、いちばん長くいることができた。そして党の主要会議や赤色救援会広島地方委員会の再建会議など、重要な会議場にもつかわれた。また一時、関谷君や岩佐君もやつてきて前のときとおなじように生活をともにした。

わたしがここに住むようになつて、はじめて弟がやつてきた。弟とは宮島口で時々連絡をとつていたのだが、ひさしぶりでゆつくりはなしあつた。また器用な弟は私の理髪もやつてくれた。わたしは広島へ来て床屋へは一度もいったことはない。福島町にいたときは近所にすむ朝鮮の人にやつてもらつて、朝鮮の理髪と日本の理髪はちがつてゐるらしい。わたしは朝鮮人らしくなつていた。また弟は塩酸へ鉄をとかした酸化第二鉄と、タンニン酸溶液をつかう、かくしインキをつくつてもつてきてくれた。その後、この方法で連絡をとつた。これにヒントをえて、関谷君は広島高校の化学実験室あたりからシアン化カリを手にいれてきた。これなら赤色の鮮明な文字ができるのだが大変な毒薬なので私はつかわなかつた。

ずいぶん沢山、じごとをしたものだ。三二年dezも岩佐君がガリをきつて印刷した。呉工廠へまいた『第二うなるクレーン』や党オルグ会議署名の文書はここで印刷した。また宣伝活動につかうパンフレット『ロシア革命小史』というものもあつた。表紙は「尺八吹奏法」とか「魚つりのコツ」「哲学者のため」とか「洋服地の裁ち方」など普通ちょっとみたのでは誰も興味のなさそうな題名をつけて、中味は組織論やアジプロ記事でいつ

ぱいのパンフレットもつくつた。これは私たちの生活の一助にもなつた。一部五銭か一〇銭でうるのだ。そして岩佐君とふたりで「これだからこの商売はやめられんわい」といつてわらつた。

こうやつてゐるうちに、この二階もそろそろ、にげだす必要を感じるようになつてきた。また家をさがしである。やつと横川で貸間札をみつけて、たずねてみたらそう高くなく、小さつぱりして感じのよい家で、ここならすこし上品すぎるおもいはしたが、かることにした。早速小車をかりてきて、竹地定夫君に手伝つてもらつて、いつしょにふとんやら炊事道具やらガラクタ荷物をはこんだ。竹地君というのは先にのべた上川あやめ君らの同志で、全協をうけもつてゐた。普通の引越しならタンスだの水屋だの家財道具が多いのだが、私の引越しはそんなものではなく、むやみとくだらぬものばかりである。ふつうならすててゆくところだが、荷物らしいものがなければ、信用されないので、わざと荷物をつくつた。二階へはこぶの手伝つてくれた奥さんは、それだけでも変だと思ったことだろう。いちおう二階へおさまつて、その翌日になると、そこ奥さんが言いにくそうにしてたのむように、でてくれといいだした。それもなにかおびえているようであつた。そうなれば、むしろこちらの方がかえつておそろしくなつた。警察へでもいわれたら、一も二もない。文句もなにもいえたものではない。また車をかりてにげるようでていつた。あとでわかつたのだが、この家の主人は消防署にいる人で、そのころ消防署は警察の構内にあつて、ひとくち「変な男がきた」といいでもしたら、すぐに警察がくるところ

であつた。丁度その夜は主人は不在だつたらしく私は顔をみていかつた。

大きいそぎで出てゆくのだからどこでもよい。あれこれいっていられない。丁度竹地君の関係で以前に誰かがかりていた家があいていたので、そこへたのむことにした。すぐにかしてくれた。そこは老人夫婦の小さな古物屋のうらの倉庫の中二階で人のすんでいるようなところではなかつた。だれも、こんなところに人間が住んでいるとはおもわなかつただろう。出入りも、うら口から出たり入つたりするので、家の人はなにも知らない。この家はアジトとしては適當な家であつた。だがここには一ヶ月あまりしかおれなかつた。ここがわたしの最後のアジトとなつたのだ。ここにいるあいだに三次町の大塚猛雄君がもぐつてきたのだが、かれは検挙されにきたようなものだつた。

佐君のめざまし時計をもつていつた。一〇時かかりに電車線路から、ふつうの速歩であるいた。夏の一〇時はもう日がたかく、かなりのあつさだつた。人通りはあまりなかつた。

中央辺で、あたまからハンカチをかぶつて、顔をかくしてくる男にあつたが、あついからこんなかつこうをしているんだろうと、そのままとおりすぎた。橋まであるいたが、ついに相手の人にはあわなかつた。さつきの男だつたんだとおもつた。

一時またふたたび同じようにあるいた。こんどは、であつた。相手はいろのあさぐる、強度の近眼鏡をかけた目のするどい中背の男であつた。かれはだらりとしたゆかたをきていた。いかにも仕事もなく金もなく、そこらをうろついている失業者のようななかつこうであつた。ふたりはかおがあうとだまつて、そのままそのへんの水屋へはいつた。かれは自分の身分はいわず、ただ私にモップルの再建をやつてくれたのんだ。

私がかき氷をたべおわつても、かれはいつまでも半分ばかりのこしたまままでいるので、わたしはそれが気になつて「ついでにたべてしまつたらどうですか」といった。たべおわると私がかねをはらつた。わたしはしぜん、なんの気もなくそうしたのだ。かれはのちにはなしたが、そのとき私をスパイではないかとおもつたそうだ。というのは「ついでにたべてしまつたら」とはいかにも、つれてゆかれるときのパイのことばのようであつたというのだ。また同志たちの街頭連絡のときは、ふつう上部のものが金をはらうのだそうだ。それを私が金をはらつたから、ますますおかしいといふのであつた。

指定された日のその時間がきたので、きめられたとおりにでていつた。私には時計がないので岩

うことになるのだ。もしパイだつたら、けどばしてにげてやろうとかまえていたのだといつて大笑いした。彼との連絡はその後雨がふつても風がふいても欠かさずもつた。いつの間にか、かれが党のオルグであることがわかつた。わたしはかれの指示にしたがつてモップルの再建活動をはじめることにした。

モップルの再建活動をはじめるといつても、わたしはいわば西も東もわからない人間である。どこから手をつけてよいやら、さっぱりわからないのだ。わたしひとりでは、どうにもならなかつたのだが、迫樹君がいて助力してくれた。これは大きな助けであつた。消費組合はまだ合法性をもつていたので、非合法のモップルを手助けすることは困難なことであつた。それを迫樹君はあえてやつてくれたのだ。岡本君や坂本君たちもこの消費組合のお世話になつたそうだが、私もまたそうだった。

迫樹君が最初にわたしにわたしてくれたのは、消費組合氣付として岡本君あてにとどいていた獄中の同志からの手紙の束であつた。このような手紙が消費組合あてにくるのだから、警察が目をひからすのは当然だが、そこは迫樹君がなんとかうまいこといつてパイをかえしていただらしい。だが警察は消費組合も赤の一味とにらんでいたのだから、のちにわたしたちの検挙のとき迫樹君もいっしょにやられたわけである。わたしはかれからもらつた數十通の手紙を、まずひとつとおりよんだ。この手紙は獄中の同志の心境についての問にたいする答えであるかのように、ほとんどの同志たちは佐野・鍋山流の転向をしていて、それを声明し

たものであつた。これは外界と遮断されて一般の情勢をしらない獄内の同志たちが「偉人佐野学」などと必要以上にたたえあげられていた最高指導者の転向に盲従したものだとおもつた。だがのちにわかつたことだが、これには刑務所当局のテロによる強制があつたのである。

このテロによる強制にも屈せず公然と非転向を声明した同志も一〇人くらいはいた。古末憲一、滝川恵吉、松本京一、木村莊重、清水次郎、島本隆司等の諸君。これにのちにスパイとなつた松本徹もくわわつていた。また転向とも非転向ともわからないものもいくらかあつた。これは非転向とみなしてもよいとおもつた。

わたしはまずこの非転向組にたいして激励のハガキをかくことにした。転向組にもかかねばならないものではあるが、とてもわたしひとりではできそうもない。非転向組にさえ全部のひとにかくのはなみたいていのことではなかつたのだ。それもふつうの手紙のように、おもうことをそのままかけらくなのが、それはできない。あからさまにかいたら「不許」になつて絶対同志の手にははらない。やはりあたまをひねらねばならないものがあるので、むつかしかつた。

わたしのハガキにたいして、おりかえして返事がきた。みんな元氣そうであった。またいろいろな注文もよこしてきた。たとえば、滝川君は広島県の歴史地理経済に関する本がよみたいというのだ。これはむつかしかつた。第一そのような本は手近にはみつかりそうもなく、本屋にたのんでとりよせてもらうとしても、かねがかかりすぎて、とてもわたしたちは手におえない。

古末君の手紙はいつも小さなきれいな字で三枚くらいの紙へ、びつりつめてかいてあつた。これはニュースに転載するのにつごうがよかつた。ある日こんなことがきてあつた。「ここではよい本はよめない。だがどんな雑草でも、よくかみしめてたべれば、滋養分はある」これはまつたく古末君らしいとおもつた。古末君はどのようなどころにおかれても、それにたえてその中から、なにかをじぶんのものにして、やつてゆく人間だとおもつた。

このように同志との文通と同時に犠牲者の家族も訪問した。家族たちのなかには、ずいぶん元気がよくて、むしろこちらがアヅられるようなこともあつた。寺尾一幹君のお母さんはわたしがゆくと歓待して、いつも寺尾君やその他の人たちの消息をきかしてくれた。またこんなこともきかしてくれた。

寺尾君が呉の警察から脱走したとき、寺尾君の友人のようによそおつて、バイがきたそうだ。そして寺尾君の恋人だつたかの女の居所をさがしましようといつてかえり、またやつてきたが、ちゃんと調らべていたそうだ。

この事をおかあさんが、あるえらい先生（多分広島高校のシンパの教授）にはなしたら「それはおかしい。普通人がそんなに早くそのような調査ができるものではない。それは警察の者だから気がつけなさい」といわれたそうだ。当時寺尾家はおかあさんとふたりの妹さんがいたが、くらいかげは全然なかつた。ということは、そのおかあさんは息子の人柄を通じて共産主義の正しさを確信していたものとおもう。

堀江明治君だつたか、比治山下にすんでいた家族をたずねたとき、おとうさんもお母さんもころよく迎えてくれて、これも一人こもごもに鼻をうごめかして得意になつて明治君のはなしをしてくれた。

検挙の当日おもてからパイがつれにきたとき、うらが山だから山づたいに、にげてやろうかといつたそだが、にげてもすぐにつかまるだらうからまあゆこうということになつて、連行されたのだそうだ。この家庭でも暗いものは全然なかつた。またどこだつたか今どうしても思いだせないが、警察の奴等がどうのこうのと氣焰をあげていた人もいた。

江田島の切串の花野ふじえさん、岩夫君の姉弟の家をたずねたとき、おかあさんは気丈な人らしくこのような話をしてくれた。

事件の記事解禁のとき、一ページ大の新聞の号外を町のフロ屋がお客様にみせるためにはりだしたそうだ。おかあさんはすぐにいつて、やかましく抗議して、のけさしたというのだ。その当時の切串などは島の田舎町でとても封建的で、共産党といえば天人共に許さぬ悪党くらいにおもつているものが多かつたなかで、この家族は毅然として独力で荒い風波と闘つていたものとおもう。

まだまだ、このような家族はいくらもあつたとおもうが、残念ながら私は一々当つてもいいし、忘れもしている。

またこののような家庭と対照的に、昔でいえば閉門といったような形で蟄居している家庭もあつた。わたしが訪れる、さすがにおかあさんは息子の身を秦じて私の話をきいてくれたが、おとう

さんは「転向するというならとにかく、転向しないといふものは私の家の息子じゃない。そんな者はいつさい構わないから、もうござい不得ください」という劍幕であった。

またある家では、さんざんにぐちをならべられた。「共産党の親分は本部から金をもらっているんでしょ。うちのむすこは金をもらうどころか、なんでもかでも家からもちだすんですよ。だから共産党になるんなら、親分になりなさい」というんです」といった調子だった。こんなのにかかると往生だつた。だから自然そのような所へは足がむかなくなつた。じつは、そのような所へこそ啓蒙に行かねばならないのだろうが、なにさまこちらは非合法の身である。うつかりそのようなところへ出入りしようものなら、いつパイに渡されたり出会つたりしないともかぎらない。

一度こんなことがあつた。ある同志の家を訪れてかえるとき、ものの二〇メートル歩いたところでパイらしい男にでくわした。その当時パイは大抵ステッキをもつっていた。その男は一日中歩きまわっているらしく、背広はほこりっぽく、色あせていた。体軀は頑丈そうで、目つきは何かを求めているようで、私の顔を見ると、じっとみえていた。普通のサラリーマンと明らかに区別できた。私は直感的にパイだ!とおもつた。こんなときは相手の顔をみてはいけない。私は全然相手の存在に気がつかないような風をよそおつてすれちがい、なげないかつこうで歩きながら全身でうしろに注意をむけた。どうやら私のあとをつけているようだ。私はうしろもみずに、わざとゆっくりあるいはうちに角に氷屋があつたので、氷をたべる

ようなふりをして店にはいつていった。そして、はいるやいなやすばやく横町へはりこんだ。パイはおそらくそこまで気がつかず店をのぞきこんで探していたことだろう。でなかつたらわたしは追跡されていたにちがない。

このように犠牲者の家族の訪問もかなり危険なものであつた。

一月七日ロシア革命記念日に赤餅のさしいれにいつた。

一日もはやく救援会は組織せねばならない。とはいえ救援会の組織ということはそう楽なことではない。救援会が合法性があるなら、会員をつくることはむづかしいことではない。しかし救援会の会員というだけで警察が知つたら検挙されるのだから、だれしもきがるに入会してくれない。そこでどうしても、すでにかに組織されている人をひっぱつてくるしかない。そうやって、やつと組織しても血の氣の多い連中は地味な救援活動はしたがらないという傾向があつた。またいそがしくてできもしなかつたのでもある。

わたしはまず近まわりの岩佐君や神崎君に会員になつてもらつたが、両君とも救援活動といつてはなにもしてくれなかつた。また私もそれを期待しなかつた。だからやはりなにもかも私ひとりでやることになる。それでもいちおう赤色救援会は結成したことになり、救援会のニュースを発行した。題名は『赤救ニュース』となづけて週刊とした。美濃紙版のザラ紙の表裏に小さい字でギッシリ一杯うめてガリ刷りした。記事は古末君、滝川君その他の同志の手紙や消息エピソード、それに犠牲者家族の訪問記などをのせた。これらはほ

とんど私ひとりで書き私ひとりで印刷した。これは一部一銭で、かねばかならずもらうようにした。それは経済的理由ばかりではなく無料のものはとかくよまれないので、よますためにもいくばくかのかねはとる必要があるのだ。

私のかくニュースはインテリによろこばれたそつたと、いうことになる。大体そのころの出版物は『インターナショナル』にしても『産業労働時報』にしても直訳調で、むやみと難解であつた。関谷君がそういっていた。インテリによろこばれたということは、労働者にはよろこばれなかつたと、いうことになる。

物は『インターナショナル』にしても『産業労働時報』にしても直訳調で、むやみと難解であつた。『赤旗』でさえ、いまの『赤旗』とくらべたら、ずっとむづかしく書かれていた。文章はいづれも至極調子の高い名文なのだが、いまどちがつて小学校しかでていない労働者にはよみづらいものであつた。これは宣伝技術の拙劣というのだろうか、あるいは(とりようによつては)故意に発行停止にならぬよう、「純学術的」に、むづかしく書いて弾圧をかわしてはいたのではないかとさえおもわれた。私もなにほどか、これらの影響をうけた。私はニュースをつくるのに、つねにブル新(当時は商業新聞をそのようによんでいた)にならつていた。

ブル新は商業政策として、もつとも広汎な層によまれるようにつくられてるので、我々もこのとおりにすればよいとおもつていた。だがこれはあやまつていた。我々の場合は主として労働者農民といった底辺を対象とするのだから、なにもブル新なんかまねくともよいのだ。

その点は職場の中でつくられたニュースはよくできていた。たとえば岩佐君がつくつた。『おんど

がま』は典型的であった。結局私はニュースを、あたまの中でつくっていたのである。岩佐君は工場のなかでつくっていたことだらう。

『赤救ニュース』についてかいたから、ついでに印刷機についても説明しておこう。その当時謄写機のことを機関銃といつて、そのころの活動家はみんな金がないので、一式そろった謄写機をかうことはできなかつた。ヤスリとローラーだけはどうしてもかわねばならなかつたが他は手製でまわせた。そして充分まにあつた。そのころ発行された組織活動についての手引きといった単行本には原紙をはる枠を厚紙でつくる方法がでていた。私はヤスリは巣島でつかっていたものを弟におくつてもらい、ワクと台は達木君につくつてもらつた。従来だれでもがつくつていた方式は台と枠を蝶番でとめただけなので、用紙は一〇枚か二〇枚くらいしかおけなかつた。それを一寸工夫して蝶番を一段にした。それで二〇〇枚でも三〇〇枚でもおけるようになつた。とても能率がよくなつた。これで前に一寸のべた『第一喰るクレーン』などを印刷したのだが、一〇〇〇部くらいは二人ばかりで、ひとりはする、ひとりは紙をとるで、一時間はかからなかつた。

このようにして『赤救ニュース』は発行したの

だが、ろくろく救援活動もしないうちに、3・5事件つづいて10・30事件の犠牲者の公判がはじまつた。しかも、ひとりひとり非公開でやる、分離暗黒裁判である。

これに対しては勿論『赤救ニュース』で、分離暗黒裁判絶対反対をとなえて大衆によりかけたのだが、実際問題として、こうした敵のやりかたに

対応してたたかう力を我々はもたなかつた。自由法曹団の弁護士といえども金がなくては動けなかつた。公判闘争はみおくるしかなかつた。

「いつたい救援会は、なにをしているんだ」といわれそうであつた。いや、いわれたことであろう。しかしながらようともどうすることもできなかつた。

救援会が活発にじやんじやんやつていたら、獄内の同志たちもはげまされて、転向はしなかつただろうし、公判闘争もじやんじやんやれるだろうが、このように同志たちを孤立のままに放置し、一日中テロとデマにさいなまれるにまかしていたのでは、闘志をうしなうのもむりはないだらう。公判は二～三日おきくらいに被告ひとりひとりに対して開かれ、また次々と判決が下されていった。治安維持法は死刑以下二年以上の懲役ということになつていて、二年よりかるいのはいい。だが情状酌量という分で、二～三年くらいの執行猶予は数名いた。

かの松本徹も党員であつたために、懲役三年であつたが、執行猶予三年で出所した。かれは非転向組でガンバッていたのに、急に転向したものらしく、それを買われたのかもしれない。またかれらは兄弟二人で、もつてゆかれて母親ひとりがこされているということの情状酌量ということもあつたのかもしれない。

古末君の公判には、これこそなんとかせねばとおもつてゐるうちに、その前日になつた。おもいがけなく迫樹君から連絡があつて、東京から弁護士が來ているから今夜消費組合にきてくれということだつた。弁護士というのは

青柳?とかいう若手弁護士で、自由法曹団から派遣されたものらしい。だれがどのようにして手配したものか、私は全然知らない。最近迫樹君にあつてきいてみたが、かれも知つていなかつた。

その夜は古末君の公判闘争に関する対策会議であつた。あつまつたのは三～四人の朝鮮の同志と迫樹君と私だけであつた。これという結論もえられないままに解散した。というのは大衆動員といつたところで、とても可能性はなかつたからだ。結局古末君の公判には迫樹君と消費組合関係の者数名が傍聴にいつたのにすぎなかつた。翌日迫樹君から様子をきいたのだが、迫樹君は弁護士がたよりなさそうなので、どんなことになるかと思つていたら、やはり弁護士だけあつて、うまいことやつていたと感心していた。

古末君の公判闘争は市川忍君のようには派手ではなかつたが、解放運動の犠牲者は無罪であると主張し即時釈放を要求したということだった。

第一審で五年の刑になつた古末君は控訴したのだが、第二審でも前審通り五年の刑となつた。このつぎは上告だが、上告しても刑期はかわらないだろうし、この辺でおりようということになつたらしい。そのころの心境をかいだ手紙をくれていた。

古末君の公判がさいごで、公判はおわつた。事件の順序からいふと滝川恵吉君の公判がそのあとにあるはずだが、かれはこれよりまえに東京だつたか岡山だつたかに移送されていた。

3・5事件、10・30事件の全被告が下獄して、かたがつくと私は肩のおもにがおりた感じがした。いままで救援活動ができないことが、

どれだけ精神的に大きな負担になっていたことか。これは、だれにもわからないだろう。自分の任務を果すことのできない自責の念が日夜私をいらいらさせていたのだが、このときから私の気分はおちついた。

新聞をみることのない農民たちは、一字一字、たんねんによんでくれたのだ。記事の反応については、いろいろいていたが、天津せい君の頑強な闘争の記事をよんで、

「はたちの娘でのう……えらいものじや」

といつて、ひどく感心してカンパしてくれた人もいたということだった。

日本赤色救援会広島地方委員会の結成

広島地区の赤救組織はさきにのべたように赤色救援会の生えぬきでなく、消費組合、全協、全水などからよせあつめた会員で一〇名あまりしかいなかつた。その一〇名あまりもニュース配布や基金カンパには応じてくれていたが、救援活動など全然しなかつた。まったく、ささやかな弱体組織であつたが、それでも私にとつては大切な組織で、私はここをよりどころとしていた。いまにこの組織をがつちりした強固な組織にそだてあげねばと、いきこんでいたのだ。

高田郡では南小一君が責任者になつて、かなり赤救組織ができる。赤救の会員が何人いたか、いまわかつていなが、『赤救ニュース』の発送数からかんがえて一〇人くらいたのではないだろうか。かれの話では高田郡というところは貧農の多いところで、革命組織のできる素地は充分あるところだそうだ。ここでもブル新（商業新聞）さえ購読できない人が多く、したがつて『赤救ニュース』などはよろこんで読まれているとのことだつた。都會人はこんなガリ版のニュースなんか、面倒くさがつてなかなかよんぐれないが、日頃

三次と高田郡吉田町の間は四〇キロくらいの距離があるのだが、どうして配布していたのか、私は知つてはいないのだが、たいへんだつたとおもう。いまなら自動車やオートバイがあるので、わけないが、その当時は自転車で吉田と連絡し、途中の甲立村その他にバラバラにある組織へ配布していたのだとおもう。

厳島では10・30事件の弾圧であらわれて、ガタガタになつたうえに、坂本四郎君、ついで私が出てゆき、その後も四～五人の同志が島をはなれて、組織はあるかないかわからぬような状態になつていたが、私の弟の渡辺信樹が再建にのりだして、やつと組織らしいものができた。だが今までのような活発なものではなかつた。このような狭い小さい町では、一度弾圧に見舞われると、その後は当分日和見になつて活動が消極的になることは、さけられなかつた。だがそれにしても、弟はひとりでよくがんばつていて、ここへはニュースをお

くるのが、非常に困難であった。郵便小包などはとても危険であった。その当時は郵便局長が警察の意をうけて郵便物をかつてに調べていた。やむなく私が宮島口までとどけることにした。電車や汽車は宮島の人には危険があるので、自転車をつかつた。あらかじめ日時をきめて、いまの競艇場のちかくまでゆき、弟に直接に手渡すのだ。これなら絶対確実だが、毎週オンボロ自転車（この自転車は岡本君がつかつていて消費組合へおいていたもの）をこいで、夜道を宮島口までかようのは、楽ではなかつた。かえりにパンクしたので夜おそく、ひいてかえつてことわつた。いま国道すじは夜も昼も、ひつきりなしに自動車がはしっているし家もたちならんでいるので、にぎやかだがその当時は夜ともなれば車はもちろん人つ子ひとり通らないのだから、そんなところでバイにでくわしたら、不審訊問にひつかかる危険もあつたのだ。

こういう状態が二～三ヶ月続いたのち、私の住所がきまつてからは弟が広島にでむいてきて連絡をとつた。

こうして各地区とも組織がだんだんと拡大していった。地方委員会を結成する時期がきた。私はこれらの準備のため一二月の末、自転車で高田、三次まで連絡にいった。まず高田郡吉田町の竹岡宅一君の家にゆき、かれと打ちあわせをして、その夜はとめどもらい、翌日三次十日市の大塚猛夫君のところへいった。午後竹岡君の家までかえり、その夜もそこへとまり、翌日雨のなかをカツバはかりたがずぶぬれになつて広島にかえつた。その夜ある同志と連絡があつたので、かえらないわけ

にゆかなかつたのだ。翌年、一九三四年、一月高田から南小一君、竹岡宅一君、三次から大塚猛雄君、巖島から弟の渡辺信樹があつまつてきた。場所は例の河辺賢一さんの二階、私のすんでいるところである。ここで会議の結果、地方委員会を結成することになった。構成員は上記のメンバーで、私がその責任者となつた。ニュースは今まで『赤救ニュース』という題であつたのを『救援突撃隊』とあらためることになった。そして、これはさつそく広島地方委員会の署名で第一号を発行したのだ。この委員会は4・26検挙まで活動をつづけた。

党組織拡大競争（社会主義競争）

前年の一月ロシア革命記念日の直前のある日であった。党オルグの関谷君が私にむかって、あらためた口調でものを言いだした。私を党員に推薦しようとおもつてゐるが、どうかといふのである。私はかねて、それは希望していたことなので異存なく即座に承諾した。私と前後して高田郡の南小一君も入党した。かれは自分から申し込んだのだ。このころの慣習では自分から申し込むということはなかつたのだが、かれの場合は田舎で素性が知れないので、うたがわれることもなく、入党させてもらつたのだ。丁度このころはロシア革命記念日を目標に、党的拡大強化運動をやつていたので、これを期に数名の新党員がうまれた。私達一人のほかに広島の吉本康一君と呉の山道繁君等二人もそうだった。

ロシア革命記念日を目標とした第一次社会主義競争がおわつて、つぎにメーデーを目標として第二次社会主義競争が計画された。

ある日、私の住居である広瀬町の河辺賢一さん

方の二階へ、党オルグの関谷君と前記の南小一君、吉本康一君、山道繁君と私の五人があつまつた。

まず関谷君は会議をひらくまえに防衛について一言注意した。「いまもし敵が襲撃してたら、君たちはそれと闘つてくれ。その間に俺は文書を処分するから」。それから会議にはいったのだが、そのときの模様の詳細は記憶しないのだが、このとき決定したことは、メーデーをめざして党員獲得その他についての社会主義競争であつた。競争参加者はそれぞれグループをつくり、それを隊として組織し、目標とする職場、学校等へはたらきかけ党員を獲得するというのである。そのときつくられた隊は、渡辺政之輔にあやからうという「渡政突撃隊」これは南小一君が責任者であつた。広島のなかで組織の拡大強化をやろうというのが「岩田義道突撃隊」、吉本康一君が責任者であつた。呉工廠を目標とする組は山道繁君が責任者で「ハンマー突撃隊」となづけられた。山道繁君は今までにも、私の印刷した『第二うなるクレーン』を大量に工廠めがけて、ながしこんでいたので、この方で成果を獲得せねばというのだった。私の分は国鉄へ組織をつくるというので、「動輪突撃隊」となづけた。

他の隊の目標工場学校等は何程か、大なり小なり足がかりがつくられていたので、わりとやりやすいのだが、私の場合は全然それがなく、知人ひとりいないところなので、なかなか困難であろうとおもつた。そしてその日から競争がはじまつた。私は国鉄へ入りこむ方法をあれこれと考えたすえ、ひとつ的方法をおもいついた。それはあの大きな国鉄だから、文学青年が何程かいるにちがいはない。それをまず、さがしたそそうというのだった。今なら労働組合があるから、それにちかづけばよいのだが、そのころはそんなものはなにひとつない。そのなかで、本をよむ、理屈をいうといつた、ちはそれと闘つてくれ。その間に俺は文書を処分するから」。それから会議にはいったのだが、そのときの模様の詳細は記憶しないのだが、このとき決定したことは、メーデーをめざして党員獲得その他についての社会主義競争であつた。競争参加者はそれぞれグループをつくり、それを隊として組織し、目標とする職場、学校等へはたらきかけ党員を獲得するというのである。そのときつくられた隊は、渡辺政之輔にあやからうという「渡政突撃隊」これは南小一君が責任者であつた。広島のなかで組織の拡大強化をやろうというのが「岩田義道突撃隊」、吉本康一君が責任者であつた。呉工廠を目標とする組は山道繁君が責任者で「ハンマー突撃隊」となづけられた。山道繁君は今までにも、私の印刷した『第二うなるクレーン』を大量に工廠めがけて、ながしこんでいたので、この方はなにもない。

私はさつそく、これをもつて広島駅のまわりをうろついた。そのころ広島の西側に国鉄職員の食堂があつた。そのままあたりで、ひとりの若い国鉄職員をよびとめて、自分はこのような同人雑誌をだしているのだが、文学の好きな人がいたら紹介してくれないとたのんだ。その青年はすぐに、自分の知つた人で文学好きなものがいるから、紹

介しようと食堂に案内してくれた。しかしそのひとがみあたらないのでまたの日を約束してわかれた。

約束の日がきて、その間に食堂へいったら、立川謹次という青年を紹介してくれた。立川君は気さくな青年で、すぐに心やすくなり、文学論はもちろん国鉄内部のことや、軍隊時代のはなしをしたりして、いろいろはなしあつた。かれは上等兵だったそうだ。またかれはある日「同人雑誌は活字にしたいな」とい、「だがこれは資本論になるなあ」といった。金がいるということを資本論といったのだろうが、資本論ということばを、知っているのがおもしろいとおもつた。そして何回かあって段々と親密になつたが、残念なことは、こちらは非合法の人間である。ここはやさしく、いつたりきたりできない。

そうやつているうちに、四月二六日一斉検挙がきた。

松本徹のこと

いまは故人となつてはいるが（そして彼のこと）を個人的感情をもつて、かきたくはないが）かれのやつたことについては、事実は事実として記録にのこす必要があるので、私の知つてゐるかぎりをかきとめよう。数年前、無名戦士の碑へ松本徹の合祀問題がおこったとき、広島旧友会の一部に反対があつた。私は自分の経験に基づいて反対意見を岩佐君を通じて述べている。まことに

のべたとおり、松本徹は党員でもあつたし、よく活動もし、よくがんばつていただらしい。検挙されても、最初のほどは非転向でがんばつていた。だれだつたか——もしかしたら天津せい君だつたか——獄中の松本徹へ「転向したといううわさをきいたが、どうか」という手紙をおくつたところ、大変におこつて「なんで転向なんかできるか」とかいききた。この手紙は私も読んでいたが、迫樹君も知つてゐる。たしかに彼は、その年（一九三三年）の夏までは非転向であつたはずである。それが、いつの間にか転向して執行猶予を出てきたのだ。いつたいそれはどうなのであろうか。党員が執行猶予ということは、今までにあつたことがない。ただわたしたちは、それを詳しく調べようとはしなかつた。私がかれを知つたのは彼が出来所してまもなくであった。

さきに岡本菊次郎君、坂本四郎らといつしよに、つかまつた天津せい君はそのご非転向でがんばつてゐることをきいて、私たちの間でなんと救援の手をさしのべねばということになり、彼女の救援カンパを『赤救ニュース』でよびかけるとともに、合法的に差入れ活動のできる人をと、さがしたのだが、適當な人がいなかつた。彼女には姉さんがいたがその職業の関係で不可能であつた。そういうときに、たまたま彼女の愛人である松本徹が出所したのである。関谷君は松本徹をつかえいいじやないかといいだした。私はどうかとおもつた。天津せい君は非転向でいるのに松本は転向している。あまり感心しないなあと、おもつたのだが、結局かれしか合法的にやれる人はいなかつたので、かれをつかうことになった。

ある夜大州町のかれの家をやつとさがしあてて、おとづれた。丁度かれはいた。用向きをはなすと、かれは当惑した顔で、引うけるとも、断るともいえず、頭をかかえた。

その様子を奥の間で見ていたお母さんがでてきて、ふたりのあいだへはいつて「うちではふたりやられて、非常にこまりました。やつとひとりはかえされたので安心したのだが、また、ひつぱりだされるようなことがあつてはこまるから、これだけはこらえてやつてください。」とたのみこんだので、私としてもそうまでいわれれば、どうすることもできないのでそのままかえつた。それから翌日か翌々日、消費組合の迫樹君が連絡にきた。松本徹が私にあいたいというのだった。さつそくあうことにしてた。

きめられた場所と、きめられた時間にかれと連絡をとつた。かれは「あのときは自分も決心がつかず、おふくろもああいうので、返事ができなかつたが、じつくり考えたすえ、やつぱり天津の救援活動をすることにした」というのだった。私はたいへんうれしくて、それならたのむといふことになり、それから一週間に一~二回くらい定期的に連絡をとり、僅かながらもあつまつた救援カンパの金をわたしたり、いろいろと指導をしたのだ。だが私たちのやつたことはまちがつていた。かれを天津君の救援活動につかつたこともだが、そのごも同志としてあつかい、連絡をとつて仕事につかつたこともである。

かれは天津君を激励するどころか、反対にくさらせることになった。考えてみれば当然のことである。自分は転向していく、しかも執行猶予の

身で、公然と非転向の天津君に面会して、どういうことばがはけるだろうか。それは今までないことである。はじめ私たちはこのようなかたちで救援活動をやらつもりではなかつたのだが、かれが、かつてにそうしてしまつたのだ。

だからかれが天津君をくさらせた時点において、かれとの連絡をきつたらよかつたのだが、私も助平根性をおこしていた。天津君が転向したのはしかたがないとしても、松本徹が運動に復してくれれば、まあいいだろうとおもつていた。こちらのところが、あとからかんがえてみて、自分がらその不明さが、はがゆくもあるし、残念でならなかつた。たとえ刑務所の面会室であろうと、転向をすすめることのできる男が、どうして運動に復することができるだろうか。

もつともこの時代には、こういうこともあつた。敵は我々の陣営をつきくずすために、だれにでも転向を強要した。転向といふものは自分の思想が変つてからこそおこるものであつて、他からの強要では本物の転向とはいえないはずだが、そんなことはどうでもよい。中味は何であろうと、表面転向をよそい、行動をやめることを誓いさえすれば、それで一応転向とみとめて、減刑もするし事情によれば釈放もしていた。だから出所できるとおもつたら戦術的に擬装転向して、でていつてまた活動にはいるということもあつた。あるいはまた、気のよい同志は、はげしいたかいにたえられず、共産主義の正しさを確信しながらも、実際の運動面からすることを一度は決心する。だがその後何かの刺激でたちなおり、勇氣を鼓してもういちど運動にはいる。こういうこともあつた。

だが松本徹の場合はそんなものではなかつた。かれには革命的情熱ではなく、共産主義の勝利を確信して行動していたというのではなく、ただ冒險のスリルに興味があつたのだとおもう。かれの性格は多分にそんなものであつた。それを、うらづける、ひとつの一例がある。日本共産党広島県オルグ会議署名の「帝国主義戦争絶対反対」のポスターを、いつよにぱりにいつたとき、かれはじつに大胆で交番のまん前の電柱へわざと、ペたべたとはつていた。交番は夜はたいていねこんでいるのだが、もし物音に眼をさましたら大変なのである。だがかれは一向平気で面白がつてやつていた。そのときかれは、そのままに行動隊でたとき、交番の扉のガラスにはつてやつたことがあると得々とはなっていた。このように、かれは戦争反対よりもスリルに興味があつたのだ。このような共産主義者というものはない。こういった種類の人間にはときに節操がなくて、自分の都合で平気で仲間をうらぎることのできる図太い人間がいるものだ。だからかれについては、もつとあらゆる角度から検討すれば、かれをつかうべきではないといふ結論は出てきたはずである。そこは私がひとをみる眼があまいのと、働き手に飢えていたため、何事も希望的に観察をして採用したのであつた。

ではなぜ、そしていつごろからかれはスパイになつたのだろうか。×月×日反戦ボスターをはりにいつたときは、かれはスパイではなかつたとおもう。スパイはそんなとき、よく勇敢に挑発的に転じたのはそのあとである。しかもこのポス

ターはりが原因である。あの夜ビラはりにはふたりとも手袋をつかわなかつた。だから警察が指紋の検出をすれば、すぐにわかるはずである。またポスターはりは白島の東西に通する道路を、三條橋のほうから広島駅の方向へ常磐橋の辺までの電柱にはつたのだが、この線を一直線にのばせば大州に通ずるのである。私たちには事前によく研究もせず、いきなり行動にうつるくせがあつた。

こうしてかれは検挙され、スパイを強要されたのだ。この際かれは非常によわい立場にある。もしスパイをことわれば、執行猶予をとりけされてしまふかもしれない。そうなれば、折角釈放されてできた愛妻と当分わかれねばならない。そしてかれはスパイのほうをえらぶ。もしこれが私だったら、どうだろうか。私だったら絶対に刑務所のほうをえらんだ。

また私でなく他のだれかの場合はどうであろうか。こんなことをかんがえるとすぐに丸川昇一君のことをおもいだす。丸川昇一君については、私はかれにうちあけて謝罪する機会を失しているのだが、かれが執行猶予をとりけされて二年間かまつたことについては私に責任がある。私がかれから救援基金のカンパをうけて、私が猫ばばしたとおもわれたくないために、変名ではあつたがニュースで報告したのを、警察がかぎつけてかれを検挙した。かれは刑務所のほうをえらんだのだとおもう。丸川君だけではなく、良心的な同志なら、みなそうしたであろうが、松本徹はその点非常に

卑劣であつた。

私はかれがなにくわぬ顔をして、スパイに転向したとはつゆしらず相變らず連絡をとつて、あつていた。いまからかんがえると、変だなあとおもだそうとする態度があつた。私がお人好しではなかつたら、すぐに見破つたろうが、私はそのような能力がなかつた。このことをかんがえると私は自分ながらはらがたつた。のことから、私は全く自信をうしなつてしまつた。

私がかれと最後にあつたのは検挙の前日、四月二十五日の午後であつた。私は人もあろうに、敵のスパイを忠実な同志と信じこんで、私のアジトへつれてきたのであつた。馬鹿は、知れている！

4・26 検挙は、私のアジトがわかつたからはじまつたと当初私はそのようにおもつたのだが、そろはいえないようにおもう。私ひとりとらえさえすればよいのなら、かれとの連絡途上において、いつでもとらえることはできた。やはり敵は一齊検挙をたくらみ、準備をし、機が熟するのをまつていたのだ。それまで私はおよがされていたのだ。

それは岩佐君もかいていたように、中央からもばれていたかもしれない。『赤旗』が危険で郵送できなくなつてから、東京から汽車でわざわざもつてきていたが、その男がスパイだったと関谷君はいっていた。その男に関谷君はこちらの情勢を報告していたのだ。私もこの男にあつたことはあるが、何だかひとくせありそうな顔をしていた。こんな顔でも共産党員かとおもつたことである。だがかれの言動にはそれらしいものは全然感じられなかつた。関谷君も同様にそれをうたがわなかつた。

たのだ。こういつた情勢の中では中央も地方も組織の内部まで、すっかり敵に知られていたとおもわれる。

松本徹が私のアジトを知つて、当局に通報した時点、機は熟してて検挙のきつかけとなつたのである。

松本徹は私を売つて、つぎには広高生の吉本康二君を売つたのだ。かれは私たちの検挙後全然関係のないはずの吉本君と、どうやつて連絡をとつたのか、私は知らないが、吉本君が京都に上げ

いたとき、かれもそのあとをおつたのだ。吉本君と同じく検挙をまぬがれて大阪ににげていた山道繁君と私の妻の高橋マツ子（旧姓）は同じところにいたそしが、松本徹は大阪までにげてきたというのに、関谷君の悪口ばかりいい、真剣なものが全然なく、これが非合法でもぐつているものの態度かと、おもうほどだつたという。マツ子は敏感なので、すぐにかれの正体をみぬいたのだが、吉本君はまだ年は若いし、純真な坊ちゃんでもあつて、そのところがわからなかつたらしい。依然として松本徹を信用していたのだ。

それからまもなく吉本君は吳の組織を再建するという重大な任務をおびて、広島へ出発したのだ。そうだが、これが最後のわかれとなつたとマツ子はいっている。吉本君は広島で松本徹に売られ、同君はマツ子にあてて獄内から手紙をよこしたそうだ。それには「松本徹はタルチスのような男でした」とあつたという。

吉本君がつかまつたのは九月ごろで、私たちよりだいぶんおくれたのだが、事件はいつしよで、裁判所ゆきのバスに同車した。かれは私をみると

何やらしきりに合図した。そして、なにかを知らせようとしていた。だが私はそれがどうしてもわからなかつたのだ。きっと松本徹のことを知らせようとしたのだろう。そのときは私は、吉本君は私たちといつしよに一齊検挙でやられたものとおもつていた。松本徹を知つていなければ、松本のことをいうはずがないので、かれの合図がどうしてもわからなかつたのだ。かれはあきらめて合図をやめたが、いまかんがえると不憫でならない。

かれは獄中で肺結核となり、腸結核を併発し、絶望状態となつたので仮出獄し、うらみをのんでこの世をさつたのだ。

私は私で獄中から弟に松本徹のことを知らせようとおもつて、いろいろやつたがこれもだめだつた。かねてうちあわせたとおり、さしいれの本の三一五のページのある文字に爪で印をつけて秘密通信したのだが、どういう手ちがいからか、よくでくれていなかつた。また手紙でこんなこともかいたのだ。「S字型の鉄はいけない。これだけはのけたほうがよい」。ただこれだけかいたのだったら、わかつたかもしれないが、敵にさとられないために、長々と家の商売につかつてゐる糸くり機の改造についてかいて、その中に上の文句を挿入したのだ。機械にくわしい弟のことだから、機械については意味のない上の文句をなんとか判読してくれるだろうとおもつたが、判断してくれなかつた。まさか松本徹がスパイとはおもわなかつたのだろう。私は以前に松本徹のことを、活発によくやる、くさつても鯛だといつてほめたこともあるので、尚更うたがわなかつただろう。

だが松本の魔手は厳島にまではのびなかつた。

厳島は4・26検挙をまぬがれた。それは松本徹は厳島の組織を知らなかつたからである。

〔注〕 渡辺信樹氏のはなし、「兄からの手紙や、さしいれの本の三一五ページのしるして、松本徹のことはわかつた。その松本徹と天津せいが宮島の私のところにたずねてきた。なぜきたかわからなない。」

四・二六検挙

一九三四年四月二六日未明、夢うつつのなかで犬のほえるこえをきいて眼がさめた。それから何秒たつたどうか。ザーッと風でもふくような物音がしたとおもうと、弾丸のようなはやさで、私と大塚君はふとんの上から、三、四人の男におさえつけられた。それにつづいて六、七人ばかりの男たちが、一齊に侵入してきて、部屋いっぽいになつた。かれらは私たちが凶器をもつてゐるかもしないと思つたのだろう、ひどくあわてて「早う早う、手錠手錠」とよんだ。やつとだれかが、私の手をふとんの中からひきだして、ガチッと手錠をかけ、私はひきおこされた。六、七人くらいの男が私たちをとりまき、ステッキをもつたやつは、私のあたまといわす肩といわす、ビシッビシとやたらとなぐりつけた。こうも多人数におそわれたのでは、にげることもどうすることもでき

ない。私は奴等のなすがままにまかしていた。大塚君のことは気がつかなかつた。そのとき私はこころのなかでさけんだ。「徹にやられた」

西署につくと、すぐに二階の調べ室につれこま

れた。三、四人の特高が私をとりまくようになした。多分課長かなにかだらう。まつたく無難作に、「名前は」ときいた。うつかり、つりこまれて「小寺」というところだつた。私はだまつていた。その男はまたかさねて名前をきいたが、私はだまつていだな」といつてそこにでた。なにかうちあわせをしたのだろう。こんどは三階のほこりっぽい、ものおきである。そこには訊問するように、ちゃんと古びた事務机とイスがおいてあつた。拷問部屋という感じである。

今日では黙秘権は国民の権利として憲法でみとめられている。そのころは、そんな権利はない。いわなければ、あくまでも力づくで、いわせようというのだ。それにたいしては、ただ無言でがんばるしかない。昔ロシアの革命的労働者、アーチャヤヴァロフの手記『マルクス主義への道』の巻頭に、「同志よ敵の訊問にたいしては無言でおれ！」これが組織を防衛する唯一の方法である」とのべている。私はこのことばを金科玉條として、ここにきざみつけていた。

やがて訊問がはじまつた。私を調べる奴は五〇恰好の下品な顔をした男だつた。千葉良一といふ警部だ。かれはいきなり私の頬を平手でうつた。バーンというひびきがはでにするだけで、ちつともいたくはなかつた。かれはつづけざまに両頬をパンパンとうつた。

私は「テロをくつたんだ」といった。そして

とうとう本物の拷問をはじめることになつた。

私は手錠をかけられたまで、ざらざらする板の床にお行儀にすわらされた。私は觀念した。かれらは用意してあつた三寸角くらいの棒をもつてきて、足の間にはさみ、千葉が靴のまま私のひざのうえにあがり、おちないようく頭髪をひんにぎり、ひとりは、たおれないようく私をささえ、ひとりは棒の上にあがつた。三人がかりである。そして上下にどすんどすんとやりだした。私は歯をくいしばり、下腹にちらをいれ、めをとじて、うーんとこらえた。それがどれくらいの時間つづいたか。時間はひどくながいような気がした。のちには足がしびれたのか、さほど苦痛を感じなくなつた。奴等は「名前をいえ、なまえをいえ——まだ、いわんか」といしながら、どすんどすんとやる。それでもだまつていると、「返事だけでもええ、小寺じやろう」といつて、私の髪の毛をひっぱつて、うなづかせようとする。だが私はあくまで無言でがんばつた。

とうとう奴等のほうがくたびれてしまつた。私はたちあがることができないので、奴等がひきあげるようにしてたたせた。そして三、四人がかりで三階から急な階段をつりおろした。

留置場にはいると二、三人ばかり留置人がいた。みな異様な私のすがたに、なにごとかというような顔をしてむかえた。というのは私のきものはズタズタにやぶれ、顔は、おそらくはれあがつていたかもしない。腰から下は自由がきかないというかつこうだつた。みないちように「どうしたんぢや」とついた。

私は「テロをくつたんだ」といつた。そして

いでのことにこういったのだ。「ぼくは、もしかしたらここで死ぬかもしれん。あんたたちはでたら、ぼくのことをだれにでもよいからしゃべつてくれ。そしたらぼくの同志の耳にはいるかもしれないから」

このときには、検挙は私たち一人だけかとおもつていたので、このことをそとの同志に知らせねばならぬとおもつたからだ。とにかく、ここがなんばらねばならぬとあらためて決心した。

その翌朝ひとりのわかい特高が私をつれにきた。手錠をはめられ、いつしょにあるきながら「今日はさかさにつるんぢやろう」と、こともなげに

いつてやつた。奴は「そんなことはしないよ」といつていたが、「ちよつとここでまつてくれ」といつて、ちいさな部屋へいれてでていつた。まもなくもどつてきて「今日は調べはやめよう」といつて、またもとのブタ箱にもどした。それからはここで私は調らべようとはしなかつた。忙しい最中で私ひとりにかかるはいられなかつたのかもしけない。

ここで、ちよつとテロについてのべておきたい。

テロといふものはどんなにおそろしく、どんなにたえがたいものかとだれもおもうのである。もちろん、けつしてらくなものではない。いちど覚悟をきめてしまえば案外たえられないものではない。

私の妻が大阪でテロをくつたとき、最初ものすごくいたかったので、おもわず「まつて」といつたところ「まつてはしゃらくさい。申しあげるか申しあげぬか、どつちだ」といつたので、とたんに覺悟がきまつて、その後は、それほど苦痛をか

んじなかつたといつてゐる。そのときテロの間中うつぶせになつたまま、みうごきもせずにいたら、奴等はひつくりかえしてみて、めをパチクリさせているのをみると、またテロをやりはじめたといふ。このときは「いれずみをいれてやる」といつて木刀と竹刀で尻をひつぱたくのだそうだ。たたく凶器の種類によつて色がかわつて、いれずみみたいになるのだそうだ。その日のテロは奴等がくたぶれて夜まででおわつたそうだ。その夜から数日間ハンストをやつたが、その決意にまけてそのまま奴等は取り調らべをしなかつたといつてゐる。

私がつかまつて、その日のうちか、あくる日からか、ぼつぼつ同志がはいつてきた。早志みどりさん（のちの玖島夫人）もきていた。留置場が満員なので、男といつしょにするわけにもゆかないで、彼女は房外にすわらされていた。電鉄の井上栄君もきた。かれは私に「なにもかもバレていいくなくてもかまわない」とにかくがんばれ」と激励してやつた。

何日めだつたか、二つ、三つのさきの房に関谷君のこえがきこえた。私は関谷君のペニネームでよんでみた。かれは私に「松本君（私のペニネーム）きみはだらしがないぞ」といつた。「なにがだらしがないんだ」と反問したが、かれはなにもいわなかつた。私が松本徹に売られたことをいつたのか。しかしきは、それは知らないはずだ。では、取り調べにたいしてあれこれ申しあげたとでもおもつてゐるのか。そうだつたら、かれは特高のかまにかけられているのだ。わたしはかれにい

つた「わしはいつさい無言でやつてゐる。これがらも無言だ」。だがかれは、そのままこのことについてはなにもいわなかつた。

かれがどうしてつかまつたのかきいてみると、己斐かどこかで飲食店へはいつたところをつかまつたのだそうだ。全市に非常線をはつたのかもしない。

こうして同志たちが沢山はいつてくると、ガヤガヤとにぎやかになつた。そのうちに食物がまづいということになつたらしい。私自身についていえば、ちよつともまづくはなかつた。きたない木箱へいれたむぎめしで、おかげは朝昼晩ともなつばの煮た奴だが、私のそれまでの最低生活にくらべればまだましなほうだつた。だが他の連中にとつてはほんとにまずかつたであろう。とうとう処遇改善の要求をだし、ハンストになつた。関谷君がリーダーだつた。二~三房さきで関谷君が監守とやりあつていた。私は同房のわかい男に、「大声でさわげ、さわげ」とけしかけた。かれらはみんな弁当をそとへおしだし「こんな弁当、くえるかい」「白いめしいれえ」「花のさいたナップなんか、くえるかい」とさわぎだした。

他の房でもみな大声をだしてさわいでいた。そろやつてついにこちらの要求をいれさした。その後にきた弁当は、おかげが沢山はいつていて、みんな一応満足した。だがその翌日にきた弁当はまた逆もどりしていた。そしてブスブスいいながらだまつてくつていると、そのつぎはまたもとのクサリナッパになつた。また不平がたまつた。ちょうどこのころ私は祇園署へまわされたのだ。

だからあのことは知らなかつた。最近に玖島夫

人の手記をみると、数日間ハンストにはいつたと
でいるので、その後まもなく第二次のハンスト
にはいつたのだろう。

祇園署の留置場は前近代的な「牢」であつた。
房は二室で、うらのすみつこにあつた。光線がは
いらず、いつもほのぐらかつた。だが宮島のより
すこしあかるかつた。

ブタ箱（留置場）そのものが拷問の道具で、こ
この生活がたえられないなら、はやく白状しろと
いうことだから、衛生的であるはずがない。めし
はわりあいよかつた。近所の仕出し屋からとの
だから、わるくしようがない。私ひとりにたべさ
すために一合か二合のむぎめしをたくわけにはゆ
かない。だが分量がすくなかつたので、はらがへ
つていけなかつた。

留置場は光線がはいらぬのと、厚い板でかこ
まれてゐるのでかなり底冷えがした。かぜをひい
たのか熱がでだした。段々ひどくなつて、かなり
高熱がでだした。ちかくの医者をよんでもくれた。
医者にみてもらうときは、ブタ箱でなく宿直室に
はいつた。医者は脾臓のあたりをおさえたり、あ
あやつたりこうやつたりして、注射をうつ
て処方箋をかいてかえつた。この医者は刑務所と
はちがつて町医者なので、私のようなあかにまみ
れた、ひげぼうぼうの男でも、親切によくみてく
れた。このときは医は仁術だとおもつた。医者の
薬をのむと、さしもの熱もだんだんひいていっ
た。

祇園署は、いなかのケイサツだからいつもひと
りぼつちでたいくつであつた。

そのうち、となりの房に、数本英次郎君がやつ
てきた。かれはコップ（プロレタリア文化連盟）

関係でやられたのであつた。私はそれまでこの検
挙が、どこまでひろがつてゐるのか、まるで見当
がつかなかつたが、かれからいろいろきいて、か
なり大がかりな検挙だということがわかつた。数
本君のいるあいだはたのしかつた。おたがい窓へ
かおをくつけてはなしあつた。かおはみえなく
とも、心と心はふれあつた。

そのうち数本君がでていつて、またひとりにな
つた。まもなく西署から紺谷がやつてきた。数年
前私が西署に検挙されたとき、巡査部長であつた
紺谷は、警部補になつてゐた。ひさしぶりに二階
のあかるい広々とした武道場にあがると、夜の鳥
が昼間でてきたように、まぶしかつた。いつのま
にかあたりはすつかり夏になつてゐた。

紺谷は、数年前とはすつかりかわつて、ニコニ
コして私の機嫌をとるようであつた。そのあげく
調書をつくりにかかつた。私は「組織については
なにもいえない」といつたら、その調査に「組織
についてはなにもいえません」とかいた。かれは
こういつた。「君たちや、安々と自白したんじや、
顔がたたんのかね。少々やられて、しかたなくい
わされたというほうが、よいのじやないのかね」
と、テロをほのめかした。私は「どつちでもおな
じことだ」といつてやつた。私はまだこれか
らがテロも本物だらうと、かくこした。かれは一
時間いてかえつたが、手記をかいてくれといつて、
紙と鉛筆をおいていつた。

私はじぶんの取り調べを断念させねばならぬ
とおもい、こまごまと私の決意をかいた。それへ

私の短歌もかきそえておいた。

堤防は よし決済すとも 最後まで

おのれ ひとりで 堤を守らむ

かれはニコニコしてよみはじめたが、みるみる顔
はくもり、まるで泣きそうな感じがしたので「そ
れはやぶろう」といつたら「いやええ、とつてお
こう。これも証拠だ」といつてカバンにいれた。
それからまた何日かたつて、こんどはふたりで
やつてきた。「あちらがあいたら、もうそろそろ帰
ろうか」といつた。

西署にかえつてみると、留置場の中は満員であ
つかつた。このころケイサツは、ヘロ患（ヘロイ
ン中毒患者）狩りをしていた。

そのうち私の調らべがはじまつたが、もう調べ
ることはほとんどなかつた。私がいわなくともバ
れるものはみなバレていた。私はそれを承認する
だけになつてはいたが、それはしなかつた。奴等も
しかたがないので調査に「組織についてはいえま
せん」とかいた。

未決拘留

広島刑務所へゆくとすぐに私服やはきもの、そ
の他は拘置所にあづけて青いきものをさせられ
た。丸ぼうずにサンバツしてフロへいれられる。
三ヵ月めのフロなので身体がさっぱりした。

この拘留期間中こまつたのは最初の二～三日、
ものすごいノミにおそわれて、ねむれなかつたこ

とだ。板の間にゴザを（タタミ一枚分くらい）してあるが、そのゴザのなかに無数にひそんでいるのだ。よこになつてみてみると、ぞろぞろはつてくる。ゆびでおさえて爪でつぶす。ひと晩中ノミばかりつぶしていた。あくる日はすわつたままで、すわっているのもらくではなかつた。

拘留の満期がちかづくころ、やつと監房の戸があいて検事局へゆくのだといつてだされた。

「きみはなにもいわないが、いわなきや起訴せんぞ」、私は「起訴しなきや、しなくてもいい」といつてやつた。それから彼は急に態度をかえていろいろはなしだした。私はシャバでは言論の自由がなかつたが、ここでは自由があつた。私は天皇制の矛盾をつき、テッティ的にこきわろした。かれにはなんの理論もないのに反論しなかつた。かれは時々ちよつと口をはさむのだが、すぐ反論してやつた。

かれはふと時計を見て、「ああ理論闘争をやつていたら三時間」といつて書類をしまいだした。かれは思想検事が、知つてるのは「理論闘争」ということばくらいなものであつた。

二四日がすぎるとき未決拘置監いりである。領置へあづけた私のゆかたをきてタタミのうえにすわつたときは、またシャバにもどつたような気がし

た。このゆかたは、祇園署にいれられていたとき、詐欺ではいつていた男がくれたもの。私がつかまつたとき、きていたものはズタズタにやぶれたが、そのときも同房のものにあわせを一枚もらつた。ここでは私本がよめる。もちろん検閲があつて左翼的な本は一切よまさない。だからここでは語学とか数学とか基礎的な勉強をすればよいのだ。私たちの検挙後、救援会が活動していた。いつしょにつかまつた神崎宇市君や大塚猛夫君は釈放されてすぐ救援活動をはじめた。ふたりとも前後して面会にきてくれた。面会所で金あみをへだてて、おたがいにニコニコしあつて話をすると

きは、刑務所という感じがしなかつた。神崎君がなにかいいかけたら看守が制止したので、かれは「それではもういふことはないわい」といつて、でいつたのがいまでもはつきり印象にのこつている。

またここにいるあいだに早志みどりさんが四五回ばかり手紙をくれた。早志さんは、そのころ派出看護婦をしていて、ひまなときは消費組合に出入していた。ここでは手紙をもらうことがなりよりもつれしい。なにもかいてなくともよい。手紙をもらうだけで、とても大きななげましになる。

本のさしいれは私の弟（渡辺信樹）がやつてくれた。近代日本歴史とかいう幕末から明治初年にかけての歴史の本で、かなり専門的なものであつた。これはきっと高等学校のほうからきたものにちがいない。また有沢広己という東大的助教授のかいた統計論が、これがまた妙に面白いものであつた。それはいたるところにマルクス、エンゲルス、レーニンの引用でうまっているのだ。あたか

も有沢さんが、さしいれ用にかけてくれたようであつた。この本は岩佐君もよんでいる。神崎君あたりからささいれてもらつたのだろう。

ここでは他の同志と連絡をとることを厳重に戒められた。だから顔をあわせたり同志のこえをきくような機会は全然なかつた。じつは、ひとつおきくらいに私たちの仲間がすわつていていたのだろうが、私たちには全然わからないので、じぶんひとりでいるような気がしていた。だから同志の元気な顔が、みたくてみたくて、時々夢にみるくらいであった。またなんとかして同志によびかけて激励してやりたかった。

ある日運動のとき、丁度看守がはなれてたつているとき、監房のなかの同志によびかけるつもりで赤旗の歌をうたつてあるいた。するとまんなかの房の高い窓へにぎりこぶしをあげたやつがいた。それがだれだったかわからない。それから何日かたつて独房のなかで本をよんでいると、その運動場でしきりに歌をうたつてている。インターか赤旗かだつた。そのこえはたしかに岩佐君のようであつた。ああ岩佐君は元氣でがんばつてゐるなあとおもつた。ただこれだけのことだが岩佐君と会話をかわしているようにおもつた。

ここではどういうものか、よく転房さしていた。そこで私もおもいついて独房の壁へ、めがねのつる（私のねがねはつるがおれて針金をくくりつけていた）で落書きした。「J K P（日本共産党のドイツ語の頭文字である）」とかいた。ちいさくかいたのだが、それを看守がみつけて監区長に報告したので、さつそくひつぱりだされて監区長のまえにひきすえられた。監区長は大井という若い東北帝

大をでたという男で、いつも口をへの字にむすんで、いやに威厳をもとつとめているような奴であった。この男の机の上には数冊のドイツ語の厚い原書がかさねてあつた。そのうちの一冊は、

D A S K A P I T A L (資本論) であつた。か

れは「こんなものまで、ちゃんとよんでもいるんだぞ」というような顔をしていた。だがこの男はインテリにあわない残虐性をもつていた。阪口喜一郎君はきっとこの男にころされたのにちがいない。

岩村大次君や椎野悦郎君もこの男にやられたそうだ。その他多くの同志たちもこの男にやられてゐるにちがいない。かれは私をよつんばいにさせて尻をまくりあげ、皮手錠でびしひしとしばいた。「ブルジョアジーの番犬ぶりをみせてやるぞ」「ブルジョアジーの番犬はこんなものだぞ」とかれはさけんだ。

そしてそのあぐく左手後右手前といつて皮手錠をはめられた。なぐられるぶんはたいしたことはないが、この手錠にはちよつとこまつた。めしをくうのに右手だけで犬のようにして、くわねばならないからだ。このあと切れ痔にこまつた。用便のとき、あぶらあせができるほどいたんだ。このことを弟への手紙にかいたら、すぐに医務係がやってきて薬をくれた。多分監区長の大井が私の手紙をみて、さしむけたのだろう。かれはいつも私の手紙に目をどうしていた。私の痔の原因は尻をなぐつたからだと思っていたのだろう。

予審

こうして夏はすぎ秋もすぎ年をこした。

ある日突然予審廷にひきだされた。齊藤といふてはなにも知らなかつた。

その後ひきつづいて二～三度出廷した。一回は

迫樹盛登君、南小一君と私との関係をたしかめるためであつた。私が知らないと否認するので、判事は迫樹君をつれてこさせ、私のまえで迫樹君に、

これはだれかといわした。つぎに南小一君の調書を私にみせた。私が否認すると判事は「こんな風に南はちゃんとといつておる。これを否認するなら、また南を出廷ささにやならん。そんなぞうさなことをさせないで、はつきりいつたらどうかね」といった。徒に公判をおくるせ、無用のくるしみを同志にあたえることになるので、あつさりみとめることにした。

予審が終結するとまもなく公判日を通知してきた。いまは何年何月かおぼえていない。

公判

公判は勿論のこと非公開だつた。

検事は長々と論告して四年を求刑した。

私の陳述は長々としゃべるのは自信がなかつ

た。私は長期間無言の行でいたので、このころは言語障害をおこしていた。そうでなくとも口のへたなのが、体力の消耗とともに声帯も萎縮して蚊のなくような細い声しかでなかつた。また私は英雄きどりで公判闘争をするということは、すきではなかつた。そんなことは私のガラではなかつた。

だから私はただ共産主義は正しいということ、思想は転向しないこと、出所したらふたたび運動をつづけるということを簡単にのべただけだつた。

公判があつて一～二週間後に判決があつた。検事求刑どより懲役四年、未決拘留通算一二〇日といふのだつた。

拘留監にかえるとすぐに控訴の手続きをとつた。刑がおもかるうとかるからうと、それは問題ではない。我々はそれを刑だとはおもつていなからだ。悪いことをしないのに、刑があるはずはない。これは弾圧なのである。だから我々はそれにたいして反対し、即時釈放しろといつてあつた。

控訴

控訴院は国恭寺のちかくにあつたが、古くさい一見御殿風の建物だつた。こんども非公開かとおもつたら、そうではなかつた。

婦人ばかり（どこかの婦人会らしいが）その傍聴で満員だつた。そのころ共産党事件といえれば新聞は一ページ大の号外を発行し、社会面も全ペー

ジをうめていた。検挙されたものが、いずれも優秀で、まじめな青年であることが、おなじ年頃のむすこをもつこれらの人たちに共産党事件の公判を傍聴させたのかもしれない。

こういう機会をとらえて、いわゆる公判闘争をおこない、啓蒙活動（宣伝活動）をすればよかつたのだが、私にはできなかつた。婦人のまえではテレるくせがあつて、あがつてしまつた。裁判長が私に控訴の理由をたずねた。「我々は無罪である」といつたら「えつ」といつて、きき耳をたてたが、私が無罪の理由をいううちに、やっぱり共産党だなあという顔をしてしまつた。共産党なら、しらべることも、きくこともありはしない。刑の相場はきまつているとでもいうようであつた。傍聴者もせいがなかつたろう。

判決も一審どおり懲役四年、未決拘留通算一二〇日であった。これは一九三五年六月二十六日のことであつた。

一九三四年四月二十六日の検挙から一年二ヵ月めであった。このつぎは大審院に上告ということになるのだが、このへんで下獄することにした。

下獄すれば今まで頭へつめたものの何割かを忘失するだろう。それがおしいとおもつた。

この事件については私はくわしいことはきいておらず、当時の新聞記事などもみていないので、誰々が起訴され、どれくらい実刑をうけたかなどよく知つていないので、これでほとんどねこそぎにやられたものとおもう。

このようにして邪魔物を排除した天皇制ブルジョア政府は戦争への道をまつしぐらにつきすすんだのだ。

略歴

私の出生地は広島市小網町（昔は畠屋町といつていた）寿座という大きな劇場の前の小さな菓子屋の長男として生まれた。旧士族出身の父は私以上に商売が下手で損ばかりして貧乏し、遂に宮島に流れついて豆腐屋をした。そこで私は大きくなつた。そのような訳で貧乏の味は充分になめていた。まだ小学校へ行つてゐる頃から宮島細工の彫刻屋の従弟に入つて資本家（と云つても問屋）の横暴さを知り、階級意識を自然と体得した。

だが私は向学心に燃えて二〇歳の時上京し国民英学会の英文学科の夜間部に入つた。勿論昼間は労働、そうしながら一方では社会科学の勉強をした。當時西雅雄主幹の『社会主義研究』という月刊誌が出ていたので、それを購読していたのだがメーデーの前々日の夜突然検束されて西神田署のブタ箱に入れられた。処が意外の事に、それまで遠くにいると思っていた西雅雄、その人がそこに拘束されていたのだった。しかもその隣りには、かの一九三三年四月に逮捕虐殺された上田茂樹がいたのだ。後に知つたことだが、丁度その頃は第一次共産党事件の最中であつたらしい。私も一応共産党的仲間の一人に見られたのだった。だが私はチンピラなので二日おかれただけで釈放されたのだが、このことは私の将来の方向を決定してくれたのだった。

遂に四月二六日検挙された。そして懲役四年の刑をうけた。獄内では非転向でがんばつた。

〔以下、本文参照〕
大西洋戦争勃発の日、一二月八日の翌朝また検挙された。だがこの時は何もやつていなかつたので、一ヵ月ばかりで釈放された。その後三年位たつて、もうボツボツ敗戦が近づいた頃、また理由なく県の警察部へ検挙された。叩けばほこり位は出るだろうということだったのだろうか。一〇

が上京前に組織していた新星会（進歩的な青年の団体）の中でマルクス主義の宣伝活動をはじめた。そのうち警察の圧力が加わり、遂に不敬文（天皇に対する）落書事件が発生した。これは当局の謀略であつた。（後にその事が判明した）。私と仲間の一人は警察へ引ばられ、私は起訴されて広島監獄へ収監された。だが一週間ばかりで予審免訴となつて釈放されたのだが、この時代の田舎ではこれ位のことでも大事件で、とても新星会がこれに堪えられるものではなかつた。新星会は自然壊滅であった。

しばらく宮島にも冬の時代が続いたのだが、やがて春が来た。3・15の大検挙があつた頃から、宮島にも左翼のグループが出来た。その後広島における救援組織、赤色救援会広島地方委員会と連絡なつて赤救佐伯地区委員会を結成した。私は責任者となつた。だがまもなく広島の一斉検挙に、そのあたりを食つて宮島も一斉検挙され厳島署に一週間あまり留置されたが、起訴留保で釈放された。

遂に四月二六日検挙された。そして懲役四年の刑をうけた。獄内では非転向でがんばつた。

日ばかりいて釈放された。ほこりが出なかつたのだ。ということはあまり自慢話にならない。

敗戦後、いち早く岩佐君、岡本君が広島へ帰つたので連絡をとり党の再建活動を始めた。宮島でも嚴島細胞を組織し、税金闘争等で大衆の先頭に立つた。この頃が宮島の闘争は花であった。やがて凋落しはじめた。原因は第一に分派が出来て二つに割れたことである。第二には封建色のつよい田舎の小さな島ではあまりに周囲の壁が厚かつたためではないだろうか？活動家たちは島外に向つて一人去り二人去りして細胞（支部）も殆んど実体がなくなつた。私も妻が入院し、金がいるので、金もうけにあくせくせねばならない状態になつた。電気屋をはじめてみたが、これもうまくゆかず、結局失敗だつた。この間に私も宮島から廿日市へ移転した。今ではささやかなレコード店を経営しているが、これは又とても忙しい商売で党活動などやる暇がない。

後略



手記

中村 定男

た。兄は神戸で旧労農党員で労働組合評議会の活動家であつたために、三菱造船を首になり、一時

かえっていたことがあり、私の家に特高が時々様子をさぐりにきていたが、中村の弟に『戦旗』などよんでいるものがいることは、特高は知つてい

てマークしていたわけだろう。

勤する本通りの電車通りにでかけた。
通勤の労働者がめがね橋——工廠の入口にむかっていそいでいた。そのとき本通りの電車すじいっぽいになつて、工廠へ工廠へと洪水のようにながれていた。

わたしはいつしょにあるきながら、一枚一枚手渡していくつた。そのうち次第にあかるくなつてきただので、ビラをくばるのをやめて帰途についたが、三津田橋のところで「工業補習学校」の同級生にでくわしたので、かれにのこりのビラをわたして、工廠内でひるやすみの時間に食堂のテーブルの上に、おいてくれるようにたのんだ。

かれは当時海軍工廠の火工部(吉浦町にあつた)に通勤していた。ところが、かれは私の命じた以上に、みんなにそのビラをくばつたそうだ。

そのとき火工部にいた吉浦町の花本さんが後年

一九二九年三月一五日最初のビラまきによる逮捕。「3・15の一周年と山宣の虐殺に對して全労働者はストとデモで闘え」のビラ。

一九二八年九月ごろ山道襄^{やまと じょう}君(山道繁君の兄)が東京外語学校を3・15事件のために放校処分となつて呉にかえってきた。かれを中心に、池田八束、片岡義夫、吉浦町の某君、中村の五人でグループをつくつたが、いまは3・15事件の直後で組織的にうごくことは危険だという山道君の意見で、ごくルーズな交友関係で当分ゆこうということであつた。ときまた五人があつまる程度のことであつた。

一九二八年秋ごろであつたか、池田八束君が山道君の紹介で上京した。そのうち交友関係も間遠になり、秋には平凡な一八歳の少年にかえつたが、丁度そのころ私の兄繁一が三菱造船(神戸)にい

上京した池田八束君からは、つねにたよりがあり、印刷物などおくつけていたが、一九二九年三月はじめごろ、上記の「3・15一周年」のビラを呉市内にはるようによくつてきた。

三月一五日のあさ、のりバケツとビラをもつて未明の街にてたが、その日は春にはまれな大雪であつたとおぼえている。工廠への通勤時間にははやすぎたので、市内の要所要所にビラをはりおえ、のこりのビラをもつて海軍工廠の労働者が大勢通

はなしたところによると、共産党のビラだということで大反響があったといつてた。

その友人はすぐにつかまり、いろいろ追及され「中村にたのまれた」といつたために、特高は私のやつたことだと気づいて、翌朝二人の特高がふみこんできて、のこつていた文書を押収し、わたしを呉署にひっぱった。

この事件で、生まれてはじめてブタ箱にほうりこまれた。そもそもこの事件が、後年わたしが左翼運動にあしをふみこむ発端になったわけだが。

この事件以来、ことあるごとに、たとえば何々の宮様が呉にきたといつては予防検束と称してはブタばこにほうりこまれた。

何回めかのブタばこで、当時大衆党の員であつた高橋君と知り合い、いっしょに待遇改善のハントをしたりした。

かれにさそられるままに大衆党に出入するようになつたわけだが、わたしが最初のうち左翼運動となかなかレンラクがつかなかつたのは、大衆党員であつたことがわざわいしている。

二七年テーマがでた當時で、三二年テーマでもはじめのうちはそうだが、社会民主主義者は有害な社会ファシストとしてテーマは規定していたわけだから。

大体広島、呉の大衆党というのは、旧労農党の流れをくむものが多く、広島の佐竹氏にしてもそうだし、故人になつた呉の竹本氏にしてもそうだつた。新労農党準備会の時など、高橋弁護士（故人）が呉の支部長だった。

それが、しだいに右傾化してゆき、ついに社会大衆党という右翼社会民主主義者の集團になつた

わけだが、わたしの所属していた当時は全国大衆党といつていたとおもう。

一九三三年 守田道輔氏との (左翼運動路線への連絡)

3・5事件、10・30事件のあいつぐ弾圧で左翼

の活動が壊滅にひんしたころ、旧労農党の闘士の守田道輔氏が広島をへて呉にはいつてきただ。かれはまず大衆党の左翼分子と連絡をとり、わたしはそのころ木原君という大衆党員の家であったのが、そのとき旧姓つたもとすみ江、現在の守田氏の奥さんもいつしょだつた。

ともあれ、そのようなことで守田氏と連絡がつき、かれは大衆党員のなかから、若い私と坂田君をえらんで同志にしたわけだ。

守田氏は当時四〇歳くらいだったとおもう。かれが当時正式な共産党員だったかどうかはいまもつてわからないが。

かれは地味に土方のしごとをやりながら、朝鮮人労働者を二〜三人つかんでいたようだ。わたしもいち度か二度、守田氏と朝鮮人の同志のところにいったことがある。

約半年くらいして守田氏が検挙され、私も坂田君も逮捕された。

その検挙で私ははじめて特高のテロをうけた。

坂田君ははやくでたが、わたしは三五日ぐらいブタばこにいたであろう。桜井検事が呉署に出張して、取り調べたが、守田氏が私や坂田君のことはあまりいつていなかつたらしく、そのときは微罪

処分で不起訴となり釈放された。

守田氏との事件で釈放されて、しばらくのころ、山道繁君が拙宅へ「竹地定夫君が君にあいたいといつている」と連絡をつけにきててくれた。竹地君とは以前広島にいたころ、多少しりあいだつたので、こころよくあうことにしてた。関谷源一君が広島地方にオルグできたころのことで、竹地君は呉地区のオルグであつた。

竹地君と連絡がついてしばらくしたころ全協組織再建の会議を、たしか灰が峰のふもとの山中でもつた。メンバーは竹地、山道、岡田（西条町の石屋さんで呉にきていた人）中村の四人であつたとおもう。3・5事件のあいつぐ弾圧で地方としては強大な組織も消滅していた。

竹地君と定期的連絡をとつていたが、かれは呉にきてすぐに町工場にはいつていた（旋盤工）。皆経済的に苦しく、貧苦にたえながら活動していた。非合法時代の同志との連絡は、どこでもにたよななものだつたろうが、夜街頭連絡か山中か、人目のあまりないよつた喫茶店か食堂などであつた。

竹地君は腕時計ももつていなかつたので連絡のときは小型のめざまし時計をもつてあらわれていた。所定された時間で、時間を五分すぎれば、その日街頭連絡はうちきることになつてた。

ある夏の夜指定された場所へ私は右側から竹地君は左側から近づいていつて、顔をあわせあたりが要求された。

敵から身をまもるためににはそれほどのきびしさが要求された。

で、夕涼みをよそおつてしまらくあるこう」とい
う。でその夜はどちらも昔のことで、和服すがた
であつたが、ぶらぶら雑談しながら、さも夕涼み
をしているのだというかつこう。数メートルくら
いあるいたところで突然私服の刑事に誰何され
た。

よほど新米の特高であつたらしく「君たちは何
をしているのだ」というから、「あついので涼みが
てら散歩しているのだ」というと、「その交番ま
で同行してくれ」という。

心中、しまつたとおもつたが、ちかくの朝日町
の交番につれこまれた。

さいわいなことに、私の方をさきに調べ、竹地
君は奥のボリ公の仮眠する場所で、またされた。

その刑事は、なにかもつていなかつたと、いろいろ
調べたがなにももつていなかつたし、私の調べ
はかんたんにすんで、つぎの竹地君の番になつた。
じつさい、その刑事、新米の特高だつた。私は

呉署に何回も検挙されて、顔だけはおぼえていた
が、かれはドロボウがかりの刑事で、わたしがそ
の後で検挙されてかれが特高になつてゐるのを知
つた。特高になりたてのホヤホヤだつたわけだ。
交番から釈放されて、竹地君が「こまつたこと
になつた」という。「君がしらべられている間に、
関谷君からわたされたてもつてゐる文書を、かくし
場所に窮したあげく、ボリ公がねおきする部屋の、
はずしてたてかけてあつたガラス戸のうらにかく
したのだ」という。

さて、どうしたらいかとなり対策
を協議したが、かれは「おそらくともあしたの朝ま
でには発覚する。おれはこれからつとめさきの工

場にいつて、はたらいた賃銀をもらつて山をこえ
て広島に上るから」と再会を約してわかれた。
まさに危機

髪のところであつた。

アジトの整理は私がしたが、もつてきていたものはふとんくらいのものだつた。奥さんのみつこ

さんのところにおくつたとおもう。しかし、これが生前の竹地君とのさいごのわかれになつてしまつた。

その後4・26事件でかれは関谷君等とともに検挙され、出獄して戦地におくられ戦死してしまつた。ことし三月一五日の追悼式で会つた奥さんが話していた。

苦難な時代をともにたたかつた同志が再会もできぬまま生涯をおわつてしまつたことにに対する哀悼の情は、いいようもなくさみしい。3・15の追悼式で未亡人のみつこさんがあえたのが、せめても私にはなぐさめであつた。

関谷、竹地の逮捕とともに、4・26事件の余波をうけて、私も検挙されて三〇日ちかいブタ箱生活ののち、未決拘置所におくられた。その時は吳からは私とは連絡はなかつたが、山崎政高君（現在大阪府門真市）も未決でいつしょだつた。山崎君のはなしによると田原勝二君も4・26事件の同志だつたということだ。

この事件では吳地区に全協の組織らしきものが、ほとんどなく、竹地君等も我々を防衛してくれたためか起訴猶予処分ででてきた。

4・26事件後の再建活動
吉本康二君とともに

釈放後しばらく家でぶらぶらしていただといろ、また山道繁君が連絡にきてくれて、吉本康二君とあつたのだとおもう。

当時の客觀情勢は、日本帝国主義の中國侵略戦争が益々拡大しつつあり、5・15事件（軍部ファシストのファッショクーデター）がおこつた直後であり、我々の運動もますます困難をきわめつたあつた時代であつた。

阪神方面（京都）にのがれた吉本君をおつて、スパイ（松本徹）も、そのあとをおつたと小寺君の手記にはでているが、事実とすれば吉本君は吳に潜入する前からスパイ（特高）におよがされていたことになる。

私が吉本君にあつたのは京都から吳に潜入してきたころだろう。山道君と高橋まつ子さんも、いちど吳までかえり、山道君が吉本君を私に紹介したあと、ふたたび大阪方面にまつ子さんとともに去つたのだろう。高橋まつ子さんは、山道君とまつ子さんが大阪に出発するさい、森島さんの家でいちどあつただけである。

当時本通り一三丁目の遊廓入口に森島守人さんというシンパの人がいて、この人は山道君がなにかで検挙されたとき、ブタ箱のなかで知りあつた人だとのことだつた。のみ屋で左翼的なことをしゃべつていて、特高にマークされた人だとのことだつた。

森島さん一家は、森島のおばあさん、奥さん、奥さんの弟で洋服屋の職人さん、その妹でバスの車掌さんをしていた娘さんであつた。奥さんはとても親切なよい人だつた。

最初吉本君は、そこにいたのだが、いつまでもいては危険だし、森島さんに迷惑をかけてもすまんというので、ほかにアジトをかりたが、森島さんや奥さんはいつも吉本君の身をしんぱいして、どうしているか元気でいるかと気づかつてくれていた。

森島さんの家業が餅屋さんだつたので、私は時々もちをかうそぶりをしてたちよつていた。

党の五〇年史にもでているように、一九三二年、三三年にかけて敵のスパイは党中央部にも潜入しており、大泉兼蔵、小畠達夫らが中央委員会に潜入していた。これらスパイの一群はさいわい摘発されたが、警察当局のスパイ政策は中央から地方党組織にいたるまでおよんでいた。同志とおもつてちかづいていた奴がスパイであった。したがつて旧同志にたいしても、うかつに手をさしのべることは、危険でもあつた。

古い同志の上にはいつも特高の目が光つていたのだ。

スパイ松本徹について

吉本君と私がはじめた再建活動の第一歩は、4・26事件をのがれた同志とのすみやかな連絡の回復であつた。

吉本君の学生時代の同志が数人、広島におり、その同志たちとの連絡は、吉本君が広島にでかけることは危険なので、私がかわつてひきうけた。そういうことで、こともあるうに最初からスペイ松本徹と私はつきあわざるをえない羽目になつたのである。

第一回の徹との連絡は、横川駅から一〇〇メートルくらいいたところの踏切の手前のうどん屋であつた。

当時の横川駅付近は、うらぶれたさみしいところであつたが、私はそのうどん屋へでかけていつた。お互に初対面のことなので、私は週刊雑誌をもち、左手のくすりゆびに白いホウタイをまいてめじるしとした。

徹も同様なかつこうをして、であつたらペンネームで声をかけて、相手を確認するということでおもつて吉本君が手紙で徹に連絡しておくことになつていて。

私はその日、指定された時間かつきりにうどん屋にでかけていた。ところが時間がきても徹はあらわれない。いらいらしながらまつていると、五分か六分をすぎたころ、洋服不クタイですがたの中年の男がうどん屋にはいつてきた。だいたい、そんな紳士然とした人のはいるようなうどん屋ではないのだ。

私の神経は、初対面の同志にあうということを緊張しているし、これはおかしな奴がはいつてきただとすぐ感じたので、そしらぬ顔をよそおつて、テレブルの下で、左のくすりゆびのホウタイをはずした。

もし特高なら不審訊問されるだろうが、そうな

つたらどうするかかんがえてみた。ポケットには徹にわたす文書をもつてゐるし、さてそういうことになつたら、どうのがれるべきか。

うどん屋のうらが竹やぶ、その方向へはするよりほかないと心にきめて、しばらく様子をみていたが、敵はうごく気配はないので、私は何くわぬ顔をしてうどん屋をでて駅の方へいそいでいる。

私はたれそれ君かとかれのペニーネームをいうと、そうだという。

「いま、うどん屋でまつてると、変な男がいってきたので、でてきたのだ」というと、「そうか」とのんきなかおでいう。

普通非合法運動しているものなら、そこしは緊張したようすをするはずだが。

まことにかく吉本君から托された文書をわたし、そのときつきのレンラクはまたするといつて早々にわかれた。

このときの洋服ネクタイの男が県警察部の特高の岡野であつたことは、のちになつてわかつた。

このようにして私はむろん吉本君もだが、スパイ松本徹のうらぎりによつて最初からおよがれていたことになる。

呉にかえつてきて吉本君に事のしだいをのべ、「徹という男はおかしいんだやないか」といった。

純情な吉本君は「いや、かれの兄も入獄中だし、大丈夫だとおもう」というので、そのときはそうかなあとおもつたが、かんがえてみればその時点でも我々はもっと慎重であるべきだつたのだ。

大体、非合法時代の運動のなかで、連絡時間が五分も一〇分もおくれることは、時として重大な

結果につながるものであり、我々の仲間は充分、それはわきまえていたはずなのだ。

第二回の徹との連絡は、初夏のころであつたとおもうが、徹のほかに広島の学生との連絡があり、

広島でかけていった。

徹とかんたんな連絡をとり、わかれようとすると、野郎が「私も呉の親戚に不幸があつたので、呉にゆかねばならんから、いっしょに呉までゆきましよう」というから、私は「ほかにもちよつと用件があるのでここでわかれ」といつてわかれた。

徹とわかれて学生たかの橋のところの喫茶店で連絡をとり、広島駅にてみると、駅の玄関口

のところで徹が人待ち顔でたつていて、私をみると近よってきてはなしきようとするので、「ここでは危険だから、話があるなら列車のなかで」といつて列車にのりこみ、さしむかいにすわった。列車のなかでにかかるは、そわそわしておちつかないようすで、ポケットから金をとりだして、封筒にいれてみたり、キヨロキヨロあたりをみまわしたり、全くおちつきをうしなつている様子だったが、「じつは香典をわすれてでたので、家にとりにかえったから、列車にのりおくれたのだ」といいわけをしたりしていた。

この時の連絡でも私は徹の通報によつて、「面を割る」ために、特高に学生との連絡をみられていた。さてこれはのちのこととして、さきをいそじう。列車のなかとか、私の無口な態度やなにかで、スパイ徹はスパイであることをみやぶられはしまいかと、心のなかではおどおどしていたのかもし

れぬ。

やがて呉駅のひとつまえの吉浦駅に、列車がついたので、「私はここでおりるから、失礼する」というと、彼は「私もここであります」という。

「君は呉の親戚までゆくんだろう」というと、どうだ徹は、「しらない土地にくると不安なので、バスでゆきます」とこういうので、「いっしょにおりても、私は呉では特高に知られているので、いっしょにあるくわけにはゆかん」といつて、わたしひとりバス停の方へむかつた。

ふみきりをこえたところに当時バス停があつたが、バスをまつ正在と、そのそばの神賀川にむかつて立小便をしている男がいる。

徹のようすのわかしなこともあつて、私は第六感で「こいつは、あやしげな奴だ」とおもい、さてバスにのるべきかどうかをかんがえたが、やがてバスがきてその男はバスのいちばんおくの座席に坐を始めたので、私はいちばんまえのいつでもとびおりられるところに席をとつた。

やがてバスが私のおりる停留所のふたつくらい手前にとまつたとき、でかかったバスからとびおりた。

このときのバスの男が、徹を直接つかつていた、県の特高、岡野警部補であつたことが後にわかつた。

私は吉本君に、松本徹の態度はいちどならずこんどもおかしかつたというと、吉本君は「徹の親戚が呉にあるということは、きいたことがない。

私も氣をつけよう」といつていたが、かれは逮捕されるまで半信半疑であつたから、連絡をうちきらなかつたのではないかとおもう。

宮島の渡辺信樹君とも二度ばかり私がでかけていつて連絡をとつたことがあるが、特高が渡辺君を追及しなかつたところをみると、徹は私が渡辺君にあつたことを知らなかつたからだとおもう。

私がどうして、こうながなと「スパイ松本徹」についてかたるかといえば、スパイというものにたいするにくしみ、それにもまして、彼のうらぎ行為によつて、同志吉本がたおれたことをわざりながらだ。吉本君は入獄中、腸結核のために絶望状態となり、執行停止、仮出獄となり、うらみをのんで死んだ。

たんに「轉向」というだけならまだよい。轉向して「敵のスパイになりきがつた奴」。いまかんがえてみても、憤怒の情がもえる。

この気持ちは、松本徹が「同志」であった時期いつしょに活動した人々には、「いまさら死屍にむちうつ」ようなことは書かなくとも、おもう人もあるうが、私には終世わすることはできない。

余談はともあれ、二度めの連絡で私は徹との連絡はうちきつたが、吉本君は検挙されるまで、つかははなれずのかたちで連絡があつたのではない

かとおもう。吉本君も私も敵に完全におよがされていたのだ。

一九三四年夏ごろのことであるが、中央委員会は破壊され、情勢がコントンとして地方では中央の事情をつかむすべもなかつたので、ついに吉本君が上阪して、中央の事情を調査してくることになり、大阪にていつた。

まえにかいたが、京都にいつた吉本君のあとを

寺君の手記によると、4・26事件で吉本君が京都にのがれたころとなつてゐるが）こんど小寺君にあう機会があれば、いちどたずねてみたいとおもつてゐる。

吉本君が上阪して、かえってきてからの報告によれば「中央奪還 労働者派」と称するいわゆる「多数派」がどうも正しい中央指導部であるらしいとの情報をもつてかえってきたので、「多数派」に所属することにした。

おそらく當時大阪方面では「多数派」の勢力がよかつたので、そういうあやまつた判断をしたのである。

ちなみに「多数派」とは党の「50年史」によると、最後の中央委員会田里見が、ひきづく彈圧のもとで活動していた時期に「全国農民組合・全国会議派中央グループ」および「日本消費組合連盟中央グループ」の一部に發生した「宮内勇」「山本秋」などの活動によつて……云々と記されてゐる。念のため。

逮捕より未決監へ

一九三四年秋 逮捕

一九三四年秋、私は自宅で逮捕された。どういうわけかブタ箱にいれずに、道場へほうりこまれた。道場のなかは満員である。竹地君との事件で起訴猶予になつた山崎政高君がいる。私の個人的な友人たちがいる。そのほか顔をしらない人々で、みうごきもできないほどだ。

私が便所にゆくとき、看守につきそわれた婦人

をみるとなんと、それが森島さんの義妹、バスの車掌さんだ。

これは相当手広く検挙されているなどおもつた。

吉本君に「どうしたんだ」ときくと「おれにもわからんのだ」という。

大体こんなに組織が拡大しているとはおもえないでの、てあたりしだい警察はひっぱつてきたものらしい。

吉本君は逮捕されているのか？ それとも検挙されてどここの警察にいるのかもわからない。

私はかれが無事、検挙をのがれていればいいがと、それのみをいのつた。しかし、かれが検挙をのがれるはずはなかつたのだ。我々はスパイに売られ、特高におよがされていたのだから。

ただ敵は組織の実態をつかみかねて、このさい4・26事件後の党活動を徹底的に弾圧するためには、苛烈なほどの検挙をやつたのだとおもう。

客觀的情勢は、日中事変はますます拡大しつつあり、左翼運動をこのさい徹底的にやつつけようとしたのだとおもう。

呉署ではかくべつの取り調べもなく、私は広警察署にうつされた。広署というのはちいさな警察であった。留置人は私と私の二人の友人、ドロボウ一人、精神異常者一人の五人であつた。ブタ箱のうらは広大川であつた。

私は最初ドロボウ君といつしょの房だった。だ

いたい房も四つくらいしかなかつた。ブタ箱のめしも、さしいれ屋がいつもはひとりかふたりのめしで、めんどうだったのだろう、むぎめしではなくて、米飯だった。洗面はブタ箱をでて小便室で

させていた。

小使室のうらが裏門であつて、朝のうちやひるまは、ひらいていたようにおもう。最初のうち、

ここからにげられはしないかと毎日かんがえていたが、うらの川にとびこめばすぐつかまるし、裏門からにげれば数メートルあるいてすぐつかまり

そうだ。

結局あきらめたが、逮捕された人間というものは上げることをかんがえるものらしい。

そのうち県の特高の千葉警部が、取り調べのため広署に出張ってきて、「中村君も性こりもなく何回も検挙されたようだが、ついにここまできたか。こんどは往生せえや。吉本やおまえのやつたことは全部こつちにやわかつとるんじや。おまえ、たかの橋のところで学生とおうたろうが。わしは偶然散歩しておつて、それをみとるんじや。」とぬかした。

これで前述の、たかの橋の学生との連絡も、「スパイ徹」のてびきによつてわかつてしまつていることが、はつきりした。

そののち吉本君も私も、呉署につれもどされて

本格的な取り調べをうけたが、こつちの運動の内容は、スパイをつかつて警察側は知りつくしていだので、ただあたらしい事実がでできはせぬかと追友しただけだが、運動がひろがつていなかつたので、かれらにもそのことがわかつたので、あまり追及はしなかつた。

いちおうの取り調べがおわつて、特高の取調べ室で、吉本君と顔をあわせて、ちょっとだけ特高のいなすきみて、雑談したことがあるが、このとき吉本君は、「うちのおやじは在郷軍人で、か

たい男だが、妹だけはぼくのシンパだ。今学校の先生になるつもりで師範学校にいつているが、ぼくがこうなつたので、彼女の夢も実現はすまい」とわらつていた。

一ヵ月をこえるブタ箱生活ののち、吉本君と私は送検された。

再び末決監にて

一九三五年の冬であつたか、最初北側の一番東の端にはうりこまれたが、やぶれたガラスにはつた紙が終日ビビビビとかなし音をたててふるえつづけていた。

東北地方に大飢饉のあつた年で、新聞紙上にも大きくなつていて。私はさむい房のなかで

この寒さ いかに生きるや 東北の

飢えて 草の根 食らう人々

というような感慨にふけりながら。

いちど飢饉にみまわれれば草の根までくわねばならぬ貧しい農民たちのことを、おもつていた。

都市の失業地獄と農村では飢饉に、うちひしがれていた当時の世相であつた。

しかも一方で戦争の拡大へと軍靴の足音はなりひびいていた。

ともあれ、このような一般的情勢のなかで我々は未決監につながれていた。

最初のうち吉本君とはなすことはもちろん、顔をみることもできなかつたが、そのうち「視察窓」

——看守が夜など房のなかのようすを見るために

ある三〇センチ×一五〇センチのかなあみの窓から房外の廊下をのぞくと、まえがわの房のとびらがみえるのに気がつき、みてると運動にとくつつけ、まえの房をのぞいていた。

そのうち私ははいついたなめ前の房から、吉本君らしいのがでてくるのがみえた。

あれが吉本君らしいと、毎日そつちに気をつけていると、あるときなにかのはずみに前かがみになつたので、みると、まさに吉本君であつた。「元気そうだな」と私はやつと安心したものだ。

あるとき予審のため裁判所にでるのに両側の房からでて廊下にならぶ。吉本君が房からでて前にたつたので、私は看守のスキをみて彼の方にむかつて、ちよつとアミ笠をあげて合図した。彼もアミ笠をあげニッコリわらつていた。

これでお互の元気そうな顔を見て、安心であつた。

裁判所の拘置場でかいわいにも、となり同士の房にはいったので、またとないチャンスだと思つて「松本徹がスパイであった」ことを彼につげた。彼は「ぼくも彼がスパイであることが、特高の取調べのなかではつきりわかつた」といった。

吉本君は「ぼくは関谷君との関係もあるし、どうあがいてもこんどは実刑をくうから、君だけはどんな手段を講じてもできるようにしてくれ。君と

は時々連絡しただけで、運動にはほとんど関係ないと、特高の取調べにこたえているから」という。

私は彼の厚い友情がジーンと胸にきた。

彼は「君がでたら、松本徹がスパイであることを君の知っているかぎりの人達につたえてくれ。そして『エコノミスト』(経済雑誌)をさしいれてほしい。どのページのどの記事がおもしろかったと手紙をくれ。そしてそのページに針の先で字をひろいながら、点をうつてくれ。それを獄中と獄外のレポにしよう」と、かんたんなうちあわせをした。

裁判所の拘置場というところは、看守のみはりが、わりとゆるやかで、そのていどのはなしならとなりどうしてできた。

私は裁判所の拘置場のベンキぬりの板かべにツメで、たんねんに「松本徹はスパイであった」とかきつけた。ほかの同志や、あとからやられてはいつくる同志に、わかるようによもつて。

「松本徹というスパイ」、単に気がよわくて転向したとか、そういうものではないのだ。転向して特高におどかされて、スパイになつた卑怯下劣な男だった。

私も転向組のひとりで、転向を表明して二年の懲役、ただし三年間の執行猶予ということで、でてきた。でてから吉本君との約束にしたがつて、雑誌『エコノミスト』に針のさきで点をうつては、獄外のようすやレボの交換をやつていた。吉本君は懲役四年くらいで下獄したのだとおもう。

しかも服役中肺結核となり、腸結核を併発し、絶望状態となつて執行停止となり仮出獄し、うらみをのんでこの世をさつた。

私は、断腸のおもいである。

いくら吉本君が私をたすけるために、友情からいつてくれたにしても、なぜ彼とともに裁判を非転向でたかわなかつたのか。

私の気のよわさ、人の厚意にすぎるあまりの考え方——という人間的なよわさがあるからだろう。一度、転向を表明すれば、たとえ松本徹のようにならずとも、敵の意にしたがわなければなぶりころし同然にしようとするのだ。

のちに、私が執行猶予中に検挙された事件も、敵は最初からでつちあげにかかるにかかっていたのだ。

さすがにスペイになれとはいわなかつたが、でつちあげられ、「執行猶予つき二年の刑」というのをとりけされ、「実刑二年」にされ、さらに二年の刑を追加されるはめになつたのだ。

余談だが、出獄してから、丙子会——思想犯の

刑余者のあつまりがあつて、つた本すみ江さんも出席していたし、高橋まつ子さんなども出席していたようにおもうが、私は松本徹がスペイであつたことをたれかれにいつたとおもう。しかし、だれもあまり本気にきかなかつたようにおもう。

思想犯刑余者たちは保護観察に付されていたせいもあつたろう。

「労働雑誌」読書会弾圧事件から

四一年出獄まで

執行猶予でて、しばらく家でおとなしくしていいたが、父親や親類のものでまえもあつて、いざらくなつたので、私は広島にでることにした。

母親はしきりにとめたが。

当時広島市舟入町に大衆党系の一般労働組合といのがあつて、そこの事務所に昔からの知りあいだつた風早謙、田原勝治、そのほか三、四名ねどまりしていたので、そこにころがりこんだ。

一般労働組合といるのは、山陽木材の労働者や馬車ひきのおつさんたち、機械工、製材工、自由労働者などの合同労組で文字どうり一般労働組合であった。

私は合法的な労働組合なら問題なかろうとおもつたのだが、敵はそれほどあまくはなかつた。

我々が「労働雑誌」の読書会事件というので検挙されたあくる年には、いわゆる「人民戦線事件」という、社会主義者とか自由主義者とかのすくなくとも戦争反対の立場をとつた人々が一齊に検挙されている。

戦争を拡大してゆくために敵階級は、戦争に反対する連中をかたづけながら検挙しだしたのだ。そのままぶれが我々の検挙であつた。

「労働雑誌」読書会事件といるのは、敵がデッチあげのためにかつてつけた名称だが、実態はなにもなかつたのだ。

一般労働組合に入出していた製材工の山本正一君が、ある日「労働雑誌」というのをくれて、この雑誌の読書会といふのをつくろうといつたのだ。

こつちは「執行猶予中」なので、これはどういう性質の雑誌かといてみたところ、大阪の川上貫一氏の主宰している合法的な雑誌だといつた。そのいどの雑誌なら問題なかろうと、山本、中村、それに名前はいまわすれたが、当時広島から吳の海軍工廠へ、製図工としてかよつていた人(吳

の本屋の田中豊氏と個人的な友人)および、その弟と四人ではじめた。

田原勝治君をいれようとしたが、山本正一君は田原君とそりのあわないところがあつて、山本君が反対するので、やめた。私は田原君とは前からよくうまのあうほうだった。

山本正一君は前に大阪方面にいたことがあるらしく、大阪木材労組のはなしをよくじていて、「大木ニュース」というのをくれたりしていた。

〔注〕 山本正一。広島地方最初の全協結成のとき、全協木材労組オルゲとなる。

一九三五年の冬、一二月の末頃、突然一般労組の事務所に一〇名くらいの特高がおどりこんきて、事務所にねていた四、五名の人々を逮捕した。

田原君、風早君その他であつた。
逮捕後、私は西署でちよつと取り調べられをうけたのち、県警の地下室のブタ箱にほうりこまれた。県警のブタ箱にはいつてみると、元水兵の平原基松君がはいつていた。

「君はどうしたんだ」というと、

「それが、さっぱり、わからんのだ」という。広島に私がでるまえに、吳の大衆党支部部長細田伊太郎氏が市議選にてたことがあり、どういう関係でか平原君が応援にきていたことがあつた。そのようなことで、彼も我々との関係をうたがわれたのかもしれない。

県警のブタ箱はあまりはいつていなくて、多い

時で四名くらい、すくないときは平原君とふたりだけのときが多くった。

どこがどうきにいつたか、若い方の看守が私によくしてくれ、人數のすくないときは雑役がわりに私の房からだして、掃除をさせたりしてかなり長時間房からだしていた。

そのうち取調べがはじまつた。私を調べたのは、古い同志なら知っている人も多いとおもうが、県警の黒山という特高の部長であった。小男の、蛇のようなつめた目をした残忍そうな奴だった。

その特高の黒山が、就寝の時間がきてきてねようかとおもつていると、取り調べべにくるのだ。ブタ箱にコツコツと靴音がしだすとかならず奴がやってきて、一二時、一時までしらべるのだ。

「労働雑誌が党の関係の雑誌だということは、しつているだらう」というので、「しらない。執行猶予申なので、知つていれば読書会なんかつくるわけがない」といつても、てんからうけつけない。もつとも、やつらはこいつは性こりもない人間だから当分刑務所にぼうりこんでおけということだろう。

丁度そのころ看守が「中村、今日は房のなかでおとなしくしていてくれよ」という。しばらくして、入口があいて、ひとりの男がはいつてきて、「中村はどこにはいっているか」と看守にきいている。看守がパッと敬礼しているところをみると、かなり上司らしい。はて、なにやつかとおもつていると、看守が「ここです」と、私の房のまえにつれてきた。

その男は、視察窓を開けて、「中村、ひさしぶり

じやのう」という。「あのとき吉浦じやあ、うまいことまかれたのう」という。

岡野だ。県の特高警部補だ。まぎれもない、こいつだ。スパイ松本徹の親分だ。吉浦のバスのかでみた顔。横川駆のふみきりのうどん屋でみた顔。こいつだ。うらみ骨髓に徹している、スパイ徹の親分だ。

私は「あなたはどなたですか。私にはよくわかりませんが」と、とぼけていると、「まあ、ええわい。こんどは年貢をおさめてゆけ」とぬかした。

私は、はらのなかで（このやろう、とうとうじぶんでどるをはきやがつた）とおかしかつた。特高でも自白するものとみえる。

私のことを新聞で知られたものらしい。私は吉本君の家にむかって正坐し、瞑目合掌した。お父さんからいただいたさしいれ弁当を、すこしづつかみしめながら、とめどもなく涙をおさえようもなかつた。純情で誠実で人間的なふかいおもいやりのあつた吉本康二君、さぞ無念であつたろうと。

山本正一君も予審中に発病し、うらみをのんで、獄中でなくなつたときく。

最初第一独居にいれられた。うらが運動場に面した側の房であつた。

まだ誰かがいるはずだとおもつたが、初めのうちはどこにだれがいるのやら、さっぱりわからなかつた。そのうち教務の独歩（雑役）で、本のかだしの役目をしている三戸信人君がたのんだ本をもつてきたので、お互に自己紹介をしてほかの

きものや弁当など家族の者がしてくれたが、貧乏世帯の上に苦労させては親にきのくなので、弁当のさいは監獄のモソソウめしで充分だからことわつた。

そのころ吉本康二君のお父さんから弁当のさしがあり、「康二も病氣のために刑の執行停止になりました。あなたもくれぐれも身体に気をつけて、一日も早くかえられるように」と丁重な手紙をいただいた。

同志のことをきくと、私の房のひとつおいてとなりに古末同志、四つ五つおいて小寺同志、前側の房のすじむかいに岩村同志、ひとつおいて岩佐同志がいることがわかった。

さつそくわたしは壁をたたいて、となりの房に

合図をおくり、そのとなりの房の思想犯をうらの窓のほうにでてもらうようにならんだ。

「古末君ですか」というと、「きみは」というから、名前をなのつて自己紹介した。

彼は、獄中、とくに独房では運動不足になるので房のなかにいるときは、腹式呼吸をかならずやること、運動にでたらおもいきつて運動をすることなどを、しんせつにおしえてくれた。

岩村同志は「担当、担当」と看守をよびつけては文句をいつていた。

岩佐同志はよく「運動停止」「減食」の札(懲罰)がかかるつていた。岩村同志のように尊大ぶつた態度ではなかつたが、低いするどい声で、ときどき看守とやりあつていた。私は彼は槍のような男だなどかんじた。おかれた情況のせいもあつたからであろう。

小寺同志は散髪にてちよつとだけ看守のスキをみてはなしたが、かれは「ゆうべは一睡もできなかつた」とあおい顔をしていた。からだでもわるいのですかときくと、時々こんなことがあるんだといつていた。当時、どこか身体がわるかつたんだろう。

いちばん感銘をうけたのは古末同志の態度であつた。運動にでれば、かけ声をかけて、力いっぱ

い一生懸命運動していた。いつもかれはニコヤかな顔をして、看守とは無駄な口論などしなかつた

ようだ。

私と古末同志とはフロ場でいつももいつしょだつた。房がちかかつたので、いつしょにフロにでるのだが、できるだけとなり同志になるようにしていた。フロ場は五つくらいにくぎつてあるのだが、看守は「入浴」の号令をかけると、その廊下にならばせてあるつきの入浴者をみはるために、浴場のそとにたつてないので、かなりみじかい時間でもはなしができた。

したがつて私が吉本君との関係で執行猶予中やられたこと、転向を表明していることも充分承知していたが、別段こだわる態度はみせなかつた。

いちど戦争の宣伝映画(ニュース映画)を教室でみせたことがある。転向者、非転向者もいつしょだつた。

第二独居のほかの諸君はでなかつた。古末同志と私だけみにいつて、いつしょにならんで座をしめ、充分なはなしができた。

かれは「ぼくたちはもうちかいうちにでるが、君は工場の方へおろされるかもしけんが、さきがながいので身体だけは氣をつけるよう」といつてくれた。

(岩佐君のはなしによると、その後一年くらいしてみな前後してでたのだといふ)

私はその映画みてから一ヶ月後に、第一独居にうつされた。その日は寒い吹雪の夜で、西のいちばんはしの房にはいつたが、ピューピュー雪がふきこんで、房のなかの入口がまつ白になつた。

第一独居には國本金夫君がいて、どうして手に入れたのか、鉛筆がきのレボを運動にでたときよ

くくれていた。

第一独居に二ヵ月いて、私は、教務の雑役になれというのをことわつて、機械工場におりた。竹地定夫君が、機械工場におりてゐるということだけたので、もしかしたらあるかもしれないとおもつたが、私がいつたときはでたあとだつた。

工場と居房のゆきかえり、入浴のゆきかえりにはるか西の空をあおぐ。監獄の高い塀のむこうに、広島の西北の山なみがくぎつてみえる空を私はみていた。あのむこうには自由があるんだなどおもいながら。

刑務所には累進処遇令というのがあつて、成績のよしあしによって、三級から二級へさらに一級へと累進させることになつてゐる。級別に、めしの量がちがつたり、着物の色も三級が赤、二級が青、一級は昔の小学生が夏にきていた小倉のシモフリ服だつた。

一般囚人もそうだが、出獄のとき仮釈放される。早くでる人は二年くらい早いものもいた。普通半年か四ヵ月くらい早いのだつたろう。私はあまり成績がよくなかつたのか、でる一年まえごろ二級にしてくれ仮釈放もお義理に四日か五日だつた。釈放され、ひさしぶりに町をあるいた。五月雨がしとしと、ふつてゐた。まったくひさしぶりだ。四年余の街であつた。吉本屋をのぞいてみると左翼出版物はほとんど姿をけしてゐた。ようやくゴーリキーの「母」をみつけて、買ひもとめ、かえつてむきばるようによんだ。

その後町工場につとめていたところ、太平洋戦争のボッ発でまた検挙され、五日市署のブタ箱に一五日ほどいたら、吳の保護司がむかえにきてや

つとだしてもらつた。

そののち「寿工業」の前身の東洋航空機に五人六人で下請けの組をつくって仕事をしていたが、どうも憲兵や特高がうるさく動静をみにくるので、同工場の疎開工場が山口県にできたのを機に山口県の工場にゆき、終戦直前までいた。

呉にかえってきてターレット機械を町工場で仕上工の仲間といつしょに請負ってやつていたら、召集がかかつてきただ。それまでは軍需工場の関係で召集延期となっていたのが、山口県の工場をやめると同時にかかつてきただ。もつとも終戦の年末出征ということだったが、「出征という名の土方」ぐらいをやらさせていたろう。

そのうち原子爆弾の投下であつけなく戦争がおわつてしまつたので土方をやらされずにすんだ。

呉地区委員会再建から東洋工業争議まで

ある日「赤旗」再刊二号が私の家にとどいた。夕方職場からかえると、妻が「とうちゃん、いいものがきているよ」といつてだしたのが「赤旗」二号であつた。

数日後、三原の岡田重夫君から、「広島地方の党再建をやる相談を某日三原でやりたいとおもうので、是非出席してほしい」といつてきたので、そ

さん宅だつたとおもう。

集まつてきた同志は、三原地区から、岡田、庄田、小見山、山代田、徳毛など、広島から、玖島

三一、岩佐、神崎宇市その他、呉から中村定男であつたとおもう。

そこで各地区に地区委員会を結成することなど、の党再建のことが協議され、私はそのとき入党した。非法時代は全協にはいつていて、党員ではなかつた。

こうして古い同志たちとの連絡が回復し、地方委員会は広島市におくなどの協議が決定した。

三原からもつてかえつた「読め赤旗」というビラを、呉の全市にはつたら、翌日閑口さんがさつそく私宅をたずねてくれたので、地区再建の相談をいろいろした。「赤旗呉分局」をつくることとして、地理的に便利がよかつたので「本通り一丁目のうちの家のつかえ」という閑口さんの厚意にあまえて閑口宅に「赤旗呉分局」の看板をだした。これが呉地区委員会再建の第一歩であつた。数日後私宅に一通の脅迫状がまいこんだ。「おまえをさし殺すから覚悟しろ」というような文句のものだつた。

閑口さんはそのころ進駐軍の食堂の調理場につ

とめていて、さつそく彼といつしょに働いていた梶村、松村、石原などを入党させた。脅迫状の発送人はほかならぬこの石原君であったので大笑いしたことだ。彼は特高隊があがりだつたが、のちに地区の専従党員としてよくはたらいた。その他当時呉地区にあつまつた人々は、

東洋工業争議

池田八束、中国新聞呉支局の清水君、進駐軍放送課につとめていた堤さん（天応町在住）、岡本一彦君、中村芳郎君、守安ドリル工場にいた某君（姓名失念）、税務所の保喜君、長迫小学校の女教師宇根内さん、二年に市職組のストがあり、スト後

私自身もくうことかんがえねばならんので、東洋工業に試験をうけてはいつた。そのころの東洋工業は——戦争直後の工場はどこでもそうであつたろうが——経営者は「終戦ぼけ」で日本の今

本康二君の同志）鋸物工場の香川一彦君、地区委員会事務所前の松本組の事務員桧垣君、そのほかハリマ造船（呉造船の前身）の香川、若松、浦山、毛利君、市民病院の医師六名、看護婦五六名も入社し、「ハリマ造船細胞」「市民病院細胞」なども確立し、二二年四月に呉市議選挙があり、候補者三名をたててたたかつた。中村一郎、中村芳郎、池田八束の諸君であつた。

池田八束君入党的ところ、私と彼が中心となつて全市を宣伝活動のため演説してまわつた。

地区委員会が再建されたころの地区委員は（委員長）中村定男

（委員）池田八束、中村芳郎、閑口春夫

その他であります、松本組の桧垣さんに財政をうけもつてもらつた。のちに斎藤君が書記となり、岡本君その他の若い同志も地区委員になつた。

そのころはみんなくえなくて、私や石原君や、その他の同志もよく閑口さんの奥さんにめしをたべさせてもらつたものである。

おもえれば閑口さん一家には呉地区的党は、そのころから、ずいぶん世話になつたものだと思う。

その他の同志もよく閑口さんの奥さんにめしをたべさせてもらつたものである。

おもえれば閑口さん一家には呉地区的党は、そのころから、ずいぶん世話になつたものだと思う。

その他の同志もよく閑口さんの奥さんにめしをたべさせてもらつたものである。

後の経済的な動向をつかめず、模索していた時期で、東洋工業も人員は、職員、工員をあわせてわずかに一八〇〇人であった。

私は東洋工業にはいるまえに、広島地区委員会のほうから、東洋工業に三名の同志のいることをきいていたが、まだいちども、顔をあわせたことはなかつた。

私の入社当時、すでに待遇改善の問題で、組合がもませはじめているときだつた。雇やすみの時に、ひとりのわかい労働者が、機械工場でアジ演説をはじめ、周囲を数十人の労働者がとりまいしている。

「ああ、かれが胡子君か」とおもい、たのもしい気持ちになつたものだ。演説がおわつたので、私は「呉地区の中村だ」ということをつげると、すでに呉地区委員会から連絡があつたものらしく、すぐ宮近君の職場について、私を彼に紹介した。

山根君は労務課の労務主任であり、宮近君は機械修理工場の伍長であり、胡子君は機械工場の旋盤工であつた。

入社したその夜、ただちに細胞会議を宮近君の宅でもつて、争議の進展情況、職場の空氣、シンパ網のひろがりかたなどをきかせてもらつたが、争議はまだサボ状態で、一回くらい会社側と交渉をもつた段階らしかつた。

今後の争議のすすめたとして、現場にシンパのアミをひろげること、シンパのなかから有能な人をえらんで、党員を獲得すること、

職場委員を党の影響下におくよう努力して、現場をしつかりかためること、代議員、執行委員を党員になるだけ多くしめる

こと（宮近君、胡子君はすでに代議員であつた）――などを協議し、定期的に細胞会議をひらき、あわせて学習会をおこなつて、党員候補とみられる人も、学習会に参加させることを協議決定した。

執行委員会の空氣を山根君にきくと、着々と闘争の態勢にすすみつあるという。

まさに、たたかいの火ぶたは切られんとしつつたひとにきくと、「あれは旋盤工の胡子君だ」との答であつた。

「ああ、かれが胡子君か」とおもい、たのもしい気持ちはなつたものだ。演説がおわつたので、私は「呉地区の中村だ」ということをつげると、すでに呉地区委員会から連絡があつたものらしく、すぐ宮近君の職場について、私を彼に紹介した。

中国電力労組、中国新聞労組、三菱造船労組、日本製鋼労組であり、その他、国鉄、全通などにも組織ができていたものとおもう。

しかし民間労組でいちばん活発な活動をやり、闘争にはいったのは東洋工業であり、広島地区協議会の中心であつた。地区労の会議はほとんど東洋工業でやつた。

そのうち私は代議員になり、つづいて執行委員がひらかれつた。争議をどうすすめるべきかが討議され、さしあたつて、このまましばらくサボ状態のまま、一方で会社側との交渉をつづけようということになり、つきの団体交渉のとき私も交渉委員のひとりとして出席した。

場の大衆に密着し、大衆をかためるべきだったのだ。

そのうち地区労の会議があつた席上、戦後第一回のメーデーが協議された。地区労には戦前の組合運動の経験者がいないので、「中村さんに、メーデーの委員長をやつてもらおうではないか」と、山根君が提案し私は固辞したが、万場一致で私が

メーデーの委員長になることが決議された。戦前といつても、全協の非合法活動をやつただけで、労働運動の経験はなかつたが、ともあれメーデー委員長をひきうけた。

メーデー当日は小雨がけぶつっていたが、会場の駅前広場には戦後再開メーデーということで、戦争がおわつた解放感と、食うものもない敗戦直後の労働大衆の憤怒とで、小雨をついて数万の労働者があつまり、私はメーデー大衆をまえにして、はれがましさにあがつてしまつて、労働者の团结をうつたえ、「人民にパンとじ」と夢中になつて絶叫した。

中国新聞がメーデー記事に、「絶叫する中村大会委員長」とだしていて、ちょっとチレくさかつた。一方争議の方は、日一日と大衆は尖鋭化しつつあった。「賃金をあげろ！ 団体協約を我等の手に」と。

機は熟した。毎日のように各職場で、職場集会がひらかれつた。争議をどうすすめるべきかが討議され、さしあたつて、このまましばらくサボ状態のまま、一方で会社側との交渉をつづけようということになり、つきの団体交渉のとき私も交渉委員のひとりとして出席した。



「絶叫する中村大会委員長」中國新聞

社長は先代社長——故人——の松田重次郎で、現社長は当時専務であつた。会社側の交渉委員は社長、専務、常務、労働部長等で、席上、社長・松田重次郎が、「東洋工業は私が旋盤工から身をおこし、コルク工場から出発して、戦時中一万人をこえる大工場にまでしたのだ。文句のあるものは、やめて、でていってもらいたい」と放言した。

私はこいつはいちどたたいておかねばいかんとおもつて、テーブルをたたいて、「社長、なにをいふか。あんたがここまで工場をふとらせるまでには数千、数万の労働者の血と汗がながされているんだ」とやつたら、一瞬彼はポカンとした顔をしていたが、つぎにまっかな顔で、「君はいつたい、だれだ」と激怒したので山根君であつたが、「こんど組合の執行委員になつた中村君です」とこたえると、「きみのような新米労働者が、なまいきなことをいうな」とどなりだし、大論争になりかけたので、他の重役連中が社長をなだめて退席させた。

以後、かれは交渉にあらわれなかつた。かれは頑固一徹なおやじで、有名な男であつた。重役たちは、かれを交渉の場にだせば、組合との交渉が難行すると判断したらしい。もつともかれは交渉の場にはでないが、かくれたところから交渉を指揮して組合の要求をみとめようとはしなかつた。

闘争へ。争議団の結成なる。

いよいよ争議団を結成することになり本部を医務室においた。またも私は争議委員長にかつぎあ

げられ、争議を指導することになった。大任である。

労働者大衆を戦闘的に訓練する必要を感じていたので、一八〇〇人の労働者をひきいて、大州をまわつてキリンビール工場前通りを労働歌をうたつて一周しながらデモをやつたら、進駐軍の兵士がジー、ブに機関銃をかまえて威嚇した。

当時広島の町は原子爆弾でやけ野原となり、進駐軍の司令部をおく場所がなかった。

東洋工業のある向洋町は、被爆をまぬがれていったので、東洋工業三階に県庁や進駐軍司令部をおいていた。

労働者の意識は高揚し、戦闘化しつつあるかにみえた。そのころ岩佐君が争議団本部に応援に朝からつめかけていた。細胞の学習会にもかれが講師としてやさしい資本論やマルクス主義の講義をしてくれた。

会社側との交渉は何回かもたれ、会社側は我々の要求する賃銀の値上げは、ついにみとめたが、団体協約は我々の要求通りにみとめようとはしなかつた。

組合はクローズド・ショップを要求し、会社はオープ・ショップでゆこうということで難行した。

交渉中重役側はおしまくられて、すでにみとめるかにみえると、交渉を中断して休憩しようとう。休憩してかえつてくると、かれらの態度が変わつてかたくなっている。これは重次郎社長ががんばるんだと我々も気づき、次の交渉のとき、「今日は、ぜがひでも、解決しよう。夜を徹してでもやろうではないか」ということではじめた。

交渉は難行し、ついに夜にはいった。かれらは団体協約をクローズドにすれば、会社をのつとられるともおもつたらしい。

組合側も今日中にはどうしても解決しようという意気込みでのぞみ、おしまくつた。

廊下には青年部の組合員がおしかけ交渉のなりゆきを、下の組合員大衆に午後から報告しつづけている。

我々の側には、にぎりめし、パンなどのさしいものが組合からどんどんはいつてくる。このパンは何々組長よりというふうに。この段階までは組長も組合のほうについていた。職制上かれらは日和見的であり、景気のいいほうにつく。

そのときの要求は、クローズドだけではながびくだけだと予想されたので、クローズドとオープの中間という、一種の妥協案でのぞんだが(たとえば人事権の問題では我々の側に有利なように)『入社した社員、工員は即ち組合員になること』などを文章の上で、たくみにとりいれたけれど)会社側も馬鹿ぞろいでもないので、完全なオープン・ショップをのぞむと、なかなか妥協に応じない。

かれらがおしまくられて今一步ということになると、必ず休憩を要求する。休憩からかえつてくると、また固くなつている。

これは社長がいて指揮しているのだと我々は直感した。

夜一〇時ごろ、めしをくわせてくれ、というのかかえこんで「頭がいたい」といだしだし床にすわりこんでしまった。

と突然電燈がきえ部屋はまづくらになり、労働歌が高唱されだした。ドアをドンドンたたきながらの労働歌である。ついにシビレをきらした青年たちの怒りであった。

かれらが電燈のスイッチをきつたものらしかつた。五六分後に電燈がふたたびついてみると業務は床にすわりこんで頭をかかえこんでいる。他の重役は総立ちになつてふるえている。かれらの

かれらのほうが旗色がわるくなると、なにかと理屈をつけて休憩にもつてゆくので、ともあれ、「今夜中には解決をつけたいので、おたがいに真剣にやろう。社長とよく相談してこい」というと、「社長は、夜だからかえつて、いません」という。

こんなことで休憩にしたが、休憩からかえるとかれらは強気になる。

休憩中我々組合の交渉委員も相談して「もう一步だから朝までかかつても今日中に解決してしまおう」と相談して、もう休憩は絶対にゆるすまいということにした。

交渉は難行し、ついに夜の一〇時になつた。とかれらはまた休憩をもちだし、「もう夜中の一二時だし、決定権は社長にあるので、今夜は社長も老体のことと帰宅したので調印はできないのだから、あしたにしてくれ」といだした。

「駄目だ。むすこの専務もいるし君ら重役の判断でもしろ。そしたら交渉を明日にのばしてもいい」とやつたが、かれらはしりごみするばかりで、調印に応じない。

そのうち、むすこの専務(現社長)が突然頭をかかえこんで「頭がいたい」といだしだし床にすわりこんでしまつた。

と突然電燈がきえ部屋はまづくらになり、労働歌が高唱されだした。ドアをドンドンたたきながらの労働歌である。ついにシビレをきらした青年たちの怒りであった。

かれらが電燈のスイッチをきつたものらしかつた。五六分後に電燈がふたたびついてみると業務は床にすわりこんで頭をかかえこんでいる。他の重役は総立ちになつてふるえている。かれらの

ひとりが、専務が病気になつたのでとにかくちよつと交渉を中断させてくれといだした。我々は、「ちょっとだけならやすむが、この部屋からでることはゆるさない」とがんばつた。

これでははなしにならない。

重次郎社長が、「どこかの部屋にいるはずだと考えた私は要求書をもって、山根君に、「どこかに社長がいるとおもえるのでちょっとさがしてみる」と廊下にてて、二階の部屋をひとつづきがしてあるいでいると一番端の部屋にわずかに燈がもれている。

「ア野郎、ここにいるわい」とおもつて静かにドアをあけてはいってみると、衝立のそばのテレビに頭をたれて重次郎社長がすわっている。

「社長」と私がよぶと、ビクッとして腰をうかしかけ、私をみるとふたたび腰をおろし、「ア、君か。君はひどい男だ」とかなしそうな声をだして、「私の会社に君のような男がはいりこんで、老人の私をこんなにまで苦しめる」と、泣きごとをならべだした。

「あんたを格別くるしめようとしているんじやない。あんたがあまりに頑固だから交渉がまとまらないんだ。あんたさえこの協約書に判をおせば、争議は解決することだ。この協約書に判をおせば、さい」と協約書をつきだすと彼は頭をたれ、「どうか、この老人をこれ以上いじめないでくれ」と机の上にうつぶせになって動こうとしない。これは駄目だなどおもつて、交渉委員たちのいる部屋にひきかえしてみると、専務の野郎が廊下に木の長イスを出してそこにひっくりかえっていた。

一瞬私ははつとした。

「しまつた。だれか若いものが、ゴウをにやしてついにかれをなぐりたおしたのではないか」とおもつたのだが、そうではなかつたらし。

「どうなつたんだ」ときくと、「専務のやつ、とうとう病気だといってひっくりかえつたで」と若い者がいっている。

これでは今日の交渉は中断せざるをえない。

ところが専務の野郎め、夜のあけかけた六時、ヒヨツコリ立ちあがつてチンバをひきひきかえつていつた。

専務は仮病をつかつていたものと、おもえる。朝になれば進駐軍の連中が出勤してくるのを計算にいれている。かれらがでてくれれば、このひどい事態から助けだしてくれるので、夜明けまで廊下の木の長イスの上で、がんばつたのだろう。ごくろうなことだ。

つぎには戦術を変更して、本館前で従業員をあつめて、総決起大会をやり、大衆をアジり、一階から二階までデモることとし、一階の事務室において語問しはじめた。

会社側は職制を通じての切りくずしにでているようだつた。組長の態度がかわつてきたようだといふ。一部では、賃銀値上げの要求は通つたのだから、もうこの辺で妥結してもいいぢやないかと、不平が出はじめているらしいとのこと。

不平分子は「組合幹部はわれたちによくわかりもしない、クローズドとかオープンとかで、まだ、もましてはいるが、ほどほどにしてもらいたいものだ」というわけである。

「おまえ坐つていないので立て。戦争中自分だけいいことしやがつて。おれたちをさんざんな目にあわせやがつた。立つて皆のまえで頭をさげて、わびをいえ」とやつている。

わかい連中のなかにはパイプや鉄棒のきれつけをもつているものもある。用度課長は青くなつてふるえあがり、私は若い連中が用度課長をなぐりはしないかとヒヤヒヤした。

へたをすると挑発にかかるおそれがあるので、みなをまとめて二階へデモ隊はおしかけた。二階は重役室、会議室などであつたが、だれもでてくるわけがない。二度ばかり一階から二階をデモつてひきあげた。

交渉は膠着状態となり、ゆきづまつてしまつた。

徹夜の交渉のあと、会社も交渉にでてくるのをしぶつた。

かれらは争議の調停を地方労働調停委員会にかけようといだした。しかし我々組合側は中央労働調停委員会にかけることを主張した。地方労働

調停委員会には労働者側委員らしきものがいなかつたからである。

局面を開くために会社側も組合側もいろいろと考えはじめた。

会社側は職制を通じての切りくずしにでているようだつた。組長の態度がかわつてきたようだといふ。一部では、賃銀値上げの要求は通つたのだから、もうこの辺で妥結してもいいぢやないかと、不平が出はじめているらしいとのこと。

不平分子は「組合幹部はわれたちによくわかりもしない、クローズドとかオープンとかで、まだ、もましてはいるが、ほどほどにしてもらいたいものだ」というわけである。

これはなんとか手をうたねばならんと私はおもい、山根君たちと相談した。よい智恵がでないのと、尾道の野村秀雄さんにきてもらつて意見をきこうということになつた。

そのころ三原の三菱車両工場は争議にかゝって、百人くらいの大細胞ができてわり、三車の組合の竹田君が闘争資金をもつて、東洋工業に応援にき

てくれ、大衆をあつめてアジ演説をしてかえったのもそのころのことである。

野村氏は当時三車の組合の顧問かなにかしていなところだったとおもう。

(彼については一部で家父長的な面が指摘され、批判があつたようだが、当時五〇歳くらいの、ロシア革命当時から海外で船員として組合運動に従事し、組合運動については深い経験をもつた人だつた。)

その野村氏が我々の要請に応じてくれたので、事態を説明し善後策について相談したところ、彼は、「労働者のいちばんのぞんではいるものは、なにかを一番に考えねばならん。賃上げを会社側がみとめたのなら、团体協約のために交渉がこじれているときは、オープン・ショップでもよい。この際妥協すべきではない」という意見であつた。

我々は生産管理方式をとつたり、いろいろ苦勞しながら、争議団の結束を固めようとしていたが、会社側は足もとをみたのか、「賃上げはみとめたのだから、团体協約はオープンでなければ絶対みとめない」と強硬な態度にててきた。

ある朝会社の門前でビルをまいている奴がいるというので、出てみると、「争議きりくずし」のビルを二人くらいのものが出勤する労働者にわたしている。我々の姿をみるといちはやくにげた。会社側は露骨な手をつかいはじめたのだ。

ある日職場委員がよびにきたので、何事かと職場にかえつてみると、ひとりの男が争議きりくずしの演説をやつていたが、私の姿みてすばやくどこかににげていった。

職場委員にきくと、現場ではスキヤップがあつ

ちでも、こっちでもきりくずしの演説をやつて組合員をアジつているらしかった。

私は一応「結束」をうつたえて争議団事務所にかえつたが、事態は急速にかわりつつあったのだ。敵のきりくずしは執行委員会におよび、のちに執行委員の投票の結果、私は執行委員をしりぞかざるをえない羽目にまでなつた。

我々は必死にまきかえしをはかつたが、スキヤップは職制や暴力的なあんちやんめいた男たちにまでおよび、敗色は日をおって、こくなつていていた。

ついに我々共産党員に対して会社側は最後の通告を示してきた。辞職勧告であつた。

「君たちは争議の責任をとつて辞職してもらいたい」というものだつた。

我々は細胞会議で、いかにすべきかを協議したが、「今辞職勧告をうけつけなくとも、つぎに彼等がうつ手はわかっている。解雇だ。」と私はかんがえた。

山根さんひとり「中村さん、ここでまけないでがんばりましよう。代議員におちたつて、平組合員になつたつて、再起を期しましよう」といった。しかし私は前記の私見をのべ、ここで辞職に応じるしか仕方がないといった。

宮近君も辞職に賛成し、みんなで辞職することにした。

ひとりだつた。ほかに設計主任の中村さんそのほかの職員もいた。

完全な敗北であつた。あるいは山根さんの言が正しかつたのかもしれない。しかし六カ月におよぶ争議の責任者として、私は心身ともにつかれはてていた。

その後県委員会に常任として広島にとどまり徳毛君らと県委員会の下でたたかつたのだが、その後のことは時期をみて現代の人が回想録をまとめよう。

(おわり)

山道 繁氏（談）

兄の名前は「襄」ではなくて「長」で、「ひさし」とよみます。吳一中を卒業して東京外国语学校のロシア語科に入り、昭和三年の「三・一五事件」で退学処分になり吳にかえつてきました。片岡義夫さんと兄とは吳市の吾妻小学校で同級だつたと思います。

私はそのとき吳一中の三年間でした。兄はまもなく台湾にゆきました。

(1105ページにつづく)

4・26事件と新協劇団後援会事件

井上 栄



党との連絡

はじめに、広島郵便局の小川正一君が私にちかづいてきた。わたしがのつている電車のコースの、いつもおなじ停留所に小川君がたつていて、のりこんでくるのだ。

そのころの電車は「チンチン電車」というやつで、お客様の、のつているところはドアでしきつたなかで、運転手や車掌のいるところは風のふきさらしのそとだ。そこにたつて客室のほうにせなをむけていれば、お客様のほうから顔をみられることもないし、はなしをきかれることもない。小川君はそうして立つて私とあれこれとはなした。

なぜ小川君がわたしに目をつけたのかわからぬ。わたしは文化団体の会合などにもいったことはない。ただ寿座でひらかれた築地小劇場の公演をみにいって入口で名前をかいたことはある。それと電鉄にはいる前に広島郵便局の電報配達をちよつとしたことがある。

そののち小川君はわたしに関谷源一氏をひきあわせた。ところは白島から八丁堀にてる道だった。小川君はかえり、関谷君と私は八丁堀の白十字と

いうミルクホールだか喫茶店だかにはいった。コーヒーのほかにケーキかなにかをとつたが、かねを払うだんになつて、わたしは一〇錢くらいしかないし、関谷氏はかねをもつていなかつた。さあえらいことになつた。無錢飲食ということでサツにレンラクされることはこまる。そこで店の人になたまをさげて「かねがたりないが、あとでかならずもつてくるから」とあやまつた。そのたりないぶんはすぐに払いにいつた。これは今でも思い出にのこつている。

関谷氏とレンラクしたのは二回くらいだつた。そのつぎに関谷氏は青木という人をつれてきて「こんどからこの人とレンラクをとつてくれ。法律問題にくわしい人だから、この人と相談すればよい」といった。かれは学生ふうの若い男で、ほほがたれているという感じ、やさしいもののいい

〔注〕 小川正一。当時広島郵便局集配手。全協

26 檢挙後、獄中で自殺

かたをした。

この青木という人と宍戸、高橋、私とで、あうようになつた。私と宍戸君とは運転の組がちがつていたが、宍戸君と高橋君とはだいたいおなじ時間の組だつた。みんなのしごとがおわるのをまちあわせて会合したとおもう。

「パーク」というのはそのとき出した機関紙だつた。二号くらいしかだしていないとおもう。まもなく我々は検挙されたから。

青木君がわれわれのはなしをきいて、それをもとにガリ版ずりのニュースをつくつて、もつてきただものだ。広電の従業員詰所の便所のなかにおくということもやつた。

横川線の電車——そのころは単線で、まぎりくねつていたが、それとびのつて電車の中にまいて、とびおりてにげるということもあつた。昔のチンチン電車はそれができた。とびのり、とびおりはわれわれの専門だ。あるときは西署の特高の山中と長谷部という奴が電車にのつていると知らずにとびのつてまいたが、おつかれられて、とびおりてにげたことがある。これは昭和八年だったか九年だったかおもいだせない。

新協劇団後援会のこと

わたしは電鉄にはいるまえ、すこしのあいだ、広島郵便局の電報配達をしていた。その主任格の人が大藤軍一氏だつた。
〔通信主事補〕

一九三四年四月一六日——いわゆる4・26事件

でわたしが検挙され、執行猶予でてきたときには、3・5事件でやられた大藤軍一氏はすでに出獄していた。そして竹屋町筋というのか、そこにロンド書房という本屋をひらいていた。

私がロンド書房にゆくと、大藤氏が「きみは郵便局にいたことがあるだろう」といった。そんなことから、大藤氏としたしなくなつた。

そのころは、ひきつづく弾圧でなんにも組織がなかつた。新協劇団後援会ができるまでにはこんなことがあつた。

大藤氏は、はじめ映画鑑賞会というものをつくりた。いまでいえば映画サークルだ。中島の世界館と契約して、洋画の「どん底」などを見る会をやつた。世界館のはうへ何人分かの入場料をはらつておいて、それだけの割引券をつくつて、高師とか高校、女専などにだした。またその映画をみた感想をはなしあう会合もひらいた。若い人のあつまる会ができるといった。

広島の素人劇団は「十一人座」というのがあつたが、それが「広島舞台」とかいうものになつていた。

大藤氏は新協劇団後援会をつくるようになり、宇野重吉氏、滝沢修氏などをまねいて座談会をひらいたりした。

そして「夜明け前」の戯曲朗読会をやることに

なるわけだが、「広島舞台」の方の連中は「しろうとになにができる」といつたぐあいだつた。それ

とはりあうようにして「夜明け前」の朗読の練習にはげんだ。もっとも「広島舞台」のほうからも音響効果などいろいろ応援してくれた。

眞常次郎氏も応援してくれたが、とうとう朗読

の青山半蔵の役をやつてくれた。そのころのことについてすこしかいてみたいとおもつてはいるのだが。

こんなことにまで特高が目をつけて、「治安維持法」にひつかけるとはおもわなかつた。(1940年—昭和15年、8月に一斉検挙、留置場で正月をむかえた)

責任者の大藤氏をはじめ「夜明け前」の朗読でおもな役をやつたものは、男はみんな、女は大前三枝さんがひっぱられた。さいわい、眞常次郎氏、

村上四郎氏は「満洲」か「北支」にいつていたのでたしかつた。

大藤氏はふたたびこの事件で実刑をうけた。私が留置されているところへ、特高の黒山の奴がきていろいろとひつかけようと訊問したが、私は起訴はされなかつた。

〔一九八〇年一月五日 聞き書き〕

先日は失礼しました。

加藤幹男さんの件ですが、おかげになつてはいるなかに若干相違がありますので訂正させてもらいます。

宇品造船はあるのは間違いで、有限会社宇品内燃機が本当です。同上の会社は陸軍輸送部の船舶関係の直接の下請工場でありました。社長は、4・26事件の正田誠一氏のお父さんでした。

また私と加藤氏の関係は、私が4・26事件後自宅で遊んでゐる時、昭和一〇年頃か同町内(己斐

町）の関係から加藤氏から自分の勤務している所に来るよう話があり、早速働かせてもらいました。職場名は広島湾発動機工業組合。加藤氏は組合の書記長役。前記の正田氏のお父さんが理事長で運営されておりました。

話がとびます。前記、発動機工業組合は、昭和一三年ごろ企業の整理統合等により解散、広島湾付近の発動機、機関製造業者も整理合併等、生産部門戦時体制に入りました。その結果正田のお父さん達が設立したのが、前記（有）宇品内燃機であります。

加藤氏も私も他の組合職員も宇品内燃機へ転職したのであります。

私が昭和一五年の新協劇団後援会の件で検挙され、釈放後復職できたのも正田誠一氏、加藤氏等がいたと為しております。加藤氏の事件は同じ会社におりながら、全然私が知らなかつたのは部署が違うなどからも知れないが、本当に知らなかつた。もつとも党の指示によるものではなく、特高の作り事の事件であつたからだろとおもいます。

軍の製品製作の新体制等々考えてやつた事が、特高のエサになつたようですね。

旋盤など、モーター直結の機械などの購入の変なところで特高をよろこばす結果になつたようです。

加藤氏検挙の時は加藤氏、小林氏のほかもう一人位だったのではないかと思います。

以上職場名等少し違つた所を訂正します。

一九八一年、昭和五六年一月七日

昭和八年から九年にかけ
左翼運動に対する弾圧は
ますます強まつたが労働
者は不屈にたたかつた





□ ロンド書房のこと（遺稿）

大藤軍一
(大月洋)

堀哲二のおもいでをこの年になつてかくことは、夢にもおもつてみなかつたことだが、いざペンをとるとなると、不思議にその一切が生々しく、つい昨日あつたでき」とのように、胸いたくなつかしさがあふれる。哲二の死は私にとって私の青春（私は二十五歳の春から四一歳の一番大切な時代を一〇年以上の警察、未決、牢獄と社会と断絶させられた）の忘れ難く心に響く辛い現実に逢っている。

〔注〕 堀哲二、本名國本金夫。4・26事件當時作家同盟責任者。

私と哲二のふれあいは実をいうと、ほんとに少

しの期間であつた。昭和一三年一月哲二が刑務所をでるとすぐ私を訪ねてくれた。それが初対面であつた。そして同年九月には日赤糸崎病院（結核療所）に入院、昭和一四年八月には同病院で生を終つて、広島から訪れる私を喜ばしたり寂しがらせたり辛い思いをさせたりしながら、最後にははるか海のみえる糸崎の高い山の粗末な焼場まで、

真夏の太陽のきらめく中を、二人の男に死棺を担がれ、哲二のお母さんと私と、若い少女のようないニ僧のたつた三人でいよいよ最後の哲二につきそい、私は哲二と生と死のわれわれの闘いの困難な時代をしつかりみつめ、たしかめあいながら、はかなくこの世に訣別していくた哲二のことは、私が終生忘れることのできない思いのなかに生きのこつており、ペンもいくたびかとまつたことだ。

死後彼の念願だった遺稿の全部、日記類まで含

めて全部を、数日徹夜を通して読みおわり、その年の年末には急いでその墓碑銘として、遺稿歌集『愛情の歌』を発刊したわけで、今ではあの状勢のなかで、よくなしとげたとおもい、ほんとうによかつたとのおもいをふかめている。

私は翌年八月一九日（1940年、昭和15年）の新協新築地西劇団の強制解散、弾圧事件で検挙され、同関係者の中で全国唯一人死刑を課され、再び下獄、終戦直前まで社会と断絶のやむなきにいたつたので、一層このおもいはつよい。でも何故か随分久しい深い交わりのように思えて、このおもいでのペンも最後に近づくにつれて苦しく辛くなるにちがいない。

初対面はずつと後になつたが、それ以前、賀茂郡西条警察署の留置場で哲二とは、顔、姿はお互に全く相見ないで、声、言葉だけは交じえている。

私は一九三二年（昭和7年）三月五日早朝、広島の非合法弾圧事件で検挙されていた。十分覚悟の上であり刑事、検事の執拗な苛酷な取調べに對して私は大へん用心ぶかい、言葉すくない頑固な人間と全く変り果て、次々と新しい事実が続々と判明して來るので、長い間警察の留置場にとめおかれて、その間いろいろな広島周辺の田舎の留置場をたらいまわしされて、丁度西条警察に大分長く居たときである。

ふたつ房があり、そのひとつに小雨のふつていたある夜、どたどたと数人の人たちがはいつてきました。私はどこの留置場に入つても意識的におこなつていることを例のごとくやつた。私は広島の3・5の左翼弾圧事件であげられたと、私の姓名、年齢、職場などをくわしくとなりの房につげあいさつをした。

となりから哲二がすぐ答え、それで私の房の左すみと、哲二の房の右すみのうらの方で刑事たちの目と耳を盗んで、こつそりと連絡をとり、その夜とまり、翌日朝めしまえに調べに出されたと思ついたら、そのまま釈放されたらしく、それで哲二とはおわかれになつた。

そのとき哲二は賀茂地方の作家同盟のことをほんのすこしはなし「今度の広島の弾圧はスパイがいたらしいが、どうか」ときき、私は「そのことはきいているが、同志たちの志気に影響するので、しつかりした事實をとらえた慎重な発言をすべきではないか」とこたえたことをたしかに記憶している。哲二はまだ夕めしも食べてないし、全く金ももつていないというので、私は定時の夕食はすでにすませていたが、パンとうどんを一杯余計

にまたたのみ、房のうらから哲二の房のいれものにこつそりながらかかって、うつしょえたこともおぼえている。事件の監視者がいないと、田舎の刑事、小使いは人がよかつたし、まことにおとなしい私になっていたので、こんなことになしえた。彼等はこのことをわざと知らん顔をしていたように私は思う。夜もほとんどねむらないで、私たちはコソコソと話を交じえた。

哲一は私が文化活動にも関心が深いし、三月四日の夜おそく（検挙の前夜）コップ（日本プロレタリア文化連盟）の広島支部の中心活動家、石川茂一（彼もまた後に獄中結核で仮出獄になり出獄後まもなく死亡）と会う場所が既に警察の手入れ

で連絡がきれたこともはなしたので、コップの活動、文学、演劇、詩歌などにもくわしいのに驚ろいたらしく「しつかり勉強せんと駄目だ。しつかりします。」と、しきりにくりかえしていたことも強く印象にのこつていて。そして哲二は昭和九年五月にナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の広島地方の責任者となつていて検挙され、昭和一〇年五月下獄、同一年三月満期出獄した。その間私たちには全くすれちがいの生活をしていたわけ

で、昭和八年四月ごろには、私はすでに起訴され吉島町の刑務所の未決拘置所におり、同監が同志たちでいっぱいなので、いちばん外壁にちかい既決の囚人独房にいれられた。差入れの書籍を五〇冊以上もつていて、その差入れの本のなかに哲二のチェックした非合法の大膽な文書も三回くらい発見して、たのしんでよんだ。

昭和八年四月三日に、やさしかつた養母（私はひとり息子）が面会にきて、その夜ふけ急に心臓

発作でなくなり、むろん葬儀にも参加させなかつた。

やがて私も三年の刑で下獄したが、まったくおもいがけない皇太子の誕生で思想犯をふくむ特別恩赦にあつて、昭和一〇年八月に出所している。

哲二是同一〇年五月に下獄しているので、全く断絶の生活をしたわけである。だから哲二とほんとうに自由にはなせる生活をはじめたのは、彼が昭和一三年九月日赤系崎病院に入院してからで、私はその当時広島に進歩的文化組織、サークルがなにもなかつたなかで、すでに新劇活動の創造に深い関心をもつていて、中央の新協劇団の広島後援会の責任活動家となり、同劇団の定期広島公演を真剣にかんがえ、その仕事にうちこんでいた。

大阪、東京における同劇団公演も度々みにゆき、連絡もとつておらず、丁度尾道の私の若い友人の三角関係の切羽つまつた唯一の相談相手になつたので、度々至急電話でよびだされてそれらの往復もふくめてたびたび哲二をみまう機会をえた。一二月ごろだとおもうが、一時病状もたいへんよく、近く退院可能のようこびをもらし、いろいろと文筆活動のねがいをかたりあつた。

同時に哲二に恋愛がささやかに結実し、そのころが一等幸福そうに私にはみえたが、急にその彼女が病院を去ることになり恋愛もはかなく終末をつけたあと、しばしば喀血にみまわれだした。

私は哲二の彼女が上り列車のデッキで最後の別れのハンカチをふったとき、哲二の室で居合わせそれを見送つた。

それから度々の喀血があり、私も洗面器でそれをうけとめ、相当な血液が私に散つたこともあつ

たが、相当重病の結核の知人にふれてきて大丈夫らしいので、免疫だと信じて面会のときの白衣の着衣、消毒その他も一切無関心で哲一の病室に入りしていた。

病院の副院長から（院長は広島日赤院長）度々注意と、もし異状を自覚したら、いつでも相談にくるようにいわれていた。この人には哲一のこと

で、「いくら感謝してもたりぬほどお世話になつた。

それから哲一の病状も「進一退一段」と悪くなつてゆくばかりで、私を心配させつづけた。初夏だったとおもうが哲一からハガキに随分みだれた字で「死を決して近く我が家にかかる」を受取り、私はびっくりして至急電報で「すぐゆく、それまで必らずまで」とうち直ちに病院にとんだ。

事情は施療患者の入院規則で、退院期日がきたので、ずっとおりたいが大八車にでもり家にかえらざるをえないと決心しての通知であつた。
こんな重病人を家にかえすなんて、死ね、殺すも同じだと考えた私はすぐ病院の官舎を訪ね、副院長と色々はなしあつた。それで唯一つの道は、病院が結核治療の継続をみとめ、病人の移動を厳禁するくわしい証明理由書を提出して、それが認可にさえなれば延期できるということがわかり、その証明理由書をもらうために、それこそ全力をつくして話しあつた。長い間のはなし安いどうとう「できるだけ期待にそういう書きましょう」

という確言をとり、もうすつかり夜になつた松原の官舎をでたときの私は、ほがらかに第一の関門突破で大きなよろこびにみたされ、心ははれあれと夜おそく広島にかえつた。

翌日病院をたずね、その書類を受取つてみて全

くおどろいた。なんと部厚な評細をきわめた内容のもので、病院でもはじめてだとのこと、その人の良心、誠実さに私は頭を全くさげ、心から拝まんばかりに深謝した。ようやく、ほとんど一日中

その手続きにはしりまわつて、やつと延期許可をとり私は哲一のもととんでゆき、よろこびをわんばかりに深謝した。ようやく、ほとんど一日中

その手続きにはしりまわつて、やつと延期許可をとり私は哲一のもととんでゆき、よろこびをわんばかりに深謝した。ようやく、ほとんど一日中

その甲斐もなく哲一の生きたい、みんなの生かしたいとの願望も全く応なく、哲一はとうとう八月十三日

一九七一年四月八日

耐えられぬ 苦痛を
ずっと 耐えている

この苦しみから 救われる日は
死ぬ日では ないか

この作品を最後の詠作として、ペンをおき八月十七日に付添費請求まで手紙にかき、八月十八日には意識不明の重態、二十三日の未明遂に三十二歳の若さで散つていった。

「この世では、生きることも死ぬことも決して新しいことではない」とエセーニンの詩は表白しているが、私には哲一の死はこの年になつても、未だ常に歴史への把握の新しい視野を、おもいおこしててくれている。それほど重くずつしりと私の心に生き残つてゐる。

合掌

大藤軍一氏遺稿 ロンド書房のこと

私は第一回の出獄後エスペラント語でロンド書房という小さな古本屋（ロンドとはサークル・集いという意味）を田中町、竹屋小学校前の四ツ角の所で昔運動の同志の知人の店先を借りて三坪ばかりの店を開いて居た。（後にはその知人が移住したので私の一家全部移つて來た）

それまでは社会状態が悪く苦しく、何しろ思想運動の経験があるので、偽名で日給1円くらいの重労働などで生活してはいたが、三十一年ぶりに逢つた生母（養母は獄内にいるとき死亡）と同居生活中、朝私の弁当を作つてもらい、比治山本町から西の江波町まで歩いて通つていたところ、母は朝急に脳溢血でたおれて急死した。（母は一声大きな声をだして私の名をよんだという）

働くことを断念し、他人に雇われる希望をすて、考えた末、本が好きであったから、古本屋の

行。三号は一九七一年発行。一九七一年二月広島での前進座公演のとき（〇年ぶりに大月洋氏というより、むかしロンド書房をやつて大藤軍一氏にあつた。敗戦もなくのころあつたきりである。まもなく同氏から『山河』第二号がおくられた。これは堀哲一の思い出でもあるし、大藤氏の回想記もある。いづれおりをみて同氏に、もつと語つてもらいたいと思つてゐる。

〔注〕『山河』第二号より転載。同誌は広島県賀茂郡高屋町——堀哲一・國本金夫氏の故郷から発行されている。創刊号に「堀哲一の歌と、その生涯」をのせ、第二号にこの大月洋・大藤軍一氏の「堀哲一の想い出」をのせている。同第三号には堀哲二の小説をのせている。（一号・二号は一九七〇年発

可能性があることを考え、小数の同志たちにこのことを話したら、みんなの集まる場所にもなるし、それはよいと贊意を表してくれた。いろいろと藏書まで寄贈してくれたり、店の本棚まで同志たちで作ってくれたりして店を始めた。

私がロンド書房をひらいた時期は全国的にも

一つもない淋しい限りの時なので、幸い私が新劇に深い関心をもち、本もよんでもいたので、丁度そのころ消費組合の活動家で、東京からオルグとして広島にやつてきていた津田和治君が新協劇団の後援会のパンフレットを配布していたので、私もそれをよみ、したしなくなつた。そのうち彼は広島消費組合も挫折して帰京することになり、後事一切（劇団のパンフの配布のこと、劇団との連絡のこと）など私にまかして広島をはなれた。私は早速劇団と連絡をとり私が正式に責任者として活動することになり、私の店にいろいろと異色の古い同志たち、高等学校の文化サークル、高等師範の文化サークル、ほか婦人公論愛読者グループ、エスペランソ語普及活動のグループ等と、どしどし組織的につながりをもち輪をひろげ、新協劇団の広島公演の実現を考え真剣に組織活動にとりくんでいた。

昭和一五年八月一九日の新協新築地両劇団強制弾圧解散ということになり、私は全国でたつた一人の体刑をうけ下獄した。

その時笑えない話がひとつある。運動の時間に一人の、私より大分年の若い人が（おなじ治安維持法違反）「あなたはもしや田中町の小学校前で古本屋をしていませんでしたか」ときいた。

私がそうだと答えると、急に頭をかきながら、「じつは私は旧制広高出身で、学生時代にあの工ス語の看板の店に数回行き、二度ほど金が足りんと偽りのことを言い、古本代をたいへん安くしてもらつたことがある。私たち学生仲間では、あの店の主人は本を買う時金が足りんといえばすぐ気で、つい私も一度ばかり金をもつていたのに、それを実行してすみませんでした」

きいていた看守も私も、みんなも声を出して笑いあつたことがある。

私にしてみれば、わざわざ財布の口をあけて見せる上手な役者もいたので、ついうつかりのつたので、苦しい時代ではあつたが、ほろにがい、たのしい思いを含んだエピソードであつた。

話をもとに戻すと、当時中島新町（現在、平和公園）に世界館という洋もの封切館があつた。フランス映画「どん底」が中央で評判になつており、広島でもまた、新劇ファンの中でもその話が高まつていたので、その封切の交渉をすると「この映画に一般の客は決してこない。前売券（当時一人三〇銭）三〇〇〇枚引受けてくれるなら封切してよい。そのかわり、プログラムの編集、ポスターの作成、一切の宣伝工作事務をそちらに一任する」という条件をもちだしてきた。私はすぐ東京のキネマ旬報社に映画館で直接電話し、いろいろと広島の事情を話し、（私は以前に数回原稿をおくつていたから記憶されていた）同社の後援承諾OKをとり、直ちに日常連絡のついている広高、広高師、映画連盟、新劇の素劇団「広島舞台」等（これらに昔の同志村上四郎君がいた）に連絡し、主催新

協劇団広島後援会（後援、キネマ旬報社・広高師、広高映画連盟・広島舞台のポスター三〇〇枚専門のポスター貼りにきくと、二〇〇枚貼れば広島のすみから今まで、残りなく貼りうること）のこり一〇〇枚を各サークル、文化団体に配り、宣伝、組織活動を全く日夜を通し積極的に遂行し、前売券三〇〇〇枚を封切前三日位で完全消化した。

映画館も入りが大変よく、ほくほくで、よるこんだ。その後封切交渉は主として文芸映画だつたが、いつでもすぐ応じる。プログラム編集その他も一任する。日常会員には割引会員券を発行するという好条件をとり、大成功裡に終つた。

そのころ吳の新劇団体「ぶどう座」がゴーリキの「どん底」を公演せんとしており、当時の指導者高坂利雄氏（のちに市議に當選）に連絡し、同映画封切を知らせ、「ぶどう座」一同を広島に招き、映画鑑賞ののち、同劇団員をかこみ「どん底」の一部朗読、座談会を催した。

〔大藤軍一氏の遺稿より写す。 一九八一年一月一二日〕

瀬戸内に生きて

数本タキエ
(山本)



- 1、明治四二年（1909年）八月二十五日広島県豊田郡吉名村字下条、山本成一の長女として生れる。のち竹原町へ移転。
- 2、大正一三年（1923年）竹原高女三年に編入。

- 3、大正一五年（1925年）三原女子師範二部に入学。

- 4、昭和二年四月 豊田郡大崎下島、大長小学校に赴任。

- 5、昭和五月三月 教師の生活に自信を失つて退職、竹原町にかかる。

- 6、吉名村で祖母の末弟の看病、秋風のたつこの生涯をみおくつて、竹原町にかかる。この田舎にいるあいだの生活は心にやすらぎを与えてくれた。

マルクス主義へ

一九三〇年秋読書シーズン、私は古本屋に足がむくようになりました。開店してまだあたらしい、

ちいさな店で「ニコニコ堂」といました。社会科学の本が目にとまつた。台上にならべられた雑誌にも全然みたことのない左翼のものがあります。私はまず『社会主義への道』を購入しました。

『日本女性史』をよんだときは、感動して歴史のながれの一点にある自己の存在をみつめるのでした。

生産手段の発展につれて女性の地位も変遷した様子が理解できました。原始共産社会から奴隸制、農奴制、資本主義への移行、つまり階級社会が出現して家父長制となり、女性はただの物質的存在でしかなくなつた。男尊女卑の社会がつづき、公然と人身売買がおこなわれた。そして女性は長い忍耐の生活にたえてきたのだつた。御手洗港でみたオチヨロ船の遊女のおもかげが、歴史の上にあざやかにうかびました。母を卑屈な態度にまでお

母は私の読書をいやがつたので、階段をあがる足音がするとすぐに書物をとじてミシンをふんだ。理解できないところは、なんぶんも、くりかえして頭にきざみこむようにしました。なかでも

『日本女性史』をよんだときは、感動して歴史のながれの一点にある自己の存在をみつめるのでした。

生産手段の発展につれて女性の地位も変遷した様子が理解できました。原始共産社会から奴隸制、農奴制、資本主義への移行、つまり階級社会が出現して家父長制となり、女性はただの物質的存在でしかなくなつた。男尊女卑の社会がつづき、公然と人身売買がおこなわれた。そして女性は長い忍耐の生活にたえてきたのだつた。御手洗港でみたオチヨロ船の遊女のおもかげが、歴史の上にあざやかにうかびました。母を卑屈な態度にまでお

いこんだ元凶はなんであるかをもとめて、私はさらに読書しました。

宮本百合子氏、織本貞代氏の評論や小説をよんで、女性の地位と生きかたの問題を考え、女性解放へのみちしるべをえました。そして両氏のゆたかな知性とふかい思想に、尊敬をいだきました。

それから唯物弁証法の法則をしり、史的唯物論の知識をえました。

共産党宣言の最後の言葉「プロレタリアートは鉄鎖のほかに失うべき何物もない。得るものは全世界である。万国の労働者団結せよ」また、婦人論の「未来は社会主義者のものである。そしてまず婦人と労働者のものである」の語をノートに記入し、くりかえしよんでは満足していました。

雑誌類ではナップ（全日本無産者芸術団体協議会）の機關誌「戦旗」の月おくれをかつてよみ、プロレタリア解放運動の世界を知りました。「文芸戦線」も購読したけれど「戦旗」と比較してちょっと異質なものを感じたようにおぼえています。

にはうつていませんでした。

小説は、中野重治、貴司山治、藤沢桓夫、林房雄、武田麟太郎、片岡鉄兵、小林多喜二、徳永直等。プロレタリア作家の作品をむさぼるようによんでいました。河上肇先生の『第二貧乏物語』を購読したのもこのころだったとおもう。弁証法的なもの

の見方に接し私の人生観が根底からかわってゆくの意識しました。新鮮なよろこびと興奮のなかにいた自分を、いまでもはつきりとおもいだし

ます。平易にかかれた文章は、先生のひとがらをあらわしていく、くりかえしてよめば、充分に理解することができたのです。

敗戦後の昭和二三年（1947年）世界評論社より出版された先生の『自叙伝』をよんで、その清潔でまじめな人間性と思想の純粹さに胸うたれましたが、いまでも最大の尊敬をささげています。

先生は敗戦の翌年二年（1946年）一月三〇日、六八歳の生涯をとじられました。栄養不足と寒気のため肺炎を併発されたのです。

昭和六年の夏もすぎようとしていました。こんな生活をだらだらとつづけていてもしかたがない。母にもすまないし、働いて意義ある生活をしなければとおもいたち、復職することにきめました。母の遠縁にあたる竹原小学校の平田校長を母と二人でたずねて復職を依頼しました。

この年は満洲事変勃発の年にあたります。前年（昭和5年）九月には、「新教」（新興教育研究所）の創立、一月には「教労」（日本教育労働者組合）が結成されて、教育運動がもりあがりつつあった時期です。教員の減俸や減首と不況の最中に、復職志望校の選択などゆるされるはずもなく、どこかの学校の空席をまちつつ日をすごしていました。

乃美尾小学校

秋もなかばをすぎた一〇月下旬、賀茂郡乃美尾小学校（現在は黒瀬町）に赴任の辞令がありました

た。農村の小さな学校ときいて、私はまた自分の手腕に不安を覚えました。しかも一年半の空白があります。でも人生観の確立をえたいまの私には、目のまえがあかるくて勇気がわきました。どうしてもやりとげなければならぬと覚悟しました。母はその頃、尾道市の呉服市場で反物を仕入れて販売もしていましたが、私に大島袖の着物やコートを新調してくれました。

昭和六年一〇月、二三歳の菊かおる朝でした。

荷物をととのえて、母と祖母にみおくられ西条ゆきのバスにのりました。一時間半ばかりかかって西条駅前で一度下車し、今度は広行きのバスにのりかえ、黒瀬川にそつて坦々とした稻穂の道をくだつてゆく。黒瀬盆地にはいり、どちらをみても広いたんぽのいねは収穫をまっています。上黒瀬村を通過し乃美尾村の停留所に下車しました。大きなバスにのりました。一小学校は

村の中程からすこし南に位置していました。停留所のならびに少し家がつづいているだけで、納屋をともなつた農家があちこちに点在しているといった風景です。学校への途中に高い煙突をたてた、つくり酒屋が一軒あつて目標になつていました。

賀茂郡西条町（現在は東広島市西条町で学園都市建設計画の中心地）は広い西条盆地の中心にあって農産物の集散地です。古くから酒造業がさかんで「賀茂鶴」「福美人」などの銘酒は全國的に有名です。この乃美尾盆地にも二軒の酒屋がならんでいることは偶然ではなく、良質の米と水がゆたかであることを証明しているとおもいます。

小学校の門をはいるとすぐ運動場でした。左右両側の校舎をつないでいる前面の古い校舎の真中

に教員室があつたが、教師も生徒の姿もみあたらぬ。どうしたのだろうと、おもいつつ、右側の宿直室をのぞいたら小使さんがおられ、今日は遠足であることをしりました。しばらくまつてあることをしりました。しばらくまつていると校内がさわがしくなり先生たちも帰られた様子です。小使さんの注進をまつて私は職員室に案内されました。先生たちの視線をあびて、校長の机のまえにゆき、私は辞令をわたして「おねがいします」といつておじぎをしました。つぎには主席訓導、次席とひとりひとりにアイサツをかわしてまわったのち、末席の自分の席につきましたが、終始私は緊張していました。学級数は補習科をあわせて九学級、教員数は一〇名でした。亀田校長は、県立商業学校から師範一部を卒業した人で三五、六歳のわかさで校長のイスを獲得したのだから、いわゆる「やりて」というのでしよう。色白で口ひげをはやしていた。初対面の印象は中々手ごわくて如何にも校長ぶつているといったかんじでした。

私の担任は二年生で、左側の校舎のはしからふたつめの教室でした。各学年が一組づで全校の生徒数は約二〇〇人くらいだったとおもいます。あらかじめ頼んでいた下宿に荷物をはこんでもらい、直ちに簡単な歓迎会をひらいてもらいました。女教員は私をいれて三人でしたが、一人は郵便局夫人で、補習科の裁縫教師、一人は役場の収入役夫人で、三年生の受持の沖本先生です。二人共この土地の人で年配の先生でした。

若い男教員で師範一部出身の今田先生は何か思われぶつた態度で、じろじろと私をみて品定めをされているような感じは気持ちが悪く、井上先生

は准教員でしたが、ざつくばらんな態度は朗らかな人にみえました。教頭は次席より若く、单身赴任の身で気むづかしさが表情に現れています。

担任の生徒は、純朴でおとなしい。人数は三〇人あまりでこの点は理想的です。その大部分が農家の子です。服装はそまつでした。授業時間に手をあげてこたえる生徒はよく訓練されて、お行儀がよかつたです。

ここでも優等生教育がおこなわれているのだとおもいました。教科書にそうした天皇制教育は生徒本来の自由な意志をすいぶん束縛しているのだとおもい、ましてはならない、純真な芽をのばしてやらなければとおもいました。

となりの教室は一年生で次席訓導の担任です。

中年の温厚そうな先生で、オルガンをひいて唱歌をおしえていらる。楽しそうな雰囲気が感じられます、その歌曲がみな、先生流にアレンジされて、小節をきかせてうたわれています。これではちょっと流行歌調で、なんだか場ちがいの感じがして、厳謹な教育方針に合致しないのではないかと思いましたが、その愉快そうなうたいぶりをきいていて、私は微笑しました。また皮肉さを感じたのしく思いました。

一年生の担任ははじめてだということで、校長のワンマンぶりがうかがえる一例だとおもいました。というのは、新学期に校長の長男の入学にあたり、その受持教師として、おだやかな性格の

は準教員でしたが、ざつくばらんな態度は朗らかな人にみえました。教頭は次席より若く、单身赴任の身で気むづかしさが表情に現れています。

担任の生徒は、純朴でおとなしい。人数は三〇人あまりでこの点は理想的です。その大部分が農家の子です。服装はそまつでした。授業時間に手をあげてこたえる生徒はよく訓練されて、お行儀がよかつたです。

ここでも優等生教育がおこなわれているのだとおもいました。教科書にそうした天皇制教育は生徒本来の自由な意志をすいぶん束縛しているのだとおもい、ましてはならない、純真な芽をのばしてやらなければとおもいました。

となりの教室は一年生で次席訓導の担任です。中年の温厚そうな先生で、オルガンをひいて唱歌をおしえていらる。楽しそうな雰囲気が感じられます、その歌曲がみな、先生流にアレンジされて、小節をきかせてうたわれています。これではちょっと流行歌調で、なんだか場ちがいの感じがして、厳謹な教育方針に合致しないのではないかと思いましたが、その愉快そうなうたいぶりをきいていて、私は微笑しました。また皮肉さを感じたのしく思いました。

竹原地方では女性で自転車にのつている人をほとんどみかけませんでしたが、この農村地帯では自転車が唯一の足でした。テクテクあるくのは時間がかかりすぎるのです。地主や大きい自作農はみなもつっていました。女自転車もこの村で七、八台はあるといわれるが、小作農家では、ほしくても到底買える品物ではありません。亀田君の子供自転車はめづらしくて羨望をよんだものです。

この純然たる稻作農村はなんといっても、封建色が濃いものです。私が非常におどろいたことは、宴会の席やときには教員室で、男教員の間で猥談がかわされることでした。前仕地ではきかなかつたことなので、私はいやでなりませんでした。何の刺激もない田舎の生活がおもいやりられましたが、教師自身の質的レベルの程度がわかるよう気がしました。

お茶くみや弁当保温のせわ、ときには男教員のはしりつきいままで、隣席の沖本先生がされていました。はじめ私は気がつかず、手伝いをしなかつたら教頭にきつい口調で注意されました。得々として何の抵抗もなく、女教員の役目として動いてい

られる沖本先生を見て、農村の主婦の生活と女の地位をおもいやり暗然としましたが、私はなにもいうことができず、沖本先生を手伝いました。

沖本先生は亀田校長の下で非常に氣をつかつてゐられるようにみました。正教員でない自分がいつ遠くの学校に転勤させられるかしれないといふ危惧です。夫君が収入役なので一応の心強さもあるのだろうけど、なんといつても年とついて正教員の資格をもたないというハンディは大きい。私は先生の気持ちがよくわかり、となりの教室によく話にゆきました。沖本先生は小さなお坊ちゃんをひざに、だきあげていらることがありました。

教員室のとなりは補修料室になつていて、私が、畳に坐つて裁縫をしている女生徒のところへ私はよく出入りしました。藤井先生は別に私に対して、いやなかおもされず、応対はきわめてお上手でした。農村の乙女たちはいまなを考えて、どんな家庭のなかで如何に生活しているかを知りたいともつたのです。そして話しあえる友達になりました。かたつたのです。それにしても生徒の服装はそまつでした。「モーカ」という木綿のきものをきています。銘仙やモス生地のきものを身につけている自分を省みて、これではいけないと、早速母のところへ便りをだし、家においてある木綿のきものをおくつもらつたりしました。

復職まえに竹原の古本屋で購買した『プロレタリア科学』の広告でしつていた『新興教育』(新興教育研究所発行の機関誌。創刊は昭和五年九月)をみたいとかねておもつっていた私は、おもいきつて東京の研究所へ注文して送付してもらうように

なりました。

この年昭和六年(1931年)一〇月にナップ

(全國無産者芸術団体協議会)が解散になり、その加盟芸術諸団体とともに「プロレタリア文化連盟(コップ)」が結成されました。今までの新興教育研究所はコップに加盟して「新興教育同盟」とよぶようになった。したがつて昭和五年一一月に結成された「教労」(教育労働者組合)と「新教」(新興教育同盟)の両組織によって、生徒のための眞の革新的な教育運動が推進されることになったのです。

「教育労働者組合」はわれわれの城塞であり「新興教育」はわれわれの武器である」と両者の役割を明示したと「嵐の中の教育」にのべてあります。送付された「新興教育」は私にとって、かけがえのない指導書になりました。教科指導に対する今までの摸索から両の目がパツチリとひらいてゆく感じでした。

11月号はソヴェート教育特集号で、扉にはレーニン夫人クルプスカヤの写真がでていました。「教員俸給不払の國と増俸の國」と題して、経済恐慌にあえぐわが國無産大衆の生活と、教員の待遇の悪化、ゆがめられた教育の現状と対照的にソヴェート教育のすばらしさが紹介されてありました。

ソヴェートでは婦人と子供がいかに解放されているか。

『新興教育』拡大と読者獲得の方法。

希望等、読者の通信がのせてあって、ひとつひ

とつ身近に教えられ、うなづくことができました。

編集後記に財政難がうつたえてあり「新教防衛カンパ」が募集されていました。

私は通信といつしょに五円のカンパを毎月送金することにしました。月給は初任給にもどつて四〇円でした。大長小学校のように住宅手当は一錢もでなかつたが、農村では生活費は大してからず、貯金もできたのです。

非力な私には大した組織活動もできず、せめてカンパすることがひとつの大好きなようこびでした。

中央部からの通信は個人名(ペーネーム)で封書がよせられましたが、いまではそのペーネームもわすれてしましました。この信書による指導と励ましに、私はどんなに喜びと、力を与えられたかしれません。

信書の人が昭和四八年九月、四〇余年ぶりの連絡により小田真一氏であつたことがわかつて私は當時の思い出をあらたにしたのです。

朝礼の時の校長の訓示を生徒のうしろできいて「またあんな欺瞞的なことをいつて子供の自由な意志を束縛しようとしている」などと批判をしていました。

週番の時は私も朝礼台にたたされましたが、内気な性格はどうしようもなく、自分では大きな声をだしたつもりでも、後まではとどかないらしく、「きこえません」という今田先生(師範一部卒業の男の教師)の大きな声がはねかえつてきました。

後日、補習科生の二三人が「あの時は今田先生のいじわるといってやつたんです」と私をなぐ

さめてくれたので、この娘さんたちは私に好意をもつていてくれるのだとおもって、うれしくなりました。そして親しみがわきました。はやくこの娘たちと友達になつて、生活の実体を知り、山積する社会矛盾を見る眼をつちかわねばならぬとおもいました。私は同僚のなかから、どうにかして同志を獲得したいとおもつてしました。まず井上先生に目標をさだめて、話す機会をまつていました。教員室では何もいうことができないので、となりの補習科室に時々出入される先生をみて、アシプロ活動の一歩をふみだしました。一部の補習科生にはプロレタリア小説を与えて読書をすすめ、読後の感想をきくことからはじめました。

その後井上先生には『新興教育』を手渡すまでになり、私の教室でいろいろと話しあうことができました。封建的な田舎では、周囲の目がうるさく、すぐいうわさが立つので、私の方からは先生の教室へゆくことをひかえていましたが、先生の新らしい教育に対する熱意はかなり積極的でした。

冬のおとずれは早く、教室でストーブをたくことになりました。生徒たちがわりあてられた薪を持参してくるのです。私は今までストーブのいらない生活をしてきたので、いまさらのようにこの地方の寒さが身にこたえました。

教室の廊下側は日があたらないが、南側の窓辺は冬日がサンサンと中まではいりこむので、あたかでした。私は無意識のうちに窓側の席を巡回していましたらしく、「先生は日のあたる窓の方ばかりいって、こつちにはちいともきてくくれてない」という不平のことばが耳にはいり、私は愕然

しました。そこで親しみがわきました。はやくこの娘たちと友達になつて、生活の実体を知り、山積する社会矛盾を見る眼をつちかわねばならぬとおもいました。私は同僚のなかから、どうにかして同志を獲得したいとおもつていました。まず井上先生に目標をさだめて、話す機会をまつていました。教員室では何もいうことができないので、となりの補習科室に時々出入される先生をみて、アシプロ活動の一歩をふみだしました。一部の補習科生にはプロレタリア小説を与えて読書をすすめ、読後の感想をきくことからはじめました。

その後井上先生には『新興教育』を手渡すまでになり、私の教室でいろいろと話しあうことができました。封建的な田舎では、周囲の目がうるさく、すぐいうわさが立つので、私の方からは先生の教室へゆくことをひかえていましたが、先生の新らしい教育に対する熱意はかなり積極的でした。

冬のおとずれは早く、教室でストーブをたくことになりました。生徒たちがわりあてられた薪を持参してくるのです。私は今までストーブのいらない生活をしてきたので、いまさらのようにこの地方の寒さが身にこたえました。

教室の廊下側は日があたらないが、南側の窓辺は冬日がサンサンと中まではいりこむので、あたかでした。私は無意識のうちに窓側の席を巡回していましたらしく、「先生は日のあたる窓の方ばかりいって、こつちにはちいともきてくくれてない」という不平のことばが耳にはいり、私は愕然

としました。不用意でした。私はもつとこまかいところまで気をくばらなければならぬと反省をして、ただちに廊下側の席を交換させました。そして私は公平に机間巡視するように心掛けました。下宿に帰つても、夜はさむくて大型の大和こたつをおばさんから借りて身体をあたためた。夜中に目がさめると、つとめて読書するようにしました。物音ひとつきこえない深夜は頭がさえて、すこしごらい難解なものでも理解できるような気がしました。『實労働と資本』『唯物論と経験批判論』などを読んだように記憶しています。『婦人公論』もつづけて購読していました。

校長はまさか女教師の私がプロレタリア文化運動などに熱中しているとは、おもつてみなかつたようで、井上先生が私の教室に出入するのは、お互に好意をもちあつているのだと誤解したらしく、冬休みもおわりに近いころ結婚を問う意味のハガキが竹原の家にとどいたので、私はとても驚きました。考える余地はなく、全然その意志のなきことを記してただちに返事をだしたが、なぜ校長はこんなおせつかいをするのだろう。田舎の封建的な慣例による校長の自意識の尊大さがしのばれて、いやでした。

三学期に帰校してからは、校長の態度によそよそしさがみられました。そして私の行動に注目している様におもいました。高等科女子の体育をうけもとと命令されたので、私は体操は苦手で自信がない旨訴えたけれど、校長はきつい語調でゆづりませんでした。

学校に隣接の公民館で保護者総会がおこなわれたときも、容赦なく私を演壇にたたせました。またときも、容赦なく私を演壇にたたせました。ま

つたく初めての経験でずいぶんとまどいましたが、のがれることはできない。ひとくぎり、はなしては恥しそうに口に手を当てる動作は、自分でわかるがどうしようもない。そのたびにみんなの笑いがおが目にはいる。短い時間だったのに私は必ずいぶん長いようにおもわれ、上気して夢中でした。

しかしこの体験は私の一里塚となつたようですが、勇気がわいてくる感じでした。

同志にあう

昭和七年二月下旬のある日でした。

「新教」中央より通知があつて、西条駅で組織の人と連絡をもつことになりました。つぎの日曜日に指導部の人とあうということで、私の頭は一杯になつてしましましたが、ついにその日の朝がきました。

雪はやんでいたが、残雪で山や畠はしろかつた。コートを羽折り、宿のおばさんに外出をつげて外でたが、停留所までの道はつめたかった。バス私は指定の待合室で下り列車の到着をまつていたが、停留所までの道はつめたかった。バスで一時間ばかりをついやし、西条駅前に下車したが、なんだかそわそわしておちつけません。

お互に初対面なので、通知された目印を手にしています。中央の人は、赤い表紙の書物をカバンの上にかさねていられたようにおもいますが、私はどんな目印をつけていたのかおぼえていません。まもなく下り列車が構内にはいつたので、私

はおもわす席をたつて、待合室にはいつくる人の目でおつていました。

赤い表紙の本をみつけようとしていた、あのときの情景はいまでも鮮明におもいだされます。無難作な態度で近づいたその人の面差しは、いまは全然おぼえていませんが、中肉中背の若い方でした。内気な私は小さくなっていたものと思ひます。アイサツをかわして、駄をでた一人は競馬場あとまであるいて、堤に腰をおろしました。枯草のところどころに残雪はありましたが、早春をつげる日さしはあるかかった。

その人の話される組織や運動情勢、当局のはげしい彈圧ぶりに耳をかたむけ、私は乃美尾校における微々たる活動状況などを、質問に応じて、はなしたようにおもいます。

つぎつぎとはなしはつきず、その人は私の知らない天皇制の実態について、かたられました。

「天皇制は絶対的な国家権力で、天皇は神様に祭りあげてある。その階級地盤はブルジョア、地主の支配階級である。天皇制は封建政治の延長であり、小作農制度と資本主義制度を保護するのに懸命である。天皇制は強大な武力をもつて侵略戦争をおこない（満州事変は柳条溝事件を口実に前年、昭和六年四月に開始された）現在ではファッショ的色彩を呈してきた。そして教育をゆがめ、児童を軍国主義へとしたりたてている。

天皇の収入は日本で一番多く、株券の配当金だけでも莫大な額で、耕地や森林その他の不動産も膨大で、総所得は三井三菱財閥をはるかに越えている。

その上政府は皇室費として、国民の税金を多額

にのばつて与えている」等々。

知らされる話に私はおどろくばかりでした。いまでは考えられぬことだけれど、天皇制についての書籍は全然手にいれることができなかつたのです。言論出版の自由がなく、不敬罪が成立しているのだから……。

いままでに指導者のいなかつた私にとって、この真相は画期的なことでした。今後の活動についても、自信をもつて当ることができますと、胸のふくらむおもいでした。

いまから四年まえの昭和四七年九月一日、竹原の私宅へ突然にかかつてき電話により、四〇年まえにこの西条駅でおあいした「新教」中央の指導者が、小田真一氏であることをしつたとき、私はおどろきと同時になつかしさで声もはずんでいました。

苦難な戦前戦後も無事に生きながらえてきたお互の生活をたしかめあつたのです。氏は鹿児島市で新樹出版社をいとなまれ、「教育運動史研究会」で活躍していられました。戦前に教育運動にたずさわって、うもれていた同志の発掘や資料の蒐集に力をそいでいたことを知ったのです。家庭の中に長くとじこもつて、空白時代の長かった私のねむりもゆりうごかしてもらいました。

私は昭和八年三月に小学校を卒業されて以来教育界から縁どおくなつていていたので、初めは遠い存在としている皆さんはなにごとも勇気をもつて、子からたちあがりました。

「これから社会にむかって第一歩をふみだそう」としている皆さんはなにごとも勇気をもつて、あたつてください。世間には長いものには巻かれろという言葉がありますが、これは権力者には頭があがらないから、なにをされても服従せよといふことです。これではいつまでたつても世の中はよくなりません。弱いものは泣くばかりです。皆さんが正しいと判断したことは確信をもつて、そ

じて、非合法時代のおもいでがよみがえり、プロレタリア教育運動に情熱をもやしていた教師のころをなつかしんだのです。

あのころの先輩諸先生のたゆみない研究と闘争の連続によって、その苛酷なる弾圧にもめげず、きづかれてゆく民主教育が、戦後の発展へとつづいている組織の根強さに、感動したのでした。

『戦後の教育と私』（広島平和教育研究所編）によせられた小田氏の手記によると、氏は広島神石郡神石町の人で、明治四〇年の出生とあります。

油木農学校から賀茂郡西条農学校に編入されました。（西条町の地理にくわしいはずです）卒業後、東京豊島師範一部に入学。専攻科卒業後は「全日本教員組合」と「新興教育研究所」にはいり、その組織と研究活動に従事されました。私が西条駅でおあいしたときは「新教」の組織部と編集部のしごとをされていました。

れを主張し実行してもらいたいとおもいます。勇気をもって正しい道を進んでください」という私のことを訣弁ではなしたことをおぼえていました。

春の休みは短く、四月一日の入学式をまえにして私は乃美尾校へ帰校しました。そして私を待っていたのは転勤の通知でした。賀茂郡川尻小学校へ不意転を命じられたのです。いつだつたか、校長がなにげなくいつたことがありました。

「もうすこし竹原がちかくだつたらいいとおもいませんか」「それは、おもいますよ」と返事しましたが、転勤などのことはなにもいわず、その後私の意志の確認ももとめられなかつたので、新学期めざして帰校した私には不意うちでした。校長に対してムラムラと腹がたちましたが、どうしようもありません。

新学年の登校日をむかえて、私は受持ちだつた生徒をつれ近くの山へあそびにゆきました。陽春の光に息吹く自然是うつくしかつた。黒瀬川の流れはおだやかでした。

手足をのばして遊びたわむれる生徒たちの成長をねがつて私は別れをつげました。

翌日の送別式には校庭にならぶ全校生徒にむかつて台上にあがりました。

「今年も皆さんといつしょに勉強したいとねがつたのですが、校長先生の命令で、しかたなく川尻小学校にゆくことになりました。大変残念ですが仕方がありません。短い間でしたが、楽しく勉強することができ、うれしくおもいます。おわかれしても決して皆さんることはわすれません。

みなさんも時々先生のことをおもいだしてください」とあいさつして、乃美尾盆地を去りましたが、ふたたびこの村をおとずれる日があるだろうかと感傷にひたされました。

折角同志として交際をつづけていた井上先生とも充分な会話はできず、補習科の生徒にも心をのこして、おわかれをしなければなりませんでした。下宿の庭にさいていた白木蓮の花がとても美しく印象的でした。

川尻小学校

昭和七年（1932年）四月八日だつたとおもいます。

ぐるぐるとまがりくねつた坂道を、バスでくだ

つて安浦町に到着し、安登村の峠をこえると川尻町です。東西に長い海岸の町でした。人口は約五〇〇〇人ほどで、戸数は一〇〇〇戸くらいだったとおもいます。北に賀茂郡第一の高峰、野呂山をいただき、南はすぐ瀬戸内海の岸辺でした。毛筆の産地として、ちょっと有名なこの町の小学校は、町の中心から少し西よりに建つていましたが、新校舎は、後の小高い丘にたち、余地をのこして旧校舎をみおろしていました。いづれ、下のおんぱろ校舎は廃棄する運命にあるという。私はまるで流浪の旅をしているようで、なんだかものさびしい、たよりない気分に包まれていました。またなにもかもみ知らぬ土地で、み知らぬ人達と交わりを持たなければならぬとおもうと憂うつでした。

校庭であそんでいる生徒におしえられて、二階の教員室に入つたら、校長室は階段の上の別室になつっていました。松浦校長は、年配のどつしり太つた赤らがおの人で、めがねをかけていました。辞令をわたして頭をさげると、うなづいて直ちに教員室の先生方にひきあわされ、私の席に案内してもらいました。担任学級のこと、下宿さきのことなど、いろいろ説明されて、私は乃美尾校の龜田校長とは大分ちがつた印象をうけました。気の抜けない、ザックバランな態度に好感をもちました。

学校から東寄りの山手に下宿をきめました。清水家の二階です。すぐ斜下の加藤という家には、同僚の織田先生が下宿していらっしゃいました。清水家の主人は船員で、一年の大半は乗船していらっしゃるので、おくさんが赤ちゃんをつれて留守をまもつていられました。

二階からは瀬戸内海が眼前にひらけて、非常にみはらしがよかつた。ずっと右手に鎮守の森があり、その前は浅瀬がつづいて汐干狩ができました。川尻校の教員は一八人で、学級数は補習科をふくめて一七学級、生徒は約七〇〇人でした。私の担任は、一年生の二組にわりあてられていましたが、一年生の受持ちは初めてのことと、すべてにおいて、まったく用意ができていませんでした。それに低学年は苦手で、人数も多く自信がないので、できることなら担任をかえてもらいたかったのです。

翌日校長にその理由をいつて、担任の変更をおねがいしたら、校長はうなづいて他の先生に交渉してみようと、いうことになりました。しかし、

その結果はみな駄目でした。

どの教師も自分の組の準備をすすめていられ、生徒の気持ちもおしつきを得ているからとう訳です。仕方がない。一組の山田先生に教えられて、とりくむことに覚悟をきめました。

山田先生は小柄で活動的でほがらかな人でした。また平凡な感じの人で、物事をふかく考えるタイプにはみえなかつたが、若く、すなおで好意的でした。しだいに親しくなつて、錢湯にもいつしょに行つたりしましたが、教育の参考書と婦人雑誌以外はあまり読書していないらしく、また興味のない様子でした。

私は現在の小学校教員には案外こうした人が多いのではないかともいました。しかし、早いかおそいか、どの人もいづれは、きっと社会の矛盾につきあたつて、マルクス主義の領域にまで到着するはずだとおもつていました。それほどあのころは純真で世間知らずだつたのです。

校庭の桜は満開でした。ここ川尻の地は標高八〇〇メートルの、びょうぶのような野岳山を北にせわつてるので、沿岸では最もあたたかい土地でした。雪がふつても、地につくまでは消えてしまつて、つもつたことがないそうです。その美しい桜花の下で、新入学の生徒たちは、学校という環境にとまどいながら、私のことばにしたがつて、唱つたり遊んだり駆けたりしている。少しでも早く学校の集団生活になれさせなければならぬ。この子らに悲しみを与えてはならぬと懸命でした。私の任務は重大です。教室でも、校庭でも具体的な指導はこまかにおぼえていませんが、生徒の発言や行動の自由を束縛しないようにと気を

つけたつもりです。その結果、校長の参観のときは、いつもガヤガヤとさわがしかつたものです。

私に、もっと統率力と手腕があれば、上手に生徒をみちびいて、スムーズに授業をはこぶことができるのにといつも反省をしました。

この町は一概にはいえないが、階級的に二分しているようにおもわれました。学校のそばを流れ光明寺川を中心として、東側山手にかけて昔からの有産者、老舗の家が多く、西側よりの海岸部は農家、漁業者の無産者が多かつたのです。

毛筆製造業の家も、真宗の光明寺も川東の山手にありました。

光明寺はこの町と町民の中心的な存在で、由緒ある大きな寺院でした。婦人会や青年団の勤労奉仕で、境内はいつもきれいに掃除されていました。

日高という姓でしたが、ことし一年生の一組に女子がいました。背のすらりとした、色白の美しい生徒で、いつもきれいな衣服をみにつけていました。級友は、日高さんとよばず、「お嬢さん、お嬢さん」と教室でも校庭でもよんでいました。担任の山田先生が注意されても、入学前や家庭での習慣は容易にとれず、幼い生徒たちの羨望のためになっていました。学校集団の中では、みな平等になりました。学校へは、みんな平等になりました。

訪問がおこなわれなかつたのです。

漸く波止場へでたところで、「パチッ」という音がして、石つぶてがとんできました。何だらうとおもつてふりむくと、また「パチッ」「パチッ」という音がして、石つぶてが私たちにむかつてとんできました。一瞬後、私はおどろきとおそれとのいりまじつた気持ちで、あわてながら波止場のハナまでかけてゆきました。このショックに私の胸の鼓動は高まりました。そして改めて、いまおきた事件のなりゆきをおもいおこし、織田先生と「はまくどし」の生活のありかたを話しあい、考えました。

町の中央の浜辺に漁生活をして、長い差別の歴史を生きぬいてきた人達の反抗は、こんなにはげしいものであったのか。過去における、心ない教師たちの差別意識や処置にたいして忍従の涙をながした、うらみとにかくしみは幾重にもつかさなつているのだろうと、私はしみじみと考えました。そして私の担任の生徒も、この環境の中に育つて

子はそまつな衣服を身にまとつて、色の黒い暴れん坊でした。学校生活になれないせいもあつて、動作がいつも乱暴でした。でも私が何か話しかけると、ニコッと人なつこい笑いをうかべて近寄り返事をしてくれて、とてもすなおでした。天衣無縫というのか、無邪氣そのもので可愛い子でした。

初夏の日の夕暮に下の下宿の織田先生といつしょに散歩にゆき、波止場の突端にでたら涼しくて気持ちいいだろうと、いうことになり、「はまくどし」の路地に足をむけました。家なみも道もせせこましかつた。織田先生も私もここへくるのは初めてでした。なぜか川尻校では学年はじめの家庭訪問がおこなわれなかつたのです。

いるのだとおもつて、暗然となりました。

この体験はあまりにも強烈だつたせいか、その後、夜中に眼がさめても頭からはなれず、徳川幕府が身分制度を施行して、搾取をほしいままにした悪政、そして現在に及ぶその流れの根深さを次々と考えてゆきました。

松浦校長はいつも頭痛がするらしく、親指と人差指で鼻柱をおさえる癖がありました。飲酒のせいではないかと、同僚と話していましたが、校長というのは、こんなにも酒をのむ機会が多いものかと驚くほどでした。校長会議、研究発表会、教員連合会、役員会等の行事のあとは必ずといっていいほど、「飲み」をしていました。そのたびに補習科の矢田先生が、かまぼこやトマトをきざんで酒の支度をされるので、「今日も、飲み、ですか」と問うと、矢田先生は親指を立てて、「ええ、この連中がね。毎度のことですよ」と淡々と話されます。「先生も大変ですね」とねぎらうと、「もう、なれましたか、いまにアル中ですよ」と、皮肉そうな笑いをうかべられました。矢田先生はいつもやさしい、ものごしのおだやかな人で、まだ独身だったが、校長は彼女にたいして特にやさしくしていったようにみえました。

古くて広い補習科室は一年一組のとなりでした。私はときどき訪れて、女生徒たちと話す機会をつくろうと努めましたが、一年生の授業と遊びにくたびれておもうようによきません。それに教案の準備もあって、すぐに時間はすぎてしまします。

小使さんの娘の川崎さんと、ようやく親しくなり、夕方つれだって海岸をあるきながら話をすると、

ようになつたときは、とてもうれしく思いました。彼女は竹をわつたようにカラッとした性格で、おもつていることははつきり発言しました。学校の先生にたいする不満や、社会や家庭における疑問をといたしました。

私は徐々に社会制度の矛盾や女性の歴史的な地位、教育のありかた、理想の社会展望などについて話したようにおもいますが、私の理論的水準はまだまだ低いものでした。そしてプロレタリア小説や雑誌『働く婦人』などを与えて読書をすすめました。

男教員の中に森井先生がいられました。なんとなく私に近づいてこられ、はなしをする機会が多かつたのです。しかし思想問題にふれるといつも私の意見とくいちがつていました。

天皇制教育についてもはつきり否定はされませんでした。

「生徒の個性を尊重し才能をのばして、よい日本人となるよう指導することが教育の目的だ」と主張し、「よい日本人とは鎌型にはまつた人ではなくて、自由に考え、自由に行動して、内容の充実した勇気ある人間だ」と彼はいわれる。

住田先生は恋愛至上主義者でした。広島師範一部卒業の優等生だったそうで、誰にたいしても、えんりょなく自分の意見をのべて、頭脳のよさをおもわせましたが、婚約者である教え子の一人と楽しい家庭をいとなむことが唯一の理想として、「愛情こそ最高のものであつてイデオロギーなど僕には興味ない」とはつきりしていました。人柄は至極善良でしたが……。

女教師の織田先生とは下宿が近くで一番番したし

く、つきあつていきました。彼女は尾道市向島の人で、私より三つくらい若く、四年女子の担任で、上の校舎に教室がありました。思想性はありませんが、非常に純粋で、なんでも打ちあけて率直に話すことができました。夕飯後も度々お互の下宿をおとずれていました。青春の夢、恋愛、結婚問題などもよく話しました。法律上の男女の差別、職域の差別、家庭における差別などなどについて、いつも差別されて犠牲になるのは女性であることを、そしてしわよせの対象になるのは女性であるために、それに耐えて忍耐の涙をながした「女性の歴史」は、と今もつづいています。

私の貧弱な「日本女性史」の知識から、イ・ペセンの『人形の家』、「青踏社」の平塚らいちよう氏による女権獲得運動について、男子にゆるされているものが、なぜ女子にゆるされないのであるのか。経済的に独立できなかつた女性の悲劇はどんなにしたら、いつになれば喜びにかわるのだろう。まず人間の自覚から……彼女はふかくうなづいて共感をえられたようにおもいました。

彼女は女学校出の准教員なので、給料の差別をつねに感じていられたのは当然でした。

乃美尾校でも、川尻校でも農村出身の教員が多かつたが、とくに男教員の率は高かつたのです。成績のよい次男、三男を学資のいらない師範学校に入学させた親達の生活がしのばれます。家をつぐ長男の財産しか保持されない農村の貧しさです。分家させるだけの土地も金もない子供たちのために、えらんだ道でした。そして規制された学校で、天皇制絶対教育の指導をうけて（四年一五年間）現地へ赴任した教師たちの意識が、どんな

ところにあるか想像することができます。農村の封建的な環境にそだち、古い慣習を身につけて成長した模範教師の温存的な人生観も処世觀もわかるような気がします。

教頭も農村の人で単身赴任していられましたが、校長の前では如何にも忠実にふるまい、かげではへラへラとして適当にサボっていました。そして女教師にたいしては服装や容姿のことなど口にして、女性觀のひくさをあらわしていました。

松浦校長の人柄は大きっぽで、能力的にも粗雑さが感じられましたが、人はよかつた。機会あるごとに部下にやりこめられていました。従つて教師はわりにのびやかに勤務できたようにおもいました。自分の特長を發揮して教育にとりくむ姿勢の若い教師もいました。毎日の退校時間も校長よりはやくかえる先生もありましたが、校長はあえてなにもいいません。私もいて時間にとらわれることはありませんでした。下宿にかえつて炭火で煮物をしながら読書した自分をおもいだします。

まだ呉線が開通していなかつたので、西どなりの仁方町小学校でおこなわれる教員連合会に徒步で出席していました。往復十キロもある山すその道を迂回して峠をこしました。すこしでも近道をしようとして、細い道をえらぶので、袴のすぐが雑草にふれ、蝶がまい、トンボが弧をえがきました。

同僚とはなしながらの帰途はのんびりとしてたのしいものでした。この年昭和七年一月には第一次上海事件勃発、二月には満州國独立宣言、五月には5・15事件、七月には社会大衆党結成、「米よ

こせ鬪争」とつづく世相は、ファシズム抬頭の危険な情勢をあらわしはじめ、その軍事色がようやく国民の胸に浸透してきた時期といえます。

あるきながらの語らいは、満州事変から軍国主義におよび、ファシズムの意味についての質問が女先生のひとりから森井先生にむけられました。森井先生は「それは僕より山本先生のほうがくわしいから」といつて、私のほうへ答をまわされました。

そのころの新聞紙には、ファシズムという語がボツボツでていました。私は瞬間、うまく話されるだろうかと迷つたが、それでも思いきつてどうにか説明しました。

「ファシズムは初めイタリアのムッソリーニによって作られた極右団体だが、その後の勢いはドイツ、日本に波及し、武力や警察力で労働運動や民主主義組織を弾圧し、人民を戦争にかりたてている。その軍事権力で資本主義の恐慌をきりぬけようとする、反動的で野蛮な独裁政治のことです。

完全ではなかつたけれど、やつとのことで、これだけの意味をタドタドしくこたえると、私はホツとして上気していたのをおもいだします。

仁方町は現在呉市に合併して川尻町につづく県道は舗装されて自動車の往来が頻繁です。しかし昔のあの細い道は今ものこつているはずです。年老いた百姓の人たちが農業のない島で、なすやきゅうりをつくつていた姿がいまでもおもいだされます。

瀬戸内海の沿岸を汽船で帰竹するより他に交通の便がなかつたので、私はそつたびたび帰宅する

ことができませんでした。プロレタリア作家同盟（日本プロレタリア文化連盟の加盟団体）の文学サークルが竹原にできることを妹より知らせてきました。責任者は千日太計雄という青年でした。

千日氏は忠海中学（旧制）を卒業して、からだがよわいせいか家庭でブラブラとあそんでいる文学青年でした。サークルは女学生やその卒業生五人で組織されているもようで、妹もそのメンバーのひとりでした。サークル・メンバーが女性でしめられ、男性は千日氏だけというのも、彼の柄をものがたつているようにおもわれました。とにかく、機会があればいちど彼にあつて話をききたいとおもつっていました。

私の妹は思想的にもまだ未熟で、階級意識もはつきりしないものがありました。サークルに加つていれば、そのうちにきたえられ、情熱も高まるのではないかと期待をもつたが、妹はものの考え方が現実的で、話を聞いてもなんとなく物たりなくなる時がしばしばありました。私は反対にマンチックで想像の世界に飛躍しようとする傾向が強く自分でもこれでいいのかしらと自省したものです。

「新興教育同盟」の機関誌『新興教育』は昭和七年のことしも財政危機と発禁処分により一・二月合併号として発行されました。三月号と四月号は、発禁押収の弾圧下に赤字と闇いながら、無事発行されて私の手もとに届けられました。

五月号からばつたり送付がたえてしまいました。どうしたのだろうといつも気にかかっていたところ、ようやくにして送られてきたのは、九・一〇月合併号で、しかもガリ版ずりでした。

中央部をおそつた敵の弾圧は、原稿をうばい、同志の検挙や、財政難がかなつて、五ヵ月間の空白をしのばなければならなかつたのです。

「吾々は引きつづく暴虐に抗して断固としてたかうことを諸君のまえにちかう。諸君も亦活発な闘争によつて暴虐に逆襲されんことをのぞむ」と編集後記はむすんでありました。

広島との連絡

こうしたころ、多分昭和七年の六月下旬か七月上旬だったように記憶しますが、「新教」中央部よりの紹介により、広島高等師範学校グループの責任者、星川鳳一氏と連絡をもつことができたのです。

このことはどんなに私をよろこばしたかしれません。中央部に心から感謝しました。

星川氏の便りに私はすぐ返事をしたためました。

また『新興教育』誌三月号に「広島高師も闘っている」村田四郎の名で教育サークルの活動通信がでていたのをおもいだし、とりだして再びよみかえしましたが、活発な活動のようすが記されていました。多分星川氏の投稿にちがいないとおもうと、急に親愛と連帯感がわいて、氣力が全身にみなぎるおもいでした。

夏休みもおわり、下宿の赤ちゃんに人形のおみやげを買ってかえりました。おくさんは虚栄心のない気さくな人で、いつも親切にしてもらいました

た。私はようやく町の人たちにもなれて、日常をスムーズにすごすことができるようになりました。近所の青年たちとも、すこしづつ親しくなつていました。

郵便局につとめている畠井君は、下宿のとなりの家だつたし、宿のおくさんとも懇意だつたので、ときどき話題にきてくれました。純朴な青年でした。おくさんの姪の娘さんも下にとまりにこられたときは、二階にあがつておそくまではなしをすることができました。

私が出広して、高師の星川鳳一氏におあいしたのは、昭和七年の一〇月初旬だつたようにおもいます。連絡場所は福屋百貨店（現在の場所より電車通をへだてた向側）だつたとおもうが、はつきりおもいだせます。彼は大柄でちよつと老けた感じの、やさしそうな学生でした。四五年ぶりにおとずれた広島市の地理に私はぐらかつた。みちびかれて、市電にのり、千田町の停留所におりると彼の下宿にともなわれました。そこで、あつまつていたサークルのメンバーに紹介されました。が、みんなインテリ青年ばかりで、私は身の萎缩するおもいでした。なにをしゃべったのか全然記憶にありません。

皆と別れて、星川氏は私をともない、ある小さな喫茶店のなかに入りました。そこでハンサムな学生とおもえる青年に紹介されました。青年はうなづいて私をつれ、星川氏をのこして歩きました。途中はほとんど沈黙していたようにおもいます。そして、また小さな喫茶店に入ると、ひとりの幹部らしき同志がまつていて紹介されましたが、どんな組織の人なのか私には全然

わからない。そのことについてはなにひとつふれず、名前はもちろんのこと、ただ地下活動の人であることをおもわせました。

私は川尻校の職場のことなどを質問され、組織の問題にふれて集会をもつたためにいろいろの指示をあたえられたようになります。

それから、またハンサムな青年にともなわれて、下宿のおばさんにたのんで、空部屋をかり、元の喫茶店にもどると、星川氏が待つていて、二人で彼の下宿にかかりました。外はもうくらくなつっていました。これからでは吳巾からのバスもないで、下宿のおばさんにたのんで、空部屋をかり、その夜はそこに泊つたけれど、いろいろの場面が頭にうかんで、すぐにはねつかれませんでした。翌朝、星川氏とわかれ帰路につきましたが、彼には終始氣をくばつていただきました。

その後10・30事件（昭和七年一〇月三〇日から八年七月までにかけての広島県の共産党関係の弾圧事件）の一斉検挙がおこなわれて、私もその余波をうけて一二月になつて竹原警察署に留置されることになつたのですが、非合法時代の組織活動はすべて秘密裡におこなわれて非常に困難であることをおもわせました。

実をいって、初めてこんな経験をした私は、ちよつとキツネにつままれたような気持ちで、どまどいを感じましたが、それでいて厳肅な組織の根深い拡がりをみたおもいで、緊張し興奮する自分でした。

それからの私は青年男女の集会をもつべく努力して、漸く第一回の会合を私の下宿でひらくことができました。となりの畠井君や造船所に働く労働者五人ばかりの人数だつたとおもいます。各自

にいろんな意見がでて、成功でした。

職場の問題から賃銀のこと、資本家と労働者の対立、社会制度の矛盾など話しあつたように記憶しますが、まだまだみんなの考えは幼稚で理論的水準的水準も低いものでした。

プロレタリア小説や社会科学の入門書等与えて読書をすすめました。

また小使さんの娘の川崎さんには、女子青年団や補習科の友人に働きかけるように依頼しました。

10・30事件

第一回めの会合をおえて数日後のことでした。

放課後の職員室にのこつて教材の準備をしていたところ、下宿のおくさんが下から私をよばれたのです。なんだろうかとおもいながら室からすると、

おくさんは私をひっぱるようにして、すばやく私の耳にささやかれました。今郵便局の畠井君から連絡があつて、竹原警察の刑事が私のところに家宅捜査にくるというのです。先生に早くしらせなければならぬとおもつてかけてきてくれたのだ

といって、おくさんは息をはずませていました。私は瞬間、ひやっと身のふるを感じましたが、どうしようもありません。

船着き場にて、竹原署の刑事一人と乗船しました。一人は川尻駐在所の巡査でした。

生まれてはじめて留置場にはいつて、冷たい床にすわっている自分を意識すると、なんともいえない物悲しい気持になり、さみしさと憤りに胸がふさがりました。

三畳の板の間にうすいゴザがしいてあります。

とつさに書籍や文書の整理をはやくしなければならぬと気づき、おくさんとともに、いそいで帰りました。さつそく整理にかかつたが、こうしているうちに、ふみこまれるのではないかと、気ばかりあせりました。書物を下の押し入れにかくし

てもらい、やつと安心しました。部屋の中をみまわしてこれでたすかたと大きな息をつきました。おくさんは心配そうに「先生大丈夫ですか」ととわれるので、私は「大丈夫です。覚悟していますから」といつたが、やはり胸の中は早鐘のようにさわいでいました。そして、いづれよりの検挙なのかと不安でした。まもなく二人の刑事がきて、階段をおりた私にむかって、家宅捜査をする旨をつげると、二階へとんとんとあがりました。

整理後の書籍は左翼のものはほとんどの筈です。文書もないのに、刑事はていねいにしらべて、中の二冊とハガキ一枚をフロシキにつつんで署へのおみやげにしました。

「これから竹原の警察までいっしょにきてもらいます」と刑事はいって私の顔をみおろしました。下着と日用品洗面具を持参するようにいわれて下おりたとき、おくさんに後のことによろしくたのんで刑事のあとに従いました。学校のこと、生徒のことが頭をかすめて気にかかりましたが、

高刑事が出張してきたのです。そして高師の学生星川鳳一氏との関係について尋問をはじめました。私はしらぬ存ぜぬで逃げようとした。しかしとうはゆきませんでした。「証拠はあるつている」といって迫る見幕はきびしかつた。

すでに星川氏は広島市で検挙されていて、私の関係についても、あらかたバレていたのですが、私はそのことを少しも知りませんでした。(オルグ滝川恵吉氏のメモ帳が敵の手にわたっていた)彼にめいわくがかかるないようと思つて、連絡場所など適当にうそをいつてごまかしたつもりでしたが、むこうははるかに上手で、私など扱い易くて子供のように思えたかもしません。

さらに星川氏に紹介された二人の人物について、さぐりをいれましたが、私は全くしらない人なので、その通りを答えました。しかし留置場へ

な部屋が四つならんでいました。

千日太計雄氏の妹さん(広島女專の学生)がいちばん奥の監房にひとり残つてゐることを知りました。(検挙された文学サークルのほかのメンバーは釈放されていた)

就寝時間がきて看守はガチャンと錠前をおろし、せんべい布団によこになりましたが、私はおそらくまで、ねつかれません。

朝がきて「お天気がいいから、ちょっと外にだしてください」という千日和子さんの声がきこえました。それにしても兄さんの太計雄氏の姿がみえない。どうしたのかと思いました。

ガチャンと錠がはずされ、私は二階の調べ室に

よびだされました。みしらぬ小柄の私服がこしかけていて、じろっと私をみました。広島県警の特高刑事が出張してきたのです。そして高師の学生星川鳳一氏との関係について尋問をはじめました。私はしらぬ存ぜぬで逃げようとした。しかしとうはゆきませんでした。「証拠はあるつてい

る」といって迫る見幕はきびしかつた。

すでに星川氏は広島市で検挙されていて、私の関係についても、あらかたバレていたのですが、私はそのことを少しも知りませんでした。(オルグ滝川恵吉氏のメモ帳が敵の手にわたっていた)彼にめいわくがかかるないようと思つて、連絡場所など適当にうそをいつてごまかしたつもりでしたが、むこうははるかに上手で、私など扱い易くて子供のように思えたかもしません。

さらに星川氏に紹介された二人の人物について、さぐりをいれましたが、私は全くしらない人

もどつても連絡場所などウソをいつた点について星川氏が困られるのではないだろうか、明日の刑

事の追及など気にかかるなりませんでした。刑事はまるで背骨が鋼鉄でできているかと思えるほど頑として権力の強さを感じさせる人物でした。

「君なんかに國体がくつがえせると思うか、全くこつけいだよ」といつて皮肉に笑いました。

三日ほどで調書がおわりましたが、私は家族のものに心配をかけることはできぬとおもつて、家には知らせてもらいませんでした。

妹もこのとき文学サークルの件で取調べをうけたことを後になって知りました。

翌朝、私の筆跡と顔写真をとられ、刑事に連行されて署をでました。ゆき先は賀茂郡広署です。

広署では保護室に入れられました。翌朝から、型どうりの調書をとられて、三日目の朝がきました。署から川尻校に連絡したものとみえて、松浦校長がむかえにきてくれました。私はさすがにうれしかったが、校長の顔は緊張していました。そしてすかさず、これから郡視学のこところへ同行してくれといつて、署をでるとバスにのつて呉駅にむかい、広島ゆきの列車にのりました。

水主町の県庁にはいつて郡視学をたずねると、校長は私を紹介しました。視学は前もつて考えたいた様子で、「こんなことになつた以上学校をやめてもらえまいか」というので、「私は悪いことをしたとはおもいませんのに、やめなければならぬのですか」とこたえました。

視学は「君はそうかもしれないが、父兄や生徒に及ぼす影響があるのでね。こちらで困るので」といったので、私は「今学校をやめると、たちまち

ち給料がはいらないので、生活にこまるのです」とこたえました。

視学はかさねて「では、これから先、思想運動をやめますか、それともつづけてゆくつもりですか」と問うてきただので、私はちょっとと考えました

が、「それは今後のことですから、いま返事ができません。じぶんでもわからないのです」とこたえました。視学はそれ以上何もいいませんでした。

かえる途中で校長は、当分学校を休んでくれというので、「なぜですか。私は一日も早く受持の生徒に会いたいのです」と反問すると「とにかく休んで家に帰つていてください。そうしないと困る」ので」とたのむようにいわれて、私は承諾しました。

もう一週間も生徒の顔をみていないので、早く出勤して話がしたいと思いましたが、しかたがありません。

下宿のおおくさんのホツとした笑顔を見て、私のことを心配してくださいさつていたのだと、おもい感謝しました。

しばらく家に帰つてくるからと、後のことをおねがいし、また畠井青年にも伝言をたのんで、私は竹原に帰りました。

広島地方検察庁から呼出しの通知がとどいたのは、やはり冬休みの期間中だったようにおもいます。

検事は調書をみながら訊問をつづけましたが、調べが進むにつれて、10・30事件の余波をうけたことが推測されました。

10・30事件の内容は、記事が解禁になつてわかつたのだけれど、この事件は昭和七年三月五日の起訴者七七名です。

3・5事件で破壊された広島県共産党组织の再建が計られ、そのために活動した党的幹部オルグ綿織彦七氏のメモから県下の組織が判明し、つぎつぎと検挙の手がのびていった事件です。県下で五名の同志が検挙されました。

私が出広して星川氏を訪ね、最初にひきあわされた青年は広島高等学校（旧制）の学生吉田司氏で、広島共青同盟の責任者でした。つぎに吉田氏によつて紹介された人物は、中国地方オルグ滝川恵吉氏でした。

結局この事件で私は起訴猶予の処分となり、終つたのです。高師の組織は壊滅し、星川氏は退学処分になりました。

もし、新興教育同盟本部からの激励と文書の送付がなかつたならば、私は挫折していかもしれません。苦しさからのがれようとする性格のもろさは自分でもよく知っています。そして教育者としての能力に欠けている自分を省みて、あつさり退職したらどんなに清々するだらうと思つたりしました。

このころの『新興教育』誌については殆んど記憶がうすれていますが、昭和七年秋ごろより、しばしば発行禁止がつづき、昭和八年六月号が発行されるまでには、実に五ヵ月間の休刊状態がつづいたのでした。その間をつなぐものとしては『新教同盟準備会ニュース』がでていました。

昭和七年八月の同盟員数四二五人でしたが、相続く弾圧によつて昭八月三日までに同盟員数は半分にへつたという。長野県支部の「赤化教員弾圧事件」は昭和八年二月でした。検挙人員一三〇名、起訴者七七名です。

この厳しい情勢下において、財政、組織、編集活動に困難を生じ、「新教」独自の活動が各方面から批判されましたが、討論に充分な時間をかける暇もなく、危機に直面した「新教」は「コップ」加盟の「プロレタリア科学同盟」に合図することによって、文化戦線の統一強化をはかるという方針が打ちだされました。

そして遂に「新興教育」六月号を経刊号として七月二三日ひらかれた拡大執行委員会において「科同」への発展的解消が決議されました。

組織の、特に地方支部組織の破壊的弾圧による痛手が大きく、合同によつて相互的に補強されたことはたしかであった。しかしそのため『新教』が独立した文化教員団体として存続すべき独自性、特殊性まで否定したことは、理論的にも実践的にも誤りであつたであろう。実際にも、合同後にも『新教』系の同盟組織は、これまでの『新教』の活動のほかに、『科同』の活動が加重となつて、同盟員の教育的活動に停滞をおこさせた』（『新興教育』復刻版第七巻月報 十屋基規氏記）

階級闘争の道へ

昭和八年（1933年）九月、私はフロシキ包と手鞠をさげてこつそりわが家をでたのです。そのときかぞえ年一五歳になつていきました。妹にあとのことをたのんで竹原駅から上り列車にのつたけれど、年おいた祖母と母のなげきが目にみえるようで、すまないような暗い気持ちにおおわれま

した。しかしこれからの活動をむねにえがいて、つとめて後をふりはらい、うつりゆく意外のけしきをぼんやりとながめていました。当時はまだ呉線が全通していなかったので、山陽本線三原駅で下り列車にのりかえ、山あいのゆるい勾配を八本松駅までのぼりきると、今度は瀬野川駅まで下り坂でした。

市電の土橋停留所から路地をちよつと入つた所の、あらかじめ決めていた下宿におちついたのです。

さる（昭和8年）三月に、私はプロレタリア文化連盟（コップ）加盟の新興教育同盟に加入していく、その関係で最後の赴任校となつた豊田郡中野小学校を退職させられたのです。

こと、会合で二十人の発行がいろいろいたがる
れる、彼のジミな口調に耳をかたむけました。お
ちつきのある純情な人におもわれました。そして
つぎの連絡をきめてわかれましたが、その後私の
就職□がみつからず、おちつかない日がつづいて
いました。

こうしたある日私は堀氏の連絡指示により
党中央地方広島県オルグ関谷源一氏と西練兵場の
広場でありますことになりました。

関谷氏のヘンリームはわすれてしましましたが、党のオルグであることなどもちろん知るはずもありません。ただ上部の指導者で、全協の人ではないかとおもつたのです。というのは私の就職のことなどたずねて、「工場にはいって婦人労働者の組織をつくるように」といわれたので、組合の指導者であると想像したのです。

彼は国防色のレインコートに島打帽をかぶり、どこにでもある、めだたない服装をしていましたが、ずいぶんふけてみえました。石にこしをおろして西陽をうけ、あちこちに遊んでいる子供たちに目をやりながら、非合法活動の注意点や、組織づくりなどについてはなされたよう思いますが、よくおぼえていません。

人がみたらデートを楽しんでいるようにおもふ

たかもしません。私も「よく普通の服装でモスの单衣羽織をきていた」と記憶しますが、それだけに危険性もすくなかったようにおもわれます。彼はつぎのときの連絡を告げて足早にさつてゆかれました。

竹原の妹からの信書は、私の下宿へは直接よこさぬように、紙屋町のある友人宅に届くようにしていました。ある日そのアドレスにたちよつてみると、妹からの回送郵便封書がきていました。それは、おもいがけないものでした。

10・30事件で退学処分になつた「新興教育同盟 广島支部・高師班」の責任者星川鳳一氏からのたよりで、高師の寮で会いたいから何日何時ごろきてくれと記してありました。退学以前の星川氏は广島高師国漢科の学生で、愛媛県の人でしたが、私が川尻小学校に在職中に「新教本部」よりの連絡で、广島市の彼の下宿を訪れたのでした。

一年ぶりで彼と再会できるとおもえば、さすがにうれしさがこみあげてきました。

当日高師の学生寮に彼をたずねて会うことができました。そのときの印象はあまり鮮明ではありません。さすがになつかしくて、その後のことをお互にいろいろ話しました。はなしてゆくうちに、彼がいまでは組織からはなれていることを知ったのです。そしてこれから前途について迷つていられるようにみえました。ふたたび党活動に入る勇気があるように思えませんでした。

彼は没落したのではないだろうか。たしかに没落だとおもつたとき、私は失望しました。くやしかつた。彼にとって退学処分は決して小さいこと

ではないだろう。しかしそにしても、学生運動のもろさをひしひしと感じたのです。そのとき彼から、明後日の日曜日に縮景園（浅野の泉邸）へゆくことを、さそわれたので、約束してわかれました。帰る途中も彼の弱さを思つて、悲しい気持ちになるのでした。

そしてその晩考えた結果は、組織からはなれた彼とあつてもしかたがない、ということでした。

またその反面、会つて今一度組織につくよう激励しようかとの思いが胸を往復しましたが、私の若さによる一途な気持は全くそのゆとりが持てなかつたのです。自分は今、道草している時ではないと、甘い気持をはねのけて、直ちに速達ハガキを

かいたのです。「当日は仕事の関係で、ゆかれないと諒承を求めて朝年早く投函したのです。

これで星川氏との連絡は断たれたのですが、一昨年、昭和四十九年（1974年）八月末、かつて「新興教育同盟」中央部で活躍していられた小田真一と再会することができ、星川氏の消息が必要になったのです。郷里である愛媛県川之江町を知り電話したところ、義妹の方が電話口にでられて、星川氏がすでに他界していられることを知つたのでした。

昭和一四年（第一次世界大戦はじまる）、廣島高師教授の紹介にて、漢口政務訓練所の特務機関に就職、北京に渡られる。北京の新民学院

昭和一四年（第一次世界大戦はじまる）、廣島高師教授の紹介にて、漢口政務訓練所の特務機関に就職、北京に渡られる。北京の新民学院大学の教官として勤務。

昭和一五年現地召集にて出征。

昭和一九年一二月中支方面にて抑留、敗戦。昭和二一年四月復員後、住友化学工場並びに青年団の講師。

昭和二四年、漁業会の会長に就任。

昭和二七年、川之江町長に当選。

昭和三〇年、愛媛県会議員に当選、一期勤務。

昭和三四四年、川辺江町周辺町村合併が成り市制がしかれて市長に当選、一期勤務。脳卒中にて倒れられ、心筋梗塞で療養中も新聞などを出版された。

昭和四七年七月九日、再度の脳卒中で永眠。享年六三歳。

昭和八年の秋、廣島高師の学生寮でわかれ以来の星川氏の足跡をここに記すことによつて、御冥福をおいのりし追悼の意をあらわしたいとおもいます。

昭和七年の10・30事件で検挙された星川氏は、刑事の苛酷な拷問をうけ、精神に軽い異常をきたし、東京の精神科学研究所に半年ばかり入院加療されました。退院後の昭和八年秋広島を訪問されたいに、高師学生寮で再会したのだとおもいます。それから東京読売新聞社や保険会社に勤務されたのち、大阪で出版関係の仕事につかれました。

昭和二年（日中戦争勃発の年）川之江に帰り家業（印刷業）に従事。翌一三年結婚されました。

されました。退院後の昭和八年秋広島を訪問されたのちに、高師学生寮で再会したのだとおもいます。それから東京読売新聞社や保険会社に勤務されたのち、大阪で出版関係の仕事につかれました。

た。私の生活費は妹が少しづつ送金してくれましたが、一ヶ月二十五円位だつたように思います。食事は外食で炊事はしませんでした。八丁堀のばかりのうどんが五銭で、カレーライスが一〇銭でたべられたので、もっぱらここで食事をするようになしました。焼芋を三銭買つて昼食にすることも度々でした。

そして間もなく新聞広告をみて、幟町の製菓工場に就職したのです。

小企業で従業員が三、四〇名位いました。建物も、道路がわからみれば、普通の家で、うらに長く仕事場がありました。暗くてそまつでした。大半が若い女性です。男の従業員は少数で製造工程にたずさわっていましたが、「鶴の巣ごもり」とか「人参飴」「乳菓」などの製品を、ひとつひとつ包装紙くるんで、箱づめにするのが女工の仕事でした。

粉がまうのでタオルで頭を包み、白い割烹前掛をあてて終日手を動かしました。私は時計が必要なのでいつも持っていましたが、腕からはずして、ふところにしまいました。時々監視がみまわりにきて、目をひからしました。熟練工があざやかな手つきで包装する仕事ぶりは、私の目をみはらしました。

私は手技は上手な方でしたが、この早さではとても一朝一夕には出来そうにありません。年季が必要であると思いました。私は早く包もうとして焦り、しわになつた包装紙をいそいで前掛けのポケットにかくしたものです。

となりや前の女工さんの話に耳をかたむけましたが、映画俳優のことや服装や化粧、恋愛などの

話ばかりで、容易にその話題の中に入つてゆけません。それに新米なので、えんりょもあるし、性格も内気で、黙つているばかりではないとおもいながら、どうしようもない有様でした。

もうすこし時日がたてばなれて、そのうちに友達もできるだらうと腰をすえましたが、何よりも労働の激しさに身体がつかれて、早くから睡眠をとらなければ、どうにもならない状態でした。

日給はたしか四五銭だったとおもいます。教員時代の月給は四〇円だったのですから、とにかく安い賃銀です。昼食は弁当持参の人がほとんどでしたらが、私はアンパンを買うか外にでてうどんを食べました。

やつと終業ベルがなり、身なりをととのえて、帰路につく女工さん達の顔は若やいで足がはずんでいました。休みの前日などは、明日の予定をたてて如何に過そかと、うれしそうに話しあつていました。私は少しでもその雰囲気の中に、はいろうと努力しました。一週間もすると、大分なれど少しは口出しできるようになりましたが、でもなんだかぎこちなくて不自然を感じ、中々困難な仕事でした。少しでも話せる友達をつけようと毎朝自分を励まして出勤したのです。

しばらくして小林さんという友達ができました。いつも彼女のとなりに腰かけて、日常のことや不平不満などについて、話しあえるようになつたときはうれしくて希望がわいてきました。

午後の長い仕事の時間には、お腹がすいて手もとの菓子が食欲をそそるのです。あたりの気配をうかがい、小林さんと、めくばせしてしばやく口にいれて下をむき、「をうごかさないようにして

食べましたが、人参飴などとてもおいしかったのを覚えています。「鶴の巣ごもり」は市中では一個二銭もする高級菓子だつたし、ふわっとして大きかつたのでとても口になどいれられませんでした。

た。

小林さんは市内白島町の人で家から徒歩でかよつていました。年齢も二二～三歳くらいで服装も地味で態度もおちついていました。その後、ずっとしたしなくなり、労働者と資本家の関係、その搾取形態など具体的にはなしてゆき、婦人労働者のあまりにも安い賃銀差別などについて語りあいました。

プロレタリア文化連盟出版の月刊雑誌『働く婦人』やプロレタリア小説を与えて読書をすすめ、組織についても話をしたのです。

プロレタリア作家同盟（ナルプ）の責任者国本氏は田舎から出広しておちつくことになりましたが、その下宿さきは不明でした。

また、プロレタリア科学同盟中央からの指示により、広島市在住の数本英次郎氏と連絡をもつことになったのです。なぜかといえば、私の属していた「新興教育同盟」が解消して、「科学同盟」に合併されたからです。「新興教育同盟のたちおくれが批判され、その原因はマルクス・レーニン的教育理論を科学同盟の活動の一部として研究をする、という方針がたてられなかつた点にある」という風に、理論づけられました。そして「新教」の「科同」への発展的解消によつて、教育学発展へのみとおしがたてられました。

参加が決定したのは、昭和八年（一九三三年）八月二十五日でした。その結果「科同」からの連絡

でおくられた略図をみて、舟入町の数本氏の家をたずねたところ彼は在宅していて喫茶店につれだし、広島での科同再建活動について色々と話をしました。

10・30事件の弾圧により壊滅したコップ（プロレタリア文化連盟）の支部再建をめざして、みなそれぞの部署で活動していました。コップでは機関紙『文化の旗』、ナルブ（プロレタリア作家同盟）では『再建ニュース』が、ガリ版ずりで出されました。

「科同」では「批判の武器」と題する原稿を數本氏が書き、私の下宿でガリ版にかけました。また読書会がもたれて週に一回くらい集っていたのです。場所は小網町の同志の下宿だったとおもいます。

『第一貧乏物語』や『経済学入門』をテキストにして、リーダーは数本氏でした。私は出席はしあけれど、昼間の労働につかれて、ついてゆくのがやっとでした。ともすると、睡魔がおしよせるのです。

ナルブの活動で、私はある日楠木町の文学サークルの会合に出席しました。四、五人の若い労働者が集っていました。ゴム工場にはたらくなつたが、そのメンバーで『黒潮』と題するサークル雑誌をだしていました。内容は詩がほとんどで川柳や俳句なども出ていましたが、荒削りで若者の意気が感じられるものです。

この集まりの、この声の中から真実を知ろうとする熱い革新の芽が伸びてゆくのだと思いました。この集会を大切にして、私も出席を怠つてなら

ぬと次の連絡を約束して夜道をいそいだのです。

次回、紙屋町の連絡場所には木原と称する青年が来ていました。この時私も何か書いて持参したように記憶します。彼等の合宿の部屋には木綿のせんべい布団が一隅に重ねてありました。殺風景な部屋でしたが、その中に面白いカバーをかけてふんわりと軟かそうな布団が一重ねおいてありました。

「木原の布団はブルジョアの布団みたいじゃのー」と若者の一人がひやかしたので、みんなドツと笑つたものです。

木原君はキャップ格で感受性の強い純情な青年のように思えました。布団は最近田舎の母が送つてくれたのだと弁解していました。

私はよく八丁堀の繁華街を通りましたが、電車

通りに面して映画館「東洋座」と「太陽館」が二つ並んでいて、華やかな絵看板をかかげて大衆によびかけていました。入江たか子主演の「美しき天」の題名だつたと思える顔写真がかざつてありました。しかし、その輝くばかりに美しい容姿を眺めて、これが普通の生活にいたら、組織の中の身でなかつたならば、すぐに入場しているのと思いつつ足早に通りすぎたのです。今の自分とは全く別世界の生活で、縁のないものだと自制し厳禁していました。

赤色救援会のカンパ活動で、その責任者小寺英雄氏と時々街頭連絡をしました。文化運動の同志から集金し、私の乏しい財布から許す限りの資金カンパを手渡しました。

小寺英雄氏は厳島の人で、10・30事件で起訴猶予、出庁して救援活動一筋に果敢な闘争をつづけ

られました。

舟入町に消費組合があることをかねてきいていたので、ある日場所を探して、組合の常任迫樹盛登氏を訪ねました。

まだそのころの消費組合は合法性を保つていたので、誰でも出入りできたのです。どんなことを話したのかよく覚えていませんが、多分組合の規模や活動などについて話を聞いたのではないかと思います。

事務所を出た時、私は刑事に尾行されていることを全然知らなかつたのです。後から考えてみて、合法的な消費組合が私服刑事に張られていることは常識で考えてもわかるはずなのに、私は全然気付かず未熟だつたといえます。又迫樹氏も注意して下さらなかつたのです。

その結果下宿まで尾行されて、私の住所を知られてしまつたのですが、この失敗の経験は初めてのことでした。下宿の前に背広の人がたつているのを玄関の格子戸越しに見たり、また街角に往復する姿をみかけたりするようになつて、これはおかしいと感づいたのです。私服につけられたとすると消費組合にいつた時よりほかには考えられないことだと後悔しました。しかし私はまだそんなに重大なことだとは思わなかつたのです。私の仕事の程度、つまり文化運動だけだという甘さがあつたのだと思います。うかつなことでした。そして文化関係の同志達が、次第に私の下宿に出入りするようになつっていました。

このころ『赤旗』と『共青新聞』（非合法出版）を国本氏から渡されて読んだように思います。「読後は必ず焼却すること」この規則は嚴重でした。

この集会を大切にして、私も出席を怠つてなら

明けて昭和九年の正月を迎えた工場は休みでした。が、私は郷里にかえれませんでした。三次地区から出広して救援会とコップ関係の活動にたずさわっていた大塚猛雄氏を通じ、十日市町在住の中村芳朗氏をしたのです。そして国本氏をむかえてナルプの会合がもたらされました。三次地区では数名の同志の意識も高く、弾圧後再建運動が徐々にされている模様でした。三次町は県北の町で社会運動の歴史も古く、大正七年県下で最初の米騒動が発生した場所なのです。労働争議も三、四件をかぞえ、芸妓の自由廃業問題の公判闘争は有名です。前年（昭和8年）一月の弾圧で、同人雑誌『暁』が出版法違反に問われ、中村芳朗、藤原勇を中心とする同志十数名が検挙されたのです。

正月三日には職場の小林さんの家を訪問し家族の人にも紹介してもらつてたのしい一時をすごしましたが、なんとなく家族関係の底に複雑なものがあるように感じられました。

製菓工場の賃銀は少しもあがりません。不況は深刻だったのです。こうしたある日、鶴見橋通りの缶詰工場では日給五五銭をくれるという話をきいてきた友の一人が、「なんでも職場をかえよう」といいだして、小林さんをふくめて相談していましたが、日給が一〇銭もたかいことにひきづられてしまつたのです。しごとの性質や、労働の量など検討することもなく一決したので、私も同調してしまいました。竹屋町の下宿から近くもあるし、せつかくの友達と、はなれるることはできなかつたのです。

缶詰工場ではミカンを蒸して、皮をむく仕事でしたが、木箱なども運んだりしました。水がかかり

らないように、ゴムのエプロンをしていましたが、足には水がかかって、とてもひえました。立ちごとなので大変苦しい仕事です。この重労働で第一回目は体全体が痛みました。

なれるに従つてすこしは樂になつたけれど、凍るような寒さに手足がひえて辛抱できないほどでした。どうしてここに職場をかわつたのかと后悔したのは私だけではなかつたのです。小林さんも他の人も「寒いわ」「手が凍るようだ」といつては手袋をはずして、いきをふきかけるのです。

でも工場づとめになれている友は、私よりもな若くて体力がありました。下半身のひえこみに私は体調をこわしたようでした。

一方、私の下宿でおそくまで仕事をすることの多かった国本氏は、身の危険を感じたのか「この下宿もそろそろ転宅した方がよいのではないか」と注意したので、下宿さがしにかけ富士見町の通りに面した駄菓子屋の二階をかりて引越しました。玄人あがりらしいおばさんが一人住んでいたので、私は下の台所で炊事をさせてもらうことにしました。あたらしい下宿は秘密にしていましたが、国本氏はガリ版など運んできて仕事をしていました。

広島の冬は七つの川のデルタ地帯で、北からの川風がふいてそのさむさは想像以上です。工場ではいかわらず水仕事がつづいているのです。私はどうもカゼをひいたようで、体が熱っぽくてだるかつたのです。

朝起きあがる元気がなくて、二・三日仕事をや

すんでいた時（三月にはいっていたと思う）二・三人の私服刑事にふみこまれて、家宅捜査をうけ

て、いや応なしに拘引されたのです。警察ではなくて西練兵場内の憲兵隊でした。そのとき私の下宿にいた国本氏もいっしょでした。なぜこんなところに検束されたのかかいもく見当がつきませんでした。暫くして、反戦運動の嫌疑をかけられたのだと想像がついて、やや安心しました。しかし、始めはおどろいて体がふるえたほどです。まさか憲兵隊にとは思つてもみなかつた事でした。

三日ほど留置されて調べられ、嫌疑は晴れただれど、そのあいだ若い兵隊が上官の命令にしたがつて、私を監房から出したり入れたり、食事を運んだり、トイレに導いたりしました。一間ほど離れたところで、姿勢を正して監視しているのです。キビキビと軍隊調に行動するのをみて、命令と服従に律せられた軍隊の厳しさが肌身に浸透したのです。

街頭連絡もときれ、体の調子も余りよくないまに工場を退いた私は、故郷のわが家へ一度帰つて精気をやしなうことになりました。日がくれてからこつそりわが家の玄関をまたいだのです。さすがになつかしく、祖母の姿をみて私は涙ぐみました。母も何もいわざむかえてくれました。

憲兵隊に連行されたことなど、だれも知るはずがなく、私がずっと家に帰つたものと思いこんだ母と祖母は安心した様子で、こまめに動いて御馳走をしてくれました。このあたたかい肉親の愛情に私の胸はうるみ、甘えたいような脆さが私の身を包んで、どうしようもない安易さの中にいたのです。

竹原の文学サークルは細く長く今でもつづいている模様でした。妹には広島での出来事を話して、

また出広しなければならぬことを告げました。

外へは一步もでませんでしたが、陽春の息吹きが私の気持ちを和らげてくれ、若葉の緑が身も心も洗ってくれました。居心地のよい、しかしあつつかない生活の中で、私の腰はなかなか上りません。でも、いつも組織のことは頭をはなれなかつたのです。

漸く思い切つて身のまわり品をフロシキにつつみ、こつそり家でたのは四月も半ばをすぎようとしていたと思います。また母と祖母の期待を裏切つて、悲しみを与えてしまつた自分をかえりみて、沈みがちでしたが、でも仕方のないことだと、情熱の炎をかきたてました。

下宿について国本氏に連絡したら「どうも弾圧の危険性が濃いようだ。憲兵隊への検束もその前兆だとおもう」といつていきました。

「田舎の家に暫くいって様子をみよう」ということになり、私は彼の提案に同意しました。賀茂郡高屋村の彼の家に滞在中、4・26事件、つまり昭和九年四月二六日の広島県共産党组织にたいする一斉検挙の大弾圧を私達は全然知らなかつたのです。

そして五月一七日についに特高にふみこまれて広島市宇品警察署に検挙されたのです。

宇品警察署の留置場は思想犯であふれています。私はその晩は保護室に四、五人の同志といつしょにおかれました。いろいろの思いが頭をよぎつて、ほとんど眠られない夜があけると、男の同志たちはそれぞれほかの房にうつされたので、保護室は私一人の専有になつたのです。すしづめの

雑居房にいる国本氏にすまない思いでした。数本氏もこここの留置場にいられれている様子でした。部屋の外にでたときに少しづつニュースが伝わってくるのです。国本氏はどこにうつされたのかさっぱりわからない。その後姿をみかけなかつたら、あるいは他の警察にまわされたのかもしないと思いました。

朝鮮の同志たちも逮捕されていました。彼等はカツケが重くて手足がしびれ唇の感覚がないほどで、オリザニン薬を買ってくればと要求していましたが、看守は「買えん」と一喝して応じませんでした。つぎには又力を買ってくださいと毎日のよううに嘆願して漸く応じた様子でした。

ある日そのうちの一人が拷問にやられて、立てなくなり、刑事にひきづられて房にもどつてきました。手当もほどこされず、監房はひつそりと静まっていました。朝鮮人であるために、より苛酷な拷問がおこなわれたのではないかと想像して、くらいかなしい気持ちになりました。

留置が長びく監房生活の中で、彼等朝鮮の同志と話しあう機会がもてたとき、彼の生いたちや朝鮮の学生生活、日本での生活、階級意識の自覚から朝鮮独立の希望へと、つぎつぎと話してくれました。その同志は頭脳のよいまじめな青年だと感心しました。在広朝鮮人青年会のメンバーでした

が、今ではその姓名を忘れてしましました。

昭和九年八月一五日ついに私は、起訴処分になつたのです。釈放を期待していた私にとっては大きな衝撃でした。どんなに叫んでも、もがいても外にはでられない。ゆくさきはひとつだけ。吉島刑務所の未決監でした。

暑い日でした。護送車にのせられて御幸橋をわたり吉島刑務所の門をくぐつた私は、不安とかなしみにうちひしがれていました。車からおろされてくるのです。国本氏はどこにうつされたのかさっぱりわからない。その後姿をみかけなかつたら、あるいは他の警察にまわされたのかもしないと思いました。

朝鮮の同志たちも逮捕されていました。彼等はカツケが重くて手足がしびれ唇の感覚がないほどで、オリザニン薬を買ってくればと要求していましたが、看守は「買えん」と一喝して応じませんでした。つぎには又力を買ってくださいと毎日のよううに嘆願して漸く応じた様子でした。

ある日そのうちの一人が拷問にやられて、立てなくなり、刑事にひきづられて房にもどつてきました。手当もほどこされず、監房はひつそりと静まっています。朝鮮人であるために、より苛酷な拷問がおこなわれたのではないかと想像して、くらいかなしい気持ちになりました。

女監の看守は年配の女が二人いましたが、非常にきつい目をしているのが印象的でした。黒紺の着物に同色の袴をつけ、麻裏草履をはいていました。

一通りの手続きがすんで、つぎに衣服の前を全部ひらけというのです。私はそのいみがわかつておどろき拒絶しましたが、規則だからそうしなければ監房に入れられないと強くいうので、しかたなく従つたのですが、まだ未決なのに、この人格を無視した行為にやりきれない慘めさを感じました。

囚衣は着なかつたが、細い紙紐を一本渡され、それで着物の前を合せて結んだのです。八番の番号をつけられて、左側北角の独房にいれられました。

た。縦、横、高さ、一間（約一メートル）立方の小さな部屋なのです。北面の真中に三尺四方の鉄格子があり、左側のフタをあけると便所で、右手に木箱の食膳がおいてありました。左手の後は小さな出入口とのぞき窓、板壁を背にしてすわると、右隅に重ねられた紺木綿の布団が、手にふれるほどの狭い箱部屋でした。ここがこれから新しい私の住居なのです。

いつごろまでいることになるのだろうと思つて目頭があつくなり涙をふいたのです。

刑務所の夕食ははやく、赤い衣服の女囚がくはつてきましたが、その異様な姿をはじめてみた私の驚きは大きなものでした。隔離されたこの生活は全くシャバとはちがつてゐる、暗い陰うつさがただよつていました。

食事は丸い型におしかためられた麦飯で、口にいれるとボロボロとこぼれてしまつて、のどを通らないのです。無理におしこめようとしたが駄目なので、おかげだけ少し食べてはしを置きました。みまわりにきた若い看守長が、格子ごとに「なぜ食べんのか」と詰問するので「のどを通りません」と正直に答えると、たたみかけるように「ぜいたく言うな」と一喝して去つてゆきました。

朝の点呼で「八番」とよばれて「ハイ」とこたえたが、まだ自分のことのように思えませんでした。

私は家にあててハガキを書きました。ここ住居を少しらせようと思つて「一間四角の箱の中には三尺平方の鉄格子云々」と、詩のようなものをかきいたら、翌朝例の看守長がやつてきて、いきなり「あのハガキはなんだ」「あれが通るか」と

大声で叱つたので私は慄然としました。
かきなおすように、いわれて信書の制限の厳しさをしつたわけです。

しばらくして家からの差入弁当が差入屋をとうして届くようになりました。昼と晩二回の食事はおいしくて、私はもつたない気がして、他の同志にすまないと思いつつ食べました。また未決では自分のお金で好きなものを買う自由があつたので、間食を買ってもらい、看守の目をぬすんでは拘留中の女囚にも分けてあげました。この女囚たちは色あせた赤い囚衣をきて、こまめに働いていました。庭の掃除をしたり食事のさいれ、便所のくみとりなどをしてくれました。そして格子窓にすりよつては口早にしゃべつてニュースをしらせてくれたのです。

たいてい、海軍の根拠地である工廠の街、呉市からきた密いんぱい（売春婦）の人たちでした。二九日の拘留刑をつとめてでゆくのだが、またまいもどつてくるものが、かなりいたので、看守は門を入つてきた顔なじみを見て「ふん、おまえまた来たのか」といつて軽蔑の笑をうかべました。そして赤い囚衣にきかえて雑居房につめこまれました。

私はこの人たちの無知で貧しい境遇を思いました。まともに文字のかけないような、正常な仕事についてゆけない悲しい事情を沢山もつたこの人たちの、おちていった運命を、社会矛盾の中にみるおもいでした。

軍足の不良品をばぐして、その糸を糸巻きにする仕事をさせられていましたが、こんな簡単なことも満足にできない人がいるのです。糸と糸をむ

すぶのに、旗結びをしなければならぬのだが、これができなくて看守にしかられ「八番におしえてもらえ」といわれたと私のところへ持つてきました。格子から手をのばして何べんも教えてあげたが、どうしてもできない若い娘もいました。また、いつたんわかつても自分の監房にもどると、すぐ忘れてしまつて、ものにならない人もいました。そのうちに私もこの仕事をすることになりました（未決のものには請願作業といつた）のですが、読書のあい間にするようなことでは、いけないと、よくいわれたのです。

運動時間は午後に三〇分ほどときめられていました。このとき収容人員の半分づつが交替にてて、足早く歩くので、顔みしりになり少しは話ができるときがありました。

ひまわりの花が高く大きくさいていました。炎天のもと太陽にむかって誇り高くひらい姿になぐさめられ勇気づけられました。流れる汗を手でぬぐつて、歩いたり体操をしました。三〇分の運動時間は、たちまちすぎて、箱のような自分の監房にもどる気持ちは、やりきれないものでした。看守室に一番ちかい、二間四方の房に放火犯の人が赤ちゃんをかかえて、はいつていました。近く刑が決定するらしく実刑は覚悟している様子でした。判決がでてかわいい子供を手放さねばならぬ心境は如何ばかりかと思いやつたのです。私にま少しでも自由がえられたら、赤ちゃんをおもりしてあげるのにと、いつも思い、不自由な親子の監房生活を悲しんだのです。

私と反対側の独房のまんなかに、死刑の求刑をうけて判決をまつておられるおばさんがいました。恋

人といつしょになつて夫を殺したということですが、一見やさしそうな五〇歳くらいの人でした。運動でたとき、看守の目をぬすんで「あなたはいいですね、そとでられるんだから。私はほんがないのです」と静かにいつて顔を伏せた。そのさましそうな姿に私はいうべきことばがなかつたのです。

この人も平常はしごく平凡なおばさんだろうに、前後のみさかいがつかない位、かつとのぼせての行為で、余程の事情だったのだろうと思い暗然としました。

秋風の季節となつても私の調べは始まりません。厳しい獄則のもとに看守の目と声におびえながら日課をくりかえす毎日でしたが、ある日思ひがけなく黒パン半個分がくばられました。今ではハッキリ覚えていないが、満州事変にちなんだ記念日だったように思います。

漸く予審廷にてて取調べをうけることになつたので、物置にしまつてあつた羽織を着て編笠をかぶり、女監をぐるとすぐ護送車にのせられました。他にも男の囚人が沢山のりました。一つ一つ仕切られた席で、みな編笠をかむつているので勿論誰だか分りません。小さな窓から久しぶりにみる街並みや、人の流れを別世界のことのように眺めよう意識しました。

車からおりると、又地方裁判所の独房にいれられたのです。そして隔離された監獄の自分を今更のよう意識しました。

予審判事は色白で中年風でした。広い机の向う氏とも顔を合せて互に微笑しました。

予審判事は色白で中年風でした。広い机の向う車からおりると、又地方裁判所の独房にいれられ、よびだしを待たなければならなかつたのです。

から淡々とした口調で事件について訊問し、割にスマーズに進行したが、予定の所まですむと今日はこれまでといつて次の同志をよびました。私は又独房にいれられて、あとの同志がおわるまで待つていなければならなかつたのです。

一月の下旬近くに私は保釈で刑務所をでることができました。宇品警察に検挙されてより保釈になるまで実に六ヵ月余りの時日を要したが、なると苦しい体験の連続だつたことでしょう。

晩秋の入日は早く、暗くなつてから、ガチャリと錠をはずす音がして、出所をしらされた時は、まるで夢のようでした。イソイソと所持品を整理して三ヵ月余りの独房生活に別れをつきました。頑丈な鉄の門がひらかれ、門の外に出されました。街灯の光は淡く、道をへだてて太田川は暗かつた。コンクリートの高塀を右に曲つて帰る道すがらの、このホツとした解放感は何と表現したらいいのでしょうか。自分の足が宙にういて、うそのようでした。自由とは、自由とは、こんなにも楽しいものなののかと胸の中で、くり返したのです。

昭和一〇年一月、数え年二七歳の新春をむかえました。

広島地方裁判所で私の公判がひらかれました。例によつて非公開でした。

裁判所の訊問に対しても私の陳述はかりにも堂々たるものとはいえませんでした。答えは訥弁で今思いかえしてみて恥ずかしい限りです。

そして判事はいいました。「君は外面如苦難、内面如夜叉という言葉が適合する」と。

私はこれを聞いておどろきました。真剣な表情で発言した裁判長の方をじつとみていたが、腹立

ちと同時に、内心おかしくなりました。共産主義者は彼ら権力者にとつては、みな夜叉にみえるのでしょう。為政者こそ夜叉ではないかと思いました。

公判前に弁護士を雇う話がでたのですが、私はこちらが弁護士をつけてもつけなくても同じことだといつて断つたので、官選弁護士が立つて刑の軽減を形式的にのべていました。

二ヵ年の刑罰を課され、五年間の執行猶予を言渡されました。

プロレタリア文化運動にちよつびりたずさわつたというだけで、こんなにも苛酷な刑を課して、彼等は平然としている。世界でも稀な悪法だといわれた治安維持法の刃を思う存分ふりまわしていたのです。

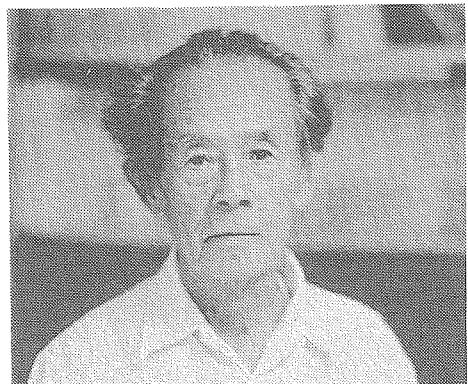
その後男の同志の公判が次々とひらかれましたが大抵私と同様な判決でした。南部達三氏、数本次郎氏、広島電鉄の井上栄氏、宍戸年春氏なども二ヵ年の懲役と五年間の執行猶予の判決でした。

幹部級や非転向の同志は拘留が長びき、従つて裁判ものびていきました。

〔数本タキエ著『瀬戸内に生きて』（一九七九年・昭和五四年発行）より戦前の教育運動及び文化運動のところを書き抜きました 一九八一年三月九日〕

同志のおもいで

岩佐寿一



その一

(1)

クをはいてはしつていたのをおぼえている。

私の家のまえを広陵中学の制帽をかぶり野球のバットをさげた美少年——私より二年くらい上とおもう——がよく通った。それが柴野利秋君であった。それは大正一〇年代（1920年代）のことである。

私は一九一〇年（明治43年）広島市の河原町で生まれた。小学校一年から舟入町の羽田別荘まえの家にすみ、広島二中を卒業して広島高校を一年で退学するまでいた。

「ふなりり、かわらいけ」というところは労働者が多く、また「社会主義者」といわれる人も、子供のころから目にいた。

神崎小学校の一年下に畠常次郎君がいた。ランニングが得意で、高等科にすんでからはスパイ

があつて、小学校長の指導監督をうけることになつていて。青年たちが校庭で陸上競技の練習をしているうちによかつたが、青年デーの集会に青年団のものが参加したというので校長の責任問題になつた。

私の家のうらにいる家が白井という洋服職人の家で、近所の三宅という薬屋のむすこや「おさん餅」の二宮のむすこなどみな青年団にはいついたが、「社会主義者だ」といわれていた。まだ「あかい」ということばはなかつた。

青年団の幹事長が「ひのくま」とこと日野熊太郎氏で、たしかこの「青年デー問題」で幹事長をやめたとおもう。のちに社会民衆党で活動した。「吉長」と吉川長太郎氏の床屋もあつた。堀川氏の肉屋の店には「よめ労働新聞」というポスターがはつてあつた。もひとつ肉屋には厚い近眼鏡を

かけて大きな本をよんでいる青年がいた。のちに水平社・広島県連の幹部になった高橋貞夫氏だ。説教所とかいうところで争議の演説会がよくひらかれたが、佐竹新市氏は演説会の人気者だった。

私が高校の入学試験の勉強をしているころ、嶋君は労働運動にはいっていた。大正から昭和に年号がかわるうとするころだった。彼は小学校をでると河原町の佐方というハカリ屋の修理工場ではたらいた。父や兄もこの工場にいた。

嶋君は賃銀がとれるようになると本ばかり買込んでいた。ほかの者のようにあそびにかねをつかわない。そのころ「円本金集」というのが、はやつた。毎月一円づつおくると一冊づつ本をおくつてくる。かれは文学全集や戯曲全集、新興文学全集などからマルクス主義芸術理論双書などもかつていた。あるとき『舞台化粧の研究』という大きな本を、かかえてあるいてるので私はあきれたことがある。

あるとき、こんなことがあった。本通りの金正堂で私が立ち読みをしていると雑誌の中から紙き

れがでてきた。「……の発売禁止に抗議せよ。広島市河原町〇〇番地、嶋常次郎」とかいてあつた。私はそつと紙きれをそのままはさんでおいた。こうした連絡方法はどこでもとつていたようだ。のちに私が神戸にきてから、土地の人に戦前のおもいでをきいていると、やはり本のたちよみでこんな紙きれをみつけて連絡をとりにいったとはなした人があつた。

東京や大阪などでは労働争議がはげしくもりあがっていた。インテリや学生なども、このいきおいに無関心ではいられなかつた。

『中央公論』とか『改造』というような総合雑誌にも「大学の頑落」とか「蒼白きインテリ」とかいうことばがあらわれ、「未来をつくるものは労働者階級である」ということばもあつた。

小説などもプロレタリア文学全盛だつた。そのころを考えがいた小説にこんなところがあつた。

「セビロにきちんとネクタイをしめて会合にくるのが労働者で、ナッパ服をきた、いかにも労働者らしいのが、案外インテリ出身だつたりした」そして「労働者というものが偶像のようになりあげられていた」。

まもなく「満州事変」をきっかけとしてはじまつた反動時代からふりかえつてみると、まるでウソのような時期だつた。

学生たちも「インテリ性を清算して」労働者の生活にとびこむものが多くつた。

(2)

林君は嶋君のことや玖島三一君のことも、こまかいくせまでよくじつっていた。

そのころ私は缶詰工場ではたらいていた。あるとき赤旗の歌を口笛でふいていると「そのうたを、しつているのか」ときく青年があつた。その青年が神崎宇市君のことへつれていつてくれた。神崎君は「じぶんのいとこが玖島だ。」といった。玖島は転向しないで、がんばつてている。来年（一九三三年、昭和八年）の夏にはかえつくる。玖島が検挙されて、おれがさしいれなどしているうちに、モップルと関係するようになつた。この町のモップルの組織は責任者の木原の駒ちゃんが検挙されでからバラバラになつとる。……。

こんなことがあつたので林君にあつたときは私も玖島三一君のことをしつていたのだ。

林君は消費組合について横野君にあえといつた。私が消費組合についてあつたのは迫樹盛登君だつた。ともかく組合員になつて米を配給してもらうことにした。

神崎君も缶詰工場にはたらいているのでまずこれを組織しようと相談した。

神崎君は口がおもいが、はなしすぎだつた。「部落」というものについて、いろいろとおしゃべった。その友達の林という娘の兄貴が郵便局にいて検挙されたときいた。さつそく林という娘にあって兄貴に紹介してくれといった。

〔注〕 その兄貴というのは三滝山事件で玖島・末元・横野などとともに検挙・起訴された林成城君である。まだ、そこまで私は知つていなかつた。

して人間の皮をひきはがれ、けものの心臓をつらぬく代償として……」

左翼式の文章をよみなれたものには詩的なしみやすい文章にみえた。しかし考えてみれば、漢文式でホンヤク調のギクシャクした左翼日本文話をとっぱらって原文をよめば（原文がよめればの話だが）あちらの人間にはしたみやすく詩的な「共産党宣言」なのかもしない。

いまはすっかりかわってしまった福島町のすがたを、かきとめておこう。福島町本通りの両側には見上げるほど松の木がたちならんでいた。昔の街道筋のなごりである。松並木は市外の草津にもならんでいたのだが、福島町ではみちばたの家のきさきも、松の幹のまわりだけあなをあけて、屋根をふいているところもある。まるで松の木が屋根をつきやぶって、空にのびているようにみえた。

東の方は川添川をへだてて天満町があり、西の方も己斐川をへだてて己斐町があつた。

としよりは今でもこの福島町を「むら」とよび、川からむこうを「まち」といっていると神崎君はいった。

「むら」から「まち」の家にいつても、昔は家のなかにはいることはゆるされなかつた。人の手から物をうけとることもできない。なげてもらつてひろうのだ。

そして、この「むら」のなかも松並木の街道——本通り——をさかいに、「かみ」（川上のほう）と「しも」（川下のほう）で、住むものの身分にちがいがあった。（封建時代の身分差別政策はおどろくほかはない）

藩の方からは、こんなおしかりがくる。

「ちかごろ ぞうちょう（増長）し 町人と

まぎらわしき ふうてい（風体）をなす」。

雨でもゲタははけない。はおりもきられない。

かみのゆいかたも「町人とまぎらわしき」かたち

はいけないのだ。

「かみ」と「しも」で、住むものの身分がちがうということは、もちろんいまはないと神崎はいつた。

「かみ」には靴工が多くすんでいる。自分の家に仕事場をもつて問屋から材料をうけてきて、足の靴にしあげてその貯銀をもらう職人である。玖島もその職人である。かれらは工場につとめるものより時間が自由がきいた。玖島も運動をやって、つかまるときでてからまた自分の家でコツコツと靴をつくりながら運動をつづけた。靴工で運動に入つたものが多いと、神崎君はいった。

これらの職人は「底づけ」だが、そのほかに靴の甲皮だけ専門にねう職人もある。また靴の商店とか運動具店にかよつてそこで仕事をするものもあつた。

私は神崎君に連れられて玖島君の友達であるといふ町内の靴工の家にいつて、あれこれムダばなしをしてあるいた。

「しも」の方には皮革工場や肉問屋に、はたらくものが多い。しかし近代的な、工場主と労働者という関係よりも、親方と子方の関係がつよいようだつた。家も「しも」では大きな家があるかとおもうと、その日ぐらしの家がある。「かみ」にいきな家がぎつしりならんでいるのとはちがつていた。

この福島町でも「しも」のほうでは十講長は町内の「有力者」か「旦那衆」である。総会でえらぶのではない。

もちろんこの町でも熟練労働者ばかりではない。神崎君は「おれのおやじは、赤ん坊のおれを背中にくくりつけて、土方仕事にいつたものだ」といった。

いまの土建労働者は、ちがう。土方は親の代からの失業者といってよいだろう。

福島町本通りには呉服屋や鉄工所があつた。し

本通りに昔の街道すじの松並木がのこつてあるように、この町には昔の「五人組」のなごりもあつた。十軒ぐらいが組になつて当番の家が毎日一匹をだすときの費用のつみたてだ。ここで「安芸門徒」といわれる淨土真宗とむすびついている。

私がそだつた舟入町では十講などというのはなかつた。衛生組合とかいうものがあつて町内の小ボスが「セワケイ」（世計係）になつて月にいくらか費用をつないであるくだけだ。総会をひらいで役員をセンキョするわけではない。

この福島町でも「しも」のほうでは十講長は町内の「有力者」か「旦那衆」である。総会でえらぶのではない。

いまの土建労働者は、ちがう。土方は親の代からの失業者といってよいだろう。

かしそれは「まち」のものがよそからきてやつて
いるのだ。

この町の子どもが小僧にいつたり見習工にいつたりして、一人前の呉服屋になつたり一人前の旋盤工や仕上工やカジヤになつて、この町にもどつて店をひらいたのではない。

この町からよその町に働きにゆくのは、天満町、観音町の缶詰工場、それから横川のタビのコハゼをつくる工場に娘がかよつているくらいだつた。

それと靴工が町の運動具店で靴をつくつてある所へいくらかよつていた。神崎君は小学校を卒業しただけだが、よく本をよんでいた。

私が舟入町の記念碑よこの肉店で、店番をしながら本をよんでいた青年がいたというと、「ああそれは高貴のところじやろう。いま全国水平社の県連の幹部になつとる」といつた。

(3)

夏のころ、小寺君は関谷源一君を私に紹介した。

関谷君は「私は全協のものだ」といつて活版ずりの『赤旗』をくれた。全協機関紙の『労働新聞』はこないのことだつた。

まもなく関谷君が小川正一君をつれてきた。関谷君のはなしでは、小川君は広島郵便局にたつた一人のこつた同志で、迫樹君に党への連絡をたのみにきたのだといつた。

三篠川上流の河原の木のしげみのなかで、三人で夜の会議をひらいた。全協広島地区協議会準備会の責任者を小川君にした。小川君はややこがらで無口な男である。そのとき全協地区協議会準備会の機関紙を『再建の旗』とした。あとで関谷君から郵便局内で発行されている機関紙『おいらのたより』をもらつた。関谷君のいうのでは、これを郵便局の従業員の家に郵便でおくつたりしているとのことだつた。

私のかりでいる観音町の二階がりの部屋はモップルの小寺君がいるし、全協の連中があつまつて会議をひらくし、大繁盛だつた。

一九三三年（昭和8年）の夏だつたとおもう。消費組合で常任の迫樹盛登君から小寺英雄君を紹介された。小寺君を私のところにとめてくれとのことだつた。かれは宮島からモップル（救援会）の再建に広島にでてきたのである。

消費組合の常任の迫樹君はいつも白いエンカン服をきて、組合員のところをまわつて注文をとつたり配達をしたりしていた。そのかたわら、争議の応援にいつたり、検挙された同志の家をまわつたり、同志の連絡のなかだちもした。

物がまわされてきた。

出獄してみると、いつしょに検挙されたものは、転向どころか解党派のほうに走つっていた。解党派の連中は「党の中央はスパイばかりだ」「党のオルグはハウスキーパーをだいてねることしか考えていない。やつらは革命のことなんかあたまにない」などといつていた。

左翼運動をするとすれば母親をすてて、もぐらねばならない。出獄した今は特高にマークされて、うかつにうごけない。

玖島君は福島橋のそばの吉田靴店で仕事をした。若主人の三郎氏は玖島君とは友達で自分の子供に「学」「正」とつけるような男だ。佐野鍋山の転向声明がでると「学とつけたのは失敗だつた」といつていた。私たちは学君を「おい転向組」などとからかつた。その後吉田の三郎さんは戦争について戦死してしまつた。戦後まもなく福島町の青共の会合にいつてみると、学君が私の顔をおぼえていてくれた。

救援会のしごとをしている小寺英雄君は毎日こまめに、あるきまわつていた。検挙された同志の家をたずねたり、カンパをあつめたり、「赤救ニュース」のガリ版の原紙をきつたりしていた。ニュースをつくるにも、原紙をきるまえにまず下書きをつくり字数をかぞえ、ならべかたを考え原紙をきりながら時間がくればそのままにしてでゆく。かえつてきてからまたつづきをきる。まことにキカイのようだ。私はそんなまねができない。原紙に、ぶつつけにきつてゆく。ならべかたや長さなど「でたところ勝負」だ。いつきにやらねば

気がすまない。

さてそのときの小寺君のモップルのじごとは、それまでの同志の活動をまとめて点検するようなものだつた。小寺君がだすニュースで私たちは、まえの同志たちの活動もしごとができる。

「親を説得できないようでは、ひとを説得できないだろうな」と同志たちの家をまわつた小寺君はいった。

寺尾一幹君のお母さんは心よく他の同志のさし入れもやつてくれた。小寺君は自分で差入れ屋にゆけない。つかまるおそれがある。

市川忍君のお母さんは、むすこの「つみほろぼし」にと毎日こよみの紙をめくるたびにそれに銅貨をつぶんでおく。たまつたら、どこかに寄付するといつたそうだ。だれがこの母親を笑えるだろう。思想犯の家は近所からつめたい目でみられていた。

市川忍君の公判を傍聴にいつたときのことを小寺君は話してくれた。傍聴人がはいつたときは、すでに市川君が「絶対反対だ」とさけんでいた。看守におされて公判廷をでながら市川君は傍聴人にむかつて「諸君 日本共産党万才」といつた。小寺君も、のどもとまで「万才」がでかかつた。「万才」をさけんだとおもつてやめた。「そのあとすぐ宮島で自分はやられたのだから、あのとき『万才』をさけんでやればよかつた」と小寺君はいつた。

坪沼明治君の家に私は「消費組合ですが、なにかご用は」と時々いつた。おやじさんがいて「まあゆつくりして、ゆきなさい」とかたわらの新聞記事のきりぬきをとりあげた。いつも検挙された

同志たちの記事をそばにおいていた。「むすこたちは、なにもはずかしいことをしたんじゃない。政

治犯だから」としづかにいつた。そのつぎにいつたら、お母さんや姉さんもいた。あれこれ同志たちの話を聞いて「岡本の菊さんもケイサツでひどくやられたそうよ。あんたも用心しなさいよ」といわれた。

その岡本菊次郎君がのちに母親のことをこんなぐあいにはなした。

「もぐつていたころ、くうものがないと、自分の家のうらぐらからしのびこんで米ビツから米をとつてきたものだ。すこしづつだから気がつくまないとおもつたら、おふくるが握りめしと金をいたフロシキ包みを米ビツの上においてるじやないか。あのときはまいつたな」

家族たちもたたかつていたといえる。

玖島君のおやじさんは福島町のなかをうろついている特高の山中をみると「おどれ、おぼえとれ」といつた。山中は「いや、わしがやつたんじやない」といはれたという。特高係山中刑事はいつも、よれよれのきものをきて福島町をうろついていた。「ほいと」（乞食）などといわれても、へらへらわらつていた。昔は騎馬巡查だつたといふ。中国新聞の共産党検挙の記事の下にのつてある「殊勲の警察官」にならんでいる山中刑事の写真は口ヒゲをはやした堂々たるものだ。

「これがあの、ほいとか」とおもうほどだ。特高ケイサツも芸がこまかいのである。

「赤救ニュース」には木村莊重君の妹、右田美子さんのことものつていた。広島バスの車掌をしながら、兄やほかの同志の救援活動をしていて病

に倒れたとあつた。

ニュースにはまた天津せいさんの救援カンパを訴えていた。彼女は広島専売局の女工のころ共産青年同盟にはいり、検挙されたのちもひるまず活動をつづけ、救援会の仕事で同志の家をまわるうち特高につかまつた。しかし転向することを拒んで起訴されて獄中にいるとあつた。「はたちになるやならずの娘の子がのう」といつてカンパをしてくれた農民のおやじさんのことものつていた。高田郡で活動している南小一君たちからの報告である。

「赤救ニュース」には執行猶予ででてきた松本徹の手記がのつた。同志たちのことがかいである。「市川忍君たちがつかまつたのは空家で会議しているときだつた。市川君はタバコをいっぷくすつた。おちついた態度が印象的だつた。みんな逮捕され警察にゆく途中革命歌をうたう。子供たちが『やあドロボウがうたをうとうとる』というので、みな苦がわらいをした。

「市川君がケイサツの留置場にいるころ、古末憲一君が不審訊問にかかって、同じ監房にはうりこまれた。そこで一晩、再建のうちあわせをして古末君はあくる朝、なにくわぬ顔ででていつた」「寺尾君は留置場を脱走して大阪でつかまつた。きびしい警戒をどうして、くぐりぬけて大阪にでたかギモンであつた。彼は絶対に名前をいわないでケイサツは『大方宗太郎』（おーかたそーだるう）とよんだ」

松本徹のこんな手記が「赤救ニュース」につづけてのせられた。

事実とちがうところも多いが、特高がこれをみ

たらだれがかいたかすぐわかつたろう。執行猶予でそのころ出ていて、しかも事情をくわしくしているものとなれば松本徹しかない。特高は『赤救ニュース』を手にいれていた。丸川昇一君が小寺君にカンパした金額が『赤救ニュース』にのつた。「○×××」とあつたのをみてたちに丸川君が逮捕された。

松本徹が獄中で転向したということが外につたとき、まだ外で活動していた天津せいさんが「あなたが転向するというなら、私達の間もこれまでとおもつてくれ」とかいてやつた。

「転向したかとうたがうことさえ同志にたいする侮辱だ」と松本徹は返事をよこしたが、すぐ転向して執行猶予ででてきた。一方天津せいさんはそれとすれちがいに検挙され、松本徹の返事は彼女の手にわたらなかつた。

小寺君は彼女へのさしいれを松本徹にたのみにいった。徹はいつたんそれをことわつた。あとで消費組合の迫樹君のところにきて「天津のさしいれをしてやろうとおもうからモップルへ連絡してくれ」といった。

「ここは消費組合だからモップルのことはしない」と迫樹君はことわつた。しかし、ほつておけないから小寺君に知らせた。

こうして小寺君はしばしば徹とあうようになつた。徹の手記もそうして小寺君にわたされたものである。

のちに広島刑務所の第一独居のフロで私が小寺君とあつたとき「松本徹がうらぎつたんだ」と彼がいつた。

「信じられんなあ」と私はいつた。徹とは直接

つきあいはないが、同志を信用しなければ我々の活動はなりたたない。

「いや、これは確実なことだ」と小寺君はとなりのフロ場から、カベごしにいつた。

(4)

一九三三年（昭和8年）八月二八日、大阪で全國部落代表者会議がひらかれ、差別裁判糾弾闘争の第一歩をふみだすこととなつた。

八月二八日という日は、明治四年八月二八日太政官布告で部落民の称を廃止して、一般平民と同様にそろそろうこととした日である。じつさいは、これによつて兵役と納税の義務をおわせられたが、明治以来むしろ差別はつよくなつた。この日を闘争の出発点としたのは——いわゆる「原点にかえつて」その兵役と納税の義務を、差別裁判をとりきかないなら、免除せよといふのであつた。

差別裁判というのは、高松地方裁判所でおこなわれた裁判の判決文に、

「被告が部落民たる身分をかくして一般民の婦人をさそいだして同棲したのは、結婚誘拐罪にあたる」とかかれていることだ。

全国水平社の闘争方針は、差別裁判をとりけすため、大審院に対し非常上告の権限をもつ国会に請願をおこなうこと、この請願をおこなうために全国から部落代表者が東京の国会にむけて徒步で行進する、各部落に「部落闘争委員会」をつくり

広汎な部落大衆の参加する組織をつくること、などであつた。

「在郷軍人、消防団員は制服をきて請願隊行進に参加せよ」と指令をだした。

当局はあるいて行進することはデモ行進だと禁止した。代表者は「府県二名とせよ、通過する所で二日以上とどまつてはならない」といつてき。憲兵隊は軍服をきて行進するものから肩章と軍帽をはぎとつた。

九月はじめ広島市の己斐駅（西広島駅）に九州、山口の代表団がついた。駅でむかえた人々は、「万才」をさけんではならんと申しわたされた。請願隊の代表を先頭に福島町にむかう人々は、道いっぱいになつて進んだ。

デモ行進をさせたとあつては警察の責任になる。「もつとばらばらになつて、はなれてあるけ」「二、三人ひつこぬくか」西署特高主任の紺谷がかたをいからせ、番犬のようにうなりながら行列のそばをいつたりきたりしてた。

福島町は一千戸あるといわれ、全国でも大きな部落のひとつであった。この町の部落闘争委員会は玖島三一君を中心にして青年たちでつくられていて。前から水平社運動をしていた人も第一線からしおぞいでいるか、「まち」にでて店をひらいていた。

玖島三一君が請願隊の広島県代表としてゆくことになつたので、私が部落闘争委員会の書記になつた。関谷源一君とは週に二回連絡をとることにした。関谷君も小寺君も私も部落問題をまったく知らなかつた。関谷君は『無産者政治教程』をよんで

いたので、すこしはわかつてていたかもしない。

全国水平社本部は「部落闘争委員会は広汎な部落大衆の参加するものにせよ」といつていた。

そのころ本屋にうられていた本に「再建後の左翼労働組合運動」富岡波巖太著(プロパガンダ著)というのがあつた。たいていの同志がよんでいた。

それには「闘争を下からもりあげる」ということについてこうかいてある。

「大衆は自分のふところから組合費や闘争費をだして、はじめてその組織や闘争に関心をもつ」「現場の班とかグループなど小さな組織から闘争をつみあげてゆかねばならない」

「下からの闘争でゆこう」と青年たちでいいあつていて。

「これから闘争費用もだいぶんいる。毎日『一銭講』といって、一銭ずつないでいるのだから、そのついでに五厘ずつ費用をつないでもらう」としよう。

「そのためには、十講をひとつずつ座談会をやつてまわって、こんどの闘争のことを説明せになるまい」

「十講長のなかにも力こぶをいれとるものがあるで」

青年たちが「十講座談会」のビラをはつたり十講長たちに交渉したりした。そして毎晩講の人たちにあつまつてもらい差別裁判のはなしをした。青年たちが多くをいわなくて、差別のことはおじさん、おばさんのほうが身にしみてしつていることだ。となりの十講長が大いにかかることもあら。座談会の結果、各家から一日五厘ずつ、十日

ごとに五銭ずつ十講長があつめて青年会館の闘争委員会へもつてあつまることに話がおちつく。

職人とか労働者はかりすんでいる所は、わりあり版ですつて町内にくばつてまわつた。カベ新聞

い十講座談会や五厘カンパの話がうまくすすんだ。ところによつては、「かねもち」の家と「その日ぐらし」の家がまじりあつてゐるが、そんなどころでは、うまくゆかなかつた。

請願隊にくわわつて行進している玖島三一君からは毎日のよう報告がおくれられてくる。カーボン紙で二枚ずつ書いて、一部は全水県連幹部の中野繁一氏のところへ、一部は青年会館の闘争委員会あてに送つてくる。中野氏は玖島君の手紙をあちらこちら削つて青年たちの方にまわしてくる。

特高に文句をいわれそうなところはニュースにのせないようにといつた。青年たちは玖島君の手紙をそのままニュースにのせた。

「戦争反対」(当時全国水平社本部の出版物には「満州事変」を「満州強盗戦争」と書いてあつた)「労働組合そのほかの民主団体との提携」「封建的な身分制からくる差別観念の撤廃」(天皇制があるから部落民ができるのだと全水本部はかいていた。)

これらの文句をかかないようにしよう、弾圧されたら、もともこもなくなると幹部たちはいつた。当然青年たちと幹部は対立した。

全國水平社本部からはつぎつきとビラやポスターがきた。「差別裁判取消さねば兵役納税の義務を免除せよ」「華族士族があるために、おれらの差別がなくならぬ」というポスターは特高がとりあげにきた。そんなものは來ていないと特高をおいかえして、あとで町中にはりまわした。フロ屋の

おやじは「あそこへはつたらよくみえる」と姿見のかがみをさした。

『差別裁判糾弾闘争ニュース』を青年たちはガリ版ですつて町内にくばつてまわつた。カベ新聞

もつくつてはりだした。

青年は靴工が多かつた。神崎市宇市君のように

まつてきた。ガリ版すり、ビラはり、時々会議といそがしい。青年会館はほんとに、わかものの会館で、横川町のタビのコハゼ工場にかよつてゐる娘たちが裁縫をやりにあつまつてくるから、毎晩

ワイワイ、ガヤガヤと、わかさではちきれるようだつた。そこへ十講長のおじさんたちがやつてくれ。われわれのかくビラの文句をみて「何々しろ」などといふのはいけんな、「何々しましよう」となせかかないのだ、などといふものもある。

青年たちは「なにをバカなことを」という顔をして、「こうかんと力がはいらん」という。おじさんのいうのがほんとうで、いまは『赤旗』も「あります調」になつてゐる。しかしあのころは左翼の文章は「かたひじはつた」ような文章だつた。そのころ私はニュースのガリ版の原紙をきるときは、できるだけかなでかくようにしていた。みんなが仕事についている昼間のあいだは私が闘争委員会のしごとをする。書記の給料は五円で、満田峰夫君の家にその金で「下宿」した。そのころでも二階がりの間代は五円くらいとられた。例の「五厘カンパ」で紙代やのり代、常任費もまかなかつたわけだ。大口の寄付金などなかつた。

玖島三一君は請願隊行進からかえつてくると、

本部からもらつたといつて「水平社解消意見書」というガリ版のとじたものをみんなに配つた。それ

をよんでみると、「かつて熱心な活動家であつた人々も、いまは商店主や中小企業主になり、そして運動の幹部になっている。その小市民的意識か

ら水平社第一主義という日和見主義がうまれる」「部落民はすべて兄弟であるという考え方では部落内の階級対立を、おおいからこうとするものである」「水平社運動は階級闘争の基本組織にとつて障害物となつてゐる。部落内の労働者は労働組合に、農民は農民組合に組織されねばならない」

私の注意をひいたのはこんなところであつた。機械的な考え方だなどそのときでもおもつたものだ。

玖島君は「解消意見書はあやまりで、水平社運動は階級闘争ではなく、部落民という身分層の闘争としてみなければならぬ」ということになつてゐる」と説明したが、その意味の文書はこなかつた。

「身分闘争に関するテーマ」という表紙の、日本紙にガリ版すりのものは一九三四年四月二六日に検挙されてから、東署特高室で表紙だけみせられた。「こつちはこんなものまで手にはいっているんだ」といつたが、なかみはみせなかつた。

差別裁判糾弾闘争は福島町では五厘カンパといふ闘争費用の定期的カンパまでいったのに、そのあと大衆団体に組織するまでの時間がなく一齊検挙がきた。

(5)

「戦争反対の闘争がやられていない」。関谷君は上京して、こういう党中央の批判をもつてかえつた。一九三四年（昭和9年）になってからだとおもう。

「帝国主義戦争絶対反対。日本共産党広島県オルグ会議」と騰写版で赤インキですつたポスターを小寺英雄君がつくつて、これを手分けして広島市にはつてまわつた。

商業新聞には「さきに呉市内において『第二うなるクレーン』というビラがまかれたが、犯人がまだ逮捕されざるに廣島市内において不穏なポスターがはりだされた」とかいていた。

『第二うなるクレーン』は広島市で小寺英雄君がガリ版でつくつて呉におくつた。時には関谷源一君が呉にもつていつてまいだ。こちらで桃色の封筒にいれてから、もつていつたこともある。門のまえでこれをまいて、すぐにつけてみないで、たいていポケットにいれてはいる。脱衣箱のところくらいで、あけてみるだろうといふねらいだつた。かえるときは列車にのつたらあぶないので、山のなかに入つて夜をまつてから歩いてかえつた。

『一九三二年テーマ』をガリ版にきつてのこしておこうと、関谷君がもつてゐるボロボロのパンフレットを私がプリントして『洋服地の裁ち方』という茶色の表紙をつけてだした。

特高の追及もきびしくなつていた。

関谷君は「東京へいつてみたらおれの逮捕状がでているといつていた」といつた。彼はスペイをつかまえて首をしめたことがあり、そいつがケイサツに訴えたのだといふ。

小寺君は東京からスペイらしい奴がきたといつた。それによると、赤旗の配宣係といつてきた男がそれらしいという。関谷君は信用して広島の状勢をその男にはなしたが、そのあとで東京から、スペイがそつちにいつたらしいから用心しろといつてきただろう。

郵便局の小川正一君が連絡にこなくなつた。関谷君と私が横川町の小川君の家にいつてみた。おやじさんがでてきたが領をえなかつた。郵便局の同志もケイカイがきびしくなつて、うごきがとれないのだった。

〔注〕 4・26 検挙発表の新聞記事によれば、すでに特高の監視がつけられていたのだ。横川橋の下で刑事がひそんで小川君を監視していると船頭さんがあやしんで「泥棒 泥棒」とどなつたといふ。

岩国の人絹工場でも、ビラを外から流しこんだので中に入る同志がうごけなくなつてゐた。この工場の組織をつけもつて三戸信人君は東京へでていつたが、まもなく検挙されたといふしらせがきた。

一九三四年（昭和9年）三月だつたか、作家同盟の国木金夫君（堀哲二）と山本タキエさんが憲

兵隊に検挙された。しかしまもなく釈放された。

一斉検挙がちかいとおもわれた。つかまつても私は転向しないつもりだつた。福島町の青年たちや、おじさん、おばさんに共産党とはどんなものかみてもらわねばならん。

そのころ私は党員ではない。多くの同志もそうだつた。しかしみな党のためにはたらいた。しかも大衆のなかではたらき、大衆におしえられてきた。

いまが、「わたしの大学」だ。私は広島高校一年中退だつた。

四月二六日広島市で一斉検挙が始まつた。

私は広島消費組合でねているところを追跡監査君、藤原勝美君とともに東署に検挙された。

東署では私の中学校の卒業記念アルバムからきりぬいた私の写真をつけられた。私はそのアルバムをもつていなかつたら、ほかのだれかのものから、きりとつたのだろう。玖島三一君、神崎宇市君、小寺君、それから関谷源一君の写真、いづれも警察でうつしたものだ。南小一君、大塚猛夫君の写真もある。

「消費組合の事務所にあつた文書は全部おれのものだ」と私がいふと、である、であるわ、よくこれほど迫樹君はためこんでいたものだとおもつた。

たらいまわしという奴で、ほかの署にいた同志が東署にまわつてくる。消費組合の達木幸太氏、茂渡義人君、広高生季英俊君、大男の周了龍君、朝鮮青年会のリーダー金弼東氏などもきた。そのうち広島高校の生徒がいっぱい、ひつぱられてきた。留置場の監房にはいりきらないので、

あとは道場にいれられた。

郵便局の小川正一君が縊死をとげたことがつたえられた。高校生の吉本康二君の死をしたのは私が一九三八年・昭和一三年に出獄してからだつた。

その二 二独居・五舎

(1)

一九三四年（昭和9年）八月のあつい晩「吉島町五〇番地」におくられた。広島刑務所である。

四ヶ月のあいだの留置場のにおいがしみついたコール天の服をぬいで、青い獄衣にきかえてほつとした。未決拘留のあいだは青で、刑がきまると赤いきものになる。

裁判がおわるまでは刑務所のなかの拘置所におかれる。独房にいれられて、ほかの同志にあうことはない。毎日の運動も看守つきで、ひとりである。週二回くらいのフロも、ひとりづつ、板かべでしきつてあるせまいフロ場である。予審がすむまで面会も手紙も禁止である。

神崎宇市君の名前で本のさしいれがあつた。いまおぼえているものはつぎのようなものである。

日本経済史（黒正巣著）、経済学全集のなかの租税論及び統計学、日本書記上巻、ダンテ神曲のホンヤク、藤森成吉の小説集「鳩を放つ」、ドイツ語文法教科書などである。

さしいれの本は刑務所で検閲して、左翼的なも

のはいれない。ただし統計学という本は検閲でみおとしたわけだ。その本の中の「統計の理論」という論文には「唯物弁証法をしらなければ統計の原理は理解できない」とあって、数学の理論から

「偶然的なものは必然的なものである。必然的なものは偶然的なものである」という論理をみちびきだしている。弁証法は唯物弁証法が正しいことをレーニンの『唯物論と経済批判論』の文章を沢山ひいてのべている。

この『統計学』のはじめが勅任教授の論文だし、そのつぎがグラフや微積分の数式をつかつた統計の数学の論文だから、まさか中のほうに左翼文献の引用があるとは思わなかつたのだろう。

ドイツ語の文法教科書は私が神崎君にたのんでいれもらつた。高校生からでもかりてくれたのだろう。一年以上未決にいたから暗誦するくらいよんだ。

いまからおもえば聖書をよんでおかなかつたのはおしかつた。社会にでてからでは、あんな退屈なものが、よめるわけがない。しかし外国のものにはマルクスのなかにさえ、バイブルのことばができる。

裁判はあくる年、一九三五年（昭和10年）四月だつたとおもう。ひとりづつ、傍聴人もいれない裁判だ。判決もきまつてゐる。目的遂行罪で三年の刑だ。転向しないのだから、まけてくれるわけもない。

できるだけ大声で検事の起訴状に反論してやつた。しばらくすると裁判長が「ちよつとまで」といった。「敬語をつかつてはなせ」という。

「敬語はつかわん。もう、裁判長とはものをい

わん」といつておしまいにした。

判決の日裁判長は、むくれたような顔で「懲役三年、未決拘留通算一八〇日」といつて、「なにかいうことはないか。なければこれでおしまいにする」とさつさと立ちあがつた。裁判所の側が予審をほつたらかしにしていたのだから刑期三年から半年さしひいたわけだ。

控訴審では傍聴人もいた。こんどは裁判長は、敬語をつかえといわずに私の「演説」をきいた。

敬語を要求したら、こんどは腹をたてないで、階級的政治犯は裁判所にたいして敬語をつかわないと堂々と論争するつもりだった。

控訴判決は一審通りだった。ただちに上告して上告趣意書をかいだ。それまでの活動をふりかえつてみるよい機会だ。それ以外のことでは筆をとつて、ものをかくことは許されなかつたのである。一九三五年（昭和10年）十月上告棄却。これら二年半は、手紙をだすこともできないし、面会にくる人もない。私はひとりでみよりもないからである。もちろん本をさしいれてもらつてよむこともできない。

(2)

一九三五年（昭和10年）秋、拘置所から第一独居にうつった。第二独居というからには第一独居もあるのだろうが私はどこにあるか知らない。すこしのあいだ四舎にいてそれから五舎にうつった。五舎ではいちばんはしの四一房に入った。四

二房は物置きである。北側で日がささない。

私の独居房の扉に「厳正」という札がかけられた。これは級外のとりあつかいである。受刑者はその成績によつて、一級（シモフリの服）二級（青いきもの）三級（赤い新らしいきもの）四級（赤いきもの）とだんだんになつてゐる。普通の受刑者は入つたときが四級である。その下に級外

というのがある。犯則をしたものである。独居房にいれられる。その下がまだある。手のつけられないものとみられると「厳正独居」の処分になる。

思想犯は入つたときが「厳正独居」のとりあつかいである。入浴運動すべて看守つきで、ひとりである。転向を申しでると、すぐ新しい赤いきものにかわる。それから青いきもの、シモフリの服とあがつてゆく。転向したといわぬものが「厳正」の札をかけてこの第二独居の五舎にあつめられている。この札をかけているところは同志だともつてよかつた。

すじむかいの四房に「厳正」の札がかかつてゐる。むかい側は南だから、日あたりがよい。病気のようであつた。

朝おきると看守が「ゴミだし」とどなる。みんな独房のなかのゴミを扉のところまで、はきよせておく。看守は北側なら北側の各房の扉を順々にあけてゆく。中のゴミを手早く廊下にはきだす。看守が順々に扉の鍵をかけてゆく。そしてこんどは南側の扉を順々にあけてゆくわけだ。

むかい側の四房の扉のあくのを、こちらの扉の扉のぞき窓からみているとむこうの若い男はゴミを掃きだしてから、手で空中に「K、P、か」とかいてみせた。「そうだ」という。看守が扉を順々にあけてゆくわけだ。

にじてきた。

私はマツチの箱をはるしごとをしている。はつたものをのせる長い板が何枚もある。青い紙も沢山あつた。青い紙をほそながくちぎつて、長い板にはりつけて文字をつくる。つきのあさ、こつちの扉があいたとき、それをむかいの扉にむけてみせた。「了解」のあいづがあつた。むこうは空中に手で文字をかく。私は長い板で「通信板」を何枚もつくつて、むこうにみせた。

おたがいの経歴、むこうのしらない社会情勢や、出獄する日も知らせあつた。かれはそれをおぼえていて、私が出獄する日刑務所から彼のハガキをわたされた。入獄中にきた肉親以外の者の手紙類は出獄のときまで本人にわたさない。出獄の日の一曰まえにそのハガキはきていた。小倉市のつとめさきと椎野悦郎の名が書いてあつた。

私の房のひとつおいてとなりが金明文君、そのまたひとつとなりが岩村大次君、そうしたぐあいに、ひとつおきの房に古末憲一君、そのほかに日本金夫君、木村莊重君とみな北側の房にならんでいて、いちばんむこうのはしが小寺英雄君であつた。椎野君は胸をわるくして日の当る南側の房にいたが、まもなく病舎にいつてしまつた。

岩村大次君はエンピツでちりがみにかいだレボをときどきくれた。雑役をしている受刑者にたのめば食器口からなげこんでくれる。私はエンピツはないが字をかくことは工夫していた。それで返事をした。

かれはじぶんの経歴をこうかいていた。

「中学を卒業して国鉄にはいり早くから党活動に尽悴し上京してのち紺野与次郎氏の指令で国鉄

の連絡をとつてゆく『渡り鳥』となり山口県で活動中検挙された」

かれは古末憲一君に反感をもつていた。その理由を聞くとかれがハンストをやつたとき古末君がいつしょにやらなかつたからだという。私は「獄内でお互の悪口や中傷はよくない」とかいてやつた。つぎにフロ場でとなりになつたとき、岩村君は「一方的な判断で批判されはこまる。椎野君にもきいてくれ」と、えらいケンマクだつた。私は岩村君がきらいになつた。私は古末君にも岩村君にも、つきあいはない。ハンストをやつたといふときも私はまだ第一独居五舎にきていない。しかしお互にこの不自由な独居にとじこめられていくとき、こんなことをいうのはいけない。もちろん椎野君にもきくつもりはなかつた。

私は文字をかくのにはこんなことをした。そのころ靴下のかがりをしていたので針がある。受刑者によませる「人」という印刷物がある。「人」という印刷物の白いところをきりとつて針で字をかく。房のなかにはアルミのヤカンがあるが、それに紙をこすりつけると黒くなつて、針でかいた字だけ白くのこるわけだ。鉄筆で原紙をきめるようなものだ。かなり小さい字でもよめる。それでレボをかいりメモをとつたりした。糸でとじてメモ帖もつくつていた。今まで、みつけられなかつた。しかしでるときは、もつてでられなかつた。

我々が字をかくということは犯則であつた。なにをメモしたかといえば「ことばと文字について」であつた。房内に一冊づつある漢和辞典や教悔師から貸しだす「言海」「広辞林」「英和辞典」などかたづしからよんでいた。「ドイツ語辞典」がみ

たいが、ないといわれた。ドイツの学者はラテン語であらわされたことばをドイツ語で書きかえるように長い間努力しているからだ。

私は中学三年生のとき国語の先生から「かな文字主義」のことをきいた。広島高師の図書館にはカナモジ会のニュースがあつた。それから、すこし大きくなつてから、「レーニンがやさしいことばの字引きをつくつていた」というのをよんだ。左翼の機関紙や文書がよめないのはどうしてか」というのもきいた。

そんなことから「ことばというもの」には関心をもつていた。

二年半の独居生活は字引きをよんでもらした。広辞林などをよむと「はなしことば」というものがずいぶんゆたかなものだとしつた。

「しことはサボらなかつた。ダランとしていると、あたまがぼける。ノルマの二倍くらいやつた。手先が器用なせいだ。ノルマの一・三倍で週一回ボタ餅、ノルマの一・八倍で週二回ボタ餅をてくれた。

金明文君は房のすみにたたんである、ふとんのあいだに頭をつつこんでねていることが多い。看

守もあまりとがめない。たまにいつしょに運動にでることもあるが、かれはぼんやりしゃがんでいるだけだ。朝鮮人青年会でやつていた夜間小学校

で金明文君は先生をしていて子供たちに祖国のことばや歴史をおしえていた。

金君の刑期二年半がおわるころ教悔師がきて、「でたら、どこにゆくか」ときくと「ここにいる」とこたえた。「きてあるものはあるのか」ときくと「これをきてある」と金君は自分の獄衣をつまん

でみせたと雑役の受刑者がしらしてくれた。厳正独居の思想犯のきている獄衣は、あらいさらして赤い色が白くなつてているきものだ。社会では雑巾にもしない。教悔師にそれをつまんでみせたのは、たくまさる皮肉だ。金君が出獄して、どこにいつたか朝鮮の同志も知らない。

解放運動無名戦士の碑にいれるべき人かもしない。あるいは祖国にかえつてあの人によい笑いをうかべているかもしれない。そうあつてほしいとおもう。

国本金夫君がどこからか2・26事件のことをきいたらしく、私の房のまえにたつて、てみじかにはなしてくれた。日曜日には独居のものも講堂で説教をききにでることができた。私はでたことはない。みんなかえつてくると房にはいるまで、しばらく混雜する。それにまぎれて国本君が私の房の前で2・26事件のことを話してくれた。国本君のいる房は、ずっとはなれいでいるので、それまであわなかつた。そしてそれがことばをかわした、さいごだつた。一九三八年（昭和13年）二月に出獄したという彼は

五年目に出で來た俺れに

昔の友がなみなみと注いでくれた酒

唇へ 咽喉へ 腸へ
しみるうまさ

という短歌をのこしている。しかしふたたびあうことはなかつた。

国本君は第二独居では木村莊重君の房にちかかつたという。国本君は不器用でノルマがあがらないから、木村君ができるがつたものを国本君にまわしてやつて、ノルマ一・三倍になるようにした

という。「一人三分」になると週に一回ボタモチをくれるからだ。

木村荘重君ともたつた一度だけことばをかわしただけだ。一九三七年（昭和12年）のおわりごろ

フロで「あしたでます。元氣でやつてください」と木村君が声をかけた。

木村君のはなしでは獄中で国本君にすすめられて短歌をつくるようになつたという。

国本金夫君の遺稿歌集『愛情の歌』が出版されたとき、木村荘重君からも歌がよせられていた。

古末憲一君とは房がちかいのでよくはなした。

散髪のときは廊下に雜役の受刑者がイスをおいて独房からひとりずつでて散髪する。イスをおくのは私の房のまえだ。古末君は散髪がおわると私の房のまえで頭をフケトリでゴシゴシかきながら立つてゐる。私はのぞき窓に顔をだして彼と「世間

ばなし」をする。看守もたいてい大目にみていた。小寺君とフロ場であつたとき、松本徹のうらぎりについて知らされたことはまえにのべた。

(3)

「事變にたいする感想はどうですか」ときいた。
「別にありません」私は仕事の手をやすめないでいった。

「というと、日本が早くまけりやあええと、い
うところですか」

教悔師はこんなことをいつた。はなしが、おもしろくはこぼうとしたのだろう。

「そんなんところです」というだけにした。「字引きしかよまないそうですが、どうしてですか」はなしの、つぎほにこまつて教悔師はいつた。「ここで科学的なものは字引しかありません」

教悔師は話につまつてしまつた。

「ところで、あなたが満期で出所するときのことですが、鳥取県のおばさんの所で、前非をくいて、かえてくるなら、あたたかくむかえるとい

あつた。「別荘」だからこそ「おれは転向しない」とうそぶいていられた。ひとあし、そといでたら「転向しないとは、どうすることだ」と自分にきかなければならない。

戦争がはじまるときりぬいたものをボール紙にはりつけて、まわしてくるようになった。新聞の戦争記事をきりぬいたものをボーラー紙にはりつけて、まわしてくるようになつた。新聞の戦争記事をきりぬいたものをボーラー紙にはりつけて、まわしてくるようになつた。新劇俳優の友田恭助の戦死が「転向者 友田伍長の殉國美談」としてのせてあつた。地下の友田氏も苦笑していることだらうとおもつた。はりつけてある新聞記事をはがしてみた。林長一郎が顔をきられたとある。タップダンスの中川三郎の公演広告があつた。社会のにおいを、かすかにかぐ。めしつぶではりつけて、つぎにまわす。

ある日私の独房の扉を看守があげた。入口に教悔師がたつていて。

「事變にたいする感想はどうですか」ときいた。
「別にありません」私は仕事の手をやすめないでいった。

この会議というのは裁判所にならつて、裁判官役は所長か所長次席（典獄補とよんでいたが高等文官試験をとりたてての若い男）検事役は看守長、弁護士役は教悔師である。

典獄補というのは広島高校のころには寺尾一幹君が「かれは研究会にもきていたはずだ」とのちにいつたような男、看守長は広島高校で同じクラスだったがサッカーバッカやつていて高文をとりそこねた男だった。

その日の「懲罰会議」はこれらの男が、しかめつらしい顔をしてすわつていて全員の三文オペラだつた。

看守長が「本人のやつたことは全く陰険悪辣……よつて減食一分の一、運動停止三日間を至当とおもいます」と典獄補に一礼。

弁護士役の教悔師がたちあがつた。「本人は出所後、おばのところにかえることを拒否しております。肉親の愛情を感じないものといわねばなりません。また本などは全然よまず、字引ばかりよんでもいるという、どうもしまつにこまる人間で……よろしく」

この三文オペラで、いちばんまじめにやつたのは教悔師だろう。

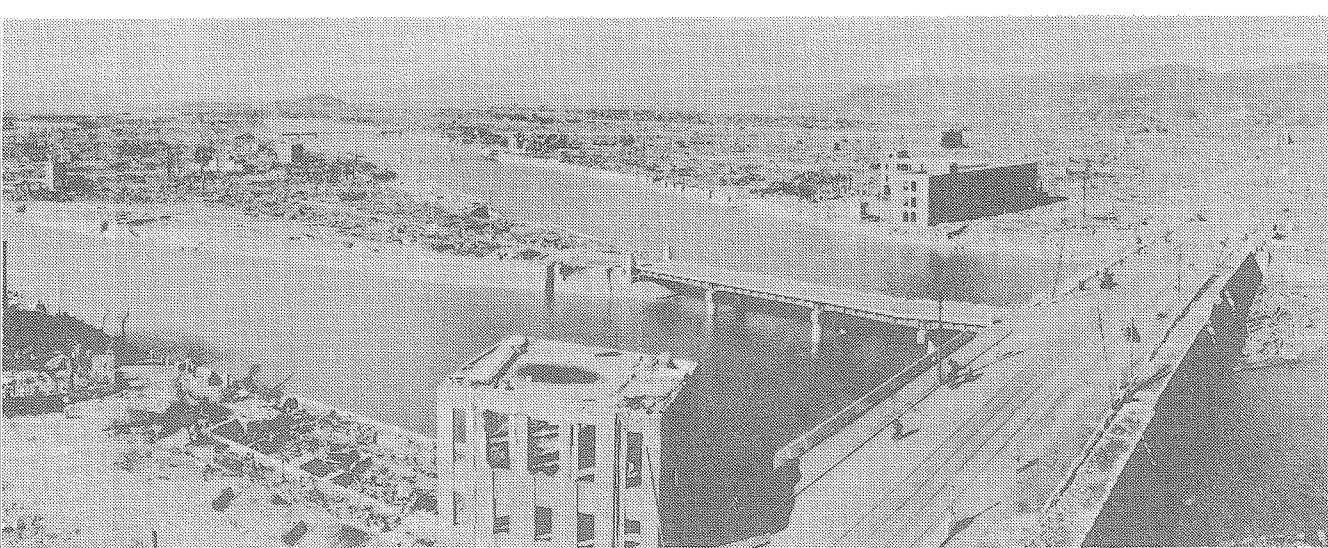
一九三七年（昭和12年）の秋になると看守の人

つていますが」「いらんことを、しないでください。おばのところにはかえりません」、かれらの、きたない手で、私のみうちにさわつてもらいたくない。

教悔師はきまずそうなかおで、かえつていつた。

この教悔師はあとで私にシッペガエシをするチャンスにありついた。私は犯則ということで「懲罰会議」にひきだされたことがある。

この教悔師はあとで私にシッペガエシをするチャンスにありついた。私は犯則ということで「懲



(1985年4月15日林重男氏提供・無断転載せぬこと)

手不足もあって「厳正独居」の思想犯を、いつしよに運動にだすようになつた。古末君は、かけ声をかけて三段とびをしていた。私は運動時間いっぱい走っていた。

一九三八年（昭和13年）五月三日私は出獄したとおもう。一〇日ぐらいあと岩村君がでてきた。私は日雇労働者をしていてが休んで出迎えにいった。刑務所正門のちかくの官舎の出入口から力スリのきものをきた典獄補がでてきた。「所長に面会するなら早いほうがいいですよ。また出張でいなくなります」そういうつて町のほうにいった。今は

日は日曜日でやすみなのだ。私は入獄中から、とりあつかいのことについて所長に面会を申しこんでいたのだ。

それからまた十日ぐらいあと古末憲一君の出獄

をでむかえにいった。

一九三九年（昭和14年）一月小寺英雄君ができた。私は門司の工場ではたらいていたが、休んでむかえにいった。その夜は宮島の小寺君の家で、ひとばんとまつて、渡辺信樹君もまじえて、三人で、松本徹のうらぎりそのほかのことについて、はなしあつた。

その三

(1)

「戦後」というものも、すでに遠い思い出になろうとしている。

一九四五年一二月のくれ、私は岡本菊次郎君とふたりで原爆あと広島市にやつてきた。私のせおつたりユックサックのなかには「赤旗」再刊第一号がはいつていた。ポケットには二千円はいつている。むかしの同志をさがしだすまで何日でもここで、がんばるつもりだった。

岡本君とは京都の新聞会館でひらかれた「戦争犯人追及人民大会」の会場入口で、ばつたりであつた。私は一九四五年（昭和20年）四月東京蒲

田の工場地帯で空襲にあり、本籍地——といつても親の故郷というだけだが、鳥取県米子市の工場にて、一月にやつと京都にて町工場の旋盤工で働いていた。

岡本君は東京から京都の会社にかわっていたのである。かれはいつた「原爆で広島の連中はみんな死んだらしいぞ。このあいだ広島にいつたが党のポスターらしいものは一枚もはいってなかつた。仁井教の戦災者同盟のポスターしかなかつた。」

ともかく、いつてさがそうと、ふたりは二〇代のはじめにかえったように、はりきつて相談した。私は町工場の旋盤のじごとをなげだし、岡本君も女房子供を疎開させてあって気にかかるが、そのままにして広島にゆくことにした。

そのころは徹夜してならんでキップをかうときだ。「右の者は日本共産党員にして、左の目的をもつて左の区間を旅行することを証明する」という

1945年10月7日 撮影 林

京都地方委員会の証明書をもつて駅長室にゆくと、「こわもて」がして、すぐキップをうつてくれる。

共産党員であるという証明書がテレくさかつた。戦時中の生きかたを考えると、その資格があるとは自分でも思えない。

敗戦の年、一九四五年のくれのころの広島の町のすがたを、あらためてここにえがくまでもないだろう。

八丁堀の太陽館のドーム（まるやね）の鉄骨がアメの棒をたばねてねじったように、空につきたついたのを、おぼえている人があるだろうか。

「ゆめをみとるようじや」とそれをみあげながら岡本君がいった。「アメリカ兵のやつが、あれをよろこんでうつしてゆく」と、そばにいる人がいつた。

あたりはま蜃というのに、ジーンと耳がなるほど、しづかである。
「おゝ、いきとりんさつたか」という声がする。道路のまんなかで、ゆきあつた一人があいさつしていた。

岡本君がいった。「生きているのか、というのはおかしなアイサツにはちがいないな」。しかし心にしみることばだ。

わたしたちのほうは、わけあとをあるきまわつても「おゝ、いきとつたか」という同志にあうことうがきなかつた。

それにしてもみんなどうしたんだろう。敗戦の日がきたらと、まつていたのだが。今どこでも立ちあがっている。この広島には一枚のポスターもはつてない。東京の党本部にこの町からハガキ一

枚だしたようがない。京都地方委員会できいたとき、大会には広島県から二名の代表がきていたといふ。しかしそれは三原市あたりの人間だった。

戦災者同盟のボスターがはつてあつたが、広島市觀音町仁井田教一とあつた。そこへいつてみたが「ニイキヨウ」君はいなかつた。

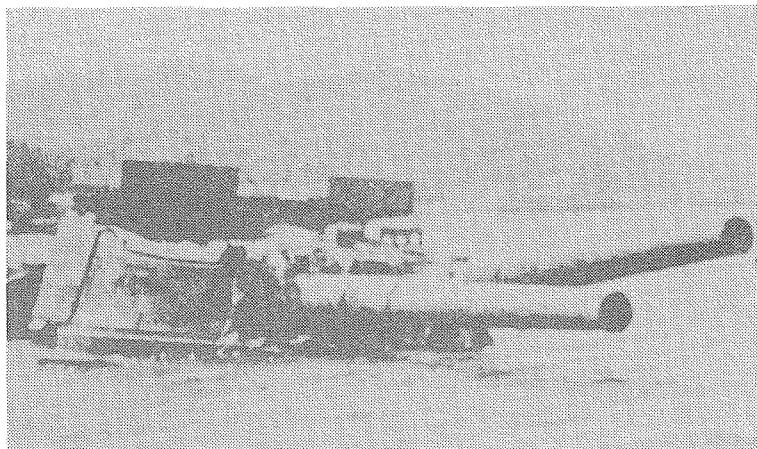
宮島にいったら小寺英雄君がいるかも知れないと、岡本君とはなしあつて、宮島ゆきの列車にのつた。駅から宮島への連絡船のりばにゆくところで、岡本君が一人みつけた。宮島からかえるところだという人だ。中村氏といつて戦前人絹工場で岡本君と働いていたという。岡本君はさつそく住所をかいてもらつて、三原市からきた庄田忠二君、岡田重夫君、それに玖島三一君、神崎宇市君、岡本菊次郎君、そして私とで会議をひらいた。玖島三一君を追加して、岡田、小児山、玖島三人を立候補者としてすることにしたわけだ。

しかしこれはあとのことで、まだ岡本君と私はだれのことも知らない。

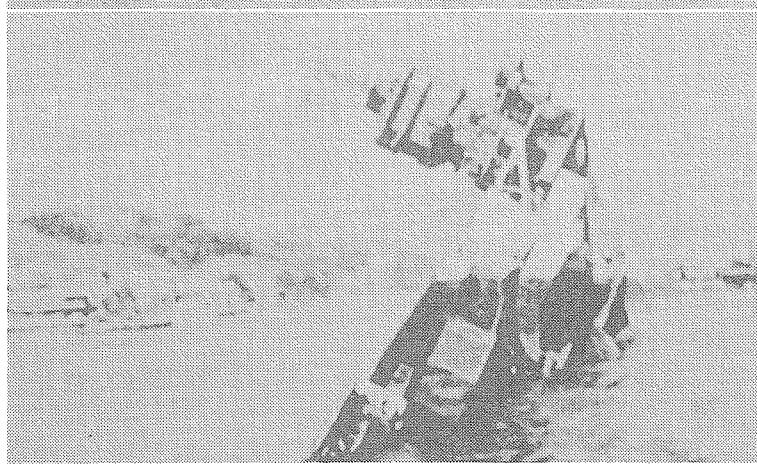
宮島にいってトウフ屋をたずねると、小寺英雄君はいきていた。八月六日広島市のつとめさきを休んだので、たすかったのだという。高橋まつ子さんと結婚していることをしつた。渡辺信樹君もやつてきた。京都からもつてきた『赤旗』再刊第一号をここではじめて、ひろげた。

神崎宇市君がいきていることを小寺君がおしえてくれた。福島町南通りだという。

福島町本通りの松の木にみおぼえがあつた。そのうちの一本はてっぴんから煙をふいている。幹のうつろに火がはいつたらしく、ピカドンのとき



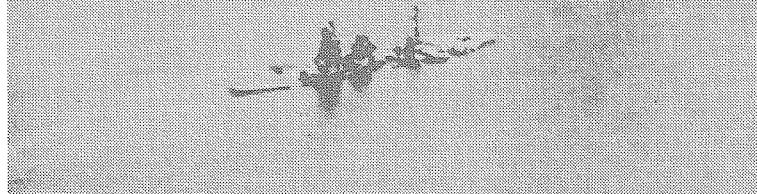
戰艦伊勢



空母天城

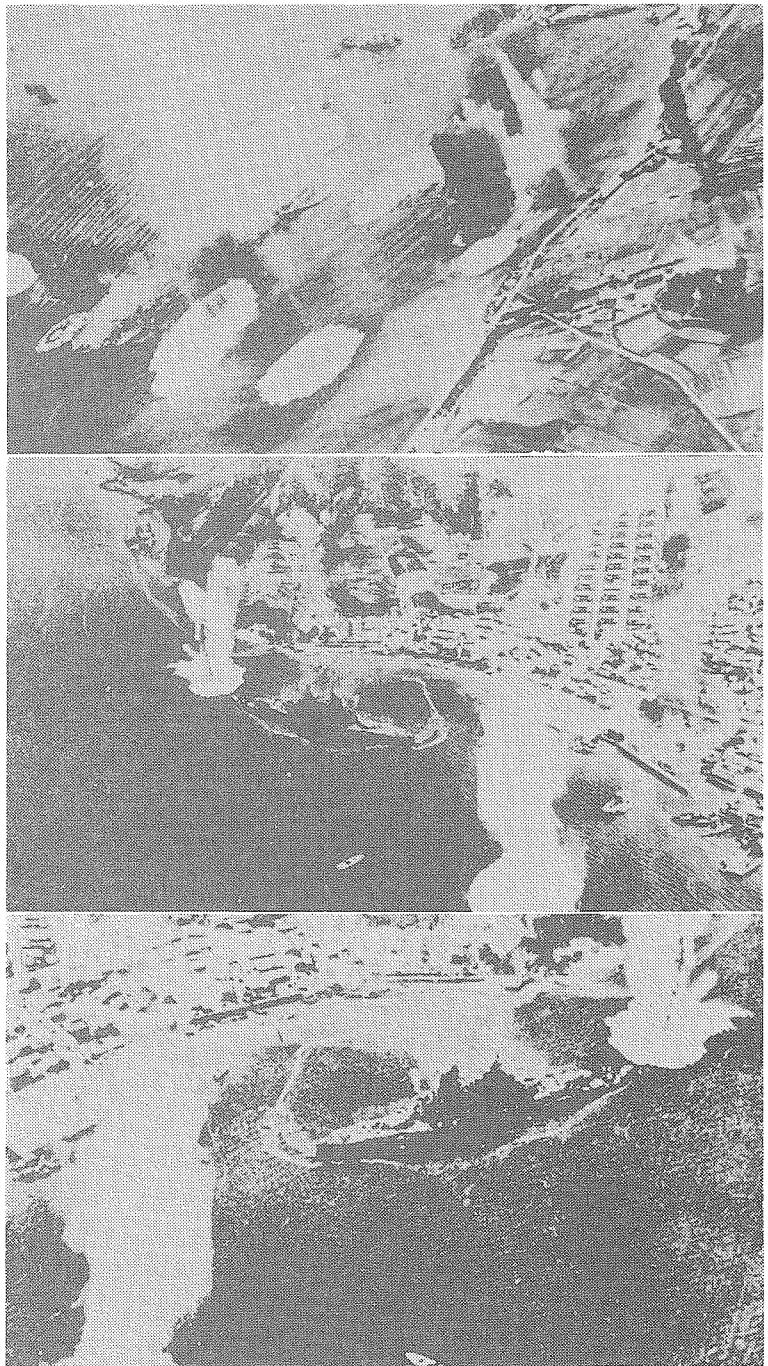


戰艦日向



練習艦出雲





提供 呉戦災を記録する会

三省堂「日本の空襲」(7巻中四国編)

1. 沈んだ軍艦。

撮影 1946年3月米戦略爆撃調査団

2. 呉軍港空襲。

3月19日呉軍港。5月5日広11空廠。6月22日呉海写工廠。

7月1日呉市街焼夷弾攻撃。

7月24日～28日呉沖海戦、軍艦全滅。

から煙をふいているという。

その夕方あつた神崎宇市君は「ピカドンの日は広島におらなんだ。あくる日もどつてきて、うごきまわるうちに放射能にやられて、しばらくねこんだ」といった。

玖島三一君はいなかに疎開しているが、ときどき広島にでてくる。連絡がきたら、知らせてくれといつて。あしたくらいでてくるだろうと神崎君はいつた。

岡本君と私は神崎君のバラックにとめてもらつて玖島三一君をまつことにした。神崎君のところには私たちだけでなく、のちには庄田君、岡田君、南有田君などいろんな人がざこねをしたものだ。二日目くらいの朝はやく玖島君がやつてきた。『赤旗』第一号を彼のまえにだと、しばらく、ものもいわないでみていた。岡本君が総選挙に共産党から立候補するようにすすめた。「しばらく考えさせてくれ」と彼はいつた。

三原の広島地方委員会（まだ県委員会とはいつていなかつた）から、まもなく庄田忠二君と岡田重夫君がきた。はじめ庄田君ひとり、あとで二人できただとおもう。私たちが広島から本部にだした報告を、本部から三原の地方委員会に連絡したためだ。庄田君は地方委員会の事務所を広島市につしてもよいといった。しかし原爆との広島はそれどころではなかつた。庄田君と岡田君が三原からきて廿日市の中村氏宅で会議をしたことは、まえにのべたとおり。岡田重夫君が委員長、庄田忠二君が書記長のようだつた。

そののち三原の海岸べりの、小児山富恵さんの妹さんがいる家で会議があつた。広島から玖島君、

神崎君、岡本君、私がいつた。吳から中村定男君がきていた。広島刑務所第二独居五舎であつてから久しぶりであった。小見山さん、山代巴さん、徳毛君たちは、はじめてあつた。戦前広島市でやつていた私は東部の同志をしつていなかつた。

せいぜい竹原から広島市にでてきた山本タキエさんはしつているだけだつた。広島市にも戦前の同志たちはいきていた。南小一君は市役所のやけあとでがんばついていた。ひとばん南君とコンクリートの床の上でたき火をしてはなしあつたあと、暗くなつた広島の町をあるくのは、あぶないので机の上に毛布をしいてねることにした。南君は毎日そうしているといつた。

中川秋一君にも道でゆきあつた。中国新聞にいふことだつた。市外から列車通勤しているのであつた。その夜神崎宇市君のところを訪ねてくれて、ひとばんとまつていつた。

田谷春夫君も生きていた。一九四〇年（昭和10年）八月の新協劇団後援会一斉検挙のとき胸をわるくして療養所に入つたときいた。己斐の町の小屋がけの芝居の木戸口で、中折帽に長靴といふかつこうですわっていた。義兄が興行ものをやつているのだそだ。

「このあいだA映画館に用事があつていつたら」と田谷君がいつた「事務所の机の上に赤旗がのつとるじゃないか。中村さんにきいたら神崎君がもつてくるのだといつた。こっちの方のいみでもよろしくと中村氏にいつといたよ」。

広島電鉄にいた井上栄君とも「斐の町であつた。水道工事の店にはたらいでいるといつた。彼も新協後援会事件で検挙された一人だ。

丸川昇一君は十日市町のやけあとにバラックをたてて印刷屋の店をひらいていた。そこへよつてはなしていると「わたしをおぼえていますか」とはいつた人がいる。古田稔君だつた。

古田君は木村莊重君とともに「そびゆるマスト」5号、6号をつくつた人だ。——連隊入営直前に検挙され、入獄一年ののち朝鮮の79連隊に入つた。戦場で胸と右手をうちぬかれて後送され広島陸軍病院から西条の療養所へいつてた。「退院したのがピカドンの、ちょっとまえでした。あの日警戒警報解除のあと、防空壕をなわしに入つていたら原爆がおちたんです。わたしひとり生きのこりました。」

党の広島地方委員会の事務所はそのとき丸川昇一君の店のつい近く、天満町の土手の元「チチャス」のあのバラックにきていた。三原市の時計屋の間借りから、広島駅前の本屋の間借り、そしてやつとこのバラックに入ることができたのである。「共産党広島地区委員会何某」の名刺を注文されたと丸川君が、すこし、とまどつたような顔をしていた。

岡本菊次郎君は京都にかえつたが、私はあとすこし広島市にいた。

福島町のまんなかを通る予定の太田川放水路工事の反対闘争を旧全国水平社、そのころの部落解放委員会の人や町民とともにやつた。町民のデモで旧兵器廠あとの広島県庁におしかけて、工事中止の確約を知事からとつた。

土岡喜代一氏、溝口年男氏、和佐田武夫氏、町内会長吉永老人そのほかの町内の人々とともに「放水路を変更せよ」という会をつくつてたたか

つた。昔のように私が書記だつた。

それが一段落ちついたところで私は京都にかえることにした。

(2)

一九三八年の戦前のことにもどりう。

この年五月三日私が出獄して神崎宇市君の家にかえりついたとき、玖島三一君が仕事場からきてくれた。

「当分宇市のところで、ゆっくりするがええ。社会情勢もかわつたし、用心してうごかんと、あぶないぞ。晩にうちへこい。いっぱいのもう。」

そういうて仕事場にもどつていった。

神崎君のはなしでは、大橋という靴工場で兵隊靴のうけとり仕事をやつてだいぶかせいしているとのことだつた。

福島町はいたるところ、土地がほりかえされていた。この町のまんなかを太田川放水路がながれるのだという。もうたちのいた家もある。

広島市会でこの放水路をつくることがきめられるときは「わしらの町を川にせんぐれ」と腰のまがつたばあさんまで市会におしかけた。

たちのけといつてもゆくところはない。よその町へいつても、福島町のものにおいそれと家をかしてくれない。しかも土地をほりかえしておいたてゆく。ゆくところがないので工事場のまわりの空地にバラックをたててすむほかはない。

土地をもつてゐる者は買ひあげてもらつてかね

がはいつた。ただの空地に石をならべて、家をたてているところだといつて、高く買上げてもらつたものもいる。貧乏人だけ損をする。神崎君はそんなことをいつた。(そのち戦争がはげしくなつて、放水路工事は中止された。そしてピカドンがきた。やけだされた人々は放水路の川底になるところに、バラックをたててすみついた。戦後工事がまたはじめられることになった。土木機械がはこびこまれた。市役所にいつてもうけつけない。

放水路をつくるときは市できめたが、あとは国の人木出張所がやることで市や県は関係ないといふ。とうとうこの町の人々はデモをくんで県庁におしかけた。県知事が一時工事を中止すると約束した。)

出獄して四日ぐらいして、神崎君についていつて、千田町の労働紹介所で日雇労働者の登録をした。

あくる日から紹介所の窓口から仕事の紹介をうけて仕事にいつた。材木屋にいつたり大掃除の手伝いにいつた。私が学んだ県立「中の寄宿舎に四五人でいつたこともある。漢文の先生が舍監をしていていた。めんどうだから、てぬぐいで頬かむりしてはたらいた。

ある日、ニュース館というのにはいつた。四年のあいだのうちに、トーキーになつていて。戦争のニュース映画になつた。「脱帽」というタイトルがでた。白い馬にのつた天皇が閱兵している。私は帽子をぬがなかつたが、やはりうしろが気になつた。だれかがとがめないとおもつた。ここは刑務所のなかではない。独房のなかより社会はき

びしいのである。

(戦後一九四六年の春、広島のやけあとにもやつとニュース館ができた。共産党員のすがたがスクリーンにでるようになつた。天皇も映画にあらわれた。彼は帽子をとつて、おじぎをしている。おちつきのない男だ。たつたこの間まで白い馬のつて人々に帽子をぬがせた男だ。映画をみているものは、くすくす笑つた。)

木村荘重君と林ノ内栄蔵君にであつたのは、井戸掘り仕事のてつだいにいつて、そのかえりであつた。親方から大八車をかえしておいてくれとのまれて、その車をひいてタカノ橋を走るいていふとむこうから木村君があるいてきた。

刑務所で「あしたでます」といつていたのは昨年の冬だつたが、あれからはじめてだつた。

木村君は「もう働らいとるんですか」といい、つれの男を「林ノ内君です」と紹介した。木村君よりすこし背はひくいが、がつしりした男だつた。長崎で活動していたのだといふ。

「このところは仕事がひまなのであそんでいます」と木村君はいつた。ふたりとも前田文二君のやつている鉄骨組立の現場ではたらいているのだが、鉄材の統制がきびしくなつて仕事がひまになつたといふ。

三人で飲みにゆくことにした。私もこのところ仕事がづいているのでいくらかもつていた。

「酒百葉之長」という大きな横額のある「四斗平」という新天地のちかくの、のみやなど、のんでもつた。「ちょっと待つていてくれ」と木村君がいつて下宿により、大きな本をもつてきた。「こ

の本を売って、のもう」と彼はいった。手にとみると、哲学辞典だった。表紙をかえしてみると、「獄中の兄へ、美子」と書いてあった。

『赤救ニュース』で、木村君の妹の右田美子さんの死をよんだことがある。彼女は広島でバスの車掌をしながら、兄やほかの同志の救援活動をするうち、病にたおれた人である。

「この本は売るなよ」と私はいった。

「いや、もうこの本はいらないんだ」と木村君はいった。

そこは竹屋町筋のロンド書房のことである。木村君は本をもつてはいっていったが、すぐ金をもつてでてきた。

「大藤君が、この本はあづかくといつたよ」と彼はいった。

いまでもあの本の「獄中の兄へ、美子」という字がおもいだされる。あのころの同志たちのことを一つのシーンにあらわしているようだ。

「島根県のいなかにかえつて、百姓をするつもりだ。おやじも年だからてつだつてやらねば」と木村君はのみながら、そういった。

彼はあくる日、島根県のいなかにかえつて、三〇年もあわなかつた。

国本金夫君（堀哲二）の遺稿歌集『愛情の歌』

が、太藤軍一君たちの手で出されたとき、木村君の短歌もよせられていた。（戦後になって、木村君は共産党から村長に当選した。それから占領政策違反で投獄された。そののち、いろいろなことが、お互の身の上にあつたが、ふたたびあつたのは一九六九年の二月、かれが島根県から上京する途中、私のいる神戸によつてくれたからだ。）

張鼓峰で、ソ連軍と日本軍が衝突したという新聞記事がでたとき、林ノ内君と私は広島市の相生橋のたもとの小さな鉄工所ではたらいていた。

「ソ連と戦争になつたら、わしらはまたぼうりこまれるな。赤いやつらは、みなごろしにしてしまえ」というて」と林ノ内君はいった。木村君と三人であつてから林ノ内君とつきあうようになつた。しばらくのあいだ林ノ内君は私といつしょに紹介所にいつて日雇仕事をした。それから前田文二君に鉄工所の雑役にいつてみないかといわれて、私をさそつて一人でこの町工場ではたらくことになった。

林ノ内君はよく休んだ。「のみすぎて、胃のわるうして」と長崎弁でいっていた。そのうち丙子会の書記に欠員ができたので、それにゆくといつて工場をやめた。日給一円五〇銭の工場雑役では、よく休むので、いくらもとれない。それより月給四〇円の書記のほうがよいと思つたのだろう。

八月になつてから私は鍛冶屋町の安田祐俊君の家に、毎晩旋盤をならいにかようことにして、東京にでるしたくである。古末君から東京にでててはどうかといつてきた。事務員なんかになるよりも工場にはいりたいから、すこし旋盤をならつてゆくと古末君にいた。朝、宿から弁当をふたつもつてでる。ひとつは相生橋の町工場の昼めしだ。五時になると相生橋をわたつて安田君のところで、ふたつめの弁当をくう。

安田君の家は表の土間に旋盤二台おいて仕事をしている。カジヤ町というところはその名のようにならべているところだ。安

田君のおやじさんは、いまは裏の庭で、ぼつぼつ「インキヨジ」とに火づくり仕事をやつていた。安田君と兄さんとが表の土間で仕事をしていた。

店さきにやき印などをならべたり、ぶらさげてある。昔はお百姓がやつてきて、スキやクワの柄におす、やき印などをかつていつたのだろう。あまり売れそうもないが、店の看板がわりである。

「スキの刃の、やきつきができるカジヤが今はすくのうなつた」というのが、安田君のおやじさんの自慢だという。

安田君は工業学校を卒業して日本製鋼、海田市工場の旋盤工として働いていた。全協金属労組に加入して特高に検挙された。いまは兄貴と二人で、自宅に旋盤二台おいて仕事をしている。兄さんは金属彫刻が専門だ。

毎日夕方五時になると店の戸をしめて、安田君は四斗平あたりに、のみにでかけるのだが、私が旋盤をならいにゆくので、毎晚一二時ちかくまで仕事着もきかえないで、おしえてくれる。家人の人も応援してくれた。兄貴も私のあやしげな手つきをニヤニヤしながらみている。日曜日と水曜日が「安息日」だ。四斗平などで、林ノ内君や田谷春夫君や私などとのむことにしていた。田谷君は印刷工だ。

「戦時体制」ということで安田君のところのよに旋盤二台の工場にも「軍の仕事」がまわつてくる。たいてい小型爆弾か砲弾の部品である。これをやらないと鉄材を配給してくれないので。そんな部品の荒削仕事がたいてい旋盤にかかる。それらの仕事なら素人にもどうにか手がだせるのである。

田谷君と安田君が道路のすずみ台で将棋をさして

いて私が旋盤のハンドルをまわしていることもある。兄貴の方は夕方にうちわ片手にでていつて

いる。

一〇時になると表の戸をいれて、それからも土間にチヨークで数字や図面をかいて、ねじきりの歯車のかけ方（いまどきの旋盤をつかう人はしない）、製図の一角法や三角法などをおしえてくれ。いろんなことを安田君は私のあたまにつめこもうとする。

「機械工になるからにやあ、どんなしごとでもこなせる万能工にならにやあいけん」と彼はまことにむりなことをいう。

相生橋をわたり西練兵場をななめにつつきり、白島の下宿している家にかえる。

消費組合の常任だった迫樹盛登君も私が出獄するまえに東京でていった。東京では同志たちが仕上工講習会をやっていた。熟練工の同志が講師になって機械の組立ての勉強をしていると迫樹君はかいてきた。広島にいるときは製紙工場にいつていたが、ケガをよくした。やけ酒ものんだ。思ひきつて上京してよかつたとあつた。

い。所長は元思想検事である。
思想犯の「保護更生の団体」として丙子会というのがつくられた。「思想事件関係者」はみなこの会員ということにされた。エサをまかねばあつまつてこないから、丙子会に来る者には昼食をだしたり、生活補給金として月一〇円だしたり生業資金をかしてくれる。これらの金は思想善導の名目でこの土地の金持ちや工場主から寄付をあつめたものだ。非常時ということで、かれらも金をださねばならない。

観察所の所長、書記、保護司の給料は国からであるが、丙子会の書記の給料はこの寄附金からである。主事は警察署長の古手を觀察所長がひっぱつてきたもの、書記は保護司が思想関係者のなかから觀察所長にスイセンしたものだ。

丙子会というのは会のできた年が、ひのえ（丙）ね（子）だからである。九州や東京では更新会といつていた。

書記は柴野君と瀬尾君がやっていたが、瀬尾君がやめたので、林ノ内君がなつた。かれは觀察所からみれば、思想犯要視察人のたぐいであり、同志たちは「お役人」と皮肉をいわれることもあつた。

私は彼にいった「おれは東京へいって工場にはいるから、君もあとからこいよ。工場で労働せいやあいけん。社会のうわつらで、ふらついとつたら、ろくなことにならん」

一九三八年一二月のすえ、門司市の岡野バルブ

という工場に、五条俊夫君、中道君と私は雑役として働きにいった。夜間三時間旋盤をおしてくれ、六ヶ月のちに成績のよいものは旋盤工としてやと

うというのである。どの工場でも労働者がたりないときであった。九州の更新会がこの工場に、「会員の更生のために」たのんだものである。広島の丙子会からも、それにいれてもうことにした。私も東京でるまでに、すこしでも旋盤につければよいとおもつていた。

林ノ内君は丙子会の書記の仕事をかたづけてあ

くる年の一月になつて門司にきた。

五条君、中道君、林ノ内君は鍛造工場の雑役をやり、私は組立工場の雑役をやつた。五時になると夕食の弁当をたべて実習工場にあつまた。それから九時まで旋盤をならつた。

思いがけないことに竹岡宅一君が組立工場でボール盤をつかつていた。彼は広島県高田郡吉田町で南小一君たちと活動していた同志である。九州のしりあいをたよつてこつちにきたので、特高にも更新会にも、しらせでないという。だから私も竹岡君のことは、五条君、林ノ内君、中道君にはだまつていた。

椎野悦郎君は私が出獄するときハガキをくれて小倉市の影久伊佐人商店というつとめさきをかけていた。独居のむかいどうしで手で文字をかいて、はなしあつてから、はじめてあうことになつた。九州更新会などの世話にならないでも、旋盤をならうのなら、ほかの町工場を世話すると彼はいつた。私はまもなく東京でるつもりだからといった。

それからすぐ私はこの工場をやめて広島へかえつた。そのあとで五条俊夫君が事故で死んだ。鍛造工場でスチームハンマーのまえではたらいいて五条君の胸に鉄片がとんできて、彼はたおれた。

丙子会についてかいておこう。

治安維持法で検挙されたものを監視するために思想犯保護觀察所がこの広島市にもおかれた。月一回以上ここにいて近況を報告せねばならな

林ノ内君たちが、だきおこして病院にはこぶあいだに息がたえたと。いう。

林ノ内君は鍛造工場主任の責任を追及したが、もみけされてしまった。この事件からち旋盤実習もやめになった。林ノ内君は東京ゆきの旅費をかせぐために鍛造工場の雑役をつづけた。

五条俊夫君は広島最初の全協組織の結成にはたらいた同志である。一九三一年五月四日、いわゆる「5・4事件」で市川忍君、小笠原君らとともに検挙、起訴された。このうち小笠原君は病死し、

市川君は入獄中精神に異状をきたしていた。五条君は出獄してから大阪へ、のこぎりの目立てをならにゆき、広島へかえつて、製材工場のめたて工としてはたらいた。親方の親類の娘と結婚したが、まもなくわかれ、製材工場もやめた。彼はあらためて旋盤をならつて再出発しようとしていたのである。わかれた奥さんはみごもつていた。一九三九年の三月であつたか、まださむいころ広島市の小さな寺で同志たちが告別式をおこなつた。5・4事件で起訴された三人は、かえらぬ人となつた。

(4)

大藤軍一君（大月洋）、岨常次郎君たちは、そのころ島崎藤村の「夜明け前」の朗読会をやるのだといそがしがつていた。新協劇団が東京浅草でやつた「夜明け前」は大当たりをとつていた。

朗読の練習には昔の同志もあつまつてきた。マ

ネージャ役は大藤君がやつていた。

青山半蔵は岨君、寿平次は村上四郎君、牛方は

井上栄君、寛斎は中沢晴海氏であった。彼はもともみけされてしまった。この事件からち旋盤実習もやめになった。中沢さんは絵のうれない苦闘のころだった。中沢さんは私をみると「このどしになつて、まだこんなことをせにやあならん」といつたが、たのしんでやつてはいるようだつた。若い人たちもいた。金兵衛をやつた才野力三君

はみながら、いちばんうまいとほめられた。女專のグループもいた。おふき婆さんをやる山口とし子さんは戦後大阪府教組の婦人部長をやつて、くるしい活動をしたが、おしくも死んでしまつた。この女性グループのなかには高校生、吉本康一君の妹もいた。

朗読で役をうけもたないものも、応援団としてきていた。日曜日と水曜日は「安息日」なので吉田君と私も、のぞきにいった。

新協劇団後援会は一九四〇年（昭和15年）八月特高の一斉検挙をつけた。責任者の大藤君はふたたび三年の刑をうけた。北支へいった岨君、村上君のほかは、朗読で役をうけもつた男たちはみな検挙されて年をこすまで留置された。ナレーターをやつた田谷春夫君はこの検挙から胸をわるくして西条の療養所へいつてしまつた。女では半蔵の妻お民をやつた大前三枝さんが検挙された。おふき婆さんをやつた山口とし子さんは東京にでたし、そのほかの女專グループも広島をはなれた。

この新協劇団後援会広島支部のことについて盤をつかわせてくれ、いろいろおしゃてくれた。

わたしたちは、そのまえに東京にでていた。一九三九年五月五日私は富士山のみえる列車の中へ、となりのおばさんからかしわもちをもらつた。「きょうは五月の節句ですよ」とそのおばさんにいわれた。広島では六月五日が節句だが、なるほどこのへんでは五月五日なんだなとおもつた。出獄の一周年に上京することにして広島から列車にのつたのだ。大阪で途中下車して岡本菊次郎君と昼間をすごして東京ゆきの夜汽車にのつたわけだ。

私は東京蒲田の古末君のアパートにおちついた。古末君は蒲田の本庄製作所の事務員をしていた。

吉田君は田園調布にいる吉田司君のところへつれていてくれた。彼とは私がすこしのあいだ、高校にいたときおなじクラスだつた。野球ばかりやつていたがいつのまに運動にはいつたかしらない。

吉田君のはなしでは出獄後親類がやかましくて、酒をのむほかはなんにもさせなかつたという。いま川崎市の鋼板工業の株をかつて重役ということになつてゐるが、これもらくじやない。毎晩おつきあいでのまなきやならない。「こんばんもまたのみじや」とあとは広島弁になつた。

吉田君は五反田の鈴木製作所というのに紹介状をかいてくれた。そこで旋盤工の見習をすることにした。はじめは大型旋盤の先手をした。さきていうのは旋盤にかける大物をつりあげたり、とりつけたりの仕事である。けづりだせば半日でも一日でもすることはない。そのあいだに小型の旋盤をつかわせてくれ、いろいろおしゃてくれた。

ある朝五反田にゆこうと、蒲田駅へゆくところ
で、ぱつたり迫樹盛登君にてあった。蒲田の六郷、
品川精機という工作機械工場で組立工として働いて
いるという。その夜のんべ横丁でおちあつた。
彼のかたるところでは、いま蒲田、大森の工場は
工作機械のブームだという。組立てがおわると、
ベンキもぬらないのに、ときには精度のテストも
しないうちからひきとつてゆくという。「インコ旋盤」ということばがはやつたそうだ。あちらこちらの町工場で、おそまつなものをつくりすぎて、値段がさがるし、精度もわるいので、うれなくなつた。つぶしてスクラップにするしかないものがでまわつてゐる。戦前のインコやジュウシマツがはやつたときとおなじだという。いまいつている品川精機というのは労働者は二〇〇人くらい。堅型旋盤をつくつてゐるが「インコ旋盤」よりましなものだと迫樹君はいつた。

林ノ内君も東京にてきた。かれは六郷土手のちかくの町工場に雜役としてはいつた。夏になってから土佐の高知にかかる旋盤工についていつて、むこうの漁船の発動機修理工場で仕事をおぼえることになつた。そして正月をこして春になつてかえつてくると、迫樹君のいる工場に組立工としてはいつた。

せまい広島どちがつて東京、とくに蒲田大森は

工場地帯で「要視察人」が多くて特高もうるさくまわつてこなかつた。思想犯保護觀察所や東京

更新会に、顔をださないでもよかつた。

しかし特高もけつしてほんやりしていなかつた。のちに検挙されて知つたが、警察の特高係に

は一週間の予定表が書いてあって、週に何回か「檢

索日」という日があつた。特高刑事は「要視察人」のところをまわつて、なにかをつかんでかえらねばならなかつた。私の机の上にロシア語の新聞があつたという報告書を私はみせられた。ロシア語もドイツ語も文字が英語とはちがつてゐるので刑事が早合点したのだ。ほんとはドイツ語の学習新聞だつた。

古末憲一君のアパートの管理人は特高におどされ、何月何日だれがきたと蒲田署に報告してい

た。

第二独居にいるときとかわりがなかつた。手紙

をだしたりもらつたりも、日記や写真も用心しな

ければならなかつた。古末君のところには石川達

三の『結婚の生態』などのような小説五、六冊し

かおいてなかつた。私は機械学の本しかなかつた。

『戦争論』はまあよからうとおいていたら、一九

四一年四月八日の「広島グループ」検挙のとき、

特高はやつぱり知つていて、とりあげていつた。

一九三九年の夏には私は五反田の工場をやめて

蒲田の金剛製作所にかわつた。古末君が、そこで

労務係をしている長谷川浩君に紹介状をかいてく

れたのだ。労働者五〇〇人くらいの工場で一五セ

ンチくらいの弾丸をつくつていた。おそらく迫撃砲のたまだらう。そこでは旋盤ともよべないよう

なもの——コンクリートの台に旋盤の部品をとり

つけたもので、素人工が一個何錢という「うけと

り」で弾丸の部品をけづつていた。朝早くから仕

事にかかつて、ろくに休まないで、一日何円もか

せいだ。まともな旋盤をならべているところもあ

つた。私はそこへ日給二円五〇銭ではいつた。

一九四〇年の夏、私のはたらいている工場の労

務係をしていた長谷川浩君が検挙された。おなじころ広島で新協劇団後援会の一斉検挙があつた。

岡本菊次郎君と妻のとし子さんが東京にてきた。岡本君は古末君のいる本庄製作所の事務員としてはいり、とし子さんは蒲田の小学校の先生になつた。

一九四〇年の秋のころだつたが、警視庁の特高

課長が「このさい左翼分子の一斉検挙も辞さない」と談話を発表した。古末君は「みんな用心したほうがいい。林ノ内君などのみすけだからきをつけようといつてくれ」といつた。

「用心しろといつても、用心のしようがないじやないか。」と林ノ内君がのんべ横丁でいつた。そ

のころ迫樹君、林ノ内君と私は毎晩のようく蒲田ののんべ横丁で顔をあわせていた。広島からきた者だけでなく、ほかの人たちとともにつきあつていた。

いまさら用心して、工場からまつすぐ家にかえつてふとんをかぶつてねるようなことをしても、検挙されるときはされるのだ。

寺尾一幹君はこういつていた。「ときどきあつまつていたなかまが、このあいだ検挙されたから、こんどはこつちへまわつてくるかもしけれませんわい。」そもそも寺尾君は検挙された。

一九四一年四月八日、「広島グループ」というな

ままで、私たちには検挙された。私と林ノ内君が自動車にのせられてしばらくゆくと、みしらぬ男が押収された本といつしょにのせられてきた。だいぶん検挙のあみがひろげられているようだ。

蒲田署につくと、ひとまず留置場にいれられ、通路のかべきわにたたされた。監房のなかから長

谷川浩君が看守になにかいつた。私たちに自分は

ここにいると知らせておいた。その

うち林ノ内君だけここにのこして、私はそとにだされた。そして早稲田署におくられた。

ここに留置場に薄田研二氏がこのあいだまで、いられていたという。新協・新築地両劇団解散のとき検挙されたのである。映画にでているから

留置場のものも、顔を知っていた。

もうひとり生活派の俳句で検挙された平沢といふ人が、一年ちかくおかれていった。もうかなりの年であった。何回となく手記を書いては警視庁特高課からきた刑事に「まだ、しばらくくれるのか。こんどくるまでに書きなおしておけ」といわれているのである。

広島でも画家の山路商氏が特高にひっぱられて、こんなことをいわれたという。

「おまえのかく絵はシュールレアリズムという奴じやろう。シユールは自由主義じや。自由主義は共産主義とおなじものじや」

りくつにもなにもなつていいが、これが特高のりくつなのだ。やつらも女房子供をやしなつている。しごとをしていないと予算をへらされて、めしのくいあげになるのだ。薄田研二氏が釈放されると、生活俳句の平沢氏は「ながいおつきいでしたな」と涙をこぼしたという。しかし平沢氏ができるまえに私たち「広島グループ」のものは一ヵ月で釈放された。大げさなまえをつけて検挙したもの、ものにならないとみて、釈放する

ことにしたのだろう。

この事件でやられたのは、古末君、林ノ内君、追桜君、中川秋一君、数本英次郎君、岡本菊次郎君などだった。

寺尾一幹君は別のグループで検挙されて、なかなかでこなかった。

太平洋戦争のはじまるまえ、思想犯の前歴のあるものをあらいざらい検挙していた。

蒲田駅ちかくの女の歯科者、吉仲さんもやられだし、全協刷新同盟にいたという吉本君や、そのほか蒲田でしりあつた人たちが根こそぎやられた。

私はでてくるとまもなく川崎市の工作機械工場に組立工としてはいった。おもしろい工作機械をやつしていると、きいたからである。

そこではアメリカの歯切盤をまねてつくろうとしていた。飛行機の歯車は、そまつな歯切盤では削れない。

はいってまもなく、ドイツ軍がソ連に攻め入ったという号外がでた。

そのころ工場の便所のかべにこんな落書きがあつた。

「労働者は団結してストライキにたちあがれ、労働者のたつときはいまだ」

ながいことそのままになつていたが、秋になると川崎の警察からきて、便所のなかにはいつて写真にとつた。私たちの仕事をしているところの窓からそれがよくみえた。便所のなかでフランクシュをたいていた。こんどはその板をはがしてそとで写真をとっている。「くさいのにぐくろうだな」とみんな窓からみていた。

私のところには、なにもいつてこなかつた。川崎の警察と東京のそれとはなわばりがちがうのだろう。

「おっさんは共産党かい」とくく青年工があつた。

「うん、まあね」と私はこたえた。

「日本が戦争にまけたら、労働者が解放されるというのが、どうもわからないな」とその青年工がいった。

こんなことを青年にはなした労働者があつたのだろう。

そのころの労働者の「規律」というものは戦後の工場生活からみても、「まるでなつていなかつた」といつてよい。

さむくなつてみるとストーブにあたつて、九時ちかくまで腰をあげない。仕事の台なんかどんどんこわしてストーブにくべる。油がしみているから、よくもえた。

もんだいの落書きのあつた便所も、板かべをはがしてたき火をしていたが、とうとう柱を一本ひきぬいてもやした。便所は三本あしでたつていたがそのうちにたおれてしまつた。「便所をこわした犯人をしらせた者には賞金をあたえる」と社長名ではりがみがでた。共犯ばかりだからだれもいつてゆかない。

食料のかいだしなどで休むものが多いから職場で全員そろうということはなかつた。

労働者五〇〇人くらいの工作機械工場は、たいでい、にたりよつたりだつた。

軍当局からは歯切盤を月産六台つくれと命令がきていた。しかし六台の歯切盤を組立ててから精

度をだすまでに三月もかかった。アメリカの歯切盤をスケッチして図面をつくり、その通りにつくるのだが、精度がでない。形ばかりできても精度のでない工作機械は三文のねうちもない。そんなことをしているうちに太平洋戦争になつた。

いくら、えらい人があせつても、尻をひっぱたいて機械をつくらせるわけにはゆかない。労働者たちは「内職」といって、鉄板をくすねて鍋をつくつたり、疎闊あとから木ぎれをひろつてきて下駄をつくつたりした。

戦後のいまになると作業管理がきびしくなつて、作業時間をかいたカードにおいてられて、ナベやゲタをつくる時間はない。

もつとも、こんな工場ばかりではなかつた。私のしつている大阪の旋盤工のはなしでは、大型旋盤の「おくり」をかけて、新聞をよんでもいた労働者がまわってきた憲兵にひっぱたかれたという。「おくり」をかけて旋盤が自動的に削つているあいだ、何時間もすることがないのだが。自然発生的にサボタージュ状態がひろがつていった。警察はするやすみしている労働者を留置場にいれたり、さかり場で「不良職工狩り」をした。そのうちにスターリングラードでドイツ軍が包囲されて降伏したというラジオニュースがながされた。岡本君はその夜ひとりで祝盃をあげたといふ。

一九四五年三月九日、陸軍記念日のデモンストレーションに戦車が銀座のちかくをはしつていたが、その夜本所深川一帯が空襲で全滅した。四月には蒲田大森の工場地帯がやけ野原になつ

た。蒲田のやけあとで、林ノ内君と私は顔をみあわせてにがわらいをした。すこしまえ、迫樹君と奥さんが千葉県の方へゆくといつてはいたという。われわれがよりどころにしようとした工場地帯が、やけ野原になるうとはおもつてもみなかつた。

私は罹災証明書で本籍地のある鳥取県米子市までのキップを手にいれた。米子製鋼所で旋盤を組みたてているとき、広島に「新型爆弾」がおとされたニュースがでた。そして日本軍の無条件降伏の日がきた。

一九四五年一二月のすえ、やっと広島に足をふみいれたのである。

(5)

一九四六年私は東京にいつたが、党本部のまえで、むこうからいそぎあしでくる古末憲一君にあつた。いま職場で組合をつくつてあるところだといつた。私もここでひらく別の会議があるのでゆつくりはなしができなかつた。

寺尾一幹君を知つてゐる同志がいて、世田谷の住所をおしえてくれたので、いつてみたがるすぐつた。

そのつぎに上京したとき、迫樹盛登君にあうことができた。吉田内閣打倒のデモがあつた日のことだ。新橋のところでデモをみていると、「日本教具」というデモの列からとびだして私の手をにぎつたのが迫樹君だつた。私もデモのなかにはいり、彼と肩をならべて歩きながら国会議事堂へつづく

でかたりあつた。それから銀座へでて、コーヒーハウスにより、あやしげな紅茶をのみながら、しばらくはなした。

その後私は神戸にきて、全日自労の運動をするようになつた。上京して全日自労の本部がある産別会館にゆくと、となりの国民救援会の事務所に古末君がいた。

ある年の年末闇争には労働省前ですわりこみをすることになった。こんどこそ林ノ内君にあいにゆくと、古末君に連絡をたのんだ。

古末君はわざわざ鶴見駅前の県委員会事務所にいつてくれ、埼玉県の加須市までかえるとおそらくので、林ノ内君のところでとまつたといふ。上京した私は労働省との交渉がながびき、中野の宿屋にとまりこみで、そこからバスで労働省にゆくので、ぬけだして林ノ内君にあいにゆくひまがなかつた。

さいごの日労働省まえで解散になつたのは、くらくなつてからであつた。夜八時すぎてから鶴見駅まえの神奈川県委員会に林ノ内君をたずねていつた。

かれのあたまは、まつしろになつてゐた。
「むかしの友達がきたので、私はあれします」と彼は若い人達にいつて、つれだつて出た。

「わしが県委員長というガラじやないが、えらい人が沢山いるのに、なろうとしないんだ」とわらつた。

ついそこに屋台店があつた。林ノ内の奥さんの顔があつた。おくさんも声をあげた。林ノ内君の結婚のお祝いに四谷の「きよし」へ落語をききに夫妻をつれていったことがある。あくる日おくさ

んがいつた「うちの人があんなに笑うとはおもわなかつたわ。てすりをつかんで大きな声で、からだをゆすってわらうんですもの」

あのころは店にいっても何も売つていなかつた。かれをそれだけわらわせたとすれば、いちばんよいお祝いだつたかもしれないとおもつた。

屋台店をでて、川崎のアパートへかえるみちで、林ノ内君は「このあいだかえるとちゅうでたれたよ。血圧がたかいのだ」といつた。私は、ぎくりとした。

アパートのかれの部屋には男の子がふたり頭をならべてねていた。彼はひとりずつ子供をおこして、便所につれていった。若い女がのぞいた。「新ちゃんの、おくさんだ」といつた。新ちゃんも顔をみせた。林ノ内君や迫樹君のいた品川精機の見習工だった。いまは民主書房ではたらいているといつた。

おくさんも店をしまつてかえってきた。八年もあわないからはなしがたまつてきているというものだ。

ドアをノックするものがあった。青年が顔をのぞかせて「林ノ内さん、関東地方からレンラクがありました。こんばん、ガサがあるかもしないということです」といつた。

私は林ノ内君に自慢ばなしをした——自慢ばなしというのもおかしいのだが。

「わしは三回つかまつたよ。三回とも無罪だが、〇円とつたよ。弁護士が、きみが無罪になるとは、おもわなかつたというんだからなあ。」

神戸の突堤には朝鮮の戦場における戦車や砲弾

がならんでいた。砲弾荷役のじごとが安定期におしつけられる。「砲弾荷役にゆくな」といえば検挙された。市役所ですわりこみをすれば「不退去罪」や「公務執行妨害」でつかまつた。

それには主流派と国際派のゴタゴタ。

いまはすぎさつたおもいでになつたが。

「このあいだ古末さんがきて、はなしていただけど、古末さんのところはおくさんがいそがしいときは、古末さんがてつだうんだつて。うちとは、ぜんぜんちがう、ぜんぜん！」とおくさんは「ぜんぜん」にちからをいた。

三人でよくしゃべつたものだ。気がついたら三時だ。私は子供のそばにもぐりこんでねた。

林ノ内君はその後神奈川県会議員選挙に党からでて当選した。広島の原爆記念日に県会代表として出発するまぎわに心臓マヒでたれ、それがさいごだつた。

迫樹君の手紙には、彼のおくさんがたずねつたとき、林ノ内君は途中までおくつてきて「家のものには、心配するからいわないのだが、私はここのことともつかれて再起できそうもない」といつていたとかいてある。林ノ内君の子供は兄の方が二五歳、弟が二三歳になって元気につとめていると、迫樹君の手紙はむすんでいた。(1)

一九六九年三月一五日、無名戦士の碑におさめられた銅板になき同志たちの名がきざまれているのを見た。

やはり同志たちのことをかきとめておかねばならないとおもつた。戦前一九三八年に出獄したとき、われわれの活動はかきとめておかねばとおもつたのだが、それができなかつた。戦争中はいつも高にかいたものをみられるかわからなかつたから。戦後は活動においまくられていたわけだ。

(おわり)

年の第一回原水爆禁止世界大会には、私も兵庫県代表団にくわわつて広島にいつた。古末君も東京から大会にいつたのだが、お互にあうこともなかつた。

一九六七年春、私ははじめてゆつくり広島にかえることができた。現場でケガをしたので休業補償金十万元くれたからである。

としのくれにかえたときのように、まごついた。それでまた宮島の小寺英雄君をたずねることにした。小寺君は廿日市でレコード店をやっていた。こんどは神崎宇市君のところを知つていなかつたので、あえなかつた。玖島君は死んでいた。

一九六八年夏、ふたたび広島市にいつた。解放運動無名戦士の碑のまえにはじめてたつたのである。去年小寺君もこの碑のことをいわなかつた。

(わかっているとおもつたのだろう)河原町の小学校友達の家をさがしまわつて、そのへんを何回もあるいたのに気がつかなかつたのだ。あとからおもえば電話帳をくつてみれば、ほかの同志たちのこともわかつたのに。

「一九七一年一月三日再プリント。一九八一年三月四日再記」

(一五一ページよりつづく)

私は兄たちとは別に、呉市中通りの友田書店で店員の田中豊さんから左翼文書を買ってよんだのが、運動にちかづくきっかけとなりました。友田書店はのちに田中書店となりました。

その田中豊さんから服部久雄氏と、もうひとりの人を紹介され、共産青年同盟に入りました。

呉一中を卒業した直後（昭和七年四月）特高に

検挙されました。

広島市の寿座へ左翼劇団一滝沢修さんや山本安英さんがきて、呉からみんなで見にいったが、お

そくなつて呉へかえられず、滝沢さんたちのとま
る宿屋にとめてもらひ、ザコネをしました。あく

そのときは留置場におかれただけで出されまし
た。すでに広島師範の二部に合格していたのです
が、中学校も警察もだまつていたとみえてその方
へは入学することができました。

師範学校在学中片岡義夫氏が連絡にきて、広高
生や高師の井ノ口氏等の指導を受けた。昭和八年
二月頃広島西署に検挙され退学処分になりました。

そののち田中豊さんが私に三戸信人氏を紹介し
ました。党オルグの関谷源一氏にもありました。
中村定男さんの手記には、私が竹地定夫氏を中村
さんに紹介したとありますが、どうも思いだせま
せん。

私たちも呉工廠を目標にして、ビラの「ながし
こみ」をやりました。このころオルグの関谷源一
氏にいわれて入党しました。入党申込書をかくと
か、委員会の承認をうけるということはない時で
した。

昭和九年の四・二六事件の検挙をのがれたのは、つきのような事情でした。そのころ私はすこしでも労働の体験をしなければと考えて新聞配達をやっていました。朝早くおきて家をでて配達にでたあと憲兵隊からきました。私がいないので憲兵分隊に出頭せよといつて帰った。私は親からそのことをきいて、そのまま逃げました。森島さんのところで高橋まつ子さんとおちあい、京都へのがれたわけです。高橋まつ子さんより私は年齢がすくないので、姉と弟ということにして大阪で間借りをしました。

松本徹のことですが、彼が吉本康一氏とともに大阪にきたとき、岩本巖氏（当時関西地方委員会）が、彼をひとめ見て「彼は非合法活動している人間のように思えない。どうもおかしい」といつていました。

それから吉本康一氏がある文書の一ヵ所をきりぬいたものを松本徹にわたしたもののがそのまま特高の机の上にあつたということもあります。

私は大阪にてから、まことに呉で活動していた茂渡義人氏が東京の荏原にいるときいて東京へいつてさがしたものでした。呉市の私立中学校にて共産青年同盟に入つて活動していた朝鮮人の同志が、そのご東京の私立大学に入つてゐるのをたよつてゆき、しばらく茂渡氏をさがしたが、みつかりませんでした。

（一九八五年一〇月八日大阪市にてきく。文責岩佐寿一）

嵐に抗して『闘いの中起訴された人々

当時の中国新聞・呉田日新聞より一部抜粋

昭和六年
五月四日
「五・四事件」



上野 良子 小笠原 豊 胡川 清 五條 俊夫 市川 忍

昭和七年
十月三〇日
「一〇・三〇事件」



宮内 謙吉 稲垣 宏 佐藤 疊 山口 義次 小倉 政弘

昭和七年
十一月二〇日
「一〇・二〇事件」



石川 茂一 前田フジエ 韓 利權 古田 稔 木村 庄重 山下 達吉

昭和七年
十二月二〇日
「一〇・二〇事件」

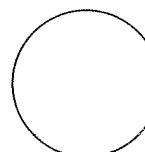


安田 祐俊 井上 満 野中 富雄 竹谷 時良 橋本 俊三 伊藤 正朔

昭和九年
四月二六日
「四・二六事件」



小川 正一 敷本英次郎 岩佐 寿一 関谷 源一



北田 建次 吉田 司

昭和九年
四月二六日
「四・二六事件」



岡本 重康 迫樹 盛登 山本タキエ 東雀 梅夫 茂渡 義人 高橋 渉 金 明文

昭和九年
四月二六日
「四・二六事件」



小寺 英雄 宮戸 年春 正田 誠一 井上 榮 国本 金夫 南部 達三 永井 健造

当時の新聞記事・資料・年表

「当時の新聞記事・資料」の目次

(昭和四年) 一九二九（昭和四）年より一九三五（昭和一〇）年まで

。呉工廠左傾職工三名懲首	二〇九頁
。呉工廠内左傾運動者検挙	二〇九頁
。呉で初の治安維持法公判	二〇九頁
。県下の極左派検挙	二〇九頁
。中学生が秘密結社	二〇九頁
。共産党第二次検挙（片山峰登の記事）	二〇九頁
（昭和五年）	
。呉工廠左傾職工一〇数名検挙	二〇九頁
。広島電鉄ストライキ	二〇九頁
。瓦電争議団員二〇名起訴	二二〇頁
。広島合同運送争議の公判	二二〇頁
（昭和六年）	
。三・五事件検挙始末記	二二七頁
。三・五事件呉関係	二二八頁
。三・五事件起訴者	二二九頁
。大胆な不穏文書散布	二二〇頁
。昭和六年四月八日解雇人員発表	二二一頁
。兵庫共産党事件一五四名を起訴	二二一頁
。起訴者・逮捕のもよう	二二二頁
。広島市津崎木材労働者検挙	二二三頁

。不穏ビラまき男格闘してとらわる
。初の広島共産党事件
(五・四事件)

。5・4事件まえの広島の組織と闘争	二二五頁
。宣伝ビラなどで革命思想を	二二六頁
。市川忍・五条俊夫の公判闘争	二二七頁
。同控訴公判	二二七頁
（昭和七年）	
。日本共産党広島地方委員会結成	二二七頁
。守田道輔検挙	二二五頁
。同関係者の検挙	二二五頁
（昭和九年）	
。呉にアジビラ	二二六頁
。第三次共産党の検挙	二二六頁
。組織および活動の全貌（上）	二二七頁
。組織および活動の状況（下）	二二八頁
。四・二六事件起訴者	二二九頁
。広島高校自治学生会の再建	二二九頁
。岩田義道突撃隊の編成	二二九頁
。四・二六事件後の検挙	二二九頁
。四・二六事件公判判決	二二九頁

。三・五事件公判（呉市関係）二二二頁
。再び呉海軍に赤化の魔手のぶ二二二頁
。一〇・三〇事件起訴者二二二頁
。呉海軍赤化事件二二三頁
。野村梅子・佐藤静枝・真佐子二二四頁
。横須賀の赤化事件二二四頁
。呉の水兵公判二二四頁
。富山県下の共産党検挙二二四頁
。長野県教員赤化の全貌二二五頁
。西日本を震わした長崎共産党二二五頁
。岡山共産党大検挙おこなわれる二二五頁

。三・五事件公判（呉市関係）二二二頁 。再び呉海軍に赤化の魔手のぶ二二二頁 。一〇・三〇事件起訴者二二二頁 。呉海軍赤化事件二二三頁 。野村梅子・佐藤静枝・真佐子二二四頁 。横須賀の赤化事件二二四頁 。呉の水兵公判二二四頁 。富山県下の共産党検挙二二四頁 。長野県教員赤化の全貌二二五頁 。西日本を震わした長崎共産党二二五頁 。岡山共産党大検挙おこなわれる二二五頁	
（昭和八年）	
。守田道輔検挙	二二五頁
。同関係者の検挙	二二五頁
（昭和九年）	
。呉にアジビラ	二二六頁
。第三次共産党の検挙	二二六頁
。組織および活動の全貌（上）	二二七頁
。組織および活動の状況（下）	二二八頁
。四・二六事件起訴者	二二九頁
。広島高校自治学生会の再建	二二九頁
。岩田義道突撃隊の編成	二二九頁
。四・二六事件後の検挙	二二九頁
。四・二六事件公判判決	二二九頁

(大島市民史P.123 昭和4年の頃)

吳工廠左領職工三名懲首

佐光ら三名はこの夏來県した

無産者新聞記者 御影某と策応

して準備会設置に活動、吳憲兵

分隊のとりしらべ家宅捜査もう

け、工廠を懲首さる。

今春、大山郁夫来県の際カフ

エーブラジルにおける歓迎会の

席上、不都合の言をはいた狭間

につぐ第二次の懲首で、そのさ

い佐光は海工工会委員会で「狭間

の懲首に対する当局糾弾および

慰問」について論議したもの。

いまわが身にありかかつては

懲首を家庭にしらずにしのび

ず、三人とも弁当をもってでて

定時間に帰宅。清水にいたって

は親をうしない弟妹四人の生計

をうけて免状も役にたたず路

頭になげだされて悲惨。海工会

委員会はこれをついに問題とせ

ず、幹部の無氣力を非難する。

(大島市民史P.123 昭和4年の頃)
工廠内左傾運動者検挙

広島憲兵隊本部特高主任龜井

特務曹長上京、同本部、警視庁

の応援をえて捜査、眞鍋喜一を

引致護送したが、右は最近吳工

廠内での組織について、同人

は九月上旬まで同廠職工に勤務

中、警固屋町に本部をおき、工廠職工二〇数名の同志と表面上

読書会をよそおい、ひそかに在

が、上京後は中継機関となつて

いたもの。事件は拡大のもよう。

(東京) 翌年(昭和5年)四月二二日

予審終結、治安維持法違反とい

てつぎの五名を公判に。

吳市藏本通二丁目

職工 中田春雄(20)

本通一一丁目
職工 平原一雄(22)警固屋町二丁目
職工 田中正雄(22)音戸町
職工 山口 薫(24)東京府荏原郡日暮
☆無職 眞鍋喜一(26)

東京府初の治安維持法公判

六月一九日県軍法會議 染川
法務官の五名が特別傍聴。公開

禁止。午後六時におよび眞鍋喜

一に懲役二年六月 罰金八〇

円、山口、田口、平原に各罰金

四〇円求刑。判決、眞鍋に二年。

控訴して一年(未決90日通算)。

上告棄却。

☆(広島県労働議論編「広島県労働運動史」より) P.366

吳工廠の共済組合購買所事務

員 真鍋喜一は工廠労働者の中

田春雄、平原 雄 山口正男、

山口薰に日本共産黨の合法機關

紙「無産者新聞」の購読をすす

め、読書会を組織したところ、

憲兵隊に検挙された(1929年末)

(大島市民史P.124 昭和4年)

県下極左派大検挙

(大島市民史P.124 昭和4年)

非合法の極左派はその筋の眼

がわりにとどかぬ(広島市)福

島町、己斐町間に共産黨のス

ローガンをつらねた宣伝ビラを

はついてるのをしつた県特高課

は、西署と協力して大活動。四

〇数名を引致取調べ、一味の二

十数名は最近三條町三滝山でピ

クニックと称して密謀をこなし

た形跡もある。また、大山郁夫

が統率する労農黨の再挙をくわ

だてる印刷物を撒布するなど不

穏な行動の極左派も大検挙。

東、西、可部、海田市署で、

玖島三一(27)ら十六名を検挙、

社会科学研究会そつくりの名儀

によって秘密結社を組織し各地

で宣伝準備中、ある種の陰謀を

くわだてていふことが発覚、十

月二十一日から二十三日未明に

かけて広島刑務所に収容のの

ち、櫻田檢事の指揮により四検

事は数名の書記をしたがえ、西

署高等係総動員、四台の自動車に分乗して市内外にわたる家宅捜査をおこなう。結果昭和五年正一年、艦政本部製圖工に転じ、大正二三年一月退職、東京合同労組争議に關係、共産主義に共鳴。大正一四年、東京無産青年同盟委員長。昭和二年より、日本労働組合評議會書記となり、實際運動に加わっていたもの。

町、無職末元玄聰(26)ら七名の治安維持法違反事件を広島地方裁判所で四月十五日予審終結。「わが國体を変革し私有財產制度を否認する日本共産黨の目的遂行のためにする行為があつたもの」として公判に。

(大島市民史P.124 昭和4年)

五月二日から公判。傍聴禁止。

二十日判決。玖島三一、末元玄

聰に各懲役三年。横野二年。林

二年(未決通算80日)。

(大島市民史P.125 昭和5年)

左領職工一〇数名検挙

(大島市民史P.124 昭和4年)

五月五日音戸署の協力を得て、某事件関連の工廠職工(24)

など八名を喚問。西名は一応帰宅。一人は音戸町で発行しつつある文芸雑誌「一路」の発行者

および三日創立した雄弁クラブの幹事。第二回第三回と検挙づき工廠従業員一〇余名。

(大島市民史P.126 昭和5年)

左領職工一〇数名検挙

(大島市民史P.124 昭和4年)

五月五日音戸署の協力を得て、某事件関連の工廠職工(24)

など八名を喚問。西名は一応帰

宅。一人は音戸町で発行しつつある文芸雑誌「一路」の発行者

および三日創立した雄弁クラブの幹事。第二回第三回と検挙づき工廠従業員一〇余名。

(大島市民史P.124 昭和4年)

左領職工一〇数名検挙

(大島市民史P.124 昭和4年)

五月五日音戸署の協力を得て、某事件関連の工廠職工(24)

など八名を喚問。西名は一応帰

宅。一人は音戸町で発行しつつある文芸雑誌「一路」の発行者

および三日創立した雄弁クラブの幹事。第二回第三回と検挙づき工廠従業員一〇余名。

これがため運輸クラブ内に止つて、いた團員三〇〇余名のうち、七一名は東西両署に検束され、夜から徹宵とりしらべが開始され、いたが、その結果某陰謀が発覚したものごとく、三一日佐竹ほか五九名は西署から聞きとり書とともに身柄を検事局におくられ、その大部分は同夜、脅迫、放火予備、公務執行妨害の罪名により、執行前の強制処分により広島刑務所に収容された。

リーダーを失い團員四分五裂警察の奸策に乗せられた争議団は自然壊滅

警察側のこのトリックにマンマとのせられ前衛分子のほとんど全部を失った争議團員は足並ややみだれはじめ、のこりの團員中には同日ただちに会社に復職願をだしたのが多くて、各方面から注視されていた同争議もじつにアッケない跡を止め、自然壊滅の気運になつた。争議解決の時期を誤つた要求の一部承認で折れたら、市民の声は、

「二月二六日、二一カ条の要求書を提出したが、小シャクな回答だと激昂。二九日罷業。運転台をうわれてさわぐ。六年八月二二日全国大衆党中央執委員、佐竹新一市議に懲役七年。

(原田日新聞 昭和6年1月15日)
瓦電争議團員 二〇名を起訴
暴力行為公務妨害傷害 脅迫罪の名で
佐竹新市(33) 村井一夫(31)

三一日午後一時半から西署では四〇数名の争議團員の中間派を放免すべく小山行政主任が訓示中争議応援のため西署全国各地の大衆党員ならびに労働組合員が残員収容のため西署付近を徘徊していたので署員は極度に緊張、四名を留置するとともに放免を一時中止して四〇名を留置していたが、二日朝にいたりそのうち一四名を釈放した。

平日に復帰

一一日市内線は例年の半数四九台で運転し、年内車輌數に復帰して乗客は不便を感じぬ程度となつた。

(大東市民史 P.195 昭和5年)
広島の電車罷業

一二月二六日、二一カ条の要求書を提出したが、小シャクな回答だと激昂。二九日罷業。運転台をうわれてさわぐ。六年八月二二日全国大衆党中央執委員、佐竹新一市議に懲役七年。

(原田日新聞 昭和6年1月15日)
瓦電争議團員 二〇名を起訴
暴力行為公務妨害傷害 脅迫罪の名で
佐竹新市(33) 村井一夫(31)

小山幸太郎、鉄物工植本筒雄、栗山政太郎、広島自労下井一郎、中越正雄、活版工村上四郎(24)、大塩安喜(31) (懲役4カ月)
栗山政太郎、広島自労下井一郎、中越正雄、活版工村上四郎(24)、大塩安喜(31) (懲役4カ月)
未業調査会を開催され、「二河公園で市民大会開催来る」一日午後一時を期し職工整理対策同盟会(記事略)

(原田日新聞 昭和6年1月7日)
未業調査会を開催され、「二河公園で市民大会開催来る」一日午後一時を期し職工整理対策同盟会(記事略)

(原田日新聞 昭和6年1月7日)
未業調査会を開催され、「二河公園で市民大会開催来る」一日午後一時を期し職工整理対策同盟会(記事略)

(原田日新聞 昭和6年1月24日)
横須賀二二〇〇人、佐世保一、五〇〇人、舞鶴工作廠七〇〇人、広工廠其他 七〇〇人、合計九、二〇〇人

解雇手当 一人平均 六八四円

(原田日新聞 昭和6年1月24日)
海工會に投げられた暗影
幹部から先づ職首の噂

(原田日新聞 昭和6年1月26日)
ある決意をほのめかし対策を幹部に一任 空前の整理を前に海工會全員委員会

(原田日新聞 昭和6年1月26日)
ある決意をほのめかし対策を幹部に一任 空前の整理を前に海工會全員委員会

(原田日新聞 昭和6年1月26日)
二四日午後七時公民館楼上、一五〇人以上「東京見物にいったのか」と幹部攻撃の声である。

(原田日新聞 昭和6年4月1日)
吉浦砲熐実験部内へ
大胆な不穏文書散布

(原田日新聞 昭和6年1月26日)
吳海軍工廠、吉浦砲熐実験部内に、半紙半枚大の謄写版ずりの不穩文書約二〇〇枚がまかれているのを、守衛が発見して大いにおどろき、急報により吳憲兵分隊及び吳警察署では、ただちに高等課員の総動員をおこない、極秘裡に散布者の捜査に着手

手したが、同文書は職員および減給・絶対反対のストライクを引きつらね、われら三〇〇〇人同胞を餓死戦線におくることに大反対の大デモをおこなえといつた内容のもので、同文書の撒布者は外部から絶対にほいりことができず、内部のものがまいたものか、あるいは内部と外部との連絡があつて、たくみにもちこまれたものか、嚴重な捜査をしているが、すでに目算はついたもののようになど容疑者数名を引致して、嚴重にとりしらべている。

(奥田日新聞 昭和6年4月3日)
めがね橋の不穏ビラの製作者は全協系の者

(4月) 一二日早朝第一門めがね橋での不穏ビラ撒布事件については、呉署、吳憲兵分隊では、職工整理を前にしているさいのこと、極度に緊急して高等課員は勿論、総出動しているほかに、外勤者の応援もえて各方面に極秘裡に大活動を開始しているが、一二日あざめがね橋で不穏ビラを撒布した犯人は同日ただちに吳憲兵分隊において逮捕し極秘裡に取調べており、犯人は六〇歳前後の自由労働者であるが、今回二回の不穏ビラ撒布事件は全協系の者が潜入して、たくみに策動して行動を開始しているらしい形跡があり、これがため当局では今回ひきつづいてお

こった不穏ビラ事件をもつとも重大視して、吉浦、ぬがね橋とともに同一犯人の所為とにらんでいるが……。

一二日あさに撒布されたビラは、相当多数の従業員の手にわたされているらしく、その影響の程度もおもんばかり、且、人心の動搖に対しても重大な結果を來し、尚引続き眞犯人がいなくなる活動を開始するやもしれず、必死の努力をもって捜査している。

(奥田日新聞 昭和6年4月7日)
三七〇〇余の工廠の職工さんあすいよいよ最後のおわかれ8日あさ7時半から解雇指名内示

(4月) 一二日早朝第一門めがね橋での不穏ビラ撒布事件については、呉署、吳憲兵分隊では、職工整理を前にしているさいのこと、極度に緊急して高等課員は勿論、総出動しているほかに、外勤者の応援もえて各方面に極秘裡に大活動を開始しているが、一二日あざめがね橋で不穏ビラを撒布した犯人は同日ただちに吳憲兵分隊において逮捕し極秘裡に取調べており、犯人は六〇歳前後の自由労働者であるが、今回二回の不穏ビラ撒布事件は全協系の者が潜入して、たくみに策動して行動を開始しているらしい形跡があり、これがため当局では今回ひきつづいてお

(奥田日新聞 昭和6年4月9日)
職工整理発表の日に不穏ビラ各所に撒布

(4月) 八日あさにいたり、めがね橋、清水通、本通附近、長迫町一帯に数百枚のビラがまされた。犯人いまだ逮捕にいたらず。

最後にさる四月三日あさ清水通り一帯においてビラを撒布しつつあった現行犯人、吳市曙町町田三郎(仮名)を逮捕するにいたって、同人の自白により連続的に重要人物たる

本通り三丁目 未田良一(25) 吉川町 谷井政之(25) 中通六丁目 吉川肇(22) (いずれも仮名)等の中心人物の就縛を見るにいたつたものである。

前記未田は東大文科三年在学中で三月中旬さる全協本部の命をうけ早稲田在学中の前記谷井とともに吳市内に潜入し、地元吳市における実際上の中心人物たる吉川らと相謀り、思想上の団結せよ」のビラ、呉署員警戒中、路上に午前四時さるビラまきの怪漢二名、一人は逮捕したがあと一人は、すぐたをくらました。知人をイモヅル式「メーデーを敢行せよ」「労働者諸君団結せよ」のビラ、呉署員警戒中、路上に午前四時さるビラまきの怪漢二名、一人は逮捕したがあと一人は、すぐたをくらました。知人をイモヅル式にしらべている。

(奥田日新聞 昭和6年4月6日)
吳工廠整理めあてに不穏文書撒布事件検挙者総数は一三名一事件の内容を呉署できよる発表――

吳工廠の整理予告の日をまえにして、さる三月三〇日早朝吉浦街道にとじらせるまきまでビラがまきちらされ、さらに同日吉浦砲痕実験部内に配布、ひきつづき二日あさ、ぬがね橋附付において日雇労働者を利用して配布、及び市内各要所の公衆電話に貼布され、さらに整理職工予告したる八日早朝またまた工廠各衛門附近、及び市内全般にわたって広範囲に撒布するなど、たくみに当局の警戒網をくぐり前後六回にわたって連續的

西検事が起訴、爾来、城子審判事の手により慎重などりしらべがつけられていたが、ついに今日予審終結。被告中、半渡登は保釈中病死したので、公訴棄却となり、ほか五名は全部治安維持法違反ならびに傷害、文書偽造行使、横領罪の嫌疑をもって神戸地方裁判所の公判に付するとともに、即日、この事件の新聞記事一切は解禁された。

ぶりは今次の日本共産党中央もつとも果敢にしてコミニンテルンの指示をきわめて忠実に遵奉したもので、検挙にさいしては三名の警官が、かれらの赤色テロの手によって重軽傷をおこうたほどだ。兵庫県下における同党の活動によつて重軽傷をおこうたほどだ。非常に重大視されていたものである。

いわゆる3・15、4・16事件の大検挙をのがれた残党員の手によつて、日本共産党第三次組織の準備がなるや、第三次共産党的巨頭田中清玄はひそかに一昨年九月来神戸、三菱製紙高砂工場にもうけられている高砂工友会の幹部山本久米喜と某所において会合し、山本を兵庫県地方の仮オルガナイザーにおした。山本は田中の命をうけ、ま

表 呉工廠

総務部一八人	砲痕部 水雷部四七九人	電気部三八人
造船部六四二人	機械部	
四六人	製鋼部六三九人	
潜水艦	砲痕実験部二〇人	
魚雷実験部一人	電気実験部	
部二人	会計部一一三人	医務部
合計	三、七二二人	

(奥田日新聞 昭和6年4月9日)
正午まで構内通行禁止

(奥田日新聞 昭和6年4月9日)
昭和六年四月八日 解雇人員発表

(奥田日新聞 昭和6年4月6日)
各所に流血の惨事を演じし死的検挙の兵庫共産党事件きよる新聞解説となる

検挙百数十名中五四名を起訴兵庫県下における第三次共産党事件(いわゆる2月事件)は昨年(昭和5年)3月より同八月まで半年にわたって、首魁、阿部義美(31)外五四名を神戸地方裁判所思惑係、有安、安達、渡辺芳太郎(三菱造船)佐藤春雄

外一味の被告を入党せしめた。

一方田中清玄らは、まもなく宝塚音楽学校教師須藤五郎および夙川の画家荒木某方にあつまり、山本より党的組織情勢をきくとともに、前記七名の党员について厳密なテストをおこなった。

しかるに其の後において、山本はかねてより警察方面に相当地を感じただちに上京し中央委員として活動するとともに故渡辺政之輔の薦陶をうけた闘士としてしられる阿倍義美をして兵庫県地方のオルガナイザーとして西下せしめ盛んに党员の獲得にとどめた結果、兵庫地方委員会の組織を見、阪神、神戸、姫路間を五地区にわかつ名地区の地区委員によって兵庫県地方委員会を組織し自ら委員長となつた。

かくて一昨年末まで漸く兵庫県下をはじめ京阪関西各地の組織がなつたので、こえて昨年（昭和5年）1月十四日より四日間、和歌山県二里浜の別荘でブレナム会議（拡大中央委員会）をひらき、田中清玄のほか一〇名の党首脳があつましたが、兵張りの役をつとめた。この会議

では党的組織および政治に関するチーズを決定したが、まず同年二月おこなわれた衆議院議員選挙を機として党的宣伝、党员の獲得を目的として勇敢なる選挙カンパニアを決行することとなり、しかしてカンパニアにおいては「一人の党员、一人の同調者といえども、現在の党として重要なから、逮捕を防衛するための武器をもつて起つこと」となり、神戸は海員と連絡があるのを、阿部は本部の命により、被告伊沢五三郎の手を介して、平野方面に住む密輸前科三犯の某よりローヤルハ連発六インチ拳銃一挺（一挺三五・六四）を買いもとめ、うち七挺を各地の党员にわたすため、党中央部佐野博におく、残余の四挺を被告奥島政繁宗武五郎、阿部義美がもち、これに銳利な匕首、鎧通などの兵器を所持したものにより、三名を一组とした行動隊を組織した。

（その活動）

こうして総選挙をひかえた（昭和5年）2月1日建國祭を機として選挙カンパニアを開始することになり、同日深更

日本共産党的海上への進出は

より翌日一二日拂曉にかけて、川崎造船所、市電従業員詰所（布引、長田車庫）鐵道廳取工場に

まずビラを散布し、同月一四日より一九日にかけて各被告人らは決死の覚悟をもって神戸、西宮、加古川、高砂の各工場地帯、

港および姫路三九連隊管内、とくへは岐阜県、浜松などにまででかけて、佐野博推薦その他のビラを散布した。

被告人富島栄次、津彰の二人は兵庫区川崎小学校前（川崎造船所正門前）で二月一八日午後四時ごろ上記ビラを散布中、逮捕にむかった兵庫署原田新次、福富喜弥太両巡査にきりつけ、原田巡査は右手および鎖骨部に治療三ヵ月、福富巡査は眼瞼に治療二週間の重傷をおつた。

また被告人広瀬常次、井上清次、藤井幸一は四月一九日鷹取工場前で同様ビラを散布中、逮捕にむかった須磨署員中間伊三二ほか一名にきてかかり、中間巡査は右太腿部上脣部に治療三ヵ月を要する重傷をおつた。

各地にばらまいたビラは総数一五万枚にたつし、これは傳單その他のを特に神戸市長田区妙泉寺一三二一八にもうけられた印刷局において元商大生田中清之助ほか姫路高校生、神戸某高校生徒らによって印刷されたものである。

（海上の活動）

今回がもつともさかんで、ことに神戸はその本拠をおいていたもので、その活動はもつともめざましかつた。

これは神戸には「海員組合刷新会本部」があった関係である。海員刷新会は大正一四年ごろ船

内において、下級船員にたいして水、火夫長によつておこなわれている高利な賃金制度の撤廃をスロー・ガンとして、田中松次によつて郵船内に組織された海上青年部と合同して、いよいよ拡充し、海員組合と対立して、陸上の元評議会と相呼応し左翼もつていたもので、幹部はつねに共産主義を遵奉し、すでに田中松次郎らは3・15事件その他の東京において検挙されている。

しかし刷新会は自然共産主義の貯水池となり、今回の第三次共産党海上部では第五地区として、宗武五郎を地区委員とし、伊沢五三郎と協力、党员の獲得につくじ、被告奥島政繁、名倉一三、岩本徳次、半渡登、宮田源吉、熱田豊作らを党员に獲得、メリケン波止場その他の沿港名所でビラを散布するほか、とく上海まででかけて「海上労働者諸君」と題する海上労働者によつてかけらるビラを散布しさかんに活動していくものであつた。

方（電車車掌）
井上敏一（25）同吉田町四（同上）
中峯新吉（22）同大橋町三間海
初第一次郎方
細地寛雄（20）同入江通（同上）
渡辺芳太郎（24）同笠松通一（機械職工）
井垣政一（21）同丸松通一（三菱造船職工）
佐藤春雄（27）ク大黒町一伊藤方（船員）
伊沢五三郎（32）ク長浜通一沖野方（無職）
池上留義（27）ク中山手七中島方（船員）
伊坂弘（21）ク湊東一條田方（船員）
佐藤春雄（27）ク大黒町一伊藤方（船員）
木村（船員）
藤田重実（24）岡山県眞庭郡端原村（船員）
平岡藤一（23）山口県玖河郡和木村（船員）
田中（船員）
藤田重実（24）岡山県眞庭郡端原村（船員）
白峯清士（21）神戸市勝浜町一今西方（職工）
林勝芳（21）神戸市神若通三（職工）
中原猪之治（21）神戸市旗塚町六（職工）
白峯清士（21）神戸市勝浜町一今西方（職工）
後藤耕作（21）北海道上川郡美瑛村原町四線一（職工）
松永太郎（21）神戸市御藏通五（職工）
丁目谷本方（車掌）
水口盛雄（22）神戸市日暮通（職工）
阿部義美（31）神戸市御藏通六（職工）
野田方（無職）
一本松正雄（21）神戸市荒田町二（職工）

<p>(铸造見習) 飯尾芳彦 (23) 愛媛県新居郡中 萩村 (無職) 福田常六 (26) 大阪市西淀川区 大和田町 (無職) 岩本徳次郎 (24) 佐賀県西松浦 郡東山代村 (船員) 名倉一三 (26) 愛知県幡臣郡三 和村</p> <p>田中誠之助 (21) 神戸市妙泉寺 町 (無職) 宮崎辰雄 (21) 神戸市上橋通一 (無職)</p> <p>松村隆雄 (22) 神戸市二宮町三 (学生)</p> <p>樋野忠次 (25) 兵庫県加古郡荒 井町 (三菱製紙職工)</p> <p>水野作治 (25) 兵庫県加古郡尾 上村 (同上)</p> <p>山本元次 (24) 兵庫県加古郡高 砂町 (同上)</p> <p>大西一男 (24) 兵庫県加古郡尾 上村 (同上)</p> <p>野村貞次郎 (24) 兵庫県加古郡 高砂町 (同上)</p> <p>佐藤安次 (25) 兵庫県加古郡高 砂町農人町 (同上)</p> <p>増田喜代治 (29) 姫路市京口町 (日本紡績播州連合会執行 委員長)</p> <p>姫野栄治 (21) 兵庫県加古郡高 砂町 (職工)</p> <p>岡政市 (25) 兵庫県加古郡荒 井町 (三菱製紙職工)</p> <p>松尾裁一 (24) 兵庫県加古郡別 府新野辺 (同上)</p> <p>天道正人 (28) 神戸市野田町四</p>	<p>田中誠之助 (21) 神戸市妙泉寺 町 (無職) 宮崎辰雄 (21) 神戸市上橋通一 (無職)</p> <p>立川方 (車掌) 井上清吉 (20) 神戸市妙泉寺町 (市電補助車掌)</p> <p>宮島英二 (21) 兵庫県佐用郡徳 久村 (無職)</p> <p>吉村 (外交員)</p> <p>治安維持法・文書偽造行使 矢野笛雄 (23) 神戸市御蔵通五 (鉄工)</p> <p>岡菊雄 (30) 神戸市上沢通 (無 職)</p> <p>(逮捕のもよ)</p> <p>宗武五郎 (昭和5年2月) 一七日未明</p> <p>党海員部伊沢五三郎ら四名にビ ストル、匕首の武装を命じて神 戸製鋼所にビラまきを敢行した 五郎は(?)えて一九日午前六時す き、党員池上留義とともに、 和田崎町三菱神戸造船所正門付 近でビラまき中、兵庫署中巡査 に追跡されて同巡査の足もとを めがけて、三発までピストルを はなち、池上とともに逃走、荒 田町一丁目某印刷屋の二階にか</p>	<p>富田孫吉 (27) 愛媛県海津郡津 島町 (水夫) 熱田豊作 (27) 千葉県匝瑳郡野 田村 (船員)</p> <p>藤井幸一 (21) 神戸市栄町六 (車 掌) 治安維持法ならびに傷害 広瀬常次 (24) 神戸市御蔵通四 立川方 (車掌) 井上清吉 (20) 神戸市妙泉寺町 (市電補助車掌)</p> <p>宮島英二 (21) 兵庫県佐用郡徳 久村 (無職)</p> <p>吉村 (外交員)</p> <p>治安維持法・文書偽造行使 矢野笛雄 (23) 神戸市御蔵通五 (鉄工)</p> <p>岡菊雄 (30) 神戸市上沢通 (無 職)</p> <p>(逮捕のもよ)</p> <p>宗武五郎 (昭和5年2月) 一七日未明</p> <p>党海員部伊沢五三郎ら四名にビ ストル、匕首の武装を命じて神 戸製鋼所にビラまきを敢行した 五郎は(?)えて一九日午前六時す き、党員池上留義とともに、 和田崎町三菱神戸造船所正門付 近でビラまき中、兵庫署中巡査 に追跡されて同巡査の足もとを めがけて、三発までピストルを はなち、池上とともに逃走、荒 田町一丁目某印刷屋の二階にか</p>
<p>富田孫吉 (27) 愛媛県海津郡津 島町 (水夫) 熱田豊作 (27) 千葉県匝瑳郡野 田村 (船員)</p> <p>藤井幸一 (21) 神戸市栄町六 (車 掌) 治安維持法ならびに傷害 広瀬常次 (24) 神戸市御蔵通四 立川方 (車掌) 井上清吉 (20) 神戸市妙泉寺町 (市電補助車掌)</p> <p>宮島英二 (21) 兵庫県佐用郡徳 久村 (無職)</p> <p>吉村 (外交員)</p> <p>治安維持法・文書偽造行使 矢野笛雄 (23) 神戸市御蔵通五 (鉄工)</p> <p>岡菊雄 (30) 神戸市上沢通 (無 職)</p> <p>(逮捕のもよ)</p> <p>宗武五郎 (昭和5年2月) 一七日未明</p> <p>党海員部伊沢五三郎ら四名にビ ストル、匕首の武装を命じて神 戸製鋼所にビラまきを敢行した 五郎は(?)えて一九日午前六時す き、党員池上留義とともに、 和田崎町三菱神戸造船所正門付 近でビラまき中、兵庫署中巡査 に追跡されて同巡査の足もとを めがけて、三発までピストルを はなち、池上とともに逃走、荒 田町一丁目某印刷屋の二階にか</p>	<p>高課村警部補一隊がねそつた が不在、午後六時飄然と帰宅し たところを逮捕された。 そのとき五郎は、ふところの 左手にピストルをぎりしめ、 とりださんとしたが、間髪をい れず鳥越刑事におさえられた。 阿部義美</p> <p>兵庫県における責任者阿部の 潜伏場所は神戸市御蔵通六丁目 駄菓子屋の二階。二三日前午前五 時金谷警部、浜中巡査部長の決 死隊がむかったが、外出のため 不在。午後六時半「只今」と朗 らかな声をかけて帰ってきた。 肩手拭の風呂帰りといった調 子。おどりかかった浜中部長、 西巡査が阿部の両腕を扼したが 場所がせまいので身動きできぬ といふのをおさえた。</p> <p>鈴木勝子</p> <p>「二〇日正午、勝子はただひど り神戸市長田区蓮宮町三丁目の 空室に不安の睡眠を貪っていた 。布団のかたわらには、ぬぎ すてられたスカート。いつでも とりだせるよう、きちんと整理 された荷物。それに女のみだし なみ、化粧品入りのハンドバッ ク。彼女はそれを忘れなかつた。 五郎は(?)えて一九日午前六時す き、党員池上留義とともに、 和田崎町三菱神戸造船所正門付 近でビラまき中、兵庫署中巡査 に追跡されて同巡査の足もとを めがけて、三発までピストルを はなち、池上とともに逃走、荒 田町一丁目某印刷屋の二階にか</p>	<p>これまで、江波公園で度々会合し て懇談会をひらき、極左系の不 穏ビラを各所に撒布して、党の 拡大強化につとめることを探 知した西署高等係では県特高課 の応援をえて大捜査の結果、前 記六名を逮捕。久しうにわたつ てとりしらべていたが、四日一 段落ついたので一件書類とともに 全員を送局した。</p> <p>天道正人</p> <p>二月検挙のあみの目をたぐみ にのがれた天道は同年八月一日 の赤色デーを期し、須磨廳取工 場附近にビラまきをしたが、顔 され、コウモリガサで猛烈な抵 抗をこころみたが逮捕。</p> <p>かくて同年九月ごろまでにシ ンパサイザーおよび海上関係者 は繰々検挙。九月一六日党員熱 田豊作の逮捕によって兵庫県に おける大検挙の幕はようやくと じられたのであった。</p> <p>（興田日新聞 昭和6年6月5日）</p> <p>広島に一ヵ所無料施療所設置 基督教天主教会で計画</p> <p>市は医師会の反対を恐る</p> <p>（興田日新聞 昭和6年6月5日）</p> <p>広島市上柳町、カトリック系 のキリスト教天主教会において は広島市内に一ヵ所の無料施療 所もなく、ルンペン階級が困 っているので、人類愛を基調とす る宗教的立場より、黙視するに しのびとあって、市内に施療 病院を設置する計画をたて、ま づその前提として小規模の施療 を開設すべくすでに医学の本場 であるドイツ国より、腕ききの 医師三名を招き、このほど広島 市社会課に対して助力応援方を 依頼したが、これに対して市社 会課では、市営の無料診療所設 置にさえ、広島医師会の反対を うけ、現在のところ診療はして も投薬はしない、ヘンテコな「実 費診療所」となっているので、 「一切無料の施療病院」の設置 にたいしては、また医師会の反 対があつてほこまる、との見地</p>
<p>チにいこう海員のむれにビラま き中、神戸水上署特高係巡査 に発見されセーラーナイフで抵 抗したが、たたきおとされて逮 捕。</p> <p>天道正人</p> <p>二月検挙のあみの目をたぐみ にのがれた天道は同年八月一日 の赤色デーを期し、須磨廳取工 場附近にビラまきをしたが、顔 され、コウモリガサで猛烈な抵 抗をこころみたが逮捕。</p> <p>かくて同年九月ごろまでにシ ンパサイザーおよび海上関係者 は繰々検挙。九月一六日党員熱 田豊作の逮捕によって兵庫県に おける大検挙の幕はようやくと じられたのであった。</p> <p>（興田日新聞 昭和6年6月5日）</p> <p>広島に一ヵ所無料施療所設置 基督教天主教会で計画</p> <p>市は医師会の反対を恐る</p> <p>（興田日新聞 昭和6年6月5日）</p> <p>広島市上柳町、カトリック系 のキリスト教天主教会において は広島市内に一ヵ所の無料施療 所もなく、ルンペン階級が困 っているので、人類愛を基調とす る宗教的立場より、黙視するに しのびとあって、市内に施療 病院を設置する計画をたて、ま づその前提として小規模の施療 を開設すべくすでに医学の本場 であるドイツ国より、腕ききの 医師三名を招き、このほど広島 市社会課に対して助力応援方を 依頼したが、これに対して市社 会課では、市営の無料診療所設 置にさえ、広島医師会の反対を うけ、現在のところ診療はして も投薬はしない、ヘンテコな「実 費診療所」となっているので、 「一切無料の施療病院」の設置 にたいしては、また医師会の反 対があつてほこまる、との見地</p>		

より市医師会の意向をよぐただすことになつてゐるが、実費診療所の設置当時とは時代もすすみ、かかる社会政策的事業にたいして反対することは、かえつて市医師会の不信をまねく結果となり、実際ににおいてルンパン階級には市医師会としても現に施療券をだして救済しているほどであるから、反対はすまいとみている。

(県田日新聞 昭和6年6月5日)

廣島市内の失業者統計

働きたくも職がない現世相の如実な表象

廣島市社会課では国道改修事業に使用する失業者の登録を、過般おこなつた際、参考のためにと彼等失業者群の動態について詳細に調査をしたが、それによると

登録者九五名のうち、

年齢においてもっとも多いものは、

二六歳以上三〇歳まで一九九名

三一歳から三五歳まで一八七名

三六歳から四一歳まで一二四名

二一歳より二五歳まで一二四名

などであつて、それでみると失業の原因が本人の労働能力の消失ではなく、実に現代経済機構の欠陥による、社会的失業といふのが、中に五六歳あるいは六〇歳以上の高齢者、二〇名もあるのは悲惨である。生活ぶりをみると

家族をかかえたもの九三七名うち一〇人以上の大家族五名、八人以上の家族四六名、五人以上の家族二七名、一人以上の家族一八一名

失業の原因は、

業務縮小による整理一八四、休止六二、業務廃止四八、軍備縮小四三、行政整理一三、傷痍疾病七五、労働争議一一、兵役關係一二、など。

(県田日新聞 昭和6年6月10日)

不穏ビラまき男格闘してとなりわる 广島市千田町の電鉄よじで犯人は元市役所の雇員

八日午後一時半ごろ广島市千田町電鉄よこの小暗い路地で一名の怪漢が不穏文書を電柱にはつておこなつた。西署千田町派出所 横山巡査が発見、追跡大格闘を演じ、横山巡査は右手に治療一週間を要する咬傷その他をおうたが、屈せずついに逮捕し、目下西署で公務妨害並に傷害罪として、とりしらべているが、この男は

市川は広島郵便局に全協日本通信労働組合支部組織をしてはじめに、全協広島地方協議会を結成、産業別労働組合会議の支部をつくる。

五条は県立工業電気科中退のち無産運動にあり、広島高等学校生徒、瓦斯電軌従業員らを誘導、労働争議に入れる。

胡川は神戸高商中退、大阪外国语学校露語科に入り、校内の読書会責任者の一人となり、昭和五年の衆院選舉に日本無産党員部に入つて、もっぱら争議の犠牲者ならびに家族のために、金品の寄附勧誘につとめているもので、二月末にもモップルの名によつて市内の各高専、中等学校に宣伝ビラを撒布し起訴猶予となつており漸次チロ化したも

ので、西署高等係ではこの傾向を重大視している。

なお同夜國泰寺町、関西病院付近にも同様二種類のビラを、吉田某が散布したことが判明し

犯人捜査につとめている。

(昭和7年)十月二十五日公判。検事の公訴事実にはいろいろとしたとき、被告人会議を要求してやまず、裁判長は市川、五條に退廷を命じ、傍聴禁止を宣言。弁護士から申したたた「裁

判長忌避」はただちに却下となり、西署が字品署の応援をえて大検挙。

主犯 広島市 市川 忍(28)
五条俊夫(26) 胡川 清(28)

の三名にかかる治安維持法違反事件。広島地方裁判所の予審が昭和七年九月七日終結。公判に付する。

市川は広島郵便局に全協日本通信労働組合支部組織をしてはじめに、全協広島地方協議会を結成、産業別労働組合会議の支部をつくる。

五条は県立工業電気科中退のち無産運動にあり、広島高等学校生徒、瓦斯電軌従業員らを誘導、労働争議に入れる。

胡川は神戸高商中退、大阪外国语学校露語科に入り、校内の読書会責任者の一人となり、昭和五年の衆院選舉に日本無産党員部に入つて、もっぱら争議の犠牲者ならびに家族のために、金品の寄附勧誘につとめているもので、二月末にもモップルの名によつて市内の各高専、中等学校に宣伝ビラを撒布し起訴猶予となつており漸次チロ化したも

動組合全国協議会ならびに日本赤色救援会の左翼組織が直接はじめて広島地方に手をのばしたことなどが判明した。

(昭和7年)十月二十五日公判。検事の公訴事実にはいろいろとしたとき、被告人会議を要求してやまず、裁判長は市川、五條に退廷を命じ、傍聴禁止を宣言。弁護士から申したたた「裁

判長忌避」はただちに却下となり、西署が字品署の応援をえて大検挙。

主犯 広島市 市川 忍(28)
五条俊夫(26) 胡川 清(28)

の三名にかかる治安維持法違反事件。広島地方裁判所の予審が昭和七年九月七日終結。公判に付する。

市川は広島郵便局に全協日本通信労働組合支部組織をしてはじめに、全協広島地方協議会を結成、産業別労働組合会議の支部をつくる。

五条は県立工業電気科中退のち無産運動にあり、広島高等学校生徒、瓦斯電軌従業員らを誘導、労働争議に入れる。

胡川は神戸高商中退、大阪外国语学校露語科に入り、校内の読書会責任者の一人となり、昭和五年の衆院選舉に日本無産党員部に入つて、もっぱら争議の犠牲者ならびに家族のために、金品の寄附勧誘につとめているもので、二月末にもモップルの名によつて市内の各高専、中等学校に宣伝ビラを撒布し起訴猶予となつており漸次チロ化したも

ついで前記二名の自由で「第二無産者新聞」「無產青年」の責任者が畠常次郎であり、モップルの責任者は胡川清、「戦旗」の責任者は伊藤正朔であること、また全協広島支部協議会ならびに各産業別組合の支部が相当根強く拡大されていることなどがわかつたものである。

全協事務局長は市川忍でベンネームを太田または川口と称し、畠は安田、五条俊夫は森などの変名を用い、小笠原などとともに事務局員として活動していることが分明になり、その所長に着手したが不明だった。

たまたま専売局女工上野良子が全協専売局分会の責任者で同局には多数の同志がいることが明らかとなり、五月四日上野良子を東署に引致取調べにより組合の組織は自白したが、全協のアジトや同志の所在については口を緘してかららしいので、東署は一応上野良子を釈放し竹内主任、岡野巡查部長、黒山巡查が同署にかねて尾行したところ放送局にいたので、東西両署が連絡をとりきこんだので、同家に出入している小野一明を西署千田町某尾行したところ放送局にいたので、東西両署が連絡をとり前記伊藤、小野ほか数名を四月十六日にいたつて一斉検挙した結果、広島市を中心として「戦旗」支局がもうけられていることが判明した。

(中國新聞 昭和7年9月7日)
5・4事件 一斉検挙

昨年(昭和6年)三月ごろ東署特高係員が広島放送局員伊藤正朔ほか数名が「戦旗」の支局をつづっているとききこみ、同時に西署特高係員も西地方町某家に「戦旗」支局をもうけ不穏出版物を印刷配布しているとききこんだので、同家に出入している小野一明を西署千田町某尾行したところ放送局にいたので、東西両署が連絡をとり前記伊藤、小野ほか数名を四月十六日にいたつて一斉検挙した結果、広島市を中心として「戦旗」支局がもうけられていることが判明した。

そのほかいづれも全協の幹部である。逮捕後ただちに家宅捜査を開始したところ全協そのほかの証拠書類を発見するにいたった。そこで警察当局は一味について詳細な調査を開始したが、かれらはいづれも口を緘してかららず調査は困難をきわめたが、西署において全協木材労組の責任者池東完を検挙、とりしらべたところ、広島地区協議会の責任者の会議はいつも郊外高天力原で開いたことを自白したので、西署三宅高等主任、組合部長、原巡回などが同所に急行、くさむらの中からメモ一枚と乗ねこしの包装紙を発見、これを市川忍、胡川清、五条俊夫、小笠原豊などにつきつけた結果、かれらもついに口をわり一味の関係ならびに犯罪を自白するにいたつたものである。

承諾して昭和六年一月上旬ぐろ
小原武臣と広島市内で会合し赤
救地区の確立につき協議して組
織に着手し、自らその責任者と
なって、知り合いの広島高校生
徒新田養三、同佐々木益三にそ
の情をつげて助力を乞い、広島
市段原町高村亮次方を赤救援本部
との連絡アドおよび事務所とし
同年一月中ごろから原民喜のア
ッセンによって直接救援会本部
との連絡をたもう、同年二月は
じめには赤色救援会本部から日
本赤色救援会広島地区委員会と
して確立の承認をうけ、同年三
月から旗幟広島支局（責任者伊
藤正朔）と連絡をとり、また同
年三月全島広島地方支部協議会
が成立したので、これとも連絡
をとり共同戦線に出て左翼出版
物配布網を拡大し、いよいよそ
の活動に入つたが、その拡大強
化をはかるため

仁者

二二九

中國新聞 昭和1年9月1日

(一)赤色救援会広島地区の結成
胡川清はかねてから広島で日本赤色救援会広島地区委員会を組織しようとしていたところ、昭和五年十二月下旬ごろ東京赤色救援会本部所属の小原武臣(慶應大學生)から広島に赤色救援地区的オルグとして帰広を命ぜられた同学生原民喜から赤色救援会本部の確立を命ぜられ、これを

(二) 広島最初の全協組織

を、ついで同年三月ごろ松本徹
に対しても全協日本金属労組広島支部
支部を、また五条は昭和六年一
月はじめ吉田義雄に対し、全
日本出版労働組合広島支部を、
二月中ひる山本正一に全協日本
木材労働組合広島支部を、いざ
れもその責任者となつて組織する
ようすすめ、小笠原、村上、
寺尾、松本、吉田、山本はこれ
を承諾して責任者となつて結成す
ることにし(市川は全協日本大
通信広島支部、五条は全協日本
交通運輸広島支部の責任者とな
る)

全協広島地方協議会

大藤車一は、広島郵便局從業員三名を獲得して、全協日本通信広島支部広島郵便局分会を松本武司は、広島國有鐵道從業員新原博ほか四名を獲得して、全協日本交通運輸広島支部國鐵分会をそれぞれ結成し、小笠原は、広島東洋紡績広島工場を目指として、職工児玉幸夫ほか五名を誘導して、全協日本織維労組広島支部東洋紡分会を松本徹は、日本製鋼所広島工場を目指とし、寺尾一幹は、帝國人絹広島工場を目指とし、五条俊夫は、広島瓦斯電軌株式会社ならびに広島バス株式会社を目指として、それぞれ分会を組織すべく画策した。

支部の結成ができたので、市川、五条は、同年三月九日、広島市段原町野村種男の裏さしき

と提議し五条そのほかの責任者は異議なくこれを可決した。

(2) 三月下旬の協議会で4・10

で、そのほかの産業別支部責任者と会合し、市川から各産業別組織が結成されたことをつけて、全協広島地方協議会を結成するむねをばかり他の責任者はこれに賛同して、ここに全協広島地方支部協議会を確立し、市川が協議会の議長となり議案の提出、議事の進行をつかさどつて、この第一回の席上で、同協議会は在広島「戦旗」支局および日本赤色救援会広島地区委員会と連絡をとり戦線統一にであることを決定。

第2回協議会の席上で、事務局の設置の件を協議決定し市川は事務局長、五条、畠は事務局員に就任した。

また上記野村方における数次の協議会で3・15、4・10、4・16、5・1など無産解放運動上の各記念カンパニアにつき、協議決定した。

(1) 三月九日の第一回協議会で3・15記念カンパニアにつき市川は各責任者に対し、「三月十五日は日本共産党が検挙された重要な記念日だから、各支部では闘争力と情勢に応じて勇敢なカンパニア（ビラまき、ボスター）をばり、あるいは座談会などををおこない、もって大衆に革命意識を注入し、党および全協の大強化をはからなければならぬ

と提議し五条そのほかの責任者は異議なくこれを可決した。

(2) 三月下旬の協議会で4・10

記念カンパニアにつき、即ち左翼三团体（労働農民党、日本労働組合評議会、日本無产青年同盟）が結社禁止を命ぜられた記念日に結びつけて闘争せねばならぬと協議決定した。

(3) 四月上旬の協議会では、4・16記念カンパニア——昭和四年四月十六日に日本共産党が再度全国的な一斉検挙をうけた記念日にもすびつけて、闘争するよう協議決定。

そのころ小笠原が目標工場として全協日本織維の分会を組織しようとした東洋紡績広島工場内の職工が賃銀値下げ、職員のために動搖していたのに乘じて彼等の不平不満を激発させ、もってストライキにみちびきひいては広島全産業のゼネストに展開させるため4・16カンパニアにもすびつけて全協産別各支部は織維支部に応援のカンパをするのを決定。

斐合宿所および千田町広島バス従業員詰所に散布。

なほ、市川および小笠原は

四月中ざる上記野村某方うらざしきで「親愛なる兄弟」まづぐと題して、会社の暴逆を攻撃し「男女工は団結して

会社と闘い、即時ストライキ、委員会を組織せよ」と主張、労働者に対して宣伝煽動的に革命的思想を注入したビラ一〇〇枚（全協日本織維労組広島支部名義）をつくりて東洋紡績工場に散布。

また、市川、小笠原、村上の三名は4月十二日ざる野村方で「親愛なる労働者諸君」と題した全協日本食料労働組合広島支部名義のビラ三〇〇枚をつくり、四月十日ざる村上文二が広島地方専売付近に撒布。

(イ) 全協ないし日本共産党的組織内に獲得するため昭和六年二月はじめから同年三月はじめまで数回、広島市段原町野村種男の裏さしきで研究会（小笠原、村上、松本ら出席）

(ロ) また同年二月はじめから

同年四月はじめまで同所でひらかれた、広島地方専売局女工上野良子ら数名の研究会に

いつれも指導者として出席し

て「国際闘争の経験からの学べ」

と題したパンフレットを配布

され、またそのころ三月一日

万歳事件にさいして檄す」「4・10、4・16記念日にさいして檄す」などと題した全協名義のビラ「メーデー闘争方針の訂正についての指令」と題した全協中央常任委員会名義の指令「工場内における組織活動」と題した全協・日本交通運輸労働組合名義の救援ニュースを四十五部うちり、協議会開催のたびに各支部責任者に頒布し

分會責任者松本武司、木材責任者、山本正一らに交付して各所

属分会員らに配布開読させた。

(ハ) 市川は

号の配布をうけて閲読し、ついで芸ビル四階の小笠原に開読させた。

(毎日新聞 昭和7年11月26日)
被告人会議を要求して騒ぐた
だちに傍聴禁止 広島共産党事
件

日本共産党および日本共産青年同盟指導下にある日本労働組合全国協議会ならびに日本赤色救援会の左翼組織が直接はじめて広島地方へ手をのばした画期的な思想運動事件として注目されていた。

広島市牛田町元広島郵便局員
通信書記 市川 忍 (28)

同 白島中東元衡器製作
職工 五条俊夫 (26)

広島県安芸郡温品村
胡川 清 (24)

の三名にかかる治安維持法違反事件の公判は(昭和7年11月)二十五日前十一時から広島地裁で小玉裁判長係、片岡検事立

会のものと開廷、検事の公訴事実にはいろいろとしたとき、突如として市川が手をあげて発言をもどめたが、裁判長は検事の陳述があつたのち発言の機会をあたえるからと、おしなだめようとしたところ、市川はなおも「法廷にのぞむにあたつてわれわれの能度方針を決定するため、被告人の協議をゆるしていただきたい」と被告人会議を要求し、

五条もまた立って何か発言しようとし、裁判長の制止をきかぬので、裁判長は、「裁判長の指揮にしたがわなければ退廷を命ずる」と宣言。なおも両名とも発言しようとするので、ついに裁判長の命令により両名とも看守の手で退廷させられ、つづいて傍聴禁止を宣言し、傍聴人一同はいざれも静かに素直に退廷した。ときに一時二五分。

なお検事の公訴事実の陳述は市川が発言して混乱中に検事が立つて発言したので、よく書きとれなかつたが、「予審終結決定書の事実について審理を求める」と簡単に陳述したもようで、傍聴禁止の後の公判は弁護士から申したてた裁判長の忌避はただちに却下となり審理を続行されたもようで被告人を退廷させたまま、裁判長と両陪席判事、検事と弁護士だけで、どうしらべがおこなわれたようである。

(毎日新聞 昭和7年12月6日)
広島共産党員に判決言い渡さる不穏の絶叫をあげて公判庭を退場

五日午後三時から、被告欠席のまま審理をおわった事件の判決は、同地方裁判所の陪審法廷でひらかれ、これよりさき同法廷は東西両署の私服巡回をはじめ、被告らの関係者及び家族がギッシリとつめかけ、かくて裁判長は型の如く身分じらべの

ち

市川忍を懲役四年

(未決30日通算。求刑5年)

五条俊夫同 三年

(未決30日通算。求刑3年6

月)

五条の両名は大手をひろげ、「彈圧下における欠席裁判は絶対反対である。すみやかに同裁判の撤回を要求する。日本共産党万才」と大声をあげて退場した。

(毎日新聞 昭和8年2月18日)
転向の被告へ三年

片相手四年を科せられ豪語

広島の第一次共産党事件に検

挙され、控訴中の、

広島市牛田町
同市 無職 市川 忍 (29)

の両名にたいしては十七日午後

広島控訴院で鹿島裁判長から原

審どうり、市川に懲役四年、五

条に同三年(ただし、いづれも

未決通算三〇〇日)の判決言いわたしがあった。

控訴審では、五条が入獄中思

想の転向をなし第一回の公判でこれをのべたので、万一公判廷において市川と衝突してはと、別に判決のいいわたしをした

が、市川は「思想犯にたいする極刑反対」など大声でさけび退

廷した。

(大島市民史 昭和7年3月の項)
日本共産党中國地方委員会

昭和六年五月四日の全協事件

一齊検挙後、(吳から)広島への

がれてきた古末憲一は5・4事

件で保釈中の寺尾一幹と連

絡。

昭和六年七月岐が上京、日本

共産党に入党してかえり、ただ

ちに古末、寺尾が入党。日本共

産党中央地方委員会を創立。松

本武司も入党。

岐を吳に派遣。かれは吳で服

部久雄と活動。一〇月上京し、

これにかわって寺尾一幹が吳

に。

この年九月一八日「満州事変」

おこる。反戦運動を勇敢におこ

なう。

日本共産青年同盟は吉岡道人

をオルグとして活動。全協など

再組織。

昭和七年三月第一次検挙三〇

〇余名。

検挙もれとなつた吳海軍の水

兵細胞は昭和七年七月満期退団

となつた木村莊重を中心に坂口

喜一郎、平原基松が組織の再建

に活動。

昭和七年一〇月はじめ、錦織

彦七、滝川恵吉のオルグが広島

市にきたり本格的に組織に活動

したところ、一〇月三〇日

の熱海会議に中國地方を代表し

て出席した錦織彦七の検挙に端

を発して広島、吳西市の検挙となる。

前記 岐常次郎 (22) 広島での共産党的草分け。昭和六年の初めの広島共産党事件(市川、五条ら)昭和四年の県下極左大

検挙(玖島 末元)にも関係してたが、そのつど、たくみにのがれ、昭和七年三月五日の事

件には前年一〇月に上京。検挙

事件で共産青年同盟中央委員長

の要職にあり。

寺尾一幹。一審は懲役五年、

控訴して転向手記をみとめら

れ、懲役三年、執行猶予を得。

しかし昭一六年四月、マルクス

資本論を研究中検挙されて懲役

四年に処せられ、一審で服罪、

四年に処せられ、一審で服罪、

終戦直後に出所。

昭和七年五月、吳署はのちに

十月事件で検挙した平原基松を

とられ、とりしらへののちに釈

放したが、このとき坂口の「そ

びゆるマスト」はすでに第一号

を発行しており、ともに海軍赤

化の具体的運動にはいついた

ものにかかわらず、吳署はこれ

を探知しなかつた。

木村莊重は在役七年におよぶ

も一等兵。かねて同人の日記に

より左傾思想を伺われ、進級停

止をくつっていたもの。満期退団

は同人がひとり。十月事件にと

らわれるも転向を肯んぜず。終

戦後、郷里鹿足郡木部村にかえ

り共産党村長として永らく在

任。村内の共産化につとめた。

員蒲田政雄を逮捕。

翌日未明、龜田勢、大下一二、佐々木修三、山根の四名をつづいて二三日、茂渡義人。一六日、山崎政高と一味を逮捕。

さらに蒲田政雄に学生自治会のキャラップをゆずった片岡義夫のゆくえを追及した結果、五月

五日になり手配により広島署が逮捕。これにより、吳地区の組織のアウトライアンをし工廠細胞もついに

署が逮捕。これにより、吳地区の組織のアウトライアンをし工廠細胞もついに

そおって、かぎをかけてひそん
でいる部屋のドアを開けやぶつて
はいり、松本京一を逮捕。(寺尾
はついに発見されなかつた)

二六日宇都宮、野原、小川の
三名、三〇日池上を逮捕。(いつ
れも工廠労働者)

広村の訓導も
一方シンバとして活躍してい
た広村小学校訓導、城戸薰を逮
捕。

(十川巡査の五名がむかつた
が、おりから児童を引率して郊
外からかかるところ。児童たち
の面前で逮捕するにしのびず、
途中を尾行して学校にかえった
ところを逮捕)

同六日 田中農を逮捕した。
吳署に検挙したもの五二名。

寺尾一幹はすでに危険をしり
2時間後の列車で吳を脱走する
準備をしていたもの。

留置場をやぶつてのちは庄原
から山陰にまわって上京。東京
で運動中逮捕された。

同人は京大経済学部2年終了
後、京大事件で逮捕され、保釈
中逃走して吳市に潜入。清水通
りに家をもち海軍工廠へさまざま
の手段ではたらきかけていた
もの。

ハウスキーパー、林寿恵子は
同志社英文科を4年卒。日仏会
館に勤務中、京大に在学中の寺
尾としりあい左領。同年10月檢
挙。寺尾の命により名古屋市
青バスの車掌となつて赤化運動
中、寺尾をおつて来興したものの
こんどの事件でも起訴猶予と
なり一時上京したが、ふたたび
来興し、10月事件オルグ錦織彦
七と同棲。同事件でも釈放され
づけ除名処分に付した。

るだけで、それも家もしらねば
本名もしらない。

上田稔方には、松本京一、茂
渡義人の両名が下宿していた

渡義人の両名が下宿していた

が、部屋がちがつてるので、
たがいにおなじ運動にたずさわ
っている党員とはしらなかつた。
毎日かおをあわしていてす
ら、こうで、その組織のヒミツ
はおどろくのはかはない。これ
で一応黨の組織は潰滅したが今
後いつ再建されるかしれない。

(大吳市民史P24 昭和7年3
月)

寺尾一幹はすでに危険をしり
2時間後の列車で吳を脱走する
準備をしていたもの。

留置場をやぶつてのちは庄原
から山陰にまわって上京。東京
で運動中逮捕された。

同人は京大経済学部2年終了
後、京大事件で逮捕され、保釈
中逃走して吳市に潜入。清水通
りに家をもち海軍工廠へさまざま
の手段ではたらきかけていた
もの。

ハウスキーパー、林寿恵子は
同志社英文科を4年卒。日仏会
館に勤務中、京大に在学中の寺
尾としりあい左領。同年10月檢
挙。寺尾の命により名古屋市
青バスの車掌となつて赤化運動
中、寺尾をおつて来興したものの
こんどの事件でも起訴猶予と
なり一時上京したが、ふたたび
来興し、10月事件オルグ錦織彦
七と同棲。同事件でも釈放され
づけ除名処分に付した。

たが、そのご（昭和8年）肺を
わざらい死去をつたえられる。

（大吳市民史P24）

吳工廠 山口労務主任談

「オルグ寺尾の家宅捜査にあ
たり、党中央部からの指令にま
じって、海工会上田君」と鉛筆
でほしきがきされた紙片を発見
したのが工廠検挙の端緒となっ
た。『海連時報』に『無名氏』と
称して時々激越な論文の投稿が
あり、吳署からあやしいとの、
といわせがあつて、しらべた

ところ造船部製図工海工會出版
部理事の上田稔であることが判
明、以来吳署が監視していたも
の。

同人は非常に気がよわく廠内
の同志およびその連絡内容など
を、みんなしゃべって、しまっ
たので他是守衛の手によって
佐々木万寿司、川達鉄之助、
西川成実、重田安一、宇都宮
寿作、小川一雄、野原一男、
池上繁雄、の8名がただちに
検挙された。」

うち宇都宮以下3名は説教不
十分または微罪で釈放、5名が
寺尾と関係ある共産党関係で送
局された。

（中国新聞 昭和8年5月23日）

3・5事件 起訴者

嶋常次郎（23）本籍広島市西新
町。住所不定。元職工。党
及共青中国地方オルグ。

古末憲一（27）吳市和庄町。住
所不定。東大文科中退。党
廣島地区オルグ。

寺尾一幹（26）山県郡八重町大
字寺原。京大文科中退。党
吉岡道人（24）（本）高田郡生桑
村字桑田。広島市千田町一
丁目同志社大学中退。共青
中國地方オルグ。

松本武司（29）（本）安芸郡海田
市町。広島市大須賀町。下
関商中退。元広島駅機関庫
勤務。山陽線オルグ。

村上文二（23）（本）広島市荒神
町。住所不定。広島県工卒。
大工職。党中國地方書記局
員。

なお七年一〇月一〇日入廠し
た砲熓部仕上工上工横はほんも
のの共産黨員だったことが、同
一七日同部検査工便所に「〇〇
をこなし、〇〇〇をまもれ」と
激越なアジ文句をかいだことで
判明。翌日ただちに解雇したご
とく、廠内のとりしまりは厳重
におこなつてゐる

（上田は検挙一週間まえに結
婚したものの、転向をちかつて起
訴猶予。）

たが、そのご（昭和8年）肺を
わざらい死去をつたえられる。

（大吳市民史P24）

「オルグ寺尾の家宅捜査にあ
たり、党中央部からの指令にま
じって、海工会上田君」と鉛筆
でほしきがきされた紙片を発見
したのが工廠検挙の端緒となっ
た。『海連時報』に『無名氏』と
称して時々激越な論文の投稿が
あり、吳署からあやしいとの、
といわせがあつて、しらべた

ところ造船部製図工海工會出版
部理事の上田稔であることが判
明、以来吳署が監視していたも
の。

同人は非常に気がよわく廠内
の同志およびその連絡内容など
を、みんなしゃべって、しまっ
たので他是守衛の手によって
佐々木万寿司、川達鉄之助、
西川成実、重田安一、宇都宮
寿作、小川一雄、野原一男、
池上繁雄、の8名がただちに
検挙された。」

うち宇都宮以下3名は説教不
十分または微罪で釈放、5名が
寺尾と関係ある共産党関係で送
局された。

（中国新聞 昭和8年5月23日）

3・5事件 起訴者

嶋常次郎（23）本籍広島市西新
町。住所不定。元職工。党
及共青中国地方オルグ。

古末憲一（27）吳市和庄町。住
所不定。東大文科中退。党
廣島地区オルグ。

寺尾一幹（26）山県郡八重町大
字寺原。京大文科中退。党
吉岡道人（24）（本）高田郡生桑
村字桑田。広島市千田町一
丁目同志社大学中退。共青
中國地方オルグ。

松本武司（29）（本）安芸郡海田
市町。広島市大須賀町。下
関商中退。元広島駅機関庫
勤務。山陽線オルグ。

村上文二（23）（本）広島市荒神
町。住所不定。広島県工卒。
大工職。党中國地方書記局
員。

町。広島市皆実町。広島市立商業卒。無職。同上。	村上金彦(22)(本)広島市小町。 広島市千田町一。元小学教員。共青広島地区キャップ。	花野岩男(23)(本)安芸郡江田島村字切串。広島市南竹屋町吉田方。帝國人絹職工。共青帝人細胞キャップ。
仁井田教一(28)(本)佐伯郡宮内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	丸川昇一(24)(本)広島市河原町。住所同。文撰工。共青印刷。小学卒。共青市川印刷細胞キャップ。	石川市松(27)(本)広島市舟入町。住所同。印刷工。市川印刷。小学卒。共青市川印刷新聞細胞キャップ。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	村上四郎(26)(本)広島市觀音町。住所同。市役所書記補。活版職工。市川印刷。尋常卒。全協出版責任者。島本隆司(26)(本)広島市己斐任者兼官厅責任者。	丸川昇一(24)(本)広島市河原町。住所同。文撰工。共青印刷。小学卒。共青市川印刷新聞細胞キャップ。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	重田安一(28)(本)(住)吳市元安勝(21)(本)(住)広島市金屋町。印刷工。市川印刷。高小卒。同盟新聞細胞メンバー。	村上四郎(26)(本)広島市河原町。住所同。市役所書記補。活版職工。市川印刷。尋常卒。全協一般使用人責任者。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	松本京一(28)(本)広島市鷹丘町。吳工廠水雷部製図工。吳海軍工廠水雷部製図工。吳二中二年修了。党工廠細胞キャップ。	重田安一(28)(本)(住)吳市中学卒。全協一般使用人責任者。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	岩村大次(25)(本)広島市天王寺区下寺町四。住所不定。東京帝大卒。党中央中國地方才媛。	川窪鉄之助(25)(本)京城府蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	岩村大次(25)(本)広島市鷹丘町。住所不定。元広島駕機尋常卒。同上メンバ。	廉仁傑(24)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	岩村大次(25)(本)広島市鷹丘町。住所不定。元広島駕機尋常卒。同上メンバ。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	西川成美(25)[野田こと]工廠上。	廉仁傑(24)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	西川成美(25)[野田こと]工廠上。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	宇都宮寿作(32)[生田こと]同上。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	池上繁雄(26)[白川こと]同上。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	上田稔(27)[原こと]工廠造船部製図工。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	小川一雄(26)[杉本こと]工廠魚雷実験部製図工。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	佐々木万寿司(24)(本)賀茂郡川上村大字飯田(住)吳市西愛宕町。小卒。吳工廠細胞メンバー。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	佐々木万寿司(24)(本)賀茂郡川上村大字黒島、予備海軍二等機関兵曹、當時吳(水兵)対策委員会キャップ。坂口喜一郎(32)とともにピヨーローを結成し、吳海軍工廠細胞および入党対策委員会を組織して海軍軍人間に入党を獲得すべく狂奔を開始した吳市を中心とする一斉検挙のため吳市西白島町。報國火災外交責任者。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	片岡義夫(27)(本)高田郡粟屋村(住)吳市本通一四丁目。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	佐々木修三(22)[原こと]工廠造船部製図工。	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	山根重義(23)吳市二川町一五	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	山崎政高(24)吳市籍通九丁目	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。
内村宮迫。住所不定。尋小町。立商業卒。無職。同上。	林寿恵子(20)	川窪鉄之助(25)(本)京城区蓬萊町4。(住)広島市。広島高師学生。同上細胞メンバー。

かり検挙したが、この両名は広島県賀茂郡某尋常小学校訓導山本たきえ（25）および、つぎえ（21）と連絡して、大阪では折戸が責任者となり、京大出と自称する大橋某と折戸方でしばしば秘密会合をひらき、発禁の左翼本を教材として若い女性に、赤い思想をふきこみ前衛分子の獲得に奔走していたもので、広島県下ではすでに、たきえ姉妹が「文新サークル」をつくって女教員、女学生、職業婦人など二〇数名にはたらきかけ、たきえは宣伝部長として、妹のつぎえは連絡部長として、秘密裡に、組織の拡大強化のために活躍を開始していることが判明した。

（毎日新聞 昭和7年12月10日）

奇しき運命のきずな

父処刑の日 河上ヨシ子の居所をつきとむ

河上博士の一家 悲澹たり

河上博士の懲役五年の判決といわたしのあつた日、折も折、博士令嬢ヨシ子（22）の最近の消息が警視庁特高課の手によりつきとめられ、且下極秘裡に捜査中。

ヨシ子さんは昨年九月阪急百貨店庶務係帳簿係の職をやめて地下にもぐり活躍。昨年一〇月党再建当時は、城東区龜井戸町岡林方のみをひそめて大阪の同

志と連絡し、夜間は男装してビラまきや街頭連絡に活躍し、危険のせまるとともに、津田青楓画伯の名で鎌倉の某別荘に一ヵ月以上潜伏。最近某男爵邸に出入していた事実がわかったので、且下捜査中。某男爵は物質上の援助もしていた形跡もある。

（毎日新聞 昭和8年8月13日）
広島共産党事件公判開廷

日本共産党中央地方委員会関係、第一次検挙によって、広島地方裁判所に起訴された被告二名の公判は、被告の法廷内の会議、騒擾その他の法廷戦術をさけるため、一人ひとり分離して公判をひらくこととなり、その第一回、広島市荒神町、党中央地方書記局メンバー、村上文二（23）の治安維持法違反にかかる公判は八月二一日午前九時から広島地方裁判所小玉裁判長のかかりで開廷したが、同志の傍聴もなく、しかも被告は未決に在所中の思想の転換を行っていないので、公判廷は予想外に平穏であった。小玉裁判長から型のことき身分のとりしらべがあるのち、和田立会検事より公訴された。小玉裁判長から型の事実の陳述をなし、事実審理にはいったが、被告は広島県立工業学校建築科を卒業後、太工に従事していたが昭和六年二月ご

ろより全認広島支部協議会にいり、同年の五月検挙されて同六月起訴猶予となり、さらに広島地区委員会の建設に奔走昭和七年の二月に共産党入党して、出入していた事実がわかったので、且下捜査中。某男爵は物質上の援助もしていた形跡もある。

（不遇であった自分の立場や一般労働者のあわれた生活状態をみて、自然に労働問題に興味をもち、つまらんながらも左翼文献などによってこの方面的研究をしているうちに、資本主義社会の矛盾を発見し我々プロレタリアの社会をつくるには横暴なる資本主義制度を破壊して共産主義によるほかはないなど、かんがえたからである。と供述していよいよ事実の審理にいらんとするや、裁判長は公安に書がるからと一〇時一〇分公開を禁止し公判を続行した。和田立会検事より懲役四年の求刑があり〇時一〇分閉廷した。判決申しわたしは九月四日。

（毎日新聞 昭和8年8月24日）
おそるべき教壇の赤化実情

広島共産党の公判つづく村上訓導の審理

河上博士の懲役五年の判決といわたしのあつた日、折も折、博士令嬢ヨシ子（22）の最近の消息が警視庁特高課の手によりつきとめられ、且下極秘裡に捜査中。

ヨシ子さんは昨年九月阪急百貨店庶務係帳簿係の職をやめて地下にもぐり活躍。昨年一〇月兌再建当時は、城東区龜井戸町岡林方のみをひそめて大阪の同

ろより全認広島支部協議会にいり、同年の五月検挙されて同六月起訴猶予となり、さらに広島地区委員会の建設に奔走昭和七年の二月に共産党入党して、出入していた事実がわかったので、且下捜査中。某男爵は物質上の援助もしていた形跡もある。

（毎日新聞 昭和8年8月24日）
島本隆司 二年求刑

（毎日新聞 昭和8年8月29日）
島本隆司 二年求刑

（中国新聞 昭和8年10月5日）
赤い学生 井ノ口 五年の求刑

3・5事件のうち、京都府天田郡下農富村字荒川 元広島高師臨時教員養成所生徒 井ノ口俊雄（22）にかかる治安維持法違反、公務執行妨害事件の公判は一〇月四日前九時四〇分広島地方裁判所小玉裁判長、和田檢事立会。特別傍聴席には、高橋元文理大主事、中邑市労務課長らの顔がみえた。

井ノ口は昭和六年、畠常次郎らと交遊し七月ごろ県内に全協の確立を企て、同年二月退学

処分になつたが、共産青年同盟に加入、そのころ高等師範（臨教）廃校問題の勃発にさいし学生層に働きかけ共青細胞を組織、昭和七年三月全協（地区）組織が潰滅するや準備会を結成し同年四月二九日夜街頭連絡中を西署に検挙され同夜逃走、五月一日西署特高若林巡回に発見され逮捕をまぬがれるためにアイクで同巡回の腹をさして全治二週間の負傷をさせて逃走したという事件。懲役五年の求刑。

（大呉市民史P.23）
呉関係3・5事件公判
九月一五日呉市畝原町、川窪鉄之助（25）の公判。同人は大正一三年県立県中を二年で退学、工廠に入り昭和六年四月の大整理に刺激されて共産主義に染み、同年八月日本金属労働組合広島支部に加入、呉工廠分会を組織してその責任者となり、一分月である同志をたすけて全協吳地区協議会を設立その責任者となり、分会を廠内各班別に組織して自らは魚雷実験、水雷、電気の三班の責任者となり、工廠細胞を組織した事実をみるとめ、以下傍聴禁止。懲役三年求め刑。二九日判決懲役二年（執行猶予）

院選舉にさいしアジビラを配布するなど、公訴事実をみるとめ、傍聴禁止のうちに懲役二年を求刑。一〇月五日判決、同二年（執行猶予）
（呉田日新聞 昭和8年10月5日）再び呉海軍に赤化の魔手のぶ海兵団の中から三人昨夏總檢挙ほとんど転向
更生日本共産黨の熱海會議に端を発して、全国的な大檢挙をみた10・30事件に関連して、三・五事件により一時潰滅していた広島地方の再建運動のために、昨年又々党本部より指導者が潜入し、広島、岡山を中心にして、党の再建に奔走し、呉海兵団、呉工廠、広島市における日本製鋼所広島工場、帝國人絹工場、郵便局、専売局そのほか各方面に働きかけ、同志の獲得にとめていることがバクロし、ついに一味の大檢挙をみるにいたり、昨年一二月下旬より本年七月にかけて広島地方裁判所で起訴、予審にかけられていたが、同檢挙により起訴されたもの二

三次で検挙。
（呉田日新聞 昭和8年10月5日）伊藤正朝（27）同上、画工。古田稔（25）広島市三條町。韓利權（24）朝鮮平安北道義州郡北面。橋本俊三（21）広島市仁保町、元広島郵便局通信事務員。竹谷時良（25）広島県安芸郡江田島村、元広島郵便局員。堀江明治（25）広島市南竹屋町、元広島郵便局集配手。花野ふじえ（24）前岡こと）広島県安芸郡江田島村。
野中富雄（25）広島市平塚町、安田祐俊（25）広島市鍛冶屋町、山下達吉（25）神戸市湊西区鹿屋町、予備海軍二等主計兵。井上満（24）広島市段原町、同上。

坂村、元広島高校生。山根清（25）広島県沼隈郡柳津村。寺本強司（26）広島市三條町、元宇品陸軍運輸部従業員。
（1）昭和六年工廠整理から社会問題にめをむけ、川窪の指導のもとに全協工廠分会に加

入、共産党にも加入。全協（呉工廠分会）造機班責任者。九月二九日結審。懲役二年（執行猶予）

茂渡義人（25）呉二中卒。工廠一般使用人組合。三・五事件で検挙されたが起訴猶予。そのご救援会活動。昭和八年三月入党。共青を指導し佐伯郡五日市方面農村青年組織。全協出版分会指導。昭和七年一〇月の検挙はのがれて上京。昭和九年第三次で検挙。

（呉田日新聞 昭和8年10月5日）木村莊重（27）島根県鹿足郡木部村、予備役海軍一等機関兵。

（2）昭和六年工廠整理から学を中途退学、共青オルグ吉岡道人の勧誘で共青同盟にくわわ

り、三好、滝川などと連絡して
帝国人編広島工場、専売局など
を目標に組織の確立結成につと
め、

橋本俊三は昭和六年一月以

降、大藤軍一らとともに市内の
赤化を企て、全協通信分会を組
織し昭和七年七月党に加入、三
好、滝川、木村らと連絡して市
内に党細胞組織の活動をつづ
け、

野中富雄、井上満、安田祐俊
はいずれも日本製鋼所広島工場
の職工として勤務中、昭和六年
八月党オルグ古末の指令により
野中をキャップに同工場内に全
協金属分会を組織し昭和六年一
月びる、いづれも入党、野中
をキャップとして、三好、木村
もに昭和六年一二月入党、3・
5事件で起訴猶予となるや、そ
の後も、橋本、竹谷らとともに
市内に党細胞組織の活動をつづ
け

山根清は神戸高等商業本科一
年に在学中病気のため退学し、
昭和六年春以来、胡川清らと連
絡して松永、福山地方で赤救活
動、金協、コップの組織結成運
動をつづけていた。さる九月一
八日病氣のため保釀、

吳の三人組 現役中暗躍
木村庄重は大正一五年六月県
團したもので、現役中より党員
の寺尾一幹(3・5事件で検挙)
坂口喜一郎、平原甚松の三人と
レンラクし海兵団の赤化を企
て、退団後広島市内に居をかま
え、党海軍方面をうけもち、党
の組織拡充に努力。

山下達吉は昭和七年現役どし
て県海兵団に勤務中、七年春以
来同志、坂口喜一郎、平原甚松
をはじめ外部にある海軍出身者
とレンラクして海軍の赤化に奔
走。昭和七年九月共産主義者と
して現役免除となり予備役編
入。

平原甚松は昭和六年一〇月共
産主義思想抱懐者として県海兵
団を現役免除となり、退団後昭
和七年春から県市内で三好、坂
口、寺尾らとともに海軍方面を
うけちら赤化運動をつづけ、昭
和七年四月入党同年五月検挙さ
れ一時釈放されたが、東京本部
と連絡をとり、同年一〇月びる
上京横須賀軍港を目標に党の組
織活動をつづけていたもの。

花野るじえ(24)は高等小學
校卒業後神戸、広島地方の工
場を転々し、その後広島市内の
カフエーで女給をしているう
ち、昭和六年六月、嶋常次郎の
勧誘で共青同盟に加盟、六月末
福山地方全協オルグとして活動
中検挙され起訴猶予となっていた
が、その後も三好、滝川など
とレンラクをとり広島地方で党
の活動に従事。

[注]広島県労働組合会議編「広
島労働運動史」P.792より
花野フジエ判決理由書。(19
34年1月広島地裁。懲役3年、
執行猶予5年の判決)
昭和6年(1931年)10
月上旬、金協確立のため福山市
に至り、「1月上旬、同様の指令
でいた岡田茂美とともに同地区
確立にとめ、1月全協組織
福紡会結成(福島紡福工場、
山本八重子、三成五郎、小寺某
等)、金協一般使用人福山地区
(中山一郎)、全協出版福山地区
(佐藤茂)も結成、その後度々
連隊に入黨することとなり、才
ルグ 三好惣次の指令により滝
川、木村などと連絡をとり軍隊
の赤化に活躍。

宇品運輸部へ

寺本強司は宇品陸運輸部に勤
務中昭和七年一〇月 滝川の勧
誘をうけ入党、運輸部の赤化に
奔走。

起訴猶予の女給 また広島で
花野るじえ(24)は高等小學
校卒業後神戸、広島地方の工
場を転々し、その後広島市内の
カフエーで女給をしているう
ち、昭和六年六月、嶋常次郎の
勧誘で共青同盟に加盟、六月末
福山地方全協オルグとして活動
中検挙され起訴猶予となっていた
が、その後も三好、滝川など
とレンラクをとり広島地方で党
の活動に従事。

要請により、佐藤静枝を水兵と
の連絡係(ボスト係)として県
市カフエー摩天樓に住みこま
しめ……(10・30事件で検挙、起
訴)

一九四五年(昭和20年)八月
六日、彼女は広島市小網町で原
爆にあり、それがもとで同年九
月二日死去した。三五年の短
い生涯であった。(同書794)

県海軍 赤化事件

(大島市民史P.276)

県海軍

共産党の熱海會議——中央委員
会に地方オルグもくわわる会合に
あたり警視庁がおさえた文書の
なかに軍部関係のものがあつた
ことから、指示された広島県警
察部の連絡により、県海軍軍法
会議、県憲兵分隊、県署の活動
となり、疾風迅雷、一月七日
には一味六名を検挙。かれらは
日本共産党県地区オルグ 寺尾
一幹、坂口喜一郎、山下達吉ら
の指導をうけつつ、日本共産党
本部軍事部の指令にもとづき、
県海軍の赤化をたぐらみ、水兵
委員会の名による覚宣機関紙
『誓ゆるマスト』を配布、党的
拡大強化をばかりつつあつたも
の。

一方、小倉が検挙されてのち、
同人の下宿和庄通一丁目西田シ
メ方の家宅捜査におもむいたと
ころ、なにひどい証拠品が発見
されなかつたが、ちょうどその
とき家人が野菜をいれた、かご
をかついで、出ようとするので
野菜をとりのけたところ、底か
ら「赤旗」そのほかの証拠品が
でた。小倉から証拠湮滅を依頼
されていたもの。(小倉はふたつ
の下宿をもつていたという)

北田健次の下宿のはなし

「昨年5月びる、これら非常
におとなしい人。いつも表の間
で勉強ばかりしていた。7月は
じめ、どうでもよいいるからと

海兵团一等看護兵曹稻垣 宏
海兵团三等看護兵曹宮内謙吉
呉署はまずカフエー摩天樓の

アジトをつきとめるや、これを
極秘にふして12月2日未明こつ
拳するとともに、16日山下の郷
里にむかわしめたが、すでにゆ
くえをくらましていて、実父も
口をひらかず、親戚そのほかを
調査して大阪にいるとのけんと
うをつけ、陸軍大演習で警衛中
の曾根崎署の応援をうけ、山下
の居所をつきとめ全員防弾チョ
ッキに身をかため、19日未明同
人のねこみをおそって逮捕。

一方、小倉が検挙されてのち、
同人の下宿和庄通一丁目西田シ
メ方の家宅捜査におもむいたと
ころ、なにひどい証拠品が発見
されなかつたが、ちょうどその
とき家人が野菜をいれた、かご
をかついで、出ようとするので
野菜をとりのけたところ、底か
ら「赤旗」そのほかの証拠品が
でた。小倉から証拠湮滅を依頼
されていたもの。(小倉はふたつ
の下宿をもつていたという)

北田健次の下宿のはなし

「昨年5月びる、これら非常
におとなしい人。いつも表の間
で勉強ばかりしていた。7月は
じめ、どうでもよいいるからと

軍艦朝日二等機関兵北田健二
海兵团一等水兵 佐藤 鶴
海兵团二等水兵 山口義次

軍艦白鷹二等機関兵小倉正弘
(キャップ)

軍艦朝日二等機関兵北田健二
海兵团一等水兵 佐藤 鶴
海兵团二等水兵 山口義次

いい、2田ばかり賣屋で工面してきた」というので、あと一円かしてあげた。7月おわりごろ家をでて、1日ばかりして友人から『給料日にかえすから』と伝言があつたきりで、かえってはこれなかつた。

稻垣宏の下宿のはなし

「七田ごろ来られた。無口で

二階で蓄音機をならしたり、下におりてきても、はなしなどし

たことがない」

本通り六丁目云南食堂も家宅捜査をうけ、女給一同吳署にひっぱられたが、佐藤しげえから「赤旗」そびゆるマストなどがあづかっていたのは、事情をしらすじしたこと判明。一時は赤の巣窟かと騒がる。

〔注〕吳日新聞には「佐藤彌水兵から文書をあづかってた」となっている。

(大興市民史P.278 昭和7年)

坂口の内縁の妻

吳憲兵隊に引致された、坂口喜一郎が口をわらまで、頑として口をわらなかつた野村梅子

(24)は大正一五年吳県女卒。昭和四年ざろ坂口喜一郎と西川照三が明神町の養母方に下宿しているうち、梅子あいで雑誌「戦旗」など本部から送付されるようになつた。

梅子は、はじめ西川としたり

かったが、坂口のつよい鬭争心にほだされ、これと内縁関係をむするにいたり養母の反対をうけ、現役免除となつた坂口とともに登町一丁目に一戸をかまえ、坂口の運動をたすけ、東京で逮捕されたときもいっしょ。とりしらべのち、直接かんげいがないので放免されたが、養母のうちへはかえれず、そのまま上京し裁縫学校に入学。

女給 佐藤静枝

カブエー摩天楼の女給、よしここと佐藤静枝(22)は生前に両親がわかれ、祖母の私生児としてとどけられ、八歳のとき女中奉公の実母にひきとられたが、一二歳で母がつれ子して山県郡八重町に嫁し、一四歳で広島市左官町の料理屋に単独で奉公、一八歳同市カブエー・リラスの女給となり、ここに左傾女

給純子(花野ふじえ)の影響をうけ、昭和七八月共産党員の指令をうけて来興。

(検挙後)まもなく釈放。や

はり同店につとめた。ちょっとした美人、客へのサービスもよいほう。静枝は軍艦に小倉をうつされ「赤旗」を手わたしたり、下宿も再々訪ねていたといふ。

百万弗の女給 真佐子

一月七日軍服のまま海兵団内で検挙された佐藤彌は普通電信科卒。あたまのよい、鬭争意

識のはつきりした男。中通り一丁目カブエー一百万弗の女給、真佐子——岩方通四丁目、正富万三郎娘とジャズのおかげでむすばれ、七年六月びるから結婚はじめが急速にすすみ、条件として「禁酒」を誓約して実行。女の父も二人の仲をゆるして同棲生活にはいっていた。

百万弗のマダムのはなし

「佐藤さんは金ばなれもよく、水兵にはめづらしい人。破廉恥な罪でなく、ただいまの社会にゆるされていないと、いうだけのことだとおもう。真佐子は三年もすみこみ、実家へもよく金をとづけていた。」

この事件があつてから、カブエーでジャズにまぎれて、革命歌をうたうものが、ふえたので、吳署では潜入者のしわざかと監視。

(昭和8年)二月九日夜宮原通二丁目を革命歌をうたつてあらぐ男(28)を伏警の吳署員が発見。同志社大学中退、吳市内

では、かおききの不良。思想的背景はない。単に酔つてのものとわかり、将来をいましめて料金五円に。

(大興市民史P.278 昭和7年)

横須賀の赤化事件

軍艦「榛名」乗組員、三等機関兵(22)は「長門」三等水兵

(22)「山城」同(22)をさそい、郊外の池田種治と日曜日(?)に会合。各艦組員の赤化運動を密議していたのを、昭和七年九月二日横須賀憲兵分隊で逮捕され、昭和八年三月一三日予審終結、記事解禁。

事件は部内の紛失事件から下宿の捜査をうけ事前に文書を発見されたことによるといふ。

二五日結審。検察官から、主文朗読は可なるも理由の公開は禁止されたいともとめ、求刑通りの判決あつて、ただちに傍聴禁止。

四名はただちに服罪、稻垣のみ「考えます」期日最終日に上告。しかし考慮するところあつて取下げて服罪。

(他県関係共産党検挙記事)
(吳日新聞 昭和8年3月1日)

富山県下の共産党検挙

富山県第一次共産党事件の昭和六年一一月一斉検挙により潰滅したがにみえたが当時検挙もそれとなつた残留分子は翌年昭和七年二月ごろより、またまた地下に暗躍はじめ、教育界方面にはたらきつあることを探知した県特高課ではこれを重大視し、銳意内偵の歩をすすめていたが、その全貌をあきらかにし

たが、それをえたので、いよいよ昭和七年一〇月八日未明を期して県下にわたつて一斉検挙をおこな

じてじく人定訊問あり、検察官から公安を害すると傍聴禁止を申請。合議の結果、海軍准士官以上および被告家族のほかは特にゆるされたもの以外の傍聴禁止を宣言。一八日は証拠しらべ。

一九日小倉に六年、稻垣に五年、佐藤に四年六月、北田、宮内に各三年六月を求刑。三弁護人が

ら情状酌量論。

二五日結審。検察官から、主文朗読は可なるも理由の公開は禁止されたいともとめ、求刑通りの判決あつて、ただちに傍聴禁止。

四名はただちに服罪、稻垣のみ「考えます」期日最終日に上告。しかし考慮するところあつて取下げて服罪。

(他県関係共産党検挙記事)
(吳日新聞 昭和8年3月1日)

富山県下の共産党検挙

富山県第一次共産党事件の昭和六年一一月一斉検挙により潰滅したがにみえたが当時検挙もそれとなつた残留分子は翌年昭和七年二月ごろより、またまた地下に暗躍はじめ、教育界方面にはたらきつあることを探知した県特高課ではこれを重大視し、銳意内偵の歩をすすめていたが、その全貌をあきらかにし

たが、それをえたので、いよいよ昭和七年一〇月八日未明を期して県下にわたつて一斉検挙をおこな

い、オルグ橋本新七、巴陵宣正以下二三名を検挙する」といふ。多数の文書を押収し、その通りらべにより、同月一一日さうに二〇名を検挙。

山形県七日市橋本新七(24)

東大農学部中退巴陵宣正(24)

横浜高商中退小松茂松(23)水

見郡碁石村一列小学校訓導浜田

善昌(26)射水郡八代村校訓導

酒井平正(28)の五名を起訴。

橋本新七は富山県地方オルグ団

会議なるものを結成、「新興教

育」富山支部を組織。

(奥田日新聞 昭和8年8月16日)

長野県教員赤化の全貌 影響下
教員二〇八名学校六六校

二月四日未明八六名検挙、二
月二三日早朝党、共青関係者主
脳五三名検挙、六月一二日の上
諭訪機関車ならびに上田駅員檢
挙をもって終了。

三市一六郡にわたる検挙で、
北信左翼論壇の雄将高倉テルを
加えて県下の左翼というものは、
すべて検挙されるにいたった。

党員二七名 共青同盟員四三名
検事局へ送局二三六名 長野刑
務所に收容七六名(女三名)

注目されるのは多数の小学校
教員が潜行的に、全協一般使用
人組合・教育労働対策部・長野
支部および新興教育同盟準備

会・長野支部を組織、教員二〇
八、学校六六におよんだこと。

昭和七年三月以来一回にわ

たり全県的な会合をしている

が、場所は予告せず当日街頭連

絡で会場をしらせた。また組織

拡大のため師範新卒業生の歓迎

会、短期現役兵の歓送迎会をひ

らいていた。

今回受持ちの先生が検挙され
たことをじつて、先生を警察か

らつれもどすことを泣いて決議

し、小学校を徒步で出発せんと
したところを学校側に感知され
て阻止されたものもあった。

昭和三年第五高等学校卒、東
大英文科中退。

(2) 林ノ内栄蔵(25)

長崎県西彼杵郡香焼村。小卒

後農業。

(3) 田原治男(25)

大正二五年長崎中卒。昭和四

年長崎電軌運転手。

長崎市高木町一四九、福岡淳

次郎、林ノ内栄蔵、長崎電軌運

転手田原治男の三名は、昭和七

年一〇月ざる全協長崎地区協議

会および赤色救援会準備会を組

織し、長崎市内船大工町にアジ

トをおき、金属に福岡、通信に

林ノ内、交通に田原が責任者と

なり、三菱造船、長崎電話局、

長崎電軌にはたらきかけ、特に

林ノ内は一般使用者の責任者を

兼任して、医大病院等にむかっ

て党員獲得に潜行運動をつづ

け、全協、党委員会とレンランク

をたち、「全線」「鋼車輪」等

の機関紙を発行し、一〇数名を

獲得、一方赤救方面では一部資

金を募集して福岡に送金した。

田原は長崎県水産課技手、松

野安郎(32)や長崎高商教授二

名を獲得するに成功し、文化

サークルを組織、コップの主義

綱領にもとづき文化班の設置、

『労働新聞』そのほかの非合法

いうべきは全協、赤救、コップ

の同留保二名。同猶予一〇名。

当時長崎高商教授、新川傳介

(29) 氏もさる三月三〇日検挙

されたが同事件の内容特色とも
いうべきは全協、赤救、コップ

の三点である。

首脳部の経歴。

(1) 福岡淳次郎(30)

(奥田日新聞 昭和8年10月8日)
岡山共産党 大検挙おこなわれ
る検挙人員二七四名起訴三一名

本年四月一二日一斉検挙。

神奈川県で活動していた全

協、青井憲一(25)は昨年五月

県下に潜入、元第六高等学校生

徒、人見正雄(21)中国地方才

ルグ、錦織彦七とともに労働争

議、水平社差別待遇事件などに

はたらきかける。また元第六高

等学校生徒、上森、天野、斎藤、

西岡等の共青同盟員を指導して

六高内に全協支持団を結成、中

央資金局より、柴田和夫をむか

えて資金網をつくる。今回の共

産党運動の特色は水平社運動に

合流して農村を基礎として地味

な方法で地下運動をおこなって

いたことで、それだけに根強い

ものがあり、検挙には非常な苦

心がはらわれた。

昭和七年10・30事件が一段落

したころの本年(昭和8年)二

月一七日首領守田道輔を逮捕し

た吳署はイモヅル式に一味七名

を検挙。一〇月とりしらべをお

わって広島地方検事局におく

る。

守田は上京して友愛会などを

関係。大正九年山口県にかえつ

て小作組合運動をおこした県下

農民運動の草分け。

昭和五年末共産党に入り德

綱領にもとづき文化班の設置、

『労働新聞』そのほかの非合法

の三点である。

同犯人は山口県下における有数の資産家であるが某事件のために財産をかたむけ、当局の追跡急なるをしり吳市に潜入、失業救済道路工事の人夫に化けていたものである。

押収して引上げた。

同犯人は山口県下における有数の資産家であるが某事件のために財産をかたむけ、当局の追跡急なるをしり吳市に潜入、失業救済道路工事の人夫に化けていたものである。

業救済道路工事の人夫に化けていたものである。

同犯人は山口県下における有数の資産家であるが某事件のために財産をかたむけ、当局の追跡急なるをしり吳市に潜入、失業救済道路工事の人夫に化けていたものである。

押収して引上げた。

争化を画策、ついで、広島市国泰寺町、自由労働組合員、風早謙(36)をくわえて、街頭細胞委員会を結成、芸南電鉄従業員の内紛、映画説明者争議などに、はたらきかけたが、メンバー獲得にいたらず、そのご、岩方通六丁目、米穀商手伝、坂田進(25)、吾妻町二丁目ラス張工小田正人(24)を獲得、自らは失業救済道路工事人夫となり、広島からよびよせて市内バスの従業員たらしめていた、妻スミ子をくわえて七名で、交通、金属失業の各責任者をきめ、西原町にアジトをさだめて『職場新聞』などの機関紙を発行していたもの。

吳署はききこみにより守田のしごとからのかえりをまちあせたが、かんづかれたらしいので立廻りさきへりこみ、本通一三丁目で格闘、逮捕。これがため委員会は解散されたが、これまでの活動、同志關係がはつきりせぬので、捜査をすすめるうち、最近共産党に転向した坂田進(吳一中)中退、元大衆党員のが六月一日帰郷したことをつけとめ、友人方には潜伏中を逮捕。ついで、ビラ撒布である中村定男を街頭で逮捕。兩人のとりしらべで、大衆党員木原、風早、小田ほか朝鮮人數名が関係したことがわかつ

て、それぞれ逮捕。うち小田は留置中の坂田、中村らの動静をさぐるために、故意に泥酔検束されたのを特高係にみやぶられたもの。(大衆党員は不起訴)(畠田日新聞 昭和8年10月11日)

坂田 進(23)
本籍、広島県吳市岩方通三丁目九戸主佐一長男。米穀商手伝。峰山こと比較的裕福な家族にそだち、吳一中、中退、市内古川町、海上御用達森川直太郎の店員になつたが、そのころから左翼書籍を耽読して赤化し、労農大衆党員支部に入党したが、同支部の活動、ちぢとして進展せぬために倦怠を感じ、共産党に転向。中村定男(24)

本籍、大阪市浪速区塙草町。住所、吳市塙屋町。ラス張り工。林こと貧困なる家庭にそだち、小学校卒業後、吳市海崖通平田鋳造工場の見習工となり、翌年神戸市東尻池町神戸製錫会社の職工となり、翌年神戸市日本近海郵船信濃丸のコック見習となり、翌年、吳にかえり爾後自由労働者となつたものであつて、幼時から労働者の悲惨なる状態を体験して、これすなわち現代社会の欠陥なりとしついに赤にはりで罰金100円。

昭和七年一月吳市長選舉に支部長、細田伊太郎をたてて運動。その後共産主義に投する。つたもとスミ子(28)

(中國新聞 昭和9年8月20日号外)
第三次共産党的な検挙
広島地方における共産主義運動は昭和七年秋の、いわゆる10・30事件一斉検挙により、日本共産党中央委員会の組織およびその指導下にある外廓団体を潰滅し、その運動を中絶せましたが、その後党中央部では軍事上もつとも重要な広島、吳

殺に対するストライキモード闘争」と題するじう四〇枚を市内にはつたことが發覚、拘留一五日に処せられ、同年五月一日メーデーにさいし吳署に検挙。なお執拗に左翼運動をつづけ、同年一月當時全国大衆党員部に加入し、吳市会の予算反対闘争、昭和六年四月の吳工廠整理反対闘争の文書を散布して、罰金100円に処せられ、同年六月さらに吳一般労組に入。

本原吉人(31)
本籍、吳市京町三高小卒業後大正七年吳工廠造機部職工見習。大正一二年退職。大正一四年一連隊に入隊。五年退官。

昭和二年上京、ラス張り工。昭和五年吳にかえり労農大衆党員にはいる。同六年四月の吳工廠整理反対闘争はもっとも勇敢にたたかう。同年七月吳一般労働組合結成。中通楠食堂争議の応援。

昭和六年一月金属工のビラはりで罰金100円。

昭和七月一月吳市長選舉に支部長、細田伊太郎をたてて運動。

この間吳特高課では党オルグ

および中心メンバーの正体をつかむこと、組織の内容、活動の状況を偵知することに全力を集中、特高課視察係を中心とし、市内三署、吳署の視察係を督励して不斷の活動をつづけ、大体検挙の材料を蒐集した。

これらの手配により本年二月、加藤郁子を、四月十日三戸信人をそれぞれ逮捕、両名の身柄を

広島県にひきとつて取調べの結果

中、昭和六年二月治安維持法違反で検挙起訴猶予となり、昭和六年六月同じく東署に検挙不起訴となる。

昭和六年一〇月から全島広島地区一般使用人組合に加入。昭和七年3月西署に検挙、八月一日起訴猶予。

昭和七年五月、守田道輔と同棲、同年九月吳市に潜入。

地区一般使用人組合に加入。昭和七年3月西署に検挙、八月一日起訴猶予。

昭和七年五月、守田道輔とともに、

果、一斉検挙の確信を当局にいたしました。

じこにおいて四月二十五日午後五時広島市内三署特高課主任を

県警察部へ招集、一斉検挙の方策を決定。

翌二六日午前三時特高課およ

び右三署の警察官一五〇名を動員し防弾衣に身を固めた決死隊

を編成し三〇台の自動車に分乗、鈴木特高課長総指揮のもと

に午前五時一斉に出動、広島市内一七ヵ所のアグジトを急襲し

て、目標人物五〇名を逮捕、多

数の証拠物件を押収したが、中

心人物である党オルグ閔谷源一

を発見しなかつたので、アグジト

を中心張込み隊を編成警戒中、己斐駅を中心とする西署山崎巡回の発見により難なくこれ

を逮捕。

そのじ検挙が継続せられ、六月二三日広島高等学校事件で四九名、七月九日高田郡吉田町で一名、合計一〇八名の多数にのぼった。

組織および活動の全貌（上）

広島地方における左翼組織は昭和七年の10・30事件一斉検挙により潰滅したが、当時起訴猶

予、釈放となった三戸信人はこ

れが再建をくわだて、昭和八年一月上京、日本共産青年同盟中央部と連絡し、広島地方の状勢、再建活動の必要性を報告し、共

青同盟広島地方オルグとして再建活動にあたるべき任務をうけ

て、同月下旬帰広し、モップル、コップ残留メンバー、岡本菊次郎、天津せい、南部達三そのほか數名を同盟員に獲得して、モップル、コップ組織内に共産同盟フランクションを組織し、この

フル地方委員会、コップ地方協議会を再建確立し、同時に眞節範、

山陽中学、広陵中学、広島県女

などで同志を獲得して、広島地

区中等学校指導部を結成し、機

関紙『鯉城の健兒』毎号数十部

を発行して中等学生の啓蒙と、

県師範、山陽中学、県女、市女

の各中等学校と共に青同盟確立

ために活動、さらに同年3月初旬、防空演習反対闘争のために

モップル、コップ、消費組合代表者をもって反戦同志会を組織し、ビラ数百枚を印刷して行動

隊を編成し、市内重要工場を目

標にビラまきを敢行するなど、

活発なる運動を展開するにいた

つたが、左翼運動の指導核心と

して共産党的組織をもつ必要に

せまられ、同年3月上京、共産

党中央部と連絡入党し、広島地方

の情勢を報告、党オルグの派遣

を要求した。

党中央部も、三戸の要求を承認して、組織部員某を通じて、

党員、山川こと、閔谷源一を党

にメーデー闘争の記事を掲載し

上の打ち合せをなし、翌4日横浜駅から三戸とともに急行列車にのり、5日午後3時すぎ広島駅に着き、ただちに八丁堀福屋食堂に会合し、諸般の打ち合せをなし、活動することになった。

党中央地方

広島県再建委員会の結成

かくて4月初旬、三戸の推セ

ンにより、広島郵便局集配手、小川正一を委員に獲得し、4月10日、閔谷、三戸、小川の3名が元宇品町山林中に会合し、党中央地方、広島県再建委員会を結成し、閔谷はそのキャップと

なり、当面の活動部署として、

閔谷は広島瓦電党細胞の確立に、三戸はモップル、コップ等のフランクション結成、小川は広島郵便局党細胞確立のため活動を開始し、メーデー闘争方針、モップルにたいしメッセージをねぐる件、広島市会議員選挙闘争方針、3・5事件公判闘争方針、農村活対策、県地区党オルグ派遣の件、金協組織活動方針、8・1反戦デー闘争方針を協議決定し、これにもとづき、つきのような活動を展開した。

メーデー闘争

広島郵便局、瓦電内意識メンバーをもって懇談会、またはピクニックをおこなわせ、同時に

コップ機関紙『文化の旗』号外

を発刊、局内従業員の革命化に活動した。

農村活動

農村部落に党細胞を結成し

て、これを中心に全農全会派の組織を確立する方針のもとに当

時佐伯郡五日市の電鉄買収地と

りあげ問題で、該小作人が動搖

していたので、この問題をどう

え、部落大会、町民大会にまで

発展させ、これを闘争に組織す

るために、党員、茂渡義人をし

て同町革命的グループ中心メン

バー同盟員加藤郁子、東窪梅夫

などを指導して組織活動をおこなわせた。

県地区

県地区に三戸信人を党オルグ

て、市内重要工場を目標に行動隊を編成、撒布せしめた。

市会選挙闘争

コップ、モップル、消費組合代表者をもって市会選挙闘争委員会を結成して、各工場内労働者に合法的に、選挙懇談会をひらかせ、この組織を通して労働者を党にひきつける方針のもとに、獄中の党員、古末憲一、市川忍を候補者と決定して、これに投票することを煽動したビラ数百枚を印刷、ビラまきを敢行した。

3・5事件公判闘争はモップルを指導して公判廷へ大衆デモを煽動したビラ数百枚を印刷、行動隊を編成、目標工場、国鉄、専売局、帝人を中心にして、ビラまきをおこなった。

公判闘争

反戦デーの行動綱領を決定、闘争方針書を印刷配布して、経営内活動の激化を強調誘導した。

8・1反戦デー闘争

六月中ごろ財政活動について

檄を発してシンパの獲得、資金

の確立を強調して、党の財政的支援を煽動宣伝した。

党広島郵便局

小川正一は郵便集配手、加藤精一、大塚猛夫、沖本春登を獲得して、郵便局党細胞を確立し、細胞機関紙『おいらのたより』を発刊、局内従業員の革命化に活動した。

中間検挙

以上の情勢の如く、活動表面化するにいたので、同年六月一〇日モップルを中心として、犠牲者家族の慰安会の開催

として派遣した。

全協組織活動

全協の組織活動は当面の力関係よりして、これに全力を集中することだし、六月ごろ小川正一を中心とする広島郵便局分会、井上栄を中心とする瓦電分会、金明文を中心に出版分会を結成し、茂渡義人を街頭オルグとして、これを基礎に七月全協会、井上栄を中心とする瓦電分会、金明文を中心に出版分会を結成し、茂渡義人を街頭オルグとして同人を中心に全協県地区才ルグ会議を結成して活動を開始した。

同時に党中央部五日市を指導して同人を中心には全協県地区才ルグ会議を結成して活動を開始した。

8月、市内重要工場を目標に行動隊を編成、撒布せしめた。

市会選挙闘争

コップ、モップル、消費組合代表者をもって市会選挙闘争委員会を結成して、各工場内労働者に合法的に、選挙懇談会をひらかせ、この組織を通して労働者を党にひきつける方針のもとに、獄中の党員、古末憲一、市川忍を候補者と決定して、これに投票することを煽動したビラ数百枚を印刷、ビラまきを敢行した。

3・5事件公判闘争はモップルを指導して公判廷へ大衆デモを煽動したビラ数百枚を印刷、行動隊を編成、目標工場、国鉄、専売局、帝人を中心にして、ビラまきをおこなった。

公判闘争

反戦デーの行動綱領を決定、闘争方針書を印刷配布して、経営内活動の激化を強調誘導した。

8・1反戦デー闘争

六月中ごろ財政活動について

檄を発してシンパの獲得、資金

の確立を強調して、党の財政的支援を煽動宣伝した。

党広島郵便局

小川正一は郵便集配手、加藤精一、大塚猛夫、沖本春登を獲得して、郵便局党細胞を確立し、細胞機関紙『おいらのたより』を発刊、局内従業員の革命化に活動した。

中間検挙

以上の情勢の如く、活動表面化するにいたので、同年六月一〇日モップルを中心として、犠牲者家族の慰安会の開催

を契機に岡本菊次郎、坂本四郎、天津せいなどの、コップ、モップの中心指導分子を検挙して、その組織の一部を破壊した。

党中央部との連絡

党中央委員会・広島地方対策委員会

党オルグ、関谷源一は党中央部と連絡のため、昨年（昭和八年）五月、七月、一月および本年三月の四回上京し、中央部組織部長および部員と連絡、中國地方の情勢を報告、そのつど青山六丁目某料理屋、大塚附近某料理屋、渋谷代官山アパート、神楽坂附近某料理屋などで開催された、党中央常任委員会、広島地方対策委員会に出席参加して、広島地方に対する協議決定に参加した。

中央配布局との連絡

関谷源一は七月、一月上京のさい中央配布局部員およびキャップ山崎安治と連絡し、八月と一二月広島市において配布局員、斎藤昌秀およびキャップ山崎と連絡し、そのつど党機関紙『赤旗』一四六号乃至一六三号名六〇部およびその他党中央部印刷物をうけとり、これを組織内メンバーに配布して組織の拡大強化に活動したものである。

〔第一期社競〕

八月月下旬を出発点として一〇月七日渡政デーを中心ゴール、一月七日ロシアン革命記念日を最終ゴールとして、たたかうことを決定。

○突撃隊活動

（中國新聞 昭和九年8月21日）

組織および活動の状況（下）党中央地方広島県再建委員の解体と同広島県オルグ会議の結成

昨年七月二七日、関谷は三日、小川と会合し、中央の批判にもとづき、党中央地方広島県再建委員会を解体し、オルグの協議機関として、党中央地方広島県オルグ会議を結成、広島における

党および外郭諸組織の力をオルグ会議指導下に統一的活動をなさしむるため、党員を中心に未組織分子をふくめて突撃隊を編成し、目標工場を決定し、これにむかって各突撃隊間の競争活動を激化し、党員および影響下の五倍化、財政の確立、大衆的アジプロの強化を通じて、党および外郭組織機関の確立のため、第一期、第二期社会主義競争方針を決定し、方針書を印刷配布して社競の意義を徹底せしめ、この社競を中心にして組織活動をすすめ、同時にオルグ会議機関紙を創刊し、党的方針の浸透と突撃隊活動の激化をはかった。

（第一期社競）

八月月初旬、黄伍姓、田原勝次が党オルグとして岩国地方にゆき、同人を中心として突撃隊を編成し、帝人岩国工場を目標に活動し、全協帝人分会を結成して、機関紙『帝人労働者』を創刊。工場内へのながしこみにより従業員を煽動。

○モップル、コップ再建運動

中間検挙によりモップル、コップの組織は破壊されたが、小寺英雄、國本金夫を党員に獲得して、竹地を金属オルグに、田原を広島統一労働組合・革反（革命的反対派）オルグに、黄伍姓を土建木材オルグに決定し、それぞれ活動、木材労働者組織のため津崎、桐原西工場にビラのながしこみ活動をした。

突撃隊は九月中旬地区に「ハンマー突撃隊」を編成、機関紙『第二うなる クレーン』を創刊。数百部を印刷、海連大会（海軍労働組合連盟大会）粉砕の前哨戦として、工廠従業員宅に、ながしこみをおこない、同時にこのハンマー突撃隊の活動と呼して、全協県地区オルグ会議は、吳工廠従業員の戦争による労働強化反対、残業手当減額のための残業時間短縮反対、および海連大会で議題となる結核保険組合掛金の工廠当局全額負担、などの問題をとりあげ、前後三回にアジビラのながしこみ活動により、工廠従業員にアジプロ（煽動宣傳）した。

周東地区では九月中旬、三日信人が党オルグとして岩国地方にゆき、同人を中心として突撃隊を編成し、帝人岩国工場を目標に活動し、全協帝人分会を結成して、機関紙『帝人労働者』を創刊。工場内へのながしこみにより従業員を煽動。

（2）昭和ゴム争議指導

九月初旬、黄伍姓、田原勝次を獲得して、兩人を通じて昭和ゴム争議を指導して、ストライキにみちびき、争議対策委員会を開催、指導方針の決定、メッセージの傳達、応援資金をねぐり、ビラのながしこみをおこなつた。

（3）金属、土建、木材、革反オルグ決定。

このころ、竹地定夫、金弱東を獲得し、地準全体会議を開催して、竹地を金属オルグに、田原を広島統一労働組合・革反（革命的反対派）オルグに、黄伍姓を土建木材オルグに決定し、それぞれ活動、木材労働者組織のため津崎、桐原西工場にビラのながしこみ活動をした。

（4）在広朝鮮人青年会の指導

山本タキエ、数本英次郎などコップ広島地方協議会再建委員会を組織し、その責任者となり、再建ニュースを発行して活動を開始した。

○全協組織活動

（1）缶詰分会結成

広島における全協組織は中間検挙のため、出版分会との連絡が切断したが、三月市内フジヤ缶詰工場職工、岩佐寿一を獲得し、同人を責任者として缶詰分会が結成され、機関紙『オンド金』を創刊して、市内西部缶詰工場従業員を組織のために工場内にながしこみ活動をした。

（2）昭和ゴム争議指導

九月初旬、黄伍姓、田原勝次を獲得して、两人を通じて昭和ゴム争議を指導して、ストライキにみちびき、争議対策委員会を開催、指導方針の決定、メッセージの傳達、応援資金をねぐり、ビラのながしこみをおこなつた。

（3）金属、土建、木材、革反オルグ決定。

パンフレット「再建後の左翼労働組合運動」を発行、組織メンバーパンフレットに配付し、理論的指導についてとめた。（注。“再建後のパンフレット”は普通出版社からでた、本屋の店先でうされていた本。オルグ会議でだしたもののは「一九三二年ナーゼ」そのほかのパンフレット）

は関谷の指令で、コップ同盟員金弱東を指導して在広朝鮮人青年会内に同盟員周了龍、鶴禹甲、金明文などと、革命的グループを結成せしめ、全協支持団の組織を通して、青年会に所属する朝鮮人労働者を全協に再組織するため、座談会、研究会を開催して、これが指導啓蒙に活動し、朝鮮人ピオニールの組織活動をした。

（5）革命記念日闘争

（10）月下旬地準全体会議の決

定にもとづき、地準機関紙『再建の旗』を創刊し、理論的指導と、日常闘争の激化、未組織大衆の煽動、宣言、組織のため活動した。

（6）新幹部養成

パンフレット「再建後の左翼労働組合運動」を発行、組織メンバーパンフレットに配付し、理論的指導についてとめた。（注。“再建後のパンフレット”は普通出版社からでた、本屋の店先でうされていた本。オルグ会議でだしたもののは「一九三二年ナーゼ」そのほかのパンフレット）

○水平社運動の指導

228

一月はじめ岩佐寿一が全国水平社広島県連の書記〔注〕正しくは差別裁判糾弾闘争委員会の書記となるや同人を獲得して、当時高松差別裁判事件、鹿川事件などのために、水平社運動が異常の緊張を示していたので、これら差別事件糾弾闘争を通して、水平社運動中に党の影響を侵透し、同時に合法的に水平社運動支持の会を組織して、いわゆる普通民との共同闘争を組織し、この闘争を通じて党、同盟、全協、モップル、コップのメンバーの獲得と組織の拡大に活動した。

○学生運動の指導
一月初旬より広島高等学校左翼学生と定期的連絡をつけ、自治学生会および学内資金網の確立のために活動した。
○年末闘争としては

(1) 慶徳鑄物指導
一月下旬全協地協全体会議で書記局設置の件、年末闘争方針を決定し、当時三條町慶徳鉄物工場朝鮮人職工の動搖をとらえ、これをストライキに導くため、年末闘争の主力をこれに集中し、竹地定夫、田原勝次の両人を争議指導にあたらせ、メッセージおよびスト応援基金をおくり、附近他工場従業員を同情ストにたたせるべく数回アジビラを発行散布

(2) 自由労働者組織活動
市役所匡救事業を中心とする

自由労働者をもって、自由労働者相互会を組織せしめ、これを全協に再組織する方針のもとに、自由労働者相互会発起人署名のアシビラを発行して、市役所内人夫募集所にながしこみ、煽動宣伝につとめた。

(3) 解覚派の排撃
このころ大橋橋、末元玄聰一派の解覚派排撃を決議し、檄を発行して組織内におけるスペイ挑発の防衛につとめた。

〔第一期社競〕
一二月中旬を出発点とし、建國祭、三・一五記念日を中間ゴール、五月一日メーデーを最終ゴールとして、党員の五倍化、党財政月収一五〇円、「赤旗」支持基金の完成を通して、党中國地方広島県委員会確立および全協その他の大衆団体機関確立をたたかいでいるために、各突撃隊間ににおける競争を激化した。

○突撃隊活動
昨年一二月中より本年一月中旬に興海軍工廠を目標とするハンマー突撃隊、広島高校および煙草専賣局を目標とする岩田義道突撃隊、国鉄を目標とする高田郡地方農村を目標とする渡政突撃隊の四つが、党員を中心に革命的分子各二名乃至數名をもつて編成され、各突撃隊におのの突撃隊会議を開催して、活動の目標、方針を決定し、突撃隊活動をおこし、

催して、第一中間ゴールまでの活動をめざして計画目的を達成のため活動中であった。

○オルグ会議

一二月中旬以後は、小川と京したが、小寺英雄をメンバーに獲得して、関谷、小寺、小川の三名で構成した。

一二月中旬からは、小川との連絡がきれ、正式にオルグ会議をひらくことができぬので、関谷は小寺と協議し独裁的に組織活動を指導

(1) リンチ事件檄

二月びる党内におけるリンチ事件の発表により、広島地方組織の動搖を防ぐため、オルグ会議署名のリンチ事件に対する檄を発行、また

(2) 建国祭闘争、3・15闘争

建国祭粉碎闘争および3・15記念日闘争のため、それぞれパンフレットを発行し、その他組織内メンバー指導のため数種の印刷物を発行。さらに

(3) 瓦電党細胞

二月初旬全協瓦電分会メンバー井上栄、高橋涉、宍戸年春を党員に獲得して、党瓦電細胞を確立し、細胞機關紙「スパーク」を創刊した。ついで

(4) 天津セイ救援闘争委員会

本年一月びるモップル責任者小寺と協議し、モップル、コップ、全協の代表者をもつて、天津セイ救援闘争委員会を結成し、メーデーをめざして天津セイの英雄的闘争の記

事を赤救ニュースに掲載、アジプロして工場内に「天津セイ救援の会」を組織せしめ、この闘争を通して労働者を組織する方針のもとに、アシビラまきを敢行し、救援基金カンパニアをおこしたほか、

(5) モップルでは一月初旬広島、佐伯、高田各地区代表者会連絡がきれ、正式にオルグ会議を開催して、広島地方委員会をひらくことができぬので、関谷は小寺と協議し独裁的に組織準備会を結成し、機関紙「赤救ニュース」を発行し、社競方針を決定し、最終ゴールとして天津セイ救援闘争に主力を集中して組織の拡大に活動することとし、同時に「今後における活動方針書」を発行した。

(6) コップ活動
一月コップ広島地方協議会、ナルプ（作家同盟）、科同（科学同盟）広島支部を再建、コップ地協機関紙「文化の旗」を復活し、ナルプ支部機関紙「文学ニュース」、科同支部機関紙「批判の武器」を発行し、小林多喜二一周年記念のため、メンバーによる原稿を募集して記念創作者を印刷発行し、千日太計雄ほか数名の没落分子の除名を決議、發表するなど活発なる運動をおこした。

(7) 全協活動

(中國新聞 昭和9年8月20日)
4・26事件起訴者
関谷源一（26）
下関市 新市町
貧困の家庭にうまれ、尋小卒後東京に出て店員、新聞配達、左官および自由労働に従事昭和四年びるより無産運動に関心をもつてになり、昭和五年五月全協土建労働組合に加入、一一月城南地区責任者、全協失業者同盟責任者となる。

通して、下からの広島支部準備会結成のための活動をおこした。

(8) 農村活動

昨年（昭和八年）一一月びるモップルを通して高田郡南小一と連絡し、同人ほか一名を党員に獲得して、農村細胞を組織して全農全会高田支部準備会結成の準備中であった。

(9) 広島高校暗流問題 指導
広島高等学校暗流問題にたいしては「岩田義道突撃隊」を通して指導し、近く左翼に対する全体検挙を予期し、左翼分子の表面的活動をさけて、運動部員を煽動して、行動の先頭にたたしむべき方針のもとに、活動中であった。

(10) 貧困の家庭にうまれ、尋小卒後東京に出て店員、新聞配達、左官および自由労働に従事昭和四年びるより無産運動に関心をもつてになり、昭和五年五月全協土建労働組合に加入、一一月城南地区責任者、全協失業者同盟責任者となる。

昭和六年六月、全協土建東京

支部失業対策部員。

昭和六年一月、日本共産党

に入党、党東京市委員会、西南

地区街頭細胞キャップ

昭和七年七月、鍋山佐野奪還

闘争に参加

昭和七年九月平安名(へんな)

常孝リンチ事件(戸越リンチ事

件)活動に参加。同月栃木県才

ルグ

昭和八年二月、長野県オルグ

昭和八年四月、党中国地方オ

ルグとなり、広島地方において

活動。

この間、出版法違反一回、検

束一〇数回。

全協広島支部協議会キャッ

プ。

小寺英雄(33)

佐伯郡巣島町

昭和七年六月、党中国地方オ

ルグとなり、広島地方において

活動。

昭和八年二月、党中国地方オ

ルグとなり、広島地方において

活動。

広島市中島本町(千田町二丁目)	豊田郡久芳村(広島市段原町)
火災保険事務員。高松高商卒業。高商在学中より左翼思想に共鳴。卒業後昭和八年夏ごろより実践活動に参加。昭和九年一月入党。コップ党フランクションとして活動。	郵便集配手。貧困の家にうまれ、小学校卒業後電車掌となる。昭和八年六月全協加入。瓦電分会メンバー。昭和九年二月入党、瓦電細胞メンバーとして活動。
小川正一(23)	茂渡義人(25)
山県郡都谷村(広島市楠町)	岡山県津市新職人町(東京市品川区森下町)
郵便集配手。貧困の家にうまれ小学校卒業後、広島郵便局集配手となる。昭和七年四月ごろ石川茂一の指導をうけて左翼運動に参加、昭和八年二月共青同盟加入、昭和四年入党。党オルグ会議メンバー。広島郵便局党細胞キャップ。全協広島地区協議会責任者。昭和九年七月、刑務所内にて縊死。	ドリール工。県立吳一中卒業後、吳市役所水道課水質試験所見習工。昭和七年五月検挙、起訴猶予となる。その後運動をつづけ、昭和八年五月共青同盟に加入。同年四月入党、党、同盟街頭細胞、全協街頭オルグ、農村五日市町オルグとして活動。

昭和八年一月入党。広島県オルグ会議メンバー。モップル党フランクションキャップ。	金明文(20)
岩佐寿一(25)	全羅南道求礼面。
米子市東町。水平社広島県連書記	新聞配達。公立普通学校卒。
県立広島二中をへて、広島高等学校一年中退、そのごとく阪および広島市において店員および職工として労働に従事。昭和七年七月ごろより左翼運動に参加。反帝同盟(反帝國主義戦争植民地民族独立支持同盟)広島地区組織に活動。	闇配達をなし私立松本中学を卒業。
昭和八年春より実践に参加。	昭和五年九月内地に渡来。新聞配達。

昭和七年五月ごろより左翼運動に参加。	昭和八年二月、刑務所内にて縊死。
昭和七年五月ごろ左翼運動に参加。反帝同盟(反帝國主義戦争植民地民族独立支持同盟)広島地区組織に活動。	昭和八年二月、共青に加入。同年七月共青に加入。五日市部落共青細胞として、同会組織に活動。
山本タキエ(26)	岡本重康(23)
豊田郡吉名村(賀茂郡東高屋村字堀)	島根県那賀郡波佐村(広島市昭和町)
中流の家庭にうまれたるも、幼にして父に死別。	中五歳にして父に死別、広島井上栄(24)

昭和二年三月、三原女子師範学校英次郎(24)	山口県玖河郡岩国町(広島市日斐町)
中流の家庭にうまれたるも、幼にして父に死別。	小学校卒業後、広島郵便局電報配達員となり、のちに瓦電争議に活動。
昭和二年三月、三原女子師範学校英次郎(24)	昭和九年一月、永井健三らと「岩田義道突撃隊」を編成、学内の党資金網を確立し、また責任者として毎月三〇円～四〇円の党資金を提供。
高橋涉(22)	永井健造(19)
豊田郡久芳村(広島市段原町)	広島市水主町(同)

<p>を結成し、その責任者となり 昭和九年入党、瓦電細胞キヤ ップとして活動。</p> <p>正田誠一（20）</p> <p>安芸郡江田島村 (広島市平野町)</p> <p>県立広島一中四年修了、広島 高校文3甲（英語）在学。</p>
<p>昭和八年一〇月ごろより学内 における左翼運動に参加、広高 責任者として、党オルグの指導 のもとに、教授間暗流問題をと らえ、学内新聞『前進』『広高戰 士』を発行、学内左翼組織の拡 大のため活動。</p> <p>大正五年春（24）</p> <p>広島市蟹屋町（若草町） 自作農の家庭にそだち小学校 卒業後</p> <p>昭和八年二月瓦電電掌とな る。同年六月全協瓦電分会メン バー。</p> <p>昭和九年二月入党、瓦電細胞 メンバー。</p> <p>（中国新聞 昭和九年8月20日号外） 「暗流」を利用して同盟休学を 煽動、広高赤化事件の内容</p> <p>広高内左翼運動に対するは四 月二六日、党中央地方広島県オ ルグ会議関係の一斉検挙のさ い、同時に断行するはずであつ たが、検挙人員のあまりに多数 になるため、これを留置とりし らべるに支障をきたすため、第 二次にゆする計画のもとに一時 延期することとなつた。</p>

<p>その間、広島高校以外の、党 全協などのとりしらへは着々進 行したが五月に入るや、暗流問 題を中心同窓生の蹶起とな り、生徒の動搖も深刻化し、一 方自治学生会においては暗流問 題を利用して、これを社会問題 としストライキにまで発展せし めて、ブルジョア教育の矛盾を 暴露せんと、秘密裡に策動の形 跡があり、来校した卒業生には 自学メンバーであったものがあ るため、県特高課では広島市内 三署特高係を指揮して、左翼学 生の行動を内査していたが、事 態が放任しきれる状態となつた ので、六月二二日警察部長は特 高課長および市内三署長を招 集、協議の結果、一斉検挙を断 行することに決し、翌二三日以 来生徒四二名、卒業生五人を連 東大四名を検挙とりしらべをな し、三三名を治安維持法違反と して事件を送致し、そのうち三 名はすでに起訴せられ、なお二 名は近日起訴されるみこみであ る。</p> <p>（中国新聞 昭和九年8月20日号外） 「暗流」を利用して同盟休学を 煽動、広高赤化事件の内容</p> <p>広高自治学生会の再建</p> <p>10・30事件のさい広高内左翼 組織は瓦電細胞、同盟細胞、自治 学生会指導部員などのことなどと くを検挙され、記説となつた生 徒は放校となり、起訴猶予とな った生徒はいつれも無期停学に 処せられたので、学内左翼組織 は一時終息状態となつたが、昭 和八年五月停学処分を解除され</p>
--

<p>復学した生徒らは組織の再建を 企図し、残留メンバーを糾合し ほか二名出席し、候補者として 自学指導部員当時、文2甲（現 在文3乙）正田誠一を立候補せ しめ、さらにスロー・ガンを決定 し、闘争の結果校友会文科理事 として、正田誠一当選、校友会 文化部、弁論部、文芸部、映画 部の役員もまた自学メンバーを 立候補せしめ、本年五月の理科 代表理事の補欠選舉には理科3 甲某を立候補せしめて当選さ せ、ここに校友会理事は文科理 科ともに自学メンバーをもって しめるにいたつた。</p> <p>かくて学内全学生および教官 をもって組織せる校友会役員は ことじごく左翼学生をもってこ れにあて、官制校友会を自学の 指導下に自主化をはからんとし た。</p> <p>寄宿寮総務の選舉にたいして も、自学指導部員 岡本重康を 立候補せしめ、寄宿寮の役員も また自学メンバーの支配下に帰 せしめた。</p> <p>寄宿寮総務の選舉にたいして も、自学指導部員 岡本重康を 立候補せしめ、寄宿寮の役員も また自学メンバーの支配下に帰 せしめた。</p> <p>校友会役員を自学メンバーに なりびに活動</p> <p>岩田義道 突撃隊の編成</p> <p>10・30事件のさい広高内左翼 組織は瓦電細胞、同盟細胞、自治 学生会指導部員などのことなどと くを検挙され、記説となつた生 徒は放校となり、起訴猶予とな った生徒はいつれも無期停学に 処せられたので、学内左翼組織 は一時終息状態となつたが、昭 和八年五月停学処分を解除され</p>

<p>在文3乙）岡本重義、当時、文 2乙（同上文3乙）永井健造、 月一一日（反建国祭デー） 月二十五日（三・一五記念日） （二）最終ゴール 同年五月一 日（メーデー）</p> <p>円を党に提供する。</p> <p>（同）第一中間ゴール 九年二 月一一日（反建国祭デー） 月二十五日（三・一五記念日） （二）最終ゴール 同年五月一 日（メーデー）</p> <p>内江波町射撃場に文3乙）、岡本 重康、同永井健造ほか一名が会 合し、協議の結果、広高生に突 撃する突撃隊を「岩田義道突 撃隊」と命名し、学内運動の行 動綱領二〇項目を決定すると もに、突撃目標として</p> <p>（イ）党資金として毎月一〇〇</p>
--

<p>前記の通り昭和八年九月自治 学生会の再建とともに、機関紙 『前進』を極秘裡に発行し、正 田、岡本、永井らによりブルジ ヨア教育の欺瞞性のバクロ、帝 国主義戦争反対などの爆動記事 を掲載し、本年四月まで繼續し てきたが、本年四月にはこれを 『広高戦士』と改題し、広高内 教授暗流問題のバクロにつとめ るとともに、これはブルジョア 教育の矛盾、資本主義社会の欠</p>

陥りもとづくものなれば、社会制度の改革せらるるかぎり、かくのどとき暗流問題は解決せられざるものであると、煽動した。

四月以来は文3乙、岡本重康

ほか二名で発行のつど編集会議をひらき、六月二一日検挙にいたるまで非合法発行を継続しきた。

党資金活動

広高内学生が唯一の党財政支

持隊とされたり、昭和八年六

月七日党員茂渡義人の手をへて

当時の自学の責任者より約一〇

円ずつ提供し、同年一月には

「広高内共産党資金網」の確立

を見、「若田義道 突撃隊」では

毎月一〇〇円の党資金完成を目

標に突撃しきたるもので、岡

本重康は学内党資金の責任者と

なり、正田誠一は文3甲に、永

井健造は文3乙の責任者とな

り、それぞれ党資金を自学メン

バーから徴収し、岡本重康のも

とに一括して共産党中国地方オル

ルグ関谷源一に提供し、中国地

方党活動の資金源としての役割

を演じきた。

本年（昭和9年）三月たまた

ま教授の一部間に醸成しきった

二派の間の対立激化し、三月

末には学生課長の更迭、一講師

の罷免となり、これに端を発して二派の抗争はいよいよ表面化する。および自治学生会はブルジョア教育の矛盾を暴露すべく

最好的の機会とし、党オルグ関谷

源一もまたそれを利用して学内

を紛糾せしめんと企図し、二、三

の教授も感情的に生徒に対し

てストライキを煽動するものあ

り、四月、閑谷および自学責任

者の対策協議の結果「自学とし

ては表面にたつことは不利であ

るから、自学メンバーはひそか

に各クラスの輿論をつくるとこ

もに、運動部員を煽動して、こ

れを先頭にたたしめるととも

に、正田誠一および某は校友会

理事として合法場面にカムフ

ラージュして活動し、岡本重康

は寮務としてこれに参加、さ

らに自学メンバーたちは代議

員、ストライキ対策委員として

活躍し、一方某々らは非合法的に

は自衛隊としてこれに参加、さ

らに自学メンバーたちは代議

員、ストライキ対策委員として

活躍し、一方某々らは非合法的

に「広高戦士」を発行して暗流

問題に対する方針、批判などを

発表しつつ、たぐみに暗躍をつづけ、これが左翼指導につとめ

きたつたものである。

（注）広島県労働組合「広島県労働運動史」四〇七ページ「思想月報」第一号よりとしてつきの記事あり。

「右検挙にあたり党員吉本康二、山道繁等は巧みに逮捕を免れ京阪地方に逃走するや直に尾張西地方委員会の残留分子と連絡し、同委員会の指導下に広島地方における組織の再建方針並にそのころ結成せられたる党中央選全国代表者会議準備委員会支持等の諸問題について協議をとげ、吉本康二是前期

末広島地方における前示検挙の被害調査並に組織再建の使命を帯びて再び県市に潜入し、當時未検挙中の「ハンマー突撃隊」メンバーを指導し再建活動に移り、同年七月二十日には日本共産党中央選全国代表者会議準備委員会、広島地方準備委員会署名の檄文を発して、多数派支持を表明し、再度暗躍を開始するに至り、又高田郡吉田町付近には昭和八年一月以來、南北一を中心とする党公島オルグ会議所屬の「渡政突撃隊」、西部佐伯郡廿日市町附近には檢査義郎を中心とし、党支持団体の結成せられる居ること判明したるを以て、八月上旬より九月下旬にわたり順次これが検挙をおこない四五名を検挙したり。」

（呉市の検挙）つづいて県特高課千葉警部來県に吳署俄然色めき翌朝五時を期して呉署総動員。署長陣頭指揮。それぞれ、ねごみをおそって、川原石町、中村定男ほか20余名の男女を一〇月三日起訴予審に）

4・26事件後の検挙

（大賀市民史P.55 昭和9年）

4・26事件のトップをきって

広島高校赤化事件の江田島村全

校自治会メンバー（22）〔注、正

田誠一〕の公判を一二月一七日。

同人は四月の同校紛糾に一挙、

同志を獲得せんとしてストを煽

動、党資金獲得に暗躍。（転向の

ため求刑2年。判決は執行猶

予。）

つづいて広島瓦斬電車赤化関

係の車掌井上栄（24）ら三名の予審終結。そのほか簡単なものから分離公判をすすめる。

翌一〇年にいり一二月一三日比婆郡山内北村竹地定夫（27）の公判。山口県宇部市で旋盤工中左傾。昭和五年入党。

福岡県で起訴中、広島にまいもどり、吳市にいりこんで工廠從業員を目標に、全協吳地区の大強化に暗躍したもの。

（3月 求刑3年。転向に判決3年）

判決3年）

執行猶予。

中村は金屬工、船員、自由労働者など。昭和五年全国大衆党

員支部常任書記に、そのご左傾

して10・30事件では起訴猶予と

なったにもかかわらず、昭和九年三月県オルグ会議指導のもと

に、山崎らと前記「ハンマー突

撃隊」を編成し、「第二うなるク

レーン」なる機關紙の編集にし

たがい、4・26事件一斉検挙後

も、杉山某〔注、山道繁〕が京

阪地方へ潜入を援助し、のち広

島自治学生会メンバー吉本康二

と連絡して校内の事情を吳市内

の同志につたえ、九月検挙まで同人の指導下に運動、吳広島の

島自治学生会メンバー吉本康二

と連絡して校内の事情を吳市内

の同志につたえ、九月検挙まで

同人の指導下に運動、吳広島の

決。同裁判所の記録。

その一味県市塙屋町 ラス張り工中村定男（26）同菊池町 大工見習山崎政高（26）の公判を一〇年五月六日、ともに求刑二年。転向をみとめて判決同、

執行猶予。

中村は金屬工、船員、自由労

働者など。昭和五年全国大衆党

員支部常任書記に、そのご左傾

して10・30事件では起訴猶予と

なったにもかかわらず、昭和九年三月県オルグ会議指導のもと

に、山崎らと前記「ハンマー突

撃隊」を編成し、「第二うなるク

レーン」なる機関紙の編集にし

たがい、4・26事件一斉検挙後

も、杉山某〔注、山道繁〕が京

阪地方へ潜入を援助し、のち広

島自治学生会メンバー吉本康二

と連絡して校内の事情を吳市内

の同志につたえ、九月検挙まで

同人の指導下に運動、吳広島の

島自治学生会メンバー吉本康二

と連絡して校内の事情を吳市内

労働強化反対」のアジビラを從業員に配布。中村らと県地区協議会準備会を確立。関谷の指導をうけ興地区党组织に活動。なお資金四〇〇円を提供したも

の。

一斉検挙の、朝鮮人や水平社の左翼化に暗躍した岩佐寿一は三年半の求刑。非転向のため三年の実刑判決。

広島高校赤化の中心人物、広島市、吉本康二（23）は、しんがりをうけたまわって、昭和一〇年二月予審終結。同人は車掌、農村、朝鮮人赤化と手広く活動したが、一斉検挙まさにすがたをくらまし、吳工廠赤化の同志とともに九月検挙。

六月一五日、求刑三年。非転向のため判決同の実刑。八月三〇日、控訴審も同。

10・30事件で起訴猶予中、今回検挙された小寺英雄は五月一三日、求刑四年。判決同。控訴も非転向のため一審通り。

（県田田新聞 昭和10年3月6日）
二年六ヶ月求刑 赤の朝鮮人に

4・26 事件の別派として検挙された、全協及び共産青年同盟に入申し、在広朝鮮人青年会の共青フラクとして、赤の少年団組織に暗躍した。慶尚南道求礼郡求礼面生れ 金明文（22）にかかる公判は四日午後広島地裁で、福田裁判長、吉岡検事かか

りで開廷。検事は懲役二年六月を求刑。判決は一一日。

あめとかせと年表 ①

年月日	主な出来事	参考文献
1922年7月	広島市河原町、吉川長太郎方で「共産党宣言」の読書会、東大生米村を中心に舛井盛之、堀川俊市、倉本虎一（大工）、達一兄弟など。	『広島県労働運動史』
1924年9月8日	広島合同労働組合結成、総同盟へ加盟。	『広島県労働運動史』
1925年5月24日	広島合同労働組合、日本労働組合評議会へ加盟。	『広島県労働運動史』
1925年6月1日	広島鉄工組合結成、早川義則ら。	『広島県労働運動史』
1925年7月23日	政治研究会広島支部発会式（於広島市横町朝日クラブ）、司会吉本隆一（広島合同労組）、講演上岡利夫（神田農民同盟）、閉会の辞吉川長太郎。	『広島県労働運動史』
1925年8月16日	日本労働組合評議会・中国地方評議会結成（於岡山医師会館）、広島合同・広島鉄工・松永労働・岡山労働・岡山足袋ゴムの5組合、出席代議員30余名、傍聴者50名、役員として広島県より早川義則・佐久間松藏・小林一雄・倉本虎一・三藤茂八選出。	板野勝次著『嵐に耐えた歳月』
1925年12月12日	労働農民党第一回全国大会。	『広島県労働運動史』
1926年11月25日	広島一般労働組合結成——広島合同・広島鉄工合同。	『広島県労働運動史』
1927年2月18日	労農党広島支部結成、日農県連と評議会一般労働組合及び個人、支部長佐竹新市、書記長片岡重介、執行委員玖島三一・堀川俊市・早川義則・舛井盛之・中島正一・渡辺信樹・池松利男。	『広島県労働運動史』
1928年2月27日	日本共産党岡山地方委員会結成、委員長倉本虎一	『嵐に耐えた歳月』
1928年3月15日	全国一斉検挙、岡山県では倉本虎一ら不起訴で釈放、直ちに共産党岡山地方委の名で活動開始。	『嵐に耐えた歳月』
1928年3月15日	労農党広島支部、早川義則・上岡利夫・片岡重介・玖島三一・中島正一・堀川俊市・末元義彦ら約20名検挙、共産党との関係なく全員釈放。	渡辺信樹手記
1928年3月30日	労農党呉支部発会式、大山郁夫来呉、カフェー・プラジルで観迎会。	
1928年4月10日	労農党・評議会・無産青年同盟に解散命令、広島一般労働組合解散。	『広島県労働運動史』
1928年7月	濟南事件（第3次山東出兵）、反対のビラまで旧労農党広島支部の活動家一斉検挙、責任者として井上豊起訴。	渡辺手記
1928年8月21日	広島合同労働組合結成、佐竹新市・吉本隆一など、主事は左派の岨常次郎。	
1928年12月	労農党再建大会に広島より早川義則を代表としておく。12月4日（大会2日目）結社禁止命令。	
1928年12月23日	日本労働組合全国協議会（全協）準備会結成、当局の結社禁止命令にしたがわず、非合法組合として発足。	
1928年12月28日	政治的自由獲得労農同盟（政獲同盟）結成。	

あめとかせと年表 ②

年月日	主な出来事	参考文献
1929年1月	政治的自由獲得労農同盟広島支部結成——末元玄聰・玖島三一・片岡重介・早川義則・上岡利夫・晒谷悟・畠常次郎。	
1929年2月2日	中国無産党結成——旧労農党合法派佐竹新市・高橋武夫・吉本隆一・上岡利夫・高津正道。	『広島県労働運動史』
1929年3月15日	中村定男、「3・15、1周年と山宣虐殺に抗議し、ストとデモで闘え」のビラを呉工廠入口でまいて検挙（当時18歳）。	中村手記P.
1929年10月21日 ～23日	「三滝山ピクニック事件」として検挙した16名を起訴、広島刑務所に収容、玖島三一、末元玄聰、横野卯一、林成城、松本京一など。	『大呉市民史』
1929年11月23日 ～24日	県立広島二中生、社会主義研究をしているとして西署に検挙（7～8名）、指導員畠常一郎（19）も検挙、翌日東署、広島高校生2～3名を検挙。	『大呉市民史』 P124
1929年12月	広島憲兵隊本部、上京して眞鍋喜一（元呉工廠共済組合事務員）を検挙、ひきつづき関係の呉工廠工員数名を取調べ。	『大呉市民史』 P123
1930年5月5日	呉工廠工員8名を喚問、両名は一応帰宅、うち1名は音戸町で発行の文芸雑誌『一路』の発行者、第2回第3回と工廠10余名を検挙。	『大呉市民史』 P162
1930年6月19日	呉軍法会議で眞鍋喜一に懲役2年6月・罰金80円、山口薰・田中正雄・平原一雄に各罰金40円求刑、判決、眞鍋に2年、控訴して1年、上告棄却。	『大呉市民史』 P123
1930年6月20日	三滝山事件で判決、玖島三一・末元玄聰に各懲役3年、横野・林に各懲役2年。	
1930年12月29日	広島瓦斯電軌（広電）、初発電車からストライキに入る。	『呉日日新聞』 昭和6年1月3日記事
1930年12月30日	広電争議団員のデモと警官隊衝突、運輸クラブ内にいた171名を東西両署に検束。	『呉日日新聞』 昭和6年1月3日記事
1930年12月31日	広電争議団幹部59名を送検、同夜、執行前の強制処分によりその大部分を広島刑務所に収容。	『呉日日新聞』 昭和6年1月3日記事
1931年1月2日	広電、市内線は例年の半数49台で運転、乗客は不便を感じぬ程度となる。	『呉日日新聞』 昭和6年1月3日記事
1931年1月14日	広電争議団員20名を起訴、暴力行為・公務妨害・傷害・脅迫罪の名で。 8月22日佐竹新市市議に懲役7月の判決。	『呉日日新聞』 昭和6年1月15日記事
1931年1月21日	海軍工廠工員解雇予報記事発表、「呉工廠4,100名、横須賀2,200名、佐世保1,500名、舞鶴工作廠700名、広工廠700名、合計9,200名、解雇手当、1人平均684円」。	『大呉市民史』 P195
1931年1月26日	市川忍（広島郵便局員）、上京して全協本部に広島地方協議会をつくることの承認をうける。 3月9日広島地方各産業別支部の結成をおわり広島地方協議	『呉日日新聞』 昭和6年1月21日記事

あめとかせと年表 ③

年月日	主な出来事	参考文献
1931年2月	会成立。 胡川清、上京して赤色救援会本部から広島地区委員会結成の承認をうける。	『中国新聞』昭和7年9月7日記事 『中国新聞』昭和7年9月7日記事
1931年3月20日	呉工廠吉浦砲煩実験部構内に解雇反対のビラがまかれる。 4月2日工廠第一門めがね橋付近に。	『大呉市民史』 『大呉市民史』
1931年4月8日	呉工廠、3,722名の解雇人員を発表、全市に解雇反対ビラ数百枚まかれる。	『大呉市民史』
1931年4月16日	伊藤正朔（広島放送局員）・小野一明ほか数名、広島西署に検挙。	『中国新聞』昭和7年9月7日記事
1931年5月4日	広島市台屋町そのほかのアジトで、市川忍・五条俊夫・胡川清・村上文二・吉田司・小笠原豊その他を検挙、「5・4事件」。	
1931年6月	岨常次郎、共産青年同盟を通じて共産党中央と連絡がつき上京。 7月、広島市で岨、古末、寺尾の3名で党広島地方委員会準備会を結成。 8月、党中國地方委員会、広島地方委員会を結成。	岨常次郎談——1983年10月
1931年8月	上旬、坂口喜一郎・西川照三両兵曹、平原甚松・山口・若林各水兵、治安維持法違反で検挙、現役免除となる。	平松甚松手記
1931年9月18日	「満州事変」おこる。	
1931年9月22日	広島専売局付近で反戦ビラがまかれる。 9月23日、呉線海田市駅で呉工廠通勤列車到着の際反戦ビラ	『大呉市民史』 『大呉市民史』
	10月、広島市内各中等学校に「満州」出兵絶対反対のビラを撒布または送付。	『大呉市民史』
	10月24日未明、呉工廠めがね橋付近、広工廠付近に反戦ビラ	
	翌年2月、3月にも呉市内に反戦ビラ。	『大呉市民史』
1931年10月	呉地区オルグ岨常次郎、共産青年同盟同盟中央委員として上京、かわって寺尾一幹が呉地区オルグに。	『大呉市民史』
1931年10月	花野フジエ、福山の福島紡績組織の目的で、全労系福山労働組合及び全協広島支部協と連絡を保ちつつ福山市に入る。	
	12月、全協繊維福紡分会、全協一般福山地区、全協出版福山地区的組織に成功、全協福山地区責任者として広島支部協と連絡。	
1932年2月	呉工廠細胞工場新聞『唸るクレーン』および海軍細胞新聞『聳ゆるマスト』創刊。	寺尾一幹談
1932年3月4日	広島市千田町で広島地区オルグ古末憲一逮捕。	
1932年3月5日	広島市を中心に左翼組織一斉検挙はじまる。	
1932年4月1日	呉市で興文中学自治学生会員の検挙をきっかけとして一斉検	

あめとかぜと年表 ④

年月日	主な出来事	参考文献
	挙はじまる。	
1934年4月	中旬、中国地方オルグ三好惣次、呉地区オルグ寺尾一幹と連絡、寺尾は『聳ゆるマスト』(すでに4号まで発行)のことなど報告。	
1932年5月10日	寺尾一幹、路上で逮捕される。 30日未明寺尾、呉署より脱走、山陰線をへて上京。 寺尾脱走のための非常警戒中、路上で平原甚松逮捕される、まもなく釈放。	寺尾手記
1932年9月2日	横須賀軍港で西氏・河田・吉原の三水兵検挙。	『大呉市民史』
1932年9月	滝川恵吉、党本部より中国地方オルグとして広島県に派遣され、中国地方オルグ錦織彦七とともに再建にあたる。 滝川は広島市を中心に、錦織は呉地区、岡山県を担当。	『大呉市民史』
1932年9月	山下達吉、坂口・平原らと連絡活動したことにより現役免除。	
1932年10月30日	錦織彦七、党の熱海会議の一斉検挙で逮捕される、平原甚松も。 つづいて広島市で滝川恵吉、大村莊重そのほか「10・30事件」一斉検挙はじまる。	『嵐に耐えた歳月』 『大呉市民史』 P 278
1932年11月4日	広島市公会堂でひらかれた、プロレタリア文化連盟・ソヴェート友の会主催「文化の夕」、警察によって強制解散、伊藤正朔ほか9名検束される。	『呉日日新聞』昭和7年11月6日記事
1932年11月7日	呉海軍水兵小倉正弘ら6名、治維法違反で憲兵分隊に検挙される。	『大呉市民史』 P 276
1932年11月19日	山下達吉元水兵、大阪で検挙。	『大呉市民史』 P 276
1932年11月25日	5・4事件公判、市川忍、裁判開始前に被告人会議をひらくことを強く要求、ついに市川・五条・胡川、3被告退廷を命じられる。	
1932年12月5日	市川忍懲役4年、五条俊夫懲役3年の判決に両名は「日本共产党万歳」を叫ぶ。	『呉日日新聞』昭和7年11月26日記事 『呉日日新聞』昭和7年12月6日記事
1932年12月	山本タキエ(豊田郡中野小学校訓導)、10・30事件関係で竹原署に検挙。	『瀬戸内に生きて』
1933年1月	三戸信人、10・30事件に起訴猶予で釈放後上京、共青同盟本部と連絡。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年2月17日	市川忍、控訴審分離公判、懲役4年の判決に「思想犯に対する極刑反対」を叫ぶ、五条は懲役3年の判決。	『呉日日新聞』昭和8年2月18日記事
1933年2月17日	山口県での一斉検挙をのがれ、呉市で再建活動をしていた守田道輔、検挙される。	
1933年4月5日	関谷源一、党本部よりオルグとして広島市に派遣される。	『中国新聞』昭和9年8月20日号外
1933年4月10日	関谷源一、三戸信人、小川正一(広島郵便局)の三名で、党	

あめとかぜと年表 ⑤

年月日	主な出来事	参考文献
	広島県再建委員会を結成、7月27日広島県オルグ会議と改める。	
1933年6月10日	赤色救援会の岡本菊次郎、阪本四郎、検挙される。 7月天津せい検挙される。	『中国新聞』昭和9年8月20号外 『中国新聞』昭和9年8月20号外
1933年7月	小寺英雄、宮島から広島市に入って赤色救援会活動。	『小寺手記』
1933年7月	全協再建準備会結成、関谷、小川、岩佐、その後竹地定夫、黄五姓など参加、全協広島地区準備会結成、『再建の旗』を発行。	
1933年7月	広島郵便局細胞結成、『おいらのたより』を発行。	
1933年8月28日	差別裁判糾弾闘全国委員会、大阪で結成、つづいて各府県に部落闘争委員会結成、「差別裁判を取消さねば部落民の兵役・納税の義務を免除せよ」のスローガンをかける、国会にむけて裁判取消しの請願行進を決定。	
1933年9月	中旬、呉地区で「ハンマー突撃隊」結成、『第二喰るクレーン』を発行、呉工廠を目標にながしこみ。	
1933年10月4日	差別裁判取消し要求の請願隊、九州を出発し山口県を経てこの日己斐駅につく。	『中國新聞』昭和8年10月5日
1933年10月5日	玖島三一（福島町）白砂健（坂水平社）、請願隊に加わって出発。 このころ福島町に部落闘争委員会が結成され、岩佐寿一、書記となる、『糾弾闘争ニュース』を発行。	
1933年11月	広島合同労組・広島消費組合・在広朝鮮青年会で差別裁判糾弾闘争支持の会を結成。	
1933年11月	党オルグ、広島高等学校自治学生会を指導、学内党資金網を確立、『前進』を発行、翌年4月『広高戦士』と改題。	
1934年1月	党広島県オルグ会議名の『帝国主義戦争 絶対反対』のビラを広島全市にはる。	
1934年1月	専売局を目標に活動中の高橋マツ子、党オルグの注意により弾圧をかけて呉にうつる。	
1934年2月	初旬広島電鉄党細胞結成、『スパーク』発行。	『中国新聞』昭和9年8月21日記事
1934年3月	作家同盟の国本金夫・山本タキエ、反戦活動の嫌疑で広島憲兵分隊に検挙、まもなく釈放、5月17日特高に再検挙。	数本タキエ手記
1934年4月10日	三戸信人、東京で警視庁に逮捕され、広島に身柄をうつして取調べられる。	『中国新聞』昭和9年8月21日記事
1934年4月26日	広島市内17ヵ所のアジトから50名を検挙（4・26事件） 6月23日広島高校生徒49名を検挙。 一斉検挙をのがれた高橋マツ子、山道繁、広高生吉本康二、京都にうつる。	高橋マツ子手記

あめとかぜと年表 ⑥

年月日	主な出来事	参考文献
1934年7月20日	吉本康二、再び呉に入り、残留同志、中村定男らと再建活動 党関西地方委員会の指示により「日本共産党中央奪還全国代表者会議（準）・広島地方準備委員会」（いわゆる多数派）の檄文を出す。	中村手記 広島県労会議編『運動史』
1934年8月	吉本康二、松本徹をつれて上阪、広島県へのオルグ派遣を党 関西地方委員会にもとめる、関西地方委では警戒して松本徹 とはあわず、オルグ派遣も人手不足で不可能、吉本もむなし く帰る。	平葦信行談
1934年8月・9月	高田郡吉田町付近の南小一らの「渡政突撃隊」グループ及び 佐伯郡廿日市付近の桧垣義郎（変電所技手）ら、農村青年など順次検挙、45名に達す。	『大呉市民史』
1934年9月	吉本康二、中村定男ら検挙。	
1935年6月	吉本康二、3年の実刑判決、8月控訴審も同じ、獄中発病帰 宅まもなく死亡。 中村定男、2年の刑（3年間の執行猶予）、釈放後広島一般労 働組合常任となる。	中村手記 数本手記
1935年6月26日	小寺英雄、控訴公判で4年の実刑判決。	数本手記
1935年7月1日	関谷源一、8年の実刑判決。	『大呉市民史』
1935年10月	岩佐寿一、上告棄却で3年の刑確定。	
1935年10月	「5・4事件」で起訴猶予の山本正一（製材工）、広島一般労 働組合で活動をはじめる。	
	1936年10月上阪、党中央再建準備会系の長壁民之助（大阪木 材労組書記）・岩間光男（『労働雑誌』関西支局）らと連絡帰 広後中村定男らと『労働雑誌』読書会をつくる。	『広島県労働運動史』P 407 「思想月報」
1936年2月11日	「10・30事件」で3年の刑の平原甚松、仮釈放。 6月6日上阪して党中央再建準備会系の森本亮一・長壁民之 助らと連絡、帰郷後社大党細田伊太郎の市議選応援、片岡義 夫・田中豊らと『労働雑誌』読書会などをつくる。	
1936年5月16日	思想犯保護觀察所管轄の丙子会発会式（於広島県医師会館）、 会員150名位。	数本手記
1936年12月5日	平原甚松・片岡義夫・山崎政高・田中豊らを検挙、起訴猶予 山本正一・中村定男ら広島一般労組員を検挙、中村定男は前 判決の執行猶予を取消され、合計4年の実刑判決。	
	1937年6月18日山本正一、予審中病死。	『広島県労働運動史』中村定男手記
1940年8月19日	新協劇団後援会広島支部に弾圧、大藤軍一・中沢晴海・井上 栄・田谷春夫・大前三枝ら宇品署に留置、妻子のある中沢晴 海、年末に釈放、他は留置場で越年、大藤軍一、3年の実刑 で下獄。	

あめとかせと年表 ⑦

年月日	主な出来事	参考文献
-----	-------	------

1941年4月8日	<p>「広島グループ」の名目で警視庁に広島出身者検挙、古末憲一・岩佐寿一・迫樹盛登・林ノ内栄蔵・数本英次郎・中川秋一・岡本菊次郎、5月に全員不起訴。</p> <p>別に寺尾一幹は研究会をひらいていたとして検挙、4年の実刑判決。</p>	
-----------	---	--

人名索引

①頁数は本文記載頁
②【】は広島県解放運動無名戦士の碑合祀者名簿
③〔〕は参考文献

天津 セイ 広島専売局女工員。'31年3月ごろ全協食料労組広島支部専売局分会に加入、同5月解雇。そのご赤色救援会活動（伊藤正朔らと）。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。赤色救援会の再建活動（岡本、坂本、三戸らと）。'33年6月検挙、「34年3月、2年の刑、執行猶予の判決

栗根 恒夫 尾道市十四日町。尾道商業卒。「30年～'31年ごろから瀬戸内港湾從組主事野村秀雄方に出入りする。'32年2月尾道バスのストにビラまきで検挙。戦後広島地方委員会再建に参加。「49年10月死亡、38歳。

☆P 104 (迫川敬一談)

☆第2回合祀名簿

池田 八束 呉市東畠町。「28年より'30年、東京で赤色救援会活動に参加。戦後'47年呉市議選に党より立候補、落選。'52年より失対で就労。「54年全日自労広島支部委員長、「58年～'64年広島県労会議執行委員、全日自労広島分会執行委員。「66年7月労災死で死亡、59歳。

☆P. 136、P. 146 (中村定男手記)

☆第5回合祀名簿

稻垣 宏 (池村) 「21年（大10年）志願兵として呉海軍に入る。看護兵となり一等看護兵曹に進む。山本俊次看護兵、木村在重水兵を知り左翼文献を広く集める。'31年（昭6年）左翼文書を発見されて呉海軍病院第二病棟長を免ぜられ、海兵团で取調べ。「33年4月軍法會議で4年の刑。「77年2月三重県久居市庄田町の自宅で高血圧症で死亡、72歳。

☆P. 86 (稻垣談)

☆第16回合祀名簿

井上 栄 広島電鉄車掌。「33年（昭8年）広島郵便局集配手小川正一（党広島県再建委員会メンバー）のはたらきかけで党オルグ閑谷源一と連絡。全協広電分会、党広電細胞に加入、『スパーク』を発行。「34年「4・26事件」で検挙、起訴猶予。「49年8月新協劇団広島後援会員一斉検挙にあい宇品署に翌年まで留置、起訴猶予。

☆P. 62；P. 152 (談)

井上 満 岩國市大字美土路。広島県立工業製圖科卒。日本製鋼広島工場で全協金属分会加入。「32年1月入党。同年「10・30事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。「45年8月6日原爆死、35歳。

☆P. 220、4段目。P. 221、1段目。

☆第2回合祀名簿

井ノ口俊夫 広島高師臨時教員養成所学生。共青同盟細胞キャップ（P. 52）'31年4月29日逮捕、同夜脱走。5月10日路上で特高刑事に発見され短刀で刺して逃走。6月2日大阪府下で逮捕。

☆P. 219、5段目

石川 市松 広島市舟入町。印刷工。「31年5月全協加入、市川印刷所分会結成、「31年9月共青加入。「32年3月市川印刷所ストで活動、同年「3・5事件」で検

挙、2年の刑（執行猶予）。'40年7月佐伯郡大柿町柿浦で病死、32歳。

☆P. 218、1段目。☆第2回合祀名簿。

市川 忍 広島郵便局通信書記。全協広島地方委員会結成。「31年5・4事件で検挙、4年の刑。控訴も同。「46年3月病死、41歳。

☆P. 213、3段目～4段目。

☆P. 215、1段目～3段目。

井上 その 広島市立高女卒後福屋百貨店に入る。全協加入。「32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

伊藤 正朔 広島放送局勤務中『戦旗』広島支局責任者、「31年4月検挙起訴猶予。「32年3・5事件で検挙、起訴猶予。10・30事件で検挙起訴。

☆P 212、4段目。

☆P 220、4段目。

石川 茂一 広島一中4年修了で第三高等学校入学。第三高等学校を放校処分となり広島市に帰り左翼運動で検挙起訴猶予。再建活動中、10・30事件で検挙、3年の刑。腸結核で執行停止、出獄。34年9月死亡、23歳。

☆P 220、4段目。5段目。

☆第1回合祀名簿。

岩佐 寿一 広島二中卒、広島高校1年中退。「30年から大阪で労働生活。「33年7月広島市で全協広島地区再建準備会に加入。10月差別裁判抗辯闘争福島町部落闘争委員会書記となる。「34年4月「4・26事件」で検挙、3年の刑。「38年5月出獄、翌年上京、機械組立工となる。「41年4月警視庁に「広島グループ」として古末・林ノ内・岡本・数本・中川・迫樹らとともに検挙されたが5月に全員釈放。「45年空襲にあい鳥取県米子市で機械工。同年12月広島市に帰り党再建運動に参加。「49年より神戸市で全日自労神戸地区結成運動に参加。

☆P 180 (手記)

☆P 228、1段目。

岩村 大次 国鉄広島駅車掌区勤務、「29年浜口内閣官吏減俸反対のビラまきで解雇後国鉄オルグとして活動、「32年8月山口県防府市で検挙。6年の刑。「55年10月17日病死。

☆P 66 (清水手記)

☆P 218、3段目。

上岡 利夫 賀賀茂郡大和村下徳良90。日影館中学卒、歯科医専中退。24年世羅郡袖田村に「袖田農民同盟」結成。労農党広島支部に加入。労農党解散後、政獲同盟（政治的自由獲得労農同盟）に参加。31年8月全農全会派（全国農民組合全国会議派）に属す。「34年3月事務所を造賀村に移す。戦後入党。広島地方委（県委）農民部長となる。「58年9月28日死亡、68歳。

☆第7回合祀名簿。

胡川 清 広島一中卒、神戸高商入学。中退して大阪外語ロシア語科に入学。左翼運動に参加して退学処分となり広島市に帰る。'31年1月赤色救援会広島地区委員会結成に着手。2月赤色救援会本部から広島地区委員会確立の承認をうける。'31年5月「5・4事件」で検挙。

☆P. 213、1段目

☆P. 215、1段目

岡部 隆司 神石郡豊松村下豊松。14歳で上京、山本懸蔵方に下宿。産業労働調査所へ小使として入所、正則中学へ通学。「4・16事件」当事、所員全部検挙されて彼ひとり産業労働調査所を守る。'31年6月ごろ入党。野坂、岩田、野呂その他クートペーからの帰國者と党本部との連絡役。'31年1月『第2無産新聞』編集部員。同年11月検挙、広島刑務所で服役。大藤軍一、岡本菊次郎、坂本四郎らと同一作業所で働く。出獄後東京で活動を続ける。'41年7月2日検挙。'42年7月31日巣鴨刊務所未決で死亡、31歳。

☆P. 114、中段 (岡本談)

☆第7回合祀名簿

小倉 正弘 台湾台北州立台北工業学校電気科中退。'30年1月吳海兵団に入団。軍艦那珂、海兵団をへて軍艦白鷹乗組み。一等機関兵、治維法違反検挙で二等兵に降等処分。党中國地方オルグ錦織彦七、吳軍潜水兵対策委責任者木村莊重と連絡。『鋒ゆるマスト』5号6号、『赤旗』その他の吳軍港での配布責任者。'32年11月7日検挙、軍法会議で6年の刑。

☆P. 90 (手記)

☆P. 221、4段目

岡本菊次郎 (福本) '32年「3・5事件」に全協メンバーとして検挙、起訴猶予。'32年「10・30事件」の犠牲者の救援活動に取組む。'33年6月10日犠牲者家族の会合で特高にふみこまれて検挙、3年の刑。

☆P. 113 (手記)

小川 正一 広島郵便局集配手。'33年2月共青加入、4月入党。4月10日閑谷源一、三戸信人とともに党広島地方委員会再建委員会（のちに広島県オルグ会議）結成。広島郵便局細胞キャップ。全協広島地区協責任者。'34年4月「4・26事件」で検挙、7月獄内で自殺。

☆P. 228、2段目。

☆P. 152 (井上手記)

大塚 猛雄 赤色救援会三次十日市地区責任者。'34年4月26日広島市で検挙、起訴猶予。その後も救援活動を続ける。'57年10月21日死亡、47歳。

☆P. 124、3段目。

大塚梅三郎 広島市松永市神村町。'33年戦闘の無神論者同盟広島支部松永班キャップ。'33年検挙、発病して出所、自宅療養。'34年12月結核で死亡、23歳。

大下 一二 新聞配達員。吳地区共青街頭細胞メンバー。'32年4月2日検挙。

大藤 軍一 広島郵便局通信書記補。全協広郵分会責任者。'31年「5・4事件」で検挙、起訴猶予。'32年「3・5事件」で検挙、3年の刑。'35年8月出獄後、ロンド書房をひらき、新協劇団広島後援会を結成。'40年8月19日同後援会の一斉検挙で、3年の刑。敗前直前に出獄。その後広島労演を結成、事務局長（ベンネーム大月洋）。'73年8月広島市飯室町の自宅で病死、67歳

☆P. 155 (手記)

☆第12回合祀名簿

太田 史郎 大阪府泉州郡佐野町1250。広島郵便局電信課集配手。'31年1月全協広郵局分会加入、同年「3・5事件」で検挙、2年の刑。出獄後大阪で自動車運転手。'45年10月北ボルネオで病死、36歳。

☆P. 218、1段目。

片岡 義夫 山口県周東中学卒。'31年吳工廠整理反対運動にビラまで罰金刑。'31年9月共青に加入。全協の組織活動及び中学校の自治学生会組織活動。'32年4月30日広島市で検挙、3年の刑、執行猶予。'40年4月10日死亡、41歳。

☆P. 218、2段目。

☆P. 41、1段目。

片岡 重介 京都市電車掌時代、市電ストで中西伊之助らと検挙、6ヶ月の刑。吳市にかえり労農党広島支部執行委員。労農党解散後、新党準備会、政黨同盟に参加。'32年賀茂郡造賀村にかえり全農活動。'41年6月23日結核で死亡、49歳。

☆P. 34、2段目。(渡辺手記)

☆第1回合祀名簿

蒲田 政雄 吳一中卒。共青吳地区街頭細胞メンバー。'32年2月ごろ全協金属吳工廠分会砲噴製鋼班オルグ。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P. 218、3段目。

龜田 勢 吳二中4年修了。新聞配達員。共青街頭細胞メンバー。'31年4月吳工廠整理反対のビラまで罰金刑。'31年7月全協吳地区協議会結成をはかり、共青青年同盟にも加入。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'45年3月27日中国広西省柳州で死亡、37歳。

☆P. 218、3段目。

☆第1回合祀名簿

数本英次郎 広島一中を経て高松高商卒。広島市で保険会社勤務。'33年よりコップ（文化同盟）再建運動に参加、プロレタリア科学広島地区責任者。'34年「4・26事件」で検挙。2年の刑、執行猶予。

☆P. 228、1段目。

川窪鉄之助 吳一中2年修了。吳海軍工廠水雷部製団工。入党細胞キャップ。「3・5事件」'32年5月13日検挙。2年の刑、執行猶予。'45年11月1日上海陸軍病院で死亡、36歳。

☆P. 220、1段目。

第1回合祀名簿

韓 利権 '32年1月旭山中学中退。吉岡道人のすすめで共青加入。帝人広島工場・専売局を目標に組織活動。「10・30事件」で検挙、起訴。

☆P 220、4段目

北田 建二 神戸職工学校（三菱）卒業、三菱神戸造船所内燃機科工員。「30年6月志願兵として呉海兵团に入団。軍艦矢矧、海兵团を経て特務艦朝日乗組み。「32年11月7日検挙、軍法会議で3年の刑。

☆P 221、4段目。P 79、1段目。

城戸 薫 安芸郡倉橋島村454。小学校教師。「3・5事件」で検挙。起訴猶予。戦後倉橋村長。

☆P 218、4段目。P 217、2段目。

木村 庄重 '25年6月呉海兵团に入団、「32年7月退団。在役7年に及ぶも一等兵。在役中よりオルグと連絡活動、退団後広島に居住、海軍を目標に活動。「32年「10・30事件」で検挙。3年の刑。「37年末出獄後郷里島根県鹿足郡木部村に帰る。戦後「47年木部村長に当選、「50年10月3日占領政策違反で逮捕され重労働7年。「52年4月講和発効で釈放。「82年10月7日神奈川県湯河原老人ホームで死亡、75歳。

☆P. 220、4段目。

☆P. 221、1段目。

☆P. 18、3段～P. 19、1段目。

☆第21回合祀名簿。

金 明文 公立普通学校卒。「30年9月内地に渡来。新聞配達で広島市私立松本中学校卒。「32年5月ごろ反帝同盟広島地区組織に加入。「33年7月共青に加入。在広朝鮮青年会共青フラクション。少年団組織。

☆P. 228、2段目。

木原 吉人 高小卒後「18年呉工廠造機部見習工。「25年歩兵第11連隊に入隊、「26年除隊。「27年上京ラス張り工となる。「30年呉に帰り労農大衆党に入る。「31年の呉工廠整理反対闘争を最も勇敢に闘う。同年7月呉一般労働組合結成。11月ビラはりで罰金10円。「32年1月呉市長選挙に労農大衆党呉支部長細田伊太郎をたてて運動。その後共産主義に投ず。

☆P. 224、3段目。

玖島 三一 靴工。「25年広島合同労組（のち評議会系一般労働組合）に加入。その半年後全国水平社広島支部に加入。旧労農党——新党組織準備会——政獲同盟の各広島支部員となる。「29年10月23日三滝山ピクニック事件で検挙、3年の刑。「33年7月出獄。同年10月差別裁判糾弾闘争で国会請願隊広島県代表として参加。「34年「4・26事件」検挙では不起訴。46年共産党広島県委員に選出。戦後第一回の衆議院総選挙に立候補。「52年3月死亡、46歳。

☆P 207、3段～4段目。

久下本 有 福山市。「28年2月総同盟福山労組結成に参加。同年11月総同盟脱退全国労働組合同盟（全労）結成に参加、中国地方連合会長。広島合同運送スト・広島電鉄スト応援で検挙される。「61年12月28日病死、57歳。

☆P. 208、3段目。P. 98、2段～3段目（野田手記）

國本 金夫（堀哲二） 賀茂郡東高屋村字堀。小卒後1年間私塾で学ぶ。そのご農業新聞外交員、人絹職工、新聞通信員。「33年9月ごろプロレタリア作家同盟広島支部を再建。「34年3月広島憲兵分隊に検挙、まもなく釈放。「34年5月「4・26事件」文化団体関係の検挙で牢品署へ。3年の実刑で「38年2月出獄。「39年8月赤糸崎病院で死亡、32歳。

☆P. 228、5段目。P. 155（大藤手記）

☆第1回合祀名簿。

五条 俊夫 県立広島工業学校電気科中退。ハカリ器製作工。広島合同労働組合内革命的反対派に参加。「30年10月ごろより市川忍、畠常次郎らと共に協議会を再建。「31年3月同協議会結成完了、事務局員。「31年「5・4事件」で検挙、3年の刑。出獄後、「32年2月工場で事故死。

☆P. 215、1段～3段目。

☆P. 213、3段～5段目。

☆第1回合祀名簿。

小寺 英雄 広島県佐伯郡厳島町。「32年ごろより赤色救援会佐伯地区責任者。「32年「10・30事件」で検挙、起訴猶予。「33年7月広島市にて、岡本・坂本・天津検挙のあとをうけて赤救再建活動。「34年1月赤救広島地方委員会結成。その間入党、オルグ会議メンバーとなる。「34年「4・26事件」で検挙、4年の刑。

☆P. 228、1段目。

☆P. 116（小寺手記）

阪口喜一郎 大阪府泉北郡和泉町。予備役海軍二等機関兵曹。「31年8月治安維持法違反事件で他の水兵とともに軍法会議の取調べをうけ予備役編入となる。田中書店を通じて党呉地区オルグ寺尾と連絡。中国地方オルグとも寺尾を通じて連絡協議、上京して中央軍事部に入る。警視庁で逮捕呉憲兵隊に送られ、広島刑務所未決拘留中、「33年12月死亡、31歳。

佐々木万寿司 賀茂郡八本松。全協金属呉工廠分会造機班責任者。「32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P. 218、2段目。

☆P. 220、2段目。

迫柳 盛登 安佐郡飯室町。広島消費組合常任。赤色救援会、そのほか非合法組織との連絡役、争議団の応援などで活動。「34年「4・26事件」で検挙。

☆P. 228、4段目。

☆P. 117、1段目。

☆P. 120、1段目。

坂本 四郎 広島県厳島町。「10・30事件」後の赤色救援会再建のために広島市にて、岡本・天津とともに活動。「33年6月犠牲者家族の会合で検挙。

☆P. 116 (小寺手記)

☆P. 114、1段目。(岡本談)

坂田 進 呉市岩方通。呉ノ中中退。社会大衆党呉支部に加入後左翼に近づく。

☆P. 224、1段~2段目。

佐竹 新市 広島県山県郡川迫村(現千代町田)中学校卒業後石炭外交員。「24年八田舟三牧師の自由労働問題研究会に出席、翌年アナキスト系の広島純労働者組合結成。「28年4月10日労農党解散命令。」「29年5月広島自由労働者組合結成、委員長。同年6月広島市議に当選。」「30年12月広電争議で検挙、7ヵ月の刑。」「35年9月県議会議員に当選。」「36年8月補欠選挙で市議にも当選。」「38年2月人民戦線事件で検挙、社会大衆党から除名。9月県議を辞職して不起訴処分。」「39年中国に渡り、「46年帰国。」「47衆院議員に当選、「58年まで4期つとめる。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

佐藤 静江 呉市カフェ一摩天桜女給。水兵との連絡係

☆P. 222、2段目。

☆P. 92、3段目。(小倉談)

佐藤 疊 愛知県中島郡萩原町大字高松155。高小卒、名古屋中央電話局で技手見習。「27年6月志願兵として呉海兵団に入団。通信兵として軍艦乗組後海兵团勤務。一等水兵。」「32年「10・30事件」で検挙、4年の刑。

☆P. 222、3段目。

佐藤 茂 福山市北吉津町。印刷工。福山市洋画グループ「ブラルタルゴニア」に属す。広島市よりの全協オルグ花野フジエ・岡田茂美の来福に協力。「44年10月死亡、35歳。

☆P. 101 (野田手記)

重田 安一 呉市京町。呉工廠旋盤工。呉工廠細胞メンバー。「3・5事件」で検挙。戦後三菱造船広島工場で村上経行、土居浅市とともに党細胞結成。レッド・ページで解雇、息子とともに検挙。

☆P. 177 (手記)

☆P. 218 (呉関係起訴者)

茂渡 義人 呉二中卒。呉水質試験所見習工。「32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。「33年3月入党。広高自治学生会及五日市町の農村青年の指導にあたる。「34年「4・26事件」に東京で検挙、広島に護送される。2年の刑、執行猶予。「45年11月16日北海道へ開拓移民として行き、そこで死亡、36歳。

☆P. 217、2段目。

☆P. 220、3段目。

島本 隆司 広島市己斐町。山陽中学卒後「38年3月から広島市役所会計課に勤務。「31年8月ごろから日本プロレタリア映画同盟、美術家同盟、演劇同盟各広島

支部の同志としおい、自ら中心となって作家同盟広島支部を結成。同年12月各支部をもってプロレタリア文化連盟広島地方協議会を組織、その責任者となる。

「32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。その後中国に渡り、戦後『民主新聞』編集員、審議日本人小学校長等。「53年帰国。」「54年入党。」「55年11月病死、47歳。

☆P. 219、4段目

☆第1回合祀名簿。

宍戸 年春 広島市蟹屋町。広電車掌。全協広電分会及党細胞メンバー。「34年「4・26事件」で検挙。

☆P. 229、1段目。

清水 次郎 ☆P. 218、1段目。

正田 誠一 安芸郡江田島村。広島高校文科2年在学中自治学生会活動。「34年「4・26事件」で検挙、起訴猶予。戦後九州大学教授(労働法)

☆P. 229、1段目、4段目。

末元 義彦 安佐郡可部町。忠海中学から同志社大学入学。退学処分で広島に帰る。「28年2月党オルグ稻村隆一を自宅に止め、労農党書記などを党員に推せんしたが、稻村の再度の来広がなく、そのままとなる。その後広島市役所に勤め、呉市に転じ、応召。「43年12月マレイで戦死、41歳。

☆P. 34、3段目。

末元 玄聰 安佐郡可部町。労農党広島支部解散後、政獲同盟広島支部に参加。「29年10月「三滝山ピクニック事件」で検挙、3年の刑。出獄後「解党派」の立場をとる。「34年12月自殺、29歳。

☆P. 207、4段目。

☆第1回合祀名簿。

関口 春夫 呉市中通5丁目。「26年ごろより呉市でエスペラント運動。呉工廠首切反対闘争で活動。戦後「45年末、『赤旗』呉市分局を自宅につくり活動、党呉地区委員。「49年11月呉民商結成に参加、書記長となる。」「78年11月6日自宅にて病死、74歳。

☆P. 146、(中村定男)

☆第16回合祀名簿。

関谷 源一 下関市新市町。小学卒、東京に出て「30年(昭5年)より全協土建労働組合に加入。活動中横東10数回。「31年(昭6年)入党。左翼文献をよみすぎて、つよい近視となる。「32年(昭7年)栃木県オルグ。「33年2月長野県オルグ。同年4月広島県オルグ。「34年(昭9年)「4・26事件」で検挙、8年の刑。刑確定後下関刑務所で転向。戦後全日自労下関分会に加入。戦前のことは語らず、役員にも一切ならず。「72年(昭47年)7月14日下関済生会病院で死亡、64歳。

☆P. 227、5段目。

☆P. 225、2段目以下。

☆P. 93、下段。(小倉談)

☆第16回合祀名簿。

佐々木 常次郎 広島市西新町。高小卒後ハカリ機械製作工場で労働。評議会系広島一般労働組合解散後広島合同労組結成で主事となる。『第二無産者新聞』『無産青年』広島地方責任者。'31年7月古未憲一、寺尾一幹と共に党広島地方委員会結成。吳地区オルグを経て共産青年同盟中央委員として上京、検挙時中央委員長。

☆P. 37 (手記)

☆P. 215、4段目。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

高野 年夫 広島市下柳町。大工。'31年ごろ石川茂一を知り左翼運動に入る。'32年工兵第5連隊に入隊。「3・5事件」で検挙。'62年4月病死、51歳。

☆第1回合祀名簿。

滝本 敏美 広島地区全協オルグ。'32年4月19日己斐駆で逮捕。

☆P. 216、3段目。

田中 豊 呉市中通り田中書店主。'31年の吳工廠解雇反対闘争で検挙、起訴猶予。工廠労働者及び水兵と党オルグとの連絡役。'32年6月6日検挙、起訴猶予。

☆P. 218、4段目。

田谷 春夫 広島市白島西中町。印刷工。'31年6月仁井田教一とともに赤色救援会広島地区委員会を再建。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'41年12月太平洋戦争開始で検挙、まもなく釈放。辰巳行平のベンネームで新短歌運動に参加。'63年5月病死、54歳。

☆P. 218、2段目。

☆第2回合祀名簿。

竹谷 時良 安芸郡江田島村。元郵便局員。'32年10月入党。橋本俊三と共同して活動。

☆P. 220、4段目。

田原 勝治 社大党系合同労組内革命的の反対派として活動。'33年9月昭和ゴム争議指導。'33年11月慶徳鉄物スト指導。'34年「4・26事件」で検挙、執行猶予。

☆P. 226、5段目。

竹地 定夫 比婆郡山内北村。旋盤工。福岡県で検挙、起訴猶予。'33年7月広島県に帰って活動。全協金属オルグ。'34年「4・26事件」で検挙、3年の刑。戦死。

☆P. 230、4段目。

滝川 恵吉 静岡県志太郡島田町。'32年9月党本部より中国地方オルグとして派遣、中国地方オルグ錦織彦七とともに広島地方の再建活動。海軍については両オルグが木村莊重を指導。'32年10月30日熱海会議の一斉検挙から滝川のアジトがばれて11月3日検挙。

☆P. 220、4段目。

高橋 渉 豊田郡久芳村。広電車掌。'33年6月全協に加入、'34年2月入党、広電細胞メンバー。

☆P. 228、2段目。

津田 晓 広島県柳津町。'32年10月戦闘の無神論者同盟松永班結成に参加。'33年3月18日山根清・小林正一らとともに検挙、起訴猶予。'33年10月25日病死、24歳。

☆第2回合祀名簿。

つともとスミ子 広島県女、専攻科卒業。'32年9月守田道輔とともに呉市に潜入。'33年6月検挙。

☆P. 224、3段目

寺尾 一幹 広島高校卒、京大1年で検挙、結核のため執行停止で出獄。広島市に帰り、唄、古来とともに党広島地方委員会結成。吳地区オルグとなり『唸るクレーン』『聴ゆるマスト』発行。'32年5月10日検挙、30日呉署から脱走。山陰線を経て上京、党中央の藻谷小一郎と神田神保町で出会い、連絡に成功。

☆P. 44 (手記)

☆P. 215、5段目。

☆〔日本社会運動人名辞典〕

中村 定男 '29年3月13日吳工廠正門付近で「3・15一周年」のビラをまいて拘留15日(18歳)。同年5月1日メーデーで検束。11月全国大衆党呉支部に加入。'31年4月吳工廠整理反対のビラまきで罰金10円。'33年6月守田道輔の再建運動の関連で検挙、不起訴。'44年「4・26事件」関係で検挙、起訴猶予。吉本康二と党再建運動。同年9月検挙、2年の刑、執行猶予。'35年12月「労働雑誌読書事件」で検挙、前半決の執行猶予を取消され合計4年の刑。戦後呉地区党组织を再建。広島の東洋工業に旋盤工として入社。同社のストライキに争議委員長となる。

☆P. 136 (手記)

☆P. 230、5段目。

永井 健造 広島市水主町。広高文科乙在学中。党資金文科3年乙責任者。広高自治学生会指導部員。

☆P. 228、5段目。

南部 達三 高田郡甲立町。広陵中学卒。レコード商。'32年ごろより作家同盟加入。'33年6月検挙、起訴猶予。'34年「4・26事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。'45年8月21日原爆死。39歳。

☆P. 228、5段目。

仁井田教一 佐伯郡宮内村字宮迫。元大工。広島合同労組メンバー。赤色救援会責任者として'32年「3・5事件」で検挙。

☆P. 63 (手記)

☆P. 216、3段目。

☆P. 218、2段目。

西川 成美 吳工廠魚雷実験部製図工。「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

☆P. 218、4段目。

錦織 彦七 '32年9月党中央地方オルグ。広島、岡山を中心に党中央地方委員会の再建を準備、呉海軍について木村莊重、小倉水兵を連絡指導。

☆P. 19、中段、〔注〕

野村 梅子 坂口喜一郎の妻。呉の日の丸デパートの店員として坂口の生活を支える。東京で坂口とともに検挙

☆P. 222、1段目。

野中 富雄 広島市平塚町。日本製鋼所広島工場工員。'31年8月全協金属分会結成、責任者。同年11月入党。'32年「10・30事件」で検挙。

☆P. 220、4段目。

野原 一男 呉工廠魚雷実験部製図工。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。

☆P. 218、4段目。

花野 岩男 安芸郡江田島村字切串花野フジエの弟。修道中学中退。'31年6月全協化学支部に加入、帝人広島工場内に全協化学帝人分会を結成。9月共青同盟に加入。'32年「3・5事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。戦後入党。'68年1月29日死亡、56歳。

☆P. 218、1段目。

☆第6回合祀名簿。

花野フジエ（前岡） 安芸郡江田島村字切串。広島紡績検査工。同紡績のストライキで全労福山労働組合の幹部、全協の岡常次郎などを知る。福山労組の久下本有の要請で山本ヤエとともに福山紡績に入るべくいったが、山本ヤエのみ入り、「しっかりしすぎている」ということで花野は入社できず、街頭で全協のオルグ活動。全協福山地区の組織をつくり、広島の組織と連絡。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。広島市に帰り広島バスなどを目標に組織活動。カフェーリラスの女給となり佐藤静枝を説得して呉の水兵との連絡役として呉のカフェー摩天楼におくりだす。'32年「10・30事件」で検挙、3年の刑、執行猶予。'45年8月広島市で原爆死。

☆P. 95（野田手記）

☆第1回合祀名簿

早川 義則 広島市大手町。金属彫刻業。'24年10月広島合同労組に加入。'25年6月広島鉄工組合が分離独立してその委員長。同年8月岡山市で開かれた評議会の中國地方評議会に広島鉄工を代表して参加。'27年労農党広島支部結成執行委員となる。同年9月県会議員選挙に労農党より立候補、落選。'68年9月4日死亡、70歳。

☆P. 33、下段

☆第7回合祀名簿

林 寿恵子 京都市生れ。'28年同志社女専卒業、日仏学院勤務から名古屋市でバス車掌。'31年から呉市で寺尾一幹とともに活動。呉地区の党関係ピラ・ニュースはほとんどその手になる。『唸るクレーン』『聳ゆる

マスト』など。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。'33年3月東京で死亡、24歳。

☆P. 46、下段（寺尾一幹手記）

橋本 俊三 広島市向洋本町。広島郵便局電信課。大藤軍一らと全協広郵分会結成、'32年7月入党。「10・30事件」で検挙、2年の刑。'43年10月召集。'44年7月マリアナ諸島で戦死、32歳。

☆P. 220、4段目。

☆第2回合祀名簿。

平原 甚松 豊田郡中野村。'26年6月志願兵として呉海兵团に入団、その後一等水兵。'31年8月呉海軍軍法會議の取調べをうけ予備役編入。その後予備役海軍二等機関兵曹阪口喜一郎とともに海軍を目標に活動。'32年5月下旬呉市の路上で逮捕されたがまもなく釈放、上京して横須賀軍港オルグとして活動。'32年「10・30事件」に熱海で検挙、3年6ヶ月の刑。'36年2月假釈放、同年6月上阪して党中央再建準備委員会系分子と連絡、呉市中心に活動中12月検挙、不起訴。戦後島根県木部村（後津和野町）役場勤務。'82年1月13日津和野共存病院で死亡、76歳。

☆P. 10、上段

☆P. 77。P. 81。P. 83。

☆第21回合祀名簿

古田 稔 広島一中卒、早大に入学。'31年赤化分子として退学処分で広島に帰る。中国地方オルグ三好惣次からの紹介で木村莊重と連絡、『聳ゆるマスト』5号の発行に協力。'33年1月歩兵11連隊入営直前に検挙、2年の刑。出獄して朝鮮竜山79連隊に入営。戦場で負傷して広島陸軍病院に後送。'45年8月原爆投下時、自宅防空壕の中で修理作業中のため生き残る。

☆P. 13、下段。

☆P. 221、2段目。

古末 憲一 広島県呉市。呉一中から第一高等学校入学。社会思想研究会に加入。東大に入学、新人会に加入。『無産青年新聞』の組織部員として京浜地区で活動中検挙、不起訴処分で呉に帰り病氣療養。'31年の呉工廠整理反対闘争を組織。検挙をのがれて広島市に入り「5・4事件」でつぶれた組織の再建活動。同年7月岡常次郎・寺尾一幹と党中央地方委員会準備会を結成、広島地区を担当。この時期広島県の党・全協の組織がほぼ確立。'32年3月4日千田町で検挙、5年の刑。'38年5月満期出獄後上京。戦後'53年～'55年国民救援会本部事務局長。'67年、'71年埼玉県知須市議に当選。'75年6月代々木病院で死亡、67歳。

☆P. 31。（手記）

堀江 明治 広島市南竹屋町。元広島郵便局集配手。'32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。その後も活動を続け'33年「10・30事件」で検挙。

☆P. 220、4段目。

前田 文二（村上） 広島市荒神町。広島工業学校建築科卒。'31年2月全協広島地協結成にあたり食料労働組合を担当、広島専売局女工員上野良子ほか9名で専売分局を確立。'31年「5・4事件」の一斉検挙で逮捕、起訴猶予。党広島地区委員会の結成に参加。'32年「3・5事件」で検挙、4月21日海田市署から脱走。5月8日再逮捕。'33年9月公判、3年の刑。

☆P. 216、3段目。

☆P. 217、5段目。

☆P. 219、2段目。

榎井 盛之 '22年（大正11年）7月吉川富長太郎方の「共産党宣言」読書会に参加。'23年福島町で水平社青年同盟広島支部組織の基礎をつくる。'33年広島消費組合で常任の迫撃と意見があわず、広島購買組合結成を計画している横野卯一と行動を共にするが、赤色救援会のカンパには応じていた。戦後党的シンパとして広島県委員会事務所の広島市への移転に尽力した。'51年4月死亡、48歳。

☆第一回合祀名簿。

真鍋 喜一 '29年9月まで吳工廠共済組合購買所事務員。『無産者新聞』の購読を工廠労働者にすすめ読者会をつくりて検挙され、共済組合を解雇。その後東京の同志と工廠労働者の連絡役となり、上京後検挙される。'30年5月公判、2年の刑。2審で1年の刑。上告棄却。

☆P. 207、1段～2段目。

松本 京一 広島市鷹匠町。建具職。'29年10月「三滝山ピクニック事件」で検挙、1年の刑、執行猶予。'30年12月広電スト応援で検挙、1審で6ヶ月の刑。控訴保釈中広島市をでて吳市で活動。'31年11月入党。'32年「3・5事件」で検挙、3年6ヶ月の刑。'45年8月原爆死、39歳。

☆P. 217、1段～2段目～3段目。

☆P. 218、2段目。

☆第2回合祀名簿。

松本 武司 安芸郡海田市町。下関商中退。元広島操車場勤務。'31年7月党広島地方委員会準備会に加入、國鉄オルグとして活動。'32年「3・5事件」で検挙。'38年10月死亡

☆P. 68、上段、5段目。

☆P. 217、5段目。

☆第1回合祀名簿。

丸川 翌一 広島市河原町。印刷工。共青中國新聞細胞キャップ。'32年「3・5事件」で検挙。執行猶予中に救援会小寺英雄に金をカンパしたことを特高にしられ、実刑を科せられる。

☆P. 218、1段目。

☆P. 127、下段。（小寺手記）

三好 惣次 東大卒。'32年3月、中國地方オルグとして「3・5事件」一斉検挙中の広島県に来る。同年4月吳地区オルグと連絡。同年8月連絡のため上京。警視庁に検挙。

☆P. 218、3段目

☆P. 48、上段。（寺尾手記）

☆P. 49、下段（同上）

三戸 信人 ☆P. 225、1段目。☆P. 224、5段目。

宮内 謙吉 ☆P. 221、5段目。☆P. 222、4段目。

右田 美子 木村水兵の義妹。'32年吳海軍病院第7病棟に派遣看護婦として勤め、稻垣一等看護兵曹を兄の木村一等水兵に紹介。のち兄と共に広島にうつり広島バスの車掌となり兄の生活を支え、花野フジエとともに広島バスの組織化に活動。「10・30事件」で兄の検挙後、救援活動中病にたおれ'34年1月死亡、22歳。

☆P. 86、P. 87（稻垣ききとり）

☆第1回合祀名簿。

南 小一 高田郡八千代町。'33年8月ごろより赤色救援会高田郡地区委員会結成。同年11月入党。'34年8月3日検挙、2年の刑、執行猶予。'45年8月被爆。'47年～'48年広島市職労執行委員。'48年同副委員長。'66年7月原爆病院で死亡、61歳。

☆P. 124～125（小寺手記）

☆第5回合祀名簿。

村上 金彦 広島市小町。'31年3月広島県立師範学校卒、安佐郡飯室小学校勤務中、全協一般使用人組合教員分会を結成して免職となる。'31年9月全協一般組合広島支部責任者。'32年3月5日検挙、3年の刑。

☆P. 218、1段目。

☆P. 219、3段目。

村上 四郎 広島市河原町。印刷工。'30年入営、病気のため兵役免除。活版親友会幹事。'30年7月の広島合同運送スト応援で検挙、4ヶ月の刑。'31年1月全協市川印刷所分会確立。'31年「5・4事件」で検挙、起訴猶予。'32年2月市川印刷所でスト。「3・5事件」で検挙、2年の刑。'38年中國に行く。'40年4月北京大学病院で死亡、32歳。

☆P. 218、1段目。

☆P. 208、3段目。

☆第1回合祀名簿。

守田 道輔 山口県光市樋が迫。'32年2月の徳山地区一斉検挙をのがれて上京。「10・30事件」後の再建をもくろんで呉に入る。'33年1月呉市の路上で山口県警によって逮捕。

☆P. 223、4段～5段目。

安田 貞務 尾道市久保町。小学校卒業後上京、書店員。微兵検査で尾道に帰り友人と読書会をつくる。非合法出版物の研究会は郵便局員2名、左官職1名の友人と。'32年2月迫川敬一とともに検挙、起訴猶予。その後「満州」にゆき、現地召集となる。'46年4月ソ連イルクーツクの病院で戦病死

☆P. 102、P. 104

☆第2回合祀名簿。

安田 祐俊 すけとし 広島市鍛冶屋町。広島県立工業学校機械科卒。日本製鋼所広島工場旋盤工。'31年8月全協金属分会に加入、11月入党。'32年「10・30事件」で検挙。

'42年2月召集。広島市國泰寺町で被爆、8月8日死亡、36歳。

☆P. 220、4段目。

山下 達吉 本籍神戸市湊西区(現兵庫区)鹿屋町。'24年(大正14年)神戸職工学校(三菱)鑄造科2年より志願兵として呉海兵团に入団。坂口喜一郎・平原甚松ら外部にいる海軍出身者と連絡して活動、「32年9月共産主義者として現役免除となり予備役編入。11月19日大阪で検挙。'39年12月死亡、30歳。

☆P. 221、2段目、5段目。

☆第1回合祀名簿。

山根 清 広島県松永市柳津町。福山誠之館中学より神戸高商入学。胡川清としりあう。病気のため高商を中退、尾道区検事局雇となる。'30年末ごろ読書会をつくり、赤色救援会沼隈地区委員会を結成。「31年1月赤救広島地区委の胡川清と連絡。「31年6月検挙、不起訴。赤救沼隈地区委の松永班・尾道班・府中班を結成。「33年12月検挙、病気のため保釈、執行猶予。'44年6月15日死亡、35歳。

☆P. 220、5段目。

☆P. 221、1段目。

☆第1回合祀名簿。

山本タキエ (数本) 豊田郡吉名村。「27年3月三原女子師範2部卒業。賀茂郡の小学校勤務中、新興教育同盟の運動に参加。「33年1月検挙、起訴猶予。同年8月以後広島市でコップ(プロレタリア文化同盟)広島支部再建運動。「34年3月憲兵隊に検挙、不起訴。同年5月「4・26事件」で検挙、2年の刑、執行猶予。

☆P. 228、3段目。

☆P. 159 (手記)

吉岡 道人 広陵中学卒業、同志社大学中退。広島にかえり'31年7月全協一般使用人化學労組責任者。共青に加入。「32年3月10日「3・5事件」で検挙、3年の刑。出獄後上京。「42年2月22日東京で死亡、32歳。

☆P. 217、5段目。

吉川長太郎 広島市河原町。理髪業。「33年11月広島市の青年デーで検挙。全協系のシンパとして協力。「32年「3・5事件」で検挙、起訴猶予。その後も赤色救援会の資金カンパに協力。「45年9月原爆症で死亡、44歳。

☆第1回合祀名簿。

吉本 康二 広島市國泰寺町。広島高校自治学生会を「10・30事件」後に再建。はじめ三戸信人、のちに党オルグ関谷源一と連絡をとり、入党。「岩田義道突撃隊」を結成。「34年「4・26事件」の一斉検挙まえに党オルグの指示で広島をはなれて京都にうつる。大阪市の関西地方委員会の指導下に広島県の党組織再建のた

めに活動。「34年9月検挙、3年の刑。獄中腸結核となり執行停止で出獄、「37年3月死亡、25歳。

☆P. 138 (中村定男手記)

☆P. 280、3段目。

☆P. 281、1段目。

☆第1回合祀名簿。

横野 卯一 広島市広瀬町。「29年10月「三滝山ピクニック事件」で末元玄聰、玖島三一とともに検挙、2年の刑。出獄後広島消費組合理事。末元玄聰とともに解党派の立場をとる。「34年社大党系の広島購買組合につく。'45年8月原爆死、36歳。

☆P. 207、3段目。

☆第1回合祀名簿。

渡辺信樹 佐伯郡敵島町。小寺英雄の弟。機械工としてシンドオートバイ工場で働くうち、労農党広島支部の運動に参加。「28年(昭3年)はじめ同支部の書記となる。

☆P. 33 (渡辺談)

編 集 後 記

本書は原稿全文のコピーのひつが神戸交通労組の高島任副委員長の手にとまりこれを関西共同印刷所で印刷することになりました。本年七月大半のゲラ刷りと校正を終りました。

八月より出版費用のカンパと購読予約を私の知る限りの人々に要請、みなさん の応援のもとに十二月中旬に本書を完成する事となりました。広島県の戦前の同志たちの手記が漸く世に出ることになります。

同志たちの一斉検挙の写真は呉市史編さん室所蔵の戦前『中國新聞』号外より私が直接写させていただきました。ここには広島県最初の「五・四事件」と呉海軍水兵を含む「一〇・三〇事件」だけはじめました。

終りに関係者各位に厚くお礼を申述べます。

一九八五年十一月

岩佐寿一

あめとかぜと——広島県戦前左翼運動の手記

1985年12月16日発行 定価 3,000円

岩佐 寿一 編・著

〒653 神戸市長田区蓮宮通2-9 (稻垣アパート)

電話 (078)575-6712(神戸交通労組内)

発行 あめとかぜと出版委員会

広島県呉市清水2丁目 岡本一彦方

印刷所 株式会社関西共同印刷所



